泡鳴全集

第十二巻

目次

自傳と追憶

小品及隨筆

記行と印象

自傳と追憶

僕の十代の眼に映じた諸人物

周圍の活人物

書物を讀むことをおぼえると、人は先づ歷史で讀む人物を自分の標準にするものだ。然し僕は今、一そんな古い歷史上の人物ではなく、僕が十代の頃に注意した同時代の人物のことを述べて見よう。

僕の生れた國は自由黨の盛んなところであつたから、板垣退助氏の名は僕の子供時代からよくおぼえてゐた。從つて、當時、抽象的に熱狂してゐた自由と民權とを具體的にする第一步たる國會の開設をばかり、分らずながら、呼んでゐたのである。

僕は、誰れしも初めは望む軍人になりたかつたのだが、それが體格上なれないと分つてからは、政治家にならうとした。ところで、僕は十三四歲の頃から耶蘇敎を聽かされてゐて、大阪へ出た時洗禮を受けた。その關係上、新島襄と云ふ人が僕のあたまに這入つた。德富蘇峰氏の國民之友が出た頃で、その『新島先生と福澤諭吉氏』と云ふ論文が、僕にも新島氏の實際精神的にえらいことを敎へて

呉れた。然し一つの疑問があつた。

それは外でもない。僕が耶蘇教の洗禮を受けた時は、僕の學校と教會とで非常な評判になつた。あんな徒らな、無頓着な、高慢ちきな票書生が急に改心して、涙ながらに告白したばかりでなく、以後は一身を投じて傳導師になると決心したのは、一種の奇跡だと云ふのだ。僕の學校と教會とは同志社に關係があつたから、僕の受洗の日、新島氏も來合はして、熱心な祈禱をした。して、氏は聲を擧げて泣いた。熱心は僕も劣らないと思つたが、大の男が聲を擧げて泣くのは餘り女々しいではないかと、氏の態度に不審を抱いたのだ。僕は既に經驗的に女と云ふものを厭な物だとしてゐたのである。

やがて、僕の家がもとの東京へ再び移つて來て、芝に住ゐをしたので、慶應義塾は近いし、そこの塾生に友人もあつたので、福澤諭吉なる人が僕の注意を惹いた。然し敬服したのは、その平民的な態度と行動とに對してであつて、思想の餘り物質的なのには却つて惡感と侮辱とを持つてゐた。その『世界國づくし』などにも、初めて新體詩的口調をおぼえた。氏は初めて入塾した學生に面會すると、必らず家の貧富を糺した。して、貧家の子であると、學問をしても、どうせ社會黨などになり出すに過ぎないから、歸國して、鍬なり、天秤棒なりを持つ方がいいと斷言した。それほどまでに人間の精神を安く見ないでもいいのにと、僕は思つた。

後藤伯と大隈伯

僕は東京に來ても、直ぐ耶蘇教の學校に這入つた。官憲と官立學校とを益が好かないからである。然し教會や僕の周圍が宗教に思つたほど熱心でないので、僕は耶蘇教が人心に案外勢力がないことを解する樣になつて、傳道師志願などもやる氣がなくなり、もとの政治家になるつもりになつた。僕は初めから外國人と外國崇拜とが大嫌ひであつた。從つて、歐化主義の井上伯などが、外國人に日本を文明國と見せるつもりで、鹿鳴館に於て、盛んに舞踏會などをやつてゐたのを殘念で、殘念で堪らなかつた。僕が政治をやれば、あんな馬鹿らしいことはしないのにと思つた。

專修學校に經濟を修めてゐる時、校長の田尻稻次郎氏に接することになつた。この人は、鳩山氏のことは餘り知らなかつたにも由るだらう、少しも口にしなかつたが、福澤氏のことはよく冷罵した。一時間に半分は駄洒落で持ち切る講義の間にも、度々後者に對する冷罵をやつた。然しこの人は呑氣過ぎた人だから、卒業生に對する親切な世話のほかには、青年に大して感化を與へることはなかつた。

木戸、西郷、大久保は七年もしくは八九年前になくなつて、板垣伯の自由黨は解散し、大井、新井、小林の諸氏は朝鮮刺戟事件の爲めに大阪に於て縛につき、井上、伊藤二伯が朝に立つて改正條約を工夫し、片岡、星、尾崎、中江、竹内綱、林有造等の諸氏が保安條例のクーデターに會ひ、後藤氏が大同團結を起し、日本憲法の發布となり、森有禮氏が刺され、大隈伯が爆裂彈に一脚を失すると云ふ樣なことから、またつづいて、第一議會の召集になつた時代である。

つた。政府がはに立つた人で僕の注意を惹いたのは、豪放巨大な鑛山師政治家後藤象次郎氏と改正條約斷行に手傷を負つた大隈伯とである。いづれも、僕——のみならず、當時の青年すべて——が興味を以つてゐた爆裂彈を受けた人であるからでもあらう。して、この二氏とも、それを受けた現場に、僕は出くわした實驗があるのだ。

政府嫌ひであつた僕は、當時、伊藤伯や井上伯などの名聲が盛んなのを大してえらいとも思はなかつた。

後藤伯は下高輪の通りでやられかけたのだが、僕が下宿——たつた二三日下宿したところ——の窓から首を出すと、伯の馬車が爲渡毀れてゐた。然し伯自身は無事であつた。投彈者は直ぐつかまつたが、それが僕と同じ下宿にゐた男で、その男の押し入れにはまだ二三箇の爆裂彈——ブリキ罐に彈藥と石やかな屑とをつめた物——が殘つてゐたので、一時、僕までが嫌疑を受けて困つた。大隈伯が霞ヶ關の外務省前でやられた時にも、僕は神田へ通學する途中であつたから、忘れられない印象を殘した。投彈者來島恒喜が捕縛せられ、伯が外務省へつれ込まれた後には、その現場は非常の人だかりになつた。僕は學校の歸りにも——夜十時過ぎであつた——そこを通り、そこを徘徊し、まだ血の跡が殘つてゐはしないかと探して見た。

馬場辰猪と中江兆民

海外在留者として死んだ馬場辰猪、在野黨の奇行家中江兆民、この二氏は僕の最も尊敬したもの

だ。滿腔の經綸と愛國心とを抱いて、海外に漂泊してゐなければならなくなつた悲憤慷慨家馬場辰猪氏は、青年の好奇心と熱血とを刺戟しないではゐなかつたのだ。而もその精神は熱烈、態度は謹嚴、眉目は秀麗。ただ不平の餘り、花柳の巷に狂奔したことはあるが、その愛する女から、さうおぼれてゐては、からだの爲めにならないとまで心配されたほどに、上品な不平家であつた。然し青年の崇拜物として遺憾な點があつたのは、政黨の關係上、板垣伯を出し拔かうとした樣なことがあつたのと、米國で――生活上の方便でもあつたらうが――演説をするのに、わが國の鎧を着してやつたと云ふ芝居氣を見せたことだ。渠は二十一年の十一月、フイラデルフヤで客死したのだ。

中江兆民氏は馬場氏とは反對な性格だ。馬場氏が英學者、英國風で、謹嚴、方正、有作法なのに反して、中江氏は佛蘭西學者、佛國風で、態度や行動が粗放、無頓着、不作法であつた。氏の『三醉人經綸問答』などを喜んで讀んだ物だ。して、自由民權の實現を希望して、平民の爲めにいつも大氣燄を吐いて呉れるのを嬉しく思つた。殊に、新平民と緣を結んで――これは議會に入る手段でもあつたらうが――恥ぢなかつた如きは、僕の大いに贊成してゐたところだ。僕は子供の時から、自分は士族だが、士族平民の區別などを屁にもつかない物だと思つてゐた。その極、世人に遠ざけられる新平民と癩病血統とに多大の同情を持つた。

癩病に同情したのは、その血統あるものに僕の親しい娘の子があつたことと、大阪の學校にコルベ

とか云ふ外國婦人の教師があつて、或時、僕に、自分は癩病なので社會にその血統を一家族でもふやさない爲め、獨身で暮すと語つて、泣いたことがあるのをおぼえてゐるからである。このコルベ孃が、どうしたものか、僕には、中江氏と共に聯想されたのである。中江氏はまた、あの粗放なのにも拘らず、感情家であつたから——無論、感情家過ぎて、それを隱す爲めに奇行を見せてゐたのだらう——中島湘烟女史の前で、どうも、寂しくつて困ると、泣いたことがあるさうだ。

馬場氏が僕の注意を惹いたのは、表面では、演說家としてである。その『演說術』などをよく讀んだ。中江氏のは、政論家兼文章家としてだ。僕は演說にも熱心であつて、靑山練兵場へ、寒中、夜の二時頃に出かけて行つて、獨りで寒稽古をやつた頃であつたから、馬場氏の客死を聽いて非常に惜しく思つた。然し中江氏がゐるから、まだしも心丈夫な氣がした。氏が馬場氏の死を弔するに、「余が君の一生の中、一二度は相談することあるべしと思ひたのみならず、君も亦自ら余に相談することあるべしと思ふならん』と思つたとあるは、もつともなことだと考へた、然し中江氏の無神、無靈魂說には、僕がまだ有神論的感化を脫し切れなかつた時だから、全く贊成は出來なかつた。

ハイカラ者流

その他に、大井憲太郎氏は大阪國事犯の發頭人、急進的自由主義者として、片岡健吉氏は耶蘇教的

政治家として、中島信行氏は湘烟女史の所天、最初の衆議院議長として、土佐自由黨派の植木枝盛氏並に最初の參院委員長島田三郎氏は、寧ろ耶蘇教並に婦人矯風會的演說者として、僕は注意した。すべて耶蘇教に多少の關係があつたもので、大井氏のが舊教で、片岡氏以下のは皆新教であつた。

また、國民之友に出る無邊俠禪、渡邊國武氏の禪的政論、同雜誌その他に出る勝海舟氏の陳腐的談話並に消息に出り、僕はこの兩氏に餘ほど注意を拂つてゐた。また、保守主義の代表者と云つてもいい谷干城、鳥尾小彌太、三浦梧樓の三氏が政府の激烈な反對者になつたこともある時代で、この三氏の意見はいつも古臭いと思ひながらも、その人々自身の主義主張に熱中してゐた――鳥尾氏は殊にさうであつた――のに僕は敬服してゐた。鳥尾氏の儒、佛、神、三教一致說の如きは、また僕が嫌いとは卑しみながらも、喜んで讀まされたものだ。僕が今日、國家論に及ぶと、非常に保守的、否、日本主義的なところがあるのは、一つにはこの時の感化があるのかも知れない。

その癖、僕は今の所謂ハイカラ趣味を喜んだ。新思想に觸れるものがすべてハイカラ的になるのは、一時的現象としては當然のことであらう。井上伯が急に芝居を奬勵し、舞踏會を盛んにするのも、伊藤伯が頻りにビスマルクを氣取り出したのも、中江氏がルーソウを、尾崎氏がピコンスフイルドを、島田氏がグラツドストーンを、田口卯吉氏が自由貿易論に於てマンチエスター派を以て任ずるのも、皆。ハイカラ流であつた。かういふ者流のうちで、僕が小氣味のいいほど純ハイカラと見て

ゐたのは、馬場辰猪氏の英國カラ、光妙寺三郎氏の佛蘭西カラである。

最初の國會議員選擧に、僕が當選を心配してゐて、先づよかつたと思つたのは、一人は農商務大臣兼和歌山縣某區選出議員の陸奥宗光氏だが、今一人は光妙寺（末松に改姓した）三郎氏である。この人は、佛蘭西仕込みの平民的侯爵西園寺公望氏と共に、純粹ハイカラの元祖で。光妙寺氏は佛蘭西から歸朝して「爭也君子決鬪條例」と云ふ書を著はした。その議員振りを中江氏の批評に據つて證明すると、「蒼白の面、清秀の眼、婉姿の體」、巴里仕立の洋服を着けて、絹の半巾を提げて、而して議會の檀を擴張せし』立役者であつた。して、政治家連の酒宴に交はり、他に卑俗な情歌などばかりを歌ふ間にあつて、流暢な聲を以つて流暢な今樣――わが國固有の優美な節だ――を謠つて、多くの藝者を驚かすなどは、實に、素養ある純ハイカラなところだ。決して鼻眼鏡的な、齒の浮く樣な出來そこなひとは違つてゐた。

文筆の人々

政治がかつた文章家としては、中江氏のほかに、福地櫻痴、德富蘇峰、朝比奈知泉、陸羯南の諸氏を讀んだ。小野梓と云ふ人に死んでゐたが、その人の政治的論著は僕の注意を應しなかつた。川崎紫山氏の事大的文章もあつた。また、德富氏の競爭者として（らしく）打つて出た――して、成功し

なかつた――中西牛郎と云ふ人もあつた。學者としては、戸山正一氏の粗大だが、鳥渡新らしい耶蘇教論や文明論と、非官學主義者高橋五郎氏の飽くまで弘學的な態度とに敬服してゐた。

また翻譯もしくは翻譯まがひの政治小說隆盛の餘波があつたので、「鶯宿梅」その他に於ける末廣鐵腸、「佳人之奇遇」に於ける柴東海散士、「經國美談」に於ける矢野龍溪の諸氏は、僕等青年の注意をのがれなかつた。かう云ふ諸氏の小說の文體は、堅苦しい漢文句調でなければ、曲亭馬琴風の七五くづしなどをいいものとしてゐた。「書生氣質」に於ける坪內春の屋主人も、まだ馬琴風のところがあつたかと思ふ。然し時代は、既に同氏の「小說神髓」によつて呼び覺まされてゐたので、戲作者的だが、政治鼓吹や勸善懲惡などの目的から離れて、純小說なるものが新らしい文體（そのうちに、言文一致體も出來た）を以つて歡迎される樣になつてゐた。

矢野氏が「經國美談」で當りを取り、洋行することまでが出來たと聽いてゐたので、僕も一つ歷史小說を書いて、その儲けを以つておやぢの壓迫から獨立して、好きな生活をして見ようといふ野心を起した。矢野氏のをお手本にして、テイロアの古代史などを參考にして、ペルシャ王サイラスの傳を小說にした。前篇二百五十枚ばかり出來たので、これが歡迎せれれば直ぐ後篇を書くといふ（これは、ビコンスフイールドがホメーロスやダンテやミルトンの向ふを張る氣で公けにしたといふ史詩第一篇の序文を眞似たのである）序文をつけて、某書店へ賣りに行つた。ところが、この頃はかう云ふ

文體は流行しなくなつたから、またその時節が來たらといふ返事であつた。僕の小說全體が馬琴よりも一層嚴密な七五くづしで行つてゐたのである。然し、僕に取つては、これが新體詩を作り出す最初の、然し無意識の練習であつたのである。

長谷川二葉亭氏の「浮雲」が歡迎されてゐた。山田美妙齋主人の「胡蝶」に於て初めた言文一致體が問題になつてゐた。その他、當時の小說家で、舊派では饗庭篁村、幸堂得知等があり、新派では尾崎紅葉、幸田露伴等があり。批評家で時々創作をしたのは、內田不知庵、森鷗外、石橋忍月、大西操山等があり。僕には、また、井上巽軒、外山ゝ山、矢田部尙今諸氏は『新體詩歌』に於て知られた。また井上氏の漢詩『孝女白菊』を和譯したので、落合直文といふ人があるのを知つた。譯詩集「面影」並に「しがらみ草紙」に於て、森氏を知ることが一層深くなつた。『歸省』に於ける宮崎湖處子が、青年文學を發刊することになつた時などは、僕は同じくまだ書生ツぽであつた國木田獨步、加藤明堂、田村三治の諸氏と共に、青年文學に對抗する文壇（後ち、日本文壇）と云ふ雜誌を出した。詩人として最も注意されたのは、國民之友に於ける矢崎嵯峨の屋、中西梅花、日本評論並に女學雜誌に於ける戶川殘花、磯貝雲峰の諸氏であつた。

當時、國民之友と日本人との兩雜誌は、思想界に於ける相反した二潮流の代表者であつた。前者は世界主義に近い平民主義で、後者は絶對的にと云はれるほど國粹論的であつた。前者は同志社系統の

人々（そのうちに浮田和民、横井時雄の諸氏があつた）の議論を掲載すると同時に、渡邊國武氏の斷片的氣焔、中江氏の高弟酒井雄三郎氏（この人も面白かつた）の政治的研究などを紹介した。後者はまた陸、三宅雪嶺、志賀矧川諸氏の舞臺であつた。雜文家であつて、僕に文學を吹き込んで吳れたのは、蘇峰氏と矧川氏と、それに高田半峯氏とである。そのうち、矧川氏は身づから理想とするバイロン鼓吹に於て最も文學的であつた。僕等は演說の熱心家であつたから、（何とか云つた所謂演說つかひや大岡育造氏のをもだが）島田三郎、植木枝盛諸氏の政治的・社會矯風的演說をよく聞きに行つたと同時に、また、宮川經輝、海老名彈正、横井時雄諸氏の說教に集つたと同時に、志賀氏の豪傑的、詩人的人物を追ふて、その演說をもよく聞きに行つたものだ。

東北學院と押川氏

そのうち、僕は種々の事情から非常に悲觀し出した。つまり、自分一個の獨立的考へが浮んで來たのだ。して、世の中がすべて厭になつたので、政治家的野心も何だか徒らに外表的な希望である樣に思はれ、さツぱり張り合ひのないものになつた。自由や民權、平民主義などいふのが、どうも、內容のない、描象觀念にさわいでゐる樣に思はれて來た。さりとて、もとの耶蘇敎付偶素願に歸つて、一身を救世事業にまかす氣を起すほどに、周圍の空氣が振つてもゐなかつた。それまで信じてゐた神な

るものも空想に過ぎないと思はれ、傳道に從事するものらの不熱心な狀態も、自分と共に力を盡す價値がないと見えた。これは獨りでエマソンを讀み出してからの變化だ。して、いつそ、自分の思案を初めから好きであつた文學、寧ろ詩に向けようと決心した。文學界が出たのはそれから二三年後、帝國文學が出たのはそれから四五年後のことだ。

　僕は國の小學並に私塾を出て以來、先輩として接近したものは全くないのだ。以上に名を擧げた人人も、僕自づからが發展するにつれて、僕自づから發見して行つたのであつて、向ふから導かれた樣な氣がしなかつた。ところが、横井時雄氏の話で、米國から歸朝し立ての仙臺の押川方義氏（春浪氏の父）につくことになつてから、同氏を僕の先輩とも、第二の父とも思ふ樣になつた。當時、押川氏はさう廣く名の知れてゐる人ではなかつた。越後に於て耶蘇教退治事件のあつた時、その目的となつた同氏が竹槍を以つて取り圍まれた間を泰然自若として通つたことがあるのと、新島氏に發見され、同志社に招聘の交渉があつたのを、あんな物の下につくものかと憤慨したのと、ニユーヨークの路傍で外國人（乞食同樣であつたらう）に靴をみがかしたのを帝國主義的に自慢してゐたのと、米國の耶蘇教は腐敗してゐると報告したのと、熱誠な能辯家であるのと、ぐらゐが普通の傳導者と違つてゐたばかりだ。して、精神教育家として同志社の新島氏に對抗して、僅かに小さい東北學院の院長をしてゐた人だ。

大して學問もあるではない。ソシアルサイエンスを規則書に『社交學』と譯さしてあつたので、僕が『社會學』と直させたほど無智な人だ。然し、東京へ出ると、絶對に反對者とも見える日本人會の三宅氏などと會つて、よく話が合ふところがあるらしいのを見て、第一に、僕の帝國主義的な保守的方面が隨分滿足したのだ。押川氏の生命は熱誠な國家救濟的野心であつた。そのすることや考へ方には、間違つてゐるところがあつた。然し中江兆民氏の樣な不眞面目な分子は這入つてゐなかつた。『われ』の覺醒と『大事業』、このモットウは眞面目に標榜されてゐたのだが、仕事をすると、成功しない僕はいろんな語學と文學とを研究しながら、氏の範圍内に於て氏に反對もし、無理も云つたが、不成功の事業家——かう云ふ人物として、氏の精神は熱誠に燃えてゐたのである。(氏はその後、海外教育會の會長としても、北清事件時代の大酒保船發送者としても、現今のコンミツションマーチヤントとしても、いつも不成功の事業家である。氏は不成功のうちに、もう、時代後れとなつてしまつたが、僕の學生時代に於ける氏の精神的熱誠は歷史以外の歷史的人物たるに決して不足はなかつた。)

かういふ風にして、僕は僕の十代を送つた。僕に感化を與へたものは、僕が眼界が廣かつただけ、その數も多いが、今日に至るまで、僕が『先生』と呼ぶのは、跡にも先きにも、この不成功の精神家、押川氏ばかりである。

初旅の思ひ出

――十四の時――だまされて出した俥賃――

初めて國を出て神戸へ行つた時――獨りで行つたのだが――淡路から明石へ渡り、人力車を傭つたのである。國では城下から田舍の方へ何度も俥で行つた事があるが、それは何時も出入りの俥夫であつて、子供乍ら少しも氣が置けなかつた。ところが初めて國を出て素性も知らぬ者の俥に乘つたのだから、恥しいやうな、又恐ろしいやうな氣が初めからして居た。何でも十四の時であつた。

今はないが、舞子の濱あたりに、瀧の茶屋といふのがあつた。それは海岸の道を隔てて、その前に山から瀧を落してあつて、その瀧の水が家の下にずつと溜まつてゐて、茶屋は水の上に建つてゐるやうな具合になつてゐた。一寸面白いやうなところであつた。其處へ俥屋は僕を引込んだ。俥夫には何時も親しみがあるのだらうが、僕には何の爲めに引込まれたのか分らなかつた。俥夫はそこに出て來た女中に抱きついたりして巫山戯てゐるのだが、僕はその女に茶を持つて來られて、飮んで可いのか、飮んではいけないのか分らなかつた。といふのは、茶を飮めば金を取られるのだらう、さうして、金を出すとすれば、幾ら出して可いのかそれが心配になつた。つまり茶代といふものを僕が出す事を知らなかつたのだ。只默つて俥夫が行かうと云ひ出すのを待つてたが。茶には到頭手をつけなか

つた。

　それを馬鹿だと見たのだらう、俥夫はそこから少し進んだところで僕を降ろした。そして向ふから來たから俥に乘せた。丁度此處が半分道だから代りますと云つたつけ。僕は何も知らないで別なのに乘つてると、湊川土手まで來て、降りて吳れいと云はれた。此處は金玉寺の通りかと訊くと、いや、いや、あすこまではまだ〳〵ありますとの答だ。ぢやそこまで行く約束だから行けと命じた。ところがそんな約束は知りませんと答へた。そして、俥賃を吳れいといふ。僕は前の俥夫に何知らず俥賃は渡してしまつたのであつた。つまりだまされて又俥代を取られた。

　僕は方角も分らないところへ置き去りにされて、一寸間誤ついたが、此處が神戸と兵庫とを區劃する湊川だらうとは分つた。其處から又別な俥夫を雇つて、指して來たところへ行つた。これが僕の初めての他國に於ける旅で、同時に初めての失敗である。

僕が書生時代の事共

○

　僕等の書生時代には、いろんな事が流行ッた。蕎麥屋とか汁粉屋とかの喰逃げをやッたり、掏摸に物をとらせて見たり、よくそんな下らぬ事をして面白がッたものだ。喰逃げなどは、ずッと其れより

も早い漢學書生など、殊によくやツたものだ。今では耶蘇教で立派に行ひすましてゐる植村正久の如きも、蕎麥屋の喰逃げをやツて威張ツてゐた時代もあツたんだ。

僕は一度、自分からしやうと云ふ積りではなかツたが、自然に喰逃げの結果になツた事もあツた。其れは八丁堀邊の汁粉屋に入ツて居た時、近所に火事が起ツた。それで店の者等は大騷ぎをやり出して、勘定の事などはそこのけになツて了ツたからだ。

○

其れから僕は、京都に居た時、夜、緣日などへ出て行ツて、若い女を見ると誰れそれさんと呼びかけて、恰も知ツてゐるものであるかのやうに其の女の手を握り、而してアア間違ツてゐましたと云ツて、間違ひ事が、書生の間に流行した。さう云ふ事をやツて成功した奴も隨分あツた。その仲間の中には、今では立派な官吏になツて濟ましてゐるものも僕は知ツてゐる。

六七年前にも、僕等の仲間で婦人を引つかけやうと云ふ意味ばかりでもないのだが、隨分ヒヤカシ半分に電車の上だとか、歩いてゐる途中だとかで、話しかけたりなどして小當りに、當ツて見た事がある。○○君だとか○○君だとかも隨分そんな材料を供給した仲間であツた。或る人なぞは、それで立派な或る女學校の女教師と親しくなツて了ツた。

僕などは、いつも失敗してゐた方であツたが、或時、芝橋を通ツてゐた時、雪の降る日であツた

が、一人の婦人がセッセと急いで僕を通り過ぎかかッたので、ヒヤカシ半分に、晝飯を一緒に食べやうぢやないかと言ッて見た。ところが其の婦人は、之れも矢張りヒヤカシ半分に、どうしてそんな暢氣なひまはありません。今直ぐに帝國議會へ行かねばならないんです。と云ッて立停りもせずに行ッて了ッた。

其れは五六年前の事だが、此間家の遠藤（新夫人清子女史）と話してゐる話の中に分ッた事だが、其の婦人と云ふのは、遠藤であッたんだ。そんな事もあッた。

○

僕が十七八の時、小說を書いて其れを賣ッた金で、親父から獨立して親父の許さない文學を自由に研究しやうと云ふ野心を起した事がある。其の時小說が賣れたら返すと云ふ約束で或る友人から金を三四圓ばかり借りた。處が、其の小說は無論賣れなかッた。親父には學校の事もやらないで、そんなものを書いてゐると云ふので叱りつけられた。で、とう／＼其の友人にも借りた金を返す事は出來たかッた。友人からは度々催促が來た。けれども如何する事も出來ない。唯だことわりを云ふばかりであッた。

其の後、其の友人を訪ねて見たら、人の二階を借りて鐵金屋をやッてゐた。然し其の職業は一向にはやらないで、間代や辨當代が二三ヶ月分も滯ッて、それを拂ふ事が出來ないのでブル／＼顫へてゐ

た。僕も氣の毒になツたが、其の際如何ともしやうのない位置に居たので手の出しやうがなかツた。

其の時の印象は今でも忘れない、其の友人には以來一度も逢はないのだが、今でもモう一度逢ひ度ひと思ツてゐる。で、若し此れを讀んだ諸君の中、思ひ當る人があらば僕に住所を知らせて貰ひ度いものである。

反抗的の答案

教場で梵語の研究

僕が仙臺東北學院に居た頃など、試驗は私立學校ではあり、あまり重きをなさなかつた。

全體僕が同校に行つたのは、自分では教師になる心算で行つたのだが、行つて見ると入學試驗をすると云ふ。馬鹿げて居て、碌に返辭もしなかつた。無論西洋人に試驗を受けた。而して一年級に抛り込まれた。教師に行つて、一年級に抛り込まれた人間は、僕より他には有るまい。

當時は押川と云ふ、春浪君の父が、校長をして居た其人を僕は第二の父とも思つて居た。今でも思つて居る。其人の言葉通りになつて居たんだ。而して自分の勉强さへ出來ればいいと思つた。

さう云ふ狀態であるから、學校の課業等は碌に勉强せず、自分の好きな外國の詩だとか、評論だとか、色んな語學とかを獨學して居た。無論、其抛り込まれた級の學科なぞは馬鹿にして居たからであ

る。

教場にゐて西洋人が、英語で動物學を教ふる前で僕は梵語の文典を讀んだりなどして居た。そして試驗頃になると、面倒臭いから旅行に出てしまつた。そして試驗のすむまで歸つて來ない。すると、岩野は又今回も試驗に出なかつた、と云ツて、西洋人から小言が出で、幹事から僕に、試驗をなぜ受けない、と云ふ樣な小言が來る。其麼時にな僕は、其れがいけなければ退校さすがいい、と云ふ樣な事を云つて、平氣で居たものだ。無論或事情が有つたのだから、其麼氣儘を云つて通つて居たのだ。僕一個にとツては、其年々々の學科等はすぐに、大體は會得して居たからである。

答案に飜譯論

まあ其麼事が有たんだが、試驗で思出すのは、僕をずつと昔し、海軍省の或部分の編修書記に、推薦する者が有て、試驗を受けに行た時の事だが、其部長たる人——當時の海軍大佐——が出て來て、餘り横柄に言葉を使ふのが癪にさはり、試驗を受けないで、其儘歸つて來やうと思つたが、其人間の世話になつて居る人が、僕を推薦した手前もある事だからと思つて、試驗を受け出した。

第一に英文の飜譯であつた。其が學校でやる試驗の樣に、短い句を一つ位引き出して一題にして有る。其麼試驗のやり方では、自分を試驗する途でないと思つた。だから、其次の科目の議論文に飜譯論

と云ふのが出たのを幸ひ、飜譯と云ふものは、文章全體の意味を解するなら、其文中の一節一句が充分明然解るもので、僅に一句二句を引出して、其れを譯さして飜譯の力を見ると云ふ樣なやり方は、試驗官の不注意である。之を以て飜譯論の一節とする、と云ふ事を書き加へた。其れから又次に記事文の問題が出た。履歴書に仙臺に居たと云ふ事が有るので、「松島に遊ぶの記」を書けと云はれた。それで僕は松島の幽邃の景を叙したあとに、這う云ふいい景色を見た事は見たが、之を以て今日の試驗問題にならうとは、夢にだも知らなかつた、と書き加へた。さうして、知らぬ風をして僕は歸つて來た。

十日經つても廿日經つても返辭がない。採用されたかされぬのか分からない。僕はどうせ駄目だと思つて居た、ところが推薦した友人が却て心配して、其大佐の處へ訊きに行くと、大佐は僕の試驗答案をとり出して、友人に見せ、這う云ふ反抗的な答案を書く人間なら、とても官吏には向かない、と云つた相だ。

ところで、さう云ふ事をしたのは僕ばかりではなかつた。其候補者として僕より以前に試驗を受けた者も、やつぱり其麼失敗をしたのであつた。其人は、答案のしまひへ以て行て、帝國萬歳萬々歳と書き加へた。それがいけなかつたのだ。

記憶十想

一　小リプヷンヰンクル

野依と家は士族であつたが、淡路の城代稻田氏の家來で德島藩主から云へばまた家來だ。僕等の家は同じ淡路にゐても、藩主蜂須賀氏の直參であつた。稻田騷動といふのがあつて、——これは淡路の城代が獨立の逆心があると見爲され德島藩がはの家來どもが奮起して、稻田氏の屋敷に攻め寄せた騷動だが、——以來、直參派とまた家來派とはにらみ合ひの姿になつて、その間では、子供同志の交際をも親達は心よしとしなかつた。また家來の士族は、僕等から見れば、一段下つた人間の樣であつたのだ。

然し野依家の主人も擊劍の上手であつたから、その理由を以つて警察の擊劍教師兼探偵を拜命した。僕の父は、その時、大分上の巡査であつたから、野依氏はその下に附くことになつたのだ。これからといふものは、僕は野依家へも遊びに行き、そこの細君を『叔母さん、叔母さん』と呼び、そこの總領息子の勇さんを弟の樣に親しんだ。然し、僕はやがて勇さんにも遠ざかるし、叔母さんなも好かなくなる樣になつた。これは決して士族の種類の如何から來た反感ではなかつた。

野依の叔母さんといふのは、家附きの娘であるを鼻にかけて、その所天に強く當るのだ。僕等は、

符も巡査をしたり、探偵をしたりするものなら、泥棒を捕へたり、博奕打ちを取りひしいだりするので、充分強い男であると思つてゐた。ところが、野依氏はその細君である女風情の前へ出ると、鼠が猫の前へ出たと同じ様にちいさくなつてしまう。好きな酒を飲むのさへ細君のさしづに從つてゐなければならない、して細君は氏の思ふ樣には飲まさないのだ。その上、ぽん〳〵云つて所天を叱りつけるのが、近處のおほ評判になつてゐた。僕は、それが野依の叔父さんに對して、一番氣の毒だと思ふにつれて、叔母さんの心が憎くなり、叔母さんその物が憎くなり、勇さんが憎くなり、つひに野依家全體を厭になつたのだ。

これに、今一つ野依家を厭になつた原因がある。野依の叔父さんが、警察の春期秋期の擊劍大會がある時は、必らず僕の父と共に東西の兩大關に坐わるので、その仕合ひを見に行つてゐる勇さんと僕とは、いつも、そのたんびに心で各々自分のおやぢが勝つて吳れればいいと思つた。僕は、それを外面にはあらはさず、いよ〳〵兩者の仕合ひになると、手に汗を握るばかりだが、勇さんは僕よりも年した丈けに、あたりをかまはず、『さア、大關同志の立ち合ひだぞ』と、一生懸命な聲を擧げる。して、勝負は大抵決せずに濟むことが多い。今から思へば、審判者の命令に從つて、八百長をやつてゐたのだらう。然し割合ひに勝敗には淡白な僕の父が無頓着に負けてしまうことがあると、野依家ではそれを一年中の誇にするのだ。その仕合ひが濟むと、最後に東西源平に別れた瓦器割りが初まるのが常で

あるが、或時、僕の父が野依氏を捕へて組み打ちとなり、柔術の手で氏を壁のあなたへ投げ飛ばすと氏はまだ瓦器が無事であつたので、父を追ツかけて來て、再び組みひしぎ、今度は父が投げ飛ばされた。

　この野依氏が細君にはあたまがあがらず、好きな酒も思ふ樣には飲めなかつたのだ。それが不平であつたのでもあらう、やがて警察の方を辭職して、獨り播磨の國へ渡り、そこの某牧場の馬飼ひになつた。馬術にも長けてゐたからである。すると、その妻子も亦國を引き拂つて、そこへ移住して行つた。もつとも、その宅地だけは親類のものにあづけてあつたのだ。

　すると、また、半歳も立たないうちに、野依氏の妻子だけが歸つて來て、もとの家に住むことになつた。渠等の樣子が前とは丸で違つてしまつた。して、野依氏はどこへ行つたか分らないのだ。その行き方が知れなくなる以前から、野依氏は馬を馴らしながらも變な樣子が見えたさうだし、家にゐても氣が觸れた樣であつたさうだ。神隱しに遇つたのか、天狗にさらはれたのだといふものもあれば、餘り細君が冷刻な取り扱ひをするので、どこかへ身を隱したのだといふものもある。兎に角、細君が金を渡してなかつたから、無手で出たツ切り、どちらとも分らないで、二年ばかりを經過した。

　すると、或日、同家へ山行きの男が來て、

『ここの御主人らしい人が、ぼろ〳〵の見すぼらしい風をして立つてゐた』から、案内しようと云ふ

ので、總領子息の勇さんがつれ立つて行つた。お城山の奥だ。
この城山とは、その絶頂に秀吉時代の脇坂氏の城跡がある山で、稻田氏の屋敷跡から登つて行くと、大蛇が海岸のさざえなどを喰ひに下りる通り路だといふ、茅がやで圍まれた間道を通つて、絶頂の城跡に達しられるが、そこにはうはばみの住みかだといふほら穴がある。その穴のかたはらの岩に、果して勇さんの父が腰かけて、ぼんやりと晴れた空をながめてゐた。衣物は、雨風に打たれたせいか、ど黑くあか染みて而もその袖や裾はぼろ〳〵に裂けてゐる。
「お父さん！」かう云つて、勇さんがかけ寄ると、氣がついてびツくりし、きよろ〳〵こちらを見てゐたが、思ひ出した樣に、
『お前のお母さんは薄情だ』と云つた切り、そこを動かうともしない。勇さんと山人とが無理にそれを促して、つれて歸つた。
いろ〳〵賺す樣にして、どんな生活をしてゐたのかを聽かうとしても、氣拔けがしてゐて、何事も分らない。或人の話しに據ると、その樣な風をしてゐた人なら、時々八幡のお社うちで見かけたが、お宮の末社の石段にあがつたこわ飯を取つて、喰つてゐたこともあるとのことだ。泥棒する氣力もなかつたらうし、乞食をしてゐたのなら直ぐ見付けられたらうし、先づ察するところ、夜中に出て來て、八幡宮の末社、末社にあがるお供物などを取つて生活してゐたのが本統らしい。それにしても、

播州の牧場を出てから、明石に來たり、明石から和船に乘せて貰つて、岩屋の浦に渡り、それから徒歩して洲本に來て、城山に籠つたに相違ない。

兎に角、靜養さすのがいいといふので、逃げ出さない樣に注意して、氣で思ふままにさして置いたら、多少正氣に返つたが、やつぱりゐなかつた間の消息は語らないので、離れしもその不思議な二年間のことは分らずに濟んだ。

八幡宮のお供物から思ひ付いて、世話人がその神主の下役に周旋し、暫くはそれを勤めてゐたさうだが、その頃、僕は、もう、國を出てゐた。その野依氏は間もなく無意義に死んでしまつたさうだ。例の二年間の山住まひの歷史が分らなかつた樣に、その病源も亦分らずに濟んでしまつたのだ。して、その細君は相變らず冷淡で、決して涙もこぼさなかつたさうだ。かの女並にその子息の勇さんに、僕はその後遇ふ機會がない。

二　里朝と女房

僕のうぶずな神に當る明神の社は、境内が狹いが、楠の木の大きな古いのが澤山立つてゐて、そのあちらこちらにふくろふの巢があつた。僕の家からもその鳴き聲がよく聽えた。

ふるつく、ふうく。ふるつく、ふうく。かう云つて、よくその聲を眞似たものだが　夜中に眞

似ると、この鳥は、魔物であるだけ、人の死ぬまで鳴きやまないと教へられてから、僕はおそろしくなつた。して、夜、母や姉につれられて湯に行く時、どうしても明神の森のそばを通らなければならないのを、つらくて〳〵たまらなかつた。きツと、そのふるつくふう〳〵があたまの上で聽えるので、僕は今にも自分の身に魔物が迫つて來る樣な氣がして、いつもそこを逃げる樣にして通つたのだ。

ところが、或日、明神の神主のいたづらツ子が楠の木の一つによぢ登つて、ふくろふの巣を見付け、子を二羽捕へたので、僕はそれを見に行くと、二羽とも足を絲で結へられて、とまり木につくねんと止まつてゐる。この鳥に限り、晝間は視力が利かないと聽いてゐたが、目だけはぱツちりと圓くあいて、神主の子の目つきによく似てゐた。

それで思ひ出すのは、この子の姉のお定だ。やツぱりふくろふの樣な圓い目をして、僕を可愛がツて吳れた。里朝といふ太鼓持ちの女房で、亭主が亭主だけに、かの女も亦人にはなか〳〵愛相がよかつた。ただ困るのは、夫婦間のいさかひが絶えないことだ。お定と僕の父とが關係してゐるといふ評判もあつたが、僕は、子供の時だから、それが實際であつたか、なかつたか知らないが、かの女が幾たびも僕の家へ飛び込んで來たのはおぼえてゐる。丸髷ががツくり仰向いて、衣物の袖口や袖つけをほころばされ、泥まみれになつて——時に依ると、顏や手になま疵を受けて、血だらけになつてゐた

こともある。お定はいつも悋氣深い亭主に追はれてそとへ逃げ出してまでも夫婦喧嘩をするので、誰れしもそれを知らないものはなかつたのだ。亭主は怒つて刄物三昧を演じることもあつた。して、さんざんな目に會はされると、お定は必らず僕の父に訴たへて來た。父は「またか？」と、うるさがつてゐたが、目がほに愛嬌がたツぷりで、色が白く、肉つきのいい女のことであるから、——僕でさへ好きであつたから、——むげに突ツ返すことはなかつた。その度毎に、父は必らず亭主の里朝を呼び寄せて、懇々と說諭してやつた。里朝も僕の父には一言もなかつた。といふのは、本職が太鼓持ちだから、成るべく祝儀を貰ふお客の多いのを望むと同時に、賭博好きといふ癖を持つてゐるからである。

「里朝、貴樣の夫婦喧嘩はいつも一家の私事だけではないぞ、みんな貴樣の博奕をするから起ることだ。いい加減にやめないと、あげてしまう」と、父はいつもおどしつけるのだ。すると、里朝はあたまに手をのせて、疊にぺた／＼お辭儀をする。その樣子がやツぱりお客の席へ出て、太鼓を持つ時の樣だと云つて、そばにわめいてゐるお定が吹き出してしまう。それでその場は無事に濟んでしまう。すると、やがてまた同じことが繰り返される。人は里朝ばかりが惡いのではない、お定の燒き餅もひどいのだと云つてゐた。

實際、里朝もいい男であつた。して、新地一般に第一の膽入りであつたから、藝者を初め、藝者

屋、料理屋のおかみや仲居までが、

「里朝さん、里朝さん」と云つて持て囃した。して、決して人をそらさないから、渠にかかつては、お客はどんなものでも財布のありツたけを捲きあげられてしまう。また、聲がよく、歌が上手で、踊りをさせても駈け出し藝者などは足もとへも及ぶところではなかつた。或時、新地の賑はひに、急仕立ての屋臺を露天に造り、藝者の手踊りを公衆に見せたことがあるが、その時、最後の裸踊りがあるに先立つて、里朝が黒い絹股引に尻からげて出て來て、すぼめたから傘を持つて、

「今頃は半七さん」を踊つた。僕も見に行つてゐたが、それを見て、太鼓持ちの生涯は面白いものだらうと思つた。して、いよ〳〵藝者の裸踊りとなつたが、その中ばにして、僕の父の下役が屋臺の上にあらはれ、中止を命じてしまつた。

その頃のことだ――僕が小學校の歸り途で、明神の鳥居前を通りかかると、お定は髪を亂だして徒足で走つて來ると、里朝はまたその跡から家を飛び出し、血相を變へ、出刄庖丁をひツさげて追ひかけて來る渠も徒足だ。して、渠等が社の境内に這入ると、そのまた跡から追ひかけて行つた人が里朝の出刄を奪い取つた。すると、さきの二人は鬼ごツこをしてゐる樣に一方の高麗犬のまわりを二三度駈けまわつた。追ふ者が踏みとまると、逃げる者も亦踏みとまり、それからまた逆に一二度まわつた。駈けたり、とまつたり、して、とう〳〵里朝はお定を捕へ『この野郎』と蹴倒して、思ふ存分にぶ

ちのめす。お定は倒れて『助けて呉れい』と悲鳴をあげる。そこをやうやく引き分けられるといふ芝居であつた。

僕は、それを目撃しながら、渠等の眞面目な樣で滑稽なのを不思議がらずにはゐられなかつた。渠等の悋氣喧嘩はよくこの神社内で晝夜にかかはらず行はれるので、そこで埒のあかない時は乃ちお定が僕の家へ逃げて來る時だ。僕の家へ來るのは、僕の父が警察官たるの故を以つて、お定がお上の威光で自分の亭主を征服してしまはうといふのだから、よくそのつもりは分つてゐる。が、然し、おまゐりの人もある明神の社へ、わざ／＼逃げ出して行くのはどういふ譯であつたらう？

かの女の口つきに似てゐるふくろふの住みかだからといふわけでもあるまいし、人に見られて見ッともないぐらゐのことは知つてゐたらう。僕はその時考へたに據ると、苦しまぎれに家を飛び出す以上は、明神の森は不斷がらんとしてゐて逃げまわるのに都合がよかつたのも一つの理由であらうが、今一つおもな理由がある。僕等は、春日大明神の前に立つと子供並みにうやまひ畏み、楠の木の繁つてゐるだけでも何となくおごそかな感じに打たれる上に、例のふくろふの住みかであるといふ聯想から、夢にうなされる時の樣なおそろしみをおぼえるのが常であつたが、お定に取ッては、その靈地が神主なるその父の領内であるから、自分のうちも同樣であつたのだらう。如何に暗夜でも、子供の時から慣れてゐるところは凄くも、おそろしくもないのだ。その上、かの女が結婚してからも、長年そ

のそばに住んでゐるのだもの——お定が里朝に苦しめられる家は、却つて、かの女には、僕等の森であつて、——こわいところにも、またその味はひがあるといふことは別として、實際の森は寧ろかの女に僕等が僕等の家に對すると同樣な親しみがあつたのだらう。僕はかう考へて、子供ながら、かの女の外界は、僕の內心で、僕等の內心はかの女の外界である轉倒を、何となく、意味ありげに受け取つた。

して、それまで僕がこわがつてゐたふくろふも、神主の庭で神主の子にもて遊ばれてゐるのを見ると、案外可愛らしいものになつたと同樣、なま疵の絕えないお定の色白な頰がほが僕には忘れられなくなつた。

『坊さん』と云つて、お定に聲をかけられる每に、僕はその亭主の里朝がいよ〳〵憎くなり、これと正反對に、かの女をます〳〵ゆかしみ、なつかしみ、戀しむ樣になり、僕のうぶずな明神の森を思ひ出すたんびに、自分の母とも見れば見られる者に對して、ひそかに顏を赤めることが多かつた。

三　父

僕の父は堅忍不拔、至極實直なのを以つて人に信用されてゐた。僕の家へ養子に來て、養父の大酒を飲み散らした莫大の借金を養父の死後、一身に引き受け、所有の宅地や公債には少しも手をつけ

ず、邏卒や書生から警部を勤め、毎月貰ふ僅かの俸給をやりくりして、拾年餘りの間に金を濟しくづしてしまつた。先祖代々の地東京へ出たいといふ望みを押へて、その間の辛抱ッたら、今でも思ひやられる。不平もあつたに相違ない。癇癪も起したに相違ない。屢々情けなくもなつたに相違ない。然し父は若い血しほと涙との道を絶ち、死んだも同前のつもりで辛抱したらしい。僕の記憶に殘つてゐるその時の父は丸で木石同樣であつた。

然しやツぱし人間であつた。人間の弱みはまぬがれなかつた。借金の全部が、もう、一二年で返へせるといふ時機になつてから、急に心がゆるんだのであらう、意外にも女狂ひをし出した。僕の母や姉の非常に心配してゐるにも頓着せず、うその病氣缺勤をやつて、二三日も家に歸らないこともあつた。非番の夜などは、家に寢るのは稀れで、大抵女のもとに泊つた。それが爲めに出勤時間が後れ、進退伺ひを出すことが度重なる樣になつた。

父の女は幾人も變つたらしいが、最も深く父が溺れ、また最も深く女の方から入れあげたのは、妙樂庵といふ汁粉屋兼料理屋の娘だ。娘と云つても、その時二十五六の年増で、もとは誰れか別に旦那があつたのだが、それをふり棄てて、慾得なしに父を思ひ込んだらしい。そのまた姉も一緒にゐて、女ふたりが主人で店を開いたのだ。その姉は父の下に探偵をしてゐるものの思ひ物であつた。母はいつも、僕等に、あの探偵が父をつれ出すのだと、云つて恨んでゐた。

探偵もなか〳〵腕利きであつたし、父も長年眞面目に勤めた効績があつたから、上官は父等の不行跡を知らないでもないが、時々注意するくらゐだけで、免職などの心配はなかつたらしい。僕は一度、父の遲く夜遊びから歸つて來た時、憤慨の餘り、寢床から飛び出して行つて、

『免職になつてしまうぞ！』と、ただ一言云つた切り、わツと泣き出した。

『何オぬかす！』と、父は僕をしかりつけて、床に這入つた。僕も別室にある自分の床に還つたが、涙がとまらないので、枕が冷たくなるほどになつた。その夜、父は母のあたまをなぐつた。母も恨みを云ふ度になぐられるのは殆ど承知の上らしいが、うちどころが惡かつたかして、櫛が折れて、その歯のさきが皮膚にささつた。父はびツくりして、あぶら藥を出し、母の傷ぐちへ塗つてやつたらしかつた。

僕等はこわくつてそばへ行くことも出來ず、またまんぢりとも眠られなかつたが、夜明けがたに、母は兄――僕等の伯父――に相談しに行くと獨り言の如く云つて、家を出た。すると、父が間もなくまた出た。僕は、どうなることかと、その跡を追つた。

屋敷のおほ門のそとで、母は地べたに泣き伏してゐると、父はその後ろ襟をつかんで、

『兄のところへ行く用はない、歸れ』と引き起してゐる。行く、やらぬといふ爭ひの末、父は力づくで母を引ツ張つて來た。まだ人通りもなかつたから見られもしなかつたが、若し見られたらどうだ

ちらと、僕は心配しながら、きよと〳〵跡について家に這入つた。

父はその後間もなく、上官の注意で、假屋浦といふ在所へ轉任を命ぜられたので、女との直接關係は絶えた。女はお峰と云つた。あの年をして、えらいと云へばえらいのだらうが、僕等の英語研究會へ通つてゐた。ぐる〳〵卷きの束髪で、眼鏡をかけ、氣取つた調子で、ペンとかペンシルとか語り、毎日スペルリングを二三章づつおぼえて行くのだ。僕はその聲を聽くさへ厭であつたから、寄りつきはしなかつた。

父は假屋では再び管道に勤務して、たび〳〵賞狀を貰つた。えこひいきのない、公平な取り扱ひは、父の勤務に於ける生命であつた。或時など、山林に關して甲乙兩者の間に所有權爭ひが起つた。裁判に出すまでもなく、父がそれを公平にまとめてやつた。利益を得た方が、そのと禮して、ひそかに金錢を贈つて來たが、父はそれをはね付けた。すると、その翌日代はりに、大根やら蕪やら、山の如く荷車に積んで贈つて來た。それをも斷はるのに、無理に置いて行かうとしたので、父は怒つてその人の横ツつらをぶちのめしたさうだ。

『お父さんは堅い人だよ』と、僕が假屋へ遊びに行つた時、母が僕に聽かして呉れた。その癖、お峰が一度母に隱れて父に會ひに來たさうだ。

僕は父があんなに女にのろいのに、一方ではまた實に心の堅固なのを不思議に思ふと同時に感服し

てゐたのだ。

四三面記事

僕が何歳であつたか忘れたが、子供の時から、淡路新聞社といふ社があつて、社長は漢學者として有名な老人で、そこから淡路新聞といふのが發行されてゐた。僕の姉と同社のおもな一編輯員との間の結婚談が持ちあがつて、もつともそれはまとまらなかつたが、それが爲めにそんな社もあることが僕に分つたばかりで、其の新聞なる物がどんな物であるかと云ふことは全く知らなかつた。ところが、或時、僕の家へ飛び込んで來た事件があつて、それが掲載された爲め、なるほどあんなことを毎日書きあげるものだと合點した。

僕の家は、先ケ峰といふ相模取りが開業してゐる宿屋と、練り壁を隔てにして、脊中合はせになつてゐた。壁に添つて、三間幅ぐらゐの裏庭があつて、その左右の隅に、一方には枇杷の木、一方には柿の木が植はつてゐた。枇杷の木には每年花が咲いて、黄金色の實が鈴なりになつたが、柿の木は花も咲かず、實もならず、ただすら〳〵と上にばかり延びるのであつた。僕等はそれが殘念で殘念でたまらなかつた。人の庭や山の柿はいつも赤く甘さうになるのに、自分のうちの木ばかりは、なぜあんなに馬鹿だらうと思つた。餘り上にばかり延ばしてはいけないといふことを小耳にはさんで來て、僕

は父にその枝を平たく廣げる樣に積んだが、父は別に氣にもとめず、どうせ日當りが惡いのだからと、うツちやり離しにしてあつた。

いつぞ、柿の木の方は切つてしまはうでないかといふ評議が子供達中から起つたこともある。といふのは、その木も枇杷の木も、繞り壁に接近してゐるので、若し泥棒が來て、塀を越る樣なことがあつた時、傳つて庭へ下りる手つだひをするばかりであるからだ。では、柿に限らず、枇杷の方も伐らなければならない、それに惜しいといふ異議もあつて、そのまゝになつた。實際、泥棒が這入りかけたこともあつたのだ。

父が當直の夜、母が夢のうちから目を覺ますと、緣がはにあたつてゐるものがあるらしく、雨戸のコツちの方をごとりと輕く叩いて見るかと思へば、またあツちの方を輕く叩く。戸締りの工合を調べてゐるのだ。氣味が惡くなつたので、母はおほきな聲で僕等を呼び起した。それツ切り音はしなくなつたが、翌朝戸を明けて見ると、泥の足で長い緣がはを度々行き來した跡がついてゐた。父が歸つてからよく調べると、僕等の心配してゐる裏の方から來たのではなく、表の露路ぐちをのり越え、露路のなかへ這入つてから、その木戸の締りをはづして置き、その路につゞいて裏へまはつたのだ。僕等は、それからといふもの、一しほ夜がこわくなつて、鼠が戸を傳りがたがたさす時など、また來たのではないかと、わざわざ母を呼び起しに行つたこともある。そんな時には、母は、僕等に、こそ〳〵

泥棒はあんなおほげさな音を立てるものではないと云つて聽かせた。
ところが、或夜、まだ遲くないのに、また、壁の瓦が折て庭へどたりと何か大きな物が落ちた樣な音がした。父がゐたので、直ぐ出て見ると、おほきな男が石を踏んで緣がはにあがらうとするところであつた。父は電光石火の勢でその男を捕へ、座敷へつれて來て、火鉢のそばにさし向ひにすわつた。見れば、往來で出會ふと僕に『坊さん』と聲をかける、して時々僕の家へも『お願ひだ御座ります』とやつて來る、平吉といふ遊び人だ。
『白狀しろ』と、父に嚴格に迫られ、申しあげますが、實は云々と陳述するのを聽くと、先ケ崎の奥座敷で賭博をしてゐたところが、巡査が二名店へやつて來たのを、店のものは、調べに來たと云つて、奥へ合圖したので、窓から逃げ出し、裏の塀をつたひそこねて落ちたのだ。
『それがあなた樣のお宅の庭であつたとは、絶體絶命、もう、覺悟致しました』と、平吉は父に向つて抵抗しないことを誓つた。今一人相棒がゐたのだが、それは庭をおもて木戸の方へ逃げ去つた。平吉はまごついただけそれに後れたのだ。
『何しろ、警察署に來い』と、父は渠をつれて出て行つた。
平吉はその途中で小便をしたいと云つて、その透きに乘じて逃げ出し、漁師町の眞一丁を逃げながら三匝までまはつた。從つて、父も三匝まはつたわけだ。渠も大の男だが、父もそれに負けないほ

どの力はあつた。その力も盡き、息が苦しくなつて來たので、平吉も倒れるなら、父も亦へまうつたど、互ひに二三度は倒れたり、起きたりして、追ツつきかけては逃げられ、追ツつかれかけては逃げたあげく漸く父は再び平吉を捕縛して、署へつき出した。相棒の方は、それから幾年間どこかへ逃亡してゐれば罪を濟ずに濟むのであつた。

その翌々朝の新聞に、その事件が載つてゐるのを姉が發見した。父の働きを賞めてあると同時に、入らないお負けが澤山書いてあつた。そのうちには、母を政岡の樣にしつかりした女に說明してあつたし、また姉のことを『窈窕たる美人』と形容して、あの博奕うちを初めて捕へた時、その美人が媚を執つて、父の跡に從つたとあつた。姉は顏を赤くして喜んだが、『新聞屋といふものは勝手なことを拵らへるのだねえ』と云つた。

僕は、その時、初めて、新聞紙の所謂三面記事なるものに興味をおぼえたのである。

五　毒婦の夫

神戸、大阪通ひの蒸汽船が洲本から出る樣になつてから、僕等は狹い世界が廣くなつた樣に感じた。二隻の往復で、毎日、朝出帆するのがあつて、夕方歸帆するのがあつた。その汽船の一つに乘り組んでゐる長さんといふ男は、僕の何となく好きな人であつた。その癖、そこの家へ遊びに行つて

も、長さんのゐない時は安心だが、もう、歸つて來るだらうと思はれると、心配で心配でならなかつた。がみ〳〵とおかみさんをしかりつける聲がこわかつたのだ。渠は世間に向つて一般に評判が惡かつた。おほ酒飲みで、喧嘩好きで、言葉づかひが荒くつて、佛頂づらであつた。鳥渡見ると、惡魔の生れ代りの樣に見へるが、僕等に向つて、稀れに愛相笑ひをすることがあつた。僕はただ何となくその笑ひに出合ひたかつたのだ。

亭主が荒々しい言葉づかひや取り扱ひをしたからかみさんもそれに向つて荒々しい態度であつた。兩方から畜生、馬鹿、氣狂ひ、死にそくないめなどいふいさかひは不斷のことで、かみさんの顏や手にはなま疵が絶えなかつた。それでゐて、子がないから僕等が遊びに行くと、珍らしさうによろこんで菓子を呉れたり、衣物の泥をはたいて呉れたりして、お愛相をした。

『何しに夫婦になつてゐるのだらう？』とは、隣り近處の疑問であつたのだ。長さん自身に取つては、ただ女郎を買つたり、買女に入れあげたりするつもりで、そのかみさんを養つて置くのかも知れなかつた。一日置きの夜でなければ、渠は家にゐなかつた。して、一日置きには、大阪にとまるので、大阪にも獨りのをんなに家を持たしてあるとのうわさであつた。

長さんは大した給料を貰つてゐるのでもなかつたから、かみさんは、毎日、借家つきの小い畑を耕やし、大根や瓜をあげるかたはら、人の洗濯などを賴まれるのであつた。僕が可愛がられたのも、ひ

とつは時々、僕の家の洗濯物を頼みに持つて行くからのことであつたらう。

　そのかみさんは、亭主の留守には、いろんな男を引き入れるといふ評判が、隣り近處から噂よつてゐた。密通などをするのはあんな女かと、僕はかみさんをさういふ種類の女の標準に見てゐたのだ。何人の男があつたか、そこまでは僕も知らなかつたが、一人だけは確かにそれであつたに相違ないのが僕の記憶に殘つてゐる。薪荷問屋の集まつてゐるそばの內港を深くする爲め、その水底の泥を淩ふ目的でかり集められた土方の一人、常公と云ふのがあつた。長さんがこの常公のもとへ出て行つて、非常な喧嘩をしたことがあるし、常公のかみさんが長さんのかみさんのところへ來て、つかみ合ひの騷ぎをしたこともある。して、男同士の喧嘩には、巡査が仲に這入り女同士の騷ぎには長さんの亭主が仲裁して、いづれも現場の證據を見ないのであるから、見ない方の負けとなつた。

　常公の倅貞といふのは、途中から僕の小學校に這入り、直ぐまた退校したが、住んでゐる濱田町の子供の餓鬼大將であつた。僕の屋敷はその隣り町にあるし、また僕の家の使ひをさせたこともあるので、まづ僕の味方の方であつた。それが、問屋の內港に四五本づつ筏に組んで浮べてある材木の上に、兩足をふん張り、土方の歌を歌ひながら、その足を以つて材木の筏を左右に搖り動かし、『東西南北靜まり給へ、エエサヽ、エサツサ』と獨りで囃す勢と云つたら、ない——思ひ出してさへ、いたづら小僧の骨頂だ。僕はこの小僧とよく長さんのかみさんのところへ遊びに行つた。

その長さんのおかみさんがだが、或晩、長さんの首を手拭で締めた。無論、殺すつもりであつたのだ。長さんが苦しまぎれに目を覺ますと、自分の咽首に手拭が堅く喰ひ入らうとしてゐたのではね起きて、それを解きほどくと、そのかたはらにかみさんが出刃を持つて坐はつてゐた。遂にその刃物をもぎ取り嚴しい折檻をした。兩者の喧嘩にはいつも仲裁に這入る隣りの家主が、その時も聽きつけてやつて來たので、その人の口からこの事件が廣く世間に知られる樣になつた。

して、世人はひどく之を評判してゐたが、肝心の本人の長さんは却つて平氣で、殆ど意に介してゐないかの樣であつた。その翌々日からも、大阪下りの汽船がつくと直ぐその家に歸つて、かみさんを相手にいつもの通り醉つ拂ひ、いつもの通り爭論を爲し、いつもの通り熟睡した。

長さんのかみさんは實に毒婦であつたらう。亭主を殺さうとしたのは、貞のおやぢの常公とどこまでも自由に交際をしたい爲めであつたかも知れない。然しこの事件を聽き知つてからと云ふもの、僕は長さんに對して好き以上に敬服の念が出來た。自分を殺さうとした毒婦を抱へて、平氣で熟睡するその大膽に感服したのだ。

六　長髪壯士

僕の國へ耶蘇の說教師が來るまでは、僕は演說といふものは自由黨の政談演說に限つてゐるものと

思つてゐた。それとも、子供だから、その場に行つて聽くことが出來なかつたので、人のうわさや評判によつて、どんな物だといふことぐらゐを知つてゐたばかりだ。然し、何となく、演說なるものは勇ましい男らしい樣な氣がして、他日は必らず演說家の一人にならうと思つた。

自由黨の演說會があると、必らずその場へ警察官がのぞんで、辯士に注意を與へたり、ひどいのになると、中止を命ずることがあつた。官尊民卑の時代にあつては、辯士等のやることが却つて僕には大變えらいことの樣に思はれた。その辯士等の隊長は立川雲平氏であつた。少し後れて青木氏も其等の一人であつた。その間に、青木茂七といふ壯士があつて、僕よりも五つ六つも年上の娘がある身だのに拘らず、家事などのことは全く無頓着で、所謂主義の爲め、黨派の爲めに、一身を犧牲にしてゐると云はれた。

渠が牢へぶち込まれたことは幾回もあるが、出て來ると、もう自由と亂暴とを敢へてし、言論や行動に於て少しも他の拘束を受けなかつた。政治は乃ち革命、革命は乃ち亂暴と心得てゐたも同前だ。それがまた目つかちなので、獨眼龍と稱せられ、ガンペツタを以つて人も許し、身づからも亦得意がつてゐた。かしらに長髮を貯はへてゐて、それを風になびかせ、巖疊な眉をそびやかし、圖太いステツキに鼻緒の太い下駄を穿いて、勢ひよく大道を濶歩するのを見るたんびに、僕の小い心はおそろしいといふ感じに打たれて立ちすくまないばかりであつた。

僕の見てこわかつた自由黨員は、その青木だけで立川氏を初め、他の人々はおそろしくもなかつただけ、また對して印象を僕の心に殘さなかつた。立川氏の家へは時々遊びに行つて、氏の妹などに世話になつたことがある。森氏は他國から來て、僕の屋敷の近處に借家してゐたが、年が割合に若かつたので、僕の兄ぐらゐの心持ちで、僕はよく其處に行つて、徒然慰めがてら、互ひに習ひ立ての碁を打つた。兩氏はその當時の代言人であつた。立川氏のゐた間は、氏が最も羽振りよく、それに讓すものはなかつたが、氏が國を出てから、森氏が幅を利かす樣になつた時もある。渠等が法廷へ出ても、その辯論は丸で政談演說の樣で、まかり間違ふと直ぐ腕力に訴へたのだ。牢に這入るのを名譽に思つてゐたらしい、立川氏は宴會の席で、何かの爭論の結果、老郡長の髯をむしり取つたことがある。

渠等はみな正式の代言人であつたか、或はまたもぐり代言であつたか、そこいらのことは覺えてゐない。が、然し青木茂七は立派なもぐり代言であつたが、それが向ふ見ずの壯士と云ふので、多少の働きをした。渠の亂暴は多くは酒の爲めであつたから、立川氏は渠に禁酒を勸告したこともある。また、同氏が渠に金を貸して、どうせ取れないと知つたので、かたなを拔いて渠のふさ〳〵した長髮をぶつつり切つてしまつたことがある。然しまたもとの通りに生やしたが、兎に角、青木は立川氏に一歩を讓つてゐたのだ。

青木は多少財産があつたさうだが、政治上の奔走の爲めに全く蕩盡してしまつたので、もぐり仕事

の收入と諸事件の肝入りとで一家をささへてゐた。立川氏が東京へ出てから、自分もその跡を追ひたくなつたのか、出京入費を同志の士から寄附的募集した。然し國は出たかつた。そんなことが重々あつたので、渠は段々同志間の信用を失つてしまつた。

その後、僕も國を出てしまつたから、青木のことなぞは忘れてゐた。して、憲法は發布せられ、國會は召集される時代になつた。立川氏は信州から代議士として打つて出たし、國からはまた歴史ある舊家として某氏が當選した。僕には、先づ、あの青木は今どうして居るだらうといふことを思ひ浮ばずにはゐられなかつた。ところが、第二議會の時であつたかに、目つかちの若壯士然たる青木が、傍聽席から議員席へ馬の糞を投げて、取り調べられることになつた。それが青木であつた。僕はその記事を新聞紙で見ると、直ぐ、かの處世術につたなく、徒らに自由黨時代の虚勢的政治熱の犠牲になつた若壯士の一生が思ひやられた。自分の同輩や後進とも見るべきものらが、天下晴れての議場にあつて得意然たるに對する、渠の不平と鬱憤とはなかなか馬の糞ぐらゐを以つて發散するものでないことが思ひやられた。之と同時に、また僕の一生も帝國議會と無關係ではないことを初めて感じたのだ。青木の投じた馬の糞は僕には無限の意味を感じさせたのだ。

然し、東京では、渠の議會に於ける行爲は無意義のいたづらと見られたから、渠はただ狂人として取り扱はれた。

その後、渠は再び國へ歸り、志築といふ町の町長をしてゐたが、明治三十八九年頃に亡くなつたさうだ。

森羅氏の特色たる長髪は青木茂七からの思ひつきだらう。僕が氏を國で知つてゐた頃には、氏の頭髪は、氏の人物と同樣、まだ長じてゐなかつた。

僕は、明治四十二年の議會に、森氏が次點候補者としてさきの當選者に代り得たのを見て、死んだ青木がやうやく多年の志を成就したかの樣に思ふのである。

七　神の子

明石の海峽に面する岩屋浦に、父が出張してゐたことがあるので、僕も夏休みをそこで暮した經驗がある。岩屋は、淡路島が最も細くつき出たそのとツ鼻で、そこを少し播磨灘に面する方へ行つたら、鰯の多く捕れるところがあるが、僕がゐた頃は、岩屋浦一體に鰯船の澤山出る季節であつた。その捕れた鰯はみなゆでて、干鰯にするので、干鰯製造元とも云ふべき家はすべて土地の財産家になつてゐた。

父が借りてゐたのは、その一干鰯屋の離れであつた。海の方に開けた二階建ての家で、父の借りる爲めに新築されたのであるから、疊建具はすべて氣持ちがよかつたが、かツかと照る夏の日光が熱い

風に干鰯の臊なにほひを運ばすのには、實に恐れ入つた。晝寢をしようとする時にでも、その氣持ちのならないにほひで眠られないこともあつた。然し段々ゐ馴れて來ると、それも大して苦にならなくなつた上、僕は、毎日、ゆふがたになると、どし／＼買ひ込まれる生鰯のなかから、大きいのをより出して骨を拔き、それを牛肉鍋ですき燒きにして喰ふのが何よりの大好物になつた。朝からつゞけて捕れる時などは、飯の代りにそればかり喰つてゐたこともある。

鰯といふ物は、女と同樣ひよわいもので、海からあがると、直ぐ腐つて行く心配があるから、捕れるかたツぱしからゆでてしまはなければならない。干鰯屋は終日それが爲めに働くばかりでなく、屢屢徹夜することがある。おほきなゆで釜に浮きあがつてゐる油をすくひ取り、それを火皿に盛り、木綿の丸めたのを燈心に代へて火をとぼすと、ぱち／＼云つてよく燃える。もつとも、油煙の立つことは非常なものだ、僕等の家主の家族は、夜業になると、入れ代り立ち代り、その火のもとで、鰯をゆでるのであつた。かみさんでも、娘でも、みんながくすぶツて、見られたものではなかつた。

そこへ時々手つだひに來ては飯を喰はして貰ふ親なし兒があつた。親がどこかにゐるのか、ゐないのか分らなかつた。また、どこでその兒が生れたのか――それも分らなかつた。他人がさういふことゝを知らなかつたばかりでなく、その兒自身も亦全く知らなかつたのだ。ひよつこり浦人の間にあらはれて來て、言葉さへその初めには通じかねたくらゐだ。漁師の一人がそれをあはれがり、自分の物置

き場を寢床の代りに貸してやつたら、そこへ段々藁くづだの、繩や網の端くれだのを拾ひ集めて、その中で犬ころの樣に寢起きをした。初めはほかに相手にして吳れるものがなかつたので、獨りで濱邊へ出て、生魚の落ちてゐるのを拾つて喰つたり、墓場や山道へ行つて、蛇や蜥蜴を捕へてかぢつたりしてゐた。

『あいつは、けふ、蛇を喰つた。今晩にも死んでしまうぞ。』

『蜥蜴をかぢつてたから、あすは藁の上でくたばつとるだらう。』

かういふ評判が何度もあつたが、不思議に生命に別條はなく、毎日ひよこ〳〵と方々へ出歩いてゐた。浦人どもは之を見て人間外の生き物ではないかと畏敬の念をいだく樣になり、天から降つた神樣の子だらうと云ひ合つた。

『神の子、神の子』と云ひ廣められたのが、自然とその兒の名の樣になつてしまつた。またその名が相應したかの樣に、人間を束縛する禮儀作法は知らず、遠慮會釋もなく、慾得の觀念も起つてゐないらしかつた。もつとも、年はまだ十四五でもあつただらうが、年相應に出て來る利害の念が見えなかつたのだ。浦人どもは、期せずして順ぐりに、地藏樣に供物でも獻ずる樣なつもりで、殘飯やらぼろ衣物を運んで行くと、殘飯は喜んで喰つてしまうが、衣物の方は、浦の惡がしこい子供にそのかされて、直ぐ駄菓子の代りにしてしまうのだ。して、はだかと云ふことを當り前の樣に思つてゐたらし

い。人々も亦それを少しも怪しまなかつた。

ところが、父の下役の新任巡査がそれを見て、如何に子供とは云へ、もう十四五になるものが裸體で往來を歩くのは風俗に害があると認めたので、その子を警察署の前で呼びとめ、

『おい、神』と、滑稽だがしかりつけた、『貴樣は衣物がないのか？』

『ないんだ。』

『ないなら、うちで拵らへて貰へ。』

『さうか？』と、にこ〳〵して行つてしまつたが、今度はどこで貰つたのか、大きな風呂敷の眞ん中に穴をあけ、それを首に通してだらりとからだの周圍に垂らして歩いてゐた。それには、もう、誰れも反對するものがなかつた。

僕はその自然の無頓着を面白く思ひ、渠が僕の家主の干鰯屋へ來た時、渠を僕の家に呼び寄せ、例の骨拔き鰯のすき燒きを喰はしてやつた。渠が舌うちをして、旨さうに喰つてゐるのを見て、僕は世に旨いといふその最も旨い味は、そんな時にあるだらうと感じた。

八　猛犬

人の戀しがる故郷といふ物が、僕には、些かの戀しみもなつかしみもない。そこで生れたとは云ふ

もの〻先祖代々の墓は東京にあるし、小學校へ這入つてゐる間にも、餘り土地のなまりに染まない東京語を使つてゐたし、家族の誰もすべて早くから再び東京へ移つてしまつたし、特別縁者とてもさう近しくはないし、僕の身に沁む様な思ひでは殆ど全く僕の故郷から得られないのだ。のみならず、却つて口惜と復讐との念が僕の故郷と云ふに伴つて來る。と云ふのは、淡路――僕の故郷――では、ねえねえと云ふ東京語の語尾に似た發音が穢多の言葉にあるので、僕が小學校で「ねえ」を使ふと、「ねつからねの穢多小僧」と輕蔑され、多くの子供から相手にされず、道を行く時など、後ろから水をあびせかけられたこともある。

僕の生れて育つたのは洲本と云ふ町の濱邊に近い士族屋敷なので、濱屋敷と稱せられてゐた。そこのおほ門を一歩そとへ出ると、もう敵國の様な氣がした。十丁餘りもあるところを毎日小學校に通ふのは、敵の目を掠めて行くのであつた。敵は町人の子や漁師の子などがあつて、若し僕がその行きにでも、歸りにでも見つかると、きつと何かひどい目に會ひかけるのであつた。僕が足早やに逃げるのが唯一の武器であつた。たまには、向ふから裏切りして來たかの様に、向ふ同類に對する惡口などを僕に聽かせ、僕に同情を表して以後は親しく交はらうなど云ひ寄り、なれ〳〵しさうに途中までついて來て、僕が氣をゆるめてゐるを見込んで、知らぬ間に僕の襟元から砂を投げ入れて逃げたものもあつた。かう云ふことが重なるに從つて、僕はます〳〵町人、漁師の子等を卑しみ恐れることが増

して行つたのだ。僕の子供心にも、惡憎の念は僕の孤獨と傲慢心とを養ひ、復讐の念は僕をして人間の友を避けて多くの猛犬をかり集めさした。この猛犬らを使嗾して、僕は屋敷以外の子供の飼ひ犬を征伐したのだ。

屋敷内の子供はすべて僕のしたでであつたが、屋敷内に僕等の漢學先生が一人住んでゐて、そこへ在所からあづけられた子――市ちやん――がある。そればかりは僕等の爲めに厄介物であつた。屋敷外のものにおだてられて、いつも裏切り的な行動をしたのだ。屋敷から一二丁隔だつたところに、春日神社がある、その明神さまのお祭りの日であつた。社内の大きな石の高麗犬のそばへ集まつた僕等同窓の間に誰れがえらい、彼れがえらいといふ樣な爭論が起つた。その末、市ちやんと僕との比較論になつて來て、僕の敵どもは市ちやんをおだて出した。僕もなか／＼心中では負ける氣はなかつた。

ところが、市ちやんはまたがつてゐた高麗犬の背から下りて來て、しやがんでゐた僕を、うしろからむずと抱きすくめた。渠は兩手を僕の向ふ脛にかけ、その膝を僕の右の肩に當て、全力を込めて僕を抱きすくめたのであるから、僕は一時動きが取れなかつた。僕の手したどもは恐れ退いて、遠く見てゐるばかりだし、敵どもは一切に大喝采をする、眞ツかになつてゐた僕は全身の力を込めてうんと立ちあがつた。市ちやんは手を離した。僕は無言でそこを去つた。市ちやんも跡からついて來たのだが、屋敷外では僕は何の手も出しかねたのだ。然し、濱屋敷の門を這入ると、もう、自分の勢力範圍

ぞといふ安心があるので、――して、市ちやんは屋敷内では先生がこわいばかりにおとなしくなる上、丁度先生の母親が通りかかつたのを幸ひ――僕は市ちやんを捕へるが早いか、滿腔の不平を足さきの下駄に込めて、渠の向ふ脛を蹴つた。

『ああ、これ〳〵』と、先生の母親がとめようとする間もなく、市ちやんは泣き出した。

『ざまア見ろ』と云つた切り、僕は心に勝ち誇つて家に歸つた。

僕はかう云ふ有樣で日を送つたが、要するに外敵から見れば、内辨慶としか見られなかつた。渠等の僕に對する侮蔑といたづらとはます〳〵甚しくなつた。して、僕が外敵に備へる爲めに飼つてゐる猛犬も次第にその主人の氣風に感化されて行くのかして、家にゐてはなか〳〵强いが、外へ出ると、鳥渡した同類を見ても尾を卷いて逃げて來る樣になつた。

九　盆の踊り子

思ひ出すと若々しくなる樣な氣がするのは、僕の故鄕の盆踊りだ。ひとりが眞ン中にゐて、太鼓を打つて音頭を取ると、多くの男女が、年寄りも若いのも、その周圍をめぐりながら、手をつないだり離したりして歌を歌つて踊る。そんなことはどこの地方にでもあることらしいが、他の地方では見たことのないことが一つ二つある。

淡路の國は阿波藩の領内であつたから、阿波に盛んな淨瑠璃が僕の故郷にも盛んであつた。そしても道樂氣のある主人があらば、その家には必らず一さをは立派な太棹が備へられてゐた。不斷はそれを彈いて『今頃は半七さん』などとなつてゐるのだが、盆になると、三ヶ日の間、朝からきこしめす酒のほろ醉ひ機嫌に乘じ、その太棹を肩に結びつけ、左右に撥を振りながら、大道を彈いて歩くのだ。その調子が如何にも面白いチコテン、チコテン、チコチコチコテン、チコテン、チコチコチコテン、チコチコチコテンと云ふ風なメロディを、こまかく刻みながら繰り返して行く、ただそれだけのことだが、こまかくメロディを刻んで行く工合に、腕の力と上手下手とが聞き分けられる。して自分の得意や知人の店さきへ來ると立ちどまつてその調子に歌を合はす、『太郎兵衞チコテン、夜ふーけてチコテン、夜ふーけて太郎兵衞』などとつづける。それが不斷僕等の家へ出入りする芋屋までも眞面目くさつてやつてゐるのだから、なほ更ら面白い。

それからまた、一方には、子供の踊りがあつた。踊りと云つても、手を振つたり足を擧げたりするのではない。ちやんちやらと云ふ、ちいさい鐃鈸の樣な形の響銅を、兩手を延ばしただけの長さの紐の兩端に結びつけ、紐の眞ン中を首に懸け、響銅の根元を兩手の指の間にはさんで、ちやんちやらと鳴らしながら、揃ひの赤い襦袢で、男女の子供が隊を組んで『何をくよくよ川ばた柳、水の流れを見てくらす』など歌つて歩くのだ。その歌つて歩く歌は、チコテンの太郎兵衞と打違つて、い

ゐんな意味のもぢられてゐるのがある。普通の俗謡から轉じて、町内の老爺や娘の悪口を歌つたものもある。たとへば「洲本付町の何屋の娘是をたけ出して提結よつた」といふが如きは、もう、一種の低い標準の言論である。無邪氣な子供は、自分等の前を通り過ぎるものらに向つて、さういふ言論を再びそのものらの當てこすりになる樣にもぢり直して歌ふのだ。僕の家と背中合せになつてゐる某問屋の娘、けイちやんと云ふのは、隨分お轉婆の悪口屋で、そんな場合には、なか／＼面白い皮肉を歌つたものだ。

僕も赤襦袢を持つてゐた。たてに白い筋の這入つた赤襦袢であつた。盂盆のこと、それを着て、ちやんちやらを首にかけて、屋敷のおほ門に立つてゐた。そこは例のチコテン芋屋の荷車がとまるところで、僕の母はいつもそこまで出て來て、芋や大根や葱を値睛むのがお定りであつた。その盆の日、僕の立つてゐる前をけイちやんの一隊が歌つて通つた。けイちやんは僕を指さして、『大きいなりをして、あのざまを御覽』と云つて指して笑ひ逃げた。僕はその日から定りの悪いといふことを知り出したのだ。けイちやんは皮肉屋だが可愛いと僕は心で思つてゐたからであつた。

その後、けイちやんが裁縫の師匠に通ふ程の年になつた頃、その師匠の子と僕との間でけイちやんを取り合ひしたこともある。同時にまた、けイちやんに酒を買つて來て貰つて、師匠の子と僕とおなじ酒を五合ぐらゐ飲み、非常に苦しんだこともある。して、今や、そのけイちやんは、出生して、某省

の某高等官の夫人である。

一〇　お　松

父が國で勤めをしてゐた時、僕の家へ出入りするお松といふ藝者があつた。藝者は別に何とか云つただ、かの女は藝者屋のおかみ兼藝者であつた。そこへ新らしくかかへられた舞ひ子を玉子と云ふ。僕の父が世話してやつたのだ。

玉子は實に無邪氣であつた。自分の身が、踏み込めば踏み込むほど、ます／＼足を拔きさすことが出來ない、ぬかるみへ落ちたのであるを知らなかつた。いい衣物を着せて貰つた上に、みんなから可愛がられると云ふ言葉を本統にして、兩親の爲めにその身を賣られたのである。兩親はさうするのを、目的で、自分等が在所ものであるに拘はらず、早くからその娘に舞ひと三味線とを教へ込んだのだ。かかへられたその日から、お座敷へ出て立派に舞ふことが出來る重寶者だから、多少田舍くさい素振りがあることなどはおほ目に見られ、うちの姉さん達からは「玉ちやん、玉ちやん」と云つて大事にされたし、お客などからも非常にひいきにされた。その藝者屋は、また、玉子が來てから、特別に繁盛する樣になつた。

そのうち、玉子の田舍くさい素振りもなくなり、言葉つきも全く狹斜向きの圓滑と甘ツたるさとを

帯びて來て、その一廓中に於て、無類飛び切りの雛ひ子が出來あがつた。色白の圓がほには愛嬌があつて、痩せぎすの脊がすらりと高く、お蠶ぐるみのからだの優しい輪廓は、畫面に浮き出てゐるかの樣であつた。錢湯へ這入りに出て來る途中で、犬ころの遊んでゐるのをながめながら、道ばたにじつと立つた姿と來ては、何とも云はれない好い樣子があつた。

「玉ちやん、お風呂？」と、知り合ひの女などに聽かれると、からだを輕くひねつて、

「ええ」と答へる。その一聲があたりに響くと、あちらの窓、こちらの格子戸から、必らず女や子供の顏が出るに定つてゐた。

たま〳〵、漁師や町人の子等に、

「姉はん」などとからかはれると、かの女はむきになつて怒るのだ。

「あかんべい！畜生！貧乏の子！」かう云つて、胯をしやくるのが癖であつた。して、追つかけられなどすると、僕の家へ逃げ込んで來るのであつた。

「坊さん、坊さん」と僕を呼んで、いつも僕を遊び友達にしてゐた。墮落者の寄り合ひなる曲輪以外に出て、かの女が穢多同樣に卑しまれないところは、殆ど僕の家ばかりだと云ふことを、かの女は知らなかつた。

僕も玉子を姉同樣になつかしく思ひ、けふは來るかあすは來るかと、毎日の樣に待つてゐた。或日

のことかの女がやつて來た時、僕はその木履を穿いてそとへ出た。ちやらん〳〵と鈴が鳴つてゐた。
『坊さん、遊びましよう』と云つて、玄關へ出て來た玉子は、それを穿いては困ると追ツかけて來たが、僕の下駄を穿いてゐるので、僕はお互ひではないかと取り合はず、逃げる。

かの女は追ふ。かの女が物につまづいて倒れたので僕は走るのをやめて、抱き起してやつた。その時、最もなつかしい樣な、また可哀さうな氣がした。

その後、暫くして玉子は僕の家へ來なくなつた。忘れたが、何んでも、神戸か、どこかの、もツといい場所へ轉じたのだ。かの女のゐた藝者屋も、やがて廢業して、そこのおかみ兼藝者のお松は、人のかこひ者となつた。世間の評判によれば、僕の父がこの女に關係してゐたさうだ。それを知つてゐるせいか、僕はかの女を厭で、厭でたまらなかつた。人にかこはれてからも、たび〳〵土産を以つて僕の家へやつて來たが、僕は言葉をかけられるのは勿論その顏を見るのも避けてゐた。

然し、かの女の住まひが僕の通ふ小學校の道にあるので、かの女が、朝、そのかど口に立つて、そとをながめてゐるのに出くわしたことが度々だ。その青い顏が一しほ氣に喰はなかつた。
『坊さん、學校?』から云つて、向ふはお辭儀をしても、僕はいつも知らん顏をして通り過ぎたのだ。

お松は、その後、男と手を切つたが、大阪の松島で再び藝者に出たことを聽いた。
之を聽く以前、僕は既に大阪へ來て、或英學校の生徒になつてゐた。或日、朝、[illegible]の學友とボー

トを繞ぎ、松島遊廓の間を通り過ぎる時、廓の一隅から、『岩野の坊さん』と呼ぶ聲が聽えた。然し、遊廓などに僕が知つてゐる女があらうとも思はないし、若しあつたら、疑ひを被るばかりだと思ふから、わざとふり向きもしなかつた。

後、それがお松であつたと分つてからは、例の男もゐない、僕の父もゐない、してまた僕でも隱れて合ひに行けば行ける境遇にゐる、かのをなに對する同情の念が急に湧いて來て、僕は大人じみた考へをいだく樣になつた。して、それからと云ふもの、お松は時々僕の心に浮んで來るが、國でそれと同じ樣に僕の家へ出入りした、玉子の方は、僕には殆ど全く之を思ひ出すをりがなかつた。

二　教師の家

僕が英語を習ひ初めたのは、十二か三の時である。

小學校を出ると、直ぐ——當時、中學校が廢校になつてゐたから——專ら漢學と數學とを教はりに行つてゐたが、僕より二つ、三つ、または四つ、五つ上のものらが、神戶や大阪へ遊學に出て、英語をかじつて來るのをうらやましく思つた。

そこへ、丁度、神戶から、警察署の傭ひ教師を兼ねて、英語の塾を開くものが來たので、僕は喰ひ扶持を出してそこへあづけられることになつた。その人は餘り平凡で、學力もなく、語學もただ英

語、獨逸語、佛蘭西語、羅甸語などの初歩を學んでゐたのに過ぎなかつたが、至極無邪氣な性質であつた。僕は書生の名義で置いて貰つてはゐるものの、喰ひ扶持は出すし、また向ふが先生らしく構へはないので、なか／＼その云ふことを聽かなかつた。

その時から僕は碁を知つてゐたので、先生が酒の興に乘じて打たうと云へば、遠慮なくお相手をした。向ふがあぐらをかけば、僕もあぐらをかく。向ふが罵詈をすれば僕も冷笑する。して、僕の方が强かつたので、一度、さん／″＼に打ち負かすと、先生はむきになつて來て、今一度試みる。それでまた無闇みに穢い手だから、僕は乘り氣がしない。それでも全局は四五十目僕の勝ちと見えたのを、先生は默つて僕の地面を少し崩し取つた上、なに、對した違ひはなからう、つくつて見ようと云ふ。然し、僕はその崩された場所を指摘して、またと一言も云はさなかつた。

家族は、先生と細君と細君の老母とだ。世間のうわさによれば、細君は神戸で旦那取りをしてゐたらしい。僕にもさういふ點が見えないでもなかつた。生活の仕方も隨分しまりがなかつた。老母を除いてはすべて寢坊好きだが、每朝先生の出勤時間まへに英語を習ひに來るものがあるので、よく叩き起される。老母は耳が遠いので臺どころにゐても聽えない。僕はまた知つてゐてもわざと寢床を出ない時があると、細君が止むを得ず二階から下りて來て、戶を明けるのだ。寢卷き姿ではあるが、派出な絹物のはした切れをつぎ合はせて着て居るのだから、背の高いからだにそれがぴつたりなじんで

ほけ顔の力に氣がつかないでしまうのだ。もつと
も、その顏もなか／＼上品であつたから、僕の土地での美人といふ評判であつた。

先生は醫者の素養もないではなかつたので、種々な藥品を備へて置く室があつた。して、同僚や知友の求めに應じて、調劑をもやつた。或夜、細君に喉がかわいてたまらなくなつたさうで、その藥劑のうちから、蒸溜水と思つて飲んだのがモルヒネであつたから、たまらない。おほ騷ぎの末、夜よ中、僕等は細君を井戸端に連れて行き、つるべから思ひさま水を飲まし、モルヒネの効力を消して、やうやく安心した。

先生と細君とは人の前でも平氣でふざけ散らすのだ。先生がまた細君の老母を捉へて尻まくりをやらさうとするのを、細君が怒つてとめるといふ騷ぎもあつた。さうかと思ふと、冬の夜寒むに、火鉢を圍んで話しをする時など、先生が炭をくべながら、細君に、

「どうだ、おぼえてゐるか」といふ前提で、自分がかの女の家へしげ／＼通つた頃、夜が更けて、歸らうとすると、まア、この炭が立つまでと止める。それがなくなりかけると、また新らしいのを加へて、今暫く、これがなくなるまでと云ふ。さういふ風にして、かの女もお母さんも自分を引きとめてゐたのだと、にや／＼笑つたこともある。

夏の或日のこと、僕が下の客坐敷で晝寢から醒めると、足に白いものが結へつけてあつて、その末が

臺ところの方まで行つてゐる。して、時々それが輕く引つ張られる。またいたづらをしてゐやがると思つて、ふと氣がつくと、僕の三尺がゆるんでゐて、腹の上からどこまでも、黒々した疊で這りこくつてある。僕はくわつと怒つて、飛び起きた。臺どころからは、そりや、起きたと云はないばかしに、みんながにこ〳〵して駈けて來た。豪腹になつた僕は直ぐ素ツぱだかになり、縁さきのお作もた石の洗水鉢の上に胯がり、ばしや〳〵水をつかつた。それでも、腹いせにはならないので、黒い水が滴れてゐるまゝに坐敷を通つて臺どころに行き、手桶一杯の水を坐敷の眞ン中に持つて來て、そこの疊みの上で行水をした。

　僕はさういふ亂暴を働いたが、先生の細君には服してゐたらしい。お湯と云へば、いつも僕がお伴を命ぜられるのだ。時刻は大抵正午前後だ。細君はやはらか物を着て、なか〳〵氣取つて進むと、僕はその跡から手拭ひを持つて附いて行く。餘り穢いなりをするなと云はれてゐるので、僕の帶も新調の三尺で、それを後ろでだらりと結んでゐるのが、女の持て遊ぶ特別な美少年らしく思はれたさうだ。そんなことに思はれると知つたら、僕は斷然お伴はことわる筈であつたが、實に無邪氣だつたのだ。して、かの女は少しびツこであつた。それを隱す爲め、道を歩く時は、ぐずり〳〵と歩を運ぶので、湯まで五丁ばかりのところを、僕ひとりなら、二十丁も行ける時間がかかつた。

ところが、一度、僕は家に引ツ籠り、二階の下り小口の室――僕の勉强室になつてゐた――に英語

のさらへをしてゐると、先生の細君がお湯から歸つて來て、次ぎの室――二階には、もう、その室があるだけだつた――に這入り、薄切單重になつて、三味線を引き出した。やがてそれが止んだ。すると、いつの間にか細君が僕の後ろに立つてゐて、

「まア、こちらへお出やす」と、嬉そ顔はせながら、僕の肩へ手をかけた。その顔を鳥渡見あげると、上氣したのか、眞ッ赤になつて、その眞面目さ加減と云つたら、かの女自身をもまた僕をも忘れたかの様で、僕の肩に當つてゐるかの女の手には、おほきな石をも動すかと思はれる力があつた。下坐敷に裁縫をしてゐるお婆さんが若し起きて來たらどうしようと、僕は恐ろしくなつて、無言のまゝ、兩手で、机の足を攫つた。そのとたん、机の一方が持ちあがつて、筆立てやインキ壺が引ッくり返つたが、そのひツくり返つた物が僕の身代りであつたのだらう、それッ切り僕は無事で濟んだ。

やがて僕は英語の教師を變へ、また間もなく國を出てしまつたが、その後この教師は虎列剌病に罹つて世を去り、その細君は神戸で再び別な旦那を持つてゐるさうだ。

三　岡見先生

私の少年の頃、町に評判な、今日で云へばハイカラな、二人の未亡人があつた。一方は富田のお清さんと云つて、十年の戰役に死んだ軍人の未亡人だ。軍人の家だけあつて家風に

どこか凜々しいところがあつた。お淸さんも、實際の年齢よりはずツと若く見えるにも拘はらずふさふさした黒髪を切り下げにして、いつも極地味な衣物をまとひ、赤い物などは一つもその身につけてゐなかつた。讓といふ獨り子息は、僕と同年で、また僕の友人だが、少しも勉强する氣などはない腕白小僧であつたから、僕が度々、渠の勉强心を起す樣に忠告してくれろと頼まれたことがある。そのお母さんではあるが、どことなく若々しいところがあつて、地味な風が却つて一しほ奥床しいので、僕に友人と共に『おかあさん』と呼びたくなく、姉さんぐらゐにして置きたかつた。

また一方のは郡長の未亡人で、姓を渡邊と云つた。この家は、同じ士族ではあるが、町家の間に住つてゐるので、何となく町人じみた家風があると感じられた。東京へ學問しに出した總領子息に初めて學費を送る時かわせ料を惜しんで、現金を封じ込み、封書のおもてに『金子在中』と書いた爲め、罰を喰つた樣なへまなことをした家族で、僕とは餘り親しみはなかつたが、行けば薄くも持て爲さなかつた。合田家が有名であつたのは、後家さんその者によつてだが、渡邊家の評判は寧ろ二人の透き通るほど美しい娘の爲めで、而も癩病すぢだと云ふことであつた。

合田の讓さんはよく渡邊へ遊びに行つた。同家の妹娘と仲よしであるのは僕も知つてゐたが、癩病筋では困るではないかと、僕はかげながら注意してやつたこともある。

讓さんも、渡邊の妹娘も、僕と共に英語研究會へ通つてゐた。教師は岡見先生と云つて、渠より以

前に來てゐた英語敎師を蹴落して、町中のハイカラ靑年を自分一人に吸集した人だ。それも先づ町の有力家等を御馳走攻略で取り入れたのが當つたのである。交際が上手な上に、鳥渡男ツ振りのいい獨身者だ。渠はいつの間にか渡邊の妹娘を通してその母やその姉と行き來する樣になつた。目的は多分姉の身にかけてゐたのだらう。然し渡邊家で合田のお淸さんに紹介されてから、その方にばかり熱中する樣になつた。世間には、渠が每晩遲くなつてからお淸さんのところへ通つて行くといふ評判が立つた。僕のお淸さんに對する興味しさは少しねたましさに變じた。

僕も、それを聽いた夕がた、一層合田家が戀しくなつて、讓さんに會ひに行くと、ゐない。お淸さんばかりが寂しさうにしてゐて、多分渡邊へ行つてるのだらう、もう間もなく歸るから待つてゐて御覽と云ふ。僕は姉さんとさし向ひになつた氣持ちで、釣りランプのもとに坐わる。かの女の寂しさうな樣子が何だか目に立つ樣で、而もどことなく急に人なつかしい風が出來た樣だ。寫眞箱を出して、死んだ夫の軍服姿や、その親のや、親類のや、知り合ひの娘のや、いろ〳〵見せて吳れた。僕の知つてゐる人のもあるし、知らない人のもある。意外なのは、お淸さん自身の寫眞が多いことで、身なりにかまはない女と思つてゐたのに、いろんな衣物を着て、いろんな風をしたのがある。もつとも一年置き三年置き、五年置きになつてゐるが、その年に取つたのは違つたのが三つある。その一つは二三日前に出來たのだ。中頃のに比べると、若返つた樣に綺麗だ。而も切り髮を延ばしたので、丸まげに

結つてゐる。それを僕に下さいと頼むと、一つよりないからと云つて呉れない。して、

『これを御存じでせう?』と云つて、岡見先生のを出して見せた。僕は世間のうわさが間違ひないと判斷した。

かうしてゐるうちにも先生が若し來たら面目ない樣な氣がして、時計を見ると、もう九時半だ。

『渡邊へ行つて御覽、讓がゐますよ』と云はれたので、僕はそこを出た。

渡邊へ行くと、讓さんが大きな聲でしやべつてゐるのが外から聽えた。格子戸を這入つて、僕もそこへあがり、長く待つてゐたことを語ると、讓さんは案外平氣で、

『僕アあんな家へ歸らない――今晩はここへとまるのだ』と答へた。そのそばから、渡邊の後家さんが言葉をかけ、僕がいつか讓さんにこの家が癩病筋だと云つたさうだが、あんなことを云つて貰つては、嫁入り盛りの娘もゐるから困る。決して癩病筋などいふいまはしいことはないから、以後人に云つて呉れるなと頼んだ。僕はそれを實際ではないかとも云へず、ただ世間の評判を話しただけで、それが事實であるかないかは知らないのだと答へたが、氣の毒になつて、事實であると思へば思ふほど、もう二度と再びこの家へは顏出しが出來ないと赤面して、いとまを告げた。

十時を過ぎてゐたらう、然し今一度――近處だから――谷田へ立ち寄らうとして、行つて見ると、しまつてゐる門のくぐりが開いてゐて、そのそとの暗がりにお清さんがしよんぼり立つてゐた。

『伯母さんですか、讓さんはとまると云つてゐましたよ。』

僕が訴へる樣に云ふと、

『またとまるのでせう。』

お清さんの聲は聽えたが、どうでもいいと云ふかの樣に冷淡だ。

僕は暫く無言で立つてゐた。遲いから、こちらであなたもとまつて行け、と云ふかと思つてゐたのだ。然し向ふも無言だ。先生が來てゐたので、僕を門拂ひにするつもりだらう。

僕は今讓さん等に相手にされなかつた樣な氣がしてゐる上に、また、お清さんにも見棄てられた樣な氣がして、そこを立ち去つた。

岡見先生はあの時、來てゐたのか、それともまだ來なかつたのか、それが僕の長い間の疑問であつた。

一三　お里さんの記憶

僕のいとこ同士が、三軒に分れて、六人あつた。僕と僕の姉とで二人。その他は、僕の母の兄なる人の家二軒に、おの〱、姉と弟とがあつたので、四人。そのうち、生れ出た順序を云へば、橋本家のがかしらで、次ぎは三好家、そのまた次ぎが僕の家であつた。橋本家は最も多くの金もあり、最も

多くの出入り人もあるので氣ぐらゐが高いから、三好家とはいつも仲が惡く、かげ口の云ひ合ひであつた。然し、僕の家は、他の二家の主人の里であるだけにいづれへも同じつき合ひをしてゐた。

然し三家ともに、年中、或競爭心を以つて發展してゐたのは、いづれの家も、その姉娘の結婚問題に就いてである。この點に於て、橋本家は最も難局にあつた。と云ふのは、同家の男の子は生れつき盲目であつたから、琴を習はして別家にする筈で、姉娘のお葉さんに婿養子をしなければならなかつたのだ。次ぎに、三好家のお里さんはそのまた親類へ養女になつてゐるので、それも亦そこへ婿を貰はなければならなかつた。家の事情が最も單純で、而も最も年したの、僕の姉が一番早く婚約がととのつて、嫁に行つた。すると、他の二家ではあせり出した。してよく遊びに來たお里さんも、殆ど全く來なくなつた。それまでは、家が近處であつたからでもあらう、カルタ取りだと云つては來たり、三月の節句だと云つては來たりしたのだ。

ところが、或日、ふと、めづらしく、お里さんが姉のところへやつて來たのは、その所天たるべき人が定まつた嬉しさに、それを報告したかつたのである。その人は僕の小學校で評判のいい教師であつた。僕もさういふ先生を親類にするのが嬉しかつた。ふたりは嬉しさの餘り、玄關前の廣ツぱで鬼ごツこをした。僕の姉も、進まぬながら、仲間に這入つた。おほきな聲をすると、外聞が惡るいからといふお里さんの注意ではあつたが、かの女が鬼になつた時、僕はその注意にそむいて、廣ツぱの眞

ン中にある、土を盛りあげた山の上から、

『お里さん、お里さん』と呼びかけた。かの女はぷんとおこつて、無言で歸つてしまつた。僕等も亦無言でそれを見送つてゐたが、姉は僕を返り見て、憤慨した樣に云つた。

『あの人も變な人になつたのねえ。』

いよ〳〵お里さんの結婚式も濟み、しばらく立つてから、その所天の里（田舍にあつた）へ、親類のものらをつれて遊びに行くことがあつた。橋本家の人は意氣張り上誰れも出て來なかつたが、僕の家からは、姉が既に身持ちになつてゐたから、僕が代表者となつて行つた。同行者八九名の一隊が、二里半の田舍道を歩いて行つたのだが、道々、歌を歌ふやら駄洒落を云ふやら、色目を使ひ合つたり、ふざけ合つたりするやら、するものがあつた。一里以上も來たかと思はれる頃、道ばたに、おほきな柿の木が一つ立つてゐて高い枝には赤い實が澤山すゞ生りをして、午後の日光を反射してゐた。僕は、喉がかわいてゐたので、その實の一つを取つて喰ひたい樣な氣がした。

お里さんは、僕が勞れて而も獨りぼツちになつて、重い足を引きずツてゐるのを見て、僕をたゞさめるつもりであつたらう――その柿の木をゆびさし『御覽なさい』と、僕の方へあと戻りして、『これが柿本の人麿が住んでゐたところよ』と云つた。柿の木のもとといふ思ひ付きから、『百人一首』の中の和歌をもつて來た洒落であつたのだ。然し僕は、僕よりもずツと姉分に當る人の言葉を洒落とは

取れなかつた。『百人一首』中には『由良の戸を渡る船人』云々の樣な、僕の生國に關した歌もあり、またそこに近い『須磨の關守』などもあつて、僕の百人一首的記憶が何となく僕の生國を中心として動いてゐる樣に思つてゐた際であるから、人麿は實際ここにゐたのかも知れないといふ疑念が起つた。僕が『本統でせうか』と聽いたら、お里さんはただから〳〵と笑つたばかりである。

その後、僕が住んでゐた町のはづれを流れてゐる洲本川の河口へ海魚を釣りに行つたことがある。河口には、砂よけの爲め、川の兩岸が低い石垣の堤防となつて、遠く海の中につき出てゐるのだが、その一方のはづれに出て、僕は一心に釣りを垂れ、ぽらや、ぼうぼうや、小鯛を釣つてゐた。すると、その前を一隻の漁船が通つた。して、その乘り手の一人が僕に惡口を吐いた。僕も渠に向つて言葉を返した。別に事件は起らなかつたが、相撲取りの樣に肥えてゐた渠は、その時、『おれは梅ケ谷ぢやぞ』と力んだのだ。それがまた僕のやわらかい頭腦に殘つて、かの天下の大力士は僕の生れた町の隣村にゐるのだらうかと疑つた。

かれもこれも半信半疑には相違なかつたらうが、子供の僕には深い印象を與へ、人麿も梅ケ谷も共に僕と生國を同じくしたかの樣な賴母しさで、僕はこの世に於ける子供としての存在を確めてゐたのだ。して、今でも、お里さんを思ひ出すたんびに、おほきた柿の木のもとと石垣の堤防の鼻とに僕は立つてゐるのだ。

一四　床屋の繼子

小學校の組織は、その最初、下等科、上等科に分れてゐた。それがまた初等科、中等科と改名された。僕等がその中等科に進んだ頃であつた、教科書の一つに、「十八史略」を假名まじり文に直した樣な「漢史一斑」といふのを讀ませられた。今から見れば、小學程度にはなか／＼六ケし過ぎる教科書だが、僕等はその頃既に漢學を學校以外で習つてゐたから、學校でをそはることがさう苦しくはなかつた。

して、僕等の間に、芝居好きが數名ゐたので、おぼえた漢史を種に、一つ芝居をやつて見ようといふことになつた。僕も其仲間に引き出されたが、元來役者の眞似などをするのは好まないので、作者がはに立つた。して、僕の選んだのは趙の藺相如の事跡だ。「惠文王嘗て楚の和氏が璧を得たり。秦の昭王、請ふて、十五城を以て之を易んとす。與へざるを欲す。秦の强を畏る。與ふるを欲す、欺かるるを恐る」といふデレムマに處する相如が主人公だ。

學校が終へてから、僕等は近いおほ濱へ出た。高いところがいいといふので、松原に添つた浪よけ土手の上を舞臺にした。平穩な茅渟の海が對岸の大阪までも晴れて見えるかと思はれるほどの日であつた。實際の太い松の樹々を書き割と見做し、それ／＼定つた役割を以つて幕が明いた。が、相如に

扮した役者は初めから眉を怒らして出で來り、趙王に向ひ『相如願はくは璧を奉じて往かん。城入らざれば、則ち臣請ふ、璧を完うして歸らん』と云ふまではまだしもよかつたが、『秦王、城を償ふに意なき』を見るや、相如はいきなり璧を秦王から奪ひ、左手を以つてそれを肩にいだき、右手を空につき出して、おほきく口をむいたかと思ふと、『怒髮冠りを指す』といふ地の文句を叫んだ。

人々は皆笑ひ崩れた。して、芝居はそれで中止となつた。然し相如その人は間が拔けたままに眞面目くさつてゐた。渠は福太郎と云つて床屋の息子で、馬鹿だと云はれてゐた。然し、馬鹿にしては、餘り賢過ぎるほど惡智慧にたけてゐて、同窓に對しても思ひ切つたいたづらをするし、本當の父や繼母の目をかすめては、理髮代を盜み出し、それを以つて買ひ喰ひをする。何かうまい物を喰つてゐる時、友人がそのそばへ行くと、

『一つやらうか』と云つて、分けてやる眞似をするが、手を出すと、直ぐ自分の口へ入れてしまひ、『貴樣はいやしい奴ぢや、なア』と、丸で閻魔か、何かの樣な顏つきになる。或る時などは、道に貝を置いて友人をそこにおびき寄せ、非常な怪我をさしたことがある。

近處では、繼子いじめの家だと云つて、非常に評判の惡い床屋であつたから、福太郎にいろんな入れ智慧をしてやるものが多いので、渠もなかなか繼母やおやぢの云ふことを聽かない。いたづらは、ますますつのるばかりだ。從つて、父母から受ける生撲がその顏や手足に絶えたことがない。學校も

不勉強なので、退校を命じられたが、親どもはそれを少しも苦にはしなかつた。渠その人も餘り同情さるべき性質を持つてゐなかつたが、渠の親どもがまた非常な惡人等としか見えなかつた。

渠の父、乃ち、床屋の主人は、理髮をして貰ひに來た客と喧嘩をして、持つてゐた髮刳りで客の頬ツぺたを切り落したことがある。額の眞ン中が低い鼻筋から眞ツ堅にしやくんだ、三角顏の、厭なおやぢであつた。その妻、乃ち、福太郎の繼母は、また、ひどいあばたツ面の、而もおほきな顏の、憎々しい物云ひをする女だ。その女が或日福太郎の眉間を下駄でなぐりつけた。して、そこが下駄の齒形に膿を持つ樣になつたが、渠の父は醫者にも見せてやらなかつたうち、福太郎の顏は段々青ざめて行き、つひにこの世を去つてしまつた。

それが警察の取り調べ問題となつたが、その結果はどうであつたか僕はおぼえてゐない。また、福太郎の親どものすがたも段々僕には印象が薄らいで行つた。然し、福太郎が藺相如に扮して、僕の脚本を失敗に終はらせた時、おだやかな海の光に映ずる松原の土堤の上で、渠がきよとんとして、僕等の笑ひ崩れたのを見てゐた樣子は、今でも僕の目の前に見えてゐるのである。

一五　發明家の妻

或夏の二ケ月を、子供の時だ、父の出張先なる岩屋浦に送つた。

水泳は自慢の方であつたから、浦へ行くが早いか、潮筋の速やかな明石海峽の一方へ飛び込んだ、この海峽には、二つの不思議（と云へば云へる）がある。一つは、海峽を横切つて、明石から岩屋へケーブルがかかつてゐる。その周圍では漁を許さないので、魚はそれを自然に知つてゐるのだらう、澤山寄つてたかつて來て、自由自在に遊んでゐることだ。今一つは、滿干の時刻を交換して、明石がはと岩屋がはとは、潮流の方向が相反することだ。前者で西に向ふ時は、後者で東へ流れ、前者で東へ流れる時は、後者で西に向ふのだ。この工合を知らない船頭があつて、相反する潮流の間にはさまつてまごつきでもしてゐるうち、若し暴風でもあらば、その船は容易に轉覆してしまふ。

僕にさう云ふ危險な場所へ、知らずして、飛び込んだのだ。流れは聞けば非常に強かつた。さいはひ、別に生命には關係なかつたが、晝飯を喰つた直ぐであつたからでもあらう、くら／＼目まひがして來て、氣が遠くなりかけた。二十分ばかりで海岸へあがると、僕のからだ中がゆで蛸の樣に赤くなつて、皮膚一面にぶつ／＼したものが出來てゐるのを發見した。して、僕は水を離れた海馬の如く、身が重くつて、僅か二三丁の僕の家まで、身づから運んで行く氣力がなかつた。そこへ、みさをさんと云ふ婦人が來て、僕を助けてその家へつれて行つた。

みさをさんと僕が云へば、まだ若い十代の人らしく聽えるだらうが、その時、もう、三十を一つか二つは越してゐたのだ。然しそんな田舍には珍らしいほど、脊がすらりとしたおも長の美人で、性質

がのん氣なだけ、二三歳の子が獨りあつても、丸で娘の樣であつた。叔母さんなど呼ぶよりも、浦人の呼び稱はしたみさをさんを以つてする方が、寧ろ適してゐた。僕等のおほ屋の持主であつて、別に一戸をかまへてゐた。その亭主といふのは殆ど年中大阪に行つてゐて、たまに歸ることがあつたとしても、何一つみやげを持つて來るでもなく、歸れば必らずお家の時計を子供がする通りおもちやにして、直ぐ毀してしまふに定つてゐたのだ。

亭主は何年來となく自動機の發明を思ひ付いてゐたのだ。妻子のことなどは殆ど全く念頭に浮べなかつた。多少見込みがつくと、直ぐ大阪へ飛び出して資本家を見付けに奔走した。みさをさんはまた似たもの夫婦と云はれるほどあつて、それを苦にもせず、また別な時計を用意して置くと、亭主は歸つて來て、それをおきまり通り毀してしまうのであつた。里からはあんな男と一緒になつてゐるには及ばないから別れてしまへと度々云はれても、かの女はいつも馬耳東風に聽き流してゐた。なか／＼愛嬌もので、僕もみさをさんの優しい口から「坊さん、坊さん」と呼ばれるのが嬉しかつた。

その人の家、その人の手で、僕は僕の海水に浸つたからだを介抱されてから、急に親しみをおぼえる樣になつたので、それまではたま／＼遊びに行つたのが、日に一度は行く樣になり、次ぎにまた二度も三度も行く樣になつた。とう／＼、會ひたくなるたんびに出かけて行つた。かの女が厭な顏をしないのをいいしほにして、夜も、もう、お歸りと云ふまでは遊んだ。さうしてゐるうちに、僕のおさ

ない心にも烏渡怪しい、な、と思はれたのは、定さんといふ遊び人同樣な、浦の口きき先生が來ることだ。僕と殆ど同じ位しげ〳〵やつて來た。僕はそれが少しねたましくなつた。僕が、或晚幻燈の眞似をすると云つて、多くの子供を集め、その家の廣間の唐紙をはづし、そこへ幕を張り、うしろにランプを置いて、いろんな形を寫して見せてゐると、定さんが樂屋へ割り込んで來て、

『さア、これは何ぢや』と、尻をまくつて、ぶらんと垂れた物を寫した。見物の子供等が一齊に笑ふ間に、

『馬鹿をおしでない』といふみさをさんの聲が聽えた。

その翌晚のことであつた。晚飯をすましてから、僕はみさをさんのもとへ遊びに行き、大分おそくまで話し込んでゐると、次ぎの間に寢かした子が泣き出したので、かの女はその方へ行つてしまつた。その跡に僕は狸寢入りをきめ込んでゐた。然しかの女は起しもしなかつた。やがてそこへ人が這入つて來た。目を明いて見ることは出來ないので、聲を聽いて初めて定さんと分つた。璽が、

『この坊主はどうしたんぢや』と云ふと、みさをさんが、

『先刻から眠つてをられるので、そうツとしてあります』と答へた。

『起して歸してやればいいぢやないか？』

『それは可愛さうぢや、わ。』

僕はこの對話を聽いて、この家が厭になつた。やうやく目がさめた樣な風をして起きあがり、ふたりに挨拶してそこを出た。

その後、みさをさんはどうしたか、發明家は成功したか、そんなことは風のたよりにも聽かなかつた。只、明石と岩屋との兩岸には、矢張り、方向の相反した潮流が往來してゐるのは事實だ。

一六　天長節

天長節號に何か書くことを賴まれたが、さて、特別にそれに關する物と云はれては、急に浮んで來ない。然し、ふと、思ひ出したのは、僕の小學校時代の一事實だ。これは大抵、いつも、毎年の天長節といふときまつて思ひ出すことで、僕が國にゐた頃の兒童的頭腦によくよく沁み込んでゐるものと見える。

その事實と云ふものは、かうだ。小學校では、朝、嚴格な祝賀式があつて、――その當時はまだ教育勅語がなかつたから、さう云ふ物を捧讀しなかつたが、――陛下の御影を拜することは、現今と決して變りはなかつた。僕等を郡役所につれて行つて呉れる教師連は、その拜影式が濟むと、必らず料理屋へ繰り込んで祝賀の酒宴を開くのだが、酒興半ばを過ぎて、漢詩や短歌の巧拙を爭ふ餘地もなくなると、渠等身づからの音樂隊を組織して、市中を練り行くのだ。それが毎年のことであつた。横笛

を上手なものは横笛を吹き、鼓を得意なものは鼓を打ち、胡弓に巧みなものは胡弓を彈き、大つゞみ、小つゞみ、太鼓、胡弓、横笛、尺八などの合奏隊だ。蛇三線は這入つてゐたが、三味線は這入らなかつたと思ふ。樂隊としては、實に簡結明了な團隊だ。

それが臆面もなく、大膽に、紋付きの羽織り袴で、市中を練り行くのだが、醉つてゐるので、途中で出會ふ生徒にお辭儀をされても、却つて教師等の方から常談を云つたり、ちよツかいを出したりするのだから、堪らない。不斷は鹿爪らしいので、僕等が畏敬してゐるものらが、その日に限つて、御機嫌がよく、若くて助平ツたらしいのはます／＼助平ツたらしく、中年で分別盛りのも酒の遠慮なく、最も年上の嚴格な老人も亦にこにこ面。子供から見たとて、何とも手のつけようがなかつたのだ。

僕等はそれに對しても、先生だから、お辭儀をしなければならない、して、そのお辭儀が何だかつまらないことの樣に思はれた。然し、不斷おそろしいと思つてゐる先生が、その日に限り、愛嬌があるのだから、まだしも多少の愉快はあつた。

ところが、御影にお辭儀をしても、まだ國體的思想がよく分らなかつた僕の心には、何の變化もなかつたばかりではない、却つて僕は教師等が僕等に一種の遊戲を教へてゐる樣な氣がしてたらなかつた。（ことわつて置くが、僕がかう云ふのは、曾て第一高等學校で起つた不敬事件の意識的原因を賛成

してゐるのでも、辯解してゐるのでもない。)かういふ考への起つたのは、教師連のやり方が惡いのであつたといふわけは、僕等にそんなことをさせて解散を命じた跡で、また例の樂隊が始まるのだと思ふと、渠等の虚爪らしい擧動が如何にも滑稽に見えたからである。

僕は、その後、十四歳で耶蘇教を信じ、二十歳頃までは熱心な信者であつたから、御影に對するこの不敬な考へが隨分意識的に發展してゐたが、それから耶蘇教の信仰を廢して、自己獨得の思索に耽る樣になつたので、僕の意識からこの不敬的實行も亦全く消え失せてしまつた。之と同時に、また、かのもとの小學教師連中のやつた無邪氣な、愛嬌ある行爲が、思ひ出される每に、非常になつかしくなつた。

僞善と虚飾とに滿ちた現今の社會では、渠等教師連のやつた宴會的餘興の樣なことを以つて、僕の子供の時のひねこびた考へと同樣、拜影式にまでも關聯さして、不敬とか無分別とか攻擊するものもあるだらう。然し、あれだけ大膽に、また眞卒に、人間の性情を發揮さすところが、またとあらうか？あの大膽と眞卒とは、現今、どこの社會にあらう？先生だつても人間だ、男子だ。知り合ひの婦人もあれば、好きな女もあらう、その樂隊の進路は必らず好きた家、知り合ひの家の前を點づけられてゐた。

して、その家の前に來ると、野心のあるものは『君』とか、『おい、どうした』とか叫んで、聽えよが

しに仲間同志でからかふのだ。すると、その聲を聽きつけて、そこの娘か、後家さんかが格子窓の上から首を出し、『あれどこそこの叔父さんだ』、『誰れそれ先生だ』と面白がる。先生連もそれが面白いのであつたのだ。

　あんな懷かしい思ひ出は、僕には、澤山無い。して、その教師仲間には、僕が人と仍つてから、一度會つたのもあるし、僅かに臨終の床で會ふことを得たのもあるし、また、再び會はずにしまつたのもあるうち、一人はその後出世して、内務省に入り、局長になり、ついに一たび大臣の椅子に坐わつたことがある。

僕を詩人にした女

　僕は九歲で人を戀した。

　そこで對手の女は幾歲かと言ふと、僕より八つも年上の十七だつた。姉の友人で、姉の處へ好く遊びに來る。何んでも僕を切りに可愛がつて呉れた。僕は九歲の時既に戀することが出來たのだから餘程ませて居たのさ。然しその時はこれが戀であらうなどと自分を批判する頭はない。唯無暗に懷しかつた。每日その女が來るのを小兒心に待つてゐる。一日でも來ないと内心甚だ寂寥を感ずる。來さへすれば他愛も無くうれしかつた。（この女のことは去年の太陽の一月號に載せた追想詩『らいうべ貝』

中に歌つてある。」そのうちに僕の忘れることの出來ぬ追想がひとつある、それは斯うだ。僕の家の庭に一本の桃の木がある。その桃の花が散る春の夕のことだ。例によつてその女がやつて來た。僕はその時どうした機みか急に堪へられなくなつた、突如その女の暖かい腰に縋り付いたものだ。女は鳥渡驚いた眼色をして僕の顔をみたが、小突くやうにして振放つて逃出した。すると僕はやるものかといふ調子でその女の後を追駈ける。女は面白半分にその桃の木の下を逃げ廻る。僕が夢中になつてぐるぐる桃の木を中心にして强拗く追ひ廻す。何だかその時の心地が今でも忘れることが出來ない。そのうちにその女は神戸の女學校へ行くことになつて、僕の家へ暇乞に來たことがあつた。僕は小兒ながらに大人の感ずるやうな失望をもしたのさ。それから、夏休みになつてその女が神戸から歸省した。その時は、最う僕に對する態度が憎い程冷淡になつて居る。もう以前のやうな感情を以て自分を取扱つてくれぬのだと思ふと如何にもさびしい。快(つまらな)く暑中休暇も過ぎて神戸へ歸るといふ時、又僕の家へ暇乞に來る。姉と一緒に僕は屋敷の外まで送り出した。旣うその女は、一種『女』の權威を備へて居て近寄り難い處があつた。僕はその後姿をつくづくと見送つて、あゝもう些し女が弱年であつたらと小さい胸の中で思ひ煩つたこともあつた。いやこれは實際の話だ。處でひとつ斯ういふ挿話がある。その頃僕は或る親類の家の結婚の席にお酌として頼まれたことがあつた。餘り人が多いので醉つて了つて心地が惡くなつた。客室に入つて横になつて居ると、以前から僕の家に出入して居る藝者が來て種々

と深切に看護してくれる。すると妙なもので、女に對する感情がその藝者に移る。その時藝者は何處か惡いところがあつたと見えて沃度ホルムの匂をさせて居た。僕は何だかその沃度の匂が懷かしくなつて藝者が行つてしまつた後も、薄く漂つて居るその名殘を嗅いたものだ。(これも「うらうら只」に歌つておく)

次に僕の十一歲の時に戀した女がある。初戀人が二人有るといふのは一寸妙に聞えるけれど、僕に猶且初戀人と思つて居るのだから詮方が無い。僕が十一歲の時、親類の者と遊びに行つた或る家に、僕と同年の女の子があつた。僕は直ちにその子を戀して了つたやうだつた。小學校では同級であつたが話も出來ない。いや話をする程の勇氣が無かつたのだ。道で行逢つてぽつと顏を赤くするといふ工合、そんな狀態が三年續いた。遂に二人が接近する機が來た。ふとしたことから二人は同じ人の處へ英語を學びに行くやうになつた。それから僕は女の家へ遊びに行く、女も遊びに來る。既う二人の戀は充分成熟しつつあつたのだ。僕が國を出て東京に行かうとした時、後日必然その女を呼寄せるといふことに約束して置いた。なに………年か、さう、その時は十四だつた。

東京がかはつて、大阪へ行つてからの僕は既うその女のことなどは忘れて了つた——といふよりは厭になつたのだ。僕は基督教信者になつたので、酒も廢す煙草も禁める。況して女に關係することなどは全然厭になつて音信不通さ。

それからずつと話が飛ぶ。

僕は遂に煩悶期に入つた。人生の情味といふものが自然に分つて來るに隨つて、その女のことを思ひ出す。畢竟情の復活だと思出すと居ても立つても居られなくなる。異性に戀しい懷しい夢を見る。每晩夢に語るといふ風になつて、懊惱煩悶のどん底にまで沈んで、散々に悔恨もし追憶もした。それ等の感情の表白が詩になつて來る。斯うなると戀人も一種の恩人さね。初戀の感化は此女に負ふ處が多い。

或時大阪へ行つた折（此時は既う東京へ來て居た）或る仕事をやつて居るといふので、その方面を探したが分らない。後でこれは聞いたことだが、其頃その女の父は、まだ生きて居て、箸の上げおろしに僕のことを話しては娘を慰めて居たさうだ。昔の僕の一言を信ずることの篤き、僕は實に痛恨の思に堪へんかつた。

それから又數年經つ。

大阪へ行つて又同方面を探すと、今度は果して探當てた。が、其時既う僕は結婚して居たので、女も嘸失望したことだらうと思ふ。無論女はまだ獨身で居た。別れて以來永い永い間のことと親父の死んだことなどを話す。腸の千斷れるやうなことばかりさ。僕はもう妻があるので詮方が無いから、僕の知人に周旋して結婚させやうとしたがその女は頑として肯ぜなかつた。その女の顏の印象を話せつて………然う、その女は無論美人だつた、なかなか表情などは美しかつたが、邂逅したその時は見違へる程

變つて居た。何でも瘍を病んで手術した爲めに、顴骨のあたりが刳つたやうに凹んで見える。僕はそれでもその女を忘れることが出來ない。イヤ益々その女の境遇が移れば移る程僕の憐惜の情は濃くなるばかりだ。現今はどうして居るといふのか。此頃は大阪で看護婦をして居る。今でもどうかしたい心持が有るかつて？ハツハツまアこの位にして置かう。

我は如何にして詩人となりしか

どうして詩人になつたかといふ理由はなからうと思ふ、自分の精神が自然にさう向いて行つたのだ。

僕の家は五六代は江戸ツ子で通つて來たが、維新の際、國引けになつて蜂須賀の藩であるから、父は淡路へやられた。また間もなく東京へ轉籍したが、その間に僕は生れて、小學校時代はそこで教育を受けた。江戸ツ子を話すのは、一級中で僕ばかりであつたので、遊び仲間が出來ない上に、穢多（同國の穢多がネツカラネといふので）同樣にあしらはれて居たから、自分の屋敷を出ると、水や砂をあびせ懸けられたり、まるで四面楚歌の聲で、僕の孤獨な、陰鬱な反動性はその時から出來たのであらう。『十八史略』や『漢史一斑』で讀んだ項羽の最後が、沛公の帝業よりも一しほ僕の同情を引いたこの小項羽の親友は五六疋の犬で、ポス、ベーヤ、アカなど云つて、それを連れて海へ行つたり、山

へ登つたり、若し孤獨でなかつたと云へれば、それが爲めであつた。故鄕といふ人の懷かしむもの
が、僕には、戀の追想以外には、却つて恨みの種である。

僕の九歲の時、姉の友達で、僕にずツと上の女があつた。それが屋敷以外から來て僕によく親しん
で呉れるので、想像上の天女であるかの樣にあり難かつた。僕はそれに抱きつかうとして、桃の木の
根をぐる／＼追つかけたことがある。それが神戶の或女學校へ行つて、翌年島渡歸つて來た時、僕の
嬉しさは堪へられない位であつたが、向ふは今いふハイカラ女學生になつて居つたので、その澄まし
た風情が憎くもあつたし、また悲しくもなつた。僕の稚い初戀はかういふ風に出來て、かういふ風に
破れてしまつたのだ。今年一月の太陽に出した詩篇『うらうづ貝』は、その時の追憶である。

それから、また、小學校で見初めて、三年間程僕の胸でばかり戀ひ慕つて居た女があつた。途中で
出逢つては、われ知らず顏を赤め、その人の門前を橫切つては、おのづから胸がときめいたり、それ
が非常な悲しみでもあり、また樂みでもあつた。三年後、同じ研究會で英語を學ぶ樣になつてから、
人にかれこれ云はれる程親しくなつた。僕の一家が東京に歸りさうになつたので、行つたら必らず跡
から呼ぶときまで約束したのだが、事情の爲め當分僕ばかりが大阪に出た。そこで耶蘇教に改宗し、全
に一時は眞面目くさつてしまつたので、女といふ女をふり向いて見るのも厭な程の變人となり、その
女の家とも消息は絶えてしまつた。尤もその父なる人が、右の目が見えないところから、實際蜂須賀

で見えて來た。美人の姿もあつた、仇敵の面影もあつた、ビスマークの顏や伊藤侯爵の首もあつた。さういふ物が續々鴨居のあたりを行列して通るのであつた。この習慣は今でも續いて居て、時々時中に書籍がはツきり見えることがある。僕はもう氣ちがひにならうと云つて、わざ〳〵先輩から忠告して呉れたことがあつた。何度も自殺をしようと思つて、その最後のきはまで行つた位だから、從つて身體も瘦せこけて、狀貌は目つきにまでも現はれて居たらしい。或時は、宮城野の眞中に行き倒れて、半日ばかりもぐツすり眠つたこともあるし、また暴風の夜に、わざ〳〵山の奥へ行き、荒れ寺の佛に座わつて、一夜を明したこともある。そんなことをしなければ、研究だけでは心が滿足出來なかつたのだ。或婦人などは、いろんな女の亡念が取りついたのだと云つた程だ。當時のことは、『半獸主義』の附錄のうちにある『追懷』にも云つて置いた。

僕がこんな人間にならうとは、友人も知らなかつたと云つたが、こんなになつて來たのが、詩人の端くれになつたわけである。僕も初めは、透谷の行き方と同じ樣に、政治界に雄飛したい考へ――僕の生國は自由黨の盛んな所だから、その影響――であつたのが、耶蘇教に這入つた時、ルーテルやウエスレイの生涯に感じて、宗教家にならうと決心した。それが東京へ來て、耶蘇教の淺薄なるを知つてから――佛教は跡から研究したが、宗教へ導くよりも、寧ろ哲學的方面に僕の頭を向けた――また元の考へになり、當時經濟學が學界の呼び物であつたので、專修學校へ這入つて――僕は初めから官學

を讀つて居た——又づ共和制を二年やつた、と云ふが、現代社會に[illegible]といふグレシャムの法則を知つてから、人民政府も之えたものだ。どうせ、社會に起るものは總て自我ではない、自由意志若しくは利己的理由から起つくのであつて、完全無缺な黃金時代は、物質上にしろ、精神上にしろ、夢であるに過ぎない、社會と人間とを救ふたといふ考へは頭から偽な話で、よしんば一時は救へたにしろ、直ぐまた自偽善になつてしまう。古來、宗教家や政治家の企畫は、砂の上に砂の家を建てようとする徒戲である。いツそ高踏して、自分自身の發展をするがいい、とたゞそれ以外の考へを有つのは、一時を胡麻化す偽善者、虛榮家の手段に過ぎないと信じた。それには、文學をやるより外の道はなかつたのである。今でも、世人に分らすといふことは、僕には第二、第三の問題で、自分が之をやつて居ないと、宗教信者に神の惠みがないのと同樣、精神上の實に缺乏を來たすのであるから、世間の人が文學を玩弄視しないまでも、社會發展の一方便と見傚して居るのとは、對した相違がある。國家や社會の發展は、自己發展の自然的結果に過ぎないから、僕が一詩を心よく歌へた瞬間は、千萬年の惰力的存在よりも、更らに〱偉大である筈だ。之を暗愚頑冥の傾向がある人々に分らないと云はれても、何等の痛痒をも感じないのである。から云ふ考へがその當時から僕の胸に起つて來たのだ。

專修學校に這入る前に、一年ばかり明治學院に居た。この時代に、島崎藤村君もここに居たのだ。僕が東京に出た當時で、その時、初めて文學的雄飛の志を起した、年は十六七であつた。殊に學校へ

も出す、白金の奥に引ツ込んで、ペルシヤ王サイラスに關する歷史小說を書いた。第一篇が出來たので、之が歡迎されると、直ぐ第二篇を出すといふ序文を添へ、挿畫の入れ場所まで指定して、友人には默つて、所々の本屋へ賣りに行つたが、最後に春陽堂で預つて吳れた。然し二三ヶ月經つても埒が明かないので、取り返して來て、燒いてしまつた。八犬傳にかぶれて居た時なので、それが全篇七五くづしで出來上つてゐた。これが僕の詩句をあやつる抑もであつた。僕の詩的事業はその發端に於て第一頓挫をしたのだ。この頓挫と同時に、親しかつた同窓が一人死んだので、その弔詩が七五調で數百行出來た。これが僕の新體詩の初めであるが、之も燒かれてしまつた。これまでの、また之から後の話は文章世界に送つてある原稿『僕の囘想』と、多少重複して居るところもあるので、預め斷つて置く。

僕の家筋に、江戶で多少名を知られて居た鳴門といふ書家があり、また祖父や父は俳句を作り、祖母は頻りに歌を作つて居たが、そんなことは僕には大した影響がなかつたらしい。ただ幼少の時、姉が愛讀するロマンチクな草艸紙『白縫物語』を記憶に疊んで居たのと、妹が常盤津や長唄や踊を師匠を呼んで習ふのを聽いて居たのとが、詩の口調をあやつる上に直接に爲めになつたらしい。また、大阪時代に教科書中で讀んだグレイの『エレジイ』（挽歌）や、テニソンの『ザメイクヰーン』（五月女王）並にその續二篇が、僕の詩情を動かすのに與つて力があつた。テニソンの句、

Now, tho' my lamp was lighted late, there's

One will let me in.

の如きは、之を讀んで、僕の樣な放縦なものも、何となく心細くなつて、耶蘇教に入る氣を起したのだし、またグレイの

Full many a gem of purest ray serene,
The dark unfathomed caves of ocean bear;
Full many a flower is born to blush unseen,
And waste its sweetness on the desert air.

の樣なクラシックな句に「大淵之玉、深山之花、有之有只誰也哉」など書きつけて、至るところで暗誦をした位で、僕の功名心は一時かういふ思想の爲めに和らげられて居たのである。僕は國の漢學塾で、假名交りの文章は書いても、漢文と漢詩とは作らないので、詩會のある時などは、同學者から除け者にされて居た。これは、僕に考へがあつて、詩文は國語で作らなければ、何の益にも立たないと思つて居たのだから、東京へ來て初めて「新體詩歌」を見て、而もそれに自分の讀んだことのあるグレイやテニソンの譯などが載つて居るので、てツきり僕の思つて居るのはこの形式だなと覺つた時も、大いに僕の心を奮發させたのである。

かういふ風に僕の詩情が迫つて來てから仙臺へ行つて、前に云ふ樣な苦悶をしたが、その間にも、

カントの『クリチツクオヴピユアリーズン』(純理性批判)や、有賀氏譯の『近世哲學』や、プラトーンの『ダイアログ』の斷篇を讀むと、理性の方が頭を上げて來て、いツそ哲學者の生涯を送つて見たい氣にもなるし、また餘りに心細い時など、恩師の話を聽いては、矢張り宗教家になつて、人を救ふのではないが、自分の悲痛の一部なりとも、之を世人と分けて見たい心も起つた。その後も度々こんな誘惑と戰つたが、幸にして每度それに勝つて來た。然し、僕には理性と情緒とが融和しない傾向があつて、(これは或骨相家が僕の頭を見て斷定したのに當つて居る)詩の上にも、やう〳〵近頃この兩者を一團にする立ち場が發見されたのである。

明治學院時代に、シエキスピヤで四錢の薄ツぺらな菊版位の冊子を、或洋書店で發見したので、それを買つて來ると、細字のハムレツトであつた。間もなく同活字の全集を買つたら、ルートレツヂ版であつた。)これが動機となつて、本來好きな芝居を書いて見たいといふ氣も起つた。仙臺へ行つてからも、エマソン全集が僕の聖書の樣なもので——尤もミルトンの『失樂園』などは當時數十回讀み返したが——ギリシヤ語をホーマー專門の文典で初めて、『イリアツド』を研究し、萬葉集やその他の歌集——そのうち、僕は西行の歌集が好きであつた——を讀み、また詩經などを調べたのは、すべて詩作の用意をするつもりであつたのだが、之と同時にゲーテの『フアウスト』を原書でかじり出し、シエキスピアの『ハムレツト』を精讀したのが、『魂迷月中刄』といふ悲劇を構成するやうになつた。こ

れは、東京へ歸つてから出版になつたが、僕が編輯の第二卷であつたことは、文界食氏の手で許しと云つて置いた。自費で出版した詩は、棄ててしまつたのもあるが、その多くは僕の第一詩集「つゆじも」に載つて居る。

再び上京してから、創作上、劇界に關係をつけようと思つて、いろ／＼な方法を講じてあげく、田邊龍舟先生の紹介で當時歌舞伎新報に這入つた。この時の事も文章世界で云つてある。二年ばかり居たが、自分の活動すべき場所でないので、退社して、詩に專らにならうと決心した。この間に、メソヂスト諸派共通の讃美歌を改正增補することで、僕は信者ではないが、内證でその助けをした。僕が訂正または新譯（自作にわざとやらなかつた）をして、一外人が一篇毎に歌へるか歌へないかと調べたのだ。これが一昨年まで使はれて居た「基督教聖歌集」四百三十三篇である。この關係からしてだらう、また、ずツと跡にたつて、末日教徒の新歌集をも翻譯した。かういふことは大分僕に詩句の諧調子を確める智識を與へたのである。

僕がもと自分の詩を發表したのは、女學雜誌、舊早稻田文學、國民之友などであつて――民友社から新體詩で原稿料を取つたのは、恐らく僕だけだらうとは、後になつてから、國木田獨歩君の言であつた。少し後れて、また天地人と學窓餘談とに出して居た。かういふ時のは、大抵「つゆじも」に集めてあるが、あまりクラシカルで、くすみ過ぎて、理性的結縛を脱して居ない。尤も失戀の極、戀を

歌はないと決心した時代もあつた位だ。それが『夕潮』となり、『悲戀悲歌』となるに從つて、ロマンチクな傾向が盛んになつて來たので、感情の幽靈が出來て、われながら理性的または自然的根據が薄くなつたのに驚いた。研究の方面から云へば、ホメーロスやミルトンは早くから厭になつたが、ヲーヅヲルスやバイロンやテニソンやも一時期を劃し去し、ロセチの樣な新ロマンチク主義もまだ薄弱なところがあると思はれるし、メタリンクの表象主義も思想が枯れかかつて居る傾きが見えるし、僕が詩人として今日の落ちつき場所を外國の詩人に譬へれば、先づ佛蘭西のヱルレインの主義だが、その思想からいつまでも二元的または唯心的傾向を出さないで――これはいづれも表象派の落入り易い穴だ――わが國古代の神々、乃ち、僕等の太古祖先の生活の樣に、感情と自然と理性とが全く融和流合して、最も夢想的と同時に最も自然的な、確乎たる根據のある表象主義で行きたいのである。ロマンチク主義では、思想までが燃えるところへ行けない。深い心理的詩歌――この點は僕は早稻田文學で發表する自然的表象主義論で見て貰ひたい。

　かういふ風に僕は詩人としての努力をして來たつもりだが、自然にかう向いて來たのだから、實際詩人になつて居るのか、なりつつあるのか、また成れずに濟むのか、自分ながら分らないのである。ただ宗教的方向を取るのは、今日となつて見れば、墮落の骨頂、暗愚の極だと思つて居る。その上、イプセンなどを讀むとうらやましくもあるから、更らに進んで劇を作るつもりだし、論文も氣に向い

た時には作る。僕自身は長い小説を作るかも知れない。まア、僕等はさうやつても書いて置きさへすれば、その日その日が濟むので、[illegible]から見れば[illegible]、自分から云へば、自分の心持を[illegible]で解たい欲望――僕の[illegible]手段[illegible]作者をやつて居るつもりである。（明治四十年三月）

『白百合』時代

（上）

『白百合』時代のことを少し話して見ようか、――白百合とは與謝野氏の『明星』に對抗して、稍もすると一歩進んだ傾向を以て發刊されるに至つた詩歌雜誌のなである。

丁度僕が地方の中學教師をやめて再び東京に歸り、今度は本式に文學に携はらうと決心した時であつた。その初めは暫らく僕も明星に詩を發表したが、元來僕は他の人々とは別箇にもう六九年前から作を出してゐたのだから、今回は一つ自分の發表機關を自分で持ちたいと考へてゐた。そこへまた丁度前田林外氏と相馬御風氏とが與謝野氏に對する感情の行違ひから袂を分かることになつた。そして或夜、この二名が僕の宅（この時上野公園わきにゐた）へ訪ねて來て、一緒に新しい雜誌を出さう、平木白星氏も贊成だと云ふことであつた。が、平木氏だけは明星派の方から茶々を入れられて一緒にはならなかつた（尤も寄稿者にはなつてゐたが。）

で、この三名と今一人村田と云ふ人（これも與謝野氏に說かれて四號までで退社した）が同額の金（初めは十圓宛、後には五圓宛）を出し合つて、あの紙質のいい四六二倍のコロタイプ繪入の文學美術雜誌と稱する物を明治三十六年十一月から發刊してゐた。社を純文社と稱した。前田氏は僕よりも小十年歲うへで、僕はまた相馬氏とそれほど違つてゐたが、孰れも意氣込みに於いては劣り優りはなかつた。

編輯者三人ともロマンチクな長詩を主としてゐたが、分擔としては前田氏が會計、僕は評論をやり。相馬氏は短詩の選をした。ところで、讀者は實際に於いて短詩を作らうとするものに多かつたので、實際の勢力は恐らく最も年の若い相馬氏に在つたらうと思はれる。

（中）

この白百合が世間から可なりの注意を引いて、（多い時には二千部以上を刷つた）わが國の文學史には忘れてならぬ功果と功蹟とを殘したのは、新らしくロマンチク具想を鼓吹したからである。僕の夢幻史詩「鳴門姬」などにそのずつと以前からの計劃を實現したので少し若い形であつたから、中途からいやになつて連載をやめたが、それでも全計劃の三分の一で凡そ三千行を發表した。若いながらも矢張りロマンチク思想が動いてゐた。それから僕の詩集『夕潮』と『悲戀悲歌』に收めたものに至つてにもう、恐らく嶄新のロマンチク思想であつた。

ああ、日は荒布の黒みを帯びて、
　月また血のごと赤み來たり、
あめなる星々その軸もろく、
　譬へば無花果、地にぞ落つる。
蒼天は卷き物おのづと卷きて
　山々島々うつり行きぬ。

こんな世界を僕は歌つてゐた。前田氏にはまた思想と云ふよりもその文句がプラスチツク（彫塑的）なのを特色とした。そして相馬氏を除いては詩形はすべてあまい七五調を墨守してゐた。白百合時代の作物は僕の前述二詩集の外に前田氏の「夏花少女」並に相馬氏の「御風詩集」だ。

編輯主任は毎月まわり持ちであつたが、相馬氏の番の時に餘り校正が僕の詩に粗漏であつたと云ふ故を以て僕は渠に社へあす何時に出て來い、一つ撲りつけてやるからとハガキを出したこともあるのを覺えてる。これは前田氏が仲へ這入つて納まつた。或時に、相馬氏に僕が短歌は思想の發展をいけさせるから早くやめてしまひ給へと忠告すると、今少しやつてゐたい、これで自分の文壇に出る地盤を固める方が早いからと答へた。實を云ふと、婦人讀者などの訪問を時々受ける餘得（？）があつたのは短歌選者なる相馬氏ばかりで、中には渠の可なり熱心になつた女もあるが、一度渠は女名前の短

歌投稿者に失敗した例もある。餘り上手な歌を寄せるので、渠は私かに手紙で推賞して呼び寄せた。すると、その手紙を證據に尋ねて來た本人は男子の山本露滴氏（一昨年死去の人）であつた。落合氏の一門下として短歌の才人であることは以前から直接にも逢つて知つてたので、相馬氏にちよつと面目を失したわけだ。露滴はよくこんないたづらをする男であつた。

（下）

雜誌は何でも前後參卷まで續いたが、僕は三十八年六月、乃ち、第二卷第八號までで手を切つた。その頃、木版屋や印刷屋へ行つて耳にしたところでは、『白百合』は君等二名を編輯者として儲つてあるのだらうだね、君等が金を出し合つてると云ふのはりそだらうと云ふのだ。僕は是で退社と決心した。社は尤も神田の前田氏の宅に置いてあつたが、金錢と勞力とを平等に出し合つてたのは事實であつた。相馬氏から長い手紙が僕に來て、僕の怒るのも尤もだが、今暫らく辛抱して退社を思ひとまつて呉れろ、氏が早稻田を卒業すれば早稻田文學社にも這入れるからそれまで一緒にこの雜誌を維持して呉れと云ふのであつた。氏の願ひには邪氣がないと認めたけれども、僕には僕の考へがあつて思ひとまることができなかつた。それに、その頃は、もう、詩人として一雜誌を經營してゐる必要もなくなつてゐた。僕等の努力と開拓との結果、詩稿はどこへ持つて行つても歡迎されたし、またわざわざ長い詩を依賴して來る雜誌もあつた。

(一)現時の青年に助くべき長所──(二)現時の青年に改むべき短所及其の救濟──(三)青年の修養に關する理論上の教訓──(四)青年の修養に指導たるべき書籍──(五)學生時代の經歷逸話──

(一)

現代の青年に助くべき長所ありとすれば、第一にその精神的根據の動搖である。以前の青年なら、どれか自分の望む學問さへして居ればよかつたので、よし主義といふ樣なものがあつても、生活問題とは別にして平氣で行くことが出來た。然し現代ではそんな不面目なことでは濟まされなくなつて來た。後で問題になるべき生活狀態を考へると、自分の立する主義と之に對する素養とがなければ到底その狀態に這入つて居ることが出來ないのが分る。時代がそれだけ多忙になつたと同時に、生存競爭が激しくなつたのである。ところが、古今東西の種々樣々な思想と實例とが這入つて來てまだ固まらない頭腦をかきまぜるので、自分の立ち場どころか、他人の立ち場さへも區別がつかなくなつてしまう。つまり精神の據り所に迷ふのだ。眞面目な胸中には、この迷ひが煩悶苦悶となつて、之が解決を得ないとしても內部的精神的野心となつて顯はれる傾きがある。昔の學生なら、大望はあつても、多くは外部的物質的な方であつたから、政治、法律、工業、商賣、いづれにしろ、その向ふところの違ふに從つて、人間その物も違つて行くかの樣な考へであつた。然し現代の青年は幸ひにも萬人共通の精神に向つて、自分等の主義を立てて行動し

ようとする様になつた。これは注意すべき點である。

（二）然しこれは彼等の缺點を指すと、彼等に譯けなくもたるのだ。その學生以外の社會には學者が足りない。修養が足りない。個人の目的または仕事の範圍に關して、分らないところがあるのはまだ恕してもいいが、自分等の專門に於ても、實際にその書その物に當らないで、ポケットハンドを以て澄まし込つて居る傾向が甚しい。これは世間が餘り便利になり過ぎたからで――昔は以前の様に努力しないでも、或る程度までの智識は樂に得られるからだ。早い話が、外國語を學ぶに字書がなかつた時のことまで云はないでも、自分等の學生時代には、一字一句に就て自分等がその意を發見して行つたものだ、今では、字書を引けばその熟語はちやんと出て來るし、お負けに學生向きの飜譯が澤山あるし、それでも分らないと、今度は自分等の本校でやつて居る教科書をそつくり教科書にして教へて居る。夜學校を探し出すことも出來る。何のことはない、赤ん坊の手を以つて教へて呉れる様な便利がある。目くらでも、つんぼでも、今日では物識りになれる。その代り、黒い物と白い物、鐘の聲と太鼓の音を頓珍漢に思ひ込んで居ることがないとも限らない。つまり上すべりがし易いのである。僕は福翁一派の様に知識ばかりの修養如何をよしとするのではない、萬事萬物に對して――否その中心たる一物――に對して、しつかり修養すべきを云ふのだ。無修養はやがて無見識不見識となり、之を自覺して尚努めない時は、却つて之を包み隱

さうとして不自然になる。こじれて、行き止つてしまう。この不自然と早熟、これが現代青年の最も改むべき缺點だ。

（三）

近年、成功と理想といふ言葉が一般に重んじられる樣になつた。然し、これで成功したと思ふのは、小成に安んずることであるから、その實、不成功に終つたものと見なければならない。また、理想が實行出來たものとすれば、その實、出來たものは理想といふべき程のものではなかつたのだ。理想とか、目的とか云へば、學生どもには結構なものの樣に思はれて居るが、渠等は現代手段を以つて目的と見爲してしまう弊がある。金錢、地位、名譽事業などは目的ではない、手段である。俗にお前の目的は何だとかいふのは、お前はどういふ手段を以つて人生を渡つて行くかといふ意味でなければならない。人生は飽くまでも人生で、ただその人の主義を眞面目に遂行するところに活現して居るのだ。云ひ換へれば、成功が成功を生み、理想が理想を産する樣に、飽くまでも中絶することなく、心身の勤勞を自分等の生命に結びつけて行けば、それでいいのだ。理想が因襲的、形式的に沈滯して來ると、宗教家の理想とか典型とかいふ物になつてしまつて、再びイブセンやストリンドベルヒに打撃されなければならなくなる。僕は名代の宗教嫌ひ、哲學嫌ひであつて、現代の宗教家や哲學者が得意の長廣舌を振つて居るのを見ると、また例の僞善的、架空的教訓かと惡感情を催さずには居られないのだが、それでもなほ、先づ哲學に入り、宗教を味ひ、それか

ら出でて初めて近代の文學的趣味を解するに至つたものでなければ、眞面目に人生に觸れて共に語るに足らないと思つて居る。近代自然主義の文學ほど、人生に接近して居るものはない。僕等はよろしくこの點に注意すべしだ。生存競爭の益々激烈になる現代に於ては眞實の求めの不徹底な敎義は段々存在を許されなくなつて來ると同時に、偶像と氣休めとを與へる宗教や哲學は益々不必要になつて來たのだ。自分等の生命を呼吸する眞面目、これが青年時代から忘れてはならないことだ。高僧の說教・博學の講話。自己に素養のない時は、直ぐ之を聞いて屈服してしまひ易いのが青年の常だが、音樂や演劇にさへ忘我を說かなくなつて來た新時代の青年は、我を忘れるのを欲しては卑怯である。よろしく我を悟り我を活かし、我を偉大にするのを努むべしだ。學問があれば學問のある我をそのまゝ大きくするがいい。煩悶煩惱や樂天主義を信じて、若隱居となつてしまはない樣に心がくべしだ。『われ』なるものは主義と共に呼吸して居るのである。

（四）

何事をやるにしろ、趣味と素養とがなければならない。それには、以上云つたことで分る通り、先づ哲學に通じ、宗教の經驗を有し、それから文學（重に自然主義の文學）を讀むがいい。短日月にとてもさうは甘く行くまいから、僕が云つたのを標準にして可成それに向ふ樣にしたらよからう。之を讀書の上で簡單に順序を立て見ると先づプラトーンの『對話篇』の分冊二三篇を讀みヘーゲル（カントは拔かしてもよし）の思想を窺ひエマソンの『代表的人物』に移り聖書（こ

れを見たことない青年はなからう）を讀み返し、マホメット教の聖典「コラン」を探りそれから佛教の經典「法華經」と『阿彌陀經』と「起信論」と分り易いために天台の「西谷名目」とを知るべし。この間にミルトンの『失樂園』またはダンテを見るもよし。それから鳥渡佛人モンテスキウの『法の精神』またはルーソーの「懺悔錄」を讀みそれから得た智識に導かれて、ヲルヅヲルスの自然詩がどこまで探るべきかを考へ、シエキスピヤと近松、西鶴とゾラを比較し、英詩ではポーとロセチ、佛詩ではヱルレインやマラルメに人の神經が如何に深く潜入り込めるものであるかを覺り、ニイチエの「ツアラツストラ」（トルストイの小說論文は無用）メタリンクの論文（劇の方はどちらでもよし）を味ひ、いつも「古事記」と『日本憲法』とを手放さず、之を見て自分等が日本國人であるのを忘れなければ、大抵その讀書家の人物の現代的意味が分らうと云ふもの。それからイブセン、ツルゲーネフ、ゴルキイ、ユイマンなどに當つて見給へ。わが國の小說では、田山花袋氏の作を初めとして、國木田獨步氏の舊作。小栗風葉氏の新作がいい。序に僕の「半獸主義」を讀むべしだ。すべてかういふものを讀んでも、娛樂の爲めにしたり、または之が主意の分らない青年があつたら、その青年は現代の時勢が分つて居ないのである。現代その物を攻擊するにしろ、賞讚するにしろ、それが分つて居ないでは、主義も見識もあつたものではない。世間は兎角目前に爲めになる書物をいいとする傾向がある。そんなことにに道案內、宿屋案內、料理案內、の

ら出でて初めて近代の文學的趣味を解するに至つたものでなければ、眞面目な人生に於て貴ぶに足るに足らないと思つて居る。近代自然主義の文學ほど、人生に密接して居るものはない。實際によろしくこの點に注意すべしだ。生存競爭の益々激烈になる現代に於ては舊時代の閑人小說讀者が段々存在を許されなくなつて來たと同時に、信仰と氣休めとを與ふる宗教や哲學は段々不必要になつて來たのだ。自分等の生命を呼吸する眞面目、これが若い青年時代から忘れてはならないことだ。高僧の說教、博學の講話。自己に素養のない時は、直ぐ之を聽いて感服してしまひ易いのが青年の常だが、音樂や演劇にさへ忘我を說かなくなつて來た新時代の青年は、我を忘れるのを恥しては卑恐である。よろしく我を悟り我を活かし、我を偉大にするのを努むべしだ。苦悶もあれば苦悶のある我をそのまま大きくするがいい。煩悶煩惱や樂天主義を信じて、若隱居となつてしまはない様に心がくべしだ。『われ』なるものは主義と共に呼吸して居るのである。

（四）

何事をやるにしろ、趣味と素養とがなければならない。それには、以上云つたことで分る通り、先づ哲學に通じ、宗教の經驗を有し、それから文學（重に自然主義の文學）を讀むがいい。短日月にとてもさうは甘く行くまいから、僕が云つたのを標準にして可成それに向ふ様にしたらよからう。之を讀書の上で簡單に順序を立て見ると先づプラトーンの『對話篇』の分冊二三篇を讀みヘーゲル（カントは拔かしてもよし）の思想を窺ひエマソンの『代表的人物』に移り和書（こ

れを見たことない青年はなからう）を讀み返し、マホメツト敎の聖典「コラン」を探りそれから佛敎の經典「法華經」と『阿彌陀經』と「起信論」と分り易いために天台の「四谷名目」とを知るべし。この間にミルトンの『失樂園』またはダンテを見るもよし。それから鳥渡佛人モンテスキウの『法の精神』またはルーソーの「懺悔錄」を讀みそれから得た智識に導かれて、ヲルヅヲルスの自然詩がどこまで採るべきかを考へ、シエキスピヤと近松、西鶴とゾラを比較し、英詩ではポーとロセチ、佛詩ではヱルレインやマラルメに人の神經が如何に深く這入り込めるものであるかを覺り、ニイチエの「ツアラツストラ」（トルストイの小說論文は無用）メタリンクの論文（劇の方はどちらでもよし）を味ひ、いつも「古事記」と『日本憲法』とを手放さず、之を見て自分等が日本國人であるのを忘れなければ、大抵その讀書家の人物の現代的意味が分らうと云ふもの。それからイブセン、ツルゲーネフ、ゴルキイ、ユイマンなどに當つて見給へ。わが國の小說では、田山花袋氏の作を初めとして、國木田獨歩氏の舊作。小栗風葉氏の新作がいい。序に僕の「半獸主義」を讀むべしだ。すべてかういふものを讀んでも、娛樂の爲めにしたり、またに之が寓意の分らない青年があつたら、その青年は現代の時勢が分つて居ないのである。現代その物を攻擊するにしろ、賞讚するにしろ、それが分つて居ないでは、主義も見識もあつたものではない。世間は兎角目前に爲めになる書物をいいとする傾向がある。そんなことには道案内、宿屋案內、料理案內、の

書が一等だ。僕は今これといふ全書は覺えて居ないから、ここに僕が青年に推奬したい一叢書を括弧に挿んで見よう。「すべて書物を讀むに、目前の爲めばかりに讀む間は、まだ、全然讀書の味を知らぬのである。」英語は普通學の一部になつてから、もう大分になるのに、まだ充分の智識を持つて居るものが少いのを見ても、萬事が淺薄な短見者流の意見と缺點とに囚はれて居るのは分らうではないか？現代の青年はもツと外國語の素養を深くすると同時に、それから得た智識で讀みこなすだけに、わが國民的精神の眞操を高大深遠にしたければ行けない。僕はメレヂコフスキーの「人物及び藝術家としてのトルストイ」を讀んで感心したのは、世界的問題を論ずるに、何んでも無理にも、自國露西亞の事物を以つて來た見識だ。露國は戰爭に負けても、まだ大きな人物もある、大きな意氣込みもある。青年はこの點を注意して、直ちに之をわが國民に當て嵌めて解決し出來るだけの用意があつて貰ひたいものだ。

（五）

僕もまだ青年仲間にあるつもりだが、青年といふのがもう學校に居る間の時代を意味するのだら、もう遠に通り過ぎて來たので僕の學生時代には、少くとも現代一般の青年よりは激しい精神的苦悶を經て來たのだ。僕にはその苦悶が今もつづいて居るのが生命になつて居る。利に敏い人はこれから煩悶慰癒法や樂天處世案などを書いて、根據の薄弱な青年の弱點に投ずるかも知れないが、僕は自分の體現する苦悶を取り去られるのは、却つて生命を奪はれるよりもつらい立ち場

に立つて居るのだ。然し、それだからツて泣き言は決して云はないのである。現代の青年は歸するところ意志が薄弱だ。僕が根氣の強くなつたのは、一つはいろんな六ケしい語學を勉強した經驗があるからで、ギリシヤ語やサンスクリツトの文典を道を歩くにもかかへて居て、名詞や動詞の變化を暗誦し、字引きと頸引きをして、一字拾ひに原文を研究したことがある。僕の十八九の時にエマソンを難讀したが、その時には朝から晩までかかつて、たツた五六行しか進行しないこともあつた。仙臺に居た頃は、夜三時間より以上は眠らなかつた。午前二時まで机に向つて居て、それから褥に就くと、五時には必らず目が覺める習慣になつて居た。冬など、井戸ばたの氷をたたき破つて顔を洗ふ、それから全身を濡れ手拭でこする、その氣持ちのいいことと云つたら、あつたかい錢湯に這入ると同じであつた、僕は度々女に成功したり、失敗したりしたことがあつたので、この時代は燃える情火を壓伏して居たから、わざ〳〵松島へ行き、全景を見おろす富山の大佛寺に數十日も籠つて、獨禪をやつたことがある、或秋の澄み渡つた夕空に、寺僧があれは富士山だと敎へたものを見た。實際あんなところから富士が見えるのか、どうか、今でも疑問として居るが、年々一二三度は見えると說明されたことがある。旅行が好きであつたので、休みになると諸方をまはつたが、磐城の山中で大雪に道を失つたことや、藏王山――刈田嶽――の絕頂で濃霧に遇つて困つたことや、新潟の友人留守宅をたづねて、かたりと思ひ違へられたことがある。吾妻

から許して呉れ。實は、君が夜中に起きて僕を殺すつもりだらうと思つたので、ナイフを開いて机に向つたまゝ、一睡も出來なかつたのだ」と云つた。僕の學生時代の經歷逸話等に就ては、云ひたくもあり云ひたくもないことが澤山あるが、方圖がないから、まアこれ位に止めて置かう。（明治四十年）

雜誌は大抵電車で讀む

誰でもさうか知れないが、僕は始終何か頭で考へて居る。で時々全く頭を空しくしたいといふ氣がする。そんな時には玉突に行つたり、碁を打つたりすると、その心持になる。道を歩いて居ても、いつも何か考へて居る。若し何も考へずに居られれば、それだけ氣が安まる筈だが、どうもさうは行かない。

此頃でも時々あることだが、十年程以前には度々あつた。それは時々考へながら差して行く所へ到着する、さうして友人なら友人の家に案內を請ふ。家の人が出て來る、どなたですと言はれる、その時つい自分の名を忘れて言へないことがある。自分の名を言へても訪ねる方の名前を忘れたりすることがある。又僕は隨分早く歩く。足の早い方にかけては人に負けない。仙臺に居た時などは、道を歩いて居て、一丁程も先を歩いて居る學生に直ぐ追つき、間もなくまた一丁も先きになつて仕舞ふとい

ふ風であつた。僕のせつかちで、早足といふことは評判だつた。で、東京へ歸つて、[illegible]を編輯して居た時代だが、編輯と言つても喰原稿を整理するばかりでなくて、會計もやつたし、交際もやつたし、時にはまた劇本もやり、或は探訪にも出て行かなければならぬ。ある時、新富座の茶屋へ、新狂言の役割を聞きに行つた。ところが僕は亂暴に早く歩いて行くから——其處に行つたのは初めてだつたが——ガラ〳〵ドシヤンと門口の戸を開けて、閉めて、そして御免と言つた。さうしたところが、主人が出て來て、意外にもへい〳〵と頭を下げてお辭儀をする。そして、尋ねたことには丁寧に答へて吳れた。然し歸り道で考へて見ると、どうもその時の樣子がをかしい。餘り丁寧過ぎた。さういふ人に似合はず丁寧過ぎた。と思つて居ると、翌る日、社の俥夫が、その茶屋の主人に逢つたら、此度社へ來た人は非常に威張る人だ、まるで巡査が戸籍調べにでも來たやうな調子だ、あれでは世の中は渡つて行けないと、から言つた。それで僕も世の中に慣れない時であつたから、氣が付いた、も少し落ち付かなければならないと。何も威張つた譯ではない。せつかちと不注意であつたんだ。それから僕も多少愼しむやうになつた。つまり歩き方が早いから、心臟の鼓動が劇しくなる。そして落ち付かなくなる。

ある時風邪をひいて、醫者のところへ行つて診て貰つた。ところが醫者は僕の脈を見て、急に眞面目になつちやつた。どうしたかときくと、心臟の鼓動が死に瀕して居る人の鼓動だといふ。それで僕は

說明して、僕にはそれは不思議ぢやない、歩くといつもそんなんだ、少し落ち付いてりや直ると僕が言つて聽かせた。

そんな工合であるから。歩く時に考へて居ると、一つのことばかりに考が向いて仕舞ふ。子供の時なんぞには、おやぢの酒を買ひに行つて、酒屋の前を通り越しちやつて、自分の考へて居る方へ行つてから氣が付き、後戾りしたことも度々ある。で、年を經るに隨つて、僕も注意して、歩く時は玉を突いたり、碁を打つたりする時と同じやうに、氣を安めるつもりで、歩くことを考へるばかりにしてその外のことを考へず、つまりぼんやりして歩くやうに努めて居る。で、歩いて居る時には動いて居るから、別な務はしなくても多少氣が散らずに居る。然し俥に乘つたり、電車に乘つたりすると、自分の體は動いて居ないから、いろんな考が混亂して來る。時とすると、一人で笑つて見たり、變な顏をして見たりして居るので、傍から見たらをかしからうと思はれる。だから僕は、ずつと以前から、車中で何か讀むことにして居る。讀むと言つても、込み入つたものは讀んで居られんから、重に新聞や雜誌を讀む。然し新聞は大抵朝飯を食つてから讀むし、殘りがあれば僕は便所で讀む。だから大抵餘程寢坊した時か、又は急な用があつて朝出て行く時でなければ、電車の中では讀まない。で、重に雜誌だ。雜誌は每月のものは大抵電車に乘つてゐる間を利用して讀んで仕舞ふ。

ところが、ある時、電車の中で雜誌を讀んで居ると、何か胸に當つて——つまり胸を抑へられたやう

た氣がして胸苦しい氣持になつたのを氣が付くと、掏摸が手を僕のポケツトに差し込んで居た。その掏摸の顔が非常に背徳的で、眼を引き吊つて、血の氣が上つて居たのだ。つまり僕は、掏摸が人の物を盗む、即ち非事をする瞬間の心理狀態を實見したんだ。然しそれは一瞬間の間のことで、僕は直ぐこの掏摸の手を振りつけた。すると掏摸は次の停留場へ着くや否や飛下りて往つて仕舞つた。その時は時計を取られかけた。僕は今では洋服は着ないが、その時は洋服を着て居た。そして學校へ教へに行つた歸りであつた。ところで僕は、教場では時計を鎖から離して教壇の上に置き、時間を見ながら教へる習慣であつた。で、その時は、時計を鎖につけないで、ポケツトに入れたまゝ歸つて行く途中であつた。だから掏摸は鎖を辿つて時計を引き出さうとした所、引き出して見ると時計は付いて居ない。それで特に手を入れて取らうとしたところであつたんだ。そこを僕が氣が付いた。そんな事もあつた。

思ひ出すと、歩き方を氣にする人もある。その例を言つて見ると、僕が京都に居た時、多くの書生が雨手を垂れて、左の手と右の手とを交りばんこに振つて歩くのを見た。すると友人は、あれは同志社の生徒だと說明して與れた。なぜそんなことで分るかときくと、その當時、同志社の生徒はさういふ風に手を振つて歩くのが習慣であつた。それは同志社の社長の新島氏がさういふ習慣であつた。それで生徒がさういふ風を傚るやうになつた。馬鹿な話なんだ。

それにも一つ、新島氏は道の眞中を歩かないと決めて居たさうだ。そして横つちよの方を通る。なぜかといふと、眞中を通ると傲慢に見える。で、謙遜を表する爲に道の端を通れと教へて居たさうだ。こんなことは新島氏の僞善者たる反證にもなる。つまりそんなことを氣にするやうぢや人間も駄目なんだ。そんな駄目なことをする爲め、耶蘇教の教育が、つまらないところへ青年を引張つて行くといふことが分らう。

宗教より文藝に

▲僕の國は淡路です、幼少の頃から西洋人に英語を教へて貰つて居つたので、いつとはなしに、耶蘇教信者となつて居つた。實は始めは政治家にならうと思ふて居つたが、何んとなく外面的の仕事のよふに思はれて、滿足が得られんので、ひそかに耶蘇教の傳道に志して居つたのであります。

▲十四歳の時に、大阪へ出て、或基督教の學校へ這入つた。此學校は當時宮川經輝氏が經營して居られたのです。此こに一ケ年ばかり學びましたが。自分は其頃から耶蘇教の傳道師になる積りで、勉強して居つたのです。

▲僕の家は、元はやはり東京であつたのだが、都合あつて淡路へ行つて居つたのである。所が、又淡路を引き拂つて東京へ全家引き越すことになつたので、僕も自然大阪の學校を辭せねばならぬことと

なり、東京へ來て、かの井深氏の明治學院へ這入つた。

▲明治學院へ這入ることは這入つたが、此頃からぼつ〳〵、基督教徒の內幕の事情を知つて、嫌氣が盡きかけて來た。

▲先づ第一、僕は西洋人が大嫌ひだ。元に淡路に居る頃英語など敎へてもらつて居た位で友誼にもなかつたが、或る時此は子供の時分だが、神戸へ一寸行つた事があつた。所が、西洋人が一人で五六匹犬を連れて歩いて居つたが、或る一人の日本人が通りかかつた時、其西洋人は犬にけしをかけた。そこで、犬は其日本人に飛びかかつて、とう〳〵それを引き倒し、食ひ付いたり、衣服を引き裂いたりして居つた。他の日本人はそれを見て居り乍ら、どうもようせぬのである。何となれば、其頃の西洋人と云ふものは非常な勢ひで、日本人は皆恐れて居つたからである。私はこれを見て、子供ながらに其日本人を非常に氣の毒に思ふと同時に、西洋人を非常に憎く思つた。それから、西洋人が非常に嫌ひになりました。

▲で、宣敎師なども無論嫌ひであり、それから牧師傳道師などが、心にもない僞善僞信仰を振り舞はして居るのを見ると實に厭になつて來る。終には、基督敎の敎義其の物をも段々疑ひを容れるやうになつて來た。

▲僕は其頃エマーソンの論文集を讀んで非常に興味を感じたが、終に彼れの汎神論を信じて基督教の

一神論を放棄する樣になつた。且つ、我々は人を救ひ人に道を傳ふるやうな力のあらう筈はない、先づ自らを救ひ、自らに傳道すべきであると云ふことに氣づいて來た。

▲明治學院に學ぶこと一年ばかりにしてそこを出で、又政治家にならうと思うて神田の專修學校に入りて、經濟學を學んだ。三ケ年にして此處を卒業したが、私が滿足に學校を卒業したのは、此學校丈けでありました。

▲經濟學を學ぶことは學んだが、やはり政治家は外部的の仕事の樣に思はれてならなかつたから、それを斷念して文學に志すやうになつた。そして、自分で寺を建て、坊主になつて、文學宗を開からかと思つた。文學宗と云つても、人に傳道するのでは無い、只自分獨りで研究し修養するが爲である。尤も、人が自然に從うて來れば、敢て拒む譯では無いと思ふて居つた。

▲何れにしても、もつと勉强せねばならぬのであるが、學資金がないので、押川方義氏によつて、仙臺の東北學院に這入つた。これが十九の歲であつた。これまでは尙常に聖書を讀んで居つたが、此以からはそれをやめて、エマーソンを聖書のかはりに讀んだ。

▲此學校に居る間も、種々煩悶して、松島あたりの寺へ行つて默想に耽つた事もあつたが、どうも落ち付けなかつた。

▲ここに三年程學んだが、エマーソンの劇場はよき寺院であると云ふ意味の言葉が、よほど僕の心を

刺戟して居つたので僕も一つ脚本を書いて見ようと云ふ心が起り、それには、東京へ出た方が都合がよいと思つたので、東北學院をやめて再び上京した。

▲東京では、何かパンを得る道を求めねばならぬので、雜誌「歌舞伎」の編輯をすることになつた。そして丁度此頃のことです、僕が頼まれてメソヂスト派の讃美歌の翻譯をしたのが、今日出て居るのは其後改正せられたものであるが、やはり僕の翻譯したのを基礎としてそれを訂正したのです。

▲それから都合あつて、「歌舞伎」の編輯もやめ、退隱して滋賀縣の中學校で英語の教師をして居つたが、やはり一方では文學の研究は怠らず、又專ら新體詩の創作をして居つた。但し今とは違つてまだ消極的の思想が勝つて居つた。

▲丁度此頃の事です、僕は京都の比叡山へ行つて天台宗のことを研究した。そして頭が哲學的であるから、詩がよほど理窟的である。そして御存じの通り天台は六即を經て漸次に悟境に入るの法門であるから、それの對照として、近江の永源寺へも行つて、其和尚に就て、禪學を研究した。しかし何をやつて見てもどうも滿足が得られぬので、三年ばかり經て、又東京へ上つて來た。これが今から八年前であります。

▲前後十年間の退隱の間に種々研究したが、途に何物にも滿足が得られず、三たび東京に上つて、始めて佛蘭西獨逸あたりの最近傾向の文學書を讀むに及んで、漸次僕の思想が積極的に向つて來た。そして終に現今のやうな思想になるべき基礎が出來上つたのである。

▲僕の現今の思想の中には、日本の神道の思想が、餘程深い根基を爲して居るが、これは僕の郷里淡路が、神代史に於て有名の島であつて、僕の生地より程遠からぬ所に、諾冊二尊の祀られ玉へる神社がある。そして、幼少の時に、僕は玆に參詣して、子供ながらに、非常に深い印象を刻みつけられて居つた事などが、與つて力あるであらうと思ふ。

▲僕の今の思想では、哲學、宗教、道德、文藝が皆一體になつて居つて、極端なる自我主義、刹那主義、靈肉合致主義である。であるから、從來の所謂宗教には無關係である。反對である。否宗教ばかりでは無い。從來の哲學、道德、文藝には何れも反對である。

▲普通の自然主義の樣に、文藝と人生觀とを引き離した、單に文藝の描寫の上に於ける自然主義と云ふものと、僕の主義とは大に違ふ。僕の新自然主義は之が僕の宗教でもあり、哲學でもあり、又た道德でも文藝でもあり、靈でも肉でもあるのだ。そして、古記事などに顯はれて居る我國太古の人間は、やはり此靈肉合致者情意合體の心熱的生活を送つて居つたものと思ふ。

初めて得た原稿料の話

社內で一悶着

僕の文學的生涯は詩を以て始まつたのだが、脚本も書くつもりであつた。それで僕の最初の詩集に

入れた『[illegible]』といふ長篇の[illegible]詩を今の『早稲田文學』の前身たる『早稲田文學』に載せて貰つた時代には、一方で明治女學校から出てゐた『女學雜誌』に『[illegible]』といふ[illegible]本を連載して、それを後に一冊にして公にしたこともあつた。が、原稿料を取つたことはなかつた。それは何でも明治二十七年即ち日清戰爭の前後の事であつた。何でも戰爭に済んだ當時の事であつたと思ふが、一度或友人たる『國民の友』記者の紹介を得て、その『國民の友』に詩を出したことがあつた。短い新體詩を五六篇二回か三回に亙つて連載したのだ。僕は出發の抑々から、世間の所謂[illegible]に屬して來なかつた。何時も獨り立ちでやつて來た。その當時同雜誌には宮崎湖處子、國木田獨歩等の諸氏が新體詩を發表してゐたのだが、僕はその連中にも關係はなかつた。で、正式の紹介でこの雜誌が僕の作を採用して掲載したのだから、正式に原稿料を出すものと思つてこれを請求した。ところが、同誌ではそれまで詩といふものに一度も原稿料を拂つた經驗がなかつた。僕の紹介者は、僕と編輯者との間に立つて大いに困つたさうだ。けれども兎に角——何でも——七圓か八圓僕の手に屆いた。これが初めて僕が原稿料を取つた時の事だが、その時の同誌編輯者は、國木田獨歩であつたさうで——ずつと後になつて僕が獨歩から直接に聞いたところに依ると、この原稿料を出す出さないの問題で、一寸社內に悶着があつたさうだ。といふのは、社內の人で頻りに詩を書いて發表してゐる者が、稿料も取らないのに、突然他から飛び出した者に與へるのは、不都合だといふ譯なのだ。つまり、獨歩自

身も自分の詩の爲めに、一つも稿料を貰へなかつたのを、この時憤慨したのだと云ふ。この話は、何でも、獨歩が「近事畫報」をやつてゐた時代に、僕に語つた笑ひ話であつた。

僕の回想

蒲原有明氏の「詩壇の回想」を讀んで、僕も昔が戀しくなつた。「新體詩試」を見たのは、僕が明治學院に居た時で、當時僕の一つ上級に島崎藤村氏、僕と同級に北村季晴氏、その下の級に、和田英作氏、その下に三宅克己氏、僕より二つ上の級に木村鷹太郎氏が居たのだが、僕は島崎氏の外は、在學一年足らずの間知らなかつたので、みんなに知り合になつたのは、ずツと跡のことだ。或教會の會合で、島崎氏が老若男女の融和すべきを、僕はまた青年の志を達するまで路まだ遠きを演說したことがある。一夕、祈禱會に行つて、牧師が眞面目に祈りをして僕る間に、氏が「君、かういふものを作つたよ」と見せるので、僕が之を見ると、下手な讃美歌の作り直しであつた。

當時、氏は小說を作ると云つて、赤毛布の田舍者に扮し、上野公園あたりをぶらついたことがある。僕は、また、學校の外國人に對する不平があつて、碌に教課に出ず、白金の奥に引つ込んで、ペルシヤ王サイラスの傳を調べて、その歷史小說を書いた。矢野龍溪氏の「經國美談」の餘波がまだ殘つて居て、同氏がそれから儲けた金で洋行したのだと聽いて居たから、自分もこの小說で文學に專念

すゐだけの資本を借りて發行であつた。二三ヶ月のうちにその上篇だけ出來上つたから、方々の書肆へ賣りに歩いたが、一向に相手にしてくれない——然し、さすが春陽堂で會主、主任に持つて行くと、讀んで置くから預ると云つた。それからまた、二三ヶ月の間に、二三度ハガキの催促をやつて、とても駄目らしいと思つたから、取りに行つた。すると、この頃は馬琴式の小說は向きませんので、いづれ、またその時期が來ましたら……』僕は眞つ赤になつて歸つて來て、その原稿を燒き捨ててしまつた。

その原稿と云ふのは——『八犬傳』に魅せられて居た時だから——全篇二百五十枚程が七五くづしの文體であつた。これが出版されると返却する約束で、少し金を借りて居た白鳥生が、十日見ないうちに死んでしまつて、僕が——その時、既に耶蘇教信者といふ墮落をしかけて居たのだ——ことわりを云ひに行くと、母親なる人が墓參に行つたところであつたので、跡から直ぐ追つかけて行つて、友人の新墓所で非常な感慨を催うしたのである。その時までは、僕も自由や平等の熱に浮されて居て——僕が官立學校の閲歷がないのは、乃ち、それらの故である——文學は餘暇に出來る、だから政治方面にも活動する野心があつたが、エマソンの難讀と友人死去のことで、全く精神は內部に向ふ傾きが出來た。亡友を思ふ新體詩百五六十行のを作つた。これが僕の最初の詩であるが、詩稿を燒き棄てたことがあるそのうちへ這入つてしまつた。

僕が小兒で、まだ淡路に育つ頃、同じ町に立川雲平森肇などの諸氏が居て、自由民權など云つて騷いて居た。兩氏とも今は代議士になつて居るが、その當時、別に青木某といふのが居て、目ツかちであるところから、獨眼龍の名を得て居たが、つまり壯士に過ぎなかつたので、立川氏が信州に歸つて、地盤を固めて代議士になると、青木は多少うらやましかつた譯もあつたらう、帝國議會の傍聽席から、馬の糞を議員席に投げたことがある。この人、體格が立派の上に、髮を長くして居た。(森肇氏の長髮はその眞似だ)、盛んなその演說などが子供心に染み込んで居たので、僕が明治學院を不平で出た時も、まだその方に多少野心が殘つて居たから、神田の專修學校へ這入つて、經濟科を三年やつてる間に、かの黑表紙の『しがらみ草紙』が出たのだ。これと『國民の友』と『早稻田文學』とは、誰れでも文學に志があつたものは盛んに讀んだ雜誌だ。

僕が仙臺に行かないうちに、『文壇』――のうちに『日本文壇』――といふ雜誌が出た。これは宮崎湖處子の『青年文學』に對抗するつもりであつて――非常な意氣込みを以つて、その中心となつた人人のうち、相談會などで僕が會つたのは、國木田哲夫、加藤咄堂、赤司繁太郎、今中央新聞に居る川村三治などの諸氏で、初めに雜誌の發行所に住んで居た人で、その名を忘れたが、これも今でも文學に從事して居られるだらう。田邊花圃女史も確か這入つて居たと思ふ。僕は年下の方であつたが、諸氏のしりへに附いて、初めて發表したのは新體詩で、エマソンの『歷史論』の拙譯をも出した。仙臺

引こつ込んでから、[illegible]は三年間程をてしまつた。[illegible]「[illegible]ゆじも」に載つて居るのは、この間に作つたものだ。

「文學界」が出た。北村透谷君の作物には、僕も賛成した一人である。但し、一幕物を作りつつあつたので、「朱門のうれひ」に注意した。このゲーテの作の意匠に似て居るのを作つた古藤庵（この號は俳句つかひの様だと云つて間もなく變へられた）は誰れだらうと、東京から訪ねて來た人に尋ねると、島崎といふ人だと答へたので、じやア藤村君だらう、やり出したなと思つた。それから「早稻田文學」でも、脚本のことをやかましく云ひ出したし、何かの動機から、僕はもう劇界の創作的方面に飛び込む時期だと思つて歸京して來た。巖本善治氏とはその前から知つて居たので、僕の詩、その他の作物は「女學雜誌」（又は「評論」）に出たが、鬼の首の様に大事に拵へて來た新劇「魂迷月中刄」當時はまだ外題の偶數を忌む時代であつた）もその附錄として、數回に出して貰つた。その内容はハムレットとフアウストとをつき交ぜて、一種の冥想的社會觀をもらしたつもりの物であつた。それが一冊の書となつて出版せられてから、二三部賣れた切り、物置の隅にほうり込まれて居たさうだが、明治女學校の火事の時、一緒に燒けてしまつたらしい。まだそれが雜誌に連出する頃、戸川秋骨氏の話に、氏は三幕目まで愛讀して居られたが、四幕目五幕目になつてがツかりしたさうだ。これは大事の筋を四幕目からぶち毀してしまつたからである。この頃、ハムレットの趣味を入れた作物は、透谷が國民

之友附錄に出した『宿魂鏡』といふ小說とこれとであつたから、シェキスピヤ專賣の早稻田文學で、小癪だと思つた點もあらう、金子筑水氏が隨分ひどい攻擊文を書いた。實際、その劇もまづかつたのであるから、僕はこれから大いに修養しようといふ奮發心を起した。『文學界』には、その一二の連中から、何か書けいと云はれたが、何だか氣が進まないので書かなかつた。然し、その終りに近づいた頃、一度送つたことがあるが、その時はまた向ふから何とか云ふ理由で採用しなかつた。

これより先き、田邊蓮舟氏の紹介で、『月中刄』を以つて行つて、櫻痴居士に會つた。狂言作者の仲間に這入らうと思つたからである。ところが居士は僕に忠告して、教育の違ふ者が這入つたとて、どうせ厭になる、それから目が覺めてももう駄目だ、あれは芝居者だと云つて、世間から蔑ざけられるから、斷念せよと云つた。世話をして吳れさうもないから、それ以上に賴まなかつた。すると、丁度、今の『歌舞伎』の前身の『歌舞伎新報』で、人が入るいふので、これに這入つた。居士にはその後しかられたことがあるが、自由に芝居へ出入りが出來るのと、同社が俳優學校とその附屬劇場建設の目論見があるのとで、二年間程、編輯やら、會計やら、借金の云ひ譯やらに關係して居たが、どうせ創作を發表する機關にもならないし、また發展の見込みも付かないし、劇界の事情が分るに從つて、面白くないので、退社してしまつた。が、その後とても、かの坪內博士の作さへ、思ふ樣に行かなかつた時代であつたのだ。僕の跡へ這入られたのが、早稻田を出たての山岸荷葉氏であつた。今一人、同時

に這入られた早稻田出の人である、名を忘れたが、その人とは僕が退社した後もその家へ行つてよく話しをした。今はどうして居るか、會つて見たいと思ふことがある。その人と入れ代りに、太田玉茗氏が這入つた。僕が氏と初めて知つたのは同社に於てだ。

僕は、それからの、暫く基督教會の方に傾いて居たのだが、また詩へもどつて、透谷子の事だ——僕が子に會つたのは一度で、二度目に會ひに行つた時は、病氣が重いので、醫者が面會謝絶を命じて居た。それが數寄屋橋の煉瓦屋で、おツ母さんが出て來て、いろ〳〵心配さうに話しをしたことに因ると、子は子供の時から頭の後ろの神經叢に故障があつたので、それまでにも時々變なことがあつたらしい。僕が最初で最後の會見の時も、應對をする傍に、頻りに片手で襟元を氣にして居たのが、何となく僕に異樣な感じを與へた。席に、僕の鳥渡知つ居る、而も氣に喰はない傳道師の某が居たので、僕は直ぐ透谷子と聯想して、如何に耶穌教會に關係が付けたくツたつて、苟も詩人と標榜して居た人が、あんな者を相手にして居るのかと、多少輕蔑の意が出なくもなかつた。然し、その某氏とは一緒に子の家を出た途々の話に、透谷子は非常に失望して居られるが、文學者で、すべてを知り拔いて居るから、普通の言葉を以つて慰めることが出來ないといふ正直な白狀を聽いた。これは尤もなことだと思つた。

子は度々說教もしたさうだし、また東北地方へ傳道に行つたこともある。或派の仲間は、あんな厭

世詩人があんな熱心な信者になれたかと、不思議に思つたことがある程、一時は傳道に努めたのだ。押川春浪氏のお父さんは、僕も恩義上第二の父と思つてる人で、當時、東北にあつて、京都の新島襄と相對して、宗教家の大立者であつた。透谷子は、病氣が直つたら、いよいよ正式の傳道師になると決心して、その人をわざわざ招待して、病褥のうちにあつて會見したことがある。子の自殺よりも、この決心の動機の方が、子に取つては、寧ろ悲慘な事件である。どれか、子の筆になつたのを見て、僕はこの人、必らず自分の詩才が自分の思ふ樣に行かないのを深く感じて居ると思つたことがある。『文學界』で漸く甘く行きかけた自分が、手ひどい攻擊は受けるし、何を書かうとしても、輪廓ばかりの腹案で、その筆がどうも動かなくなつて來た。詩人として、煩悶すまいと思つても、せざるを得ない。この失望の極は、傳道師になるか、自殺するかの二道よりはなかつたのだ。

僕もかういふハメに落入つた經驗があるが、詩人が傳道師に化け得たなら、畢竟胡麻化しである。さりとて、自殺をするのは、なほ更ら胡麻化しである。だから、子が傳道を助けて居た間に、まだ多少氣が丈夫であつたらうが、病室にとぢ籠ると、もう、その申し譯が立たなくなる。あツちへぐら付き、こツちへがた付いたあげくが、二三日の間、自分の子供を頻りに拜んで居たが——この時、住所は芝公園——最後の夜、更闌けて、寂しい月が樹の間を漏れて、詩人の胸奥を窺ふ時——子の讀めた翁の句『明月や池をめぐりて夜もすがら』を思ひ出しただらうか——物暗い樹かげの枝に懸りて、わ

れとわが不如意をかこち移したのである。

透谷は隨分狷介な人であつたらしい、僕が島崎氏の住所を聞くと、「あの男にもよく／＼會ひますが、私は行つたことはありません」番地はどこそこでしよう、と云つて、教へて呉れた。この兩氏に對しては、藤村氏も多少背いた形跡がある様だ（君よ、たゞほゝゑみ給へ。然し、子が死んだ時は、文學界の連中は眞面目に世話をしたらしく、或時、今の參謀本部前の通りで藤村氏に出くはすと、透谷の墓七日に行くところであつた。その立ち話に、透谷には非常に癖があつたが、友情には厚かつたことを言明された。

かういふことはよく覺えて居るが、それから僕は生活の困難と詩作の上の不平とが僕を迫つて來て、拾年足らず自殺よりも苦い日に會つて居た。然し、藤村氏や秋骨氏と、岩本氏の宅でよく會つて居た時代は、二氏は明治女學校の教師であつたし、僕はまだ歌舞伎新報に關係して居たかと思ふ。近年、藤村氏と會ふ様になつたのは、三度目の時期である。二三部より賣れなかつた「ドラマの先生」とは、僕をひやかす當時の言葉であつたのだ。一方には、また、この新報紙上に時々、西洋樂譜を以つて、わが國の樂曲を出して居た北村季晴氏があつて、まだ音樂學校を出たてで、意氣頗る揚り、大日本音樂倶樂部といふのを設け、新川の鹿島氏をうしろ楯にして、伊十郎や武左や林中を自由に使つて居たが、それが僕と同窓であるのは、その時お互ひに氣が付いて居なかつたのである。

私の生活

—便所で新聞を讀む —— 葡萄酒を飲みつつ書く —— 煙草、菓子 ——
—散歩、入浴、讀書 —— 長髮の辨 —— 旅行と創作 —— 娛樂、遊戲 ——
—希臘語、梵語 ——

——便所で新聞を讀む——

僕は毎晩大抵二時前に寢る事はない。だから朝は寢坊をする。大抵九時に起きれば早起の方である。

起きると直ぐ便所に入るが、それが大抵半時間から一時間かかるので、『東京日々新聞』の二面と三面とを持そこで讀んでしまふ。もう習慣としてそれを讀んでしまはなければ、そこを出ないやうになつてゐる。それから直ぐお湯に入る。それがまた半時間から一時間はかかる。一日隔きに髯を剃るから、さういふ時はどうしても一時間以上かかる。それを出ると直ぐ朝飯にかかる。僕は味噌汁の添ふ朝飯は一番うまいので、分量はなかなか多い。尤も多くの新聞を讀み乍ら食ふのだが、大きい椀に汁は二杯で濟まない事がある。飯は普通の茶碗でまづ七杯は食ふ。さうして、僕は午飯は食はないのだから、朝の時に刺身とかその他のものをも食ふ事がある。

——葡萄酒を飮みつつ書く——

さうして、葡萄酒を小さいコップに二杯なり三杯なり飮む。この葡萄酒の習慣は僕の古くからの習ではないのである。一體に僕は酒は晩酌にもしなければ、宴會に行つても澤山は飮めない方だ。仕事の忙しい時は夜半でも晝間でも葡萄酒を飮んでゐる。時には四合入の壜を一本一日にあけるが、大抵は二日に一本だ。それは一方消化劑になり、又一方に氣力をつけてくれるからである。晝飯拔きだから、晩の飯を——宿屋などへ行つてても——午後四時から五時迄の間にやる。旅行してゐても、この頃は日本酒は飮まず、葡萄酒である。

食物は大して好き嫌ひはない。が、どつちかと云へば肉食より菜食である。

——煙草　菓子——

煙草は一日平均一袋位であるが、仕事が忙しかつたり、訪問客が多かつたりすると、二袋も三袋もやつて、後であたまが隨分くら〳〵する事がある。煙草にも僕はさう強くないのだらうから、その代りに夜など甘納豆か氷砂糖などを買はせといて、ちびり〳〵と食つてる時もある。酒と同じやうに、甘いものも僕等の疲れを一時はなほしてくれるものであるから。

新聞は皆で十ばかり來るが、それを朝の食事中に讀み乍ら、食事後にも續けて、どうしても十二時、或は一時頃までは食事室を去らない。それが濟むと、來客のない時は晩飯まで仕事をする。

――散步、入浴、讀書――

散步はあまり好きでない。その代り二度も三度もうちの湯に入る。又散步代りに晝間は自分の作つてる庭いぢりをする。さうして、夜なら近所の友人を訪ねて將棋をさしたり、碁をうつたりする。この頃は特別に讀書の時間といふものはない。つまり言ひ換へれば、讀んで置けば他日何かのためにならうといふやうな餘地をもつて讀書する時間はない。が、仕事につれてその必要上から調べて見るといふ事が僕としては讀書の時間だ。その仕事と云へば、創作でなければ、文藝、宗教、政治、社會問題等の研究論文である。やがては僕等の雜誌に於て主張してゐる日本主義の實行的運動もやらなければならないのだが、今のところ創作欲がかつてゐて、その方に一番忙しい。

夜は友人を訪問しなければ、食後直ぐ又仕事に取りかかるが外で遊んで來ると、十時頃から始めて一と息に二時頃まで續ける。それが習慣になつてゐて、二時以前には偶々床に入つても眠れない。それから又二時を過ぎて三時四時になる時は、それにも神經はさえて行つて、今度は夜が明けて七八時迄も眠むたくない。

――長髮の辨――

頭は髮の毛を長くしてゐる。僕は子供にでもた分刈にさせて置くのは、どつちかといへば不賛成なのである。頭を刺戟して却つて頭痛などを起させる原因だと思ふ。帽子はソフトと高帽とを使ふ。

――旅行と創作――

この頃は少し贅澤になつたせゐか、家にゐては書きにくいくせがついて、旅行に出る、宿屋にゐると、氣儘が出來ないから反つて一室にばかり閉ぢ籠つてゐられるので、よく書ける。それから又不思議に朝早く起きられる。さうして碌と新聞を見ないのだ。さうすると、朝の時間も大分仕事がやれるし、その上午後竝びに夜中は、家にゐると同じやうにやれる。で、三日若しくは四日で百枚位の創作が出來てしまふ。その代り長くゐると痩せて歸つて來る。が、家にまた二日もゐれば多少その痩せを取返したやうな氣がする。さうして、又他の方へ旅行に出るのであるが、この間中仕事が忙しいので、鹽原に十日、森ケ崎に十日もゐたが、この時はさほど痩せなかつた。つまり葡萄酒を澤山のむおかげだらうと思ふ。

――娛樂、遊戲――

芝居は招待でなければ、大抵見た事がない。たまに家内のおつきあひで行く事もあるが――。
活動寫眞は屢々淺草まで出かける事もある。
遊戯は將棋、碁、玉突、花かるた（但し金は懸けない事にしてゐる）、その他何でも大抵は好きだ。
謠曲は運動代りになつてゐる。もとは學校で教へたから、教場で聲を出す運動がからだ全體の運動にもなつてよかつたが、それをやめてからは、たまに演說をする外大きな聲を出さないので、謠でなければ、友人との談話ですませてゐる。

――ギリシャ語、梵語――

外國語は、英語が主で、特別に得意であつたのは、餘り人のやらないギリシャ語だ。ホメロスの「イリオス物語」をギリシャ原文から三分の一ばかり譯した事もある。その他にフランス語の詩を譯した事もある。ドイツ語と梵語とをやつた事もある。
主な雜誌は、大抵僕の所に寄贈して來るが、別にこれと特別に選んで讀むものはない。その時其時の問題によつてだ。
次にどういふ女を好きかと云つたつて、僕等の年頃になれば無論若いのがいいとなるにきまつてるさ。それ以上にくど／＼いふのは面倒臭いからよさう。

僕の見た僕

世人は僕を以つて自我自讃者と見て來た。無論、僕は一種の自讃者である。が、世人が僕をさう稱するのは、僕自身の意味とは違ひ、僕の態度を解しないからであるが、自讃は或場合に於て止むを得ない實質の結果であることを忘れてはならぬ。明治以來現今に至る、わが社會の各方面に、眞の批評家が殆ど皆無なのは事實でないか? 政治界に於て閥があるやうに、文藝界にも學閥や黨閥と同様なことがあり、思想界にも亦同じ情實があつて、帝國大學に關係のないものには博士（この場合、吾輩に貰ふ權利があるものとして）を貰へないと云ふが如きは、その一例だ。かかる時代に當り、何等の情實に依らないで新時代的努力をやつてゐる者は、情實的な若しくは結閥的な批評家(?)等の言を待たないで、自分自身の正當な批評若しくは紹介をやる必要があらう。これは正當な自我自讃であると同時の獨立性ある文明批評である。

今回、雜誌新日本で各家の「自己評論」を掲載する爲め、僕にもそれを頼んで來たのを幸ひ、僕は以上の見地に據り、從來僕が社會に接して來た工合を考へて見よう。僕が最初に世に出たのは詩を以つてだが、その詩がくすんだ古典的瞑想から轉じて熱烈な羅曼的詩となり、それがまた表象的傾向を帶びて現實的な幻影を攫むやうになつたが、その間に多くの俗的詩人並に俗習評家等は新らしがつた

模倣とうわツつらな技巧とを以つて僕に反對した。そして僕が渠等に向つて挑戰したのは、ただに僕の詩を辯護したのではなく、わが國詩一般の進程を思想と內容とに於て切り拓いたのであつた。ところが、その當時並にその後に於ても、わが詩界には、僕が發想しただけの深刻な作も、自由な內容的音律も他に殆ど見えない。この點に於いては、無論絕後とは云はないが、空前の特色ではないか？僕がこの特色を說明したり、主張したりしたのは、乃ち、自讃であると同時に、また無學や無獨得の詩界を警醒して、その進步を促した所以である。

音律の內容的研究に於ては、僕が『音律總論』並に『音律各論』を書いた經驗から入つて、無形律をも意識するに至つたほどの素養を持つてゐるものは、今日でも――發表の上では――ないやうだ。この點も僕を自讃するのは、乃ち、日本語の音律その物の研究をしてゐるのである。それから、僕は詩論をやり出したに從つて、その他の評論に於て僕の思想と生活とをも發表した。そして『半獸主義』では、初めて因襲の破壞と新建設とを示めし、『新自然主義』では自我生活を中心として世界に於ける一種の日本主義を哲理化したが、最近の著『古神道大義』は乃ちその完成である。かかる說を批判するものが、本當は、かの帝國大學の連中にあるべき筈だが、無獨得で外國崇拜の渠等には却つて分らないので、この點も僕が僕自身で推薦して行くより外に誠實な道はないのだ。僕は折を見て僕の『古神道』を英譯し、外國の思想家どもと戰はうと思つてゐる。僕の考へでは、今のところ、僕が僕を

背負つて立つのは、日本を背負つて立つのと同じである。

それから、小說の方面に於ても、僕は孤立であるのを却つて自慢してゐる。一體、僕が詩を發表してゐる時に受けた非難は、小說に於ても矢ツ張り僕は受けてゐる。それは外でもない、文章がぎしゞしてゐるとか、技巧がまづいとか云ふことだ。が、それはすべて外形に捕はれてゐるもの等の云ふことであつた。一たび文章上の問題を閑却して考へて見給へ。內容の發表が出來てゐるところには、內容そツくりの技巧が作つてゐるものだ。完成とか不完成とか云ふことは單に理想家の云ふところであつて、若しそんな空疎な理想を遂行し得たと思つてるやうな人々の作は、却つて、うわツつらの整頓が出來ただけになつてるのを知らないのだ。けれども、そんな無智の批評家連が今の世にはざらにあつて、內容の充實問題と外形の整不整とを同一平面で取り扱はうとするのだから、僕は矢ツ張り渠等と自讃的に戰ふことになる。僕はこれで少しも卑しいとは思はず、僕には寧ろ意味ある戰ひと思ふ。

僕の『耽溺』だけ深い經驗を描寫した小說が明治時代にどれだけあつた？然しそれが初めて新小說に現はれた時、何でも平面的に見る批評家どもはそれを風葉氏の同じ名の小說と比較して長短を論じたが、僕のは後者のわざ／＼拵らへたやうな淺薄な沈沒事情の說明などとは、作として既に階級が違つてゐたのだ。また、大正の世になつても、僕の『毒藥を飲む女』ほどの充實した作、現實と幻影と

を合致した作がどれほどあらう？それでも、若し僕があれに關する俗評に對して默つてゐたとすれば、社會はあれをただ無學な若しくは無經驗な雜評家連の技巧論や形式論ばかりで葬むつてしまつたかも知れぬ。それほど今の世には眞の批評家なるものがゐないのではないか？田山氏などがたま〳〵僕の態度に簡單な批評を加へることがあるが、それも人生觀上の問題をまで單に技巧問題として取り扱つてしまうのは物足りない。

僕は曾て或雜誌が自分の誇りとすることを質問して來たに答へて、先輩もなく、後輩もなく、ただ獨立獨歩でやつて來たことを以つてしたが、すると、その雜誌記者の添へ書きにそんなことは、もう、誰れでものことで、別に取り立てて云ふまでもないとあつた。僕は實際のことを云つたのだが、地に足の付かないその記者はそれを徒らに空想的に受け取つたのであつた。机上の空論だけでは何でも云へる代りに、實際なるものは分らない。單に帝大出なるが故に、何でもない哲學的議論を他人の書から借りても、多少の權威を博したりするものがある。ただ早稻田出の爲めに、また、人の受け賣り的な評論を書いても、下だらぬ小說を作つても、ただそれが爲めに採用されてるものがある。そんな人人でも矢ツ張り獨立獨行だなどとは、云はうとすれば、云へるのだ。或作家が自分の作の傾向を世間に注意させようとして、他の作家の多少自分に似た點を――事實以上に――讃めそやした時、僕が公けにそれを一種の黨同伐異だと指摘したら、その作家はまたそれに答へて、今の世にそんなことはゐ

と得べからざることだと云つた。が、それあり得べからざることを、公明な批評家が[illegible]て、豫言的にやつてゐるものが多いのはどうしたことだ？僕には、然し、最後に疑問もなく、豫言もなく、その代り、無理な注意、偏るところもなく、自分で正直に自分を仕上げ發揮して來たのである。先輩もなかつた代り、また僕は特別に後援を拵へるやうな機關も無かつた。白鳥氏には讀賣の日曜附錄があつたことがある。田山氏には文章世界があつた時代もある。その上、早稻田文學の昔を、また森田、阿部（次郎）二氏の勢力範圍に於ける如きでは、彼等に不利益な事件や人物を默殺するやうなことをするが、僕はそんなことをされたことこそあれ、やる機會などは無かつた。ただ自分だけの發揮と自分がやる事だけの吹聽とを、出來るだけ努めて來た。これが卑劣とか不正直とかになるのは、自分を不眞面目に取り扱はうとするからであるが、僕は自分にそんな扱ひを與へなかつた。僕を誇大妄想狂だなどは、淺薄な月並的觀察に過ぎない。

それから、僕は僕自身の推薦に添つて、他を推薦したのがその人々の爲めによかつた例もなくはない。たとへば、白鳥氏をその最初の諸作に於て推賞したのは、僕一人ではなかつたが、僕もその有力者等の一人であつた。また、谷崎氏や長田（幹彥）氏に對しても、その最初の出に於て、僕の批評が便利（多少）になつたと云はれてゐるではないか？（然しああ通俗作家的に行けとは云はなかつた。）上司氏の今の傾向を早くからさう公けに促したのも僕だ。（但し、僕の豫期は選をしてもツと深く行か

しめたかつたのだが。）相馬氏の如きは——これは向ふにはいろんた申しわけもあらうが、僕は憚らず云ふ——若し僕がなかつたら、その議論があゝ云ふ方面へ行けなかつたであらう。（無論、氏の議論の當否はここで云ふに及ばないが。）そして今日の言論界に心熱とか、刹那的とか、肉靈合致とか、自我生活とか云ふ思想の内容は、わが國に於ては、殆どすべて僕の主張と實行とに關係若しくは系統を——意識的にも、無意識的にも——引かないものはないではないか？（そしてそんな主張になほ誤解や因襲が附き添つてるのは、僕の罪ではなく、他者の無學若しくは空虚の爲めだ。）

人生の體現者としての經驗その物から云つても、僕は僕が見渡す範圍の他の人々よりも比較的に複雜な生活をして來てゐる。宗教上の傳道をやる一つの便利として、故中山二位の局附きの或老婆アさんに就き奏曲を稽古し、その婆アさんの助手として關西を一緒に旅行したこともある。又、友人と共に文藝的生活の根據を確立させる爲め、友人が金を出し、僕が養蠶の實驗と實習とに當りかけたこともある。また、脚本作者の道すぢとして、半ば芝居もの同樣になつたこともある。また、前後殆ど二十年も英語教師としての經驗もあれば、暫時ながら自分の金を以つて、樺太に於て蟹詰製造をやつたこともある。）婦人の關係に於ても、身づから進んでまで極度の放蕩をやつた事實を決して僞善的に否定などはしないが、ずツと昔から倦くまで奇麗な交際をつづけて來た婦人の友人も澤山ある。そして今の妻と同棲してからは、全然放蕩と云ふことをやめてる。他の女を見ると獸慾に渇すこととした佃ら

ないものからは、僕の詩人關係に於ける重要な方面を想像することも出來ないと同時、僕はその詩た生活をやつて來たものでなければ、實際に僕の生活は分るまいと思はれる。たとへば僕の小說を讀評したもののうちに、僕が熱烈な作者としてもたゞ冷靜な觀察と覺悟とを通してゐるのに、それを狹い意味の自覺家と見たやうなのがいくらもあつた。これたども、僕とは反對の冷刻な觀察しない所から來る誤評だ。

兎に角、僕は以前の詩想を棄てたのではなく、他よりも深刻な詩人として小說を作つてる小說家である。同時に、文明批評家である。また同時に、自由思想家である。現代に於て自由思想家らしい者は、他の場所でも云つたことだが、僕を除いては田中王堂氏ばかりだ。が、王堂氏はまだ獨立てばかり氣にする傾向があつて、その思想は確立してゐない。この點に於ても、僕の確立した自由思想ばかりは――他のもツと進つた思想家が出るまでは――獨步してるわけではないか？

近頃出版させた僕の『惡魔主義』は、ほんの歐洲新文藝の根源に關する研究的紹介に過ぎないが、それに對してさへ眞に賞讃若しくは批評の出來る資格ある評家が現今幾人あるか？また、僕の近著『古神道』に於て僕が『この書の內容はわが古神道に於ける僕の發見であると同時に、また僕の新哲學、僕の新宗教である』と云つたのは、自負でも自慢でもなく、僕としては實際の事實である。從來の神道家等にそんな發見はなかつた。また、外國の哲學にそんな哲理はなかつた。この新らしいのが間違

つてたら間違つてると正當に指摘することは出來ようが、新發見的な解釋たることは事實だ。ところが、これに對して黑住教の雜誌『日新』に於て、高野隆文氏が長い辯解を書いたが、(氏のは特に黑住教に關してゐて、僕も御注意通り他日特別な研究をしようと思ふが、)僕を以つて『大言壯語』したもののやうに見做したのは、矢ツ張り、月並に過ぎない。今の所、僕は――僕も一面に批評家だが――兎に角月並み的でない批評の一大斧鉞に會つて見たいと思つてる。(大正四年四月)

小品及隨筆

春子と云ふ藝者

小說に書けば書ける筈だが、きッと發賣禁止になるに定つてる材料――いつそのこと、實話にして說明してしまう方がよからうと思ふので、ここにうち明けます。

春子（假名）といふ藝者が死んだ時、まだ二十三歲の盛りでした。大阪は曾根崎、北の新地と云ふのに勤めてゐて、美人でもあるし、體格もよし、閨中がこまやかだと云ふので、非常に有名でありました。無論、普通一般の見ず轉とは違ひまして、見込まれた人は一回で安くても五百圓、千圓は覺悟の前で關係しなければならない代りには、上手に會へるやうに致しますので、極秘密で通せてゐました。○船會社の中橋さん、日本銀行支店長の○○さん、某會社の取り締り、何電鐵の重役、と云ふ風に大阪でのおほあたま連中は大抵この女のドル箱になつてゐました。それでゐて、あいつが氣を許すのはおればかりだと皆に思はせてゐたのは、男の弱點でもあるが、また、女の巧みなところであつた

のでしよう。

一般の同業者連とは違つて、文學の上に一隻眼を備へてゐたと云つてもいいのです。それも、古文學と來ては、源氏を讀んでも分らないと云ふし、馬琴を見ても面白くないと云つてゐましたが、現代の小說は殆どあらゆるものに目を通して、そのよしあしを批評するだけの用意をしてゐました。そのうちでも、最も愛讀――と云はんよりも、自分の批評の手に合つたものとして坐右に備へ付け――してゐたのは、泡鳴の『放浪』と獨歩の「欺かざるの記」とださうですが、前者には至るところ赤インキで思ふやうな訂正を施してあるし、後者には表題からして『身づから欺くの記』と書き改め、こんなものは耶蘇教的信仰と形式とをさへ知つてゐれば、誰れにでも書けると云ふ評言を加へてあります。そして自分の今書いてゐる『情界日記』と云ふのが實際に欺かざるの記だと自稱してゐました。

かの女はお袋の手に育てられて來たのですが、そのお袋と云ふのがかの女を墮落させたしたたか者で――年を取つてゐながらも、若い男を好きで、自分の家にはいつも四五名の醫學生や私立大學生を置いて、それを世話するのが自慢でもあるし、そのうちの最も好きなものには自分と一緒に酒まで呑ませて、夜のお相手もさせて意張つてゐた。そんな亂れた家庭から、娘は除に最も嚴格な耶蘇教學校の寄宿舍生活へ押し込められました。で、娘も耶蘇教徒の生活が僞善と不自然とで滿たされてゐることを直ぐ看破して、殆ど死にたいほど堪へ切れなくなつたやうです。

「醜なき女は死たり」と云ふやうな不平文句をその當時の日記に發見できます。そして或る——そ
の學校の關係者で、今は澄まして傳道師をやつてゐます——と同棲し、兒まで孕みました位、墮ち
られてしまひました。それが墮落の一大動機でした。それに、また、淫蕩で而も冷酷な母を持つてゐる
でしよう。生れた兒の虐待する爲め、また薄情な男（この時は、もう、一人の男ではなく、男といふ
ものの全體です）に復讐する爲め、最も極端に決心して、身の墮めをいいしほに、藝者の社會へ落ち
込みました。

耶蘇學校で受けた教育が手つだひをして、それからは、さきに名を掲げた日記を書くのがかの女の一生の思ひ出になつてゐました。その序文が面白いです。自分はこれまでは眞面目な情ある女として生きようと思つてゐたのだが、今度大決心をして最も墮落したまた最も秘密な人情界に這入り込んだのであるから、これからは最も放縱で情味ある女となつてしまう。それを搆かず、隱さず、ありの儘に書き殘すのが迫めてもの思ひやりだと云つてある。そしてそれを「情界日記」と名づけた。

「情界日記」

四月五日。晴。妓が情けの底深き、これかや戀の大海を、替へも干されぬ蜆川、小春治兵衛の昔は知らず、同じ川に今も名ばかりでも殘る世に、曾根崎は北の新地に、われも今同身を沈め、情界の人

となつた以上は、迫めてもの思ひやりに、これからこの日記を書き初めようと思ふ。今までは、兎も角、眞面目な情ある女として生きようと思ふたのやけれど、あの僞善者に棄てられ、恨みのかたまりも見たうないやうになつて來たし、强慾な母の奬めるままになつて、この藝子の社會へ落ちて來たんや。この最も墮落した又最も秘密な情界に落ちて來た以上は、これから最も放縱で情味ある女とならう。それを欺かず、隱さず、ありの儘に書き殘すのが迫めてもの思ひやりや。

春弘めをするので、妾の名は春子。同じ家形の姉ちやんは淸香。名たんぞどうでもええのやけれど、淸香などと澄ました名よりも、春子の方が情ありげに聽えてええ。

けふ、弘めに出る時も、姉ちやんが化粧の仕方や着物のこなし方を敎へて吳れたけれど、そないなことは妾みづから氣に向くやうにした方がええ。藝子ぐらゐの心得は敎へて貰はんかて分つてる。それに、痩せて淺黑い姉ちやんと肥えて色の白いわていとは、おのづから化粧法も違ふ。着物の着こなしに至つては、學校にをつた時から、藝子のやうや云はれたほどやないか？

お初のお座敷へ呼んで吳れたのは、姉ちやんのお客の淸水たら云ふた人や。外に赤いネキタイの灰殼が獨りをつた。藝子は二人の外にも、まだ若子、玉千代たら云ふてたのがをつた。淸水がわていにばかり添ふて來ようとするのを、姉ちやんは邪魔をして、渠をわが物がほに取り扱ふて、赤ネキタイをわていの方にけしかけた。

赤いのはその莊嚴の膝をわていの膝に突き付けて坐わり込み、

『春ちやん』なんて、ええ氣になつて、知ツたか振りにわていの名を呼び、わていの右の手を引ッ張り、それを渠の右の手でさすりながら、『あんたの色は白おます、たアーーどこで磨きたはつたんや？』

『ええーージョルダンの川でだす。』

『そないな川がどこにおまツか？』

『ユダヤと云ふ國にあるさうだす。』

『へえ、ユダヤーー？』

わていが目で渠を冷かしてたら、清水がまたねきへやつて來て、

『おい、春子、あんたは耶蘇かい？』

『ええ』と、わていが目を渠に轉じた時、ネキタイは握つた手を離しながら、

『ほたら、洗禮たら云ふものを受けたんだツか？』

『ええーーそれでこないにきたない女子になつてしもたんだツさ。』

『こりや面白い、おれも耶蘇だツたぜ』と云ふた清水が、わていの烏渡座をはづした時附いて來て、

『どうだ、今夜、二人で敎會の話でもしよか？』

へん、あの銀行屋め、わていにどんな學歴があるか知るまい。これでも、ミションスクールの川口女學校に三年まで勉强してゐたんや。

十二時半、お茶屋から歸宅。姉ちやんはまだ歸らぬ。

四月六日。曇。日曜。泡鳴の『放浪』の阿呆らしいほどあまいところを批評しながら、姉ちやんに讀んで聽かせてたら、お座敷がかかつた。まだ午後二時やのに、急いで支度をしていて見たら、よんべの清水であつた。阿呆らしい！何やかや云ふたけれど、わていかて、姉ちやんのお古なんて、いやなこツちや。でも、燒け飲みをして見せてやつたさかい、大分お酒に醉ふた。

夕方から、お約束のお座敷へ出るため、魚龜の溜り場へ行た時、赤い顏をしてゐるのを朋輩の衆は皆さげずむやうに見てゐた。畜生！どうせわていは醉ひどれの新米だツさ。でも、顏に於ては、教育に於ては、ヴィオリンに於ては、いつでも競爭してあげまツさと云ふてやりたかつた。

座敷へ出ると、果して『春子、春子』と云ふて、わていばかりが持ててゐた。兼て讀んでをる黄色新聞の社長はん——長沼とか云ふた——が、東京の一畫家を紹介する爲め、實業家連を招待したので、銀行の頭取りや會社の重役や大商店の主人なども來てをつた。渠等はいや應なし一つ返事で一枚何十圓、何百圓の額なり、軸物なりを、少くとも一つは、引き受けるのだろけれど、その費料の中に、今夜の招待費も這入つてをるものとして見たら、ありがと云ふだけが詰らんやないか？それでも、上

手を云ふて、『是非一枚』など云ふてた芸者さんもあつた。そのおセイさんがまた素晴らしい顔をして、いやにわてばかりを見てをつた。わていはわざとその人を一寸にしてやつた。

『どうだい、春子、皮切りにおれと一つ』など、東京者の書かきにわていを離さなかつた。へん、酒が飲めるのが手柄でもあるまい。およそ日本精髄なんて、すべて宮殿の細川のそのまた新聞記者やうなことをせんと、喰へもせん癖に。どないにから意張りしたとて、あたまもないものが今の世にどないな立派な物が書けると思てやはる？かの『是非一枚』などに福の神か、鶴と亀かを色取つてをればええのや。わていを下へ引ツ張つていて、『どうしてもだ』と口説いたけれど、わていは『上阪ッ子ですよ』と云ふてやつた。そこへ社長はんが来て、わていのことはまだ出初めやよつて、暫く『おれが預つて置く』と云やはつた。

それからまた二階へいてをつたら、魚徳のおかみはんに呼ばれた。同じ席に出た○○電気會社の○○の山本はんが相談でけるのならとのことで、わていは承諾した。どないせい、さうなつて行くのやろさかい。小作りでも、ぴりりとした人物の情愛には、わていも動かされてしもた。初めは○○○○○○○、二度目はわていが勝利を得た。郊外電車がないやうになると困る云ふて、還は『また會はう』の一言を殘して、丁度十二時が鳴ると同時に別れた。わていは少し後れて歸つた。

姉ちやんは、もう、よう休んでゐやはる。わていの『欺かざる記』（獨歩作）を見てゐやはつたかし

て、わていの小机の上に明けてある。このうそ付き作家！赤いインキで『自ら欺くの記』とわていが訂正したのを見よ。こんた尤もらしいことなら、耶蘇教のなまぬるい信仰と形式とを持つてをりさへしたら、誰れにでも書ける奴や。ほんまに欺かざる記はわていのや。

就褥、一時十分。

四月七日。曇。起床十一時十五分。けさ、夢を見た――いやな夢！憎い夢！どこか、活動寫眞のやうに動いて行く林の中を、昔の戀人（など云ふてやるのも殘念や）が追ひかけて來た。

『これ、須川さん、須川さん！』

『畜生、今一遍お崎と呼んで見い、承知しやせんぞ』と思ひながら、わていは一目三に逃げた。宣教師の前でばかり、信仰深さうな教師顏してをつて――二度と再びそないな手に乘りやせん！」

ぱツとその光景が消えて、ぴか〳〵と光る白紙のやうなおもてがつづいてをる思たら、また別な光景が現はれた。獨身のメリエザ孃、川口女學校の校長がいつもの通りにツこりして、あいつと握手をしてをる。まさか、くツ付きやせんやろに、校長さんはどこからか飛んで來た赤ん坊を自分の子のやうに抱いた。それがわていの憎い、憎い違坊であつた。きやツと云ひかけて、聲が出なかつた。

姉ちやんもわていの跡から起きて來た。血色のない、あないな青ざめた顏にわていも段々なつて行く知らん思たら、身振ひがした。十二時が鳴つてから、一緒に御飯を喰べたが、

『清水はん、よんべに限り呼んで呉れはりやへん』と、かの女は恨み言を云ふた。

『あないな奴は、おれに嫌ひだ』と、淸水のわていに云ふたことを思ひ出した。が、わざと『けふ、呼んで呉れまツさ』と答へて置いた。

食事が濟むと、姉ちやんは寢まきのまま、またごろりと横になつた。そしてきのふの小說の續きを讀んで呉れと云ひ、よんべ今一つのを見たけれど、面白くないと。

『そりや、こツちやのは理窟の日記だツさかい、な。』

でも、『放浪』もあまり過ぎる分子と堅過ぎる理窟とが混合してをるのは免れない。

午後三時過ぎ、母がやつて來た。もうお金を欲しさうにしてをつたけれど、わていはとぼけて、『この社會は却々面白おまんなア』などと云ふてやつた。娘を賣つた身の代金は數日前その懷ろに這入つたのやないか？まさか、それを誰れか好きな若い人と一緒に、もう、飮んでしもたと云ふやうな筈はあるまい。慾張り婆々ア！醫學生とでも、私立大學生とでも、勝手に不釣り合な道樂をするなら、するがええ――わていを二度とは苦めまい！

黄色新聞社の長沼はんがちよつと遊びに來いと云ふて來た。姉ちやんが行かんのも惡い云ふさかい、行た。この社長の控へ所同樣にしてをる、川佐と云ふ料理屋の一室に、よんべの掛かきもをつて、酒を飮みながら、豪傑然として面白くもない日本畫を書いてをる。

『おい、春子』と、この人が一番初手の言葉や、『ゆふべアおれを振つた、な。』

『お氣の毒だんたア』と、わていは笑つて冷やかな目を向けた。

『あすは、うんとお前の惡口が出るぞ。』

『どこへだツかい、な？』

『黄色に、さ。』

『旦那、ほんまだツか』と、わていは困つた風をして、默つて微笑してをつた長沼はんに聽いた。

『もう、苦勞人じみて來たぞ』と笑ひながら、渠は社長らしい樣子をして、わていをええ藝子やさかい、新聞で肩を持つてやるのや云ふた。うそにも、それはありがたかつた。でも、賴みもしやせんのに。

お座敷へと迎ひに來られたので、屋形へ歸つてから、支度をしていた。今夜の宴會は話振りで市會に關係ある人達のと見えた。その中に、○船會社の○長大川はんもゐやはつた。その肥えて鼻血の出さうなからだを、この夜、わていが引け受けることになつた。第一回、○○○○○○○○。第二回、○○○○○○○○○○○○○○。第三回、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

四月八日。曇。(昨夜、雨あり。)けさ、早く屋形へ歸り、一寢りしよ思たら、雇ひのおばはん本姉ち

やんのよ食べていつも取つて置いて呉れる寝床をびツくり返つて、あいもふ寄る食て赴いたやうにおもてへ流れ出てをつた。をかしい、なアおもて、母をといてをつたら、おばはんが隣家の方から出てきして云やはるには、姉ちやん昔行かおこつて、わていの寝床を試驗ばしやるやうや。何までおこへんおもて、長襦袢のまま床へもぐり込んでしもた。

右の肩を摘へてわていを引き起したものがあるので、びツくりして目を明けると、姉ちやんがふいのとけた顔の上へ二つの目をぎろつかせて、

『この薄情な子、ようわていにお茶を引かせはりました、な』と怒鳴つた。

『何をおいやはんのや』と、わていも出し抜けに腹が立つた。

『わていの旦那を横取りしやはつたやおまへんか?』

『阿呆らしい!』

よう聴いて見ると、清水はんがよんべも、おとつひの晩も呼んで呉れなかつたのはわていの仕むや邪推してゐやはつたところへ、けさの新聞には、薬がよんべわていを島卯で待ちぼけしてをつたと書いてあるのを見て、いよ／＼妬ましうなつたのや。その上、わていのことを御山讃めてあるのや。黄色がわていを讃めるとか、くさすとか云ふことはきのふ聴いてたんやけど、よんべは清水はんに逢ひもせなんだんやし、また、口がかかつたことも聴いてやへん。島卯のことは新聞記者の造りごとか、

それとも、實際あつたことを僅かに附け足したんか？

『あの旦那は一晩でも數子抜きでをられん人や』云ふたかて、わていの知らんことは知らんもんがや。なんぼ詮擇したかて、あのヒステリ傾向にや分りやへん。厭や、厭や。

面倒いたら、いつそ、横取りしたろかい？

きのふからの日記をここまで書いてをつたら、格子さきへ俥がとまつた。まさか山本はんや大川はんではあるまいとおもてたら、

「姉さん」と云ふ聲が聽えた。

おばはんが忠義振つて達坊をおくらせようとしたので、わていはおこり付けてやつた。これはあながち姉ちやんに對する當て付けばかりではない——あの淫亂な、慾張り婆々アが、きのふ素手で歸つたさかい、今度は又た子供をおだてて、ねだりに來させたのや。わてい、子供は見たうない云ふてる弱みに付け込んで、わざとらしく俥で送つて來た。よんべもろた五圓札四枚の中から、一枚をやつて、中の敷居をまたがせんで追ひ拂ふてしもた。畜生、僞善者——善意のかたまり！憎うて、憎うて溜らん。どないにしてやろ？

氣がくさ〳〵して來たので、ヴイオリンを焼け彈きに彈いてやつた。隣りからは、愛子姉はんのしめやかな地唄、三味線の音が聽えてをつた。毎日、毎日、曇つた天氣ばかりで、東京なら花曇りたら云

ふのやろけれど、色のない大阪では何の風情もありやへん。山本はん、富田でも贔屓して呉れはつたらええのんに。あの人はこツそり注文して呉れた帯は二三日中に出けるやろ。

今夜、姉ちやんはいそ〳〵してお座敷へ出て行た。あれで三味線でも弾けば、どんなにでも口が掛けやろかい？

わていのお座敷には、おとつひ見たお爺さんもをつた。相變らず鼻の下が長い。宴會が濟む頃、關田から清水はんにもらはれ、うそにも、その熱心に感じた。もう、姉ちやんも、くやみもあつたもんやない。○○○○○、○○○○○○○○○。○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○。

四月九日。曇。嬉しや、けふは箕面公園に行かれる。あそこには多少の花もあらう。天然の景色には申すまでもなし。それに、立派なお客のお座敷やて、いツちええ着り物で来いと。お茶引きの姉ちやんなんて、心悪いほどねめ付けてゐやはるけれど、かまへん。

四月十日。曇。午後より晴る。きのふのお客は○○大臣の○○はんであつた。箕面動物園内の松風閣で、並みのお客は入れん家やさうやが、會社のおもな人の必要に應じてお座敷をあけるのや。この○○會社の社長はんで、肥えてにこ〳〵しやはつとる○○と、何たら云ふた京都の代議士とが二人で大臣はんを持て做してをつた。政友會がどうの、非政友の團體が必要のと、何やはツきり分らんこと

を云ふてゐやはつた。わていのいッち嬉しかつたのは。山本はんが來とつたことやけれど、あの人は氣の毒なほど遠慮して、三太夫のやうな役目をやつてゐやはつた。藝子では、南の八千代はん、秀勇はん、春蝶はんなど、北のでは小金はん、清子はんなど、みなちやき／＼の連中へわていも這入つたのや。山本はんがわていをかげに呼んで、

「今晩は、お前、とまつてお客のおとぎをするのだぞ』と云やはつた。

『わてい、いややし』と答へて、わていは渠をうらめしさうに見てやつた。實際、いややないか？一晩でも世話になつた人が他のお客のおとぎに出よとは、あんまり水くさい。それが大臣であらうが、參議であらうが、それを面と向てわていに云ふのんは！

「でも、賴む』と無理に云やはるのんで、何か知らんけれどわけもあらうおもて、とまつた。そして、けさ、十時に別れた。〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇。〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇心臟が弱いので、〇〇〇〇、でも、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇』それぞれ〇〇違ふ。山本はんは唐がらし、大川はんは引き臼、この〇〇はんは樽のやうで、からだは大けいのんやけれど、賴りがない。

けふも、姉ちやんと云ひ合ふたのんで、川佐へ長沼はんを訪ひ、智慧を貸してもろた。

『清水を取つてしもたんやろ』と聽きやはるさかい、

「ようや」と白状してしもた。そして長沼はんの世話でわてい置り一所に居ることにして、後と——いややけれど、そない褒めるさかいに——呼びよせる手紙を出した。清水はんの實家がないのんなら、わていが直に行て、云ふのんやけれど。——どないせい、今晩もここに寢かせんやろさかい、けふはこのままにしといて出てやろ。

四月十一日、晴。もう、姉ちやんに會ひたうないさかい、往なんで、あさから〇〇に遊んでをつた。長沼はんに電話をかけたりして、お晝御飯を喰べてから新らしい屋形へ來た。好かん婆々アやけれど、嬉しさうに働いてをるのを見ると、今の身に頼りない人ともおもへん。どないせい、墮落の淵なら、親子もろともや。

「子供を産まんやうにせいよ。」そないなことは、ちやんと分り切つてるやないか？あの憎い〳〵餓鬼で既に已にや。ああ〳〵、これからは母と娘と、親子水入らずの濁り江や。あの姉ちやんと離れただけがまだしも氣を樂々させる。

帶が屆いて來た。誰れからやと母が根問ひしたけれど、そないなことはこツちやの腕にあり、さ。

二一申す必要はない。

金曜日はいやな日や。果して今夜めんどいことがあつた。外でもないけれど、長沼はんのお座敷へ行つたら、意外にも、例の畫かきや外の記者はん連にまじつて、金子澱江はんがゐやはつた。この連

中の新聞にゐやはつて、センチメンタルな抒情文が得意なのんは、兼て知つてはゐたんやけれど、今夜會ふとはおもはなんだ。川口女學校で、あいつ等と一緒に教師をしてゐやはつた先生やないか？わざとあの時の話を持ち出して、わていをいじめるのんやもん——腹も立つし、また情けなうもなつた。

『ええ新聞種がでけたぞ』と、長沼はんは喜んだ。

『これこそ出してもろた方がええ。』云ふたら、

『江戸のかたきを長崎や、なア』と、澱江はんが云やはつた。

『無論だツさ！』おもて向きばかり聖人振つた奴等に對して、裏の裏の實生活を渠等の前に公然とへけらかしてやりたい。

今夜も清水はんや。○○○○○○○○○。○○○○○○○、○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○。

四月十二日。晴。買うてからまだ讀むひまがなかつた『新小説』を開けてをつたとこへ、清水はんがやつて來た。銀行からの歸りに直に來やはつたんやろが、紳士としてこないなとこへ見ツとむない——餘程のぼせてゐやはるのやろかい？ぼんちにちよつと毛の生えたとこやさかい、たア。それにしてもあの婆々アがをかしかつた。帯のお客はんおもたのやろ、

『きのふは結構なもんを――』

『ふ、ふん――お母はん、ありやわていが買うたんやないか』と、わていが胡麻化してしもた。

『春ちやん、けさの黄色讀まはりましたかい、な？』

『ええ――新聞屋なんて、ええ加減なことを云やはりまツさ。』

『さよか』と、渠は云つた。

比叡山下の日吉祭

比叡山のふもとなる官幣大社日吉神社の古式祭次第と云ふは、每年四月三日に先づ『お輿揚げ』と云ふのがある。乃ち、牛尾三宮兩社の神輿を牛尾山上の社殿にかつぎ揚げるのだ。同じく十二日に、再びこれを舁ぎおろして本宮の拜殿に据ゑ、十三日に本宮、牛尾、樹下、三宮等の神輿を日吉神社の宿院に遷し、『花渡り』の式、『獻茶』の式があつて、『未の御供』を行ふ。それから十四日になつて、奉幣使（地方官がこれに當る）が宮內省よりの御幣物を奉つて後、すべて七社の神輿が出御する。

この日の輿丁として參勤を得たるものは、昔は近江の國では滋賀村全部、山城の國では高野、八瀨、一乘寺、修學院等の諸村であつた。明治時代になつては、この古式を坂本祭りと稱することになり、地もとなる坂本村の人々が特に力を盡して來た。この神は、もと、大比叡に祭られてゐたのだが、延

暦寺の爲めに山王權現として小比叡に遷され、その神輿はかの手荒い山法師の翫弄物となつたこともある。坂本村の人々は叡山の仕事で生活して來たもの等だから、いまだに荒法師の遺風がある。そしてその家の格式に從つて誰れが一番を舁ぎ、誰れが二番を上げると云ふ八釜しい定めがある。

その當日になると、きまつた輿丁どもは至るところで歡迎の盃を仰ぎ、酒の勢ひと春ののぼせとに多數の人氣とに乘ずるのであるから、なか〳〵殺氣立つのだ。喧嘩祭りの俗稱を得てゐるのは尤もらしい。僕は明治三十五六年頃を三ケ年間つゞいて毎年この祭りを見る機會があつた。その或年、京都の俠客なにがしと云ふのが見に來てゐたが、輿丁どもに何か無禮な行爲があつたとかで、子分どもの尻込みするにも拘らず、自分は御輿の通り道に兩手をひらいて立ちふさがつた。うへの方から坂おとしに飛んで來る神輿に押し倒され、踏み敷かれたかと思ふと、なにがしはらくに輿の棒につかまつて一緒に運ばれるさまであつた。これを見た村民は怒つて渠を丁度橋の上のところで引き放し、もみぢの木の多くある谷あひに突き落し、石や床几を投げかけて、渠の頭蓋骨をうち割つた。

渠が斯う云ふ見じめな目に會ふまでに渠の子ぶんどもは逃げて、その場にゐなかつた。渠は自分の割れたあたまを自分のふんどしを取つて縛り、兎も角も獨りで、大津の縣立病院さして急いだ。その車が二里餘りを來ると、左馬の介駒どめの松のところで、太郎吉と云ふ子ぶんが待ち受けたやうに飛び出して、

『親ぶん』となつたしげに聲をかけた。が、親ぶんは二度と見向きもせず、つぎの者まけぞ云ふのまにと云ふ聲をあとに殘して、車に運ばれて行つた。それを追つて太郎吉も病院へ行つたが、他の見舞者等と同樣に面會を許されなかつた。そして親分は其晩から熱を聞いてやつて來た實親のもとにはおず取り圍まれて死んでしまつた。卑怯の爲めに素人に且傷られたのを悔んで、親分を慕ふて男泣きに泣いたのは太郎吉であつた。

その翌年は必らず仕返しがあると云ふ風說で、その備に於いても注意を怠らなかつた。十三日の夜、午の神事があり、二基の神輿を牛尾山上から昇ぎおろすには、甲冑を着したもの數十名が前後を警護し、多くのたい松や高張り提灯が山道の險阻を照らし、輿丁一齊にときを作つて走り下る勢ひは、あたりに立ち竝ぶ多くの見物と多くのふる杉とをゆりどよもすばかりである。太郎吉をかしらに數十名が亡き親分の名譽を恢復する爲め、果してここに來てゐるのだが、いまだ手を出さないうちに神輿は本宮の拜殿に納まつた。斯くて十三日の御輿入れとなり、次ぎに花渡り式あり。甲冑を着した兒童が種々の造花を大指物としたのにつき添ひ、これが警固の雜數十名、それぞれに先祖傳來の具足をつけ、先きなる緋おどしはもとの庄屋、次ぎなる黑皮は明智が家の末裔、三は卯の花、四は褐鎧、加藤清正の遺物と稱する烏帽子もあり、赤地に竹の葉の直垂れもあり。すべて着飾つて神輿竝に本宮の參拜にのぼるので、百姓やてら小使ひどもの行列とはちよツと見えない。が、太郎吉はこれに對し

て、見物の中から、鳥居のかたがはで、
『あの間抜けたおさむらひを見い』と叫んだ。同時に、申し合せたかの如く渠には最も手ごたへのある仲間のあざ笑ひが聽えた。すると、向ふがはでもこれに應ずるやうなあざけりの聲があつた、――
『どいつもこいつも屁ツたれのやうで――腰の据わつたものはひとりだツてをりやせん。』
この云ひぶんは如何にも事實であつたが、儀式としては無事に獻茶式に進み、神社の用水走り井の清水をわかしたので茶を點じ、これを宿院に入れた四社の神輿に奉る。次ぎを朱の御供と云ひ、西京日吉神社の神職がこれに參勤する。御供物の中には白羽矢、造花、雛人形、ふくら雀等、小兒のもて遊ぶ物があるのは、別雷神降誕の儀式が今にその一部を傳へてゐるのだと云ふ。この式が終ると、輿丁がかけ參じ、四社の神輿を舁ぎて勇むこと暫時。やがて甲冑武者の驅けつけるや、輿丁どもは神輿の擡動をとどめて高くこれをさし上げる。そして四基が齊しく整ふと、獅子舞が演じられる。それから神人綾織の曲あり。扇の揚るを合圖に御輿を一齊に殿下に落し、輿丁これを受け舁いで疾風の如く驀爭して走る。むかし、藤堂侯この景況を見て嘆じて云つた、『この勢ひを以てせば百萬の軍に敵すべし』と。夜中だけれども、庭燎の光は皓々として殆ど白晝を欺く。見物するもの等がわざと輿丁の進行を妨げようとするのが例年のならはしたのを幸ひに、太郎吉どもはここをせんどといろんな邪魔を加へ、小じやりや燃えたたい松をなげなどした。けれども、一は神輿の鳳凰を燒き、一は左り側の鳥

居ねたを倣り、また一は一輿丁に重傷を負はせただけであつて、あまり注意するほどの問題にもならなかつた。

翌十四日は上の官幣大社の例祭で――午前にそれぞれの式あり。さきに本宮から大宮四宮の各神社へ奉遷したおほ神が午後三時頃に歸つて來る。これを神輿が奉迎すると、護衛の武者どもは列を成して從ひ、遲咲きの花が散り敷く馬場を徐ろに渡り行きて本宮に進み、神前に參拜する。稚兒一名、大津より附き添ひ、黒の袍を着て馬上にあり。あげ切りと云はれて、むかしはそのまま神の生けにへになつたものらしく、今日でも、參勤がすめば裏道からこツそり逃げて行くことになつてゐる。

つゞいて幾百かの輿丁どもが疾走して來る。そして一名の武者が扇の手を開くと同時に、有名な『拜殿出し』が始まる。御輿七基はすべて宵宮からここに入御あり、左右におの〳〵三基、中央に一基、互ひに輿の棒をまじへて据ゑ置かれた。待ちに待つたる輿丁どもは、それ〳〵自分等の受け持ちを舁き出さうとしてあせり合ふ勢ひは、全く何かの無形力が乘り移つてるやりで、恰も拜殿は振動し、觀客もおのづから畏を感じないではゐられない。そこに、然し、順序があつて、出は一に本宮、二に大神、三に宇佐、四に牛尾、五に白山、六に樹下、七に三宮の神輿である。

さて、樓門外、春日岡のあたり、あまたのおほ杉直立してかう〳〵しいその樹かげに於いて輿の裝飾を終る。この時、本宮の輿前で宮司は笏を取つて東遊の歌を奏す。それからいよ〳〵『坂おとし』

となる。双合の坂、道は廣く一直線に波止戸の橋を渡つて、日吉の馬場に出る。その中段、橋の少しうへのところが最も嶮しく、乃ち、去年の親ぶんが立ちふさがつて輿を押さへようとしたところだ。太郎吉どもはまる一年來の悲しみと恨みとを新らしく感じながら、このあたりの雨がはに陣取つて、私かに仕返しのをりを窺つてゐた。ところが、もツと高みにあつて、御幣を結びつけた長い竿の倒れるのを合圖に、本宮は威勢よく坂を落して來た。輿丁どもの足で驅けるのではなく、見えぬ羽根がはえて飛んでるやうな疾さだ。ほんとに死んだ親ぶんの如くいのち掛けでなければ、とてもこれをさえぎることはできなかつた。四隣、風を生じて、かな具の響き戛々として過ぎ、橋のうへで肩を替へたが、その手ぎはには一寸のゆるみもなかつた。やツさ、やツさのかけ聲は觀客數萬人の間を馬場の方へと勇んで行つた。再び幣が動くと、二の宮が來た——また、宇佐や牛尾が。斯くて太郎吉はぼんやりしてしまひ、

『とても、これはかみごとや』と嘆息した。そして、つひに全く手を出すのを斷念し、最後の三宮のあとから渠は唐崎に向つた。御輿はすべて八本柳の濱邊から御乘船あり。湖上の競爭して唐崎の松かげに着御すると、本宮の御座船は粟津の里から競漕して來た供物と大幣束とを受ける。この時、丁度ゆふ日が西に傾かうとしてその殘りの光を湖上によこ投げにし、すべての御輿の装飾は浪と共に輝き、粟津御供船の奏樂はその調うるはしく颯々たる松かぜと相ひ和した。ここを見ると直ぐ、太郎吉

けその妻を仲間から隠した。そして左馬の介が一つ桜のもとに來た。團はここで團三んを最後に見た記念として、再びここで喧嘩用の懐中の短刀で申しわけの割腹をしようかと考へたけれども、なかなか斷行し切れぬうちに仲間どもが來て、

『いかにもわしは卑怯や』とぐずねる菜を無理に京都へつれ歸つた。

その夜の琵琶湖は大菊華の紅燈數千を以つて照らされ、白い浪も赤く見えた。が、合圖の太鼓で七社の御船はすべて勢ぞろひを為し、再び海を競爭しつつ無事に還御となつた――如何にも無事に――そして坂本村の人々が太郎吉のことを傳へ聽いてぎよツとしたのは、その年の日吉祭り熱が二日と過ぎ、五日と去り、全くさめてからのことであつた。（大正六年九月）

僕の娛樂

元日早々から議論でもなからうと思つて筆を執ると、先日或雜誌社から、新年號に出す問題として、『最も好む娛樂』は何だと質問して來たことが思ひ出される。僕は之た答へて、わが國の婦人がいつまでも受働的で、愛せられることを望むばかりで、愛する方の表情に乏しい間は、藝者の階級が最も必要であるし、更らに進んで云へば、百人、千人の美人にかこまれて、純粹の日本酒を飲むか、佛蘭西のアブサントをすすることが出來たら、無上の娛樂であらうと云つて置いた。

全體、わが國の男子は、老いぼれ易いものと、ます／＼活氣が出るものと、その旗幟が餘り鮮明になり過ぎて居る。老いぼれ易いものは年一年に老い込む樣子が見えて行くし、活氣のあるものは年毎に若くなつて行く勢ひを示めして居る。後者の部類に屬するものが、段々世が頼母しくなつて來るに從つて、わが國の社會が無趣味で、家庭がまた寂寞であるのを感じて來る。僕などはその一人である。

世が頼母しくなればこそ、自分のエネルギイを蘊蓄する氣にもなれ、その間に氣休めを要する。然し、現今の婦人の狀態では、男子が家庭に於て女房や子供を相手にするのでは、まどろッこしくて、決して直接な滿足は得られない。氣力の盛んなものには、尚更らそれが熱烈に感じられる。外へ出る野郎ばかりでは、いつもやはらかい空氣は吸へないから、たまには、友人として話せる婦人を訪問する。話がはづまないことはないが、僕等は一般に三味線はやれない、さりとて、西洋音樂を知つて居るのでもない。歸するところ『左樣』、『然らば』に少し毛の生えた交際に過ぎない。

最も直接で、最も無形式な氣休めは、藝者の社會に於て發見することが出來る。理想とか向上とか云つて、身づから欺き上品がる人々は、到底、この切實で實質ある要求を解することが出來なからう。エネルギイが壓迫または蘊蓄される度合が多ければ多い程、僕等はこの苦痛を育て養ふ方法が直接、無形式でなければならない。古典肌の人間は、卑怯にだけ、エネルギイを用心して使ふから、氣違ひになる心配はない代り、形式的な間接娯樂を以つて滿足して居るに過ぎない。然し、如何に直接

に殺われたの進禮で出来るからと云つても、頭腦を使ふものはさう毎日酒と歌とに耽つて居られないから、僕などは玉突きをやつて済まして置くことが多い。

玉突も非常に切實な氣休めになるものだ。僕も之をおぼえてからもう拾年以上になる割合には、一向上手にならないが、肺を病みて琵琶湖畔に隠退して居る時、殆ど半年ばかりは玉突三日を暮らした。一時は失望したが、僕はエマソンのやり方に従つて、肺を直すに、薬に手頼らないで、氣を以つて勝つたのである。その後、貧乏して困つて居た時などは、玉の代りにおきやがり小法師の小いのや大きいのを澤山買つて置き、讀書や執筆に倦んじて来ると、之を一掴みにして盤の上にすらりと投げる。その投げ方、ころがし方によつて、種々な形勢を現ずるのである。

大きいのから小いのが一列に並ぶこともあり、すべての法師が前向き又は後ろ向きに揃ふこともあり、また一つ置き前向きにと後ろ向きとになることもあり、兵隊の進行の如く二列、三列、または四列に組み合ふこともあり、三々伍々別働隊を形作ることもあり、向き合つて喃々密語する如きもあり、くるくるツとまはつて鉢合はせをするのもあり。熟練の結果、すべてかういふ形勢は兩手の開きかたにあるのであつた。おきやがり小法師も亦、僕に取りては、藝者や玉突きと同様、精神の氣休めには最も直接なものであつた。然し、子供が大きくなるに従つて、その方のおもちやになつてしまつた。

娯樂といふことが、若し世人の考へて居る様に、贅澤な物で、あつてもなくつてもいいといふ様な

意味なら、僕には少しも娯樂はない、詩才のないのに詩歌を作り、樂才のないのに琴曲を彈じて、之をなぐさみとして居る樣なことは、豚に玉を投げ與へたと同樣、無意義である。僕等が詩人として詩を作るのは、僕等の生命、乃ち、苦痛である。僕にあるのは苦痛ばかりだ。之は僕の人生觀である。僕が以上に云つた氣休めも、この苦痛を育て養ふものであるから、苦痛の一部である。僕の娯樂は苦痛の避くべからざる要求であつて、決して苦痛以外に別に餘裕のある裝飾物ではない。『カイザルの物はカイザルに、神の物は神に』といふ樣なまどろツこしい考へを以つては、新時代の宗教國家が成立しないと同樣、娯樂を苦痛から離して見て居られる人は、到底、生存競爭の烈しい時代に生存する資格がなくならずには居られないのだらう。（明治四十年一月一日）

ロスケ小屋

この新年を僕は樺太で越年するつもりで、——然しそれは事業の失敗の爲めに空望となつたが——小い家を一軒買つて置いた。それはロスケ小屋であつた。樺太には隨分諸方で見ることが出來る露西亞人の遺物だが、丸太を横に組みかさねて四壁となし、相當なところに窓をくり明けてガラス張りにしてある。どの小屋も大抵は二室ぐらゐで、三室もしくば四室あるのはすくない。して、家の眞ン中には必らずペチカといふ釜土兼用の煖爐があつて、朝に一回、晩に一回の焚木をくべると、終日終夜、

いづれの室もあつたかみを絶やさないやうになつてゐる。

僕が方々の貧窮露人や露營の百姓家を訪問したのは夏であつたが、如何に涼しい、否、ひイヤーとする日でも、ペチカの火氣が恋しいので、長く一室にとどまつてゐることが出來なかつた。ピレオへ行つた時などは、不慣れの日本人には室内の熱さに堪へられないだらうからと云て、屋外の庭に向つた涼み臺で御馳走になつたが、そこへ置かれたテーブル掛けには南京蟲がくツついてゐた。ロスケ小屋で厭たのは、第一に南京蟲、第二に、風の吹き込む壁の透き間や煙のもれる煙突の穴などに、馬の糞をなすりつけてあることだ。然し、僕が好んでロスケ小屋を選んだのは、冬、最もあつたかいといふからであつた。

僕が賃つたのは二室の小屋だ。その外部の横手と後ろ手とには、一間ほどの幅を延長して、板おひがしてあり、直接の日には當らないで、水仕事が出來る樣になつてゐ、また鉄釜の風呂も立つ樣になつてゐたが、室二つのうち、一つは狹くて寢どころ用にしかならないので、實際に書齋としてまた寢室として使へるのは一室しかなかつたのだ。ペチカもついてはゐたが、古びて、もう、用ゐられないのであつた。露人なら、三年目に一度ぐらゐその煉瓦をつみ換へて、よく直すことが出來るが、わが國人がそれを眞似ても、うまく行かない上に、まかり間違ふと、火事を起すおそれがある。それを使用しないでも、壁が切つてありさへすれば、ロスケ小屋は、わが國の家屋よりも、ずツとあつたかい

のだ。

僕のは、樺太西海岸のマオカといふ港のはづれにあつた。水道がひかれるので、水も四五圓行けば汲まれるやうになるのであつた。マオカは樺太唯一の不凍港と云はれてゐるだけ、海水は遠くまで凍らないが、市街は雪を以つて吹きまくられ、道路は氷を以つて閉ぢ籠められ、家に貯へる汲み水が直ぐ石になつてしまうのは勿論、玉子も、葱も、キヤベツも、皆、しわれてしまう。人も亦、外出して、雪焼けの爲に、つひに足を失ふ樣なことがないでもない。そんな寒いところの、そんな古びたロスケ小屋に立て籠り、僕が一冬を送らうとしたのは、現代の文學界に對する興味を氣まぐれに失ひかけたのでも在ただらうが、また一つには僕の始めた罐詰事業の第二年目の經營を自由にする爲め、副業として、樺太の山林の木材を切り出す計劃を立ててゐたからである。

僕はさういふ事業に全力をそそげばよかつたのだ。製造人や、雜漁者や、運送業者や、罐詰問屋や、大工、木挽、木樵などには、僕のやり出し方によつて進退を決しようとしてゐたのがあつた。然し僕は、金錢慾に淡白過ぎただけ、この種の事業をする資格を缺いてゐたのだらう。渠等が、僕の計劃をたよりに、僕の周圍に寄つてたかつて來るのを平氣で、玉突や酒色に耽つてゐた。その年の罐詰事業が到底うまく行かないのを知つてゐたからである。これは、もつとも、僕自身の惡いのではなかつたが、僕が信じて僕より前に遣はした人物の經營が、初めからよろしくなかつたのを、僕が行つてか

ら、發見したので、どうせ失敗なら、飲んで遊ぶといふ氣になつたのだ。前文の問題に對する、肝心の本業がまだ僕のあたまによく這入り込まないにも拘らず、僕は未練と女とに縛り、また[illegible]試みて、詩稿の方までも放浪して行つた。

失張り僕が悪かつたのだ。その放浪からマオカに歸つて來ると、僕自身がます／＼僕自身になつて來た上、僕の收穫が一時中絶する時期で、製造所には、傭ひ人がすべて手を空しくして、遊んでゐるし、金の運轉が全くつかなくなり、僕は僕の宿賃にも困る樣になつた。その間にも、僕は僕のロスケ小屋の越年を考へてゐた。失敗の挽回策をそこで實行する筈でもあつたが、一方に二、また、冬分の用意をして、そこで、のんきに、讀書と創作とをやつて見たかつたのだ。それに付、そばに侍りゐて呉れるものが必要なので、東京から愛婦を呼び寄せるつもりであつた。

然し事はすべて僕の考へ通りに行かなかつた。東京への仕送りが全く出來なかつたので、愛婦が先づ僕にそむいてしまつた。次ぎに、また、僕がマオカに滯在してゐると事業上の費用がかさむので、或要件を兼て北海道に渡つたが、その要件も滿たされないで、徒らに放浪する身となつた。且、僕が樺太を去る時、第二期の事業費として、數百金を拵らへて殘して來たそれも、亦、第二期製造場の擴定ぞこなひやら、二ケ所に製造所を分けた間違ひやら、惡辣な人物を世話人に加へた失敗やらで、たく空しい出費となつてしまつた。して、僕にそむいた女が――別な男に棄てられたのであらうと思は

れた――再び僕を北海道に追ふて來て、病院に這入るといふさわぎになつた。

　僕は事業の失敗などは殆ど全く苦にしなかつたが、女の病氣は僕から移つたもので、隨分長くかの女を苦しめてゐたから、女が一緒に死なうと云ひ出した時には、僕も全くその氣になつた。どうせ酒に溺れ、遊里に入びたつて居た程であつたからである。然し僕は、その少し以前に、田中喜一氏の『岩野泡鳴氏の人生觀並に藝術觀を論ず』といふ文が掲載されてゐる中央公論を、直接に田中氏から送られてゐたので、それに對する反駁文を起草中であつた。反駁文は『悲痛の哲理』(文章世界新年號掲載の筈)と稱し、生の哲學を說いてゐるのである。苟も生を說く間は、僕に死を急ぐ必要はなかつた。そのうち、女のところへどこからか手紙が來て、或人と結婚をしないかと申し込んで來たので、かの女も亦氣が變つてしまつた。どうせ、かの女と僕とは、その時、心中しない以上は、一緒に住むことは出來ない事情になつてゐたのだ。

　あのロスケ小屋を占領して、かの女と共に樺太の氷雪に立て籠ることが出來てゐたなら、今頃はさぞ面白かつたであらう。僕等の木挽は樺太の深林中で官憲の刻印した木材を切り出し、僕等の大工は挽かれた板に寸法を當てて、本年の事業開始期から必要な罐詰や樽箱を拵らへてゐただらう。して、僕等ふたりは、あつたかい室に立て籠つて、外の氷の上をアイノ人が驅る犬橇の鈴音を聽きながら、眠るだけ眠り、食ひたいだけ食ひ、眠りに飽き、食ふに飽いた時は、かの女をそばに坐わらして、僕

はちいさい胸に向ひかの女と僕との將來と二年間に渉る關係を小說に構成し、[illegible]
から、僕はその長篇の描寫をつづけてゐただらう。

然し僕は今や樺太に於ける事業の失敗者であると同時に、再びかの女にも棄てられた敗殘者であ
る。樺太に於て占領しかけたロスケ小屋を築くとの直後に於て思ひ浮べながら、[illegible]
小說をここで筆にのぼさなければならないことになつた。小說の表題は「努力」といふ。勿論、努力
と云つても、デカダン的努力を云ふのだ。隨分長くなるだらうが、これを以つてこの明治四十三年に
於ける僕の文學的活動の主もなものにするつもりだ。

北海道の天然

本年の六月、樺太に渡る途中で僕が一寸札幌へ立ち寄つた時、停車場前のアカシヤ街や、ドロ、イタヤ、アカダモ（ハル楡）白楊樹の蔭多い道を通り、第一に外國じみたところだ、など云ふ感じが起つた。然し樺太の別風景に接してから、再び北海道に來た時は、もう、さほど珍らしい感じは起らなかつたが、なほ、內地のことを考へると、丸で氣持ちが違つてゐた。

札幌は、石狩大原野の中央に開らかれたのであるから、その市街の井桁は縱橫自在に、飽くまで正確な角度を以つて延長し、南北何條、東西何丁目の末は、いづれも新開の耕地、林檎畑、牧草地、ま

たは荒漠たる荒蕪地の間に消えてゐる。道路工事もこれ位自在に正確を保てると、殆ど天然の自畫として見てもいい。京都市中のそれなどは決して比較にならない。その上、積雪を防ぐ家の建て方が違ふし、道ばたや庭の立ち木の種類も違ふ。

さかさ箒の如く、細高く空天にそびえる白楊樹は、内地で云へばいてふの格だらう。普通の柳の代りにドロがあり、楓の代りにイタヤがあり、アカダモは北海道でなければ見られない楡の眞だ。同市の農學校附屬博物館庭内には、すべての樹木が見られて、夏は實にいいところだ。かういふ木々の蔭道を、近在から出て來る百姓馬子が、——男にせよ、女にせよ——青物を積んだ荷馬を引きながら、呼び賣りする。林檎、唐もろこし、甜瓜、大根、キャベツ（カイベツとなまる）、玉葱のおびただしいのも珍らしいが、くるみ、ココア、グズベリなどを特別に賣り歩く時があるのだ。して、又、唐もろこしの時期には、町の角々にこん爐を持ち出し、その實を燒き賣りする店が晝も夜も出る。その香ばしいにほひが札幌を代表する樣にも聽える。

小樽は、それと反對に、公園以外では樹木が殆ど見られない。且、山ぎはの海岸を控へて居るのであるから、道筋が正しくないし、又、道路は石ころででこぼこしてゐる上に、雨が降れば、それが深いぬかるみになつて、長靴でなければ、とても歩けない。然し商業地としては、人間が活動的で、寸時も心に暇がないし、而も金融機關がよく備つてゐるのだから、現今では、函館をずッと凌駕してし

まつた。札幌は閑靜な官吏町で、小樽は殷賑な商業地だ。函館に至つては、寧ろ青森や盛岡と同一に見傚すべきで、鳥渡見ても、實に因循なところだ。そこよりもツと寒い小樽や札幌でさへ、よく冬よけの軒下道は附けてないのに、ここだけは東北流のそれが附けてあるのも、その一例にならう。函館は早く開らけたが、時の進步に遲れたのだらう。

その他、岩見澤・旭川・帶廣の如き市街地も正確な道路が刻んである。道路の正確と無味とは、北海道で氣持がいいものの一つである。日高、十勝の原野に行くと、六里の道が一寸の曲りもないところがある。僕は馬に乘つて膽振、日高、十勝の山野を八十里ばかり跋渉したが、膽振から日高に跨がつて、三日路ばかりの間は、至るところ、地上僅かに一二寸を掘ると、ほの白い火山灰が五寸から一尺以上も積んでゐる。然しそれが樽前山を遠ざかるに從つて少くなつて行くのだ。專門學者は、それが舊石器時代に於けるこの山の噴火の結果だらうと推定した。火山灰地はすべて地質がよくないので、耕作には骨が折れる。牧場ぐらゐが適當だ。草木の發生もよくなく、密接するものは槲の林が、それもひねくれてゐて、立派に延びたのがない。

槲（でなければ、楢）の樣な濶葉樹の間を、日高、十勝の原野道は通つてゐるのであるが、僕の旅行が濶葉樹の變色時期に際會したので、膽振から、日高、十勝と進むに從つて、紅葉の光が段々出て來たのは實に見物であつた。北海道は、夏も短いが、秋も亦僅かの間に過ぎてしまう。十勝の高原に

來た時は、紅葉の間から、既に幸震岳の白雪を認めることが出來た。北海道の特色は十勝の原野にあると云ふが、十勝の特色はまた以平（いたらたらき）の高原にあると思ふ。黑い山葡萄の汁に渇を癒し、馬を驅つて、一直線に楢林の薄野を進みながら、目をつぶつて、樹々の木の葉が風に相觸れる音を聽くと、遠く近く急雨がやつて來たのかと驚かれる。して、目を開らくと、僕は青、黄、または紅色で彩取つた大風景の中を進んでゐる。

晴れ渡つた天空の藍のもとに、馬上の人は黑く地に投影し、すすきのぼつとした穗が近く遠くかさなり合つて、うす綿を敷きつらねた樣な原野に、木々の枝葉は青に、淺黄に、黄に、赤に、また紅。山は遠く薄墨の遠近と高低とを以つてうねり行き、その後ろから幸震岳がかしらを現はし、眞つ白に雪が積んでゐるのが見える。して、海岸らしい方向には、地平線と相つらなつて、灰色の雲が平らかに日光に輝いてゐる。僕は暫く馬をとどめて名殘りを惜しんだが、その荒馬のいななきが如何にも山野の應氣を呼び寄せる樣な氣がして、孤獨の停止に堪へなかつた。

釧路の大ガスも有名だが、生憎、それに出會ふ時がなかつた。十勝から石狩に越えるところは、また絶景である。その鐵道工事も亦稀有の大規模だ。ロッキイ山中の過道線とまでは行かないだらうが、渦のかはりに七曲りほど大曲りの曲折を以つて。南北に渡る連山の山腹を西東にのぼるのだ。槲や楢の林の間を、清水（アイノ語ケヘレベツの譯）からのぼり初め、一曲り毎に十勝原野の眺望が廣

くなるのだが、鐵道の曲り目までは數丁あるに反して、僅な距離と僅かの間を置いて直ぐ眼下に見えないところもあるほど、工事上の主眼に困難のあつたことが分る。それを登り詰めて、延長一千七百九十五尺（鹿兒島の矢岳隧道の海拔一千五百尺。それよりは少し低いが）の高所にあるトンネルを抜けると、その曲線道を越えて、十勝の大原野は遠く鐵道の一線に沿つて見える。僕がここを通つた時、雨あがりの車窓からのぞむと、その一線のうへしたに――夕かたであつたからでもあらう――赤みがかつたぼかしが附いて、近い山々の紅葉と相映じ、山にも野にもどことなく暖い光を包んでゐる樣な氣持ちを與へた。

紅葉の一名所神居古潭は、北海道には珍らしい内地的な小風景である。石狩川を兩岸から低い山が挾み攻めにする爲、流れは激して、川中に横はる岩々を噛むのだ。その末が大きな潭となつて、そこに渦卷をする水の深さを測つたものがないと云はれる。潭は絶壁のもとにあり、その絶壁の上を汽車が走る時、全體の景を川上に向かつて見ることが出來るのだが、兩岸の紅葉はさすがに馬鹿にはならない。僕は一夜をそこの温泉宿に過したが、雨あがりの朝景色を、潭のそばにかかつた有名な釣り橋に立つてながめた時は、實に奇麗であつた。ことわつて置くが、北海道には、もみぢは（變色のおそいイタヤといふ種類の外に）ないのだから、紅葉といふのはおもに槲でなければ、楢にして、赤ではなく、多くは黄だ。然し、黄色であつても、その間に、神居古潭では、内地の杉の如く直立する椴松

や蝦夷松の樣な青い針葉樹が直立してゐるので、それに對照して、非常に引き立つのだ。

石狩川は、北海道に於ける他の川と同樣、深い川である。深い川は、內地では、溢水の爲めに堤防を崩す樣なおそれもないと云ふが、事情が違つてゐる爲め、そのおそれが却つて多い。日高の染退川膽振の鵡川の如きは、深かつたのだが、每年、溢水の爲めに耕地や道路を十町歩も二十町歩も流すので、ただ無暗に幅つたい川洲になつて行く。つまり、――石狩川もさうだが――屈曲が多いので、水はけが惡く、流れが曲り角にぶつかる勢ひに抵抗するだけの力を、北海道の地盤は持つてゐないのだ。石狩川の溢水の爲め、岩見澤の全部並に札幌の半面が水に浮きかけたこともある。

北海道には桐の木がないと云はれる。然し仙臺の或古老の話に據ると、伊達家の一士が昔、本道に來て、桐の苗を澤山植ゑつけたことがあるさうだ。それがどこの山であつたか、記錄には殘つてゐない。ところが、近年、或人が金鑛や石炭鑛を發見するつもりで本道の深山をさまはつてゐて、ふと珍らしい林に出會したのだ。木はいづれも一かかへ以上あるが、幹にはすべて厚い苔がまとつてゐるので、何木であるか分らなかつた。然しその苔を剝いで、初めてそれがすべて桐の古木であるのを知り、人には祕してそのありかを云はず、或利益と交換する約束を結んでゐるうちに死んでしまつた。この發見を仙臺古老の話に參照すると、必らずどこかの山にあるには相違ないが、いまだにどこか分らない爲め、北海道で金儲けに熱心な人々の疑問になつてゐる。

本道の天然を語る間には、熊と馬と土人とを忘れてはならない。狼は全くゐなくなつたが、これも、懸賞をして狼狩りをさせたのが一原因だが、また、この猛獸の餌食たる鹿が殆ど全く滅亡してしまつたのにも由るだらう。猛獸の樣で而もさほどおそろしくないのは熊だ。山の「おやぢ」と云つて畏敬されてゐる。郵便物傳送の脚夫などは、近所にこれを見付けると、歩行をとどめて、そこらの石や木株に腰をおろし、煙草喫ひつつ「えへん、えへん」などと咳拂ひをして聞かせる。すると、熊は決して近よらないが、不意に二三間のところで出會すと、向ふもおそろしさの餘り、飛びかかつて來る。必らず後ろ足でつツ立つものだが、畜生のあはれさは内手が利かない透きのあるに乘じて、アイノなどはそのおやぢの胸ぐらに飛び込み、銳利なマキリを以て、立ちどころにその喉たる月の輪を刺すのだ。

馬は、熊の足跡を認めても、直ぐ悚んでしまうのがある。また急に逃げ出すのもある。僕が十勝の廣尾から大樹に渡る途中、栁、楢、またはドロの大木の間を、褪せかかつたブシの花がつづく山道に添ふて進む時、僕の馬は急に身振ひして跡ずさりするのだ。從つて、僕も亦それと同樣な戰慄を感じた。然し僕はどうせ破れかぶれだと云ふつもりで馬をぼツ立てると、馬は異樣な木の株を（おやぢと見違つたのだらう）横によけて、一丁ばかり驅け足であつた。北海道の旅行は馬がなければ出來ない上に、馬產國の名ある日高を通過したのだから、僕も自然にこの動物に關する智識を得た。日高で雖

馬に乘ると、必らず當歲または二三歲の小馬が、どこまでも跡からてく〳〵ついて來る。して、最も自由な放牧場地になると、牧場に牧柵がなく、農耕地に却つて柵をめぐらしてある。して、馬の子がいつ生れたのか分らず、いつまた馬が熊に取られたか知れないこともあるのだ。

アイノは敗殘劣等の人種だ。どうせ滅亡してしまうだらう。いばらや岩石の間を例の素足で驅けめぐり、もとの通り熊狩りや貂取りをやらして置けば、まだしも無事であらう。然し現今の如く、渠等の不得意な耕作を強いられたり、好みもせぬ教育を施こされたりしてゐては、惰弱と不勉強とに流れるのは當然だ。渠等は、神話的傳說とユーカリ、シヤコロベなどの古史詩を以つて、北海道の天然の成り立ちを說明した以外に、もう、何の任務も帶びてゐないのだ。貯蓄と持久心のないのは尤もなことだ。政府の保護を餘りありがたいとも思はず、おもに山行きでなければ出面取りにその日を送りつゝ亡んでしまうべき運命なのであらう。然し茫漠たる原野にひげだらけの老アイノに會して、土地の說明を聽いたり、また怒濤が寄せ來たる荒磯に、襤褸をまとつた若メノコが昆布拾ひを見たりすると、北海道はまだ〳〵渠等と離れがたい聯想を有してゐるのである。

僕が札幌を出る時はまだ紅葉には早いと云はれたが、僅か十數日の巡回で歸つて來ると、もう、札幌の道ばたに並ぶイタヤの葉が落ちかかつてゐた。して、烏渡まご〳〵してゐるうちに、市街にも雪が降り出した。北海道で長いのは、云ふまでもなく、冬だ。この冬の間に、深い山林の木材が橇を以つ

それはの間下を見おろした時に、日が晴んで、足もとがあぶない樣な氣がした。僕はこそ／＼と下りてしまつた。かう云ふ時には、僕はいつも不思議にもいツそ飛び下りて見ようかと云ふ、あぶない勇氣が出るのだ。その度毎に僕は、子供の時、大阪の天王寺の塔へのぼつたことを思ひ出す。

僕は天王寺の高い塔の最上層から、何心なく、こわいのを忘れて飛び下りかけた時、手欄干にとまつて漸く氣絶するのをまぬがれた。或人の實驗談を外國雜誌で讀んだことがあるが、高いところから飛び下りて死ぬのが一番樂な死に方ださうだ。この間淺草の十二階を飛んで死んだ人もあるが、日まひと空氣の急迫とにより、空間を落下する途中で、愉快な氣持で氣絶してしまうので、地上に當る時の痛みなどは全く感じないさうだ。今云ふ外國の落下者は、高い絶壁の上から落ツこちたのであつたが、跡から幸ひにも助けられたので、充分信用していい實驗を語り得た。高いところから飛んで氣絶するまでの瞬間――この瞬間が人間の仕事のほんとに出來る時だと、僕は思ふ。この心持ちを以つて人生にのぞめば、實行と文藝とは毫も區別がない。文藝、乃ち、實行、乃ち、人生である。

藝術至上主義も、佛蘭西のボドレルや英國のオスカワイルドの主張になると、一般技巧派の所謂「藝術の爲めの藝術」ではない。もう、外存的人生といふ樣な空觀念は大部薄らいで來て、內在的人生をすべて文藝のうちに攝取しようとしてゐる。それが今一歩自覺の境に進むと、僕等の文藝即人生主義に到着するのであつたらう。ボドレルやワイルドなどは、まだ、ことさらに文藝を口實にして、罪惡

をたばふ何者かある。此當時僕は、或學校に於て、ワイルドの論著『インテンシヨンズ』（意ふさき）中の一篇「ペン、ペンシル、及び毒藥」に就て講義をしたが、この評傳中の主人公ヱインライト氏は殺の手はじめに叔父をやつつけたのも、藝術心があるところから、風景のいい叔父の家を獨占する爲め、妻の母や妹を殺したのも、まて〳〵自分の藝術心を發揮する爲め、であるかの樣な論法を弄してある。

然し僕等は、ワイルドよりも一層危險だと云へば云はれようが、そんな申しわけを附加するには及ばない。申しわけを聞けただけ、世間の習慣的に云ふ罪惡を重大視してゐるのだ。僕等に何も罪惡の辯護をするつもりではないが、それを區別的文藝で申わけする必要はあるまい。若し罪惡を實行した文藝家があつたら、さういふ罪惡的人生がその人の破壞的主觀にのぼつたのだと解釋していい。つまり高いところから飛んで空間に氣絶するまでの思ひ切つた瞬間の心持ち――之を持てる人は强者だ――にさへなつてゐれば、世の罪惡などは自我と無關係で、何でもないことだ。要は、ただ人生に慣れ得たか、得ないかといふ點にある。

ヱインライトが毒殺を初めてから作つた繪畫が、毒殺を初めないうちに作つたのよりもずツと深い、手ごたへのある、立派な物であつたのは、罪惡その物の申しわけではなく、いよ〳〵人生に深く接觸した刹那を利用したからである。その刹那を利用するまでにはなつてゐなかつたとすれば、少く

とも、それをあとから記憶的に體現し得たからである。兎に角、藝術と人生とが合致した瞬間を會得する時機があつたのだ。さういふ時機は、高いところから飛び下りると同様、いのちがけでなければ得られない。そして、古典派や羅曼的派は、藝術または人生に餘裕を存じ得られるだけ、終生、その思ひ切りが出來ない。然し肉靈合致の新自然主義に至つては、容易にこの境地を獨占し得られる。ここが自然主義の主張でないもの（古典派でも羅曼的派でもいい物さへ出來ればいいなど云ふもの）には、とても至り得ない。

假りにその刹那的實行までは發表し得ないのを普通だとしても、その刹那を現實的に踏僕した經驗のあるものなら、古典派や羅曼的派の様に香氣にかまへてゐるものらの創作よりも立派な物が出來よう。僕が、僞派の作物を退けても、藤村氏や花袋氏の自然主義――には矢ツぱし、その根本に缺點があるのを指摘しながらも――それに賛成する所以は乃ちそこにあるのだ。渠等にもまだ外存的自然とか人生とかいふ客觀念を拵へる無自覺な態度があるにしろ、刹那的切迫の人生に向はうとしてゐるところが見えるだけ取り柄がある。僕が滋賀縣廳の英語通譯を委託されてゐた時、某家なる若い外國婦人二名を石山に案内したことがある。同寺の寶物や所藏古畫を見せてゐるうちにおそくなり、歸りにはいい月夜であつた。兩婦人は人力車上で周圍の風景を非常に稱讚した。僕には見馴れてゐるので、對した感嘆の情も起らなかつた。然し、若しこの兩婦人をここで殺害して、なほ且行りに警官または

採償のゐないのを目標にした上で、この目標を一歩でも進めたら、どんなに面白い藝術が出来るかと思つた。たださう思ひ付いただけでも、もう、僕の文藝に對する自覺は一歩を進めたのであつた。

當るところ、觀察者同様の時計から飛び下りる様な覺悟——自覺的生活——でなければ、自我、國代第一流の創作または評論は出来ない。それが出来なければ古典的や藝術的な第二流以下の文藝で甘んつて満足しなければならない。僕等、新自然主義者等には、そんな小成に安んずることは出来ないのだ。新自然主義の成功不成功は「まだ決定することを得ないとしても、僕等が實測上でまでも之を實践しようとしてゐる努力は、世人の充分に認めていいところだと思ふ。この努力は、時計の針を看板に時間を指して動く様な種類のではなく、實に今や勃興しようとする新文藝の火の手に對する警鐘だ。

（明治四十二年二月）

車窓四季百観

春　汽車に乗つて歩くのは春は面白い、香氣で愉快で——。然しまア春と云へば花のよい所を思ひ出すものだが、さう云ふ所は、たとへば吉野にしろ嵐山にしろ只だ雑踏を見に行くやうなもので、大して面白くない。むしろ松の緑が煙つて居るやうな松原——どうせ海に對する松原のあるやうな所などは面白い。そんなのに適する所は須磨や舞子の濱とか東海道の海岸たとへば三保の松原と云ふやうな

所がよい。

夏 夏では昨年初めてカラフトと北海道の夏に逢つて見たが、内地ではズツト熱い氣持のする時に却つて夏らしく思ふ。茅ケ崎の海岸に居ても九十九里の海岸にゐてもあつければ熱い程氣持ちが好いものだ。然し北海道カラフトに居ると熱いから氣持ちがよいのではない、さう云ふ感じようはむしろあまり寒くないから好いと云ふ方になる。カラフトなどでは夏の盛りに玉突場を明け廣げて玉をついて居ても矢張り大きな火鉢に火をカン／＼起してゐる。北海道は左程でもない。然し札幌に住んで居て林檎や唐もろこしやコヽワなどを賣りに來る聲を聞くと、内地人には外國へでも來てゐる氣持がする。

秋 松島と琵琶湖畔とは四季の變遷を僕は凡べて知つてゐるが、秋などは一番よい時である。松島の富山に登つて寢轉んでゐると寺の座敷からズツト松島の全景が寢轉んだまゝ周邊に見下される。

冬 冬は僕の旅行の中で最もよく印象が殘つてゐるのは國府津から三島の方へ出る間の景色だ。寒いやうで而かも空の色が温かさうに赤づんでゐる夕方、富士の山がボンヤリとした霞のうちに而かも輪廓がハツキリと見えてゐる時などは何とも云へない。（明治四十三年二月）

滑稽の趣味

婦人は優しくツて萬事に趣味があつてほしい。男女同權とか、政治的運動とか、かういふことに關

係したいならしてもかまはないが、稀れにすべきことで、多くあれば困る。人々の意識して居る時代には婦人たちも政治に出て、男子にも劣らぬ力をあらはしたこともある。たとへば、佛國第一革命の際、ジロンヂストといふ穩和共和黨の首領ローラン夫人の如きは、その夫よりも勢力を振つた位で、つひに斷頭臺上の露と消えてしまつた。また、オルレアンの乙女と稱せられるジャンダークの如きは、政治上、宗教上におそろしい程の狂熱的仕事をして、燒き殺されてしまつた

然し、かういふことはやつて見ろと云はれても出來る筈でもないし、またやつて見たところで、左程よろこばれることでもなからう。婦人は、既婚者にせよ、未婚者にせよ、その社會的地位上、どうしても、男子の慰藉者、調和者、つれ添ひ、思はれ人である。生存競爭場裏に立つて、男子が興奮した活動は、その蔭にやはらかい心の手の抱くのがあつてこそ、不平もなく、煩悶もなく、失望落膽もしないで居られるのだ。優しい言葉、美しい眼、暖い胸、しとやかな衣、これがどれだけ男子の活氣に奥床しい力を與へるか、よく考へて貰ひたい。男子が無形の戰爭に於て、この力はダークやローラン夫人のそれに比べて、勝りこそすれ、決して劣らないのである。豪傑としてその名が歴史に殘るのも面白からうが、平時に於て、そんな婦人はえら過ぎて、細君に貰ひ手がなからう。

文藝的素養の缺乏

婦人のえらいといふのは、殆ど無趣味だといふのと同意義になる。だから、えらいと云はれるよりも、窃かに貧民を助けてやつたり、人の後ろに附いて慈善會に奔走したりする方が、まだしもしほらしいところがある。然し當方の慈善會的集合も、今日の狀態ではまだ趣味を以つて集まるものが少いらしい。耶蘇教の婦人會なども隨分無風流なものだ。なぜそんな狀態かといふに、智識と見聞との多少廣くなつて居る婦人社會に、まだ一般の文藝的素養がないからである。嫁入り盛りの娘までが、何かといふと、男勝り、男らしいといふことを誇りたがる。まるで五六人の子供をひとりで教育しなければならない、後家さんばかりが世間に渴望されて居るかの樣に思つて居るのだらう。男は男らしく、女は女らしくなつて貰ひたい、またならうと努めて貰ひたいものだ。

これは一般社會の發達して居ないせいでもあらう。眞面目腐る爲めに生れて來たかの樣な道學者、自分の野卑な育ちをフロツクコートで隱さうとする俄紳士、境遇上高く止まらねばならぬが一向その道に慣れて居ない婦人、から云ふ人々の多い世の中だ、中庸とか禮儀とかいふことにばかり腐心して、まだ天心爛熳の活き／＼した天地を現ずる餘裕がない。たとへば、高尙な滑稽趣味を解することが出來るのは、その社會の人々が進歩發達して居る一つの證據だが、わが國の現代では、それが廣く行き渡つて居るか、どうだか、疑はしい。二三人の談合では、隨分下手な駄洒落も云つて居ようが、社會の表面に出ると、急に澄まし込んでしまうものが多いので、浮か浮か物も云へなくなつて、兎角

語も大芝居で、こと更めいて「左樣」「然らば」の切り口上になり易い。その言語口調と云つたら、まるで他國と今でも戰爭をおツ始めて居るかの樣子だ。

國民の趣味はポンチ

精神上の戰時狀態が通行稅でも取られて居る樣に、言葉の節約、笑ひの遠慮、その身の引つ込み思案、ありとあらゆる窮屈な思ひをして、表面ばかりは倫理、道德、修養、禁慾などの知つた言葉ばかりをする。從つて、そんなことに關する書物ばかりが面白くなくつても尊い樣に思つて居る。その實、僞善と虛榮とを努めて居るのである。こんな無趣味な狀態から、本統の女らしい女も出ないで、却つて近頃亡くなつた奧村五百子の樣なえらい婦人が出るのは、ちつとも怪しむに足りない。成る程、愛國婦人會の發起は、日露戰爭の時であつたから、國家の爲めまた人民の爲めに、隨分利益になつたらうが、それはそれとして、實際を知らない滿洲に居た兵卒どもが、花の樣な女慰問使が來るといふので、大喜びに待つて居ると、懲役囚徒の樣な柿色の袖なし鎧を着て、西國巡禮の樣な菅笠の兜を被り、如何にもえらさうな女武者であつた。これには皆が興醒めてしまつたさうだ。そんな心掛けの婦人が、幸ひにお婆さんであつたから、嫁入り騷ぎもなくつてよかつたが、それにしても、もう、お茶飲み友達にも賴み手はなかつただらう。

或米國人がわが國の婦人記者を帝國ホテルに招待したことがある。その席で、男女同權の奔走をしたらいいではないかといふ質問をした米人に向つて、或年上の婦人が應答した話は面白い。『日本では、男子に權力が歸して居ますので、婦人はどうしてもその影武者になるのが當然のことになつて居ます。とてものことに、次ぎの世には、自由なアメリカに生れて來たいもので御座いますが』と、からかうと、米人もさる者『その時は私があなたを貰ひましよう。』――『いや〳〵それはまたその時のことに。』と、この位の洒落は、無邪氣で、また一般にあつてほしいものだ。一國人民の趣味はポンチ畫を見ても直ぐ分ると云はれる。英國では政治的のが歡迎され、獨逸では社會的のが流行する。わが國では、かの『團珍』があつた外には、『東京パック』が新らしく出來たが、まだ〳〵滑稽趣味は正當に廣まつて居ないらしい。これは悲壯な方面にも深い趣味がない反證である。

英語のユーモア、乃ち、滑稽と云へば、詳しくは有情滑稽とも譯して、僕等の私議中に出る普通の洒落などと違つて、非常に高尚なものである。表面は淺薄な樣に見えても、その奥には深い〳〵意味の籠つて居るものだ。わが國では、一九の『膝栗毛』――これは、駄洒落または惡いたづらに落ちて居るところが多いが、かの伊勢參宮の途次で、梯子賣りに出逢ひ、梯子を値切つて見たところが負けられたので、已むを得ず、持て餘しながら、之を擔いで京都に出で、或茶店で休んで、忘れた振りをして梯子を置いて逃げると、彌次喜太八の風體の怪しいところから、かかり合ひになつては困ると思つ

て、茶店の女が追つかけて來る作りなど、人間の弱點のなか／＼に醜いのを書き現はしたもので、實に無限の味ひを感得させるのである。佛蘭西ではモリエル、英國ではヂツケンス、米國ではコナンドイル、かういふ文學者は、いづれもその國で有名な滑稽の大家だ。

わが國でも、これまで、人情の弱點を有情的に書き現はした作物は、能樂の幕合に挿む狂言で、一九の小說や、蜀山人の和歌や、隨分なかつたのではないが、現代一般の人心が中庸と常識とに餘り拘泥し過ぎて居るので、新たにこの種の作物を歡迎しない。それかと云つて、最も深い悲劇的創作をも味ひ得ないのである。第一、一個の人物が、その性格の上から、どうしても外界の事情と一致することが出來ないで、つひに死なねばならぬハメに落ち入ると、餘り可哀相だと云つて、見ない樣にする。まして、その苦衷を忍んで、いつまでも死ぬよりつらい目に逢ふと、同情の餘り、全くそんなことを作る者を呪ふのである。これは今のわが國人——殊にわが婦人——が情にもろ過ぎて、堅固な意志を有して居ないせいだ。

悲劇と喜劇

その癖、可怖いものは見たさの諺に漏れないで、愁歎場がなければ、わが國の芝居は面白がられない。然し、それがまた事情を快復して、お伽話の樣に最後は目出たし／＼と結ばれなければ、見物は

満足しないのである。政岡の苦患も、朝顔の俄めくらも、澤市女房の心盡しも、みな、その結末は世間的成功の型に嵌つて居る。かう云ふ劇を英語でトラジコメヂィ、乃ち、悲喜劇と云つて、最も正當に世間の實情を描寫した詩と見做して居るが、正當といふことが必らずしも最後の條件でないのは、中庸といふことが必らずしも人間行爲の實相でないのと同様であつて――更らに高い、更らに深い心の要求を滿たすには、この劇風が分れて、トラジディ（悲劇）とコメディ（喜劇）とにならなければならない。

悲劇と喜劇と、その何れを好くかは、その人その國の情態に由るが、趣味の上から決して寸毫の差別、高下はないのである。前者はこの話の問題でないから別として、後者がどういふことを材料にするかを説明すれば、たとへば、年頃の一人娘が婿えらびをして、あれかこれかと迷ふたあげく、自分の低い理想に相應した低い理想の男を貰ふ樣になるとか、また或村夫子が眞面目に自分の形式的道德を說き、その平凡な行ひに相當した平凡な目的を達するとか、また小成に安んじ易い性質の商人が、それに似つかはしい成功をして、俄紳士に成り澄ます有様とか、すべてかう云ふ事件の裏面に、作者の同情的血淚を湛へて、讀者の笑ひを待ちまうけるのである。お多福な下女がお化粧をして澄まして行く樣を見ると、をかしくもあるが、またその心情を思ひやれば、淚の種ではないか？これが全く淚を缺いて、皮肉にまた冷刻にその缺點ばかりを指摘すると、スヰフトの「ガリヴーズトラヹル」や、一

休和尙の無邪氣な行爲の樣に、サタイア、乃ち、諷刺となる。僞り反省力のない、いい氣になつて居る社會には、それも亦必要であるが、僕の云ふ滑稽はなつかしい眞面味があると同時に、人をして泣き笑ひをさすものなのだ。

この心持ちを了得した人々には、戰爭も滑稽に見える、國々と騷ぐのも滑稽だ、眞面目臭つた三々九度、鹿つめらしいお辭儀の意見、世間を知らない道學先生の後ろ姿、いづれもをかし〳〵をかしくなるだらう。幸田露伴氏は嘗て『大なる可笑は大なる悲痛の裏面に生ず、涙なきが世ならば、笑ひなきは人外なり』と云はれた。滑稽趣味のある人は、却つて、その普通の洞察範圍をよくわきまへることが出來るので、亂暴な自由、意はぬ落ち度などのあらう心配はない。粗野無頓着の人間に限つて、自分の滑稽な思想や行爲をも眞面目に取り扱つて居るのだ。喰ふことばかりの外は何も知らなかつたブラジルのボトクードズ種類は、狩獵に成功して、良い獸肉を得、酒が甘く飮めるのを以つて、非常な大事件の樣に考へて居た。野蠻人ほど滑稽の趣味がないのである。社會に於て、婦人が最も早くこの狀態を脫しなければならない。それには、かういふ方面の研究と心懸けとがあつて貰ひたい。

或外人がわが國の現狀に接して、日本人は滑稽趣味のない人種だと冷笑したことがあるが、これは急に物質的生活にいそがしくなつて、精神に餘裕の少い現今の狀態を見たばかりの意見だ。わが國の歷史は隨分諷刺家と滑稽家とに富んで居る。『宗論』、『三人片輪』、『入間川』などの諸狂言を作つたもの

を初めとし、一休や、一九や、三馬や、平賀源内や、蜀山人や、明治の代では眞新二、饗庭篁村、幸堂得知、最も大なる皮肉家勝海舟や、かういふ人々は諸君もよく知つて居るから云ふに及ぶまい。古事記の岩戸開きの段にさへ、既にその趣味は見えて居たし、萬葉集中の歌人大伴旅人は、

妹としてふたり造りしわが宿は、
　樹高く繁くなりにけるかも。

といふ悲哀な歌があると同時に、

あな、見にく、さかしらを爲と、酒飲まぬ
　人をよく見れば、猿にかも似る。

といふ痛切な諷刺詩を殘して居る。また、同時代の山上憶良は、「貧窮問答歌」の樣な世路難を歌ひながらも、其宴會を立ち去らうとして、

憶良らは今は罷らむ、子泣くらむ。
　そのかの母も吾を待つらむぞ。

の如き、自然に韻が踏めて、口調も非常にいい、無邪氣な滑稽歌があつた。

民謠といふものは、また、誰れが作つたともなく、一種面白い調子を以つて、諸地方に廣まつた歌だが、わが國でも大抵はをかし味を含んで居る。殊に、そのうちの童謠などは、無邪氣の間に人の心

趣味が發達したなら、たゞくよ〱して居るばかりでなく、また哀れつぽいことばかりを好むのみでなく、夫婦でない異性の間がきはどいところまで立ち至つても、尚且その身を守るだけの意志が強くなつて來るのだ。申し譯けの賢母良妻主義の教育も跡を絶つだらうし、志薄弱行の青年男女も少くなるし、社會は清水の樣に活き活きして來て、婦人は充分にその優しい天眞を發揮することが出來るだらう。

滑稽の品位

滑稽を云つた爲めに、その人の品格が落ちる樣なものは、云はないでも野卑な人物であるに相違ない。この清い而も暖い流れは、實は、本當の眞摯誠實な人の胸底に滿ち〱て居るのである。この流れを以つて居ない生眞面目、沒人情は、もう、人間ではない。露伴氏の所謂鬼か人外かである。學生時代から、この趣味を解し得なかつたと云はれた詩人テニスンでさへ、婦人問題を歌つた長篇の作プリンシス』(女君)には、自然の滑稽が所々に流れて居る。僕も、自分の詩集「悲戀悲歌」に於て、「川戸の海ぬし』といふ滑稽趣味の短篇を載せて置いた。だから、テニスンにしろ、僕にしろ、まあ、人間並みのことはしてあるので、兎に角、鬼でもなく、人外でもないから、讀者諸君は安心して僕等の意見を採用して呉れてもよからう。

夢遊病的犯罪者

世人各自に各種の趣味があると同時に異常者にも奇怪なる趣味と云ふのがあるに違ひない。昔の伯爵百人斬の如き確かに其れである。又窃盗にしても、人の物品が欲しいと云ふよりは、窃盗其ものが面白くて堪らぬ者がある。人を殺すにも其通り、フラ〱と人を斬つて見たくて堪まらぬ。放浪を好む者が何の氣なしに其邊らを彷徨して歩く様なものである。此等は畢竟一種の衝動で、其衝動に其者自が斯く出來て居るものであらう。例へば殺人狂の如き、昔は其趣味を試むる機會があつたけれども、現今では其れが出來ない、倘更其興味が湧きて來る。狂人と云つても、必ずしも精神病者許りに限つたことはない、窃盗狂もあれば放火狂もある。其程度の高いものに至つては、全く狂人となるであらうし、其低きものは或機會に遭遇して初めて其本質を發揮する。又其中間に位して、時に起り時に息する者もあらうと思ふ。此等は法醫學上の研究題目であるが、又文藝上の問題としても面白い材料である。而して此狂疾の程度、其種類階級に至つては、少しも一定して居ない。又其起る期間とても、繼續するものもあれば、其れ限りで止むものもあり、又特殊の動機、周圍の事情にも關係があある。其起る時は常識を逸し、息む時に通常の人であることもある。故に必ず狂人を常識的に計るのも考へものである。

世には隨分常識外の不思議の事がある。是れ世間には常識外の者があるからである。又た世間の波瀾は悉く此常識外から起つて來ると云ふても差支ないであらう。醫學上から見れば殆んど人間の過半

對は病者であると云ふが、或はさうかも知れぬ、性質の激烈なる者、多情なる者即ち偏執性の人物は、悉く是れ狂人である。常識圓滿の間には波瀾は起らない筈である。して見ると所有る社會の悲劇は、悉く此病者傾向から起つて來るものと謂はなければならぬ。斯く觀察して來ると、誠に世の中は殺風景極まつて來るけれども、少くも或程度までは世に病的人間が居て、時に非常識の行動を行つて居ることは、爭はれぬ所である。されば世間の出來事を、一も二もなく常識の頭を以て判斷し、理窟づめ計りで解釋するのは、愚な談である。時に正氣の人間が心的狀態に變狀を來し、盜賊をして見たくて堪まらなくなる、斯う云ふ時には是れ何か盜んで自分の意志を滿足させること、猶飢ゑたる時に食を取る樣なものである。斯く觀來れば所有る微罪と雖も、皆是れ病質の爲さしむるものであるから、極端に言へば國家は此病人の行動に對して刑罰を加ふるよりは、此が病疾を治癒する方が得策である。併し其樣の態度で居たならば、益々犯罪狂を增長させる譯であるから、只精神病者のみに對して刑罰を加へないと云ふ法律を設けて置く所以である。一體世人は犯罪人に對して單純に考へ過ぎて居る常識上から計り打算して見るから、種々の錯雜した事件に遭遇して、忽ち五里霧中にまごつくことがある。犯罪者は犯罪者的一種の眼を以て見れば宜しい。金を盜むは普通の盜賊であるけれども、盜賊したくて爲す者は、金其ものに目的があるので無く、盜賊の行爲其のものが目的である。即ち犯罪趣味と云ふべきものである。此の如き場合に於て、世人が動もすれば早く罪人を檢擧するに焦躁つ

て職を辭り、甚だしきは何の關係もない者までも迷惑を蒙ることが屢々ある。故に全くことには教會に牽害が多いのみならず、其の爲に代へ難を持へたり、甚だしきは言ふでもないもの迄も疑はれて了ふ人と定めて、其れで責めすこともあるらしい。誰が取調べても、分らぬものは矢張り分らぬ。故に虚心平氣で時々待つ位の態度で行つた方が公平を失はない。亞米利加の或教會の牧師が、其處の教會に來る若い婦人などを誰彼と無く教會の二階で辱かしめ、其罪跡の發覺を恐れて皆之を殺し、爲めに數人の女の行方が分らなくなつた。斯くして五十何年、殆んど牧師の一生涯分らず仕舞で濟んだが、遂に漸く發覺したと云ふことを、向ふから歸つた人に聞いた。此等より見るも、悠々迫らず穩かなる中に其端緒を得ることが得策であらうと思ふ、此の如き犯罪に至つては、到底常識で考へても分る筈のもので無いからである。

東京潜伏時代の黄興

支那革命黨の大立物黄興が東京の郊外西大久保に潜伏して居た時代のことは、當時召し使はれて居た女中の話として、既に東京の新聞に出たが、それに無かつたことで黄の平常生活に關する話を少し書いて見よう。黄興并にその徒黨は多く湖南の挑原と云ふ地方の産れであつたので、門の丸い瓦斯燈には『桃原』と書いて、それを桃原と讀ませてゐた。客の出入りの多い家で、夜などもずツと遲くな

つてから、外へ出たり、また新宿の電車終點から歸つて來たりするものが絕えず、その度每に人力車を雇ふので、桃原さんと云へば、近處や新宿の車屋はよく知つてゐた。

そこの主人が黃さんと云ふ支那人だとは出入りの商人もよく知つてゐたが、初めは、それが革命黨の一領袖だとは警察でも分らなかつた。人の出入りが多いので、本統の家族が何人だか、また何の人と何の人とが住んでゐるのか、近處の人には判斷が付かなかつた。

然し新年には、『黃興』と印刷した赤い名刺を隣り近處へ配つた。その配り手は當時十九歲位で、わが國の書生の如く紺がすりの綿入れなどを着たり、立派な羽織袴をつけたりして、明晰と『お目出たう御座います』と云へる青年であつた。それが黃氏の一子黃一歐であつた。品川の體育學校へ通ひ、學問はどんな風に勉强してゐたか知れないが、柔術や擊劍にかけては珍らしい出來であつた。

黃興その人は太つて格服のいい、どツしりした男であつたが、普通の日本人には革命のことなど少しも語らず、馬鹿かと見えるほど人のいい男で、頻りに寫眞術を研究してゐた。內外の新聞紙を十五六種も取つてゐて、每朝それに一通り目を通してからは、來客が絕えないので、喋り續けてゐた。渠は碁は强くないが大好きで、來客や家の者を相手に打ちつづけることもあつた。宋さん――これが黃興と共に働いてゐる宗教仁であつた――といふ人も同居してゐて、それとも打つが、子の一歐には親の方がいつも危くなるので、躍起になることが度々だつた。

多くの掛り人をすべて黄興一人が養つてゐたので、毎日のやうに豚肉が幾斤、牛乳が何升と買ひ入つてゐた。女中はさう云ふ商人等のあたまをはねるばかりでなく、一週一回新聞紙をまとめて屑屋に賣つた金を懐にする上、五圓の給料を貰つてゐた。女中は黄さんがゐないと、他の支那人等を馬鹿にして働かず、出入りの商人を使つて井戸の水を汲ませたりしてゐた。黄さんだけは怖れてゐたのである。實際の家族は黄の父子と宋教仁とだけで、この宋さんは書き物があると、新宿の十二社にある宿屋へ出かけて行つた。黄さんは又外出すると、どこへ行つたのか分らない――時によると、そのまま一週間も十日もしてからひよツくり歸つて來て、朝鮮へ行つて來ましたとか、香港、上海に用がありましたからとか云ふのだ。

支那人の習慣として、家をきたなくして置くのは平氣らしい上に、豚の油を多く使ふので、その臭氣が家中にしみ込んでゐた。そして鼻をかんだり、口を拭いたりした紙を平氣で外へ捨てるので、隣りの庭などへ來る爲め、隣りの人から故障を申し込まれたりしたことがある。それでも、なほ平氣で紙を外へ捨てる。中には、豆入り餡のやうな菓子の喰ひさしをつつんだままのもある。そんな紙切れが餘り澤山なので、それが段々風に吹かれて、横丁などを穢い紙だらけにして仕舞ふこともあつた。

陽に永住のつもりを見せる計略でもあつただらう、植木などを買ひ込んで庭に植ゑ付け、池などをも掘つたりした。西大久保とは云つても、戸山の原に近い場末のところで、その裏手の一軒には詩人

で小說家が住み、横手の一軒には新聞記者が住んで、門の前には三間軒立ちの長屋があつた。この長屋には、社會主義者のごろ付がゐたので、警察では、それとなく注意を引く處になつてしまつた。

黄さんは日本語も鳥渡出來たが、客が同國人であるから、支那語の熱心な話が夜などはよく隣り近處までやかましいほど聽えた。その頃の話は、たとへ革命に關係があつても、昨年十月に起つた武昌の革命運動にはまだ關係があつた筈はない——あつても、一昨年雲南に失敗した革命運動のだらう。

わが警察の偵察が段々うるさく、やかましくなつて來た頃、黄さんはどうしても身を隱す必要があつたと見え、荷車十五臺——そのうちの多くは書物であつた——を小石川茗荷谷の同志のもとに送り、自分もそこへ同居すると見せて、影を隱してしまつた。

そこを引きあげた時のやり方も正々堂々たるもので、荷車十五臺を公然と運ばせたので、探偵の方では主人も茗荷谷へ引き越すものだと思つてゐた。出入り商人等への拂ひもちやんと、一日前に濟ませたが、たツた一軒の八百屋だけがどうしても拂ひを渡されなかつた。で、そこの神さんが來て『ほかの家へはお拂ひをして、なぜ私のところだけ拂つて呉ないのです』と云ふと、黄さんは『あなたのところはずるいことばかりしました。だから、これだけしか拂ひません』と答へて、拂ひを半分か割引きさせた。もツと早く出るつもりであつたのだらうが、渠は當時非常に貧乏してゐて、掛け物やその他の所有物を賣る相談などしてゐたが、そのうちにどこからか多大の運動費が來たのである。

てツきり茗荷谷へ引ツ越したものと思ひ込んでゐた警察の方では、手をまはして見ると、黄さんはそこにゐない。「さては一杯喰はされたのか」と躍起になり、隨分諸方を取り調べたらしかつたが、どうも見當が付かなかつた。

探偵や巡査が黄さんのもと住んでゐた近所へ來て、小說家の家や新聞記者の家に就いて一々聞き廻つたか、黄さんの行く先きは分ら無いか」と尋ねたが、どこでも茗荷谷へ移つたと許り要領を得なかつた。黄さんのゐた跡へは、矢張り支那人が二三名來て、例の桃原の瓦斯燈をそのまゝ用ゐてゐた。

女中が知つてゐるに相違ないと云つて、警察に傭雇された女中の行方をも探してゐたが、それも分つたか、どうだか——兎に角、その女中は近處の女中へ暇乞ひをした時、自分も家に歸るが、主人の黄さんも今度どこかへ行つてしまはなければならない、あちらではなか／＼偉い人で、何か國の爲めに計畫をやつてゐるので、昔なら、お尋ね者とでも云ふ人ださうですと云つてゐたのである。

その後暫く黄さんの音沙汰がなかつたが、或時、或新聞に、黄興の談話として新嘉坡からの通信が載つてゐた。自分達の革命運動は着々準備を進めてゐるが、日本には警察が煩さくツてゐられないなぜ、日本の警察はあんなに探偵をつきまとはせるのだらう。無意味なことだ。日本國を亡命しようと云ふのではなし、他國の支那に關することではないか？如何に密謀をめぐらしてゐようが、放つて置いて呉れたら宜いのに、日本のことでもあるやうにうるさく跡を付けるので厭になつた。そこへ行

くと、英國の殖民地は自由で、何をするのにも便利を與へて吳れると云ふやうな意味であつた。

ところが、やがて黃興は新嘉坡淸國政府の密偵の爲め捕縛されたと云ふ電報が新聞に出た。黃さんを知つてゐたもの等は、渠が捕縛された以上は、もう殺されたに相違ないと思つた。それが一昨年雲南に現はれ、革命運動の一端を初めた。然しそれは失敗に終つて、黃さんはその時手の指を二本落した。今回武昌の革命勃發と同時に、また雲南から現はれて、漢陽の戰ひに臨み、そこで戰死するところを無理に助けられて上海に下り、爾後革命政府の大元帥となつたり、總理大臣兼陸軍大臣と成たりして、その方では兎に何一番偉い働きをしてゐるのである。（明治四十五年二月）

亞の犬

あたりに月がよささうなので、僕は筆を擱いて外へ出た。可なり高い而も立て込んでゐる松原の間を海岸へ出ようとすると、門まで下りて行く道で、一匹に大きな犬が鼻をふん〳〵云はせて後ろへやつて來た。三四歲の子供ほどなので、若し吠えられては困ると思つたが、向ふを驚かさないやうにふり向いて「うし〳〵」と聲をかけて見た。しツぽを振つてゐる。

これでは大丈夫だらうと見て、僕は口ぶえを吹いて少し走り加減に步くと、渠は僕のさきに立つて、僕の行く方へ行くのである。

淺い海岸だが、滿ち潮で岸まで寒い月の光をきら〳〵させてゐる。その中へ突き出たさん橋やうの渡りがある。近處のものがそこへ行つて物など洗ふところだ。藥は僕よりさきにそれを渡り、僕の從ふのを——後ろを向き〳〵——みち引いたが、そのとツ鼻が海の中へすべつて行つてるところへ行くと、藥は驚いたやうに跡ずさりし、それから僕をぬけてあと戻りした。

僕はずツととツ鼻へ進んだ。そしてうちに殘して來たよく吠える犬は今頃どうしてゐるだらうと思ひ出しながら、暫く海の空氣を吸つてゐた。時候が時候だけに、宿に滯在してゐる客は僕だけなので、ふり返つて見ても、海岸に人影一つ見えなかつた。珍らしい客に夜の松原が不禮を見せてゐるとでもはないばかりに月はその上へあがつてゐる。僕は陸ある方へもどつて行つた。

すると、また同じ犬がついて來た。

僕は駄菓子屋へ立ち寄つてかたパンを二つ買つた。そして少しづつ折つて、これを與へたが、

『吠えろなよ——吠えて呉れると、散步も夜出來ないから、ね。』

『この犬は吠えません』と、そこのお婆アさんが傍から云つた。入り口の障子が少し開き殘つてゐるところから、首を出してパンを無器用に拾ふ物の顏は、猛惡なブルドグのそれのやうだ。

『さうか、ね。』から輕く受けたつもりだが、何だか薄氣味惡かつた。藥の樣子では、パンを貰ふのを喜んでるのか、どうだか分らなかつた。二つに一つに落ちたまゝで、探しもしないのを目がいいから

か、それとも、何だうまくもないものをと云つてるのか、どッちとも僕には受け取れた。

僕は、この犬と共になほ海岸をぶらついてから、松原の中にある離れの二階へ返つた。頼まれて書いてる新年小說が、もう、終りに近づいた勢ひで、夜あけがたまで筆を執つてゐたが、それから寢に這入り、午前十時だと云ふに呼び起された。

窓からのぞくと、ぶらんこのかけてある林間の空地で、その向ふに掘りぬき井戸を掘つてゐる大輪の囘轉してゐるのを背景にして、三四歲の子供が二名よた／＼して歩きながら遊んでゐる。そしてゆふべの犬が同じほどの脊なるこの二名の間へ這入り、二名に脊中を叩かれたり、耳をいぢくられたりして、怒りもしないで、しツぽをぴんぴん振つてゐる。茶色に黑毛の少しまじつたおとなしい犬だと思はれた。

『何と云ふ犬だ、ね、あれは？』

『皆があかと申してをります。』女中はちよツと見て、かう答へた。

『あか／＼』と、僕は呼んで見た、手には、ゆふべのかたパンの殘りを持つて。

一向聞えないやうであつた。二三度呼んでるうちに、それでも氣が付いたと見え、窓の下へやつて來た。で、僕はパンを一切れほうり投げてやつたら、矢張り、受けることは知らないで、落ちたのを追つて行つて拾つた。

『こいつア人に吠え付くか、ね?』

『いいえ』と、女中はほかのことをしながら、『おしですから――』

『おしかい?』僕は不思議な氣がしたが、呼んで見ても、パンをやつて見ても、その動作ののろいのをそれが爲めだか知らんと思つた。

『ぢやア、人の聲も聽えない筈だが――』

『どうですか――』

『全體、どうしておしだと分つたのだ』と、僕は根問ひして見た。

『皆が試しによくぶちましても』と、かの女は當り前のことを云つてる樣子で、『どんなにぶたれても聲を出したことがありません。』

『可愛さうに』と、僕は云つて、渠に最後のパン切れを與へた。

もう、それツ切りかと云ふ風に渠は上を仰ぎ見てゐたが、やがて海岸の方へてく／＼歩いて行つた。

『あか／＼、あか』と、子供は後ろから呼んでゐた。

役に立たない畜生だと云つて渠は誰れにも相手にしられないのであつたが、いつのまにか、拾はれて、煙草や郵便切手を賣る家の、獨り者のお婆アさんに飼はれてゐる犬になつてゐるのださうだ。

大阪の夏の印象

大江橋

梅田停車場前を、電車で左りへ行つて一度まがつて、それから眞ツ直ぐに大川へつき當つたところの橋が大江橋である。僕等を中の島へ渡す役目をしてゐるのと、そこに乘り換へ場があると云ふ外には、何でもない橋である。そんな橋がなぜ僕のあたまに長く殘つてゐるのか、そのおもな原因は時々僕自身にも忘れられてゐる。

そりやア、某新聞社の記者であつた時は、夏の暑いさかりでも、毎日でないとは云ひながら、必らずこの橋を渡らなければならなかつた。そしてそれを渡る時は、その下を頻繁に通ふ十噸、十一噸の運搬船がきツと見えた。そしてまた二三ヶ所の水泳指南所では、平ベツたい船を浮けて、多くの眞ツぱだかの少年に泳がせてゐるのが見えた。上から見てゐると。上手な泳ぎ手もあるが、多くは溺れるといふぶく〳〵しさうなのはあぶなツかしかつた。

この橋を渡つてしまうと、右に立派な煉瓦づくりの日本銀行支店があり、左は公園で、その中には石の大きな府立圖書館が見える。半町も行かないのに、また電車は淀屋橋と云ふのを渡らなければならない。それが大江橋をかう長くおぼえさせるだけの資格にならうか？無論、雨の降つた日に社の用事

で車を走らせた時、頓馬な車夫はこの橋の中央を行かないで、左の方は人道に車を乘りかけたので、巡査から注意を受けたことがある。が、それも何ほどの記念になるか？

云つてしまふが、僕は、實は、この橋の上で、——意氣地が無しように涙を拭つて自分の生涯を見送りしながら、——初戀の婦人のありかを思案に暮れたことがある。僕の二十一歳の時のことだが、東京で或別な婦人と約束をしたところ、どうも前のに濟まないやうな氣が込み上がつて來て、丁度、暑中休暇であつたのを幸ひに、四五年振りで關西へ出かけた。まだ國にゐた時、國を出て[illegible]と共に[illegible]東京に行くからと云つて、別れた切りで、その後さきは行くへが分らなかつたのだが、大阪で[illegible]をしてゐると云ふことを耳にはさんだだけで、僕は東京から探しに來たのであつた。

二三の大きな病院に當つて見たのであつたが、その時は分らずにしまつて、歸京後、僕は前からの約束者と結婚をしてしまつた。ところが、その後十年も經つてから、大江橋を渡つたことがある。その時代に、意外にもさきの婦人の居どころが分つたので、その家へ訪ねて行つた。僕を案内して呉れたその父親なる人は死んでゐなかつたが、母なる人の話に據ると、丁度、さきに僕が探した頃、娘は何でも早く僕の居どころが分ればいいと云ひながら目をつぶつたのであつたさうだ。餘りお話のやうだが、この時まで娘は助産婦——としては、まだ世間が信用を置き切れない年輩だが——をして獨りで母を養つてゐたが、僕が行つたと同時に半分燒けを起して、間もなく餘り好かないと云ふ所天を持つた。

その時、僕は大阪附近の中學に教師をしてゐたのだが、やがて辭職をして東京へ歸つたので、またその母子に會ふ機會がなかつた。それから八九年して、僕はまた大阪に行くことになつた――それが新聞記者としてだ。さきの婦人のひとり息子は拾いくつかできつた。今度はその息子とその母とを作つて、僕は一度大江橋――その近處に僕等竝にその老母の家があつた――の欄干にもたれて涼みをした。まだ日の全く暮れない夕方であつたが、僕等のわきを綺麗な座敷姿の舞ひ子が褄を取つて、その姐さんらしい藝者と、氣まぐれにも歩いて通つた。

『お母さん』と、おツちよこちよいのやうに悧巧な子が母から奪つて使つてゐたうちわを以つて舞ひ子を指さして云つた、『あの子をつれて來てうちのをなご樂におし、どこのおたどしもきたないさかい、なア。』これが僕の大江橋を聯想する一番おもな原因だ。その時にも、その下を小い巡航船に水を切つて、その跡は白い水筋を引いて進んでゐた。

妙見さん

妙見大薩菩は一種特別な起源があつて、佛教のものではなく、本當はマホメット教、乃ち、回々教の渡り者であるから、その紋じるしにも土耳古の國旗と同樣の三日月がついてゐると云はれてゐるが、僕が大阪で見た自安寺の妙見さんは、日蓮宗で、紋どころも赤十字の四端を三角に切り維ませた物である。

小い堂をかこつた狹い周圍の道を、人間の數も多く、足のあゆみも小きざみに、殆ど夢中でまはるのだから、僕等がその逆にでも這入つて見ると、若い娘やお婆アさんにつき當りどほしだ。

ナンミヨ、ホーレン、ゲーキヨ！、ナンミヨ、ホーレン、ゲーキヨ！ナンミヨーちよか〱、ホーレンちよこ〱、ぱツたりゲーキヨ！

いつまで慾張つてまはつてゐるのか分らない。手には火をつけた線香の一束を持つてゐて、正面へ來るたんびに、二三本づつ大きな金の火鉢の盛りあげた灰の中へさす。そして手にそれが無くなると安心して歸るものもあれば、また買ひ足すものもある。買ひ足したものはまたお題目でまはり初めるが、何のことはない、精神もない木像を前からも後ろからも、右からも左りからも拜むでゐるありさまは、丸で隱し女が根のあまい旦那をたらし込まうとする圖だ。そして渠等が殘して行く幾千本の線香の煙が、木像の菩薩を蒸し活かすかとも思はれるほど燻つてゐて、僕等は却つて息が詰まりさうだ。

僅かに堂内を出て涼して夜風に當るかと思へば、矢張り狹い境内を層一層狹苦しくして、數へ切れないほどの奉納燈が安遊廓の露地の掛け行燈をごツちやに集めたやうに、ごちや〱ちらついて、各各四角な紙の中から、薄ぼんやりの光を放つてゐる。そして紙のおもてには、中村雁次郎だの、梅玉だの、片岡だの、福之助だのと云ふ字が讀める。

僕はそれで考へた、大阪は實生活に於ても、また藝術の上からも、飽くまでも、人工的な地獄若し

くは天國だと。

九官鳥と「一節」さかじか

大阪の市街には花も咲かない。樹の緑もない。天然として存在してゐるのは、蒼空と白い雲だ。然しその蒼空は年中多くの工場の煤煙にみたされて、住民の肺臓の表皮には、黒い物がくつつき溜つてゐると云はれる。そして僅かに息のつけるのは、ふんどし一つで物干し台に出て、涼風を浴る月を見る時だ。その水はまたよどみ勝ちで、諸方の堀割にはぼうふらを殖ばしてゐる。ホツと氣持ちがよく、また便利なのは、大川を巡航船で渡る時であつた。近年、電車が市中を諸方に通じるまではこの小汽船が手車に次いでは第一の交通機關であつた。

小い船だけれども、隨分乗り手が多かつたので、「乗客はもツと詰めておくれやす」と度々云はれた。そしてへさきの窓にくツついて腰をかけてゐた客の一人が或時眞顔になつて、

『この上詰めたら水の中へ落ちまんが、な』と云つた。

『ついでに、丁度ええさかい、泳ぎまほか！』

『そやそや、この暑いのに、こないに忙しうてはかなひまへん。』

それをまた僅かに免れるのは、郊外電車である。濱寺の長くつづく松原を背にして、洗つたやうに

綺麗な海濱から、茅渟の沖の涼風を呼んで見給へ。一勝負玉突きをやつて、貸料理屋でざツと汗を流し、軽い浴衣で二階の欄干によると、かの壓迫する煤煙のおそれもない空氣は自由に呼吸せられた。そしてそこで「お父さん」「お母はん、」「まア、お這入り」など頻りにおしやべりをしてゐた鳥が、暫く默つたかと思ふと、不意に酒を「まア、一杯」と云つた。

鸚鵡かと思つて、綺麗に方づいてゐる庭の中を見おろしたら、緋鯉を放つてある池の眞ン中の橋のたもとに、松の枝から鳥籠がぶらさがつてゐて、鸚鵡よりは小い、細身の、そしてきたならしさうな小鳥が、その中のとまり木にしよんぼりとまつてゐるのが見えた。

鳥の名をよくはおぼえなかつたが、その翌年、また暑さを訴へる頃になる少し前のことだ——ちよツとした一山をその境内に取り込んだ箕面の動物園で、時鳥啼合せ會と云ふのがあつた。鳥瀬と云ふほととぎすと常飼ひに氣違ひなおやぢが主催になつて、「一聲」とか、「殘月」とか、「若葉」とか云ふ名の付いた八千八聲連が、何でも十二三羽、大阪を初めとし伊勢、大和、熊本、伊豫、土佐などから集つた。三百五十圓と云ふ一聲がその場の隊長であつた。すべて羽根は鼠色で、胸の柔毛は白に鷹の紋がある鳥だ。ひとりで口を大きく明けると、眞つ赤に燃える喉の奥が見える。血を吐くとはそのことであらう。

時鳥は鷹五十八種の一つで、それがまた郭公、佛法僧等の五種あり、仙臺などでは、人の庭さきにとまつて啼くのがあるが、それは郭公で、眞のほととぎすは深山でなければ木にとまらない。隼のや

うにしゆツと風を切つて谷合へ飛んで來て、木末りにとまつて、二三十回つゞけざまに啼いてから、カ、カ、カ、カと叫んでまた飛んで行くが、自分の巣は造營しないで、深山樹にある鶯や、卵子を鶯の巣に産みつける。卵子が孵へると鶯はその巣へ蟲を運び行き、出る時は必らず糞を咬はへて來る。ところで、時鳥は鶯よりも大きいので、口を開けて蟲を受ける時、鶯の頭までを頬張るわけになるから、鶯が巣を出る時頭が一面濡れてゐるのを見て、あの巣には必らず時鳥が雛つてゐると見當が付くのださうだ。

全體、苦勞人でも、時鳥を專門に取りに行くものはない。鶯の巣を見付けに行つて、意外の獲物をするのである。この鳥が暖國から渡つて來る時、並にもとへ歸つて行く時は、夢中にあせつて大速力だから、左右を忘却して、鷹や鳥に蹴られて川へ落ツこちたり、白壁にぶつかつてころげたりしたのをよく拾ひ取るものがあるけれども、それは決して啼かない。どうしても、子飼ひからでなければ行けないさうだ。そして大阪へ數羽來てゐるのも、すべて土佐で取れた子飼ひ物であつた。

『さア、啼かせまツせ』と、源おやぢはビールの一杯機嫌で糞蟲を入れた小箱を手に取つた。丁度、さみだれの晴れたり止んだりする山の上であつたから、青葉の色もさえ〴〵して、僕等の道をのぼつた時の汗は引込んでゐた。

おやぢは愛兒をいたはるやうにこちらの木蔭、かしこの岩の上をまはり、時鳥の籠へ一々箸を以つ

て褒美を與へてから、僕等の待つてる亭へもどつて來ると、やがて一羽が啼いた。すると、また他のもすべてそれについて啼き出した。そして獨りでにこ〳〵してゐるのは、渠であつた。

時鳥は、ホンゾンカケタカ、ホツトンカケタカ、テンピンカケタカ、テンペンカケクカなど、いろいろに聽えるが、甲聲と乙聲とははツきり區別して出のすがいいので、而もその跡で『一靜』などはカ、カ、カ、カと甲乙兩樣の聲をよく啼きわけた。

この催しの餘興として、山上の累紅殿には、毛變はり黃目白、鶯と猫との眞似をする滿洲ひばり、おのづから尺八の追ひ分を吹く琉球鳩などが並べてあつた。その間にまじつて、僕が名を忘れてゐた鳥もゐて、これはまた喇叭節をやつてゐた。九官鳥と云ふのだ。

天神祭

箕面は、市中から五里の道を電車でたツた三十分で行かれる。動物園の門前を過ぎて、狹いが奧行きの非常に深いかの幽谷には、淸い谷川が道をつけて、こんもりと楓の青葉が繁りつづく蔭に、せんせんと流れの音を聽かせてゐる。夜、若し電燈のつき並んで青葉を照らすもとに、四五分も立ちどまつてゐると、直ぐそばでかじかの鳴く聲が聽える。僕は、去年、そこのかじかを捉へたと云ふ人から、一つがひを貰つて來たが、その翌々日から僕の書齋で鳴き初めた。

夏のことであつた。

『火事だ、火事だ』と騒いでゐるものがあるので、家から飛び出して見ると、[illegible]ある大阪の空が眞ッ赤になつてゐる。

まだ宵であつたので、僕は涼みがてら電車に乘つた。書齋にこもつてゐれば、暑いことは暑かつたが、外には風があるし、いつも速い電車であるし、おまけに焦げさうな遠方の空をこちらから無責任にながめてゐるのが、一しほ氣持ちのいいものだ。

車内では、北の新地の大火事の時のことを話してゐるものがある。また、天神祭のことを云ひ合つてるものもある。

『ほんに、今夜は、それであつた、な』と、忘れてゐたことを僕は思ひ出した。

『お祭のかがりにしては』と、一人は窓からその方をのぞきながら、『火の勢ひが强おまんが、な。』

『そや、なア——火事だツしやろか？』

『火事なら、仰山燒けてまツせ。』

『大阪一體のやうやないか？』

『そないな火事が、あつたらどないしまほ？』

『えらう心配しなはるやおまへんか——何ぞ大けな取り引きでも？』

『さよだツせ』と、聽かれたのが笑ひながら、『得意さきからの註文で、大阪へ札を一つ頼んだんだす。』

『は、は、はア』と、あたりの人々も笑つた。

『火事が動いとるやおまへんか』と、十三驛近くへ來た時、云つたものがある。

『そや、なア――して見ると、矢張り、船神輿のお渡りか、な？』

『えらいもんや、なア。』

『今晩は、天氣模樣でこないあかう見えるのやろが、な。』

何にせよ、有名なお祭りの夜だ。天滿の天神から船の神輿が出て、大川を上下するのに、幾百艘の小船がぼんぼりや焚い松をともして、それに從つて行くのだと聽いてゐる。それを見られるのが僕の樂しみになつて、電車が大阪に着くのが待ち遠しくなつた。

やがて梅田へ下車したが、右も左もおそろしい人出だ。滿員ばかりの市電には、無論、乘れない。歩いて中の島へ出た時は、空にうつる光は少しうすらいだやうであつたが、それでも人々はどし〳〵集つて來るばかりで、歸るものはない。

僕はどこかのすきに這人つて神輿の後ろ姿だけでも見たいと思つたが、どこにも樂なところはない。そして戸外を人いきれの中に埋められながら、頭上の映光が段々薄らいで行くのを見るばかりであつた。

喉がかわいて来たので、僕らの米屋へ這入つたが、ここも人込みでなか〳〵、因者がまはつて来ない。そのうちに、儀式は全く終つてしまつて、五里さきで大火事と見えた空のあかりも、あたり前の夜空になつてしまつた。

僕には、天滿天神の神輿に天空を這つたのであつた。そして僕いめづらしかつたので、神輿その物を見ることは出来なかつたが、神輿の燈光だけが見えたのだ。そして僕の珍らしさの熱も、家が目に這入ると同時に段々さめて行つた。

蜜蜂の話

一、邦種の蜜蜂

同じ日本の種族と云ふことに於いても、僕等は民族と蜂族とに關しては全く反對な意見を持つてゐる。僕等は日本民族を以つて世界に最も強固な又最も有望な民族とするが、邦種の蜜蜂はどうひい氣目に見ても、殆どあらゆる種類の西洋蜂に劣つてゐる。それにも拘らず、養蜂上の國粹保存主義だと

云つて、わざ／＼劣等な邦種ばかりを飼つてゐる養蜂家が一名、大阪にあつた如きは愚の極だ。

成るほど、價段から云へば、邦種は洋種に比べて十分の一にも當らぬ。洋種一群の價段が八十圓から百二十圓にも上つたことがあるなどは、ほんの一時の熱であつたとしても、公平なところ、今のところ、五十圓は當り前である。それが邦種なら、たつた三圓で買へる。洋種なら、王蜂一匹でも七圓から十四五圓にするのだ。この相違は、一つには、邦種があり振れてゐて珍らしくないにも由る。誰れだツて、日本犬を――土佐犬か何か特別なのでなければ――金を出して買ふものは殆ど無いのと同様であらう。

然し邦種の蜜蜂を飼つて見て經驗したところによると、ただ珍らしくないのが劣等だと云はれた理由ではない。第一、その採收して來て蜜房の中に釀成する蜜の質が洋種のほどに濃厚でない。無論、それほど濃厚でなくとも、腐らぬだけ水分を蒸發させてあるかして、それを秋から春の初めまでの越年期乃ち、ざツと半ヶ年の居喰ひの料にして置けるのだ。稀薄な蜜には比較的に滋養分が乏しいとすれば、邦種の蜜蜂は日本軍隊の兵卒どもの如くまづい物で能く生活してゐるわけで、生活維持の上から至極便法になつてるが、その蜜を人間の市場に賣り物に出す時は、分量が多くて質量が少い。と云ふのは、蜂蜜は稀薄なのよりも濃厚なのが重量も値うちも結集してゐるからである。

第二に、世界中で最もまづい物を喰つてゐる日本軍隊は却つて最も強いが、精神上の關係が加はらぬ

日本蜂はどうしても敵に對する抵抗力が弱い。實際養蜂家の注意すべきことに、管理者として[illegible]がある。巣箱と云ふ物は、一般にその口が地上から二三寸あがつてゐるやうに置かれるが、蜂の出入り口、乃ち、巣門には門と同じ平面で二寸ばかりは板を出してある。蜂は一旦そこへとまつてから巣に這入つて行くのだが、僕等はそれでもなほ満足せず、その板のはづれから地上へまた別な板なり竹なりの橋を架けて置く。この橋がしてないと、さらし雨の日に、蜂が直ぐ巣門へ這入れないで、見る〳〵四五十匹かその手前で倒れてしまう事がある。橋があるとそんなことは全く起らないが、その代り蝦蟇と云ふづう〳〵しい敵は、この橋を半ばのぼつたところにうづくまつて、巣門から飛び出す蜂をかたツぱしから喰ひ込んでしまう。そして巣門内の蜂がそれに氣付いて一匹も出なくなると、またのそのそと這んで行つて、巣の正面を手で以つてがり〳〵云はせる。斯うなると蜂も恐慌半分、恐怖半分にぞろ〳〵飛び出すのをまたぱくり〳〵やつてしまう。養蜂家等は蝦蟇を發見すると直ぐ巣箱から取り除いてしまうのだが、たま〳〵その大きな腹を割いて見ると、百匹足らずの蜂がまだこなれないで出たこともある。

蝦蟇ほどにづう〳〵しくないが、また蜜蜂の鋭敏な敵は熊蜂と赤蜂とである。巣門の高さが二分しかないので熊蜂のからだは這入れないが、蛆はそれにも拘らず這入らうとして門をがり〳〵かじることがある。そんな時には、然し、大抵、蜜蜂に抱圍されて刺し殺されてしまうが、この敵一匹を倒す爲

めには蜜蜂が少くとも二十匹倒れる。そしてそれをもかまはず敵に飛び付くのは洋種のに多く、邦種のは大抵巣内に引ツ込んでしまふ。が、熊蜂の聯合軍隊は見るもおそろしいもので、――僕が初めて邦種の蜜蜂をたツた一群買ひ求めてまだ間もなかつた時のことだが、もう、敵は感づいてしまつて、巣口、働蜂が小さめの如くぱら／＼と飛び歸つて來る庭の空へ、その蜂よりも殆ど五倍大なのが五六匹も群を成して、歩調を整へた飛行機隊の如く方向が確に、若しくは大洋を浮ぶ戰闘艦隊の如く堂々しく、現はれたのである。これを見た僕はぞツとした。さして敵は人間の姿を見ると、どこかへ隠れてしまひ、人が見えなくなると、また現はれたではないか？幸ひに、この時は、テニスのラケットを以つて二匹を打ち落し、他を追ひ拂つてしまつた。

赤蜂になると、少しからだが小いので、蜜蜂の巣門を這入つて殺されたのに僕は二回出くわした。一回のは洋種の巣で、大した損害を發見しなかつた。が、或時、邦種の一群の一部があたふたと巣門から逃げ出し而も飛びもしないで、何百匹となくどれもこれも箱の周圍の地上を這ひずりまわつてるるのを見た。拾ひ上げて巣門へ持つて行つても門を避けて外方に向ふ様子が、どうしても何かからだに故障があつて、生活界を遮ざけられたやうだ。それにしても、故障蜂が身體の故障の爲めに、一匹や二匹づゝ、あり勝ちに、生活界を追はれて再び巣に歸へれなくなるのを見るのとは違ひ、數百匹が一時にとは異狀だと思つた。果して赤蜂に内部を襲はれたのであつた。その翌朝のこと、兎に角探し

得た敵の死體はこれを巢門まで運び出してあつたが、邦種は腰が弱いので、その場に臨んだ時にあわて過ぎたのである。そして巢門外を這ひまわつたあわてもののうちには、敵と巢門内で戰つて僅げにも負傷したのもあつたらうが、さうでないのが大部分で、而も皆減んでしまつて、本群はたツた一匹の敵蜂の爲めに小い物になつてしまつた。

以上は蜜蜂に對する蜜蜂以外の盜蜂だが、蜜蜂同志でも盜蜂があり、從つてまたその番兵がある。これに備へる爲め、各群には必らず番兵があつて、或時間毎に交替して巢門に並ぶ。大きな群になると、その番兵は一列六七匹のが二列にも增すことがある。そして番兵と番兵との間には各々一匹の蜂が出入出來るだけの餘地を殘して置いて、歸り來る蜂を一々鼻覺で誰何する。そしてにほひが違ふと――別群の蜂の來襲に相違ないから――飛びかかつて格鬪する。そして敵味方とも倒れてしまうのである。この點は邦種のも洋種のも變りはないが、邦種のは格鬪にも誰何にも根氣が弱い、僕が最後に殘して置いた邦種一群が洋種の爲めに平らげられたのは、つまり、それが爲めであつた。

洋種のが邦種のに盜蜂に行くのを僕はわざとうツちやつて置いた。午前のうちはそれでも精を出して防いでゐたが、午後には、もう、盜蜂に澤山這入られてゐるのを自覺したのか。巢門をあたふたと出たり這入つたりして、別に防禦もせず、さりとて花粉を取りに飛んでも行かぬものが多くたつてゐた。その夜、巢門に網を塞いで置いた、翌朝、盜蜂が這入れないでまご付いてるのを追ひ拂つてか

ら、巣の中を調べて見ると既に已にその群の王なる母蜂が取り除かれてゐるのを發見した。先づ王を除いて統一力を失はしめ、それからゆるり〱と貯蜜を運んでしまはうと云ふのが、すさまじい盜蜂の計劃であつたのだ。

邦種の第二缺點を餘り長く述べたが、まだ第三の缺點としては、洋種がよく家畜化してゐるに反して、邦種は野性質を脫し切れない。氣六ケしくツて、少し面白くないと直ぐ逃走を企てる。一つには、わが國の土地に慣れてゐて、どこへ行つても生活が出來ると云ふ氣ままがある爲めだらう。かの一時最も尊重されたイタリヤ種の如きは、本邦輸入の初年には誰れも彼れも越冬に全然失敗した。その翌年の輸入で半分だけは取りとめた。そしてイタリヤ種の越冬をうまく行けるやうになつたのは、輸入の三年目からである。それにしても、イタリヤ種は勿論、それよりもこの土地にもツと慣れた洋種——たとへば、暗色種のカニオラやカウカサス等——でも、箱を逃げたが最後、却つて生活の續けやうがないのである。雨に打たれ、風に拂はれ、落伍に落伍が加はるばかりで、そのうちには王をも逸してしまう。そしてそんな恐れのないやうな安全な木の洞や岩穴はなか〱見付からぬのである。これを知つてか知らないでか、洋種はなか〱逃走を企てぬが邦種は土地ツ兒であるだけ、そこはづう〱しい。

然し邦種でも王さへ附いて行かねば逃走をしないので、王の羽根を——勿論、交尾濟みの上でだが、——切つて置く道もあるが、僕は洋種專門になつてからそんな必要をも感じなくなつた。云つて

置くが、蜜蜂は人間と違ひ、和種の、洋種のと決して差別はしない。

二、蜜蜂の社會組織

明治の最終年であつた、わが國の或學者が蜜蜂國の組織は立君制でなく、共和政體だと云ふことを論じた。研究心に乏しく、何事にも雷同してゐたわが國の養蜂家等には、この新說——實は、新說でもなかつたのだが——は蜂蜜その物のやうなあまい夢を破る所以であつた。わが日本養蜂家の一部は、蜂の社會に王がゐると云ふ形だけを以つて、蜂も亦日本人の如く忠君愛國の徒だと思ひ做して來た。かかる俗物どもの代表者とも云ふべき一養蜂家が、——多分、理解に乏しい貴族院議員のやうな老人だらう——さきの學者の說を攻擊して、苟も日本人の言論として不忠不義極まると叫んだ。實に、とんでもない見當違ひである。

そんなあまい、見當違ひの夢で以つて、蜜蜂の社會の實際は判斷出來ない。第一、蜜蜂の王は女性であつて、若し交尾不能に終つてゐるか、產卵二ケ年に及んで老衰に傾くか、不時の疾病または負傷に出會つてるかすると、如何に王でも、働蜂どもから殺されてしまうのである。第二に、產卵は無論交尾濟みの女王、乃ち、母蜂がするのだが、それが活動的になるのには、時期を問はず、働蜂どもが外界から花粉を盛んに運んで來なければ駄目だ。これを見ても、働蜂どもが幼蟲の喰ひ物を持つて來

て奨勵しなければ、母蜂は産卵を盛んにしないのである。第三に、蜂群逃走の時を觀察するに、働蜂どもが半分以上巣門を出揃つてしまはないと、母蜂は出て來ない。そして出て來た時のあわて方と云つたら、「お前達はどうしたのだ」と云つてるやうだ。これを見ても、逃走の如き一大事件にも、働蜂どもの意志がさきに立つてゐるのである。

以上は蜜蜂の立君制的觀察を打破する三條件だ。なほ一つを加へることが出來るなら、熊蜂などの王は自分獨りで越冬を爲し、春になつて新らたに働蜂を産んで行くに反して、蜜蜂の王は先づ働蜂どもがなければ生存さへ出來ぬ。だが、立君制でないのが直ちに共和制である所以にはならぬ。後說も亦單に比喩をもて弄んでゐるのだ。僕の考へでは斯く勢力ある働蜂どもも――單に自我の中の無數の慾望の如きで、――それらが一々個的に意志があるのではないから、その團體を共和的と云ふのは當つてゐない。然しかかる動物の本能的團結たるは勿論のことだ。王に一群を左右する力はないが、王がゐると云ふことは産卵を豫知させて働蜂にその場所を守る落ち着きを具へるのは事實だ。この故からして、若し一群がたま／＼巣箱から抛り出されることがあるとしても、必らず王のゐるところへ群集するのである。僕は曾て王の羽根を切らうとして指を以つて先づ王を捕へようとしてゐるうち、どうした拍子か、それを見失つてしまつた。そのうち、僕の被つてるヹール付きの帽子の上に働蜂どもが群を成したのでそツと取り外して調べて見ると、果してそこに王が多數から守られてゐた。

一群は一母蜂に附屬して越冬するのだが、梅の花の咲く頃から巢内は活動をし初め、働蜂は巢の掃除や整理をするそのあとの巢房を、母蜂は一々檢分して産卵の場所を定める。そして母蜂が産み付けたあとを働蜂が、またそれ〴〵見まわつて、適當に養分のあるなしを調べて置くと、卵がかへつて幼蟲になる。働蜂が最も愛着するのはこの幼蟲をで、これが少しでも出來ると、それまで逃走の意志があつた群も再び思ひとまるのだ。幼蟲はその初め小さい勾玉のやうに房の底に横たはつてゐるが、これが段々大きくなると、房一杯に立つて、一旦その上を蠟と花粉との混合物で薄く蓋されてしまふ。斯うなると、働蜂どもはもう見向きもしないで、「勝手に出られるなら出ろ」と云ふありさまだ。

蓋された房中の幼蟲は、成熟すると卵の産み付けから二十一日目に、止むを得ず、自分で蓋を噛み破つて新働蜂として出るのだが、不成熟のは半分ばかりからだを出したまゝ死んでしまつたり、出ないで出ても羽根が出來てゐなかつたりするので、若働蜂どもはそれを流産兒若しくは不能兒として、遠慮なく巢門外に運搬してしまふ。否、産兒の出來損ないにばかりさう云ふことをするのではない。立派に働いてた働蜂でも一たび羽根に負傷するか、他に活動不能の個處を發見されるかすると、格嚴な意味の喰ひつぶしと見られて、その場に無理にも仲間から抛り出されてしまふ。そしてそれに抵抗することは出來ない。蜜蜂の社會では越冬の半死半睡期は別だが、一刻でもなまける事を許されないのである。

新働蜂のまだよく飛べないのは、巣内に於て、必要の出來た巣房増營の手傳ひをさせられ、前年生れのもの等と共に手をつないで、古い巣の下端若しくは枠の上部の横木から、幾條にも垂直にぶらさがり、それで上下左右の寸法を計つて、同じ大きさの正六角形の房——これが蜜房にも花粉房にもまた産卵房にもなる——をうらおもて兩面に枠の大きさに達するまで數限りなく築き下げて行く。その材料は蠟で、働蜂の腹の下部から産出する。それを口に取つて糸の如く延ばしながら、適宜にくツ付けて行く。ところが、王のゐない群か退化した群では、房の形が正六角に成らないで多くは圓形になり、房と房との間に出來る明きが蓋のやうなもので埋められる。邦種の造營した房は形が小さい上に有王の群にでも、不正確なのがあり勝ちだ。

當歳の働蜂がいよ〳〵外を働けるやうになり、勇んで巣門を飛び出す時は、——これは出房後殆ど十六日目だ、——先づふり返つて見て巣門の位地をおぼえ込みそれから螺線がたに空に飛びあがり、花のにほひのして來る方へ消えてしまう。近處に日あての花があらば仕合せだが、無ければ一里でも二里でも行く。そして後ろの兩足に花粉を圓く着け、腹には日光が透きとほるほど蜜を含んで飛び返る時は、一つには外敵を恐れる爲め、また一つには路を失はない爲めに、わき目も振らず一直線だ。そしてその線が高い立ち樹にでもぶつかつてゐると、それを横へ曲つては外さないで、上へばかり避けるのである。

働蜂の取つて来た蜜と花粉とは別々た房に貯蔵されるが、花粉は幼蟲の養に蜜は主食に自分達の兵糧になる。尋常た状態で一群が強大になると云ふのは、斯うして働蜂がふえることである。働蜂は無事に行けば六ケ月までの生命を保てるさうだが、多くは外の勞働中に害敵にやられたり、強風に吹き倒されたり、僅かの寒氣に野外で凍つたり、巣門外で盗蜂と格闘したりして、意外の横死を遂げてしまうものだ。尤も、云はば、小さいものだから、雨ぐらゐ降つても、雨滴と雨滴との間をくぐつて雨中を濡れないで歸つて来ることもある。また、働蜂の複合眼は両側に一つ宛あり、また三つが頭上にあり、花中に蜜を吸ひながら、その上を害敵が飛ぶのも見えるやうになつてゐるから、そんな場合は大抵危難を免れる。が、何にしろ、箱の内外で不眠不休の勞働をするのであり、その上に、蜜源地が一里も二里もあつた場合には、過勞の爲めにどうしても壽命が短くなるにきまつてる。

然し群全體としては、働蜂の死の数よりも、寧ろ、あとからあとから生れる、新働蜂の方が多いので、春の暖氣が増すに從つて段々強大になつて行く。

三、分　封

養蜂家が養蜂の場所を定める時、あたりに同業者の有無を調べるが、この時能く一般人の報告にだまされることがある。どこそこに「澤山」蜂を飼つてるところがあると云ふので、それは困ると思つ

て行つて見るとなかに、たツた一群を持つてゐるのだ。素人が澤山と云ふのに一箱の中でも少く達入つてゐると云ふのであるが、養蜂家の勘定では、群が多いのを澤山と云ふのだ。そしてこの意味の澤山も、無論、その初めは一群から分れて行くのである。

一群は一つの巣箱の中に飼はれるが、舊式の飼ひ方では、巣の組織は蜜蜂の自由にまかせて置く。で、蜜をしぼる時は、巣をこわしてその巣と共にしぼると云ふ不便がある。が、新式改良の巣箱では、巣をこわさないでその巣脾の兩面の蜜だけを分離器にかけて取れるやうに、一巣脾が一枠毎になつてゐて、何どきでもこれを箱から出せるし、また他の箱へも入れられるし、斯うして自由に並べて置くことが出來る。一枠の巣脾兩面におの〱千匹附着すると見て、一群三枠のものが六千匹、五枠のが一萬匹、十枠のが二萬匹のわけだ。性の悪い種蜂屋が五枠の群（と云へば、可たり大群であるべきだ）として賣つたのでは、正味二枠分しかゐないのである。そして二枠ぐらゐの群では、如何に良種だと云つても、花の涸絶する八月に若しくは十月後の無花期にあり勝ちの盜蜂を防ぎ切れぬばかりでない。熱を持ち合ふ力が不足の爲め越冬が出來ず、蟄居時期の初めに於て全滅してしまう。

少くとも、正味三枠以上ある群でないと、安全とは云へぬ。それが冬を越して氣候があツたかくなると、毎日夜の明けるのを待つて、順番に入りかはり、立ちかはり、麗はしい良い匂ひのする花の世界へ出て行くのである。蜜蜂の好んで行く花を氣候順に並べると、早春では梅の花、猫柳など。櫻の

咲く頃になると、その花を初めとして、すみれ、たんぽぽ、菜花、げんげ、クロバ。六月には、石榴、蜜柑、栗の花。五六月からは、刀見草へ澤山行き、七月頃には南瓜の花に行く。この花にはふたたしぼむものだが、蜂のうちにはうツかりその中にとぢ込められるものがあつて、――それでも夏のことだから、――その中に一夜のあまい夢を見、夜があけてその花が開くのを待つて飛び出る。その他にモチの花、猿すべりの花、イボタの花、すべての秋草、矢車草、ダリヤ等の西洋花。そして菜の花から枇杷の花を一年中のうちどめとする。

人間がのんきな花見をするとは違ひ、蜜蜂が花に行くのは唯一の勞働である。それをして蜂群の維持が出來るのだし、またさうしなければ勤勉な仲間から自分が殺されてしまう。その代り、蜜と花粉とを身に滿載して歸る働蜂の勇ましさと云つたら、口に勝ちどきを擧げないばかりである。その何千、何萬匹と云ふのが一直線に皆自分の巣を目がけて庭の空を歸つて來る。それが一箱の蜂群ものであつても、なか〱盛んなもので――ぱらり〱と、小つぶの雨が音なしに降つてるやうだ。これが四月から五月の初めへかけての空なら、養蜂家どもはそれを見て獨り心にうなづくのである。ヹール付きの帽子を被つて、巣箱を開き、枠を外して見ると、巣脾の下端部に――果して――一つなり、數個なりの異常過大な房が經營されてゐる。これを王臺と云ふ。新王蜂が出來る用意だ。蜜房、花粉房並に働蜂房ま卒てさがつた巣脾の兩面に並びひらいて各々正六角であるのは既に語つた通りだが、王臺は

その大きさが六角房の三倍乃至五倍もあり、圓い形が底太く延びて巢脾の下端にくツ付き、さきは下に向いてあいてゐる丁度樫の實のどん栗のやうだ。僕等はそのうちから成るべく大きく、格恰よく、且丈夫なのを一つなり、二つなり必要なだけ殘して、あとはすべて指さきでつぶしてしまふ。一群に付き、さう澤山王ばかりが出來ても仕やうがないからである。

王臺造營には働蜂どもが、そこに片寄つて群がるから、直ぐその箇處が分る。その初めは房底としてどん栗のちよくのやうな物が出來るのだが、元來これは働蜂どもが並みの働蜂房を改造するのであつて、そこを改造の場所と選んだその時、旣に、數時間前に、並みに行けば働蜂となつて生れる卵が一つうみ付けられてゐたわけだ。その周圍に働蜂どもはどん栗の下がつたやうに圓く蠟壁を築き廣げて行つて、その下端は少し細長くなつて蓋が出來るやうになる。その王臺材料は蠟と花粉とをまぜ合はせた物だが、蓋が出來るのは十日目頃からで、それまでは下方にひらいてゐて、そこから働蜂どもは出入りして王蛆の喰ひ物を供給する。

俗には、王蛆の喰ひ物を『王の乳』と云つて、特別なのやうに云ひ做すが、米國の養蜂家ダグントによると、それは誤稱だ。並みの働蜂卵に與へられた乳と同じ物だが、働蜂卵に最初一回與へて置くのは三日の間に變化して一種の粗食になつてしまふのが、王蛆にはゆたかに且絕えず與へられるので、變化しないだけのことだ。この點だけを見ても、單に王の名に對して有せられるメテルリンク流の小

六ケしい議論は取れてしまはう。つまり、王となる卵も働蜂卵と同じであり王蛆に與へられる食物も働蜂蛆に與へられるのと違ひはない。ただ比較的に長い給餌と王臺につつまれるとの二事で以つて、同じ卵が働蜂と成らないで王蜂と生れるのである。

今一つ云ふのを略して來たが、蜜蜂の社會には、俗に「惰け者」と云はれる雄蜂どもが必要に應じて生れて來ることを忘れてはならぬ。母蜂が雄蜂卵を産み付けるのは五月の初めから七月の半ば頃までで、丁度、王臺が出來る頃である。雄蜂房は働蜂房を少し大きく改造しただけで、形並に向きは同じだ。卵の初めから滿二十四日で化成する。そして雄蜂は一群に二百匹から四五百匹しか生れない。生れたての王蜂よりは恰幅があつておほ飯喰らひである雄に、『おれは別に任務がある』といふやうに、少しも働蜂等とは勞働を共にしない。天氣のいい日には、而も熱い盛りに、ぞろ／＼と巣門を飛び出し、あてどもなく徒らに空中をぶん／＼とおほきな羽音を立てて飛んでるから、『あいつ、惰け者だ、な』とは直ぐ素人にも分る。然し雄蜂どもは、その實、養蜂場の空にまで溢れてゐる瑞兆を感知してゐるのである。

新王蜂の誕生！十日目頃に蓋の出來た王臺はなほ段々熟して行くと、さきの方が赤みを帶びて來るが、なほ熱すると、赤黑くなる。これは人間なら、滿月のしるしで、王蜂蛆は卵から滿二週間で蓋を切る。全體母蜂の健全た群に於て新王の要求が出るのは、あまり大群の爲めに分封の必要を生じたか、

である。で、大抵の場合には母蜂は新王が生れる二三日前に、同群中の一部——再び收容して見ると、先づざつと正味二三枠分——を引きつれて、その舊巣を出てしまう。或人はかの女がまごまごしてゐると新王に挑戰されるのを恐れてだと云ふが、これも矢張り働蜂どもの本能作用に母蜂が使はれるのであらう。これを自然分封と云ふ。

自然分封は、天氣のいい日に、午前九時から十一時頃までに起るが、必らず一たびは庭のこんもりした樹の枝にをさまつて蠢動する。これが若し單に逃走の意志で飛び出たのであつたら、その周圍少くとも一二里の間を——蜜源不足か、敵の多いかの爲めに——いやなのだから、飛び出す前に違い行くさきを定めてかかるので、直ちにその方へ勢ひよく消えてしまうのだ。が、分封群はこの蠢動中に四方に探偵を放つて行くべきさきの報告を受ける爲め、午後の四時頃まで同じところにとどまつてゐる。その間に僕等は用意してある別な箱にこれを收容するのだが、その面倒をも避ける爲め、僕等は群が自然に分封しさうな時を見計つて、人爲的に群を分けてやり、この方に在來の母蜂がをさまるやうにする。

四、新群の成立

それでも、無王になつた方の群が失望もせず、まご付きもしないのは、新王の出現が分つてるから

である。外からは働蜂どもは待ち遠しがつて王臺の蓋の周圍を和らげてやり、王臺の中からは、もう十分に成育した新王が早く出ようとして、蓋の裏をばり／＼嚙みほごしてゐる。その嚙みた音は、僕等が巣箱のそばにゐて、これを聞くことが出來る。産みの苦しみとも云へよう。また生れる歡聲のしるしとも見えよう。蓋が蝶つがひでとめてあつたかのやうに一方へ外れると、新王はさも清淨潔白のからだでとび出す。そして一先づ自分でからだを振ふ。働蜂どものうちには、そのあとに從つて行つて口に用意した蜜をささげようとするのもあるし、からになつた王臺の中を調べて、うぶ屋のあと始末をするのもある。

新王、乃ち、生れた處女蜂が第一に何をやるかと云ふに、他の王臺の、殊に蓋された王臺の、ぶち毀わしである。これは自分以外に王の生れるのを防ぐ爲めである。王と王とが出くわすと、必らず格鬪してどちらかが倒れると云ふ人があるが、これは然し半ば事實、半ばは想像でないかと僕には思はれる。王蜂にも尻に劍はあるが、働蜂のそれの如く眞つ直ぐのでなく、曲刀のやうにさきが曲つてゐて、不斷は、産み付けた卵の位置を直す爲めにこそ使へ、他の王との戰ひの外の戰ひには全く用ゐない。そして王と王との果し合ひも滅多にないやうで――これは自分も貴重なからだを、どうせ果し合へば、倒れしめぬまでも、負傷するのを避ける爲めであらう。一群に王が二つゐると、一方が追ひ出されるか殺されるかするのは、これも九分九厘までは働蜂どもの仕わざらしい。その證據には、一

群内に働蜂どもが、どうした拍子か分封もしないので、新らしい王が無事で舊王と一つ箱にゐるのを、僕は或ところで發見したことがある。この場合を解釋すると、働蜂どもに分封の氣力もないほどなので、どつちかの王を除くの力も皆から集まらなかつたのだと見なければならぬ。

兎に角、生れ立ての王が他の王臺をかみ毀わさうとするのは、自分以外の王が生れるのを防ぐ爲めであるのは事實だとしても、ただそれだけの消極的本能だらう。そして働蜂どもに於て今一囘、若しくは今二回の分封を必要としてゐると、渠等は新王が今存在してゐる王臺を毀わすのをさしとめるのである。そして第一回の分封には舊王が巣を出るに反し、第二回のからはあとから生れた王の方がその群に分れる。斯くて、僕等は蜜蜂の一群に付き、越冬が出來る程度を見越しての群分けを二つなり二つ以上なり得るのである。が、その新王どもの方がいづれも交尾濟みにならねば、それだけの新群が各々全く成立したとは云へない。

ここでちよつとメテルリンクの蜂王の名につり込まれた裝飾的修辭癖が、如何にも表面は立派だが、養蜂の事實に相違してゐることを三ケ條指摘して置きたい第一、渠は働蜂どもが街も自分等の王たるものに『尻を向けぬ』と云つてゐる。が、僕の實見では、禮を知らぬ蜂ばかりを見たせいか、決してそんなことは云へない。王の通るところには渠等は道を開くのは事實だが、王に從つて行くもの若くは今から蜜をささげようとするもの等の外は、如何に王のそばでも、まち／＼に勝手な方を向い

てゐる。

第二、巢に働蜂どもが如何に受けつけぬ王でも、これを同類の如くは刺して殺さぬと云ふ[illegible]が、これもさう——少くとも、除外例なしには——斷言出來ない。僕の實見によると、受け付けぬ王を働蜂どもが除くには、三方法が用ゐられてゐる。甲のは、寄つてたかつて王を巢門外に押し出すのだ。これは次ぎに云はうとする方法の出來そくなひかも知れぬ。乙のは、矢張り寄つてたかつて來て、メテルリンクの云ふ通り、その場に壓迫して饑ゑ死ぬか、呼吸がとまるかするまで、一日一晩でも行つてゐるのだ。これは巢脾の面上に起つたことでも、枠の下木の上に出來たことでも、多くの場合、おしまひには落ちて底板の上のことになる。そして王の逃げ方によつては、死ぬには至らないで、おのづから甲の場合の結果になることもある。丙のは壓迫群のうちの氣ばやな奴が二三匹で直接に王を刺し殺してしまう。僕はこれを二回も見證した。そしてその一回の時の如きは、死んだ王に働蜂の倒れさ さつた儘、その王と働蜂とが一緒につながつて、巢門外にころがつてゐた。

かかることを王の名にかこつけて尤もらしく取りつくろつた報告をするのは、メテルリンクが養蜂屋として素人どもを感服させて、お客にしようとする手であるか、然らざれば、蜂の文學に於ける例の空疎な修辭癖を蜜蜂の研究にも應用したのであらう。なほ第三に巢は處女王が交尾の爲めに巢外に出た時、多くの雄蜂どもを試みて飽くまで高く空天に舞ひのぼり、最も有勢について來た最後の一雄

と交尾すると云ふ。が、これも例の手で、ほんの形容に過ぎなからう。若し果してさうだとすれば、多くの熱心な養蜂家がわざ〳〵交尾場を樹木のない廣ツパに選定するまでもないことだ如何にまだ身輕な處女王でも、王は身體の組織が働蜂とは勿論、雄蜂とも違つてゐて、さう高くも遠くも飛べない。身長は働蜂の半インチに對して、王蜂のは處女の時でも殆ど一インチの八分の五か六はあり、その癖、羽根はそれに比較するだけの大きさがない。且、働蜂の腹部には二つの空氣ぶくろがあつて身體を輕くするに反し、王蜂にはそれが押しのけられて二つの卵巣が据わつてゐる。そんなからだで、どうして雄蜂ども――働蜂よりは少し大きいが、王蜂よりは少し小い――の追求を、そんなに高いところまで、わざと逃げてゐるだけの機敏さがあらう?メテルリンクは『鳥が來て最早その神秘を冒さぬやうな場所に達せねばならぬ』と云ふ理由を附會してゐるが、鳥またはその他の害敵の難はありがちのことで、新王が交尾に出たつ切り歸らぬことを僕等は度々發見した。つまり、王蜂の交尾にか女がその目的で出ると、直ぐ行きあたりばつたりに出來るものらしい。

兎に角、今や養蜂場五六月の空には、餘ほどの密度を以つて雄蜂どもが粗大な羽音を立てて飛びまわり、處女王の飛翔を待つてゐるわけだ。そして巣內の雄蜂どもはまたかの女を促して、飛翔せしめるやうにする。ところが、處女王は生れて三日目から、天氣さへよければ一日に二三度乃至五六度も巣を出るが、それが直ちに雄蜂に會ふ目的であるとは、多くの一般研究家等の言をさし置いて、先づ

最も信用すべき斯道の人ニブスタに據ると、實際には稀れだ。蜂の書では、かの女の最初の飛翔はただ度々踏査をする爲めであつて、五日間毎日何回も飛んで出たこともあるさうだ。然し交尾は空中で行はれる事實だけは確かであつて、早いのは新王が生れてから三日目、遲いのでも十日を越えることは滅多にない。が、僕は曾て一新王が――餘ほどどうかしてゐたのだらう――十二日目にやつと交尾済みになつたのを見た。さう交尾が後れる時は、群によると、新王を不姙王と見てあぞり出し、働蜂どもが自分等が孵化しない卵を産み初めることがあつて、王には餘ほど危險だ。

交尾がいよ／＼済んだ新王は、その尻に濡れた白いすぢのやうな物を曳いて巣に飛び歸つて來るが、それは相手であつた雄蜂の――ただ一匹の――陽具が雄蜂からちぎれて這入つてゐる證據で、また新王に母蜂の資格が出來たしるしである。母蜂はそれから秋若しくは翌年の分封の時までは外出しないが、大抵は交尾の二日目から、巣の中で毎日二千から三千の卵を産み初めるのである。それでも、最初の卵は、僅かばかり、否、時によると或多數まで、入らない雄蜂と化する。雄蜂が生れるのは、生理上精蟲のかかつてゐない卵であるから、母蜂の腹中に入つた陽根がまだよく納まらぬうちに出る卵だけ、まだ働蜂には化せないのであるが、母蜂の精蟲嚢には、ルカルト教授によると、一匹の雄蜂から受けた精蟲を二千五百萬保つことが出來るやうになる。かかる無數のものを遂に王に與へた雄蜂は、そのかかる光榮の報いとして、立ちどころに死んでしまう。

雄蜂としては、然し、斯くて死ぬのも一生だが、斯くしないで虐殺されて死ぬのも亦一生だ。見じめと云へば、どつちだつても見じめであらう。どうせ極少數の新王に對して、それに要する雄蜂どもが百倍乃至千倍も生れるのであるから、――見よ、實際の自然はさうきつちりと經濟的には行かぬ――第一回の新王の交尾が濟む頃からして、段々と働蜂どもに虐待される。それも、まだあとに第二王の出生が豫期されてるか、唯一の新母蜂にまだ信を置いてゐぬかすると、その間は働蜂どもが雄蜂どもをまだいたはつて置く。が、いよ〱これで全く不用だとなると、―この穀つぶしめ、出て行け―よがしに取り扱はれる。この場合、母蜂はちつとも頓着なく、巣脾の上に自分の産卵面を廣げて行くのである。

働蜂は自分よりもづうたいの大きな雄蜂を――雄蜂がいやと云ふのに、無理にも――口に喰はへて引きずり、ひんまわして、巣門外に追ひ出す。すると、渠は止むを得ず他の蜂箱の巣門へ飛んで行つて、その群の仲間入りをさせて貰はうとする。斷つて置くが、雄蜂だけはどの群へも木戸御免で、番兵は誰何もしないのである。が、その頃には、そこでも雄蜂虐待が初まつてるのだから、また同じやうにして追ひ出されてしまう。またその他の群へ行つて見てもさうだ。かかる虐待を働蜂の一匹や二匹や三匹がやつてる間は、まだしもさうされないでゐる雄蜂の方が多い。が、やがては一群中の働蜂どもが皆さう云ふ氣になる時が來るのだ。すると、午後四時から六時頃まで（この時間では、まだ明る

いかし のたつた二時間で、六七十匹の雄蜂どもが巣門外に抛り出される。かうなつた時は、雄蜂の方で再び飛び立つ氣力もなくなつてゐる。それが二日か三日のうちには、雄蜂の大部分は群中から投げられてしまつて、たま／＼あとに殘つたのはもつと長く働蜂どもと共棲してゐられることはゐられても、殆ど日に立たなくなる。そして全く雄蜂がゐなくなるのは、一番後れたところで、八月の末だ。そしてこの時節には、――今や巣内の喰ひつぶしは無くなつたが、――花の咲くの少い時節に盜蜂の來襲が頻りになるので、一群が神經過敏になつて番兵の働きも一しほ敏活になる。斯くてここに新蜂群の成立が十分確かになつたのである。

五、蜜蜂の變態生理

既に分つた通り、成立した蜂群には母群一匹と無數の働蜂どもとがゐる。そして分封時に至つて、雄蜂どもが仲間入りをする。この三別蜂を產む者は一群毎に一つの王しかない。

王は王蜂に於ける唯一の完備した女性で、その腹部には生れながらにして卵が產めるやうになつてゐる。かの女は遂に交尾を了し得なかつたとしても、矢つ張り生れながらの卵は產むのである。これを單性生殖若しくは處女出產と云ふ。一種の生理的變態だが、この場合の孵化は雄蜂にしかならない。その理由は、卵を蜂王蛆若しくは働蜂蛆に化すべき精蟲を前以つてその王が受けてゐないからで

ある。で、これと同じ場合老いぼれた母蜂にもないではない。多産の結果さきに交尾の時に受けた雄蜂の精蟲が精蟲嚢に盡きてしまつたところから。――こんなことがあるから、三年目の母蜂は、もう僕等はこれを用ゐないが、――等しく卵は産んでも雄蜂ばかりになつてしまう。シイボルドと云ふ有名な顯微鏡學者の發見によると、まだ盛んな産卵期にある母蜂の産んだ卵でも、雄蜂房に這入つてるのには、精蟲がかかつてゐない。して見ると、變態的に處女王が産むのは、乃ち、それと同じ卵に過ぎないのである。

それから、働蜂は俗に女性でも男性でもなく、中性の物だと云はれてゐる。が、實はエブスタの云ふ通り『發達してゐない女性』とするが本當らしい。尋常の狀態では、無論、働蜂は産蜂をしないが、さきにも云つた通り、新王にどうしても交尾を了した樣子がないやうに見える時にも、働蜂は自分で王の代理を務め出すことがある。若しまたその群が長らく無王となり、且その前に産み付けられた卵も今は幼蟲となり、また羽根ある蜂となつてしまうと、働蜂どもは自分等が全く母蜂になりおほせたつもりになつて、頻りに産卵をする。

そして眞の母蜂が一房に一箇づつ卵を置くとは反對に、働蜂は大抵二箇以上甚しいのは五六箇も、一房の中に積み重ねる。そしてその多くは孵化しないで終るが、しても亦雄蜂しか生れない。そしてこれは眞の雄蜂通り交尾に有効であるかどうかは、すべての養蜂家並に研究家等の疑問とするところ

である。かかる場合に最も奇怪なのは、働蜂の尻にあつて彼と戦ふ爲めの劍が無くなつてしまふことだ。いよ〳〵勢りたつてからその群に新王を導入してやらうとしても、なか〳〵受け付けないのみならず、忽ちその女王に飛びかかつて脊で壓迫して窒息させてしまうか、然らざれば、まだ劍を残してゐる働蜂どもがその女王をさし殺してしまうかする。

六、蜂群滅亡の場合

一、外部の害敵が如何に多いとしてもまだ内部までは侵し得ない。が、蟲蛾の巣が蜂室の障壁を通して出來ると、蜂群は産卵房の根本から喰ひくづされてしまふ。従つて、蟲蛾は蜜蜂の最大敵、最大破滅者と思はれてゐる。

二、何かの理由で長らく無王にたつたままの群、若しくは一層御可哀に、もう、王を與へようとしても受け付けないで働蜂どもが産卵してゐる群は、どうせ滅亡するにきまつてゐる。王が出來ッこがないので、分封の望みもないのは勿論、群その物が消極的になるばかりだ。たま〳〵生れて來るのがあつても、用のない雄蜂どもであり。退化した働蜂等はまた日々減じて行く。全體働蜂等の生命はダダントに據ると、冬を込めて、比較的無活動の時期にでも、無事に行つて、六箇月を越えない。春から夏の活動期では、過勞と故障が多いとの爲め、平均たツた四十日以内だ。従つて無王群は夏なら僅ゐ

渇ゑないでも四十日以内に、また冬を數へて而も暖くして置いても六ケ月間に全滅してまうわけだ。

洋種に襲はれた爲めと僕が第一章で云ひ及んだ僕の一無王群は、——邦種であつたが、人に預けてそのうち邦種の王をどこかで發見したら買ひ與へようと思つてるうち、九月から十月へ一ケ月半ほど經た。その間に、もと四枠分もあつた群がたツた二三十匹と數へられるほどの慘澹たる少數に減じてゐて、無能の雄蜂も一つ二つゐたし、働蜂の過半には劍が落ちてゐた。それでも時期が時期だけに、なほ四五の巣房に貯蜜をしてゐただけが感心なものであつた。饑ゑの爲めに死んで行つたのではなかつたから。

ところが、第三に、饑ゑ凍えて全滅した群ほど悲慘なものはない。これは專ら越冬期の食物・乃ち、貯蜜が盡きて熱が取れなかた爲めの死である。僕の或時の失敗で云へば、梅の花の匂ひがあたりに少しづつ瑣え出した時、——この時期の活動には、まだ蜜源が乏しい爲め、蜂に無駄骨折りをさせるやうなものだから貯蜜の少い群へはわざ〳〵給蜜してやるべきを、僕は怠つてゐたので、——或群の巣門外に四五十匹の蜂が倒れてゐるのを見た。あわてて中を調べようとして箱の蓋を取つて見ると、巣枠の上に置いた新聞紙が濕つたやうに冷たいではないか？僕は四五日前に一日甚だ寒い日があつたのを思ひ出し、また最近二三日のあつたかさに働蜂が一匹も出遊しなかつたのを思ひ出した。そして痛ましさを豫期してこのおほひの新聞紙を上から上から取り除いて行つた。

もう、巣の整理に取りかかつてゐた群擁には、古い巣脾を故意の為めにかみ砕いた蜂蠟の屑の上に枠數だけの山を成してゐた。が、その上に蜂の死骸がまた何千何百となく、累々としてつみ重なつてゐた。僕はやり慣れない墓堀りの寂し味をおぼえた。そして一々取り出して見た枠の群脾間には、とツ付いたまゝ動かなくなつたのもあるが、それらを羽拂木で拂ひ落すと、一層驚いたことには、どの巣房にも、多少でも蜜の氣のしてゐたらしいのには、悉く、あはれな小動物が一匹づつ首を深く突ツ込んで、その黒い冷たい尻だけを正六角の房外に出して死んでゐた。そしてそれを一々摘まんで引き出さうとしても、いのち掛けに喰ひ込んだ力がまださながらに殘つてるやうに、なか〳〵抵抗力があつた。

この時、僕はこの一群が持つてゐた而もなか〳〵侮れない生々慾を、幽靈の如くそのあたりに感じたと思つた。

詩人の養蜂日記

一

五月六日。晴。痔疾醫並に耳科醫へ行つた。けさ、兼て養蜂を註文して置いた木村養蜂園から、二三日前分封したと云ふ蜂群を屆けて來た。新聞社の人だから安くして置くと云つて、箱ごと金二圓だ。

庭の口あたりのいいところに、南向きに箱を据ゑた。入り口を詰めて來た新聞紙を外すと、直ぐ蜂は出て來て、場所の變つたのを調べまはつてるやうであつたが、やがて働きに行き出した。赤い花粉を兩の蜜ぶくろに入れて來るのは、ゲンゲの花のだ。蜂の出入自由に蜜を取り來たり、取りに行く様子が面白い。尻の太く鐵色なのは雄蜂であるらしい。働き蜂は尻のさきが黑く、その黑い尻に細い黄色じみた白色、横筋が四段に入り、胴に一番近い八段目のところに薄い赤茶色がある。

五月八日。晴。浪花蜂園からまた一群(五圓)の蜂を持ち來る。箱は借り箱であつたから、本式のを別に持つて來て貰ふことにした。同園主人に奥村氏から來たのを調べて貰つたら、産卵がないので王ぬけではないかと云つた。

五月九日。晴。浪花蜂園主の北川氏を猪名川の西に訪ふ。餌皿に巣を造つた蜂があつたので、珍らしいままに、それを試みたそのまま分けてあるのがあつた。

五月十日。晴。正宗(得)氏來訪、箕面並に寶塚を案内した。同氏一泊。蜂を世話する時顔をおそはれない爲めの被り網があるのだが、僕は妻の古い三越ベールをその代りにすることにした。それを被つて、正宗氏に蜂箱の中を見せた。

五月十一日。晴。奥村氏から届いた方の蜂群に王(尻が長くて黑い)のゐるのは分つたが、尻が細いので交尾前ではないかと心配した。が、それも昨日調べたに依ると、多少の産卵を見ることが出來る

し、王の尻も少し太くたつて來た。

五月十二日。雨。青鞜社の中野初子氏歡迎會があり、それにお伴して箕面動物園へ、けふ催しのあつた『ほととぎす啼合會』を聽きに行つた。

五月十四日。晴。東華園に行き、ライラクの小株を買つて來た。八月、花を開くさうだ。ついでに石橋停留所そばの花園でフレンチラナンキユーラスと云ふ草花をも買つた。もしもつと永く大阪に勤務するとすれば、蜂の爲めに庭一杯クローバーの種を播いてもいいと思ふ。然し蜂は蜜源を撰ぶに、近くて少い花より、遠くても多いのに目をくれるらしい。三四丁から二十丁までの範圍には行くさうだ。庭のゲンゲに働くのを見たことがない。兎に角、出て行つて花粉や花蜜を取つて來ないなまけ者はさし殺されてしまうのだ。

五月十六日。晴。浪花蜂園を訪ひ、蜂蜜を巣から分離させるところを見た。分離させた蜜に飛び込んだ蜂を一匹拾ひあげて、蜜だらけのまま別な箱の入り口に置くと、その箱の群蜂が出て來て、寄つてたかつてその一匹に着いた蜜を吸ひ取り、見る〳〵丸裸かにしておツぽり出してしまつた。他群の仲間であるからであらう。ところが、別な蜂――これも同箱のではない――を一匹入り口にほうり上げたら、これは平氣で這入つて行つた。今に見ろ、引きずり出されるからと云つて待つてゐたが一向に出されて來ない。多分生れ立ての兒であつたらう。幼兒はまだ特種のにほひが染みてゐないから

と云ふので、試みに別な他箱の兒をまたあけて見ると、矢張りのこ〳〵這入つて行つて、出ては來なかつた。親に成つた蜂なら、かみ殺され、さし殺されてしまうに決つてるさうだ。

五月十七日。晴。實業之世界社から僕の小說『發展』を出版しようと云ふので、野依氏へ原稿と條件とを送つた。蜂が井戸の流の元へ水を飲みに來たのを見た。夜、『近重博士の音韻論を駁す』(八枚)を草す。

五月廿三日。晴。正宗得三郎氏の洋畫展覽會を見に丸善に行つたついでに、外國養蜂の書物二冊を購求し、なほ二種を註文した。

五月廿四日。晴。辯護士××氏から、自著『放浪』の僞版『わが身の罪』を求め得たから、近日中に訴訟の手續をすると云つて來た。

五月廿六日。晴。きのふは、谷崎潤一郎氏と初めて文樂座で會ひ、そこを切り上げてから、同氏並に正宗、森田、織田、山本の四畫家と共に寶塚へ行つて一夜を過したが、けさ、うとうとしてゐる耳に聽える人聲が、新らしいが曾つて聽きおぼえがあるやうに思へた。終電車で池田まで來たが、そこで電車が入庫してしまつたので、人力車に乘つたが、醉ツ拂ひの車夫であつたから路ばたへ投げ出された。で、ゆふべは池田へとまつて、けさ五時の初電車でやつて來たと。ふと、僕があたまを上げたら、ゆふべ電話をかけて呼んだ長田幹彥氏が到着したのであつた。そんなことで、きのふは新聞社へ

出社した切り歸宅しなかつたうちに、蜂が澤山箱の外へ出て騷いだ爲め、家のものは蜂の逃げるかと思つたさうだ。けふもそれをやつたが、空氣浴をやつてたのだ。

五月廿九日。晴。北川氏を訪ねたら、花に蜜へ行つて、家にゐないと云ふ。ゲンゲなどが乏しくなつたので、そして蜜柑の花の時期になつたので、蜂をすべてその山に持つて行つたのだ。田圃を五六町のことだから、散歩がてら歩いてそこへ行つて見た。北川氏は今分封した蜂を、群を強盛にして澤山の蜜を取る必要上、もとの箱へ人工的に返してやつたところで、網をかぶつたまゝ、その箱の近處の蜂箱に腰かけてゐた。氏はこの山で百箱以上の群を世話して二年前に大失敗をしたのださうだ。蜜柑山がそばにあるので、轉地養蜂には持つて來いのところだ。まだ十分に發酵してゐない蜜が採れたのを舐めて見たが、水氣が多くて、ねばり氣が少い。それから氏と同行して再び猪名川の川西へ歸り、氏の家の庭に殘してあるアウストリヤ種とロシヤ種との形相並に働き振りを見せて貰つた。洋種は蜂の體も大きいし、働きもなか〳〵強盛だ。僕の蜂がこの頃ゲンゲの赤い花粉の代りに、白いのを取つて來るものもあるので、氏に何かと聽いて見たら、柿の花に行つてるのださうだ。今はブドウもあつて、その花粉も白い。蜜柑のは黄の冴えたのだが、ホワイトクローバーのは黄の黒ずんだ色だ。僕の蜂がけふ塀外の草原のゲンゲによく働いてゐるのを見たが、もう、その花は少くなつたやうだ。第二號の箱へ十三四日前に入れたワクが一杯になつてゐるので、けふ、また巣礎の少しついたのを一

つ加へてやつた。一週間程前に入れたのが四分の一ほど集づけられた。第一號の箱へもまた一ワク入れた。

五月卅日。晴。耳科醫へ行く。痔の方は注射でうまく直つたが、耳の方は隔日に通つてゐながらまだ全快の見込みがない。けふは、それでも鼻から中耳へ入れるカテテルが樂に通つた。正宗氏の電話が京都から社へ來たので、社から直ぐ京都へ行つた。僕が行つた時は、正宗・森田、織田氏が××さんの家で舞子の寫生畫を終つたところであつた。谷崎、長田の二氏もゐた。そこへ僕の外に山本・山ノ内二氏も集つた。みんな一緒にその夜を鴨川のほとりで過したが、僕は蜂ばかりが心配であつた。

五月卅一日。京都でゆふ立に逢ひ、夜遲く池田へ着いた時大雷雨に出會つた。「發展」の校正が來出した。けふは雨であつたから、蜂も餘り外へ出なかつたさうだ。蜂は水に弱いから、鳥渡した雨にも飛べなくなり、途中の草葉で雨やみをするが、雨が何時間もつづくと、そこで打たれたまま死んでしまうのだ。

六月三日。春陽堂から電信カハセで『寢雪』原稿料の殘金〇拾〇圓が來たが、そのカハセを家のものがなくしてしまつた。

六月四日。夜、雨。けさ、珍らしく朝早く起きて郵便局へ行き、昨日のカハセ紛失の手續きをした。が、カハセは意外にも盆の底にくツ付いてゐたのを下女が發見した。直ぐ湯に這入り、それから「發

展」の序文（田山氏の評言を反駁した）を七枚認めた。すると、王堂倶樂部の主人がやつて來て、蜜蜂の一群が飛んで來たから、どうかして吳れろと云つた。幸ひに明いた箱が一つ殘つてゐたから、それとベールとを用意して行くと、蜂は倶樂部の庭から向ふ隣りの某氏の庭へ移り、葡萄蔓のぐるりにうぢやうぢやたかつてゐた。先づ王を捕へようとしたが、どうしても發見せられない。子供が棒でその群を投つたと云ふから、その時うち殺されたかも知れない。どうして全部を收容したらいいか分らないので、蔓ごとそツくり箱に入れて持つて歸り、北川氏へワクを取りに行くと、氏も一緒にやつて來て、世話をして吳れた。蔓ごと持つて來たがまだ素人の所以で、たとへ王が發見せられないでも、桶か何かですくひ取ればよかつたのにと云つた。そして某氏の庭にまだ殘つてゐる分を、蔓を持つて行つて、またそれにとまらせて持ち歸つた。王がゐるか、ゐないか、まだ分らないが、これが都合よく納まれば第三の群が出來るわけだ。第二の箱から蜜と産卵の澤山着いたワクを一つ取り出し、跡へは新らしいワクを入れ、取り出したワクから蜂をふり拂つて、それを第三號の箱の中心とし、左右に新らしいワクを各々一個づつ着けてやつた。中心ワクの巢のワクの幅以上にはみ出した分を直す爲め、ナイフでうら表の兩面を少しづつそぎ取つた箱をふきんでしぼつたら、一ポンドの三分の一强の蜜を得た。第二箱の一ワクに王臺が一つ出來て、既に二日目だ。兎に角、第一、第二の箱とも、來た時よりも二倍の强群になつた。

埋めて置いたダリヤの球根が芽を出して、もう、五寸ばかりに延びた。夜園ひの裏に添ふて植ゑた朝顏の苗もけふの雨で大分勢ひが着くだらう。北川氏はまだ獨身者だが、今夜、養蜂に趣味があつて、それが爲めにもツと山の奧へでも一緒に行つて住むことの出來る細君を探してゐると云つてゐた。

六月六日。晴。松永氏がロンドンよりショーとワイルドとの肖像繪ハガキ並にその他ロンドン風景の繪ハガキを送つて來た。第一號、第二號の蜂箱の巢のでこぼこに出來たのを整理してやる爲め、三ワクだけただ上部の蜜蓋のふくらみ過ぎたところを削つたが、それで蜜が一ポンド入りの瓶に一杯取れた。巢を整理する時第一號の王蜂が石の上にころがつたが、別に傷をしたやうでもなかつた。初めて來た時から見れば、黑い尻が二倍ほどに肥えた。多分、奧村氏が今年の新王を持つて來てくれたのであつたらう。第三號の群も落ち付いたやうだが、巢造りに急がしいせいか、なかなか荒い。そして入り來たるものを一々誰何してゐた。敵の侵入したのを喰はへて飛んだのがまた二回まで見えた。三ツ空ワクを入れたのが二つまで大分巢を拵らへた。箱が三個になつたので、まごつくあわて者が出來たせいでもあらう。第二號の入り口にはけふは六七匹の番兵が規則正しく同じほどの通り路をあけて並んでゐた。そしてさし殺された蜂の死骸がその前方の地上に六ツも七ツもころがつてゐた。王臺はけふ取り去つた。不馴れの爲め、意外な時分封されるのが心配だし、分封させても花が少くなつたから强群になるまいとのことであるから。北川氏も去る一日から蜜の採集をとめたが、本年八斗ばか

り取つたさうだ。某氏の庭の蜂の殘黨がまだゐるさうで、きのふの留意を飜し、昨夜行つて見たら、家中が留守であつたから、今夕行くと、もう、一匹も殘つてゐなかつた。元の巢へ飛び歸つたか、然らざれば迷ひ子になつたのだらう。早稻田文學に出た白松南山氏の「神になる意志」に於て僕の哲學を駁してあるから、それに對する反駁『神になる意志の不徹底』を七枚まで書いた。新聞紙上で書いてゐる『船場の一隅より』を『事實と批評』といふ表題に改め、前者が哲學的であつたのを、後者は成るべく當面の問題に觸れることにした。

六月八日。小雨。校正三百二十枚まで濟ませた。野依氏の事業振りの捗々しいのに感心する。前に表庭の板塀の裏に添ふて根分けした朝顏を、また根分けして裏庭にも植ゑた。丁度小雨が降り出したからである。第二番のとして、また朝顏の種を播いた。きのふ、吉岡氏に會ひ、蜂を飼つてはどうだと勸めて見たが、氏の熱中してゐる朝顏の大輪を變り物にする恐れがあるからいやだと云つた。氏は大阪市中で家根の上に庭園を拵らへてゐるのだが、蜂も市中では家根の上で飼ふのである。

六月九日。雨。第二號の蜂群がまた王臺を拵らへた。而も一時に七個だ。第三號の王蜂がまだ見付からないが、新らしく產卵が少しあるのは事實だ。『神になる意志の不徹底』を書きあげたが、十四枚だ。その中に、蜂の一群を一つの肉體と見ての譬喩を出して置いた。蜂の働き工合を見てゐると、蜂の一個々々は獨立でない。人間の體內に於ける無數の慾望のやうなものだ。

六月十日。晴。耳科醫へ行く。(カテテルは樂に這入るが、それを取つた跡はまた直ぐにつまつてしまう)。正宗、森田、織田の三畫家、夜になつて來訪。僕の蜂群から取つた蜜を微溫湯にとかして馳走した。

六月十一日。淸子と共にかじかを聽きに、夜、箕面公園の谷合を散歩した。川の流れが急でないので、かじかの聲もよく冴えない。きのふも、けふも、堺外のクローバーに蜂が二三匹働いてゐるのを見たが、もう蜜源が少くなつて來た。第一號の箱が餘り一日中日光が當るので、朝だけ當るやうな位置へ夜のうちに向きを直して置いた。けふも第三號の箱を調べて見たが、王蜂が見付からない。それに、作る巢の形が正六角であるべきのが、心持ち圓い。また、最初に第二號から取つて入れたワクの巢蜜を喰つてしまうやうだ。これらは王脫けもしくは逃走の恐れを示めすわけだ。産卵が少しばかりあつても、王ぬけの時は働蜂が雄蜂うじを産むと聽いてゐる。

六月十二日。晴。吉岡氏が投網を持つて來たので、猪名川の下流を打ち歩いた。そこへ北川氏が淸子と共にやつて來て、第三號の蜂群が逃走の意志があると告げた。果してさうかと思つたが、まさかけふ直ぐでもなからうと早合點して、同氏をもつれて川を下つた。淸子は下駄の鼻緖が切れて、さきへ歸つた。午後三時半頃から歸宅すると、それが既に逃走した跡であつた。淸子の話に、僕等が歸宅の一時間ほど前に、蜂群がぞろぞろ箱を逃げ出し、空中にわん／＼云つて暫く飛びまはり、すべてが出

たのを待つて、勢揃への勢ひ見事に二三度うづを舞つてから飛んで行つたさうだ。實直の客と見做さはる羽音が臺所にゐてもよく聽えたさうだ。實は、きのふ調べた時、産卵が少しあつたのは、王蜂のでなく、果して働蜂卵であつたのだ。けさも、第三號を調べたが、どうも王が見えないし、第二號箱から取つて入れたワクの蜜が殆ど喰ひ盡されてゐた。それをうツかりしてゐたのが僕の落ちだ。王蜂は僕の心配してゐた通り、僕がこの群を收容する前、某氏の子供が棒で打つた時うち殺されてゐたのだ。王がなければ、ゐつかないのは當り前だ。早くもツとよく調べて新らしい王を與へてやつたらよかつた。が、どうせ烏合勢になつたのだから、場所を變へる度毎に落伍者を出だし、つひには消亡してしまうのだ。逃げ殘りの小群（多くは幼兒だ）は、北川氏が即座の合同法を以つて第二號箱に合同させたので、同箱は十一ワクになつた。今王臺が出來てゐるのを一つ仕あげて、第二號群を分封させて見ようと決心した。第一號箱の向きが直つたので、けふは、その蜂が働いての歸りに、一たび元の場所へ行き、それから箱へ這入つた。が、働き振りに異狀はなかつた。蜂があたまから白い花粉をつけて來るのは、何かの雜草へ行つたのださうだ。からだ中に着く花粉は、菜種の花のある時はそれだが、今は月見草の花粉だが、それは長く曳いて來るし、色も黄いろい。獵して來た川魚を料理して共に飮んでゐたので、午後五時から日本ホテルにある文藝協會の招待へ出席しなかつた。「發展」の校正全部校了。菊判で、總計四百十四頁。

六月十三日。晴。哲學雜誌到着。清子も來て分封の用意が出來かかつてゐるやうであつたが、きのふから、それは思ひ違ひであつたのが分つた。

二

六月十三日。けさ、加藤朝鳥氏が來訪した。一昨朝も來たが門が締つてゐたので歸つたさうだ。考へて見ると、あの日の前夜、飼犬の『小僧』といふのが、寢床を改め、勝手口の戸のそばで寢てゐて、からだをかいた振動がその戸にことこと傳はつた。それを泥棒ではないかと心配し、下女がよつぴて安眠しなかつた。それが爲め下女までが特別寢坊をして門を明けなかつたのだ。それはさうとして置いて、その日、加藤氏が引つ返すついでに、吳服神社の境内へ這入つて見たら、蜂がぶん／＼云つて群を成してゐたと報告して吳れた。また分封群を誰れかが逃がしたのだ、な、と思つた。で、一緒に行つて見ると、群團にはなつてゐなかつた。太い大きい高い榎の木か、もちか、何かの大木の高い枝に細い花が澤山咲いてゐる。その花を澤山の蜂が飛び渡つてゐて、ぶん／＼音はしてゐるが、何分高いのでどうすることも出來ない。一昨朝は下の方でぶん／＼云つてたと云ふのだから、或はどこかの分封群であつたのかも知れないが、それとも、また花粉花蜜を取りに毎日集つて來る蜂かも知れない。もう、山に蜜柑の花もなくなり、野に野薔薇、クローバー、あざみの花が僅かに殘つてる時節だから、僕の蜂もこんな木へ來てゐるのだらうとも思つた。が、その境内に、徑三寸ばかりの木で、縱に松の

幹のやうな皺の寄つた、皮の堅さうな、そして枝の分れがたい。そして又つくしのおばさんのやうた莢芽を所々萌え出してゐるのがある。その低いところに、一匹、蜂が這つてゐたのを見ると、日本種のとは違ひ、尻がこけて、赤みを帯びてゐるのが特異點であつた。何とか云ふ大木に行つてゐるのもそれと同じなら、池田の山手に、米國から歸つた諏訪と云ふ養蜂家が百箱も赤いイタリヤ種を飼つてるさうだから、そこの蜂が來て居るのかとも思はれた。何分高いところにゐるので、はつきりとは分らない。

けふ、第一號の箱へワクを一つさし入れたので、都合七個這入つたわけで、小い箱はこれで一杯だ。第二號へは十一ワク這入つてゐるが、一週間ほど前に入れたワクの巣端にも亦一つの王臺が出來て、そこにやがて、王蜂になる小いうじが輪のやうに丸まつてるのが見えた。この臺の中をよく見ると、滋養に供するジエリイ、俗に蜂の乳と云ふ食物も這入つてるらしい。つまり、うじの時は働蜂のうじと同じのだが、王臺に這入つて、王になる特別な滋養分を與へられるので、女王となつて生れて來るのだ。兎に角、兩箱とも狹くなつて來たので、蜂は箱の裏にくつ付いたり、出入り口にあふれたりしてゐる。庭の空を見てゐると、蜂が小雨のやうにぱら／＼と歸つて來るのが見える。

夜、北川氏のところへ行くと、大變なことをしましたと云ふ。何かと思ふと、二箱の洋種のうち、四五日前からツギ箱をしたアウストリヤ種にイタリヤがまじつた蜂群が、意外に早く分封した。が、

それを取り逃してしまつたのだ。苦勞人にもそんなことがあるのだ、な、と思つた。丁度お晝頃分封して庭の家根を越えた杉の木の絕頂にとまつた。邦種は何でも梅の木のうろや、かけた惑などのやうた低いところにとまるに決つてるが、洋種は枝葉の繁つた高い場所を選ぶのだ。それが高いので困つたが、先づ收容する箱の整理をしてから、半ば杉の木をのぼり鋸を以て蜂群のとまつた枝を枝の根からそつくり切り取らうとした。が、足がすべつて落ちかけたのを、手で幹にかゝへ附いたとたん、木がゆら〳〵とゆれた。それと同時に、蜂群は木を離れて空に舞ひあがり二三度輪に飛びまわつた後、どこかへ見えなくなつたさうだ。僕がただで收容したのを無くしたのとは違ひ、三四十圓を棒にふつてしまつたと、氏は殘念がつてゐたが、大した群でもなかつたので、跡を追つかけては行かなかつた。ところが、氏と吳服橋の上まで來た時、氏は氏の友人に出逢ひ、この殘念を話したら、ちやア、その蜂だらう、川西のお宮の藪に四五時間前わん〳〵云つてたのがある。電信の音かと思つて仰向いて見たら、蜂の群であつたと。では、明朝早く見に行かうか、多分もう他へ飛んで行つたらう。分封は一般に午前十時頃で、遲くも正午までにするもので、午後四時頃までは一度とまつた所にゐるが、どこか別にいい所を發見すると、その頃また飛んで行くのだと、北川氏は云つてゐた。

六月十四日。晴。昨夜、北川氏と別れてから、八百屋の荒木氏に鳥渡立ち寄り、けふの網打ちに誘つて置いた。それから直ぐ歸宅して、文章世界に出た中村星湖氏の『描寫の意義』に對する誤解や矛

盾を指摘する爲め、「小說表現の四階段」十七枚半を書き終へたのは、午前の五時であつた。それを封じて投函してから寢に就いたが、九時半頃吉岡氏來訪。二氏と清子と僕とで網打ちに出た。北川氏も呼びに行つたが、きのふの川西のお宮の蜂は逃げた奴ではなくて、そこのもちの木の花へ同氏の箱から蜜を取りに行つてるのであつたさうだ。して見ると、呉服神社のも僕のや、他のが働いてゐるので、かの大木ももちの木であらう。花粉は白いさうだ。ぶん／＼云つてるのは働いてゐるので、分封群のとまつたのはおとなしくしてゐるさうだ。

秀の海と云ふ宮相撲取りが網好きかして僕等について來て、一人で網を打つてくれた。鮎が三十尾、而も五六寸から八寸のもあつた。外に、なまづが二尾と澤山の鮒と雜魚とだ。途中から、奥村養蜂園の主人もゐ合して見に付いて來た。川で柿の花がさの流れてゐるのを手に取つて見たが、もう小指のさきほどの實になつてゐる。

けふ、北川氏は第二號の王蜂の羽根を切つて呉れた。分封しても、遠くまた高く飛ぶのを避ける爲めだ。王臺の格好いいのが一つ、けふで四日目であるさうだ。第一號箱を僕が調べてゐるのを見て、渠は大分巧者になつて來ましたなア、と云つてゐた。七個のワクは多いので、一つだけ、まだ巣を造つてゐないのを取り除けた。

六月十五日。晴。一昨日呉服神社で蜂の働いてゐたところをけふも見に行つたが、夕方であつたせ

いが、ゐないやうであつた。杉菜のやうな芽を出してゐる木から、その芽を見本に摘んで來てこの日記の紙挾に入れた。曾て比叡山の根本中堂の門内に一本植わつてるのを見たが、欅の木らしい。傳敎大師が印度から持つて來て植ゑたと云ふ木で、比叡山にばかり、而もたつた一本あるだけだと云はれてゐる木と同じらしい。今夜は下座敷を明け放つたので、然しそれでも電氣の光が蜂箱の口に當らないやうに注意してゐたが、二三の蜂は電氣の光へ迷つて來た。

耳科醫へ行つたが、もう大抵はよくなる筈で、次回にブーゼなしに空氣が耳內に少しでも這入つたら、最後の手術として鼓膜を今一度切つて、中の水を出して見やうと云はれた。

六月十六日。夜、大風雨。北川氏に諏訪末吉の經營する蜂園に案內して貰つた。十丁ばかり山手の下澁谷と云ふところにある。大阪の桃谷から四月に移つたとて、まだ家は假小屋のやうなものだ、でも夫婦に今年女學校を出た一人の娘と講習生數名とがゐる場所の外に、巢蜜分離室も出來てゐて、一段低い地面に七十餘箱の蜂群を並べてある。すべてイタリヤ種で王蜂は全身茶色がかつた赤だ。雄蜂は黑い尻に赤がまじつて、白色のところはない、働蜂はまた尻の前半は赤色に黑の筋が入り、後半は黑色に白筋がついてゐて、都合八段の變化になつてゐる。雨や風のせいか、この日は蜂の勢ひが弱かつた。が、ついて行つた僕の洋犬「小僧」が、箱のそばに行つて尾を振るので蜂をおだてた爲め、からだ中をさされてそこらあたりを驅けまわつたのはをかしかつた。ツギ箱をした一群に、二王が孵つ

たのを見たが、その新王がまだ孵らない王臺をかみ崩してゐた。これは自分が王權を握らうとして、他の競爭者を生れさせないつもりであるからだらうだ。

同園のそばには栗の木が多い。今に花を咲かうとするその芽が二三寸も延びてゐた。栗の花粉も白いさうだが、蜂の取つて來たのが白いからと云つても必らずしもそれと判斷することは出來にくい、赤いのをゲンゲだと思つてゐると、何かの洋草もある。イボタの花が今は野山に多い。

諏訪氏は大阪の××辯護士の養蜂失敗談をしてゐた。市中だから、家根の上に箱を置くのだが、どうした拍子か、分封の折に出た王蜂がゐなくなり、その一群が統轄を失ひ、ちり〳〵ばら〳〵に迷つて、あちらの床屋、こちらの煙草屋へと這入り込み、娘の子に飛びついたり、七十歳の老婆を刺したりした。砂糖屋は蜂には最も結構で、澤山つれ立つて行つて、ぶん〳〵、ぶん〳〵、午後半日を客が避けて來なかつた。蜂は歸らないが蜂の尻がすべて元へ返つて來て、同辯護士は一丁以内の家々へ、五圓宛の損害賠償金を出したさうだ。王の羽根を切つて置けば、群は遠くへ行かないうちに收容出來るが、それも澤山の群を持つてる蜂園ではよし惡しで、出た群が王のついて來ないのを自覺すると、元の箱へ返らうとするのだが、分封の時に限つて日頃まだ出たことのない蜂までも出るので、自分等の箱がどれか分らず、あわてて他の箱へ行つたりする。すると、おほ騷ぎが初まり、五合や一升の死體が直きにころがるやうなことになるさうだ。

ハルピンにある某會社の支店長と云ふのが養蜂をやりたいとて、夫婦で見物に來てゐたが、僕等並に僕等は、夕方大風雨の中を、共に町へ下りた。諏訪氏は室町の倶樂部へ來て、僕と玉突や碁をやつた。歸宅すると、谷崎潤氏が來阪して電報をよこしてあつたが、時間が遲いので行かなかつた。

六月十七日。晴。谷崎氏をその宿に訪ひ、それから帝國座の『マグダ』を觀た。蜂が日光に當つてさえた黄色の透明に見えたのを何種かと思つたら、邦種が蜜を澤山取つて腹をふくらせてゐたのだ。

六月十八日。晴。大阪府技師の〇學士××××氏は僕と舊妻との仲人であつたが、今回またこの人を仲に立てて、僕と舊妻との間に六年間の懸案であつた離婚問題を解決した。けさ、第二號の箱から人工分封をやつて見た。王臺がいづれも成熟して來てさきが赤くなつたから、もう分封してもいいだらうと思ひ、現在の王のついたワクを別な箱に移し、その前後に蜜やうじの多くついたワクを各々一個宛入れ、更らに空ワクを二個加へて、第二號の蜂群を組織してやつた。夜、歸宅するのが遲かつたので、その結果はまだ分らない。

六月十九日。晴。けさ起きてから、第三號の箱を椽がはから見てゐても、一向に蜂が出て來ないので、皆元の箱へ歸りでもしたのかと思つた。が、蓋を明けて見ると、さうでなく、頻りに足をつなぎ合はせて寸法を取りながら、新らしい巣を拵らへてゐる。コップに半分ばかり蜜を盛り、それをひつくり返して入口に伏せて置くと、うぢや〳〵出て來て、自分と吹き出る蜜を喰つてゐた。第一號は今

盛んに產卵するが、第三號（王の移されない前から）と第二號とは產卵停止の狀態だ。それでもかじになつたのには大分ついてゐる。第二號から格好のいい王臺をきのふ二個切り取つたのを試みに又くつつけて置いたが、一方にはさきの赤いところからくり貫かれて働蜂が中を排除してゐた。多分、切り取つた時、中のうじを痛めたので、それを知つた蜂がやり直すつもりになつたのだらう。

夕方、北川氏を訪ふ。洋種が黃いろい月見草の花粉を長く曳いて歸つて來るのを見た。アウストリヤ並にロシヤ種の働蜂は尻の橫筋が黑、白、もしくは赤の七段に數へられるが、さきの黑色の部分がいづれも邦種よりも廣く、七ツ目に至つて、アウストリヤ種に黑にぼけ、ロシヤ種は薄い赤茶色にぼけてゐる。イボタの蜜を一杯つめたワク一枚をわざ〳〵取り退けてあつた肺病患者のいい藥だと云つて。

六月二十日。曇。夜、少し雨。第一號の蜂群を調べたが、まだ王蜂が產れさうでない。今ある王臺はすべて九日に發見したのだが、その時既に二日經つてゐたとして繰つて見れば、明日か明後日は出る筈だ。然しまだ臺の色が黑みがかつて來ない。

三

六月廿一日。小雨、僕の出社中に、下女が蜂の逃走だと云つて、第一號の入り口を出る蜂に水をぶつかけたさうだ。逃走を一時防ぐにはそれでもいいのだが、どの位騷ぎ出したのだと聽いて見ると、二十四ぐらゐだと云ふ。多分、空氣浴をしに出たのを思ひ違つたのだらうが、それにしても午後

四時頃とは時間が遲過ぎた、と云つて、けさ調べたのによると、第一號箱には産卵も澤山あつて、逃走の原因はない筈だ。下女は先日の逃走があつてから、少し多く蜂が騷ぐと、直ぐまたそれかとびくびくしてゐるのだ。垣外のクローバーに洋種の蜂が働いてるのを見たが、赤蜂ばかりでなく、黑いのも一緒に來てゐるのを見ると、北川氏のアウストリヤ、イタリヤ兩種の雜種であつたらう。クローバーは開花の時期が長く、且蜂が少しの花でも見のがさないさうだ。梅雨期でも雨が餘り降らず、降つてもじめ／＼せず、直ぐからつとしてしまうのは、この邊の特色だ。

六月廿二日。雨が少し降つた。清子と共に諏訪蜂園を訪ふ。往きに安政年代の力士猪名川(稻川)の墓を見、復りにイボタの花を取つて來た。庭中の朝貌にひとつ／＼女竹を立つてやつたら、八十本宛の束が三つ入つた。竹屋のおやぢが朝貌熱心だと云ふので、種として珍らしい『黃花』や靑芳人が一粒拾圓にも賣つてると云ふ『紫宸殿』等の入り雜つたのを四五十粒呉れてやつた。けふは蜂箱を明けて見なかつたが、第二號箱に王臺が出來て以來、雄蜂が妙に增えた。一時はどの箱にも殆ど全く絕えたのを喜んでゐたのに、王が出來たらそれの交尾に必要なので、自然にまた産れて來たのだらう。それもいいが、雄蜂に限りどの箱へも這入つて行つて、蜜を喰ふには困つてしまう。が、それも一時のことで、第二號の王が出來て交尾さへうまく濟めば、たださへ花のない時期を、穀つぶしの雄蜂に働蜂にかみ殺され、さし殺されもしくは追ひ出されてしまうのだ。きのふ、けふ、王が生れないのを見る

と、分封させたのは少し早過ぎた。十四日に四日目の王臺もあつたのだから、それで勘定すると、廿五日出るのだらう。

六月廿三日。晴。耳科醫へ行く。けさ、珍らしく七時半に起床。蜂の働きを見てゐると、既に出て行つたのが花粉をつけて賑やかに歸つて來たが、第三號のだけは一匹も出入りしない。蜜を少し入り口に滴らしてやつたら、二三匹出て來た。小群だから、活動が鈍いのだらう。第二號の群で調べると、また王臺が一つ口を明いた。働蜂がぶち毀したのなら、横からかじつた跡がある筈ださうだが、十九日に發見したのも又けふのも、さきの赤かつたところだけがくり拔けてゐるのだから、既に王が二匹生れたのかも知れない。臺のさきが黑む時は既に出る時ださうだから、きのふ黑んだのかも知れない。生れ立ての王はちよこ／＼してなか／＼見つからないさうだ。

六月廿四日。晴。午前十一時、褥の中から蜂のさわいでるのが聽えた。そら、ことだと飛び起きた。戸を明けて見ると、第二號と第三號との蜂が出て、入りまじつて空にわん／＼云つてゐる。入り口を這入つて行くのも澤山あつたが、段々空を離れて行くのは向ふ隣りの某氏の庭へ下りたやうだから行つて見ると、そこの家内中があれ／＼と驚いてゐるところであつた。庭の石燈籠に落ちついて一團を成してゐた。深い茶碗を持つて行つて箱の中へすくひ取つてゐるところへ北川氏もやつて來た。きのふから疑問であつたから、同氏に來て貰ふことにしてあつたのだ。第三號の王が入り口に出てゐ

たから今ひろつて置いたと云ふ。では、第三號箱を明けて見た時、外の蓋の間に二三十匹群れてゐたのは王を守つてゐたのだらうと氣が付いた。この經過はかうだ。第二號には、果して十九日にも、廿三日にも新王が出た。で、廿三日の王の仲間（第二分封には後の王が出るさうだから）が分封した。その騷ぎにつれて、兼て逃走の念があつた第三號の　が飛び出したが、王の羽根を切つてあるので、逃走群が再び元へをさまつたのだ。で、結局、第二號群から第三號は人工的に、第四號は自然的に首尾よく分封出來たわけだと云つて、第四號の王は生れてけふで二三日だから、交尾がもしまだとすれば、あす、あさつてのうちにとの考へで箱を出るだらう。その時三號に歸るか、それとも雀か何かに喰はれてしまうか、それがまた確かでない。兎に角、けふはどの箱をも明けられたいから、そのままにして置くのだ。然し第一號からろうじの澤山ついたワクを一つ出して第四號のに入れてやつた。第一號は今イボタの蜜を取つて來るらしい、そのにほひがする。

北川氏と花屋敷へ行き、午後三時から七時まで蜂群を調べたら黄いろい花粉を取つて來るのは栗の花ださうだ。氏から豫備の箱をまた一つ借りて歸つた。

六月廿五日。晴。きのふ花屋敷で蜂に目の上をさされたのが、けさ起きて見たら意外に腫れてゐた。けふ、第二號の箱を調べたら、新らしい王のゐるのを發見した。ちよか〳〵して僕の手の上へ這ひあがつた。王臺は五ッ蓋が明いてゐたから、（明かない一つは切り取つてしまつた）或はなほ何匹か

出てゐるのかも知れない。産卵がない上に、蜜を殆ど喰つてしまつて、ワクがいづれも輕い。また逃走する恐れがある。蜜をコップに伏せて與へた。風がつよかつたので、他の箱は調べなかつた。

六月廿六日。雨。第一號箱から産卵の付いたワクを一つ取り第二號箱の輕いのと入れかへてやつた。第四號にも新王が一匹ゐるのを發見した。また、一新王が第二號箱の外へ投げ出されて死んでゐた。第二號には一王より外ゐない。して見ると、なほ他の二匹の行くゑが分らない。多分無用だから殺されてしまつたのだらう。けふは四箱とも蜂はよく働いてゐた。

六月廿七日。晴。日の腫れは直つた。第三號の蜂群には産卵が出來初めた。すべての蜂がゆふ方月見草を取つて來るのを見た。

六月廿九日。晴。昨夜から『忠孝異論』を草しようと思つてゐたのが、けさ、午前二時に床へ這入つてからも氣にかかつて眠られず、三時に床を出で、裏庭から外出し、岩名川の榎の木や櫨の大木の堤の上を行き來した、雲雀のあがる聲に和して川の上を飛ぶ千鳥の聲がちり〳〵と聞えた。歸宅後、直ぐ第二號と第四號との蜂を見てから入湯と食事とをすませ、『忠孝異論』を書き初めた。けふ、野依氏の使ひが社へ來て、小說『發展』の製本を一冊渡して與れた。今夜、諏訪氏が家族を連れて來訪・岐阜の養蜂熱の甚しいのを語つた。岐阜のステーションへ下りると直ぐ蜂の飛びかふのにぶち當ると云ふ話だが、車屋から宿屋までが舉つて養蜂屋でそれも、眞面目な養蜂家でなく、單に相場師の如

く種を賣買して儲ける手合だ。蜂を本統に養成した經驗を有するものなどは殆ど一人もなく、自分の庭や空地へ砂糖の明樽を出して置くと、その中へ人の蜂が集まる。それをいい加減な時蓋をして持ち歸る。また、昆虫を採集する袋で空中を飛びかふ蜂をすくひ取る。そんなことが日當一圓ほどになるさうだ。そしてそんな蜂にいい加減な王を與へて販賣するのだ。蜂から云ふと、あまり多過ぎて喰ふ物もなく、花粉や花蜜の代りに、米屋の糠を取り、油屋の油かすを取りに行く。去年岐阜に起つた一揆の原因もそれで、蜂が餘りに稻の花に行くので（それも止むを得ずだが）米の收穫を害せられると思ひ違つたからのことであつた。

午後十一時頃諏訪氏と與殿橋の上で別れると、北川氏がやつて來るのに逢つた。氏は近頃岐阜の人が來てゐて忙しいが、この一週間にこの近所の蜂の種が殆ど無くなつてしまつたと語つた。

六月卅日。晴。出社せず。午前九時、第二號と第四號との蜂群をおだてて王の交尾を促す爲め、蜜を並んだワクの上に千鳥形に垂らしてやつた。これは昨夜諏訪氏から聞いた通りに實行したのだが、實後までその影響は見えなかつた。交尾は午前十時から十一時、遲くも正午までに行はれなければ効がないさうだ。第一號の箱に蟻が澤山のぼつて行くので、見てゐると、巣門までは行くがその中へは這入れない。番兵の蜂が片つ端から蹴散らしてしまうからである。でも、にが汁をあびせて、蟻の道を途絶した。

七月一日。晴。第二號箱を調べたら、産卵を初めてゐた。第一號のは勿論、第三號にも産卵が[illegible]出あるのを見屆けた。

七月三日。晴。秋海どう、えぞ菊、その他の根や種を持つて來て呉れた人がある。第四號の蜂も産卵し出したので、新王は二匹とも物になつたわけだ。

七月五日。晴。耳科醫へ行き、再び鼓膜を切つて貰つた。蜂の産卵するのはいいが、それに相當するだけの花粉がこの頃取れるか、どうかが疑問だ。諏訪氏より使ひあり、明日人工的に王蜂を製造する試驗を見せるとのこと。

七月六日。晴。神崎氏と共に諏訪氏を訪ひ、蜂王人工的製造を教へて貰つた。先づ實際の王臺へ(これは一昨日から故意に作らせてあつたさうだ)中のジエリイを取つて來て、人工王臺に入れ、その上に働蜂房の王子がうじになつて一日目位のを取つて載せるのだ。うじは働蜂になるのも變りはないが、王臺に於て働蜂のと違つた食物、乃ち、ジエリイを吸收するので女王となつて生れるのである。自然の王臺を臨時に造らせようとするには、王をちよつと脫いで置けば容易なことださうだ。また、花の盛りに蜜ばかりを充分得ようとするにも、殘酷のやうだが、王脫けにして置く。那樣は王がゐなければ却つて逃走の恐れがないさうだから、さきに僕のところの收容群が逃げたのも、王脫けのせいではないらしい。王がゐて、そこに落ち付く氣がなかつたから、却つて逃走を急がせたわけだ。贅王の

群は逃げてもどうせうまく行かないから、自然の全滅をするまでも、乃ち、その箱が一匹になるまでも固守するさうだ。

遅い晝食をやつてから、諏訪氏はその講習生四名を率ゐて僕の蜂を見に來た。ところが、僕の歸宅前一時間の頃第四號の蜂群が逃走してしまつたのを發見した。「また蜂が逃げましたよ」と清子は少しがつかりしてゐた。その跡を見ると、箱は穴だらけだ。逃走を中途から防ぐ爲めに水をぶつかけたのだが、もう役に立たなかつた。王は大抵後に逃げ出すのだから雄蜂驅除器を巣門にあてておけば、先づ王を取り止め、從つて全群が復歸するのであつたのださうだ。逃走の原因は箱内があつたか過ぎたのとさなぎが無くなつたのとだ。働蜂はさなぎに愛着するが王子や既に密閉せられた房兒には餘り執着しないからである。產卵の出來たのばかりを嬉しがつてゐたのは僕の不注意であつた。第四號箱に殘つたワクのうち、二個は新聞紙に包んでしまひ、一個は第三號箱の殆ど巣が着いてゐないワクと入れ更へた。且、第一號巣に第二號の中のワクの、各々一個づつ、上から一寸五分ほどのところから燒け巣を切り取つて貰つた。五回產卵に使はれた巣は赤黑くなつて、蜂がそれを役に立てないばかりでなく、棄てて置くから害敵蛾が巣を喰つてはびこるのだ。よしまた產卵しても、房が狹くなつてるので生れた蜂の形が小いさうだ。そんなのを四月に切り、また七月初旬に取り、更らに九月下旬に取るやうにすれば、產卵を奬勵することになつて來年の春までには强群になるのである。

同勢は歸つてまた淺花蜂園の洋種を見に行つた。僕は北川氏から雄蜂驅除器を一個買つて歸宅した。第二號群に蜜をコップに一杯ほど與へ、各箱の上に日光を避ける爲めのむしろをかけてやつた。

七月七日。風雨。服部氏の『泡鳴氏に與ふ』を再駁する詩論を十二枚書いた。『發展』の初版印税百圓を受け取つた。

七月八日。雨。夜に入つて雷あり。社へ來た通信の中に養蜂熱の惡結果を報ずるのがあつた。岐阜の一百姓が發狂してその妻と共に蜂箱を脊負つて町中を毎日歩き廻つてるのがあるさうだ。

蜂と人

三月十五日。

おい、水野君、君の『木と草』を讀んだよ。そしてあの中に現はさうとした感想——寧ろ哲理若しくは具體思想だと云ふデマンドを君は持つてるだらうが——をあの程度に於ては充分に受け取れた。が、ああ云ふ沈思默考の行き方には、既に既に、メタリンクの行き方に最上の實例がある通り、見え透いた型、乃ち、淺薄な形式がつき纏つてゐるに決つたものである。

一面には、新らしく感覺から出發して、草木、呼吸、繁茂、沈默と進む。他の一面では、感覺界と無理に突飛な關係を持たせられた神祕につづいて、運命、靈魂、沈默と來る。そしてこの兩方面の到着點

なる沈默は、內容に於て不同一であつても、呼び名さへ同じければ同一だと見て、それ以上の反省が入らないとした――さう云ふのが、君の形式、否、あの君の感想文中に於て君が有意的にか、無意的にか、どつちかに眞似したメタリンク常套の形式である。そしてさう云ふ形式の沈思默考は、單に修辭的な默考に落ちて、そのデマンドする哲理若しくは具體思想を表現することにはならない。

デマンド、乃ち、要求するところが如何に立派でも、實現するところが單に修辭的であつたら。――そして君のが大抵いつもさうでないとは云へないのである。君はよく無雜作に人の生活を粗野とか、雜駁とか云つたことがあるが、それが多くは、君の落ち入つてる缺點を知らないで、修辭的に沈思默考することを有雅、不雅だとするところから來てゐた。けれども、君のこんな先入見に反對する僕等の沈思默考の結果、乃ち、生活は、如何に粗雜に見えてか、修辭的程度にとどまつてはゐられないのである。そしてただ修辭的にあらゆる雅致を盡したのが最も精練せられた生活だ、などとは思はれないのである。

感覺が思想であり、思想が感覺として活きる表現は、メタリンクの傾く二元觀では出來ない。君の修辭的生活でも、無論、出來まい。然し、君、話は別として、君が草木の生活に關して感じた若しくは感じようとして失敗したことを、僕はこの一二年間蜂に就いて感じて來たのである。今、ここに君の形式を借用して『蜂と人』とでも云ふ小品を作るよりも、いつそ、作らないでしまひ込んで置く方

がいいと思ふが、きのふも君の家で蜂の話をして來たついでもあるから、あれに加へる注意を一つして置くよ。

外でもないが、越冬がうまく出來たと思つてゐた蜂群で、けふ調べて見たら、そのうち二三群が餓凍死をやつてゐたことである。去年の九月、十月頃から人間と同樣、越冬の準備にかかり、どの群にも春までの消費蜜も貯へさせ、凍みの通らないやうに箱も二重にしてやつてあつた。

今年になつて初めての內部調査をする氣候になつたわけで、然し、少し調査の時期が後れたかとも思へたが——第一に明けた箱には、貯蜜がまだ隨分殘つてゐて、一群はおほやうに巢脾の面上に動いてゐた。そして、その間を步きながら、母蜂は、もう、巢の整理に取りかかつてゐた。第二の箱には、もう、產卵も澤山あつて、幼虫の狀態にまで進んでゐるのも一枠每に五つや六つどころではない。働蜂の働きも活潑になつて、足に梅の花粉を固めて來て、幼虫に與へてゐるのもあつた。

ところが、三回目に明けた箱の蓋の裏が冷たかつた。又、巢の上に置いた新聞紙が濕けたやうに冷たかつた。そして僕は直ぐ失敗を覺悟した。と云ふのは、數日前に、この箱の巢門外に四五十匹も倒れたことを思ひ出したからである。あの前に新らしい給蜜をしてやればよかつたので——去七日の降雪と寒風とに最後の貯蜜を喰ひ盡したのだらう。折角、無事に越冬して活動し初めたと思つたのに、あつたかいこの二三日を一匹も出遊さへしなかつたのは、群がすべて餓ゑて凍つた爲めであつた。

巣の整理に取りかかつてゐた證據には、舊い巣脾をかみ碎いた粉なが底板の上に枠數だけの山を成してゐた。が、その上に蜂の死骸が何千何百となく、たとへば、奪取し難かつた旅順の山々に戰死したわが同胞を想像せしめるやうに、累々とつみ重なつてゐた。かうなつては、四回目に明けたのも、僕の胸に痛いほど思ひ當つて來た通り、矢つ張り、駄目であつた。そして僕は失敗した看護人の後悔、さなくば、また仕慣れない墓掘りの寂し味をおぼえた。

この二箱内には、小い物の死と濕り氣としかなかつた。そして僕にはまた看護人の後悔若しくは墓掘りの寂し味しかなかつた。各枠の巣脾にとツ付いたまま動かなくなつてるものの中には、二匹や三匹のあツためれば活き返りさうなのもあつたが、どうせ全滅だから、僕は絶望的にすべてを、脾のおもてから、惜しげもなく、羽掃木でばら〳〵と掃き落した。

どの枠、どの脾、どの巣房にも、貯蜜は影もにほひも皆無なほど喰ひ盡され、吸ひ盡されてゐた。そして驚いたことには、蜜の貯へられてゐたと思はれる巣房には、悉く、小い動物が一匹づつあたまから喰ひ込んで、その黑い冷たい尻だけを正六角の房外に出してゐた。それを摘んで引き出さうとしても、いのち懸けにがつ〳〵と喰ひ込んで往つた力がまださながらに殘つてゐるやうで、なか〳〵抵抗力があつた。

君の『木と草』に於ける態度は、メタリンクに習つて、この形ばかりの抵抗力などを外存的に存在

するものとして、そこから運命や沈默の問題を引き出さうとするのである。よしんば、文體上作品上に終らないまでも、內觀洞察の實際的生命に乏しいのは事實だ。僕はこんな內容上からの反對を君に對していだき乍ら――丁度君の小品を讀んだ所であつたから――僕自身の蜂に關する一種の小品的味ひのある仕事を終へた。

と云ふのは、一生懸命に房內へ喰ひ込んだ力の跡を見て、蜂群の持つてゐた面もなか／＼侮られない生々慾を、幽靈の如く、まのあたりにぞつと感じながら、明き箱になつた箱の始末をしたからである。そして氣を換へて再び机に向つた時、僕の胸の動悸が、どうしたものか、痙攣のやうにぴくぴくしてゐて、頻りに、生と云ふことがわが身に氣にかかつて仕方がなかつた。

日記の一節

二月十日。晴。清子が念の爲めに產婆を呼んで來て吳れろと云つたのは、午前の四時であつた。こんな時の用意に、この女の父に產婆の住ひを去年からおぼえさせて置いたのだが、その父が近頃ゐないので、僕が出かけて行つた。產婆は來た。よわ／＼しい顏つきの、いつも力なささうな樣子をしてゐた女だが、僕のあとから間もなくかけ付けて來て、白い消毒着を着けた時は、男子で云へばいよいよ戰場に臨む時のやうな勇ましい顏になつた割り合に賴母しい婆アさんだわいと、僕は思つたが、こ

ちらの實際はまだそれほど進んではゐなかつたのだ。婆アさんは午後二時頃まで付いてゐたが、今夜中はまだ大丈夫だからと云つて、一先づ歸つて行つた。と云ふのは、けさ僕が驅け付けた時にも、他に出産があつて家にはゐなかつたのだから、それからこちらへ直ぐまわつて來て、眠りが足りないので、少し休んで來たいのであつた。僕も十日會の日だから、日本橋へ出て、ちよツと同會へ顏を出した。國民大會の餘勢が夜の九時頃になつて電車をとめさせたと聽き、丸の内へ這入らず、上野の方からまわつて歸つた。午後十一時また産婆を迎へに行つた。今度は車でつれて來た。

二月十一日。晴。午前一時頃待たせて置いた車夫が寒いから歸りたいと云ふのを、産婆は引きとめて歸させなかつた。どうしたわけか知らんと思つてると、かの女は僕を別室に呼びよせて云ふには、ひよツとすると醫者が必要になるかも知れない。初産の上に、また口が小さいやうだから、たとへ兒は無事に生れたとしても、あとの裂け傷は直ぐ縫つて貰はなければならぬと。そんなことたら、直ぐにも呼んで置かうと云つて、僕は車夫を産婆のさしづしたところへ使はした。

産婆はそれでも、姙婦の腹を、姙婦の力が出る度毎に一緒になつてうん〱云つてもんでゐたが見ると、かけ蒲團の上に伏せた顏には、あぶら汗が一杯出てゐる。産の時は、産婆も同じ苦しみをするとはこのことだ。な、と僕は思つた。『もツといきんで御覽なさい、どうせ一度はその時が來るものですから』と云つてきかせてゐた。姙婦は我慢づよく又奮勵してゐたやうであつたが、しまひには睡氣

を催して、うと／＼するやうになつた。實際、一日二晩を眠らなかつたのだ。

午前四時頃に、濱田病院の○○氏がやつて來た。僕に向つて、先づ産婦は子宮口が一錢銅貨大とか二錢銅貨大とか、何とか說明してゐた。診察によると、こちらが――また產婆が――餘り早手まはしをして、無理に產氣につけようとした缺點もあつたので、實際の產氣はこの正午過ぎまでは決して出ないと云つて、醫者は六時半頃一旦歸つて行つた。そしてまた十時頃に再びやつて來て、多少は進んでゐるのを發見した。然しなか／＼出さうでなかつた。産婦の腹を暖めたり、灌腸をしたりして、催促の道を執つた。

「都合によると、機械で引ッ出さなければなりませんが――さうなると、お兒さんの方はちよツと受け合はれませんが」と、醫者は僕に別室で半ば相談づくのやうに語つた。

「無論――まだ生れないものを旣に生れてゐるものより以上に保護する必要はありませんから」と、僕は答へた。僕には夫婦と云ふものが必らずしも兒を必要とすると云ふやうな考へは無い。夫婦たるものが產む多くの、多くの結果のうちにで兒と云ふものはただそのうちの一つに過ぎない。それが生を得ればこそ、奮鬪、努力、活動、乃ち自我生々力の發揮しか無いほどに强烈な實生活な問題になるが、生れなければその兒はそんな面倒な嚴格な、悲痛な營みもしないで濟む。

「然し生命は十分にあります――殊に發達が立派に出來てゐるので、あたまも大きいのがなほ更ら出

にくい原因ですから。成るべくお兒さんにも安全な方法を取ることは取るつもりですが――』
『胎兒の方はどうでもいいですよ、いよ〱機械をかけるとなれば、どうか御心配なく――』僕は、また、たとへ胎兒が生きて出ても、不具者などになつて成長するには及ぶまいと思つた。
時事時報から依頼の原稿を僕が書齋で書いてゐると、午後三時半頃、醫師がこの室へ來て、いよいよ手術にかかりますからと云つた。その話に據ると、本當の產氣を催してから、もうやがて二時間になる。二時間を越えると、產婦も胎兒も疲勞の結果共に生命があぶなくなるのであつた。
あらゆる物を消毒してから、醫師は、しやもじを幅狹くして細長くちよツとねぢつたやうなぴかぴか光る機械を二つ、兩側から手でかばひながら入れた。奥の方でかちやと輕い音がしたのは、兩方のさきが相觸れたらしい。根もとの方をきツちり合はせてから、渠は段々と強く外の方へ引いたぽきぽきと一二度音がしたのは、子宮口の破裂であつた。二つの機械の間に、眞ツ黑な血で覆はれた物が見え出して來た。それがどれだけ大きいものかと思つてると、醫者は手をゆるめて、機械を外してしまつた。
『いかん――あたりどころが惡いと、顏に傷の痕が出來る。』
見る〱引ツ込んで行つて、とツさきの平面だけ少し出てゐる物は胎兒のあたまであることを、僕は知つた。

如何に我慢強い産婦も、この絶頂に於けるゆるみを得た時、僕に聲をかけて、

『こんな亂暴な手術を受ける筈ではなかつたのに――承知したあなたが悪い』と云つた。

『然しどうせ一苦しみはしなけりやア』と、僕は答へた。

『もう直きらくになります』と云つて、醫者はまた機械を、考へ〳〵さし入れた。渠のこの落ち着いた手つゞきを見てゐると、僕には産婦に關する不安は抜けてしまつた――ただどうなるかと考へたのは、胎兒の上である。

『可愛さうに、ねえ――可愛さうに、ね』と云つて涙をこぼしながら、この室を出たり這入つたりしてゐる繼母を、僕は叱り付けて、向ふへ行かせた。そして僕は仰向けの産婦に力の托しどころを與へる爲め手を貸してやつた。母とその胎兒とは敵味方になつて生死を爭つてる光景だと思へた。

三たび機械を入れかへて、醫者は漸く胎兒のあたまを引き出した。すると、その勢ひで直ぐからだ全體も飛び出した。僕には母を足蹴にして飛び出したとしか見えなかつた。今出だ兒としては大きなきん玉を持つてるわいと思つたが、直ぐぎやアと泣いたのでその口に氣が付くと、開いた口の中まで眞ツ赤な血だらけだ。

『あふ向けに出たから』と云つて醫者は兒の口や鼻の中の血を別な機械で吸ひ取つた。それからほぞの緒を切つた。

あと産が下りてから、裂け口を縫ひ、それに手當てを施し、庭の雪を取らせて腹部を冷すやうにして、それから醫者は歸つた。産婆の用務はなほ續いて、午後九時頃までかかつた。

三十歳を越えての初産のところへ、子宮口が小さくて、兒のあたまが大きく、而もうは向きに出て來たので、最も面積の廣い額が胎兒の出をさまたげた。

その上に、また産婦の精根があまり長い苦しみと二夜の睡眠不足とでよわつてゐたので、難産の條件が四つも五つも重なつたのであつた。産婦はすべての始末がついた頃に、初めて寂しさうな淚をこぼしてゐた。が、母子ともに無事らしい。最初の引ツ張りで機械が兒の右の目の下に當つたのがちよツと赤い跡になつたが、それは直きに消えるさうだ。僕はこれまで前妻の兒が六人もあつたお産の現場を見たのはこれが初めてだが、それがまた人並み以上の難産であつた。そして人間が生を營むそもそもから、斯くも猛烈な自我主義だとはけふ初めて實見した。

修善寺雜記

一

三月六日、妻子と女中とを伴つて東京出發。伊豆の修善寺温泉に來た。實は、樺太日々の山本喜市郞氏と共にやつて來る筈であつたが、氏は用事が出來て京都へ行かねばならぬことになつたので、僕は

一足さきへやつて來たのだ。

すると、僕よりさきに松崎天民氏が同じ宿に來てゐて、久し振りで話をすることになつた。

僕が到着の夜、二人がうち明け話をして見ると、いづれも保養をしたいのだが、一仕事を持つて來たのだ。松崎氏は例の氏一流の、僕から云へばあたまから淺薄のだが、世間からは歡迎されてゐる感傷的な書き振りの書物を書いてゐる。僕はまた、一昨々年から一ケ年計劃でやり出した英雄傳が、他の著述や創作の急がしい爲めに一向まだはかどらないので、ここへ來て全速力でその遲延を回復するつもりである。で、お互ひにだらしなく話し合ふことはしないで、毎日幾時間を定めて訪問し、その他の時間は專ら各自の仕事に從はうと約束した。

然し、その翌日から、東京の諸新聞を借りに行つては話し込み、返しに來ては坐り込み、湯に這入らうかとさそひ合ひ、散歩に出ようかと出歩き、晝間も、宵も、二人は別々に落ち付いて筆を執る時間があつてもまことに少なかつた。

毎日のやうに外へ出ると、必らず玉突で勝負を爭ふか、然らざれば空氣銃をやつた。空氣銃では幾まとを當てると上の方から大蛇が首を出して來るし、また他のまとでは幽靈やしやりかうべが出るのもある。そして蛇が六點、幽靈が四點、しやりかうべが三點と云ふやうに點が取れる。在郷軍人らしい兄さんが通りすがりの慰みにやつてるのを見ると、百發百中で、一點から十點までを順番に取つて

行つたりする。同じ店に大きな達磨が口をあいて坐わつてるが、その口にまりを投げ込むと一度に十點を取れた。僕はこれが最も面白く且上手になつて、まり一かご五個のうちで、必らず二個若しくは三個は口へ這入るやうになつた。

のちには、僕の妻や女中も見に來るやうになつて、僕の幼兒（第一回の誕生をやツと過ぎた〇）もこれに親しみをおぼえたと見え、

『おダルさんは』と女中が聽くと、子供はあツと大きな口をあいて見せた。

松崎氏と僕とは、毎日出會ふ度毎に、どちらからも口を切つて、

『どうだ――少しやア書けたか』と尋ねた。すると、他の一方はきツと、

『どうも書けない』と答へた。

それでも、松崎氏は少し引ツ籠つてゐると、そのさきに二十枚や三十枚は書き進んでゐるのだ。が、僕の方は平常の調子とは違つてしまつて、たとへ平常通り夜の十時頃から午前の二時頃まで机に向つても、思ふやうに仕事がはか取らなかつた。そして隣室の客が毎夜ごとにまで義太夫をうなつてるのが聽えたり、雨戸のそとの池の水が流れる音と塀そとの川の流れとが遠く近く聽えて、雨かと驚かれたりした。

二

土地の名物は生しいたけに過ぎる物はなく、それがまた丁度しゆんで、一斤十七錢で買へた。僕は家族と共に毎日これを一升ほどは買つて燒いたり煮たりして喰つた。それが實に珍らしくてうまいのだ。そして湯好きな僕は他の人々とはずツと度數が多いほど湯に這入つた。最も多い日は八九度にも及んだ。尤も、ここは熱海とは違つて、伊豆の北方ではあるので、氣候も寒く、熱海なら正月の梅が花咲くのに、ここでは今もなほその咲き殘りがある。從つて、僕のやうに夜おそくまで起きてゐる者には、夜中にも湯に這入らないではゐられないのだ。

松崎氏の肥えたからだが湯の中から半身を出して腹部が樽のやうにふくらんでゐるのを見ると、僕はベクリンの畫「浪のたわむれ」のパン神を思ひ出さずにはゐられなかつた。その畫のパンは太つたからだを臍のあたりまで出して、浪の上に浮んでるのだ。そして美しい人魚が泳いでゐるのにからかつてゐる。然し松崎氏は修善寺記と云ふのをまた――書物の外に――東京日々に通信してゐて、その村目と云へば、村と同名の寺に於て行なつてる、新造の鐘供養と僕の消息とであつた。

三月十一日には、待つてる山本氏は來ないで、讀賣新聞の編輯長國木田收二氏が來た。たま〳〵同じ伊豆のうちなる伊東へ來てゐたのが、松崎氏の通信を日々紙上で見たので、僕等二人を尋ねて來たのだ。一泊してあすの朝歸京すると云ふので、僕等は先づ橋を渡つて裏は早や幽靈の出る空氣銃へつれて行つた。國木田氏も面白がつて一時は夢中になつて空しく銃をやつたり、まりを投げたりしてく

やしがつたが、やツと一度まりが達摩の口へ這入つたのでおほ喜びをして、それで切り上げた。そして渠は笑ひながら、

『大きな子供だ――皐アが見たらどう云ふだらう』と語つた。

それからまたぶら付いて、また午後二時頃であつたが、來客の御馳走にと僕等二人は渠を藝者屋に案内した。僕等もこの時初めてここの藝者を見たのである。出て來たうちの一名の姉さん株は東京の生れで、この女から松崎氏の得意の磯節は、なか〳〵賞讃を受けた。その夜は、僕の室で遲くまで園木田氏は僕と碁を打つた。

二三日來晴れたり雪もやうになつたりした天氣が、十三日の朝から雪になり、午後には白く積もりかけた。こんな時節に雪が降ることは數年來にないとのことであつた。が、雪がやむと地上の白色もやがて消えてしまつた。山本氏が伊勢から僕の留守宅へ出したハガキがこの日まわつて來たによると、こちらではけふ來るか、あす來るかと待つてるのに、渠は呑氣にも京都から奈良見物にまわり、それからまた伊勢の大神宮へ行つてるのだ。

僕の方ではまた一つの事件が起つた。それは他でもない、或出版屋へまわしてある六百餘枚分の原稿が紛失したと云ふ通知が來た。僕は出版屋に對してその不都合を責めると同時に、果して見付からないなら十分の損害賠償をさせるからとの通告書を發した。

三

三月十五日は午前一時頃からまた雪が降つて、夜があけると同時に晴れた。この日、山本氏から電報が來た。そして僕はその翌日渠を一里ばかりさきの大仁驛まで出迎へに行つた。

高等馬車と稱せられて、がた馬車よりは少しましのを借り切つて歸る途々、渠は、

『二等切符で來てよかつた――一等は三島からの支線にはない』と云つた。

『君も田舍そツくりだ、ね』と、僕は忠告して云つた、『一等に乘る奴はアただ乘りの鐵道官吏の家族か田舍ものしかないのだ。』

そんなことで殖民地ぢやア意張れようが、東京では無効だ。然し寫眞機械を買つて來たと云ふので、僕も皆で樂しみにやつたことのあるその腕まへを見せてやらうと云ふ覺悟をきめた。

その夜、山本氏の室で、僕は渠に松崎氏を紹介した。そして東京生れだと云ふ藝者壹に外一名をも呼んだが、東京生れが三味線を出して、

『爪びきでも初めましよう』と云つた時は、僕等皆でとめた。と云ふのは、土地の宿々の習慣として、客が土地の藝者を宿に呼ぶのはかまはないが、撥だけは持てないことになつてゐる。隣り近所の客を憚つてだ。僕等は皆、そんな心配してまで三味を彈くには及ばないと云ふ説であつた。從つて、土地の藝者は藝者の方から宿に遠慮して、客が如何に引きとめても、とまるやうなことはしない。

『不便なところだ、なア』と、山本氏は到着の當口から歎息した。

不便と云へば、僕に最も不便なのはまた別な事だ。夜おそくまで執筆してゐる間にも、湯に這入りたくなると室を出て行くのだが、僕の屬する建て物から湯までは、廊下づたひでくぐり戸を三度くぐらねばならぬ。ところで、湯番頭は十一時になれば湯場を引きあげてしまひ、夜まわりは同じ時刻からまわり出して、戸じまりをして歩く。僕はそれが爲めに他の建て物に締め込まれた。自分の建て物から締め出されたりしたことが二三度あつた。その都度、勝手を知つてゐるので、いろんな方面から帳場へまわつて行つて、夜番の人にかけ合つた。

さう云ふことを知らぬ新來の客が一人、山本氏の來た前夜に、湯場で夜を明かすの止むを得ないことに立ち至つた。蓋しその客も餘ほど吞氣ものであつたと見える。十二時頃に湯場へ出る戸が明いてたのを幸ひ、ゆつくり一浴びしてゐた間に、自分の室へ歸れなくなつてしまつた。餘儀なくまたはだかになつて湯につかつたり、出たりして、ただ獨りで時間の經過を待つた。

おほ湯と小湯とがあつて、小湯は水を僅かさせばいつでも這入れるが、おほ湯は番頭が湯を夜の十一時から十二時頃までに新らしくしてから、六七時間を經ねば人の這入れるほどの加減にはならぬ。朝の六時にはまだなかなか熱くていい加減とは云へない。

で、この吞氣な客は半ば居眠りをしながら、自分自身で加減をした小湯の方につかつてゐたのだ

と思はれる。やツと夜が明けた、な、と思はれた頃、番頭がお湯の加減を見にやつて來て、その隣りの小湯に意外にも自分よりさきに來てゐた者があるのを發見して、變な顏をして挨拶もしなかつたと云ふ。番頭にはこの時この客が湯場で夜を明かしたとは分らなかつたのだ。

四

その翌日、乃ち、三月十七日の朝、松崎氏が出發するところを、僕が先づ山本氏の持つて來た寫眞機械で寫した。この日、山本氏と共に近處をぶら付き、例の空氣銃や、川の黄色や、しだれ櫻の滿開などを寫眞に取つて直ぐ土地の寫眞屋でげんざうさせて見ると、僕の取つた松崎氏の姿は現はれてゐない。また、山本氏の取つたのはすべて光をかぶり過ぎてゐた。僕のは手輕過ぎてシヤタがまだ明いてゐなかつたのだが、山本氏のはまた餘り時間をくどく長引かせて光の感應を過度に受け、その上、手に持つた機械をふるはせてたので、一つの家が二つにも三つにもなり、一本の木が三本にも四本にも寫つてゐた。これが新米の寫眞屋二名の最初の失敗であつた。

山本氏は東京で入院中の時の顏色よりも少しましになつてゐた。また、玉突をやつても碁を圍んでも、渠は僕より少し強いやうだ。が、何をやつても渠は直ぐ疲れてしまふ。湯にさへおツくうがつて日に一度か二度しか入らない。僕には渠が病氣あがりとよりも、一種の敗殘者のやうに見えた。僕が樺太で失敗して北海道を放浪した時は、山本氏の狀態はなか〳〵活動的であつたので、僕が却つて今の

渠のやうであつた。が、今日ではそれが反對な樣子に見える。

渠の話によつて推測すると、渠は樺太に於て餘ほど放縱な不規律な生活をつづけてゐるらしい。その結果が胃腸病や神經衰弱や半ば腎虛の狀態である。僕は、北海道放浪を切り上げて歸京してからは、この六七年來、全く放縱な生活をやめてゐるが、僕の最近數年間の經驗が却つて僕をして一層いい調子に活動せしめることを語つて、渠にも不規律な起居を根本から改めるやうに僕は忠告した。

山本の敵は樺太に於ても渠をもツとおだてて、もツと不規律な生活をやらせるのが最後の勝利の秘訣だらうが、若し渠がそんなおだてに乘るやうでは馬鹿だ。然し若し渠の友人として渠にもツと廣い意味の、またもツと地方的でない意味の、活動をやらせようとする親切なものが一人でも、二人でも樺太にあるならば、渠をして先づあんな不規律な生活をやらぬやうにさせることを僕と一緒になつて忠告するがいい。やめさせるがいい。兎に角、僕等二人は北海道以來久し振りで半ケ月も一つ家に住んだので、そして山本氏も話好きである爲めに、毎日二三回づつ話し合つても、話題は盡きなかつた。そのおかげで僕は豫定の仕事が一向はか取らず、あとにもなほ忙がしいことがあるので、止むを得ず山本氏を獨り殘して、一足さきに來たやうに、また一足さきへ東京に歸ることにした。

東京へのみやげは、例の生しいたけと、修善寺の川に生ずるわさびを加へた餅とであつた。

山本氏と別れる朝、總選擧に關する市部開票の結果を新聞で見て、二人は政友會前途の爲めに悲觀

を惜しまなかつた。（大正四年）

月に小便

沼波瓊音君、僕は今これを書いて行くのに手紙のかたちを以てしたいのである。これは許して貰ふとして、ここに一つ、僕は君並びに雜誌の讀者に僕の舊句を披露して、批判若しくは意見を聽きたいのだ。

僕は俳句や和歌は作らないときめてるものである。だから、以來絶えて作らないが、僕が頻りに芭蕉などを研究した頃、――それは二十三四歳の時だ――少しやつて見たことがある。それにも別に作らうと苦心して作つたのではなかつた。翁の句などをおぼえてゐて、それがふと或折りに觸れて轉化したのだと云へば當るだらう。摸倣はそんなことにも昔から嫌ひであつて、人情の遠ざかり易きと云ふ前置きをして、

一里・二里、秋のはては萬里の港かな

とあるのに、翁の『殘夢月遠し』を句調の上だけで摸倣したぐらゐだらう。

石山に登つて林間の鐘樓に近づき、暗中に垂下せる綱を採り、一と撞き突いてこれを放てばその聲、容輪を引いて明鏡のあたりに響き行くをおぼえた。そこで、當年の源氏作者を思ひ出て、その靈

を慰めると云ふ斷わり書きがあつて、

月のうちにありと申さん源氏の間

それから、また、死に瀕せる友に送ると書いて、

骨一とつ拾ひかねたる春野かな

以上に擧げた如きは、いづれも大した問題もなく通過する種類のものだらうと思ふ。が、ここに一つ二つ、普通の行きかたとは恐らくまるで飛び離れたのがある。ナポレオンをあはれむ意味の句で、

皮一と重むけたかへレナ島の月

こんな句があるものかと云ふのがその當時の友人らの言葉であつた。句に季を入れると云ふことは、その後、僕も作らなくなつてから却つて必要なことだと分つたが、その當時はそんなことに無頓着であつた僕としても、この句には月が必らずしも抽象的な物ではなく、一大英雄を罵倒的にあはれむ氣ぶんから秋の月であることは含めてあつた。して見ると、皮がむけたと云ふやうな着想を滑稽だと攻撃されたのであらうか？ところで、偏見を離れた立ち場から云へば、句に滑稽味が這入つたッて、さう云ふ句として了解すればいいのではないか？若しまた滑稽味をゆるすにしても、月の皮がむけると云ふやうな主觀的な見かたがよくないのなら、ひばりあがる青空をおそれけりなどは矢張り成つてゐないものにならう。

今一つ、

　人間をこみじに碎け空の月

これも主觀的素想に於いて一般の俳人のとは違つてただけだらうと思はれる。わざ〳〵空の月と云ふ以上は、高くあがつてる滿月若しくはそれに近い月を想像させるに違ひない。それが人間の孤獨に與へた新らしい悲痛的感じを出したわけであつた。その當時は、無論、今の僕と違つて、どツちかと云へば悲哀觀にばかり傾いてはゐたが――。

それで、沼波君、僕は初めの方に擧げた二三句はどうでもいいのだが、最後の二句を土臺として今一つの句を擧げたいのである。乃ち、若し『皮一と重』や『人間を』のやうな句が立派に許されたとすれば、左のやうなのも亦許されるだらう。僕の第一新體詩集にも遠慮して出さなかつた句だけれども。乃ち、

　月に小便とどかぬ戀の寒さかな

これができた內狀を云へば、當時、僕がひとりの女を――教育もあつて僕も尊敬してゐた女を――口說いて聽き入れられず、恥ぢ且いきどほつてその家を出た直ぐその場の感じであつた。冬の月であることは句中に分つてるが、第一に、一般俳人どもは俳句には猫の戀しか歌はないなど云つてすましてゐた當時に、人間の戀を題材にしたのさへ既に違つてゐた。そこへ持つて來て、一般の考へから云

へば何の趣きを下品にするやうな言葉を入れたので、無論、皆がびツくりしたのも、尤もであつた。然し、その後、段々人間の戀を句中に歌ふものもできて來たし、滑稽趣味も其角や一茶の占有ではないと思はれる時代になつて見ると、どうだらう、沼波君、この句は特別にずツと活きて來はしないか？その當時でも或友人は便所の障子の破れから――これは何が何だからと見ての云ひ添へであつたらうが――月を見てこの句を思ひ出したが、これ位心の奥にまで滲みとほる傑作も珍らしからうと云つて來たことがあつた。

　それに、この句は、僕が今日僕の小説に於いて一般讀者や初歩の作家らが感じの惡いと云ふことをも僕の見識を以つて平氣で書いてゐるのと同樣、實際の經驗と考へかたとによつては、少しも尾籠な性質を含んでゐない。その上、滑稽じみた趣きも深く考へればまじめ化、悲痛化されてしまつてるのである。美と云ふものを、その言葉の表面的意味になづんで解釋する修辭學者や初歩の作家らは僕らの眼中にない。渠らの低級な見識を以つてしないでも、なほ且この一句を排斥若しくは非難することができるなら、それを君なり、君の仲間なりから聽きたいのである。

　故大須賀乙字氏には會てこの句を語つたことがあるが、酒間のことであつたから、詳しい議論は聽かないですんだ。君にも一度云つて見よう、見ようと思つてながら會ふ度毎に忘れてゐた。一つ考へて見て呉れ給へ。僕は俳人でもないのだから、君らからどんなに僕の舊句を攻撃されてもかまはない。

ただその攻撃たら攻撃の理由としつかり聞いて、一つの参考にしたいのである。

伊吹山上の記憶

伊吹登山を思ひ起す度毎に、わが記憶に浮び来るもの二三あり。薬草の多きこと、滋賀県下に有名なる大論、山嶺の明けの貴等なり。

伊吹山には、大樹全くなかりしが、近来その谷々に松、杉などを植ゑつけ、その高さ已に森林を形成し、溪水の消々たるを聴き得べし。然れども、これ、山巓に近きところなり。数丁を登れば、全山殆んど山火事ありし跡の如く、一木の日を遮ぎるなく、低き草花の、四季、かはるがはる咲けるあり。われ、牧者によろしからんと人に語りしが、四千何百尺の頂上に至るまで、水源の尋ぬべきもの無きを如何にせん。織田氏隆盛の世、信長和蘭人に託して、外國より薬草の種を取り寄せ、始めて此に之を播きければ、その名残り今にはびこりて、至る處登山の士は、一時の神農氏を氣取り得べきなり。

われ、植物學者にあらねど、下山の道すがら、目に入る花葉をつみ取り、案内者に就て、一々その名を問ひ、彼らろさげに答へしものを、手帳に控へたるうちに、同山固有のもの——棕櫚草、ふなわら草、郡内風露、伊吹風露、ぼうふ、連理草、はれりやふ、伊吹虎の尾、からす豌豆等あり。また、郡草、しもつけ、車花、すずめ豌豆、ほたら袋、唐松草、かわら松葉、くらら、ぎぼし、普通虎の尾、

ささ百合、おつぼ草等なり、以上は、われらの登りし、六月の末に花咲き居たるものなり。いまだ咲き居らぬものには、桐の葉草、柿の木草、大文字、松蟲草、熊谷草、金ばへ、銀ばへ草、さんかえふ、裏切草等あり。これらも伊吹山固有の産なりとぞ。伊吹艾は世人の夙に知る處。鳳露草も亦一般に重んぜらる。惜かりき。時今少し遲かりしならば、全山の藥草、花開きて、空中に一大花園を現ぜしものを。

幸にこの不足を補ひて餘あるもの、頂上に於ける夜明けの景なり。われ同行は、一人の外人にして、いまだ日本の地を踏むこと少かりき。かれ、おのが家より、サンドウヰチを携へ來れるのみならず、暑き日なれば、途にして、ラムネ數本を購へり。われらの頂上に達せしは、夜の三時過ぎなれば、身體を勞せし爲め、熱汗、ほとばしるが如く出でたり。われらは日の出を見るつもりなれど、時なほ早ければとて、山神を祭れる岩屋のかげに憩ひつ。待てども、待てども日は出で來らず、且、心臓の鼓動靜まるに從ひて、東西南北に吹き渡る風の、冷かなるを覺え來り、喉の渇くどころではなく、却て火を望ましき心地して、口、物云ふが重く、手かぢけて、動かし難し

案内者に、毛布二枚の用意ありしかば、一枚を彼に與へ、一枚を夫と相分ちて、石の上に横たはれり。石上に眠れるは、之が始めてなりと、夫は笑ひつ。相共にグレイの挽歌を誦して、一と眠りせんとすれども、寒きが爲めに安まらず、暫く山上をかけまはりて、暖を得、再びもとの處に戻れば、案

內者、今日の如き不思議の日はなしと答ふ。太陽出でざればなり。常にいづくより出で給ふかと問ひ糺し、彼の指さす方向に向へば、見よ、燦然として、將に日の出ならんとする光景あり。下は數千尺の地底より、疊々として積み重る、鼠色の雲間に漏れて、濃厚なるくれなゐ、紫、黄色等の光線を發射し、その手もとは、締りて細けれども、西北の蒼天に向つて延長する、その有樣をたとふれば、かの軍艦に於て用ふる、暗夜の探海燈の如く、まさに左右に振り動かんとする勢あり。その間幅の廣がるに從ひ、紅は青線と混じ、紫は黄線と雜り、黄色は紺色と結び、橙黄は青色と合し。餘は、悉く純白の末に消ゆ、嗚呼、良好の『スペクトラム』ならずや。

われ、眠れる友を呼び起して、之を示せば、彼も亦快を叫びつ。時計を見れば、早や六時を過ぐ。われらはこの美觀に滿足し、目的を達せずに、山を下らんとする時、ふと返り見れば、日は、意外なる方向に於て、灰色の雲間より、われらを窺へるなり。その丈、既に高し。われ、案內者を呼んで、そのあまりに迂濶なるをなじれば、彼も亦之を知らざりしと白狀せり。年々この山に登るもの、千を以て數ふと雖も、雲常に深くして、日の出を見しは稀なりといふ。

晝見れば、一直線にすべり下る道も夜の案內者は、之れによらで羊腸九折の草間を縫ひ行きしなり。われらは、十步に探り、百步に憩ひ、暗きにマッチを摺りて、烟草にうつすなり。この烟草の火は、喫ひ終る度毎に消え行くとも、なほ消えざる光あり。何ぞや、時を失ひて、生き殘れる螢なり。

宇治の呼聲高く、又、石山に、人多く出でしは、早や十日も前のことなるを。何故に、その友と相別れて、かかる寂しき山上に迷ひ來れるかを知らず。二ツ、三ツ、人魂の如く、ふわり、ふわりと飛びて、われらが頭上を過ぐるを、わが友、手を延ばして、捕へたり。石山などのよりも、その形の小きは、山の冷たき露に育てばならん。かれは、之も一ツの標本なりとて、紙につつみて、そのポケットに入れつつ同じ動物學者の、某博士に送るつもりなり。われは、かかる趣味を解し得ねど、他の方向に於ては、この山の螢の、重き冷氣に痩せ行くとも、なほ高きを慕ひて、飛ばんとするあはれを味ひぬ。

更らに思ひ起すは、山腹を登る時、夜中にも拘らず、遠く聽え來たる半鐘の響なり。微かに之を聽き分れば、四ツ番なり。火事にやと、案内者に問へば、然らず。こは、水どろ棒のありし知らせなり。田に水を引く必要ある間は、百姓の天氣を心配すること常なれど、暫く雨なしとならば、水に不自由なる地方に、必ず水論を生ずるなり。一條の細流も幾尺を越せば、あちらに送り、また何寸かを增せば、こちらに分つと云ふ、定め方ありと雖も、旱魃の時には、この規約を破らんとする者、出づるを以て、爭論を引き起すなり。いよいよとならば、男も女も、いのち掛けとなり。表立ちて、爭ふを欲せざるは、夜、窃に、水流の仕切りを切りに行き、一滴にても、おのが田へ流れ入るを望み。切らるる方も、之を防がん爲め、焚をたいて夜番をなし、敵を見つくれば、直ちに備への半鐘を打つ。之

を聽けば、一村擧つて集まり來る。その衝突の甚だしきに至りては、父子、兄弟、相鬪ふもあり。小さき竹槍騷動の如きは、毎年絶ゆることなしと云ふ。

高きより臨めば、夜も光れる一大湖を控へ、その屈折浸入せるところ、幾多の小內湖を作り、水嵩增せる時は、沿岸の田畑を浸し、生き〻〻せる稻穗の上に、更らに新しき芽を出だすこともある。近江の國なりと雖も、嗚呼、また、水なきが爲めに、おのが生命までも枯らさんとする地方あり。鈴鹿山のこなたなる『相の土山』宿の如きに、海面を拔くこと、殆ど叡山と等しき爲め、屢々雨になやみ、湖上に瀕せる長濱、彥根の如きは、また水に苦む。而も、水論に忙しき水無月あり。天地は、人の左右し得ざるところに偏れて、その味ひを生じ來る。雲は高きを慕ふに依りて愛せられ、水は低きに下るを以て貴しとせらる。これ、自然の性なり。

われらの山を登るに從ひ、われは四ツ番の響益々明かに讀み得る心地して、浮世のさま〴〵なる有樣を觀じ、又、山頂のあけぼのを見るに至つて、かの百花爛熳たるが如き、日光の餘色に、わが胸襟は開らけて、天通の力を得たる思ひをなしぬ。

大正三年十一月一日。

信州行の印象

沼波君

先日の一茶同好會の招待旅行で、僕は第一に初めて信州の地を知つたのです。途中で妙義、淺間の遠望も初めてであつた。戸隱しの紅葉は、京都の高尾、江州の永源寺、北海道のカモヰ古潭や十勝原野のを知つてる者には、左程の感じを與へなかつた。善光寺は寺としても餘りに平凡なところにあるのは意外でした。ただ奇體に思つたのは、北海道などでは毒だと云つて恐れるブシ（とりかぶと）の花を旅館の各室に、あの室でもこの室でも、生けてあつたことで――アイノ人の矢じりに塗る毒は、ただこの草の根から取るが、葉以上には別に害毒はないものと見えます。

同會の催しの主であつた一茶並に雲坪遺墨展覽會に於て、僕は雲坪といふ畫家はさうえらかつたやうに思へなかつた。同じく郷土藝術家的な傾向があつたにしても、一茶のはそれが直ちに一種の國民的性質を帶びてゐます。一茶の字が上手だとか、僅かの種類の畫の形がうまいとか云ふやうなことはどうでもいいのですが、寒い雪國の生活や氣分、またそれに添ふ性慾や執着心やを藥の句に引き合はせて一層明確に考へることが出來たのは、今回の旅行に誘つて呉れた君の賜物でした。柏原で見た藥の臨終の床となつた古倉の姿は今も目に見えるやうです。

僕の智識の範圍では、俳諧に於て前に芭蕉あり、後に一茶あり。そして後者が有情滑稽を痛切な實生活に融化した詩風の如きは、和歌の世界には、大正時代になつては知らず、それ以前には全く無か

つたことです。俳諧寺に在る一茶の坐像を一見すると、柔和の老女のやうな感じを與へるが、そのふツくらした頬のあたりに在る二三の太い縱皺に添つて渠の痛切な生活氣分がたどれば辿れると見做してよからうか。

佐渡の思ひ出

佐渡と云ふところへはまだ一度も行つたことが無いが、今回佐渡日報社より手紙があつて、何か書けと云はれて見ると、僕に於て思ひ出すことが三つある。

その一つは、石塚と（確かさう）云つた人は今どうしてゐるか知らんと云ふことだ。僕よりも年うへで、仙臺の或學校で僕と同窓であつた。仙臺から渠は故郷の佐渡へ、僕は東都へ、それ〴〵歸る途中を、――餘ほど、もう、舊い時のことだが、――二人は一緒に福島で下車し、吾妻山が第二回の破裂をやつたその翌々日、山の實際を見に、同山の絶頂へ登り、新たに出來た噴火口の周圍をめぐつた。その時、もとは矢張り噴火口であつたと云ふ沼の中へ落ち込み、引くに引かれず、進むに進めず、ただずぶり〳〵と兩足が胸のところまでも吸込まれて行つて、すんでのことで二人とも生命を失ふのであつた

あの時、僕と共に僅かにいのち拾ひをした人は、まだその故郷なる佐渡に居るだらうか？何でも、

その年に兵隊に取られ、兵隊を出てから國の中學の體操教師をしてゐたことまでは人づてに聽いたことがあるが、その後どうなつたか、風のたよりにも聽くことが無いのである。

第二には、もう、疾くに死んだ或婦人のことで――それは僕が直接に言葉さへかはしたことは無い人であつたが、僕の年うへな一友になかなか熱心であつた。が、僕の友人は情のことには甚だ卑怯であつたが爲めに、僕が渠に向つてかの女の手を握りさへすれば兩方の戀はそれで成立するのだと忠告したに拘はらず、渠はおのれの思ふことを隱して、かの女によそ言ばかり云つてゐた。それが爲めに、かの女は失望して佐渡へ歸つてしまつた、(東京の或女學校を卒業したので。)

その後、或大學生で、後に醫學博士となつて、今は一方の學界に重鎭となつてる人が、佐渡が島へ歌旅行をしたことがある。その節、渠はかの女の家へ招かれて歡待されたことなどをその旅行記に書いて、東京の新聞に發表したのを僕は見たことがある。あとになつて、僕が或學生で佐渡の人だと云ふ者から聽いたところに據ると、その博士になつた、大學生は、佐渡を逃げるやうにして出たのを、ふり棄てられたかの女はあとから新潟まで追つて行つたが、とう／＼渠を發見することが出來なかつた。そして間もなく肺病で死んだのだと云ふ。

第三には、まだ三十七八歳で今も存生の筈の或婦人のことだから、餘り具體的に云ひ現はすのは遠慮する。殊に、佐渡日報が出ると云ふ相川町の人だから、一層僕は遠慮して置く。かの女は僕を――

僕の二十歳前後の時に——一種の狂熱を以つて愛して呉れた。かの女が卒業した學校の校長夫妻が僕を呼びに來たので、僕は行つて見ると、意外にもかの女が僕に手を提供しようとしてゐるのであつた。僕は二度ばかりは話をしたこともある娘で。且、萬ざらいやでも無かつたのだから、その積りで行けば、僕は今頃は戸籍だけは佐渡の相川町に在つて、〇〇屋の主人であるかも知れなかつた。かの女は、その家の番頭との結び名づけであつたし。その他二三の理由で、かの女と僕との關係は結ばれなかつた。

こんなことを語りながら、僕は今でもかの女を思ひ出してゐる。と云ふのは、あの時から今日に至るまで、僕はかの女に一つ感謝してゐることがあるのだ。僕はあの時に詩を發表し出したのであつたが、僕の詩の思索的な點に於て、雜誌『文學界』の連中とは、直接には相接してゐたがら、殆ど全く肌が合はなかつた。そしてかげでは惡口嘲侮されてゐるのが間接に僕の耳へも這入つた。僕は世間へ出たてに、もう、少なからず失望落膽をしてゐた。この時に當り、僕に最も著るしい勇氣を與へたのは、乃ち、かの女で『文學界』の連中に數へられてゐた娘であつた。

たつた十七八歳の一少女にして、進んで僕にかの女の手を提供しようとした理由は斯うであつた——『あの人は、きつと、今の（乃ち、その當時の）誰れよりもえらい詩人になる』と。僕は奮進しないではゐられなかつた。この感激が僕をして段々に詩集四五冊を出ださしめ、詩論から進んで、また

人生觀的な論文集を二三冊も出ださしめ、今は僕をして——えらい、えらく無いは別問題として——一種獨特の詩人、小説家、並に自由思索家として立つことを得しめたのである。

この點に於て僕は今でもかの女に感謝しなければならぬと同時に、佐渡と云ふ島が何かに付けて僕の心に思ひ出されるのである。

幸福な不幸

もう、數年以前のことであるから、ここに語つてもよからうと思ふ。

金光教會と云ふ神道の、明治も可なり最近に出來た一派で、その本源地の岡山から大阪に於て一大勢力があるのみならず、この東京までもその影響が及んで、かの天理教にも劣らないほどの信者をわが國中に有してゐる宗教——と云へば云へようか——の一傳道師養成學校の生徒であつた一青年のことである。

歳はその時十七歳（でなければ十八歳）と名のつてゐた。僕のところへ書生に置いてくれと云ふ手紙をよこした。そんな手紙は僕もよく受けてゐるが、僕は自分がいつも人に依頼しないで育つて來た男だから、他人が人に依頼してゐるのを見るのもいやな質だし、書生を置けばきつとこちらの缺點だけを誇張して吹聽せられる道具を養つたと云ふ外に何等の役にも立たない經驗を持つてゐたから、そ

れにまた第一そんな贅澤物を養ふ身分でもないから、いつも斷つてゐる。斷つてゐると云ふよりも、返事をしないことが多かつた。この青年にも初めは斷りを出した。地方の若い人々が羨み考へてゐるやうな、そんな有福な生活を僕等にしてゐるのではない、且、人の寄生にならうと云ふやうなけちな考へを起す青年は僕は嫌ひだと云ふこの二つの理由を以つてだ。

ところが、渠はまた折り返して長い手紙をよこし、どうしてもそばへ行きたい。僕は恐らく誰れよりも崇拜してゐる——よく青年の云ふ奴です——ものであるから、どうしても呼んで吳れ。ヹルレンに對するランボとなつてもいいからと云ふのだ。その當時、僕は初めてヹルレンその他の表象派の紹介と批評とをしてゐたのだが、この青年の手紙の意が、ヹルレンをランボが青年でありながら感化したやうに僕を感化してやらうと云ふのならまだしも、さうでなく、ランボがヹルレンの美少年になつたやうに僕の美少年になつてもいいと云ふやうであつた。これは一笑に附してしまふ外なかつた。

が、第一と第二との手紙を通じて僕を動かしたことが別にあつた。それは添附して來た五六十枚の詩稿と渠の內心の苦悶並に決心とである。詩稿にはさう特色と云ふほどのものはなかつたが、十七八の青年にしては、餘りに才があると云ふことが見えてゐた。口調としては蒲原氏と僕との摸倣で、詩想は殆どすべて僕そつくりであつたと云つてもいい。うはツつらだと云へばうはツつらであつたに相違ないが、人の思想の傾向や握りどころをよくこんなに理解出來たものだとは思はれた。その青年そ

の人の獨得に達する道を與へれば、きつと物になるほどの才物だとは疑ひがないところであつた。
それから、渠の事情のことだが、渠が養成せられてゐる宗教學校の氣分並にその教派の最も僞善に滿ちてゐる――これはどこの宗教學校、どの宗教でもさうだ。宗教に限らず現今の宗教若しくはそれに類する教へをどれでも採用してゐる社會は皆さうだとは、僕の當時から看破して置いたところだが――それがいやで、いやで溜らない。一刻も早くそんな僞善の衣を脫してしまはなければ、殆ど呼吸さへ出來ないと云ふのである。これは眞心から出た聲らしかつた。それには、然し、人情として忍ぶべからざる方面があつた。と云ふのは、渠の父は死んでゐないが、矢張り同じ教派の教師であつたので、生き殘つた母――肺病でもう半年も持たないとあつた――がその一人息子を同じ教師にしなければば心配でならなかつた。渠は然しそのあはれな母の死をも待ち切れないと書いてあつた。

僕の主張するところが、その當時、多少世間に分つて來たと見え、――どうせ僕は僞善とコンベンションとには妥協も讓歩も出來ないから――それが金光教會の內部にも影響して、僞善者や形式家の爲めには餘程都合が惡かつたらしい。同教會發行の機關雜誌では、岩野泡鳴を燒き殺せと云ふやうな論文が出た。そして僕等すべての書いた物はその學校でも全く禁止せられてゐたのだから、僕の名で直接に行つた返事などが渠の手に這入るわけがなかつた。で、僕が渠の指定した姓名で渠の指定した場所へ向け、來るなら來いと云つてやつたのは、渠の才と決心とに感じたところがあつたからであ

る。無論、條件を附して置いた——僕は斷じて書生は置かない。ただ當分自分で準備して自分で生活する口を求めるまで、僕の家を足場にすることだけは許すと。

それから今一つ云つて置くのを忘れかけたが、變り易い青年の崇拜心などは當てになるものではない。僕はそんなことを直ちに信ずるほどあまい人間ではない。田舍にゐて、ああ云ふ人だらう、かう云ふ樣子だらうなどとありがたがつたところで、會つて見ると、こちらも人間だから、さうありがたくも見えないものだ。それをなほありがたがらせようとして勿體振る人は多いが、僕はそんなことは出來ない。且、さう云ふ青年の機嫌を取つて、調子を合はせて置くやうなことは斷じてしたい。どうせ來たら失望するにきまつてるから、東京へ來るとしても、僕のところよりか別な人のところへ來るがよからうとも、第一回の返事に云つてやつたのである。

いよ〳〵何日何時に着京すると云ふ知らせが來て、渠が一つの行李を持つて僕の家にやつて來た時は、何でも午前の九時頃であつたかと思ふ。その前夜、寧ろその日の午前一時頃に、僕が二十日間看護してゐた僕の父が死んだと云ふさわぎの最初の朝であつたのだ。僕も勞れてゐる上にまだ死人から手を離せなかつたし、家族のものも亦わさ〳〵してゐた。

僕の先妻が兎に角渠を招じて、僕の小い書齋に入れた。無論、僕の喰ふ物を半分喰ふつもりでだぞと云つてやつたのだから、渠もさうちやほやされるものと思つて來たのではない。僕はその［illegible］のすきにち

よつと見に行つたが、その顏つきは、汽車の旅でつかれてもゐたからであらうが、青白く神經質で、眼の釣つて鼻の高いところは、僕の友人で云つて見れば、さすが同鄕だけに、かの薄田泣菫氏とよく似てゐた。そしてきりりと利口さうなところは、よく行けばいいだらうが、惡く行けばどんなことでもしかねなささうに見えた。僕は手紙以外になほ聽くべきこと、云ふべきことが澤山あるやうに思つたが、まア、ほうツて置けと云ふ氣で、死人のことに多忙であつた。

　ところが、渠は晝飯を喰つて二時間ほどしてから、妻の報告によると、渠の姿も行李も無くなつてゐた。そして置き手紙が僕の机の上にあつた。それを讀んで見ると、折角來たことは來たが、僕の死人に多忙な樣子をうかがつて、身にしみて、國にゐる病める老母のことが思ひ出され、渠が學校をぬけて出た知らせがかの女に達すると同時に、かの女は心配して死んでしまふかも知れない。それが心配になつて、また一刻もここにはゐられないから、直ぐ歸る。老母のいのちは、長くても、もう、一年とは持たない。それを見屆けてから、また出直すから、先づ、それまでは忘れてゐて呉れと書いてあつた。

『わざ／＼來て、――歸る氣になつたのも尤もですが、ね』と、僕の先妻は云つた。そしてかの女は結局貧乏の上に貧乏をする期待の失せ去つたのを內心では喜んだらしかつた。僕もそれつ切り渠のことは忘れた。渠のかたみであつた詩稿も――蒲原君には見せたかと思ふが――いつのまにか無くなつ

てしまつた。そして僕一身の生活も、父の死と共に多少變つて來て、有形律の詩が無形律の散文詩となり、散文詩がまた小說になつた。そして僕自身がヱルレンの行つた道よりも、寧ろランボその人の道を取つて――回顧して見ればだ――一見、文藝とはかけ隔つたやうな――僕の實際には、別にかけ隔つたわけではないが――鑵詰事業などで樺太や北海道をぶらついた。

その後、一時大阪へ行つてた時、新聞記者として、僕の社での催しにかかる三都の藝者連中の美人遊覽團と云ふのについて、大阪から九州へ行つた時、その團員と共に――渠等のうちには、金光教會の金神さま信者が少くはなかつた――岡山の金神さま本部へも立ち寄つた。そこに同教傳道師の養成所があるのを見て、『ああ、かの青年は』と思ひ出した。もう、あれから四年を經過してゐた。渠の正直なそして變り安い性質の計算によれば、渠の母は三年前に死んだ筈だ。一年もしくは二年を延期して見ても、一二年前に方が付いてる筈だ。が、渠の音沙汰はいまだにない。どうしたのだらう？もう、あの時に僕の生活とは全く無關係になつた筈であつたのだらうか？それともまた病人の老母が生き延びてゐるのだらうか、と。

僕等が團員の希望で――實は、同教會からの依頼で――お神樂をあげさせた後、相對座して語つた教師の人々に、渠がどうしてゐるか、聽いて見たい氣もしたが、渠の姓名を忘れた上に、渠がまだ關係してゐるとすれば、渠の迷惑になつても困るだらうと思つて、そのままにそこを出發した、そして

とこから出る機關雜誌が曾て僕を燒き殺せと論じたのかと思ふと、何だかたわいのないやうな感じがした。

今回、かう云ふことを書く氣になつたのは、田山花袋氏が若い投書家連中の年が進むにつれて、段段その文學熱がおとろへて行くことを書いたのを見て、如何にもさうだらうと思はれたからである。僕は投書の選者としては大した關係を持たないですんで來たが、青年の文學熱はおろか、すべての情熱が根柢を得ないままに鐵くちやになつて行くあはれさには、いろんなことで際會した、そのうちで。最も僕の目に立ち、最も多く記憶に殘つたのが、かの青年の到來と脫出とではなかつたかと云ふ氣も起らないではない。

渠の才物的な詩稿はすべて一度文章世界や秀才文壇に出たものであつたさうだから、さう云ふ雜誌には殘つてゐよう。が、渠自身には、もう、殘つてゐるか、どうか？そればかりならまだしも、渠の情熱と渠の決心とは、今、數年の自覺的僞善に慣れ込んで、却つて無自覺の幸福な不幸に終つてゐはしないか、どうか？

ダイヤモンドと侵略の話

物の發見と云ふことはなか／＼面白いことである。自分の無くした物を意外なところに見付けて

も、われながら驚くことが度々あります。それを、少し六ケしくなると、うらなひとか、いちことか、もツとやかましくなると、透視などにたよつて見て貰つてから發見するにしても、あつた物が眞であるのをでも人は實に嬉しく愉快に感じないではゐられないものであります。

それが若し無かつた物、氣が付かなかつた物の發見であつたらどうでしよう？その愉快はその一人としても一しほでありましよう。ましてそれが一人の物になつたばかりでなくまた一國若しくは萬人の爲めにもなつたとすれば、もツけの幸ひなるものもなか〳〵馬鹿にできないのであります。

英國人がアフリカに於てダイヤモンド鑛や金鑛を所有するに至つたのは、乃ち、その一例であります。あの馬鹿々々しい仕合はせな結果に立ち至つたことを知つてると、もう、ほかのどんな仕合はせも恐らく足もとへは寄れますまい。たとへば、谷そこへころげ落ちたところ、熱い水が流れてゐたので、いのちびろひをした上にもまた立派な溫泉の發見者になつたとか。深山へ迷ひ込んだところ、磁石の針が不思議の方へ引かれたので、それから鐵山のあるのが分つたとか。持つてた金時計のおもてが曇つたので見ると、硫黃の山の眞ン中に立つてるのであつたとか。斯う云ふお話もすべて古くさい物になつてしまひました。

氣候のあまり熱い爲めにあたまの毛が延びないで、而もお釋迦さまのそれのやうに縮れたアフリカ土人の子供が、ぴか〳〵とよく光る石を一つおもちやにして遊んでゐたと思つて御覽なさい。これは

決して想像や空想ではありません。實際のこととしてでありますが――そこをとほりすがつた和蘭陀人がそれを見て、ふと、好奇心を起しました。そしてこちらが持つてては珍らしくもないが、向ふには珍らしいところの品物とその石とを交換しました。そして何げないふりをして、

『こんな石がどこにあつた』と聽きますと、

『ここに落ちてゐた』と答へて、云はば田舍みちの路傍を示めしました。そしてそこを掘ることになつて見ると、出るわ、出るわ、ダイヤモンドが石炭か何ぞのやうに！けれども、和蘭陀人はみな英國人の勢力に追ツ拂らはれました。そして今や、世界一として有名なキンバレイのダイヤモンド坑なるものは英國人の經營になつてゐます。英國人は發見と云ふことに關する苦勞も交換も少しもしないで、人の發見を失敬したやうなわけであります。云はば奪略です。けれども、山の奥の一軒家でどろ棒にあつたのと同じやうで、少しも開らけてゐないアフリカの平野で奪略された方の無勢力が助けを呼ぶ聲をいかに擧げても、開らけた世界までは――日本へも歐洲へも米國へも――なか〳〵事情が分りませんでした。そのうちにどろ棒が却つてその一軒家の持主にまで成り澄ましてしまつたのであります。

そしてその泥棒の英國人どもは、自分らばかりでは人數も少く、また坑夫までの仕事はしたくないと云ふので、最初、多くの支那人を移民させて、坑夫に使ひました。ところが、支那人らは繁殖力が

つよくて、うかうかしてゐると、やがてはやとひ主とやとはれ人との勢力轉換にでもなりさうな恐れができたので、印度人に取りかへました。然しこれも亦なかなかあなどられなくなつたのでした。それでその後は土着のくろん坊をばかり使ふことになりました。

直ぐ坑外には土人坑夫の一と社會が拵らへてあつて、そこで住ひもできれば病院にも這入れる代りには、坑から出て來ても、その社會以外へはうかうか出られない。と云ふには、づるい土人があつて。ダイヤモンドを坑の中にゐる間に呑み込んで置き、腹に入れて他へ運び去るかも知れないのであります。で、因業な主人がはでは土人の必然な排泄物をも無考へにはして置かないさうであります。だから、今や世界の至るところに廣がつてる筈の南阿ダイヤモンドのうちには、一たびアフリカ土人の腹へ這入つたのもないとは申せません。つまり、きたない話ではありますが、あなたがたのお手やかしらに輝いて、あなたがたの社會的高貴を證明する大小の金剛石のうちには、一たびアフリカ土人のうんこのにほひが附いたのもあるのであります。

それはさて置き、そんな英國人に追ひ拂はれた和蘭陀人はどうしたかと申しますに、南阿をなほ北の方へと逃げて行きました。そしてヷアル川と云ふ川を渡らなければならなくなりました。その過を今はトランスヷアルと云つてゐますが、この地方にはダイヤモンド坑の代りに有名な金鑛が發見されて、そのためにヨハネスブルグと云ふ一都會まで成り立ちました。六百室もある一大ホテルさへある

さうです。ところが、そこも亦英國人らの經營であつて、さきの和蘭陀人はあはれにもまた追ひ拂はれてしまつたのであります。和蘭陀人がかさねがさね不幸な目ばかり見たとは正反對に、ずう〳〵しい英國人は飽くまでも幸福になつて行つたのであります。

それには、然し、セシルローヅと云ふえらい人がゐたからであります。渠はさきにかの印度を征服したクライブやヘスチングに、もう一層近代的えらさを加へた人でしよう。南アフリカの侵略や殖民政策は殆どすべて渠あつてできたものであります。南阿に於いてはセシルローヅは英國の侵略的精神を一人に代表したものでありました。初めは個人的若しくは私立會社的な經營がとう〳〵英國その物の事業と具現致しました。そしてその主要な目的物は金とダイヤモンドとであります。印度からの稅金と南阿のダイヤモンドの賣れ高とで以つて英國はその國旗に太陽の沒することがないほど發展し、その侵略は憚るところもなく東洋にまで及んで來たのですが、支那と日本とでやツと喰ひとめてゐる狀態であります。

英國の侵略主義、殖民政策は、ただ濠洲に於いてばかりは可なり永久的意志を見せてゐますが、その他に於いては先づ一時的と見てもいいでしよう。が、一時的の代りには、そこを手段若しくはあし場こし掛けとしてまた他に移らうとするのでありますから、そこの生物なり天然物なりに對して如何にも殘酷だと云はねばならないところがあります。人類に對しても天然に對しても、實にむごい物で

あります。印度からはできるだけ税金をしぼり上げてゐます。そしてそれが太く短くの主義であるらしい。しぼれるだけしぼり取つて、若ししぼれなくなれば、印度をもうツちやつてしまうつもりかも知れません。南阿ではまた繁殖力のつよい支那人や印度人をおそれて排斥し、最も意久地のなく使ひ易い土着くろん坊を虐待しつつ、ただ金とダイヤモンドとを早く掘り出してしまうことにのみ力を盡してゐます。それを掘り盡してしまへば、恐らく南阿をも弊履の如く棄てましよう。

ところが、あいにく、南阿の金やダイヤモンドはなか／＼盡きさうがないのであります。その爲めに熱帶アフリカの寂しい高原に都會が出現するほどの經營ぶりでありながら、或人が

『さうどし／＼出したツて、世界の需要に超過すれば無駄にもなり、値段もなくなつてしまうだらうぢやアないか』と聽き糺しますと、

『そんなことはない』と、故セシルローヅは笑つて答へました、『男が女に戀することがつづく限り、ダイヤモンド事業はうまいものだ。』

これほど簡單明瞭に人を馬鹿にしつつ世界の侵略を企てる國も人も恐らくなかつたらうと思はれる。そのくせ、南阿の如き、土地は廣いが人口も軍備も少いところをあべこべに侵略占領しようとすれば、わが國の師團をたツた二つばかり持つて行けば足りるさうであります。然し、今日の世界の形勢では、もう、それができない。そしてそのできない所以は、英國が早くそこの所有權を確立させて

しまつて、ダイヤモンド坑を和蘭陀人が發見した時代とは違つてしまつたからであります。若しその時の和蘭陀人が日本人であつたらそんなこともなかつたのにと、僕等はただ和蘭陀人をあはれみ、英國人をうらやみ憎むばかりであります。

夜の虹

獨逸語をシルレルの脚本『ヰルヘルムテル』で稽古してゐた時、スヰツルの景色のうちに有名な夜の虹と云ふ物があるのを知つたが、僕はそれをどう云ふ物か分らなかつた。まだ僕の十七八の時のことであつた。その後、初めての戀を得て、そのをんなの家で、ふたり一緒に二階の窓により、――これは東京でだが、――あかるい夜ぞらをながめた時、圓い月に世人の所謂る「月の笠」がかかつて、その笠のうちがわが多少虹のやうに色取られてゐた。然しその時は、まだあまい戀のうま酒に醉つてたので、シルレルの文句の方を思ひ出さなかつた。

ところで、そのをんなとの生活に大分飽きが來た頃、僕は滋賀縣膳所の中學を敎へてゐたが、或夜、家庭生活に對する鬱憤を漏らしに、夜食後、獨りで琵琶湖畔の家を出で、月夜にまかせて三井寺へのぼつて見た。月は雲を出たり隱れたりしてゐたが、僕がたださへ高い寺の境内でも一番高い十年戰爭記念碑のあるところにのぼり詰めてから仰ぎ見ると、月の全身が現はれて而もそれを取り卷く笠

が高く小いけれども明らかな七色に輝いてゐた。さきに東京で見たのよりもはツきりしてゐて、紫は紺に、紺は青に、青はまた黄や緑りやくれなゐに相重なつてるのが見えて、輪のそとわくの段々にぼけて行くのがまことに惜しいやうであつた。而もその下には大きな水海が無言の波をきらく光らせて多くの言葉を傳へてゐるやうであつた。

『これだ、な』と、僕は全く不愉快など忘れて叫んだ、『スキツルのも！』けれども、僕は詳行したことがないから、しかとは人に受け合ふことができなかつた。そして、できたのはただ僕自身の戀が虹のうらはらのやうに段々とぼけて行く、さめて行くと云ふことをばかりだつた。

その後、僕に妻も子供をも忘れての最も不平的な放浪時代が、或期間、續いた。この間に、僕は或夏の夜を、一旅館の娘と共に散歩しながら——但し、これは戀ではなかつたのだが——九十九里、一の宮の海岸で、これこそ本統の夜虹であらうと思はれるのを見た。

『ああ虹よ』とかの女はびツくりしたやうに叫んで聽かせた。僕もその方を見ると、月とは反對の空に、可なり大きな半圓をゑがいて、晝間見るのと同じのが現はれてゐた。けれどもよく聽いて見ると、かの女がびツくりして見せたほどさう珍らしい物でもなかつた、九十九里の海岸あたりでは。兎に角・僕は月の虹若しくは夜の虹と云ふ物の觀念が三段に明らかになると同時に、僕の最初の戀がそれだけさめてしまつたと云ふ經驗を有してゐるのである。

揖保川の月夜

二十一二才の頃であつた。僕が姉をたよつて播州龍野へ一夏を送りに行つたのは。

別に友達もなく、また遊ぶこともないので、晩になると、獨で姉の家を出て、揖保川にかかつてゐる橋の上へ涼みにいつた。尤も、僕はその頃友を求むるよりも天然その物に親しむ方を、そして人と語るよりも自分で冥想してゐるのを、喜んでゐた。ところで、この橋の上がそれをするには最も都合のいいやうに思はれたのであつた。

川上なる寢釋迦の渡しの方から月の光が流れて來るので、それを見上げて行くと、小嵐山の異名ある山がすツくと僕の目の前に沈思默考のかげを投げて、これをかしらと見立てた寢釋迦山のすがた全體がその後ろにそツくり見えるかのやうで――きら〳〵するのは水や空にうつる月の光ばかりでなく、橋の上なる自分の寂しい内心もであつた。

ところが、或夜、自分よりもさきにこのけしきを占領してゐた人があつた。僕はこれを直ちにねたましかつたと同時に、またいい話し相手を得たと思つた。

『いいけしきです、ね』と、僕が先づ言葉をかけたのだが、某はこちらを書生と見た爲めか、なかなか勿體ぶつてゐた。暫らくはなほ月夜のすずかぜを身に吸ひ込みつつあるかの如き樣子であつたが、

やがてこちらをちらと見てから、棄てぜりふの樣に答へた。

『から云ふけしきは、まア、ちよツとありますまい、な。』

『さうでせう、ね。』僕も半ば釣り込まれてゐた。が、どこまでを限りとしての比較かを尋ねて見るべきであつたのだ。

『わたくしの師匠が』と、突然、渠はくびをひねらせて尤らしく云つた、『河太郎の戀する宿や夏の月と讀んで呉れましたが、まア、實に、から云ふ景でせう、な。』

『……』僕はこの時返答に困つた。河太郎の句は自分も蕪村句集で讀んで知つてたが、この片田舍の一風流家が蕪村を『わたくしの師匠』と慣れ／＼しく呼ぶには少し時代の錯誤があるやうだし。若しまたその師匠なる者が、蕪村の句をわが物したものの如くこの地の風流家どもに見せたものとすれば、餘りに馬鹿々々しいことであつた。

僕が折角每晩をつづけた興味もそれが爲めに全くさめてしまつた。そしてその翌日か翌々日かに初めて土地の床屋へ髮刈りに行つたところ、そこの主人が前夜の人であることを發見して、また一しほ興をさました。

が、それからと云ふもの、蕪村の河太郎の句が揖保川の夜景と結び付いて、僕には二つながら忘れられないものになつてしまつた。（大正七年六月）

海上のいのち拾ひ

曾て――もう、十六七年も以前のことだが、――僕は一友人を靜岡へ訪ねて行つて、淸水港の海水浴場に伴はれ、二人で一つの小船を漕いで出たことがある。夏は、もう半ばを過ぎて、海岸には飽きツぽい海水浴客も多くはなかつた。

友人は耶蘇教の傳道師だが、度々淸水へ來る用のついでに船を漕ぐことをおぼえて、それがたかなかの自慢であつた。僕も子供の時よく漕いだおぼえがあるので、漿には負けないつもりであつた。『風が惡いので、お客さんがたが沖へ出るのはおやめなさい』と注意を受けたのだけれども、それにかまはず僕等二人でずん〳〵漕ぎ出たのである。沖の方には軍艦が一つ碇泊してゐるのが見えた。僕等はそこまで達するつもりであつたが、漕いでも漕いでも、なか〳〵達しられなかつた。陸から見て近いと思つたのは、海上の空氣の加減らしかつた。

かはり番こに櫓を押してたのだが、初めのうちは船が風に追はれてるので、らくであつたところ、それでも互ひの手とからだとが僞りに疲れをおぼえて來たので、二人とも身を船の上に横へて見た。そしてあふ向けになつて眼を天に向けると、照りもせず降りもしない丁度いい加減の空は、まぼしくもなく眺められた。今までだく〳〵出てゐた汗も海の風にぬぐひ去られて、丁度六七里を歩いたあと

で溫泉に這入り、或高樓の坐敷にらく／＼したやうで、
「實に氣持ちがいいぢやアないか」などと語り合つた。が、ふと氣がつくと、潮が好都合だが、矢ツ張り、沖の方へずん／＼流れてゐた。さア、大變であつた。駿河灣に對する富士おろしが、乃ち北から直へ吹いてたのである。ぐづ／＼してゐれば、太平洋の眞ン中までも、吹きさらはれて行くのだ。
僕が先づあわてて櫓を再び櫓べそへ當てたが、うまくはまつたかと思ふと、直ぐはづれてしまつた。友人が見兼てか、無理に僕を押しのけて櫓を持つたけれども、これも亦うまく押せなくなつてゐた。共に氣のあせりばかりでなく、腕が全く拔けた程になつた爲めだ。入れ替り、立ち替り、押して見たのだけれども、少し船の向きがよくなつたかと思ふと、櫓がまたはづれた。そして僕等は富士の方に向いてるかと見ると、直ぐまた三保の松原の方が見えた。船がただくる／＼舞ひをしながら結局沖へ／＼と流されてるのであつた。
「もう、破れかぶれだ！　暫らく休め、休め」と云つて、僕は先づ友人から離れて船の中央なる橫木に腰をかけた。
「そんなことを云つたツて、君？」友人は僕の方を見て訴へるやうにしたが、矢ツ張り、はづれた櫓を直さうとしてゐた。
僕だツて。もう、半ば斷念してゐたのだが、この時ふと思ひ出されたのは船頭が逆風にも帆を利用

すると聽いてたことをで、――まして僕等の場合は風に正反對に向はうとするのでもなかつた。ただ僕等は風を船の眞横に受けて立ち戻らうとするから、どうしても風の當りが強くて、うまく行かないのであつた。

「おい、分つた――風を半分受けて、半分をそらせよう！」斯う云つて、僕は失望してゐる友人と入れ替つて再び櫓を持つた。そしてこの方針の爲め、船のへさきを三保の松原の方に向けた。これで僕等は清水の海岸を沖から直角に見たその中間の方向に進むわけであつた。

氣が落ち付いたせいと、風の抵抗力を半ばはづした爲めとで、僕は割り合にらくに櫓を押すことができるのをおぼえた時には、再び世に生き返つた氣がした。そしてまた贅澤にも畫繪のやうな周圍の風景と、どよめく海上の涼しさとを十分に味はうことができた。

「成るほど――成るほど」とばかり叫んで、僕のそばにしやがんで、手を船べりにささへてる友人の顔にも、愉快さうな色が恢復してゐた。

斯う云ふわけで、當日の船漕ぎは僕の勝利に歸してしまつたのだが、三保の松原の方から僕等が濱べを傳つてやツと清水へ歸つて來た時、りやう師どもから大いに賞められた。皆が助け船を出さうかと、相談までしてゐたところ、僕等の船の方向が、いい方にきまつたので、もう、あれたら大丈夫だと云ふことになつて、皆が安心したのだと云ふ。（大正七年六月）

湖畔の一年

われ曩に「湖畔の一年」と稱して、一書を編せんの意あるや、たまたま、中江兆民居士の「一年有半」出づ。われより半年多き書名なりき。嗚呼居士のは死にのぞみての遺稿なり。われはただ湖畔の寓居を去るに際し、十二ケ月中の或日に當れる、日記の節々を書き集めんと欲せしのみ。今や、わが意成り、ここに之を公にす。讀む人、文の精粗を論ずることさなくば幸甚。明治三十五年八月二十日

春の思

盛春の頃、われ、都なる亡兒の墓に詣で、琵琶湖畔に來るや、長等山、高觀音の櫻、なほ盛りなりき。東西の離隔を思ひ、過去未來の接續を想ふ。隱顯の思想、花土を渡り行きて、遂に究むべからざるなり。

花 より 覺むる あかつき の
風 に 盡せぬ 香 を 傳へ、
花 に醉ひ伏す ゆふぐれ の
鐘 より 遠き 聲 を 聽く。

佛の 御法 まのあたり
浮ぶ に 似たる きのふ けふ、
罪 と 報い は いまだしも、
こころ は 消えて春の雨。

靜けき 道 を 觀ずれば、
暗き 世界 の 現はれて、
樂しく つらき あめ地 は、
あか兒 が 笑ふ おもて かも。

生 には 死 あり、死には 又
いのち の 影 の つき添ひて、
春の思 は うつせみ の
限 を 出でて、限 にぞ 入る。

琵琶湖

われ大阪灣の西岸に生れて、水に縁あり、始めて故郷を出でて、東都に登るや、未だ汽車通ぜず。熊野沖を過ぎ、遠州灘に浮びて、大海の怒濤を食ひ。東北に遊學して、八百八島の入江に、秋水の幽妙なる人生觀を味ひ。透明なる猪苗代の湖水に浴びて、生死の道筋、二なきを了したり。而も、釋氏が人間に比すべし一滴の水、洋々として、天空を滿ふるに至つては、わが琵琶湖のおもてに如くものなし。

西には、比良、比叡の巍々たる山嶺をさかしまにするあり。東には、孤立せる三上山、掃部頭が金龜城を浸し。膽吹山、賤が嶽は、北面に顛倒して沈み、鶴津の夜景色は、南端の水底に、星の如く電燈を點ず。客、若し汽船に乘つて、長濱、鹽津より入り來らば、別に又、清淨潔白なる天地あるかを疑はん。湖岸に古りし、八景の名を賞讃し、三日を費せし長濱航路の、今は四五百人を乘せし大船を、一日に往復せしむる便を喋々する者多しと雖ども、いまだ曾て湖水その者の實美に說き及ぶものなきは如何。水よどみて、人丸が所謂『大わだ』を作り、浮泛力に乏しきを以つて、鐵船を浮ぶること能はず。之にのぞむ者をして、その心までも沈滯せしめ、おのづから深き思索に耽らしむ、幽遠な妙の美、ここになくして止まんや。最澄ここに生れて、天臺中空の教を傳へ、藤樹ここに育ちて、知止獨

憤の理を窮めたり。翁が句『唐崎の松は花よりおぼろにて』を得たる芭蕉庵は、今も尚、その人のさびを傳ふるなり。

嗚呼、大湖の水、いづくより來り、いづくに去る。これ、沈思默考の好材料なり。而して、そのとこしなへに靜止するが如き狀態を譬ふれば、恰もわが靈妙なる人生に似たり。豈、又、變化なからんや。夏水、色白ければ、雨となり、凍雲、天に湧きて、山上また山を現ずれば、雪となる。風に、比良八講の時期あり。あらしに、世人の恐怖する比叡おろしあり。前者は、三月下旬より、四月上旬に渡りて、吹く風を云ひ、その名稱は、昔、比良山にも、この時節となれば、法華經八卷を講ずる儀式行はれし名殘りなり。後者の荒るる時に至つては、舟を覆し、人命を損ふこと少からず。昔も腰に兩刀を挾み、君命を重んずべきの士は、舟を坂本の沖に出すこと、一般の禁制なりしといふ。然り、湖神一たび怒らば、鐵船白浪の爲めに飄蕩し、之に動かざるものは、ただ多景島と竹生島とあるのみ。是れ、この二島を以て、湖中の重鎭とす。

曾て坂本行の汽船一隻、その途にして、沈沒せしことあり。暴風に逆らひ、進行せんと欲し、機關に破損を生じ、蒸氣の漏るること甚しかりしかば、船室に坐臥せる人々之を悟り、多くは甲板に逃げ來りたり。船體の左に搖れ、右に倒ふるる間に、水進入して、沈み行き、波上に漂ふ人頭の、あちらこちらに見ゆるあり。悲鳴を上ぐるその叫び聲も、風波の爲めに、とぎれとぎれなり。或富豪の、所

用ありて、縣廳に出頭せし歸途、重要なる書類を携へ居りしかば、堅くその包みを握りて離さず、爲めに溺死の不幸を見し者あり。また、或義俠の男、一女子を救はんとして、手足にまとひつかれ、おのれも共に亡べるあり。船中に坐せるまま、自己の覺悟を革包の手に堅めて、見事に往生を遂げし者あり。憐れにも、愛子を抱きて、いき絶えし婦人あり。助かりたるうちにも、淺瀨に達して、ただ深みと心得大にもがき苦みし者あり。最も無邪氣なるは、或家の子なり。游泳の術を知り居たれば、衣先に、裸體となりて、衣服をおのが首にしばり付け、波中に飛び入るや、直に浮べる船板を頼りにせんとせしかど、他人の奪ふところとなりしかば、また他の一片にすがり、『おぢさん、之は僕に貸けて』と叫び、安全に岸へ泳ぎつきし上、砂上に濡れたる物を乾かして、家に歸り行けり。

嗚呼、これ、濁水の繪がく、一幅の世態畫ならずや。悲哀と可笑とは、おのづからその中に浮び來る。見よ、天地は、無爲より有爲を起し、無限より有限を分ち、靜より動を生じ、動よりまた靜に歸る。これ自然ならんか。そのうちに、生命あり。そのうちに、勢あり。そのうちに、活動を現ずるあり。周圍七十五里の大湖、そのおもての海面より高きこと二百八十尺。その潜勢力や實に恐るべきものあり。之を瀨多川に漏して、しし飛びの急流となり。之を疏水に逸りて、數千馬力の電氣となる。而も四方の河川、之に注ぎ入るもの、野州川あり。愛知川あり。犬上川、姉川、安曇川、等あり、絶えて水量の減ずるを見ざるなり。若し現今の瀨多川開通工事出來せば、平常よりも三尺を落し得べ

く、山を導き開鑿なるべけれど、琵琶湖を國營して、本國を中斷し大平洋と日本海とを相通ぜんとする計畫あり。快は即ち快なりと雖ども、わが邦に取りては、大々的事業なり。

その計畫によれば、先づ、西南の方、伏見まで、山三里を鑿つて、巨椋の池を連ね、それより淀川を掘りて、大阪灣と平均し。北は、海洋の入江より、五里の山野を開きて、敦賀に達し、武田耕雲齋の墓より、十町許を隔たれる、花園村の海岸に出づ。湖中、深きところは百拾二尋ありと雖ども、北へ十尺、南へ十尺、変はる。之を掘り割ること二十八回にして、海面と相均しくなるなり。水落つるに從つて、その周圍に、數萬町の田地を生ずべければ、費用は之を以て補ひ得べし。平の重盛夙に之を企て、之が爲めに、使者を敦賀に派せしことあり。その碑、今も、同地の某寺に存じ居るなり。わが帝國議會は、第一回並に第十二回の開會中、之が建議案を受けたり。佛國の中佐ムーゼン氏の設計によれば、その費用、二億萬圓を要する由なれど、多くの囚徒を使ひて、之を助くれば、半程のものにあらずとて、吉田某なる人、諸方の有志を説きつつあり。此人は畫家にして、維新の際より、この事業に盡し來れるものなり。之が成功を見るの日は、日本もまさに一大海軍を有すべければ、一等戰鬪艦の行列なつて、竹生島附近を通過せん時、如何に六尺餘もありと云ふ鯰の種族なりとも、驚いて、その姿を隱すに至らんか。源五郎鮒も、赤き大國と變ぜん時たればなり。

かかる時は、また斯る眺めあらん。われは、現在の琵琶湖に對して、感ずるところ特に深し。わが

幼時、人に聴けることあり。琵琶湖の洞窟湖畔晴きところ、紫の雲を結ぶ萬年青あり、凝思しければ、入つて之を取る者なしと。紫は玄妙の色なり。嗚呼、これ、この湖水より得たる、わが今日の思想を、豫言せしものたらずと云はんや。

叡山に登る

われ東都を出づる時より、坂本村の某院を訪ふべき命を持ちしなり。秋の末つかた、漸く閑を得て、同村に至り、諸方を尋ねて、之を見出すこと能はず。叡山のふもとに行きて、一僧に問へば、之より二十五丁登りしところにありと答ふ。延暦寺も亦、同村なるを知らざりしなり。われその用意なきを以て空しく立ち歸り、みちみち、「松下問二童子一、言師採レ藥去、只在二此山中一、雲深不レ知レ處」の感ありき。

翌年四月、雪解けし日を見計らひ、一友を作ひて登山す。道、嶮岨なるは、立徑に階段を刻み付けしが如きありと雖ども、思ひしよりも平易なり。「扇のかなめ」と稱するところに一服する時、一老婆あり、來つて、歌一首を誦するを聽く。曰く、

唐崎の松は扇のかなめにて、
　こぎ行く舟の罨繪たりけり。

その詞新しけれど、傳教大師の作なりといふ。之によつて『かなめ』の名ある所以を知り得たり。

二十五丁を登りつむれば、根本中堂あり。その右に講堂あり。共に赤銅ぶきの宏大なる建物なり。中堂のうち暗けれども、一僧に導かれ、蠟燭を點じて、之に入れば、厨子三個に分れ、中央には大日如來をまつり、その廻廊には、十二支に形どりて、諸天の像を立てたり。かたわらには、六尺餘の大佛を安置せり。その形、奈良、鎌倉等のと同じ。圓滿なる顏貌の、蠟燭の火に映じ來るを見ては、その尊き御前を立ち去るに忍びざるを覺えき。彫刻物の重なるは國寶となり居れり。中堂の右にあたりて、橙の木と稱する、松に似て、その葉少しく異なれるがあり。大師歸朝の時、印度より、鉢植にして持ち來れるものなり。赤き實を結べど、芽ばえを得難く、ただ一つ、山門の家根に生ぜしを、下坂本に持ち行き、試みに育てありといふ。

それより某師をたづねて、淨土院に至る。これ傳教大師、最澄の『淨に入る』ところなり。ここに一泊す

某師は十二年の業、將に明年一月を以て終らんとするの身。その間は山を出づること能はず。律僧なり。これまでの苦心談を聽きしかど、われここに云はじ。故籠手田知事に送れる詩あり。曰く、

桑生膽仰古今同、　妙相尊嚴丈六翁、
般若普照千歳下、　四明君也了眞空。

同知事は四明の靈化を慕ひ、身づから之を鏡とせし人なり。

談、夜に入りて盡きず。「比叡の惡僧」、「山法師」といはれし昔日を按くに、彼等は皆眞正の僧侶にあらず。當時、叡山の勢力甚だ盛なりしかば、俗人にして刑に觸れし者は、悉くここに逃れ來りしなり。たとへば、ここに一人の貴族、罪を得て、殺されんとするあり。その親族、延暦寺に來り、之を救はんことを乞ふとせよ。山より其筋に向つて、之を助けよと願ひ出づれば、その生命だけは安全なり。斯くして救助されし者は、身づから剃髮して僧となれど、正式の順序を踏み來りしにあらざれば、ただころもを着し居るばかりにて、名義も山王權現の給事人なり。此等のうちには、立派なる武士もあり、一城の主もありて、髀肉の嘆に堪へざるもののみなりしかば、少し事件を生ずれば、直に武を振ひたくなり、かの山王の御輿をかつぎ出せしなり。

正式の僧侶は之を制し切れず。さればとて、おのれの欲せざることを見るに忍びざれば、一室にたて籠る者もあり。或は谷の奥に入りて、書を讀むもあり。或僧の如きは谷底に隱れて、一切經を學び終り、元龜天正の人爲的火災を知らざりき。されば、一方には、專ら學問をつとめて、心の修練を專とする者あり。また一方には、みだりに白衣を着し、鈴を鳴らして山中を渡り、之を以て業を積むに足ると稱する者を生じ、荒武者は多く之に就けり。

山に鶯、谷に鈴虫鳴く時は、

法の衰微と思ひ知るべし。

とあるに、前者が後者を諷じたる歌にて、鶯の眞似を爲し、鈴虫の音ふり立つるとも、法の爲めには有害無益なりといふ意なり。元來、最澄は頓禪を避けたるが、密教の苦行は受け入れたる人なれど、天台宗一般に學問を以て進む、次第禪を重んずる傾向あり。

延暦寺が昔、百萬石を領せしは、落武者どもの一命にかへて、その領地、田園等の寄附を納め入れし結果なり。維新の際、諸侯と共に領地を返納し、百萬圓を頂戴せしかば、諸大名に貸し付けて高利を得、之にて一山の活計を立てたり。輪王寺の宮（故北白河宮）は上野にいまし、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○・○○○、○○○○○○○○○○○○○○○』○○、○○○○○○○○、○○○、○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○。且、信徒の少しく富有なるは、進んで若干づつを取りまとめ、おのが檀那寺へ持ち行き、その照會によりて、之を上野に送り、幾分かの利子を見込んで、貸付を依賴するも多かりき。これ布教の費用を積極的に補ふ一種の方法にして、西洋的なるところあり。然るに（宮）一たび朝敵となり給ひしかば、貸付けたる金子を取り集むる者を失ひ、信徒の預けたる分は、之を照會せし寺々に於て拂はねば、義理が立たぬ旨義となり、かかる事件の爲めに、忽ち叡山の衰微を來すこととなれり。現今では、淺草、上野、善光寺、其の他の末寺より納むる

稅により、天台宗の大本山は維持し行くなり。

　最澄と空海とは、是が宗教上の二大英傑なり。時を同じうして生れ、佛教の爲めに盡すところ多かりき。然れども、一は日本天台宗の創設者、一は眞言宗の祖師たり。その說くところ異なれば、到底同一の事業を爲し能はずとし、兩者の間に申合せを爲し、汝は一般人民を濟度せよ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。おのおのその說に從つて、巧なる宗旨を弘め、比叡、高野の兩山はなりぬ。一日最澄、高野に登り、祖師に謂つて曰く、『如何にもよきお墓所なり』と。後、空海、叡山に來り大師に答へて曰く、『成程立派ないくさ場なり』と。以上は後世の僞傳なるべけれど、その當時の意氣、今如何。方便門による宗旨は、尙少しの活氣あれど、天台に至つては、甚だ振はず。

　政府の方針といふを聽くに、また其の干涉甚し。たとへば、ここに破戒の大惡僧ありとせよ、管長ありと雖も、之を破門するの權なきなり。こは凡ての宗派に通じてのことたるが、其筋の者によれば、僧侶は無職業なれば、寺院を追ひ出されては、生活の道を失ひ、爲めに如何なる惡毒を社會に流すか、計り難しといふにあり。末派のものらは皆之を知り居れば、尙更墮落の運命を免れざるなり。歸するところ、佛教は、傳來の長き、外形のみ宏大になりて、その弊害救ふべからざるに至りしなれば、今日之を打破して、新組織を建設する者あらば如何、と云ふに、大に喜んで之に從はんと答へらる。他派は知らず、天台僧侶のうちには、自活の道を立て得る程の餘裕あるもの多ければなり。

ただ山寺のみ籠りて、時勢の進步に後れ居れば、世に出ても、必らず失敗するならんを恐るるものの如し。嗚呼、われ叡山現時の退守主義を論ぜらるべし。わが初見の師は、その性、闊達にして、頗ろ有望の智識なり。

翌朝、淨土院の別堂に目をさませば、山林、風にほえて、近く山鳥の啼くを聽く。かけ樋の水を汲んで、口をすすぎ、食事を終りて、出立す。師は高下駄を穿ち、長き杖をついて、案內者たり。山鳥は、たまたま、道者の路に、巢をつくることあれど、通り過ぎて、之が目に入らぬものと見え、いつも全くなり居るがありと、物語らる。樹木の間を出でて、草ばかりなるところに來れば、此山に有名なる紫のつつじ、花咲ける見ゆ。竹生島は遠くわれらの右手に現はれたり。

中堂より頂上まで、十五丁なり。四明が嶽は昔、八明が嶽とも稱せし山。八方明らかなればならん。將門が宮城を見おろして、逆心を起せしといふ岩あり、將門岩と名づく。この上に立ちて、見渡せば、京都全市は眼下にあり。かへり見て琵琶湖をのぞめば、水青くよどみて、山中の一池に似たり。山法師と並稱せられし加茂川の水、湖水の下流と相合して、淀川となるところも見ゆる由なれど、棚引く霞に、しかと見分け難し。

再會を期して、主客ここに相別る。風、山上を吹き渡つて、師の長袖を拂ひ、飄々たるその姿の、一方に靡びける草の間を下り行くを見れば、恰も天人のそのかげにつき添ひて、之を守るものあるか

と疑はれ、その奥ゆかしさ、なつかしさの情に堪へかね、われに見えずなるまで、またこを修すこと能はざりき。

われら二人は、それより反對の道を京都に下りぬ。

日吉祭

官幣大社、日吉神社の古式祭は、いにしへより、人の能く知るところなるが、その次第といふを聞くに、四月三日、先づ「おこし揚」といふがあり。牛尾、三宮、兩神社の神輿を、牛尾山上の社殿にかつぎ揚ぐるなり。同じく十二日、再び之を舁ぎおろして、本宮の拜殿に据ゑ、十三日、本宮、牛尾、樹下、三宮の神輿を、產屋神社の衍院に遷し、花渡り、獻茶の式ありて、「未の御供」を行ふ。十四日、奉幣使（地方官之に當る）宮内省よりの御幣物を奉りて後、七社の神輿、相ついで、出御あるなり。

この日の輿丁として、參勤を得るもの、近江の國にありては、滋賀村全部、山城の國にては、高野、八瀨、一乘寺、修學院、等の諸村なりき。現今にては、この古式を坂本祭と稱する程ありて、地もとなる坂本村の人々、特に力を盡し居るなり。この神は、もと、大比叡に祭れるものなりしが、佛教の隆盛につれ、延暦寺の左右するところとなり、且、山王權現と稱して、小比叡に遷され、一時その神輿は、無聊に苦める「山法師」の翫弄物となり居りしなり。坂本の村民は、叡山の[illegible]事によりて、生

活を維持し行くもの多き丈ありて、今に、かの法師共の遺風を存じ、ここに居城を構へし、明智光秀の軍略の如く、たかたかに活氣あり。祭典の期近づかば、萬事を投つて、之が準備に、これ、口も足らざる樣子なり。輿丁にもそれぞれ八釜しき定めありて、彼は一番舁ぎ、是は二番を上ぐるといふ如く、その家の格式に依つて、配列しあり。

その當日とならば、輿丁の業にあづかるもの、至るところに歡迎せられ、大盃を擧げて、氣力を盛にし、然る後、古き歷史を傳ふる、御神體に接するなれば、熱血のほどばしる顏色、御馬場の櫻と相照らし、その勢力や、實に當るべからざるものあり。喧嘩祭の稱ある、故なきにあらず。曾て、京都の一俠客、某、彼等と衝突し、橋上より谷あひに投げ落され、石、棒、床几などを被りしかば、その頭蓋骨をうち割りしことあり。彼も一個の男なり。生血の吹き出づる頭を、おのが犢鼻褌を以て縛り、警官のいたはるをも肯かず、悠々として、その場を引きあげたり。つき添ひの子分は、數名ありけれど、その以前より逃げ去りて、一人もみえざるうちに太郎吉と云へるが、左馬の介駒どめの松にて、待ち受け居り、親方の、車に乘つて、飛び來るを呼び止め、「親方、どうなりました事件は。」――「馬鹿野郎」と、ただ一と返事。既に二三丁を過ぎて見ゆる。彼の頭には、白きものを卷きつけあり、太郎吉は、ほろほろと涙をこぼし、荒くれたる手を以て、之を拭ひたり。

輿丁に何か無禮なる行爲ありとて、御輿の通り道に、立ちふさがりしが、衝突の原因なり。この大

膽なる俠客は、頭部の負傷重かりしを以て、間もなく死去したり。かれ病中、如何に惜みけん、一回も子分を近づけず。兄弟分の太郎吉が、おのが卑怯を詫び言せんと、平身低頭、その枕頭の上に伏すとも、尚、之と面會を欲せざりき。嗚呼、これ、彼等を見限りしなり。かかる子分を持てるもの、今更ら男が立たずと、出家腹を固めしなり。さりとては、山法師のなれの果、抹香臭き言、親方の心にはぶれしかと、太郎吉身づから兩のこぶしを握つて、おのれが腕をつづけ打ちにし、地團太踏んで、大に泣き叫べり。

翌年は、必ず仕返しに來るものならんと、風說とりどりなりしかば、その筋に於ても、注意おろそかならず。いよいよ十二日の夜となり、午の神事あり。二基の神輿を、中尾山上より昇きおろすに當り、甲冑を着したる者數十名、神輿の前後を警戒し。夥多の松明、高張提灯は、盛に山道の險阻を照らし、輿丁の、一齊に、鯨波を作つて、走り下る勢は、天地も振ふばかりなり。之を見物せんとて、集り來る者多かりければ、無事に拜殿に納まりたり。太郎吉以下數十名、亡き親分の名を立てん爲め、ここにありしが、いまだ手を出ださず。

十三となり、御輿入の式あり。次いで、花渡りあり。甲冑を着したる兒童、種々の造花を大指物としたるにつき添ひ、之が警固の輩數百名、それぞれに、先祖傳來の具足をつけ、先なる緋おどしは、いにしへの里正なり。次ぎなる黑皮は、明智が家の末裔なり。三は卯の花、四は褐糸。加藤清正の鳥

帽子あり。赤地に竹の葉の直垂あり。その麗はしきこと、さながら眞の猛者の行列を見るが如し。彼等が斯く齊飾りて、御輿並に本宮の參拜にのぼる、奇なる有樣に見取れて、老若男女、ひとしなみに靜粛なりしがうちに、之を嘲ける聲あり。二三名は、之に應じて笑へり。曰く、『あの間抜けたお侍を見よ。』それより、獻茶の式あり。こは、神社の用水、走井の清水を汲みて、茶を献じ、猪口に入れたる四社の神輿に奉るなり。

次を朱の御供といふ。西京日吉神社の神職、之に參勤す。その御供物中に、白羽矢、造花、雛人形、ふくら雀等、子供のもて遊ぶ物あるは、別雷神降誕の儀式、今にその一部を存じ居るなり。式終れば、輿丁かけ參じ、四社の神輿を舁ぎて勇むこと時あり。やがて、甲冑武者の、意氣豪然として、走り來るや、輿丁、神輿の擔動をとどめて、高く之を捧ぐ。四基齋しく整ふを見て、獅子舞を演ず。次に神人綾織の曲あり。扇の揚るを合圖に、御輿を一齊に殿下に落し、輿丁之を舁ぎ、疾走して走る。その速きこと、疾風の如し。昔時、藤堂侯、この景況を見、嘆じて曰く、この勢を以てせば、百萬の軍に敵すべしと。夜中なれども、庭燎の光、皓々として、白晝の如し。道の兩側に立つて、之を觀る者、こと更に、輿丁の進行を妨げんとするが習ひなれど、絶えて妨げ得るものなし。勢の盛なるを證するなり。中には、松明、砂礫を投ずるものもあり。ここに太郎吉の黨與も、手に手に大なる松明をかざし、兩がはに立分れて、見物を爲し居り、他のものらと入りまじりて、強く之を投げしかば、一

は神輿の鳳凰を碎き、一は左側の鳥居形を破り、一は輿丁に當りて重傷を負はせしかど、あまり人目を引かずして過ぎたり。

十四日は、この官幣大社の例祭なり。午前に、それぞれの式あり。先に本宮より、大津四宮の天孫神社に奉送せる大榊午後三時頃、歸り來る。本社の神職、之を奉迎す。護衛の武者輩、列を爲して、之に從ふ。稚兒一名、黒袍を着て、馬上にあり。昔は、この稚兒、上り切りにて、生けにへとなるもの、今日にても、參勤終れば、裏道より逃げ出だすなり。この武者輩、遲咲の櫻花散り敷く馬場を、徐ろに渡り行くや、本宮に進みて、神前に參拜す。之につづいて、幾千の輿丁、疾走して來る。一名の甲冑武者の、扉の手を開くと同時に、かの有名なる「拜殿出し」は始まるなり。神輿七基は、すべて、宵宮より、ここに入御あり。左右に、おのおの三基、中央に一基、互に輿の棒を相まじへて、据ゑ置かる。待ちに待つたる輿丁、おのが受持を舁ぎ出さんとて、われ先きを爭ひ、揉み合ひ、押し合ふところを見れば、神もまことにのり移り給ふかと思はれ、拜殿振動して、觀客おのづから恐怖す。然れども、之には順序ありて一に本宮、二に大神、三に宇佐、四に牛尾、五に白山、六に樹下、七に三宮の神を輿出し奉るなり。

さて、樓門外、春日岡のあたり、大杉直立して、如何にも神々しき樹かげに於て、輿の裝飾を終る。この時、本宮の輿前に於て、宮司、笏を取つて、東遊の歌を奏す。それより『坂落し』なり。双合の

坂。道廣くして一直線に波止戸の橋を渡つて、日吉の馬場に出づ。その中段、最も險しきところ、即ち去年の俠客が、輿を遮ぎりし場所なり。太郎吉の徒、腕を扼して、その[illegible]高みにあり。御幣を結びつけたる、長き竿の倒るるを合圖に、本宮は威勢よく下り來れり。四隣風じ生て、輿の金飾、瓔珞の響高し。橋の上にて、肩を更ゆれども、一寸のゆるみを見ず。やつさ、やつさのかけ聲を舉げて、觀客數萬の間を、馬場の方へと勇み行けり。再び幣の動くや、二の宮來たる。また乘ずべき機なし。宇佐も然り。牛尾も然り。かれ大に嘆じて曰く、「これは神ごとだ」と。終に手を出ださずして、止みつ。御輿に從つて、唐崎に向ふ。

神輿は順次、八本柳の濱邊に至り、數多の警固に共に、御乘船あり。競漕を爲して、次第に唐崎の松かげに着御あるや、粟津の里より、御供船を艤して、本宮の御座船に進み、大幣束を奉る。神職之を受けて、神供を獻ず。之を『粟津御供』といふ。この時、西山まさに光輝排り入れんすれども、夕陽は猶神輿の裝飾に映じ、御供船の奏樂。その調麗はしく、颯々たる松風と相和す。之を聽く者、こころおのづから淸らかなるを覺ゆ。太郎吉、窃に之を拜して、その姿を隱せり。仲間のもの之を索しみ、『兄貴』『兄貴』と呼べども、答なし。彼是するうち、合圖の太鼓に驚きて、湖邊を返り見れば、七社の御船は、再び競ひ始め、艫舳相銜みて、還御となる。入[illegible]の紅燈、數百、湖上を照らして、白浪も亦餘勢あり。

仲間のもの、大に憂ひ、「あの兄貴のことなれば」と、推測相一致して、かの左馬の介が一本差のもとに至れば、彼、果してここにあり。内障の用意に懐中し來れる、短刀を倒にして、今や割腹せんとす。一人走り行きて、之を制すれども、聽かず。また一人、短刀をもぎ取りたり。太郎吉の目には、恨の涙滿ち滿てり。「如何にもおれは卑怯だ。」――「先づ、先づ」と引きつれられ京都へ歸りしまでの事は知れども、その後如何になりしか、われ絶えて耳にせず。坂本の人々は、少しも此事ありしを知らず、祭の勢に勞れ果て、翌日は氣拔したる如く、「先づ、無事にすんで」との挨拶も互に夢ごこちたるもをかし。

宇治遊記

某君貴下。余の當地に來りてより、京都に向つて、疏水を上下することは數回に及べども、不幸にして未だ君が誦んぜらるる船唄――娘島田に蝶々がとまる、とまる筈だよ花だもの――を聽かず。春既に去つて、心なき舟子、或は人と花とを聯想する能ざるの故ならんか。

當地の周圍、名所多し。西に三井寺、東に石山、北は琵琶湖に面じ、南に蟬丸神社の建てる逢坂山の古跡あり。然れど幾度見ても倦かざるものは、琵琶湖畔朝夕の眺めたり。

今や新綠したたる如く、諸山の服色拭ふに似たり。たまたま、宇治の茶摘、今明日を盛りとすと聽

き、倉皇、友輩を誘ふに暇なく、一人杖を曳いて伏見に至り、奈良鐵道に乘じて、宇治停車場に下る。見るところ、茶園ならざるはなく、行くところとして、茶摘歌を聽かざるなし。然れども、その狀況、余がこころと反し、余をして大に失望せしめたり。蓋し余が知己に一婦人あり、常にその京都うまれなるを誇る。而して余は曾て、その一たび茶摘に出でし事ありと語るを聽き、且、貧しからぬ家の娘等も、慰み半分に一隊の摘み子に混じて、一日を歌ひ暮らすありといふを信じ、幾多の若き女子――赤き揃ひの手拭――合唱の美聲――等は、余が茶に對する觀念と共に、久しく腦裡に附着せりしなり、故に之を標的として諸方を探り、山に下り、山を上り、或は河邊に出で、或は人家の後庭にさまよふと雖も、ここに三人、かしこに四人多くして二三十名の少女、老婦、辨當を茶の木の枝に懸け置き、おのがじしその働きを爭へるを見しのみ。聞くところによれば、昔は尤も盛にて、一定の服裝もそなわり、合唱の歌律もありし由。

余が妄想は恰もかのヱルテルが夢に手を延ばして戀人を探ぐるに異ならざりき。余が想像は全く破れたり。然れども、これただ必竟、詩趣を餘り實際に尋ねし結果に過ぎず。ヱマルソンの所謂「純全觀念」(integrity of impression) は、之がために消滅するにあらざるなり。

それより余は、この奔走の際發見せし、宇治溫泉の張り札の示せる道に從ひ、宇治川に添ひて、同名の橋を上へのぼること四五丁、すなはち一樓あり、龜石と稱す。閑室を開かしめ、沐浴して後、水

流に對して、獨酌孤吟すれども、興を催さず、大に憾む、君の如き善伴の士なかりしことを。然れども水流の美や、竭くことを知らざるなり。波紋湧くが如く、水音聲無きに似たり。或は圓形を成し、或は直線となり、風を翻して花を碎き、雨となつて羅綾を織り、悠々として開くるものは、白日の前の如く、忽ちにして集まるものは、魚族の踊るに似たり。靜は動を生じ、動又靜を生ず、千變萬化、殆ど窮むべからず。時に一隻の小舟、客を乘せて來るあり。綾絹破ぶれて、また他の綾を出しぬ。嗚呼舟は恰も理想の如きか。人之に乘つて現世に浮ばば、併て厭世樂天の説に迷はざるべし。吾輩は、これ、只、世の水流波紋の變化のみ。之を生ずるものあつてこそ、はじめてよくわが理想を運び得るなれ。

かかる思念に耽る時、又一隻の小舟あり。首尾に各々一本の櫂を立て、高く之に二條の長綱を結び付けて、少童之が兩端を執り、陸上より之を引きのぼる。或はその直線を延ばし、或はその後綱を緩かへ、伸縮自在、その進行實に能手の熟練に異ならず。而して善く舟を遣る者、未だ善く世路を解するものあらざるなり。況んや詩人文客の生涯をや。ああ。

午後五時、溫泉を出で、舟を命じて對岸に渡る。平等院の舊跡あり、朱色の堂宇、千年の風雨にうたれて、なほ昔日の經營を存じ、源三位のおもかげを缺しけん、古池のおもては、一面に名も知れぬ水草を以て蔽はれ、いにしへの城壁、今や跡なくして、土石うづ高き小丘の上に、所謂「日本三大

鐘」の一を懸けたり。寶物には賴政の弓、太刀、具束、並に其時代の遺物あり。就中余が腦裡にとどまりしものは、應擧の作なるといふ「七難の圖」なり。その火難の部を見るに、挾箱を肩にして逃ぐる者、大風呂敷を背負つて走る者、大葛籠に躓いて倒るる者、徒手を擧げて泣く者、薙刀をわき挾みて驅ける武士の妻、琴をかかへて行き難む大男。太刀をかたげて馳する者は、犢鼻褌一つのわかざむらひなり。枕をいだいて裸體なるは、恥辱を隱すにいそがはしき女なり。或は持木を以て夢中たるはしためあり、或は大團扇を以て火を消さんとする老婆あり。その混雜實に名狀すべからざるなり。一生懸命とは、斯の如きをや云ふらん。而して世の喜劇は即ち悲劇なる所以か。

再び宇治停車場に至り、六時の汽車に投じて歸路に就く。車窓によつて、過ぎ越し茶園を望めば、蘆席ひろくその上を包みて、一芽の芳香をも呑むに似たり。と見れば、いづくより來たりけん、その日の業を終へし、茶摘女の一群、熙々相語つて歸り行くあり。嗚呼、茶摘の好時期、我に取りては、まのあたり過去の記憶とならんとすれども、かれ等は、一夕の夢覺めて、あかねさす日、茶山の背後よりのぼるころほひ、またその同心を誘ひて、同じつとめに出づるかと黒惟せし時、余はおのれの經歷を回想して、かれ等の明日を樂むこころに恥づるところ多かりき。

歸後、直にこの記を作つて君におくる。ただ久濶を叙する詞に代ふるといふのみ。

小き碑

妻、亡兒の石碑を建つる時、自然石に自作の句を彫りつけんといふ。その句に曰く、

　　母も亦あとより行くぞ黄泉の國。

われ「黄泉の國」を「稚兒の國」とせば如何と勸む。然らば「國」を『里』とし「稚兒の里」と言ふ。妻それに定めて、父に送りぬ。

數日經て、返事あり。その情、巧に過ぎて、後の子のために可愛相なりとの言を以て、左の如き歌と爲し來れり。

　　假の世にはかなく消えしをさな子の、

　　　すがたは今に殘るまぼろし。

これにては、石に彫りつけるには不便なりとて、妻、その意を汲み、左の如く改めぬ。

　　假の世や消えて殘りし稚兒の國。

われ之を訂正して、左の如くなしたり。

　　假の世や消えても殘る稚兒のかげ。

かく定めて彫りつけしのち、人、この句を以て季なしと難じたり。季の有無はさて措き、われも、句としては、面白からぬを知る。あまり實際に落ち入れる時は、よき考いの來らぬものと見ゆ。

津田三藏

琵琶湖に關聯して思ひ起す外交上の一事件あり。之を湖南事件といふ。明治二十四年五月十一日、露國皇太子（今の皇帝）、日本漫遊の途次、同市御通行の際、御警衞にいでたる巡査、津田三藏なる者、皇太子に切り付けて、その額を傷けたり。この件に就ては、天皇陛下を始め奉り、政府並に人民も、大に心襟を惱まし、その始末に困ぜしこと、今も尚國民の記憶に存するならん。露國に於てはこの出來事は、既に小學校の教科書に書き入れ、大にその國民の注意をゆるがせにせざる由なれば、その當時の模樣を語り置くも無益にはあらざるべし。

三藏は當時湖東、守山警察署の巡査にして、皇太子御警衞の應援として、大津に出張を命ぜられし者なり。當時日本國民の最も敵視せし而も日本政府の畏敬し居りし露國の皇子のこととて、或は之に對し、不敬の行爲を爲す者なきにしもあらずとの風說、それとなく世間に高かりければ、護衞の手くばりを爲すに先立ち、大津署長は巡査一同を集めて、その處の注意を懇々說き聽かせしが、三藏も大に之に感じ、その訓授の尤もなる所以を同僚に語りなど　、訓授終りて後は庭に出でて、制服のまま、棒押しを爲し、無邪氣に戲れ居りしたり。謀殺の目的を達する時機の近づく喜びを戲れにまぎらしたりといふ、或人の揣推はわが取らざるところ。

三井寺の最も高きところに、十年の役に戰死せし者の紀念碑あり。そのかたわらに、曾て、天皇陛下御巡視の際、湖上の風景を御覽ありしと示せる、「玉座之處」あり。最も眺望よろしきところなれ

ば、皇太子も必らず來り遊ばるるならんと三藏は初めここを警戒する役目に當れり。太子ここに來り、靴にて、紀念碑の柵をこすりステッキを以て、碑を指さし給ひしとか。これ彼をして怒らしめし一原因たり。それより汽車にて唐崎へ渡り、御中食は大津にかへりて縣廳にてきこしめされ、いよいよ京都へ御歸りとなる。その御歸の道には、かれ京町通の四辻をいましむることとなり。彼の運を起せしは、この時なり。巡査の配置は、三十間置きになり居りしかば、他の同僚の之を制する間なきのみならず、殆ど之に氣づかざりしも尤ものことなり。

かれ劍を拔いて、皇太子に迫るや、車の馳走速かなりし爲め、標的をはづれて、その額にかすり傷を與へしのみ。再び手をふり上ぐるや、次の車に乘れる希臘皇子、その杖を擧げて、三藏の背中を毆打すると同時に、車夫の一人は彼の足をすくひ倒し、また一人はその劍を奪ひて、後頭部を切りつけたり、露國の勳章を受けしはこの兩車夫なり。皇太子は三藏の勢に驚き、聲をあげて、車上につつ立ち給ひしかば、車夫はそのかぢ棒を落せり。之を幸ひに車を飛び下り、路傍の吳服店にかけ入り給ひぬ。吳服屋にては、その店の白木綿を出し、血に染める御額をつつみ奉りしといふ。當時の坐布團、水を盛りしコップ等は、その家の寶物とたり、毎年之を見に來たる露人の心づけに依つて生活を立て行く由なり。直に御手當を篤くし、先づ再び縣廳へ招じまゐらせたり。この時早く、第九聯隊の兵士、一齊に劍銃を揃へて馳せ參じ、廳の周圍を、柵の内外二重に取り卷き、外なるは外に面じ、内

たるは内に向ひ、隊伍堂々、瀏喨たる喇叭を吹き出せしかば太子之を聽いて、再び驚かせ給ひしが、窓より窺ひ見て、始めて日本軍隊の機敏なる運動を賞し給ひしとか。當時の混雜と殺氣とは實に名狀すべからざりしなり。

御負傷點附近に立ちし數名の巡査は、不注意の廉を以てあはれその職を免ぜられしのみならず、時の知事警部長、並に大津、守山兩地の署長は、その責を引いて、いづれも免職となれり。すべての官吏は、地位の上下に拘らず、多忙と心配との俘囚となりたり。或署長の如きは、いづこにか、その帽子を置き忘れ、制服の禿頭を露はして、車を飛ばし、而も之に氣づかざりし滑稽を演ぜし由なれど、之も跡にての笑ひ草に過ぎず。すべての人ののぼせ居りしは實際なり。某高等官は、申し譯に切腹せんといひ出せしを以て、常に之が警戒の巡査をつけ置かれたり。

かかる難事を引き起せし三藏その人が、初めより異心を懷きしかといふに、決して然らざるものの如し。彼は平生沈着の質あり、同僚間にも敬せられし方なり。警護に出づる前に當り、同僚と棒押などして、相戯れしを見ても、別にかかる巧みありしとは思はれず。然し、彼にもと軍籍にありし者、勳七等を得て、之を胸間にかくるを常とせり。同僚之を嘲つて曰く、『君は赤痢の檢視にも、勳章をつくるは如何に』と。彼答へて曰く、『僕は何時死するか知れぬ身なれば、生命ある間之を拜受せし名譽を樂むのみ』と。大にその拜受を感じ居りしなり。

湖南事件は、即ち、この勳章に近因あるが如し。かれ先に記念碑の傍に立ち、職務上の尊敬禮を行ひしが、太子は之に答禮し給はざりき。且、靴にて記念碑の礎を蹴り、土を突くステッキの先を以て、偉嚴なる碑石を指さし給ひしを、無禮と見き。かれ心中窃に平らかならず、身づから謂つて曰く、『渺茫たる身分は低き者なり。然れども、わが、天皇陛下より拜受せし勳章に向つては、苟も敬禮なかるべからず』と。之より、妄想に妄想を加へ、邪推に邪推を入れ、心は全く忿怒の奴となれり。『太子若し日本を漫遊せんと欲せば、先づ是が皇帝に謁し、然る後、地方を巡覽すべきに、さかしまに九州より上陸し來り、何すれぞこの好風景を恣にする』と。これ、彼が縛につきながら、絶叫せしところなり。

この大事件ありし爲め、大津市は混雜の巷と變じ、大臣來り、辯護士來り、新聞記者來り、書生來り、その公判を待ちかまゆるもの、ひとり在住の市民のみならず。大審院の臨時法廷こそ大津地方裁判所に開かれしなれ。他國の皇室に關する罪は、わが國の刑法に明文なしと云ふが問題なり。内閣は國際上の關係を恐れて、わが皇室に對する罪（死刑）に準ずべしと主張し。大審院はかかる情實に關せず、一個人を謀殺せんとしたる未遂犯なりと駁し、大審院長並に判事等は司法大臣の命令を用ゐず、決然袖を拂つて、歸京の途に就かんとせし由なれども、われは能くその内實を知る者にあらず。兩派の貴官と貴官と、汽車の乘り下りの際、停車場に於て相會するも、その確執、言語擧動にまでも現

はれ居りしなり。三藏の辯護人には、大津在住の某氏命ぜらる。「大日本の面目を汚す勿れ」との呼聲盛なりき。東京大阪の名ある辯護士等は爭ひ來つて、氏の門をたゝき、古今未曾有の事件に對して、各自の意見を述べんとす。されど全く之を謝絶して曰く、「若し津田に對して利益なる助言あらば、封書を以て送り玉へ」と。三藏の一命は、わが帝國の威信に關し來れるなり。

三藏、一たび忿怒の夢より醒めては、またもとの三藏に歸り、自然としておのが覺悟を定めしものと見え、一切食事を廢し、之を口にせず。監獄に於ては、特別の待遇を以てし、肛門より牛乳を注射し、強いて活力に異狀なからしめたり。いよいよ公判の日となるや、人々諸方より集ひ來り、傍聽を得んとし、到底之を悉く許可する餘地なかりしかば、辯護士並に新聞記者の人員を限りて、之を許し、而もその二名毎に、付添の巡査一名づつを配置し、その警戒最もつとめたり。三藏の法廷に入るや、他言をなさず。これ先、おのが重傷を負ひて、身體意の如くならず、爲めに今日裁判の經過を表する能はざるを謝し、さて曰く、「この場にのぞみて、何ぞ身づからを辯ぜん。たゞ願くば、國際上の親和を破らず、而もわが、天皇陛下の法權を穢さず、日本帝國の法律に照らして、相當の處分あらんことを望む」と、口を戸ざして、また云はず。彼が辯護人の言も、また之に出でざりしなり。終に、世人の希望の如く、一個人に、未遂なれば之一等を減じて、無期徒刑に處せられしや、傍聽席はうれしげに總立となり、その當然の宣告を謝し、國際的責言の爲めに神聖なる法權を穢されざりし帝國

の萬歳を唱せしといふ。

三藏は北海道の徵治監に送られ、負傷いえずして、他界の人となれり。わが友人に、彼を北海に護送し船長と、汽車にのり合せて語れる者あり。この船長も神經家らしき男にて、大に三藏に同情を表し居り、彼に就て話たき事は山々あれどかかるところたればとて、名刺をかはして、相別れしが、其の言によれば三藏は船中にて、おのが血氣に逸りしことを悔ひ、別にその擧動には異狀なかりしとぞ。

之と相關して、記憶すべきは、北畠勇子なる婦人の自殺なり。三藏の事件ありし爲め、露國皇太子東都に上られず、直に本國へ引き返し給はば、日露兩國の折合上、甚だ面白からずと思ひつめ、下女奉公を辭して、京都に來り、太子並にわが國の貴顯に謁し、その意を通ぜんと欲し、意見書を携へて、京都府廳に至りしも、受け付けられざりしより、その門前にて自殺を遂げたり。死して意を達せんと欲せしなり。

この變事前後の時代は、實に國粹保存の說盛にして、種々の方面に於て、之が爆發を見たり。大廟に不敬なりとて、有望の大臣を刺殺せし者あり。清國媾和使の頭部を狙擊して、エッキス光線の試驗物たらしめし者あり。國民は擧つて敵愾心に醉へる時代なりき。三藏も亦この時代の產物なりしが、變事のありし即日、其筋にては、人を其住處に使はし、共謀者の有無を取調べん爲めに、家宅搜査を爲せしかど無益なりき。われ思ふに、若し共謀者ありとせば社會の大半は即ちそれにして、精神的無

期徒刑に處すべきもの、舉げて數ふべからざりしならん。

嗚呼、他國に對して一定の方針を有し、卓々として餘裕あるにあらずんば、事に當り、物に觸れ、その失敗を蔽ふ能はず、爲めに切齒扼腕の士、百出するや必せり。社會の鬱憤力も亦恐るべきかな。幸にして、李鴻章被害以來、かかる暴擧を企つる者なしと雖ども、今日の如く外交多端の世となり、之が局に當るもの、一たびこの古參にして而も新進なる國民の鬱勃たる意向を誤ることあらんか、知らず識らず、わが日本全國をして、意外なる方向に導き行かしむることなきを保せず。嗚呼、津田三藏はかかる動機に觸れて、現れ出でし者なるか。然り、われ之を否定せず。然りと雖も、當時の有力者、法權獨立の問題にのみ熱中して、いまだ一歩を進めて彼の果して謀殺犯者なりしや、或は又一種の精神病者なりしやを究むるの暇なかりしなり。彼の同僚は彼を勳章自慢と稱し、彼と共に軍籍に在りしものは彼を八景狂と呼びたり。而して一般の社會は彼を以て敵愾心の爆裂彈と見爲したり。嗚呼われ、近江に來り、秀麗幽邃なる琵琶湖に面する度每に、彼はわが冥想のうちに浮び來る、一つのおもかげなりしなり。

附記

露國皇太子の飛び入りて、繃帶を受け給ひし吳服屋は、露國政府の賞にあづかりて、近頃まで存在

してありき。白木綿の血に染めるもの、太子の坐し給ひし書圖、御飲水を盛りしコップなど藏して、その家の寶物なりき。市人は却て詳しからねど、露國人の之を目當にて、見物に來るもの、年々五六十名にのぼるに至れり。店は盛ならず、且、身代もよろしからざりしと見え、この見物人に金錢をめぐまれて、生計を立てつつありしなり。市長は之を日本の恥辱と思ひしのみならず、偕て露國は、之を永久の記念にせん爲め、或邦人の手を經て買收せんとする風説立ちければ、之を市に買ひ上げんかとの相談を爲せしものある由なれど、今は某郡長の手に落ちたりといふ。

又、露國の勳章を受けし車夫に、京都市外、桂川のほとりに、別莊を構へ、悠々としてその閑日月を送る由なれど、素行修まらざる爲め、其筋の手を惱ますこともありしとか。われ曾て、一友と嵐山の三軒屋に相酌みし時、かれ、その隣室に在て、義太夫を唸り居たるを聽けり。

十餘年ぶりにてめぐり會ひし

婦人に贈れる書

（その一）

先日は十三年ぶりにて御目にかかり、小生のよろこび之に過ぐるものなく候。御身の御一家も絶え

ず小生を御思ひくだされし由なるが、小生がひとり心に昔の冷淡を悔い、いつか御目にかかりて御詫申さんと思ひ居りし事は、言語を以て申あげ難き程に候。長さをいとはず申あげ候はば、小生が國をいでて大阪に參り養英學校に入りてより、學問のうへにいそがしく相成り、故郷のことをさへ思ひ出すをいさぎよしとせざる變人と化し、御家に對しても音信申すことを怠り、小生の家が上京するに就き、一度歸國せし時も、小生が先祖の墓まゐりに行く途中、御身の母上に呼びとめられ漸く御家に立寄り申せしも、母上の御親切なるお言葉を無愛想にお受け申し、二三の言葉を交せしばかりにて、おいとま申せしこと、御兩親も御不審に思はれしならんが、小生は後に至り、この時のことを思ひ出す度毎に、何となく濟まぬここち致し、年月を經るに從ひ其の有樣を解し來るにつけても、忘れ難く、わが身を責むること一しほ增し申候。小生が御家に御立寄申せし時御兩親は既にもとの御屋敷をうつり居られ、御身は姉上と御一所に播州へ養蠶の爲めに行かれて、御留守の由承はり候。

其後小生一家は、東京に住ふこととなり小生はまた奧州へまゐり居りしことも有之候が、學問の難關をくぐり、且、浮世のはかなきを悟るにつけても、わすれられぬは御身一家のことにして、他國へ行かれしとばかり――いづくに、如何に暮さるることやら、いつ御目にかかれることやらと、空しく思ひをめぐらすことが、或は悲しき歌となり、詩となりて、小生の詩想を發達さしこと幾干なるか知れ申さず候。之は御一家の賜物として、感謝いたし居り候。

丁度今日より五年前の夏、東京よりこちらの方へ參りしこと之あり候が、其節播州の龍野に一、某といへる人より、御身を汽車の上にて御見うけ申せしが、○○に一看護婦を爲し居らるる由承はり、歸途同地に立ち寄り、諸所の病院を尋ね候へども、先日とは違ひ、尋ぬる手づるなかりし爲め、わからずに終り申候。この時ならば、父上にも御目にかかることを得たりしものを、相惜のこととは斯の如きを申すにや。その節、當地大津にも立寄り、三井寺の高きにのぼり、段々に消え行く夕陽の湖水に向ひ、御身一家の事を案じ居り候、ところを、撞きいだす晩鐘に驚きて、また無常の旗をつづけしこと之あり候が、この度の如く、御身をお連れ申し、再びここにのぼることとありしとは、夢にだも期し居らざりしことに候、誠に奇遇の上の奇遇と存ぜられ候。

さて、一昔相會はず候て、一朝再會の機を得しものも、御身御一家の以前と變らぬ御親切により、昨日の如き思を爲し、國に在りし日、御一緒に學校に通ひ、又ともに嫁菜たんぽぽ等を摘みて遊びし事を思ひ出で、何となく稚き時が戀しく相成候。すべて無邪氣の時が最もよろしく候。世間にいづれば、艱難辛苦は人の前後左右にまとひつき、恰も旅人が山又山を踏み越えねばならぬ如く、浮世は嶮しき坂のみ多く、一の難事を越ゆれば、又他の苦勞を生じ、樂を得るなどとは到底あるまじきことに候。然れば之に對する覺悟は、おのれの心一つにこれ有るべく候。こころ卑しければ、樂と思ふことも眞のものに非ず、こころ高ければ、苦しきうちにも自然の樂みこれ有り申べく候。御身の如きは世

に不幸に相見え候へども、男子にても時には爲し得ざることを、女の腕に引き受け、如何に亡き父上との約束ありとは申せ、一家を無事に支へ居らるること、誠に感服の至りに存じられ候。之を仕合せと思召して、一層母上に御孝行成さるべく候。

ただ殘念なるは、父上の御死目に遇ふことを得ざりしことに候。今更ら悔みても及ばぬことなれば、先日御話申上候通り、父上の御志に報いる一端にもと、御石塔を建つる御助力など致す心得に候。

父上は御逝去あそばされ、母上とても既に御老年、且、兄上の御病氣不斷の事なれば、御心配は然ることながら、ここが女の一念の通るところにこれ有り候。誠は即ち女の力に御座候。いやと思ひて爲せしことは、如何に辛苦を積むとも無益に歸し申すべく候。御身が今日の責任を全ふするは、ただ眞心を以て萬事を忍ぶことに之あり候。誠ある苦みは決して苦みに非ざるべく候。小生は、只今では、種々の關係ある身に候へども、昔の學校友達を思へば、早失ひし姉妹を得たる心地いたし候に付、出來る限りのことは、どこまでも御力に相成申すべく候。既に住所も知れし間なれば、時々は御たよりにも接し申したく候。

終りに申上たきことはすべて醫に關する人は、その研究するところ、また接するところ、殆ど身體の事ばかりにて、兎角高尙なるところに思の及ばぬ勝なれば、醫のことを、知れば、凡そのこと足れりとする。一般の惡習慣に卷き込まれず、何卒女としての品性を發達するよう御心がけ成さるべく候。

（その二）

御手紙拜見仕り候。昨日兄上樣よりも御音信之あり候。如何たる事情かは存じ申さず候へども、小生歸津の翌日、兄上樣は御老母樣と急に御郷國へ引きうつり玉ひし由、時々汽車にて御見舞におかるに、近ければ、幸ひなりとよろこび居りし小生は。少しく失望仕り候。今後御地に參らば、必ず先づ御身を御訪ね申すべく候。今日の土曜は御地行きと、兼て定め居り候故、他の友人にも通知いたし置き候ところ、古き同窓の友五六名小生を待ち居るとの返事もこれ有り候へども、不圖右山の意見を思ひ付き、家族をつれて之に參り、只今歸宅して、御手紙を拜見せし次第に候。御身をも御誘ひ申せばよかりしとは存候へども、どうせ御勤に御差支のことと思ひて、遠慮仕り候。明日も亦同所へ來る筈なれど、之は同僚のものの御つき合に候。

世の中といふものはうるさきものにて、おのが思ふままには出來ぬものなれば、男子の心にても、いつそ山の奥へでも這入りたく思ふことは、まてこれ有り候へども、又一方より考ふれば、人と生れて人たるの道を盡すには、山に入るも、世間に在るも、かはるものにあらざれば、此點よりして我々の慰めは來り來すべく候はんか。なやみと苦みの境界を過ぎ越されたる御身に取りては、浮世に飽き果てしと仰せらるるは、御尤ものことに候へども、かかる人は澤山これあり。廣き世の中には、御身

ひとり君に限らず、小生とても、今日に至るまで、滿足と覺えしことこれ無く、又これ迄の經驗と悟り得しところによりて見るも、樂を得んとする考は露これなく候。世間の人は飲食虚榮を以て目前の喜びを買ひ、殆ど悲しき風の吹くところあるを知らぬ樣なれど、斯の如き人は決して永續する滿足を得たる者とはいひ難く候。第一、人の命に限りありて、死ぬるといふは、たとへば酒の醉ひの醒める樣なものにて、覺めた時が却て眞の人間の有樣なれば、始めより眞の人間、即ち死ぬる後の心持となりて、常に空しき迷ひを遠け、後生の大事を謀るがよろしく候にずや。以上の考を以て御坐るならば、世にあるも、世を去るも、殘れる心は同じものにて、苦しき中を通るも苦みと思はず、樂しき事に過ふとも、眞のものにあらざれば、之に迷はず、務むべきはつとめ、盡し、一心の誠を貫き候はゞ、之が何よりの滿足にこれ有り申すべく候。よしんば我々にして、人の知らぬ悲みありとするも、その悲みを悲み通すは、一つの滿足に候はずや。樂を得たしとは、人の爲せるところをうらやむに過ぎず、人をうらやむ心なければ、また浮世にあき果てしといふこともあるまじきかと存られ候。

　父上の御逝去に最も御身の御力落しの原因と御察し申候。然りながら、以上申しあげしことをよく御含み成られ候はゞ、現在既に父上のところに御座るたり。人の心は決して亡ぶるものに非ざれば、その亡びざる心と心と一致するところは、過去に未來の區別なく、失せにし人も世の人と変り、世にある人も亡き人と相語ることを得申すべく候。心には、人の口より出づる樣な聲なきと同じく、之を

滿足させるも亦、目に見える世間のものにはこれ有るまじく候、今夕琵琶湖に乘出せし時、一匹の蜻蛉の湖上を渡りなやみて水中に溺れ居るもの之あり候故、櫂を延べて之をすくひ上げしに、暫く立ちてその力を回復せしものと見え、再び高く飛び去り申し候。人のなやめるを慰ともなりて救ひくるるものは、ただ心に信じて得る神の力なりと存られ候。

失望は人の元氣を奪ひ、人の心を弱くするものなれば、從つて萬事大儀になるもの故、何卒小生の言葉を御服用くだされ、御氣を御持直し成さるべく候。いづれ來土曜日には、御地へ參り申すべく候に付、御目にかかり申すべく候。

伊吹山上の記憶

伊吹登山を思ひ起す度每に、わが記憶に浮び來るもの二三あり。藥草の多きことと、滋賀縣下に有名なる水論、山巓夜明けの景等なり。

伊吹山には、大樹全くなかりしが、近來その谷々に松、杉などを植ゑつけ、その高さは既に森林を形成し、溪水の涓々たるを聽き得べし。然れども、これ、山麓に近きところなり。數丁登れば、全山殆ど山火事ありし跡の如く、一木の日を遮ぎるなく、低き草花の、四季、かはるがはる咲けるあり。われ牧畜によろしからんと、人に語りしが、五千尺の頂上に至るまで、水源の尋ぬべきものなきを如

何にせん。織田氏隆盛の世、信長、和蘭人に託して、外國より藥草の種を取り寄せ、始めて玆に之を播きければ、その名殘り今にはびこりて、至る處、登山の士は、一時の神農氏を氣取り得べきたり。

われ、植物學者にあらねど、下山の道すがら、目に入る花葉をつみ取り、案内者に就いて、一々その名を問ひ、彼うるさげに答へしものを、手帳に控へたるうちに、同山固有のもの――棕梠草、ふなわら草、郡内風露、伊吹風露、ぼうふ、連理草、はれりやな、伊吹虎の尾、からす扇草、等あり。また、都草、しもつけ、車花、すずめ豌豆、ほたる袋、唐松草、かわら松葉、くらら、ぎぼし、普通虎の尾、ささ百合、おつぼ草、等あり。以上は、われらの登りし、六月の末に花咲き居るものなり。いまだ咲き居らぬものに、桐の葉草、柿の木草、大文字、松虫草、熊谷草、金ばへ、銀ばへ草、さんかえふ、雲切草、等あり。これらも伊吹山固有の産なりとぞ。伊吹艾は世人の夙に知るところ、風露草も亦一般に重んぜらる。惜かりき、時、今少し遲かりしならば、全山の藥草、花開きて、窓中に一大百花園を現せしものを。

幸に、この不足を補ひて餘あるもの、頂に於ける夜明けの景なり。わが同行は一人の外人にして、いまだ日本の地を踏むこと少かりき、かれ、おのが家より、サンドウヰチを携へ來れるのみならず、暑き日なれば、途にして、ラムネ數本を購へり。われらの頂上に達せしは、夜の三時過なれど、身體を勞せし爲め、熱汗ほどばしるが如く出でたり。これらは日の出を見つもりなれど、時、なほ早け

ればとて、山神を祭れる岩屋のかげに憩ひつ。待てども、待てども、日は出で來らず。且、心臟の鼓動靜まるに從つて、東西南北に吹き渡る風の、冷かなるを覺え來り、喉の渇くどころではなく、却て火を望ましきここ地して、口、物云ふが重く、手かぢけて動し難し。

案内者に、毛布二枚の用意ありしかば、一枚を彼に與へ、一枚を友と相分ちて、石の上に横たはれり、石上に眠むるは之が始めてなりと、友は笑ひつ。相共にグレイの挽歌を誦して、一と眠りせんとすれども、寒さが爲めに安まらず。暫く山上をかけまわりて、暖を得、再びもとの處に戻れば、案内者、今日の如き不思議の日はなしと答ふ。太陽出でざればなり。常にいづくより出で給ふかと問ひ紀し、彼の指さす方向に向へば、見よ、燦然として、將に日の出ならんとする光景あり。下は數千尺の地底より、層々として積み重なる、鼠色の雲間を漏れて、濃厚なるくれなゐ、紫、黄、等の光線を發射し、手もとは締りて細けれども、西北の蒼天に向つて延長する、その有樣をたとふれば、あの軍艦に於て用ゆる、暗夜の探海燈の如く、まさに左右に振動かんとする勢あり。その周幅の廣まるに從ひ、紅は青綠と混じ、紫は黄綠と雜り。黄色は紺色と結び、橙黄は青色と合し。餘色は悉く純白の末に消ゆ。嗚呼、良好の『スペクトラム』ならずや。

われ、眠れる友を呼び起して、之を示せば、彼も亦快を呼びつ。時計を見れば、早六時を過ぐ。われらはこの美觀に滿足し、目的を達せずに、山を下りんとする時、ふと返り見れば、日は、意外なる

方向に於て、灰色の雲間より、われらを窺へるなり。その丈、既に高し。われ、案内者を呼んで、そのあまりに迂濶なるをなじれば、彼も亦之を知らざりしと白狀せり。年々この山に登るもの、千を以て數ふと雖ども、雲、常に深くして、日の出を見しは稀なりといふ。

晝見れば、一直線にすべり下る道も、夜の案内者は之によらで、羊腸九折の草間を縫ひ行きしなり。われは、十歩に探り、百歩に憩ひ、暗きにマツチを摺りて、煙草にうつすなり。この煙草の火は喫ひ終る度毎に消え行くとも、なほ消えざる光あり。何ぞや、時を失ひて、生れ殘れる螢あり。宇治の呼び聲高く、又、石山に人多く出でしは、早十四日も前のこととなるを。何故に、その友と相別れて、かかる寂しき山上に迷ひ來れるかを知らず。二つ、三つ、人魂の如く、ふわりふわりと飛びて、われらの頭上を過ぐるを、わが友、手を延ばして、捕へたり。石山などのよりも、その形の小さきは、山の冷たき儘に育てばならん。かれは、之も一つの標本なりとて、終につつみて、そのポケトに入れつ。同じ動物學者の、某博士に送るつもりなり。われは、かかる趣味を解し得ねど、他の方向に於ては、この山の螢の、重き冷氣に痩せ行くともなほ高きを慕ひて、飛ばんとするあはれを味ひぬ。

更らに思ひ起すは、山腹を登る時、夜中にも拘らず、遠く聽え來たる半鐘の響なり。微かに之を聽き分れば、四つ番なり。火事にやと、案内者に問へど、然らず。こは、水どろ棒のありし知せたり。田に水を引く必要ある間は、百姓の天氣を心配すること常なれど、暫く雨なしとならば、水に不自由

なる地方に、必ず水論を生ずるあり。一條の細流も、幾尺を隔せば、あちらに這り、また何寸かを増せば、こちらに分つ、といふ定め方ありと雖ども、旱魃の時には、この規約を破らんとする者出づるを以て、爭論を引き起すなり。いよいよとならば、男も女もいのち掛けとなり、目立て、爭ふを辭せざるは、夜、窃に、水流の仕切りを切りに行き、一滴にても、おのが田へ流れ入るを望み、切らるる方も、之を防がん爲め、燎をたいて、夜番を爲し、敵を見つくれば、直に備への半鐘を打つ。之を聞けば、一村擧つて集り來る。その衝突の甚しきに至つては、父子、兄弟相鬪ふもあり。小さき竹槍騷動の如きは、毎年絶ゆることなしといふ。

高きより臨めば、夜も光れる一大湖を控へ、その屈折浸入せるところ、幾多の小内湖を作り、水嵩増せる時は、沿岸の田畑を浸し、生き生きせる稻穗の上に、更に新しき芽を出すことある、近江の國なりと雖ども、嗚呼、また、水なきが爲に、おのが生命までも枯らさんとする地方あり。鈴鹿山のこなたなる『相の土山』宿の如きは、海面を抜くこと、殆ど山と等しき爲め、屢々雨になやみ、湖上に瀕せる長濱、彦根の如きはまた、水に苦む。而も水論に忙がしき水無月なり。天地は、人の左右し得ざるところに偏れて、その味ひを生じ來る。螢は高きを慕ふに依りて愛せられ、水は低きに下るを以て貴しとせらる。これ自然の性なり。

われらの山を登るに從ひ、われは四ツ番の繹、益々明らかに讀み得る心地して、浮世のさまざまな

る有様を觀じ、又、山頂のあけぼのを見るに至つて、かの百花爛熳たるが如き、日光の餘色に、わが胸襟は開らけて、天通の力を得たる思を爲しぬ。

藤樹先生の跡

近江聖人、中江先生出生の地は、かねてより一たび行きて見んと思ひ居りしところなり。七月二十二日、たまたま今津に行きしを幸に、そこより車を驅つて、湖邊に添ふて進むこと里餘。上小川村に至る。今津と同じく高島郡なり。天台宗眞盛派、玉林寺と名づくる寺あり。その門のかたわらは即ち先生の墓所なり。三面四方、低き石垣をめぐらし、正面より少し左によりて、小高く土を盛りたるは、先生の塚と見え、その前に「中江先生墓」と記せる石塔の立てるあり。その右手にありて、同じ格恰なる塚には、「中江徳衛門　北河氏墓」と記せる石塔立てり。これ先生の母君なり。右手の小口にあたりて、今一つ同じ樣なるがあり。これ先生の子、常省先生の墓なり。柵内一面に芝草生ひ繁りて、短く之を刈りたる、甚だ美しく、足を置くべきは只、一道の敷石の、多年風雨にさらされて、色かはれる上あるのみ。後世の手を加へざるところ、人をして却てその人の昔を忍ばしむるに足る。先生の塚の上なる芝草にまじりて、野百合の一もと花咲けるも、いとあはれなり。

それより一二丁來りしところに、いにしへの書院あり。藤樹の名を生ぜし藤の根は、甚だ太くして、

数本に分れ居るようなれど、二派となつて、二本の榎樹をまとひ登り、鬱々たる枝に繁つて、高き藤蔓の青葉は、おもげに路上を蔽へり。その根を流るる一條の小流は村人のもの洗ふところなるが如し。もとの書院は焼けて跡なく、現今のは假建なり。ただ門のみ先生存生當時のおもかげを傳ふの由。庭宅の周圍をめぐる柵は、その杭すべて筆の形に削り、穂先を白く塗りあるを見る。これ村人の意匠なりといふ。

現今の書院は假なるだけに、簡單なる建物なり。玄關の額には、先生の眞筆『致良知』の語を掲げ、玄關を上りしところに、分部呂命の書『藤樹書院』の額あり。奥の正面には、藤原忠良公の手跡『徳本堂』を懸け、扉を開らけば、先生の位牌を安置せり。藏物には、先生の書『致良知』の掛物、身づから寫されし『孝經啓蒙』、長崎の人小原慶山の王陽明像の軸あり。唐畫の孔子像は李仲和が筆なり。之には、狩野法眼永眞の口上、『代金三枚五兩可仕候、酉三月』といふが附き居れり。その他、大鹽平八郎が致良知の三字に跋せし文を、大鹽が自筆にてものせし、細字の額あり。その長さ三尺もあらん朱の罫を引いて、明白に書せる物なり。惜むべし、雨もりの爲めしみ生じあり。

余は寫眞を取る考なりしかば先づ、書院の内を寫し、それより出でて、藤のもとに至る。これより先、書院に入る前、この流のほとりに、二個の桶子あるを見たれば、風流をまなびて、之をうつし込むつもりなりしなり。今や之を取りかたづけし人あり。車夫をして諸方を探らしめ、漸く農家の裏庭

より借り來り、之をもとの所にすゑてレンズの蓋を閉きつ。歸後、寫眞師をして之を仕上げしむれば、ペイパアの形を切込みて、わざわざ硝子の見えぬように爲しありき。

嗚呼、かかる小事を見ても、われは先生の質朴なる德行に服する者なり。

奈良の家づと

（妻の作なり）

わが身一日奈良に遊び、舊都の跡を見んと思ひ、之を良人に語りしに、數日の後暇を得て、伴はれぬ。頃は七月下旬、なかなかに暑し。支度もそこそこ、車を馳せて、馬場驛に至り、上車す。車は汽笛と共に動き初めたり。窓中より四方を眺むれば、左右の田の果もなき綠は、一點の雲なき靑空と、色を競ふ如く。賤の女男は、おのが田の面を樂しげに見やりて、歌うたふあり。草刈るあり。其の樣いと面白し。稻を見て、

見渡せば、いづこも同じ綠草、
　　やがて黄金の實をや結ばん。

賤の女が田の面に植えし稻穗草、
　　村雨ごとにみどり増すらん。

やがて、七條停車場を越え、數々の驛を過ぎて、奈良に着く。汽車を下りて、進み行けば、傍に池あり。白、赤の花つゆ重げに色を添へて、咲き居りぬ。

　　朝な朝な、池のはちすに置く露の、

　　　　玉とも見えて匂ふなりけり。

けふのさしも良き天氣の、生憎に、午後より、雨ふり初めしかば、一夜を或宿に明しぬ。雨ふりみふらずみ、あやしげなれど、名所見物せばやと、車夫を雇ひ、宿をいでぬ。先づ、猿澤の池に至り見れば、底すみて、綠なす柳の、風になびきて、水にうつるあり。

　　猿澤の池の汀のたれ柳、

　　　　いく世綠のかげとどむらん。

進み行けば、左甚五郎の作なりといふ、鹿の噴水あり。そぞろ古人を忍びつつ、野べを眺むる折柄、あなたこなたに遊べる鹿の、われらを見て、食物を乞ひに來るも愛らし。

　　夕立の晴れしあしたの春日野に、

　　　　樹かげ涼しく鹿ぞ群れゐる。

やがて、春日明神あり、石燈籠金燈籠、數知れず。見ゆるもの、立派ならざるはなし。景色も亦、興を添へつ。

千早振る春日の宮の奥ふかく、
そぞろあるきに古へを思ふ。

また進めば、有名なる三笠山見ゆ。三つの山、その頂を並べ、一は濃青、一は青、他は淡青の色を競ふ。これ、山に生ふの草木の牲質によると思はる。その奇觀なること、いまだわが目に殘りて、消えず。清き月、山の端より漏れなば、如何にうれしからんとの想像、胸に湧き出づ。

仰ぎ見て、あかぬ眺めの三笠山、
隱れて出でぬ月をしぞ思ふ。

二月堂、大佛、美術館、などを見たり。花の松といふがあり。昔、弘法大師、之を花の代に用ゐられしと云ふ、さほど大なる木にはあらねど、枝は下に垂れて、池を蔽ふ様面白し。

法の師の花とも見てし松が枝は、
色もかはらで、幾世經ぬらん。

なほ、大阪、神戸、須磨などに遊びたれどここに省きぬ。

隧道狂

夏の中頃のことなり。われ所用ありて、名古屋に行き、それより轉じて、金澤に向ふ途次、米原に

至りて、北陸線に乘りかへとなる。夫婦に三四歳の子の一組、われと同車に入り來れり。汽車は長濱を過ぎ、姉川の鐵橋を渡り、その動搖少からざるを事ともせず、小兒は母の膝より、相對する父の手に渡り、父の手より、また母にいだきつきて、その無邪氣なる樣の、あまり可愛きをめでて、われは殘り居る食物をつつみ直して、差し出せば、兒は母の顏を見あげ、母は父のけしきを窺ひて、いまだ手を出さず。父なる人は、そのうは鬚を撫でつつ、『いや、よろし』と答へたり。われ張合を失ひ、さりとて手も引き兼たるところ、うしろに在る別人の子、之をながめ居りしかば、之に與ふ。もとの兒は、母の袂を探して煎餅を得たり。入らざる罪を造りしよ。

　うは鬚の先生は、頻りにその鬚をなでつつ、それを見詰むると思へば、目を轉じておのが妻を熟視し、また轉じて窓外を眺め、再びわが顏に返るその、瞳子のそれと定めたる目的なきに似たり。高月に停車せし時、ふと思ひ出でたる如く鞄より、一冊の書を取り出だし、口を動して、之を默讀し始む。新約聖書なり。暫くは、之に專心なりき。われ、母なる方に向ひ、『いづこに行かるるや』と問へば、『金澤まで』と、しとやかに答へて、何となく、人を避くる氣味見ゆ。『キリスト敎に關しての御旅行にや。』『然り。』『何派なりや、』『メソヂストなり。』同派に二三あるうち、そのいづれに屬するか知らねど、われにも知己なきにあらずと云ひしまま、話は途切れて、無言なり。先生おもむろに頭をもたげ、われに向ひて云へるならんと思はる、『耶蘇基督は、まことに有難きお方なり。われらの願はすべ

て聽き結ふ』と。
それより談話か、獨語か、いづれとも定め兼ねたる、低き口調にて、わが方をうは目に向きて、語る故、われも返事を爲すべきや、またそれに及ばぬや、決し難ければ、聽くが如く、聽かざるが如く、いづれにも見ゆる態度を以て拜聽するに。彼はもと金澤に傳道を爲し居りし者なり。如何なる故か、信徒より排斥を受け、一時、靜岡縣の某處にありしが、某婦人の熱心なる祈願によりて、再びその任地に歸ることとなり、けふはその途にあるなり。某婦人は誠に親切なる人なりと。わが跡にての推量に依れば、この婦人とは即ちおのが妻を云へるものらし。歸れば、直におのが反對者を教會より放逐せんの意氣込を表せり。

われ他人の精神に異狀あるを認めたり。汽車は木の本、中の郷を過ぎて、柳ケ瀨隧道に入り、その第一洞を通り拔くれば、かれ身體を傾け、目を以てその跡を追ひつつ、呆然たり。忽ち第二の洞に入り、また第三を過ぐ。かれ始めて坐を立ち、左右の窓を閉めたり。第四洞を出づれば、また、手を延して、その前後の四窓を閉めたり。隧道は、あと暫くなしとて、わが後に坐せる人、扇子の手を休めて、一窓を開けたり。例の先生は、じつと見詰めたるのみ。『隧道が來ます、』『隧道が來ます』と云ひつづく。

疋田を過ぎて、敦賀に停車せし頃は、炎熱燒くが如し。扇子の音烈しく響きて、人、暑きを叫ぶ。

足をまくつて坐するもあり。肌を脱いで、煙草を吹かすもあり。仕切二三を隔てて、旅商人らしきものの一群、頻りにわれらの方をふり向くあり。敦賀を發すれば昔、新田義貞の立籠りしといふ山をのつづき、いよいよ金ケ崎隧道に入る。十一ケ所の出入あり。先生の惡縁いまだ盡きずと見え、にこにこ、立ち上つて、仕切りを越え行けり。妻君こそあはれなれ。『よろしいではありませんか』と、低く云ひて、かたはらを向き、見ぬ振をよそふ樣子。夫の思ひ立つこととは、止めても聽かぬ氣質なるを、明らめ居ればならん。五六ケ月らしき身持の胸に、しつかりと子兒を抱きしめ、うつ伏す目には、涙滿ち滿てるを見たり。

十一ケ所のうち、山中隧道の如きは、之を通過するに、五分時を要す。かれ右を閉め、左を押さへ、前なるを上げ、後なるを引き、『隧道が來ます』『隧道が來ます』と、煙の入らぬよう大に働けど、あかるくなれば、直に過半のがらす戸はもとの如く引き落さる。『あれは氣狂なり』と、旅商人等は意地づくになれり。かれ閉むれば、之が開け、これ落せば、かれ引き上ぐるといふ始末に困じ果て、牛の腹違ふ風つきを爲して、おのが坐に戻りしが、全く通り脱けし後までも、立ちて、『隧道が來ます』と、氣をもむなり。隧道既になしと云ふ者あれば、『さうですかア』と、をかしく聲を引いて、口をあくなり。かれ尚『隧道が』『隧道が』といひ續け居たれど、終に暗處を見ずして、夜に入りつ。月は涼しくわれらを照せり。金澤に着せし時は、既に十二時を過ぎたり。

金ケ崎隧道を出入する時、われ、あまりの氣の毒さに、妻なる人の慰めにもならんかと、高きより見ゆる海岸のおもてを指さし、消えゆく如き遠山のはづれより、夕陽のうつる美しさを語りなどせしかど、一目見て、寂しき笑みを漏らせしのみ。この美觀も、この人の心には、受け入れらるゝ餘地なかりしが如し。行すゑ越し方の苦心、思ひやらる。

金澤停車場にて別を告げ、われは近所の宿屋に入り、旅裝を解いて、行燈の光に、一服の元氣を吹かし居たるところ、例の先生も亦登り來り、ちよこちよこと、わが室内に進み入り、首をつき出して、われ在るを見、又ちよこちよこと出で行きつ。『こちらです』と、宿の女が言ふに從ひ、わが隣室に落ちつきたる樣子なりしが、われ床につきし頃、耳に入る聲あり。一ふすま隔てての物語なり。『わたくし、腦病でしたら、あなた、大變親切にして呉れました。』『はい』と、小さき返事につづいて、『もう、よろしい。之から、また神の道を傳へます。』『はい』と、また小さき聲。

嗚呼、われ始めて知りぬ、彼は宗教熱心のあまり、一時發狂せし某氏たり。その妻女は、貞節之に奉じ、おのが一身を捧げてるの譽高き婦人なり。四歲の兒は、父と同じく、道の爲に盡さしめんとて奉げたる者。將に生れんとする、胎兒も亦然らんか。至誠、事と違ひて。この不幸あり。願くば、天、幸にかれらの上にめぐみを垂れよ。悲涙滴々、もの云はずして、わが枕をうるほすを覺えぬ。

翌朝起き出でて、樓上よりのぞめば、この一行は車に乘り、宿を立ち出づるを見たり。嗚呼世この

人を如何に用いんとするや。われ呼び止めて、親しく之と語らんの情に堪へざりき。

八日市の市

　神崎郡に八日市といふところあり、毎月、二、五、八の日は、同地に古來有名なる市の立つ日なり。之を開始せし元祖は、神として祀られありといふ。市の日は、近在の百姓どもの遊び日の如くなり居り、各、おのが家の產物を賣りに來り、その賣上高を以て、各自の好むところを買ふて歸るなり。彥根、八幡、其他縣下の商人は勿論、京都、大阪等より出で來るもあり。

　人、若し夏の朝早く起きて、街道にいづれば、西瓜を積んで來る荷車、いくつとなく相列なるを見ん。松茸の頃になれば、大なる山持ちは、おのが所有地より出づるを、山の如くつみ上げ、十本二十本とかぞへ賣りを爲すもあれば、何百貫目と安く買ひ受け、東京などへ送るもあり。今日の賣行き何千貫目と呼びあぐること珍らしからず。柿あり、蕃茄あり。煙草は當地の特產なり。ねぎ、大根、かぶら。ぼろ切、反物、下駄、魚類、瀬戸物。何かにつけて、缺くるものなく、或は店を張り、或はせり賣を爲し、手を打つ者もあり、相爭ふもあり。之を賣る者、之を買ふ者、傍觀者に取りては、共に狂せる如く見ゆ。

　その日に限り、道路取しまりなどは、規則づめに行かず、警察も之を見逃し置くなり。魚類は大道

にさらけ出され、野菜に群集のうちにつみ上げられ、唐傘、擂木等の倒れたるあり、鍋皿のころげ落ちしもあり。その間を往來するもの、或はマントル仕立の紳士あり、或は尻ツぱしよりのわらじ掛けあり。若奨あり、小供あり。ここに集り來らざる者は、鬼と化物のみなりといはる。存外爭ひの生ずることなきは、互ひにその日の衝突は免れ能はざるを承知し居ればならん。若き女は、おのが手作りの大根を、好みの下駄、かんざしと交換し、老者は又、その荷で來りたる作物を賣つて、腹一杯に飽くを以て滿足し、若い衆のうちには、米數俵の代金を携へて、直に足を新町に入るるもあり。

老若男女の店より店を傳ひて、物買ふさまを見れば、恰も浮氣者のぞめき行くに似たり。當日は掏摸の働き時なり。田舍者に限りて、その巾着を大にし、その一層頑丈なるは、長き紐をつけて、之を首に懸くるなり。されど、かれを買ひ、之をねぎる度毎に、手をあげ、首を下ぐるも面倒なれば、終には假に之を懷中するに至る。之を窺ふ者は、容易に奪ふことを得ん。その割合に盜まるるもの少く、買物に夢中になりて、之を落すが多し。盜まれたと、警察所へ屆くるうちにも、その實、然らざるもの往々これあり。或時、五圓札二枚を重ねたまま拾ひ來りし者あり。間もなく、また一枚の五圓紙幣を落せしと、屆け出づ。この兩者の同一事件にあらざるや明かなれば、暫く待てるうち、後者は、或店に置き忘れたること判然し、屆出を撤回し來りつ。その跡にて、果して別人の、前者の二枚を落せし者なるが知るるに至れり。それとは異なりて、また一老婆が、その息子の米を積み來りし車

はあれど、本人の見えぬは、必定遊蕩に耽り居るべければ、探し出して與れよと屆け出づるあり。先づ帳面を見、その姓名を通じ來れる家をさして行けば、必らず見付くるを得、説諭をして歸してやるといふ次第。巡査、商人、百姓、掏摸、その混雜實に名狀すべからざるたり。

かかる群集の地なれば、地代の高きこと、滋賀縣下第一等なり。その街道に家を有する者は、店をを別人に貸し、一日五錢なり、十錢なりを徴す、されば、四間まぐちの一家を構ふれば、日に七八十錢を得、それが月に六七回あれば、それ丈は浮いて來た收入にして、且、之が爲めにおのが店の代物も賣れ行きよき都合なり。不斷は薄き戸をしめあるところも、その内に入れば、小間物にせよ、呉服にせよ、絹物、道具類にせよ、隨分高價なる品物をつめ込みある店ばかりなり。

掏摸は勿論、大山師、侠客、馬喰等の有名なるが集り來る地なれば、八日市の人は、田舎なれど、多くすれからしものなり。只一つをかしきは、荷車の人力車より權力あることとなり。當地の車夫は多く百姓の上りなれば、馬を引いて來る爺に會ふ時、身をかはして、横ざまにかぢ棒をまげ、「さア、お通り」と挨拶す。客は荷車の通り過ぐるまで、果然待ち居らざるべからず。道は廣けれども、何分、人込み甚しきところなれば、ぬかるみになり易し。雨の降る日にても、四五百人は出で來るなり。

明治三十三年は、この市を開始してより、千三百年にあたるを以て、盛なる記念祭を行ひしといふ。

『この風に、どうして船が出されますかいな。』

『男が頼まれて、いや應云へるかい。』

『それでも、若しやのことがあつたら、竹生島へも着かず、沖の方へ流されて、歸ることが出來なければ……』

『歸ることが出來なければ、死ぬまでのことよ。』

『うちには、子供が居りますぞ。』

『おれには友達があるわい。』

以上は、琵琶湖の北岸、大浦の船頭、赤尾力造夫婦が、八月二十八日の早朝、暴風雨の中に立ちて、相爭へる言葉なり。あはれ、この言葉こそ、兩者が永久の別れなりしなれ。

二八月の定めに漏れず、その日の暴風雨、朝まだきより、荒れ増り、大崎と九折尾崎の間より、太湖の刻み入れる大浦の如きは、その背後より强風を受け、木々の梢のぽきぽき折るるは愚か、郷社のふとき杉の木、おろちののた打つ如く、倒るるもあり。水際の蘆のそよぎ止まぬ間はと、浦人堅く戸を閉して。起き出づるもの少し。ここに市松といへる者の持船・百八十俵づみの和船・昨夜より碇をお

ろして、岸邊につなぎ置きしが、その綱いつのまにか切れて、漂々として沖合に流れ行くあり。船主の市松之を見て、大に狼狽し、赤尾力造を頼み、その所有船をも借り入るることとなり、兩人して、同業者をたたき起し、加勢を乞ひて、集め來りしもの、山松、與惣松、秋次郎、清太郎、別にまた年若き由松の五名。いづれも屈強のものどもなり。降りしきる雨を暴し、いよいよ乘り出さんとするや、力造の妻馳せ來りて、切に之を引き止めんとせしなり。されど、七名はとく力造の船に乘り、流れ船を追ふて、一目散に漕ぎ出せり。力造の妻はそこに立ちて、風と雨と浪とを浴び、濡れ鼠の如くなり、夫の行衞を見つめ居たりしといふ。

二三間もあらん怒濤、起きては倒れ、倒れてはまた迫り來り、流るる船も、追ふ船も、片々たる木の葉の如く見えて、さながら潮神の袖に翻弄さるるに似たり。力造衆を勵まし、聲を揃へて漕ぎ行けば、風力之に加はりて、なやみながらも、早や三十丁も出でしところに於て、目的の船に近づきたり。その船主市松、先づ飛びあがり、つづいて、秋次郎、清太郎の二名も、之に移りつ。さて、二艘の和船は、互に先を爭ふて歸らんものと、へさきを轉じて、もと來し方へ向くれども、人數二手に分れしうへに、逆風烈しきこととなれば、漕げども、漕げども、その功なく、沖の方へ流さるるを、いひ甲斐なしとののしりつつ、力造眞赤になりて勵めども、市松の船は見る見る流されて、見えずなりしが、竹生島に漂着せしと、あとにて知りぬ。

力造の船に、船主と外三名、九折尾(つゞらを)の南岸、管の浦へ漕ぎ寄せんと、必死の勇を皷してあせれども、風力なかなか逆らひ難く、前方に陸地を見とめながら、之に達すること能はず。何十年といふ間、風波にきたへし船頭の腕も、弱はり來つては、漕ぐ手その自由を失ひ、艪をはづすこと幾たびなるを知らず。その度毎に、船は數拾間の風下に押し退けらるるなり。これでは溜らずと、頓智に富める與惣松、先づ艪の乳首のそばに行き、漕ぐ人之をはづせば、直に之をはめてやる樣、まるで素人の爲す仕わざなり。交る交る入れかわりて、この下手なる得策を實行し、大に奮發すれども、ちから及ばず。次第次第に東南の方へあとずさりし、不意の大浪に當り、あわやといふ間に、覆沒したり。

腐つても鯛、水中に沒しても、水夫は水夫なり。いづれも怒濤をくぐり拔けて、覆沒せる船底に匍ひあがりしが、全く氣力を失ひ、最早沙上の章魚(たこ)も同然のあり樣となれり。竹生島、北兒島を去る、凡そ十間ばかりのところにて、力造、他の三名に告げて曰く、『わが船は惜しむに足らず。是より岸に泳ぎつかん』と、四名のうち、三名は、立ちどころに、身を踊らして白浪のうちに飛び入り。由松は兒島に泳ぎ着き、與惣松は竹生島本島に流れ着き、九死のうちに一生を得たり。さて、力造は如何。憐れや、激浪に捲き流はれて、影も形も見えずなりぬ。年最も長たる由松は、伜くまで船底にかじりつき、波のまにまに漂ひて、同島の東岸、宮崎沖を過ぐる頃、聲の限りに救助を叫びしかば、寶厳寺の事務所は之を聽きつけ、漸くにして由松を助けあげしかど、船はそのまま放擲せざるを得ざりき。

先に七名の、流れ船を追ひて出でしより、時を經て、何の便もなかりければ、大浦の人々は、大に之を氣づかひ、一部の消防組をして救ひに出でしめしが、正午十二時頃竹生島に來り、又、菅の浦よりも、この一大椿事を聽きて、漕ぎつけし消防隊の一組もあり。百餘名の者共、巡査數名のもとに、力を合はせて、力造の死體搜索に從事したれど、なかなか見當るべくもあらず。午後に至りて、諸方の有志者、並に死者の親族等も渡り來り、網、竹の鉤等を以て、水中を探り、晝夜の別なく、奔走すれど、何分竹生島の周圍は、湖中の最も深きところ、俗に七拾五尋と稱する程なれば、とても水底まで達するを得ざるなり。且、一間餘もある大鯰の種族が、日光も達せぬ暗所に住すと聽けば、力造も之が餌ばとなりしなるべしと、或者の云ひしより、人々の口に傳はり、此の問題は全く落着せしかの如く、搜索を中止することとなりぬ。寶嚴寺に於ては、人々多く集まれるを幸に、二十九日の夕つかた、山主導師となり、一山總出勤にて、この友誼にあつき力造の爲めに、追福の回向を營み、親族、區長、消防夫、有志者一同、之に參じて燒香し、そぞろ涙にかきくれし者もありたり。

式終はり、人々船に乘つて去る。夜色おもむろに集り來たりて、島は再び元の如く寂寞、中秋、月なくして、光あるものは、ただ平らかなる水面のみ。鬱然として、大樹低木の繁茂せる一島のうち、全く暗黑にして、若し魔の住處ならば、かかる時、わめき出でんも知れざる程に、物凄し。寶嚴寺の僧侶も、奔走につかれてや、早く寢ねたるなり。その夜のなかば頃なりき。宮崎のはな、聖天

皇供養、塔建てるあたりに、奇たる聲の聽ゆるあり。その聲、都久夫須麻神社の拜殿にのぼるかと思へば、また下りて、本殿の下をくぐる如く。泣くかと聽けば、また笑ふなり。段々、阪をのぼりて、寺の方に近づき來たるを、寺僧不思議に思ひて、こわごわ耳をそば立つれば、『男返せ、もとにして返せ』と叫ぶなり。戸のすき間より、之を窺へば、一女人の、髮は亂れ、衣は水に濡れしまま、立たずめるあり。さては、浦人の話に違はず、力造の妻の、一朝にして、發狂せしものかと、感づきぬ。されど、ただ一人、如何にしてこの島に來りしか。まさか船は漕ぎ得ざるべく、泳ぎは尙更らなり。或は夫を慕ふあまり、その靈魂のみ拔け出でて、ここに現はれしものならんかと、氣味惡きを忍びて、他の僧を呼び起し、戸を開きて、この女人に出で會ひ、『男返せ、返せ』と泣き叫ぶを、無理につれ來りて、一夜を介抱し、翌朝の便船にて、送り返せしが、人を見ても、人と思はず、おのが子を見ても、子としていたはらず、全くの狂人となり終はれり。而して、如何にして島へ渡り得しか、終に確め得ざるなり。

嗚呼、赤尾力造の義俠は、遂におのが船と生命とを失ひ、その妻の發狂は、實に夫を思ふやさしき心の結果なり。この「俠と狂」との話柄は、子孫にも傳ふべきものなりとて、早くもその近村に廣まりしといふ。

月の虹

九月九日、われ某地より歸着。馬場停車場に着きしは、午後七時なり。十六夜の月を踏んで歸る。あまり月の良かりければ、食事を速にすませ、妻子を伴ひて三井寺に上る。行きがけは、尚良夜なりしが、十年戰爭の記念碑に登りつめし時、月は既に雲を以て蔽はれ、光をもらす隙もなかりしかば、おなじ目的を以て集まれる人々、多くは歸り行き、殘るはわれらと他に二人一組あり。暫くにして、この一組も、とても待つ甲斐なしと明らめ、立ち去りたり。之と前後して一人の客、わざわざ京都より來りしといふが、登り來りて、われらの床机に腰かけつ。

われらは之と物語りしつつ、五分、十分、二十分、今か今かと待ちつゝ甲斐ありて、大形たるいろこ雲のうしろより、月全身をあらはせり。しかもその月の笠なるもの、雲高きを以て、小さき輪をめぐらし、そを染め爲せる色彩の、一種いふべからざる妙味を帶べるあり。瑞西の國などにて、『月に虹』と云ふは、即ちこれなり。

われら甞て新婚の樂み胸にあふるる窓に寄り、東都の月は之と相類するものを出しことあり。われ昔を思ひ出して語り出づれど、無邪氣なる妻は既に之を忘れ居るなり。且かれ、意を、いだける乳飮み兒に注ぎて、この明月の夜をそのやさしき寢がほと相比ぶるものの如し。忽ち月、光を害して、その

圓き輪は、明かに七色を見わけを現す。客・手を打つて快を呼ぶ。妻無言にして、之を仰ぎ見ること久し。偶然の美觀・われまた何をか云はん。當地に來りてより、石山三井寺は勿論・湖畔に四季の變化をもとむること多しと雖ども・最もわが心を奪ふその美、その觀・嗚呼・こよひに如くものなし。

容よく景を論じて、天の橋立の奇に及ぶ。われも些か意見を添へんとするや、對者のおもかげ薄くなるを見たり。驚いて仰げば、月再び雲に入らんとするなり。彩虹は外輪の淡紅色よりぼけ行きて、半圓殆ど見わけ難くなりつ。終に隱れて、浮雲の西に動くを見るのみ。客・坐を立つて辭を述ぶ、意氣甚だ壯なるに似たり。われらも共に袖を拂ひ、山守の老女に辭して、段を下る。長等神社の鳥居に至り、別れて彼は南に向ふ。われらは行く行く、當夜の意外なるよろこびを語り。詩神に謝しつつ家に着きぬ。

月にして、虹の花笠著るものを、
われには給へ歌のあやぎぬ。

紅葉狩の記

十月廿九日の日曜には、高雄の紅葉最も良し、見に來よと、美翁子の招きを受け、雨天にも拘らず、その前日大津を發し、花園村妙心寺塔中なる予が居を訪ふ。好謔例の如し。小雨ふりつづく夕暮

の庭、竹叢の風・隣寺木魚の音に和するところ、古びたる窓を戸さして、相共に往事近情を語る。相會はざること數年。披襟の談、絕えんとして絕ゆる能はざるを覺えぬ。

かへり見れば、われ曾て東北の山川を跋渉し、三伏の炎熱をもいとはず、嚴冬の寒烈をも事とせず、ひとり簑と笠とを以てわが身を忍び、西行法師と嘲られ・修行者と見誤まられ、狂者とののしらるるを快とせし時もありき。今や全く衰へて、昔日の元氣存せざるか、或は又、既往と異なれる境遇の然らしむる所以なるか。孰れにせよ、われはかかる豪遊を斷ちてより、ここに年あり。予も亦、世にわが如き變遷あるを見て、身づから深く思ふところあるに似たり。

人生知己にまさるものなし、而して相知る者は相隱す能はず、かれ物知がほに・八幡宮の本元を說明し來れば、われその知識の棊へば神官より出でしものなるを看破し。われ嵯峨の三軒家に一酌せしことありと誇れば、共時財嚢一錢を不足せしに非らずやと素破拔かる。快談笑話數刻に渡り・人靜まつて前庭にいづれば、半夜、星まさに雨ふらんとす。明日の好天氣を期して、寢に就きつ。

翌朝早起、輕裝して、予が寓を出づ。妙心寺の境內、古苔青々たるところ、一樹の楓葉唐くれなゐに染まり、いろ滴々、露と共にした垂らんとするあり。さい先きよしと喜びて、進むこと速かなり。城外田畝の間、霧は四方の山をつつみて、遙かに御室の五重塔を現じ、朝暾これに映じて、光を放つ景、人をして莊嚴の念を抱かしむるに足る。仁和寺の山門を過ぎて、或一小池の傍を行く時、池は全

く、名も知れぬ紫色の水草に蔽はれ、その面よりして立ちのぼる蒸發氣に、七色の分射するを見る。子即ちこの虹を指して曰く。

渡りて行かん池のあなたに

と。われも亦戯れに、之に上の句を附すること、次の如し。

さゝらがた織らぬ錦のかけ橋を。

ますます進むに從つて、野趣いよいよ深し。行き遇ふものは、頭に薪木を載いて市にいで行くいろ白女、荷車を引いて來る牛の數、純粹の日本犬、僧と行きちがひて、道を聽くも味ひあり。或は綠水したたる竹叢の間に入り、或は積々たる稻田、風に金波を打たす畔路に出で、或は叉やま相迫る間道をのぼる。椿、樫の葉、柿の實。秋にも亦赤きもの多しと雖も、春の如く盛ならず。而も皆、決心の色を表して、沈痛の相を呈す、など物がたりつつ、漸く目的地なる高雄の近道に達しつ。

でこぼことしたる坂、いくつとなく越え、十町餘を來りし時、溪間を行く水流の濺々たるを聞く。これ則ち清瀧川たり。名の如く清き流れのほとりに下れば、楓樹両岸を蔽ひて、朱の絹笠高く相かさなること幾段なるを知らず。水はながれて止まざれども、大宮人の昔ながめけん色をとどめて、常住の影を映すに似たり。朱塗の橋を渡り、嵯峨たる嶮坂、自然石を以て段を刻みあるを踏み、蒼鬱たる大樹の間をのぼり行けば、階段の極まるところ、即ち高雄の山門建てり。門を入れば、大ならざれど

も、一寺あり。讀經の聲、經堂より聽ゆ。實に一種の閑境なりと雖も、未だわが意を滿たすに足らず。予も亦ひそかに然るが如し。われ元の橋あるところに歸りて、休息せんと發議すれども、予は尙すすんで他方の坂を下る。われ止むを得ず從ひ行き、また高きところにのぼれば、豈圖らんや、山間開らけて、茶屋の設けもあり、絕壁の上より眼下を望めば、溪谷は一面の紅葉なり。予かへり見て、わが肩を打つて曰く、「如何」。また言葉なきこと數刻。

溪流、虹深きところより、兩岸の樹木相かさなつて、或は丹、或は綠、或は黃、或は靑。濃碧、淡紅、琉璃の如きあり、霞に似たるあり。段一段、のぼり來つて、わが足下に迫らんとす。風を受けさるこの幽谷、松は直立して、遠く之をのぞめば、竹の林の如し。ここに楓樹に隱れて、靑きはただ一の頭角を現はせるあり。かしこには又、嬋娟たる嬌美を抱きて、僅かにその片袖を濡らすあり。闇柔相まじわるところ、日未だ高からず。西山は輝き、東巒暗色を帶ぶ。

たまたま蝶の如きもの、ひらひら舞ひてその上を飛ぶあり。予之を指さして曰く、「かれ何者ぞや」と。熟視すれば、木の葉のおのづから沈み行くもの、太陽の光を受けて、のぼり來たるが如く見えしなり。時に一陣の山風、わが頭上の樹枝に吹きすさび、之に誘はれて散り行くもの、皆ひかりある蝶蝶の如し。燕あつてすくひ飛ぶ、また面白し。予再び曰く、『わが先導なくんば如何。』然り。茶を命じて、しばしこの景をたのしむ。給事する少女、また佳境の物たり。われに何あり。

物いへば煎茶汲む子も紅葉しぬ。

歸途、淸瀧川に添ひてのぼり、また槇の尾、栂の尾の紅葉を見たり。いづれも尙早くして、未だ茶屋の小屋がけを終らざる程なりき。且、風景なきにあらずと雖も、高雄に及ばざることは遠しとす。『右は栂の尾休み茶屋あり』と注意する札あるを見、予われに戯れて、之を下の句として、一首を詠ぜよとすすむ。すなはち、萬葉集中往々見るところの歌體を滑稽に崩して、次の如くよみ出しつ。

禁制の紅葉の枝を折りし手の、
　右は栂の尾休み茶屋あり。

再び高雄近道に出で、もとの途を某八幡の鳥居立てるところに至り、それより轉じて嵐山に向ふ。一條の新道、山林川野の間を過ぐるに從ひて進み、五臺山何々寺の門前を横ぎり、孫悟空の現はれさうな所なり、など語りつつ、例の渡月橋に來り、小督の墓所を弔ひて後、舟を桂川に浮ぶ。龍田姫の工夫、尙このところに違せずして、錦繡いまだわれらの面を照らさずと雖も、千鳥が淵の深きに臨みて、誰か浮世の秋を觀ぜざらん。情死を歌ふもの、必らず之を聯想する。宜なりといふべし。

桃青の句「花の山二町のぼれば大悲閣」の碑あるかたはら、嵐峽館あり。是に登りて、予と相酌む。遠く俗事の係累を離れて、翌日の勤務あるを忘るるものの如し。嗚呼、われに盛春の時代ありき。又、失望の世ありき。今や、これ、過去の空想に纏々たるを止めて、晩秋の決心を現じ來らんと

す。人心、地氣、しかく相合するをたのしむのみ。夕暮に至つて、花園村に着す。
　子やこの霜月を以て東都に歸らんとす。今一度わが琵琶湖畔を訪ひ來り、孤舟を浮べて、別杯を汲みかわさんことを約して歸る。

永源寺遊記

　永源寺は江州に於て觀楓第一の勝地と聽き、十一月八日、彥根愛知川等へ行きし途次、道を轉じて之に向ふ。八日市より車を賃し、東に走ること三里、山上に至り、小石落々たる川を渡つて、高野村に着す。今年の霜氣は、如何にしけん、十日を遠み、時節既にその半ばを過ぎたり。
　夕暮のおもかげ、尙もみぢ葉の色に照りて、山徑に赤子のたなごころを散り分ける上を踏み分け、大歇橋を越え、羅漢坂を登りて、この古刹に達す。山門を入れば、直に古色悽然たる鐘樓の建てるあり。左に添ひて、監寺寮紀綱寮、本堂等の棟落入り違ひて延長せるところ、淸き幔幕を張りつらねて、結構最も壯嚴なり。庭前こと更らに落葉を拂はで、却て錦繡のむしろを敷けるかと疑はる。房に就て、一夜の宿を乞ひ、一僧に導かれて、本堂の傍らなる閑堂に入りつ。
　瑞石山永源寺は、臨濟家一派獨立の本山にして、現管長を久松琢宗といふ。入浴食事の後、刺を通じて、謁を同師に乞ふ。「今晩は疲勞し居れば、明朝にいたしたし」と傳へ來りぬ。卽ち、弟子僧一二

と參禪の事を語り、彼等の去りし後、借り置きし『寂室錄』を開きて、之を閱す。同書は當寺の開山、圓應禪師寂室和尙の作なり。味ふに足るべき詩句少しとせず。偶作と題して、

即心即佛鏡裏像　非心非佛火中氷
雨過雲間倚欄眺　遠山無數碧層々

とあり。よくその頓悟の境をあらはし得たり。その『水車』を歌ふを見るに、曰く、

奔流光裏機關立　便轉曹溪大法輪
器々相傳無異味　群生一洗渴心塵

是れ佛者のおのづから喚起する想像なるべし。禪師、兩手をころもの袖に結び、悠々として田畝の間を過ぎ行く姿、わが目前に現はるるが如し。

又、夢中に兩句を得、覺めて之を續けし詩あり。

人生倏忽同霹電　計較何曾徒白睛
萬事隨緣胡亂過　飽餐白飯看靑山

之を最初の詩に比ぶるに、つまりは同意味なるが如しと雖も、『飽まで白飯を餐して靑山を看る』の句、氣味淡白、而も無限の妙趣ありといふべし。人をして一種の幽境を觀ぜしむ。梁川星巖之に和せしものあり、曰く。

人生露電鬢毛斑　尙在勞々擾々間
可羨阿師無繫累　飽饕白飯看靑山

翌朝早起、寺僧の朝の勤めに忽はしき頃、ひとり庭前に出でて、境内を徘徊するに、わが昨夜宿せし本堂は、世繼觀音を安置せる所なり。次に淸涼殿あり。即ち坐禪するところとす。開山塔あり。標月亭あり。後苑に入れば、靑苔深きところ、『甘露水』と札うてるあり。芭蕉の藪蔭にありて、僧侶の之を汲めるに遇ふ。之に道を問うて、裏門を過ぎ、古樹鬱々たる間に通ずる一條の難路をたどり、枯葉細石相重れる上をすべりつつ、進むこと數丁。眼界開けて、兩岸相せまみゆる翠流のほとりに出づ。一方の巖上に立つて、左右の山々を見渡せば、見ゆる限りは錦雲靉靆。その燃ゆるが如きは、忠誠の人の腹わたを列ねたるに似たり。

それより舟にさを指して、早き流れを下る。音無川は即ち愛知川の上流なり。奇巖妙石兩岸を疊み、古色、霜錦を冠して、曲淵に臨むところ、仰ぎ見れば、高野山腹、翠紅相交はれる間より、永源寺の樓閣突兀として隱見するあり。われ、先きに高雄の幽谷を眼下に望み、今や高野の絶景を水上に望む。孰れも劣らぬ佳境に、かかる虛寂の場を開らきし人の心事、豈ゆかしからずと云はんや。

再び山に登りて、朝飯を喫し、寺僧に伴はれて、含空院を見る。開山禪師示寂の跡にして、管長の住するところなり。川を隔てて飯高山と相對す。飯を盛れるが如く高きを以て、この名あり。永源寺

はもとこの山にありしを、當方に移せしものにして、當方を高野山と稱し、讃岐の金毘羅象頭山に似たるの故を以て、象尾山と名づくる由、苑あり。此苑中。一小池あり、功德沼といふ。

暫くして管長出で來る。年齡既に六十五六、柔和なること、一見比丘尼の如し。而してその應答の無邪氣なる、恰も小兒に似たり。われ、禪に於て主眼とするところのものは何ぞやと、尋ねしに、「まア、ありませんな」と答へられたり。一たび話頭を轉じて、また同じ問題に立ち歸り、「然らばそれが主眼ならずや」と問ひ返へせば、「成程左樣なり」とうなづかれたり。その惇々として激せず、迫らざるところ、以て一個の智識たるを證するに足る。ただ恨む、わがいふところ屢々通ぜず、彼れの語るところまた獨斷に過ぐるあるを。

何んとなく寺なつかしくして、立ち去るに忍びざりしが、閑散の身にあらざれば、再會を期して師と相別れ、一僧におくられて山を下りぬ。みちみち一首を得たれば、ここに掲げて、この記を結ばん。

青雲の白き飯をば嚼みしめて、
紅葉の色にうつり行くかな。

坂本の紅葉を見る

（妻の作より）

十一月十一日、いつもの婦人會を、坂本芙蓉園に於て催すこととなりぬ。坂本は、わが住ひより、殆ど二里ありと聽く。時節がら、名にしおふ紅葉見んとて、前々よりの樂しさ云はん方なし。この日の朝、目覺れば、いづこの空もかき曇りて、雨模樣なり。やがて、天の岩戸より、日の御神をあらはし玉ふかと、待ちに待ちて、家を出づべき時近づきぬるに、晴るるにあらで、さはれや、雨ふり出でぬ。是非なしとつぶやきつつ、小供を膝にのせ、車を馳せて、さる貴婦人方を訪ひまゐらせ、夫より、四五の車夫の、われ負けじと走るもをかし。雨は遠慮なく、ふり來り、われらの樂しみも失せなん程になりぬ。

名高き唐崎の松を過ぐる時、いづれも一見せばやと、車を下り給ひぬ。身づからも、伴はれて、その廣くはびこる枝を見まわりぬ。實に聞きしにまさる、大なる松にて、如何にして、かくもふとり、かくも延びつつ生ふるかと、驚かれつ。ここに腰折れ一つ物せしあり。

かくまでに廣がる、松のもと問へば、
おなじ綠の二葉なるらん。

再び車に乘りて、進むこと半道ばかりにして、牛を引きつつ來る、農夫に出會ひぬ。この處は細き一筋道なれど、右には湖水見え、左には青き松、紅葉づる木々、山また山の袖を引くあり。はらはらと、道のべに散るもみぢ葉に、あとつけつつ行くぞ樂しき。早やつきぬとて、車を出で、延暦寺のふ

もとなる、芙蓉園に入りぬ。おやみなく降る雨は、日園の紅葉に却て色を添ふ。設けの席につきて、四方の景色を眺むれば、浮世の外と思はれて、心も清くなりすまし、塵に染まらで、かかるところに住まば、いかにゆかしからんと、思ひつづけぬ。ふと、向ひの山を見れば、あやしく立ちのぼる煙ありければ、何となく心動きて。

　秋ふけて、木々のもみづる山の端に、
　　行へも知らぬ煙たちけり。

小やみの際を見て、外に出で、山のふもとを散歩す。大なる杉の木、並み立てる間より、日吉神社の赤き門見えて、いと神々しきところなり。小き流のほとりには、掛け茶屋もありて、紅葉の一葉、二葉、風につれて、舞ひ下り、流るる水に入りて、運び去らるるも一興なり。苔むせる橋、三つかかり居れば、ここを三橋といふとぞ。

あかぬ眺めに時うつりけん。園に歸れば、いづれも坐を立たせ玉ふ。吾れも立ちたれど、尚、よき景色に袖ひかれて、歸りを惜しみ、小高きところに上りて、見おろしけるに、その美くしさ云はん方なし。また一つ試みつ。

　錦をば織るとぞききし立田姫、
　　いつ染めにけん木々の梢を。

行しも、濡れて赤く紅葉の落ち来りければ、

錦なす木の下蔭に来て見れば、
露にぬれつつ散る紅葉かな。

つれ行きし車夫の一枝をり来りて、さも誇りがに、車にさしつるもをかし。ここを立ちしは、午後四時頃なり。家につきて、思のままをつづりぬ。

戀の隱者

嗚呼、三井寺三千坊、これ同じ天台宗の比叡山に對抗して、いで来りしもの。今や、その殷富の衰微と等しく、殆ど見るかげもなくなりたり。高觀音のふもとよりして、長等山麓一面に、並み立てる寺院は、その跡の尋ぬべきもなく。たまたま、朽ち果てたる門ばかり殘るがあれど、さて何院にして、何人の住せしかを窮むべからず。森林深きところ、宏大なる圓滿院あり。宮様のいますところなれど、一時は滋賀縣廳の事務を執るにまかしたりき。如何に全山を維持し行くか知らずと雖も、高觀音並に三井寺本堂にあがる賽錢の外には、辨慶の釣鐘を以て、第一の寶と稱するものの如し。秋宵、撞き出だす鐘の音の、湖上を渡つて、皓々たる月にひびき行く頃ほひには、その身ならぬ吾れらと雖も、胸に憂ひの雲を浮べずと云はんや。

われ、人の爲めに案内者たらんか。先づ長等神社の鳥居を入り、右なる石段に達す。石段は厄年の數に合はして、三段に分れ、一段を登る毎に、湖水の湖面に出づるなり。のぼり詰むれば、本堂あり。それより更らに登れば、十年戰爭の記念碑の建てるあり。本堂の左を下り行き、圓滿院の裏を過ぎ、五六丁を歩めば、金堂あり。その前に三個の石燈籠の異形に並び立てるは、この時代の古きを證するに足る。中央の下には、天智天皇の紅さし指を葬むるの由。辨慶の釣鐘は、その右手にあり。かたはらに一家を構へて「辨慶の力餅」を賣る者あり。若し三井寺の正門より入らんと欲せば、淸水のほとりに添ひて登り來るべし。

釣鐘と三重塔の建てる間に小徑あり。之をのぼること數丁の奧に、善法院といふがありて、庭小なれども、いと淸潔にして、紅葉甚だよろしきところなり。わが友、一日之を見に行きしが、初めてなれば、その所在を知らず。手前なる一寺の門に入りて、之を尋ねんとせしに、寺の如きものもなし。たゞ竹を以て周圍をつづり、藁と薦をその上に葺ける小屋のみありて、一老翁の住めるを見、院名を呼んで之に問へば、これ白き口ひげをひねりつつ、「もう少し上だ」と答へ、「ここも昔はよかつたが」とばかり、からからと、うち笑へるさま、如何にも物凄かりしとて、走り出でたりと聴きつ。われ、次の日、ここに來れり。

善法院は、なかなか世を離れて、閑靜なるところなり。その番人の老人に就て、このあたりに、長

き白髯の生へたる翁の住み居らぬかと問へど、「その樣な人は知らず」と答ふ。われ等の爲め、その歸り途なる一門に入れば、果して一翁の燃木を折れるを見たり。煙草の火を借るまねして、之に近づきつ。家といふ家にはあらねど、雨露を凌ぐに足る茅屋のうちには、大根をつける樽の如きもの、箱、古つづら、瀨戶物等をつみ重ねたり。竈も備り居れど、使用せしあとなし。一隅に、たたみ二疊敷程の床を張り、その上に寢床を敷きありて、いつも之をあげしことなきに似たり。跡にて人の話を聽くに、ゆきひらにて煮きし飯粒は、飯櫃の裏にこびり付けど、之を洗ふこともせずに、そのまま用ひ居る由。主人はこの頃リヨウマチに罹り、起居不自由なる樣なれど、食事の支度などには、身づから出でて働らかざるを得ざる身なり。杖にすがりて、水を汲みに出づるなり。之と語るも、應答に苦しさうなり。「僧なりしや」と問へば、「然らず」と答ふ。「子ありや。」「無し。」

卷煙草數本を與へて、之を親み、その是までの來歷を聞かんとすれども、「別に云ふ程のことなし」といふのみ。五拾年前、山に入りしが、そは尙園城寺の盛なる時なり。今の營所のある所も、一面に寺つづきにて、彼が住する近所も、すべて建物存在し、今日の如く、寺門のみ殘るが如き、あはれなる有樣ではなかりしなり。彼が住所も、立派なる建物ありしが、持ち切れぬ爲めに、賣り拂ひしなり。彼はその以前より茲にあり、寺のうち破はされて、住職の他に去りし後は、この小屋を建てて住むこととなりしたり。種々の道具も、この時よりつみ重ねたままならんか。金堂の前なる、天智天皇

ぺにさし指の話も、彼ならでは、世間之を知るもの少しといふ。性、植木を好むを以て、院のつぶれし跡には、多くの樹木を植ゑたり。見れば、寒梅あり、冬至梅あり。十一月の末つかた、花開き居れり。たまたま彼を知る者あれば、來たつて、之を買ひ行くもあり。

既に五十年の月日を送つて、獨り玆に住ふ。故なしとせんや。問ひたださんとすれども、かれ差しとめて、云はず。

古老の話に依れば、昔、大津の町はづれ、名を尾花川と稱する所に、一人の青年あり。隣家の娘を戀して、遂に之と婚儀を結びしが、その儀式を擧げし翌朝、色うすらぎし月の光の、いまだ草の露を照らせる頃、おのが新婦はみどりの髮をふり亂して、裏庭の入口に立てるを見、何と思ひけん、家を立ち出でて、再び歸り來らずなれりと聽く。その年月を引き合はせても、この隱者に必らずかの青年なりと知らる。ただ何人も之をつきとめたるにあらず。さりとては、如何なる理由ありて、斯も世をすねたりけん。その小屋の入口に一首の歌を書きて——而も、かのかみ下げ虫を眞似するものの如く、さかしまに張りつけあり。いづれ婦人の浮薄を恨みて、三井寺の孤寂に安んずる心ならんか。その歌に曰く、

浮草の一葉なりとも、磯がくれ
　　こころかくるな、沖津白浪。

砂防工事を觀る

十月二十六日、友人數名と共に、三上山の砂防工事を觀に行けり。某技師、われらの案內者たり。午前八時、紺屋ケ關より汽船に乘り、一時間餘にして、赤の井といふところに着し、それより徒歩、殆ど二里、三上村に至る。

御上神社は天之御影命を祭るところなり。此神社に關する古事記的考證は、種々これありと雖とも、管々しければ、ここに省きつ。技師の熱心なる說明により、現今建て直しつつある神社の圖を見て、今日の建築法と異なる。レヂアスシスチムと稱する法式あるを知れり。幾多の梁、家の棟木より、光線の發射する如く出でて、その形づくる家根は、重き鎖を引ける如く傾斜するなり。樓門に、桝形の相重なり、その食ひ合ふところも、別の材を使はずして、同じ木を刻むなり。搏風も亦、古き模形なりといふ。比叡山、淨土院のあたりにも、之と同じ古風の搏風を有する建物ありしと覺ゆ。この神社を崩せし時出でし、棟木を支ふる梲（つか）に、弘安二年何月何日と記しあり。本殿の石燈籠には、建武の年號を刻せり。この建築物の古きこと、推して知るべし。この度の改築にも、全く元の法式に從ひて爲す由なり。

このあたりの小學校に憩ひて、中食をすませ、それより三上山の西をめぐりて、目的地に向ふ。大

山川の川上に至れば、その水源を去ること遠からざるところに於て、土手を築き、幅五六拾間の流をせき止め、水はよどみて一大池をなせり。故は、このあたりの山々、草木殆ど無く、僅かに泥質を含まざる岩石は、崩るゝまゝにまかし、雨につれ、風につけ、土砂を流すこと甚しきを以てなり。見渡せば、一面の砂原、茫漠たる沙漠に似て。数へつくせぬ豊砂地は、山々の頂までも連なれり。騎兵の演習には、大に適當なるを以て、伏見より來ること、まゝこれありといふ。

近江の境、いにしへ天台宗の寺院多く、叡山に於て金銭の入用を感ずる度毎に、その寺内の樹木を濫伐し、総にはところどころに生へ殘るをも、そのまゝにはして置かぬ有様に立ち至らしたり。この處に菩提寺といふを見ても、その昔、思ひやらるるなり。

世に『ハゲ山』といひ、『兀々たる山巓』など、形容することあれど、かかる状態は、想像にだも思ひ浮ぶること能はざらん。而してその結果たるや、大雨に會へば、水、忽ち下流の田地にあふれ、人その住所を失ふに至るなり。われ先づ之に驚いて、この一小沙漠を橫ぎりしが、之より何候留たるところありと、技師の云ふに導かれ、一ト谷越えて、家の棟川の水源に出づ。この川、土砂を流すこと甚しく、下流なる祇王の隧道を掘りし時、地下二十五尺のところより、寛永通寶を出せしを見ても、僅々二百四五拾年の間に、その川床、二丈有半を高めしなり。ここも亦、山と砂漠との界限を失ひ、一滴の水をも見るべからざれども、小松ところどころに生へて、あらき濱べの景に似たり。明治

二三年頃には、この原、全く樹木のかげをうつさず、その一方より他方を見渡し得る程なりしが、十八年、伐木を禁じてより、漸くこれ丈の短き樹木を得るに至りしとか。

樹木も平地には生じ易けれど、はげ盡したる山嶺、而もみかげ石の雨露に風化し、ぼろぼろと崩れ來るところには、到底尋常の手段にて植ゑつけらるるものにあらず。即ち山面を刻みて、段階をつくり、一段毎に先づ、芝草を以て之を疊み、時期を見て木を植ゑつくるなり。始めは直に松を以てせしかど、その地質肥料を含まざる爲め、三四年目よりその勢力を失ひ、ただひよろひよろと延び行くばかりなるを發見し、近頃は、榿の木を以て之に更へたり。此木は近江の特產にて、如何に荒蕪の地なりとも、成長至つて速きものなれば、その落葉に朽ちて、地を肥すを待ち、松を植ゑるをよしとす。榿の木を俗に『ハゲシバリ』といふ。之を以て山のハゲルをとどむればなり。

この工事たる、實に遠大の事業なり。明治十六七年頃より始り、今後幾年を經て成功すべきか、豫め知るべからざるなり。その範圍に於ても、以上二ケ處の外に、大度川、日野川、犬上川、愛知川、の支流等、十指を以て數ふべからず。之が爲めに費すところ、毎年四五萬圓にのぼらんとす。且、往傷者を出すこと、年に五六拾名ありといふ。

劍ケ峰と稱するところを望めば、全山恰も米穀を積み上げたるが如く、仰いで高しと雖ども、一木の見るべきなし。風に碎け、雨に流れ。谷々皆露出して、登るに道なきを如何にせん。慣れたる工夫

は、土を削りて、人の足場ばかりを、山より山の脊につらぬることありと雖ども、ここに至つては、如何とも手のつけ所なかるべし。よし、いづれよりか傳ひ行きて、その頂上に立つとも、兩足の下なる土、次第に崩れ落ちて、その立ち場を定むること難し。一工夫の大膽なるが、曾て之に登りしも、その足左右にすべりて、土と共にささふること能はず。山の脊に馬のりになりしまま、動き得ざりしことありといふ。

かかる危険の境にも、幾多の同胞は小屋を構へ、終日營々として、その業をつづけ居るなり。崩づるるを刻み、刻むを平らげ、段又段、櫨の木、桑の木の並み立てるを望めば、無人の山上に、青々なる稲田を耕しあるに似たり。嗚呼これ何の爲ぞや。人力を以て山林を造り、手足に依つて大洪水を防がんとするなり。自然に對する人智も亦盛なるかな。

歸途、再び家の棟川に下り、砂原を傳ひて、妙光寺山の東北に出づ。土俗、三上山を雄山と稱し、この山を雌山と呼ぶ。共に古來の社林なりしを以て、伐木を禁ぜられ、ここにかりは、寒中にも、春のころもを着ることとなし。叡山と相對して、湖の東西に於ける、禁伐林の名蹟なりとす。

月夜石山に遊ぶ

野州より汽車に乘り、藏王の隧道を過ぐる頃、益々わが砂防工事の記憶を深くしたり。

三十二年十一月、地球流星の軌道を通過する頃、恰も好し、滿月の夜なり。舟を湖上に浮べて、赤壁の昔を思ふこと頻りなり。青空一點の雲をとどめず、團々たる月は、比叡の上に浮んで、東方の天殆どその際限を辨ぜず。密雲斜に横つて、羅綾の衣幅を織り成すところ、一條の雲脚を劃して、百丈數十丈に渡れる餘は、恰もわが極樂淨土に達する階梯かと疑はる。客未だ清興を盡さず、汽車の汽笛遠く西山を掠めて、一層淸淨を傳へぬ。

たまたま、わが雇ひし舟頭の、勢多に歸るものなるを知り、直に船首を轉じて、勢多川に向ふ。一葉の輕き、滿々たる流光を下ることすみやかなり。唐橋を過ぐる時、道行の一騎兵、蹄の音高くその上を進み行くを見る。即ち、そのかみ、武士の、徵發、たむろする有樣を思ひ出されて。

　騎馬武者の手綱ひかゆる橋の月。

石山のふもとに達するや、舟をそのほとりに繋ぎ置きて、山門を入る。われここに來ること數回に及べども、未だ曾てこの遊を爲さざるなり。天狗のいちだうとして直立繁茂せる傍の石楠によりて、本堂なる紫式部の窓前に出で、三十八社、經藏等を過ぎて、寶塔のところに至るや、半ば過ぎたる一株の楓樹、枝を延ばして、相重なること幾又段、月光を受けて、白きこと櫻花の如し。

月見亭は名のみにて、眞の客ある時、留守なるもをかしからずや。即ち、片よせたる床机に腰して、暫くここに古人の愛せし風景を樂む。霜氣寒からざるに非らず。而も蕭條としてかすかにその頭

角を現ずる、三上山と相對して、冷中一種の温暖を得たり、いにしへ去來、丈草の徒、ここに來つて俳諧の眞體を議せしことあり。われまた誰と共にか風流を語らん、四隣かげ寂しくして、心中また萬念の往復をとどむるを感じ、林間の鐘樓に下り行いて、暗中に垂下せる綱を採り、一つき撞いて之を放てば、その音雲輪に引いて明鏡のあたりに響き行くを覺へぬ。嗚呼、當年の源氏作者、今いづくに在る。歳月匆々、人老い易し。蕉門弟子が「風流の奴」といふもの、豈、故なしとせんや。詩人別に一天地なかるべからざるなり。

歸途、一句を案じて、以て紫式部が靈を慰む。曰く、

月のうちにありと申さん源氏の間。

竹生島詣

（とはわが妻の作なり）

わが住ひは琵琶湖畔にありて、月の澄む夜、二階より眺むる景色もよろし。つれづれの物語に、竹生島の月こそ見ものなれ、行かずやと。良人の云はるるに、もとより月花を好む身とて、いとよろこび、明日行かんと答へぬ。行くと云う心うれしく、その夜をいねがてに明しけり。朝まだきより、支度を整ふるなど、小供もつ身のなかなかにせわし。大津より、竹生島まで、十七里半ありとぞ聞く、車

を馳せて、太湖汽船會社に至り、船にうつりぬ。
日は西に沒し、點火の頃、漸く竹生島に達す。夫婦の道者も同行なりし。二丈餘の石段を登り、僧の一寺を訪ひけるに、一人の僧いで來る。之に伴はれて、一室に入り、湖上に眺めて、湧き出づる念は、俗を離れて潔くなりたり。竹生島を見てものせしあり。

いつの世に浮び出でけん竹生島、
　住みぬる人を心して見ん。

折しも鐘を撞きて、

めぐる世の秋は寂しきものなるに、
　いとど身にしむ入相のかね。

やがて茶を出し、夕飯をもちいづる、皆、僧なり。又この人々のことを思ひて、

墨染の袖にあはれを忍びつつ、
　浮世を淸くすむぞゆかしき。

しばし休みて後、月のよく見ゆるところを尋ねしに、なほ二丈あまり高き堂こそよけれと答ふ。さらばとて、伴はれ、已月館（みつき）に登りぬ。
建物、前のより立派に、飾りの品も見るものあり。一層こころ落ちつきけり。昨夜はもの忙しきち

またにありて、今宵は斯るところに來ぬ。人生の變化も亦、かくやあらんかと思ひつゞく。一僧又來りて、茶菓を饗す。よも山の話に時をうつし、十時となりぬ。僧辭し去りて後、恰も月よろしからんと、そのいづる方の窓をひらきしに、生憎、空少しく曇りて、樂に樂みし月は見えず。實に心殘りにこそ。玆に思をもらして、

竹生島、月は今宵と來しものを、

つれなくかげを隱す浮雲。

短きねむりに目覺むれば、早や夜明けんとして、僧のつとめをなす聲きこゆ。

御法をばたたゆる聲に目さむれば、

ほのぼの明くるあかつきの空。

食事をすましして後、直に、いや高き處をも見ばやと、登ることまた二丈餘にして、辨財天あり。西國三拾番の札所、嚴金山、寶珠寶嚴寺の本尊なり。少しく降り　、觀音堂あり。又降りて、海に突き出づるところ、都久夫須麻神社の拜殿あり。そこの水際に立てる岩の上に、天武天皇供養の塔あり。玆にて湖上を眺めしに、見ゆるものは水と山、聞ゆるものは岸うつ波の音のみ。何となく、こころ細し。ここにて、また、

竹生島、高きに登り、眺むれば、

岸うつ波の音のみぞする。

此島に、昔、數十箇寺ありしが、減じて十五寺となり、また減じて、今は只きのふ見しばかり殘るとぞ。島は南の方に開らけ、入口には小さき港様の風よけ場あり。周圍凡そ二十丁なり。この島に、樹木は多けれど、松は生えず。アカベといふ木、最も盛に茂り居たり。夏は南風、冬は北風を常とする由。鳥類は別に異なるものなく、川せみ、烏、鵜の鳥等を見受けたり。

もと來し路をたどり、宿りし宿に歸る。汽船の來たるまでには、時いまだあれば、島めぐりせんと、船頭を呼び、風如何にと問ひしに、よろしと答へぬ。さらばとて、直に小舟にて乘りいづれば、風なかなかありて、波の舟をうつこと甚し。島の西に、役の行者が百日の業を積みし岩屋あり。至るところ、倒り立てたる如き岩ばかりにて、舟を漕ぎよするところもなし。屏風岩、八丈岩、南浦岩、大巣岩、小島等を見る。進む程、波おそろしく、身も倒れん程なり。おそろしと思へる心を。

竹生島めぐる小舟にうち寄する、
　波はわが身をくだくとぞ思ふ。

舟に居ること、大凡三十分間。一めぐりして、汽船の來るを待つ。間もなく來りければ、のりうつりぬ。此島は、殆ど一家族とも見ゆる十四五人の住處にして、寺と堂とを見るのみ。從つて、住む人の心は、他に住む人の心に比すれば、清きかげの宿りなるべし。實に一つの靈地とぞ思ふ。

新平民部落

昔には、路傍に立て食物を乞ふ、貧民あるを知つて、新平民たるものの大に憫むべき地位にあるを思はざる者少し。彼等と雖ども、單に肉を屠り、皮を剝ぐの動物には非らざるなり。吾人と同じく妻子あり、吾人と等く情愛を解し得る民なり。よし、その歷史に汚點あり、その職業に卑むべきところありとするも、之が爲めに、毫も、その始を異にせざる人類を疎んずるの要なし。況や明治四年以來、穢多非人等の稱を廢せしに於ておや。之を「ゑた」と賤め、「皮太」と卑し、甚しきに至つては、癩病患者と同視して、『かたゐ』と呼ぶ者あるは、何事ぞや。

社會が之を日常疎外するの習慣の久しき、彼等身づからも之を當然の事と思ひ、他と交際するを恐れて、之を避くるを常とし、たま〳〵人の家を訪ふも、主人の許可なくして、しきゐを越ゆることを爲さざる風あり。たとへば、大阪府下渡邊村の如き、富める者甚だ多く、本願寺の金穴と稱せられ、一宗の信徒にも、其金の阿彌陀像を作るところありと云へど、身づから卑下謙讓するは、他の部落と異なることなし。彼等の言語に一種のなまりありて、一見直に他の人々と區別し得るなり。たとへば、例底をツブルと發音することを常にす、幾度敎へても、ツブレとなる。教師、根建て、放言して曰く、彼等は人間以下の動物なりと。渠等身づからも亦、皆におのれを以て人外とあきらめ居ると雖ども、其

而之を嶶はんとして、却てその愚を重ぬることゝあり。或部落にては、ヒモシと發音す（これ、東京人に似たり）。然れども、渠等の子女に向つて、西方を指さし見よ。必らず答へて曰はん、ニヒなりと。東を指させば、すなはちヒガヒなりと。その甚しきに至つては「貴様の金玉はいくつありや」と問はれ、「矢張西方と同じように、一つあります」と答ふるなり。二個あるは、おのれ等のみにして、他等なればとて、之を隱くすつもりなり。嗚呼、これ卑下の極度にあらずや。これ皆、人間としての價値を敎へられず、敎へられざる爲めに、また之を知らざるに起因す。

われ思ふに、新平民部落、各縣にこれありと雖ども、同族の標本とも云ふべきは、滋賀縣下の小橋村と、南野村となり。此兩部落に住する者は、他の普通部落と異なりて、屠牛、草履工、セッタ直し等に從事せず。元來、一定の職業に堪へざるなり。遊惰、放蕩、人に乞ひ、賭に拾ふもの、倚怠にして、一村擧つて、盜を爲なさざるなしといふに至つては、驚き且あやしまざるを得んや。

南野村は、全村の地價五千五百圓、その半は人家の建てるところ。この小地面に、戸數五百、人口二千八百あり。先づ、何故に斯くも大なる群集を見るに至りしや。これ吾人の注意すべき問題なり。狹隘なる地には、米穀を產すること少く。番小屋の如き家屋の、道もなく、順序もなく、相前後して立ちならべるうちには、男女の住するもの、甚だ多し。若し他の社會の無情なる壓迫なかりせば、彼等は決して、かかる窮窟なる天地に蹐跼せざるべきか。おのが妻女も穢多と呼ばれ、おのが愛子も非

人と斥けらる。滿腔の憤慨は、曾てその骨髓に徹せしことありと雖ども、因襲の久しき、相抱いて號泣する氣力も失せ、饑ゑては食らひ、渇ゑては飮むばかりにも、一村の供給、その需要を充す能はず。懶情は性となりて、神聖なる勞働を厭ひ、生活の危機にのぞみて、始めて出でて、他村の捨て物を拾ひ、やがて人の隙を窺ふて、盜を爲すなり。

之に一定の職業を敎ふれば良きや。然り。嘗て南野に授産所を設け、簡單なる手仕事を覺えしめしことあり。然れども、彼等は組織的勞働の面倒なるを好まず、且その生活程度の低き、わらじ二三足を携へて市に出で、之を鬻ぎて數錢を得れば、それにて能く一日の食を滿すなり。又、若し他村の法事、婚禮等のある日には、その殘菜を乞ひ來り、ヒジキはヒジキ、昆布は昆布、それぞれ撰り分けて、おのが同志に賣り捌くといふ次第なれば、普通一般の考にては、到底如何とも爲し能はざらん。

這に敎育を盛にすべきか。然り。南野には、村民各一個のわらじを寄附し、その集金に依つて建設せし一寺院あり、正明寺といふ。その住職なる一若僧、敎師となりて、兒童を敎へ居れども、その者既に智識上の不具者なり。何ぞ他を導くに足らんや。小櫻村には、別に一小家屋の學校に使用せらるゝありと雖ども、先年、その卒業生の入るべき、高等小學の問題起り、その父兄等は、他村と同一の校舍に行かんことを主張せしかば、他村の人民擧つて之に反對し、兎角敎育に注意し來るものに、一頓挫を來せしことあり。かかる人民の敎育に、趣味と主張とを有せざるもの、如何に奔走すとも、無益な

るべし。

宗教に至ては、最も手近く斯る人民に應用すべき者なりと思はる。かかる人民に限り、おのが世の目に疎んぜらるるを慰めん爲めか、神佛を信仰する念、浮薄輕躁の人士と比べて、村舍に於ては、實に言へる淺海村の狀態に見ても、推し得らるべく、又、生命とたれるわらじの寄附に依つて出來せし、寺院あるを以て察するを得べし。小櫻、南野の兩村、共に本願寺派の寺院を有すれども、その格式低き爲めに、住僧、來るなきを恨みとす。大學の講師某、嘗て南野に來り、同村の事情を取り調らべて、一小冊子を作られしことあるが、その節の話に、救世軍の如き、特別なる傳道に依り、彼等の心靈を動かさば、或は成功するあらんかとあり。われもその說を讃し、その筋の人に勸めしこともあり。

職業に一定せず、教育は行はれず、宗教心ありと雖ども、之を導くものなし。而も世にありて、世と遠ざけられ、人の樂を見るも、之を分つ能はざるの悲境に在るもの、ひがみ根性を釀すの結果、自暴自棄に落ち入り、遂に破廉恥となる、故なしと云はんや。長濱附近に於て竊盜犯ありとせば、必らず手を小櫻村にまわし、十中八九は、そこに其犯人を捕へ得る有樣なれど、郡長警察等、之に對するこ と、恰も下等動物をしかるが如き風あるは、甚だよろしからず。彼等も有情の人、情を以て之に接すれば、感ぜざるにあらず。或警官の之が救助に意ある者、彼等の部落に至れば、必らず彼等と共に酒を酌みかはし、彼等のおのが家に來るや、強て坐に延いて、之に酒を與へ、談笑の間、彼等も同じ人

間つき合を爲すべきものなるを知らしめたるに、彼等は大に喜び、その隔意なきを謝し居りしとぞ。

南野には、各人をして毎日一厘宛を醵集蓄積する法を定め、各人ゝ時の變に備へしめたり。始は大に面倒なりしが、後には、身づから之を、その掛りの役場へ、持ち來るものあるに至りしといふ。之に依て見るも、救濟策の望、充分これあり。ただ忍耐と誠實とは、最要の資本なり。おもむろに職業を授くべし。着々、教育を施すべし。然れども、その最も急とすべきは、身を彼等の群に投じ、彼等と共に生活し、彼等の暗憺たる心中に、友愛の何者たるを知らしめ、人情の最も深きところを解せしめ、人として何を爲すべきかを教ふること、是なり。

此根本的要領を提げて、此獻身的事業に當る者、只一人にてもあらば、彼等幾多の人靈や、實に幸福なるべきなり。萬事、此人によりて、始めて決せん。智あつて智を弄し、識あつて識に亡びんとする、現今一般の社會を濟度せんよりも、寧ろ、かかる偏境に於て、成功の容易き遺利を集めよ。別に博識多才の人を要せざるなり。われは青年宗教家に待つところ多し。

湖上の虹

十一月十一日、朝、起き出でて見れば、特に寒し。湖上を見渡せば、長き虹、いにしへの滋賀の都のあとに面ずる水面より立ちて、横ざまに長等の山を越えんとする勢あり。虹、山のふもとより立て

ば、その日は日和なれど、水よりなれば、今日は雨ならんと云ふものありき。果して九時前後より、少しく降り出しけるが、間もなく止みて好天氣となれり。その夕つかた、また虹あり、堅田のあたりに見ゆ。その幅甚だ廣くして、ただ水面近くにのみあらはれ、そのうちに白き蒸汽船の浮べるは、何とも云へぬ畫ごころなり。朝の場合にも、堅田と水濱との間より一隻、栗田郡山田あたりの一隻、共に帆かけ船の數々、北より、東より、虹のもとを目がけて、集り來らんとする有樣、如何にも自然のふところには、何か意味あるが如く覺えられつ。

その日、比良に降雪あり。翌朝に至り、雲の晴れ間より望めば、その全頂、眞白となり居るを見たり。

江州無名の勝地

八池の瀧は江州の一奇勝なり。一たび行て之を見ざるべからず。とは、わが友人の親切なる忠告なりき。一日閑を得て之に向ふ。比叡の山おろし早や寒くして、時は恰も秋の末つ方なり。大津より太湖汽船會社の船に乗り、勝野に至つて、一泊す。いにしへの香取浦は、即ちこのあたりを云ひし由。大溝候の城跡近きにあり。

翌朝十時頃、雨少しく降り出せしにも拘らず、知己二人を伴ひて發足す。岳山を左に、富坂山を正

面に見て、進むこと里餘。伊里村に至る。同村に、富坂山の大蛇を實見せし老女ありとは、一友の話なりき。山の麓を流るる鴨川は、即ち八池の下流なれば、之に添ひてのぼること一時間餘にして、鹿が淵といふ小村に達し、ここに案内者をやとふことを得たり。

右の山麓に黒谷と稱する一村落あり、左に岩じやり、穴尾の兩山を望みて進む。道漸く狹くして、森林の間に入り、傾斜の度いよいよいちじるしくなりぬ。歩は一歩より重く、息は息ごとに苦しくなるを覺へつ。或は茅茨の間を過ぎ、或は絶壁の中腹を横ぎり、溪流を渡り、巖石を越え、昇降幾回たるを知らず。胸中大に心臟の鼓動に堪へ難き頃は、直ぐわが前を進む案内者の兩足、殆どわが額と相接せんとす。

山徑のやや廣くなれる所に達したれば、ここに一服しつつ、四方を眺むるに、一大溪壑を隔てて、先きの岩じやり山、突兀としてわが眼前に聳え、全面恰も大鉞を以て掘り散らせしが如き姿を呈し、その山腹を離れて、かすかに浮べるものは、椀を伏せたるに似たる竹生島なり。この風景に力を得て、又足を運び出せしが、既にふとき棒を左右する心地したり。

暫くして、風にもあらず、とうとうとして耳に響き來たる聲あり。案内者呼んで曰く、『さア、來れり』と。一行ここに立ずみて、足下を見おろせば、枝葉枯落せる灌木の間より、青葉を湛ふるが如き一池の現はるるあり。之を魚どめの淵と云ふ。白絹を流すに似たる一瀑布の滝壺なり。之よりうへへ

は牛魚ののぼるを得ざるを以て、この名ありとぞ。われ寫眞機を携へ行きしかど、あまり深き淵なるために、之をうつし取る能はざりき。

抑も八池の瀧は、畑谷の上にありて、そのある所を八池山といふ。八池とは、瀧の幾段にも分れて落つるところ、八の淵を爲せるによりて名づけしなり。古來この淵の深さを知るものなしといひ傳ふ。各池の周圍は、石、苔を生じ、滑かなること天鵞絨の如し。釜池はその源を比良山のつづきなる武奈が岳に發し、二十餘丁にして、この大小の瀧となるなり。最も低きにあるものを魚どめ淵とす。

それより樹木の間を屈曲して、のぼり行くに從ひ、一池は一池よりも高くして、その奇を呈することといよいよ多し。峻嶮なる大岩は、わが前後左右をかこみて、開けるところはただ天上界のみ。障子が淵、唐戶淵、を過ぎて、大擂鉢と名づくるところに至れば、太鼓の如き圓形を爲して、落ち來たる水は、池中を循環して容易に流れざる樣、恰も無形の大擂こぎを以て、之を擂りつつあるに似たり。

次に小擂鉢あり、長淵あり。絹が淵に至つては、その瀧の高さ二丈餘、岩石その左右より狹く突出し來つて、腰部は少しくねぢれ居るを觀る。尤もその瀧壺へは下ることを得ざるなり。われ案內者をして、レンズをさへぎる樹枝をすべて切り去らしめ、わづかに良好の立ち場を得て、絕壁の上より之を寫し得たり。七遍返しは最後の瀑布なり。前者に對して之を大瀧といふ。その高さ三四丈、直射一寸の曲線をとどめず。堂々天に鳴り、地を動ずるの概あり。その中程の岩石には、古人の地藏尊を刻

めるありと雖も、ちいさければ、案内者の指示により、漸くそれと見らるゝ位のみ。

ここに道きわまりて、進む能はざれども、若し迂回してその絶頂にいづれば、二箇岩あり。土人の言によれば、この岩に雲かかる時は、必らず雨ふるといふ。わが一行はここに至らずして、歸途につきぬ。寫眞に取りしは七寶返し、絹六瀾、大摺鉢の三ケ所なり。いひ傳へによれば、昔し百貫目程の大石、この池中に落ち來りしも、その水勢の盛んなる、難なく之を押し出でしけり。今は知らん。その池底のぬるぬるとして滑かなる、何物もこの水力には抵抗し能はざるべし。

初めてこの奇勝を發見せしは梁川星巖なり。もとより閑客佳人の境にありて、世人の之を知るもの少しと雖も、二三年前より、京都の新聞紙の之を紹介すること頻りなるを以て、夏になれば、同地のわかき畫家の三々伍々、隊を爲して來るものあるよし。冬は雪、その全溪に滿ちて、いのしし、その上を渡るに見しといふ。われはただその、避地にあるを惜むのみ。讀者若し叡山の僧侶に問はば、かれ必らず答へて云はん、「八池は則ち靈境なり」と。

歸途、案内者の語により、大溝にめぐらずして、直に小松に出づる路あるを知る。このところは大津よりの舊道にあたり、大溝より一つ手前の驛つき場なり。昨、船中より之を望み、はじめて、人の賞讃して、天の橋立に譬ふる小松崎なるを知り、間を得ば、またよりて遊ばんと思ひし所なれば、これを幸に、案内者と約を改め、同行二人と相わかれ、道を轉じて寒風峠に向ふ。若じつり山のふもとを行

くなりけり。先きにわが一行が八泡の山腹にいこへるところは、渓谷のあなたにあらはれて、白く禿けたるは、早や雪のつもりしかと見ゆ。ぜんまい岩と稱する巖壁のほとりをのぼるに從ひ、わがめざせる遙かに、武奈が嶽はその頭角を雨雲の間にあらはし、われをして風雨の憂なきおそれなきを喜ばしめぬ。

寒風峠を越ゆれば、また一の峠あり。俗に之をのぞきといふ。琵琶湖全面を眼下に見おろすを以て、この名あり。時ゆふぐれに近けれども、白色の月未だいづくを照らすともなく、遠く見ゆる比良、堅田の出崎は、延長、野州の出崎と相接せんとする勢あり。竹生島、多景島、沖の島等、大小の島嶼一々之を指點するを得べし。小松の濱は彎曲、一小內湖を抱きて、われに呼ぶに似たり。

この山路は、夜に入りて、狼の出づることままうあるにより、案內者は遲くならぬうちに引き返す約束なりければ、われひとり重き足を引いて峻坂を下ること遠かなり。左の山に氣をつけて行かば、又一の瀧を見んとは、かれと別るる時承知したるところなれど、ただわが右にあたりて、涓々たる谷川の音を聞くのみ。或は岩が根を渡り、或は木の根をよぢ、滑べるが如く、走るが如く、つづら折を下ること數十分。ふみとどまつて、一息つけば、忽ち又とうとうの響、わが心耳に徹するあり。暫くにして、一條の瀑布、雙峯巍々たる間より、その頭部丈餘を現じたり。これ即ち、摩耶山布引の瀧に譬へらるる山桃の瀧なり。

突出せる巖頭に立つて、之を熟視するに、幅三間もあらんかと思はるる水、數十條の小流に分、立板の如き斷崖を下る勢の、幾多の岩角に觸れて、奇觀をあらはすところ、恰もふときつららの、數に直下するかと疑はる。その物すごきこと、云はん方なし。少しく恐怖の念をいだいて、險を冒して二三すれば、この瀧の高さ更らに丈餘を加へ、尙且その末を見ざるなり。再び下ること數十間、右方の谷川せまり來りて、瀧の末流を受くるところ、短き石橋をわたせるあり。われその上に來つて、屏風の如き岩かげをうかがはんとすれども、雜木深くして、足を入るるにところなし。見えざる水聲、山間に谺きて、そのしぶきのわが額を打つに驚き、雨かと疑はれて、天を仰げば、舊十月十一日の月、やや青き光を放ち來る。ああ、われは山神の威に逐はれて、夕暮の崖に沈み行くの觀を生じたりき。

うす暗き松林の間を過ぎて、わがかうべをめぐらせば、瀧をさしはさめる水谷の兩岸、ただその岩頂を突き出して、われを嘲けるものの如し。進むに從つてたき茶小屋あり、水車あり、ちいさき神社ありて、漸く人の聲に接せしこころほひは、旣に午後六時過。北小松村より道を轉じて、南に向へば、わがかげ法師短く地上にうつりて、わが行く手を導くに似たり。みちみち出會ふ人に就て之を聞けば、山桃の瀧には、天文の頃、足利義晴、三條關白晴良と共にここに遊べる時、當時の名づけしもの——則ち楊梅瀧にして、雄瀧雌瀧の二に分れ居れども、湖上に浮んで之を望めば、ただ一條の白布をかけたるにさも似たりといふ。

月光を踏んで進むこと里餘、南小松の村に至る。それより細き小徑に入り、行くこと二十丁にして、忽白くしてわが足にのぼる湖邊に出づ。則ち小松の濱なり。幅三四間、廣きところは七八間もあらん砂地は、陸地より引ける弓の如くその出でて、幾多の古松その上におひつらなれる間を過ぐる時、一個のともし火、戸外にもるる（漁家なりしならん）に逢ひ、案内して一やすみせんと思ひしに、うちに聲ありて曰く、「わたし場ならば、もう少し先き。ここには蛇が住んで居ります」と。蓋し前の漁守たりしならん。又數十歩を運ぶに、二三艘の小舟をつなげるところ、わたし場の休憩所あり。我意の一たるには未だ早し。腰をやすめて、暫くここに一服す。

わたし守の注意を受けて、わがひたひをなで見れば、——豈謀らんや——われは山路の泥塵を顏ににいただけるなりけり。今にして、はじめて、かの漁家の案内者が一言するもの、わらじに罪すして、ぱたぱたとそのかかとを打つ草履なりしを思ひ出でぬ。即ち八滄行の罪を自状し、渚にいでて顏を洗ふ。鏡にあらねども、水、わが顏をかしらをうつして、底清きことよ玉の如し。ああ、八池、琵琶の濱、既にわれに見れり。圖らずもこの處に來つて、この良夜に會す。琵琶湖の濱、われに奇ひてすずといはんや。

見よ、彎弓の形、引いて放たざるは、あながちにこの時の兩端、陸地につらなれる故にはあらざらん。三十餘丁の間、われそのいねこびたる松の數を知らず。ここに古松、幾度か打ち倒して、相並べ六株

濱に抱かれ、比良の高峯をさかしまに映ずる小内湖のあるを思ひ見れば、かの九世の戸の天の橋立に比すべからんか。かれに成相山あり、これに釋迦ヶ岳ありと雖も、ただそのあまり高くして、この景にそはざるを憾みとす。わたし守のわかきは、ここを舞子須磨の濱べにたとふ。これ正面に浮べる沖の島を、わが故郷たる淡路に見立てのことなり。これわれにはなかなかなつかしき見立なりけり。然らば、かしこの漁夫の鈎にかかる赤鯛、黒鯛の如きは、ここのゑりや大網に入りてあがる、はすわだかの類にあたるべきか。夏の頃は、村人ここに出張し、この名物を料理して、來賓の客をたのしましむる山。

「なにと、こは、小松が谷の松風に、
　散りても、花はまた匂ひつつ。」

といふ歌は、叢鎮がこの近所にて作りしものなれど。われその意の何をうたへるものなるかを解するに苦む。

わが勇氣少しく快復するや、こたびは大に冷氣を感じ來りしが、さいはひに汽船着しければ、はしけに乘つて之にうつり、艙中燈火のもとにありて、此記を作りぬ。

再び見を失へる記

一月六日。長井論樹・舊臘より病氣のところ、昨夜來の樣子はなはだ氣づかはしければ、朝早く、別なる醫師某を招いて、診察を乞ひしに、既に助かる見込なしといふ。われも今朝、目を覺してより、そのおぼつかなきことの、あまり意外に急なりしを思ひたり。

はじめ公立病院の醫者に見せしに、氣管喘息との話なれば、息づかひは苦しげに見えても、生命に關することはなかるべしと、安心せり。これ十二月三十日三十一日頃のことたり。一日より二日・三日にかけて、少し心よき樣子も見え、且、醫者を呼びにやること數回に及べども、來らず。正月のことなればと、藥のみはつとめて飲ませ置きつ。その間、誰にも見せざりしが、手落なりしなり。其時・氣管肢肺炎にうつり、いきづかひ甚しくなり、仰のきて臥せる腹部を見れば・大波の如く筋肉の上下するあり。動悸烈しきを以て、頭痛もするならんと、醫者のいふがままに、手拭を水に浸して、之を被ぶせやりたり。

某氏の注射と投藥とにより、晝頃再び尋ねられし時は、少しくよろしき樣にたり、病院より三時頃見舞ひに來れる時も、左程には云はれざりしが、此時・前に喘息と斷ぜし口振を變じ・發病、即ち俗にいふ百日咳の氣味ありしが、氣管肢肺炎にうつりたりと稱するに至り、某氏のもれる藥に同意を表して、歸り去れり。

午後七時頃までも眠らずば、別に一服の藥を與へんとの約あり。一日一夜は殆ど睡眠せざるのみな

らず、夕方に至りても、何その様子なければ、行きて、之を貰ひ來り、兒に飲ませしかど、なかなかこの結果見えず。ただ息づかひに勞れ行くばかりなり。とても醫者に見限らるるものならば、今一人、誰かに見て貰はんものと、下婢を以て、まだ別の某氏を呼びにやりたり。妻は昨夜來の看護に精神を勞し居れば、かたわらに眠らしめ、下婢には、その歸り足にて、若し兒の引き釣ることもあらばと、その用意に、醫者のすすめし芥子を求め來るを命じ、われは一人、兒の苦みてばたつく手足を、ゆるく押さへ。その口のかわくに從ひて、牛乳を以て之を浸しやりたり。十時頃に至り、妻、その息づかひの苦しきを聽いて、到底覺つかなしと明め、その苦を見兼ねるとて、近づかざりき。

　また別の某氏は、留守なれば、歸り次第に行くとの返事なりしが、待てども、待てども、來らざるたり。われ、どうせ死なすならば、適にその苦みを取り去らせんと思ひ（今は全く業の力にて、苦みを堪ゆるだけの虚偽、殘り居るなり）、もとの某氏のもとへ立ち向ひしが、一二丁行きしところより、急に呼びもどされ、家に入れば、妻も下婢も兒の傍にあり。兒、「あい」と一こゑ唸りて、大なる口を開きしが、之が苦の最後となりて、十時四十分に息を引き取りたり。またの某氏來りし時は、旣に遲かり。妻、その出づる魂を追ふが如く、「諭得、諭得」と聲を放ちぬ。あとは淚なりけり。

　九ケ月の生命、短しと雖ども、止むを得ず。一體に弱かりしと見え、毎月醫薬を服せぬことはなき程にて、顏の色よろしからず。肥え居れど、筋肉のかたく發達するにはあらざりしと、人々は云へ

り。先に亡へる兒と、同じかりしたり。嗚呼、前日來、目ばたきもせず、人の顏を見つむるを、氣づきしならんと話合へるは、父母の慾目にて、全くおのが苦みを無言に訴ふる心なりけんものを。其後は、再び無邪氣の顏つきに復し、安らかに仰のけるまゝに、寐かし置きつ、明日を待て、大谷村字弓神谷の火葬場に送り、遺骨は東京に携へ行き、先の亡兒と相並べて、之を葬むることゝに定め、其他の手順は凡べて、二三の友人、之を引き受けて歸りぬ。われらは共に兒の室に眠りぬ。

七日。晴。起き出づれば、比良の山一面に、雪を以て白し。去年の冬、堅田の方に當つて、ふとき虹の立てるを認め、翌朝に至りて、同山に大雪降りしことを知りつ。今や再び、その朝晴れを見て、兒を失へる悲みあり。嗚呼、積むものは積めよ。消ゆるものは消えよ。無天の天、いづくに亦增減あらん。

雪の一日

一月十七日の朝、起き出でて窓外を眺むれば、天濛々として雪ふりしきり、湖水の四方も辨ぜず。水邊を走れる鐵道線路を通過し行く一人のすがた、黑きがそれかと見ゆるばかりなり。ややをやみとなりて、旭日の光雲間を漏るるに至れば、三井寺のふもとより叡山の絕頂に照り輝きて、白絹のころもをかけ渡したるが如く皓々たり。晴れ行くに從つて、比良の山々、一夜に三千丈の白髮を生じたる

に似て、一きは人目を引くの巉巖をあらはし、尙、北にしては、賤ケ嶽の別峯をはじめとし、伊吹の山脈、蓮綿として、はるかにこの銀世界の際限を圍むを見る。湖東のかたには、三上山ひとりみどりの頭角をそばだてて、いまだ老いざるの意氣を以て、水面を臨めるあり。わが市の背面、馬場の山に、逢坂山に、見據る人はさぞよろこびしなるべし。

われこの景色を烟燵のうちに見すごさんも惜むべしとし、また降り來たる中をつき進むに、けふの雪は恰も水氣を含まざるが如く、からからして、乾したる粉に似たり。その、道につもれる上を蹈み行けば、さくさくと音して、ここち好きことといはんかたなし。風は吹き猛りて、蝙蝠傘その用を爲さず。午前九時、馬場ステーションより、上り列車に投ず。雪はいよいよ甚し。粟津の松原、石山のふもと、勢多の唐橋など、車中にうち眺めて八幡驛に達せしころほひには、左右一面の麥田、七八寸も積めりと思はれたり。野州より八幡にかけては、雪殊に多しとは、かねて聽つるところなり。

日驛にて下車し、午後一時頃、再び上りに乘りしが、この時、車長、一人の小供をつれ來たり、わが車中に投じて去る。小供は忽ちしくしくと泣き出だせり。同乘の男女、之をいぶかしみ、一齊に聲をそろへて、『如何にせしや。』『母と共なりや。』『いづくより來たりしぞ。』『年はいくつ。』と、その左右より問ひ慰むるに、力を得てか、兩手もて涙を拂ひ、すすりあげつつ答ふるを聽けば、年は十一、京都に奉公し居りしが、いやになり、丹波へ逃げ歸へるつもりにて、七條停車場より、この汽車に乘

りしなり。人々その心をあはれみ、役員に乞ひ、下り列車にのせて歸しくるるようかけ合ひ、再びここを出で行かしめつ。老人等は互ひにその可愛さを語り合ふあり。うしろの方にありし年若き婦人は、おのが肩かけの端を以て、ひとり涙をぬぐひ居たり。

乘客の近江八景物語は、ここに一轉して、さまざまの哀れなる小供の事にうつりしがうちに、最もわが耳底にのこりしものあり。靜岡に家を持てるらしき人の話なり。そは同じく十一歳になる子の、東京にもらわれ行きしが、三ケ月經つかたたぬに、一人して歸り來りしかば、如何にせしと尋ねしに、鐵道線路をつたひ來りしと答へし由。而して夜は路傍の樹の下に寢ねしなし。子ごころにも、左程に父母の家は戀ひしきものにや。あはれ、あはれ。

われ彥根に下り、金龜城にのぼる。伊吹山、近くその全形をあらはせども、日は落したるが如前額は隱れて、雲に線劃あるに似たり。四方の景、ただ暗々。一塊の汚物を點せず。その昔、當城の主人、かの櫻田門外に斬られしも、かかる時なるを思ひ出されたり。馬場に歸着せしは、たそがれ時なり。水の深さに薄絹を張れるが如き空に、明星ひとりその光を專らにし、停車場のうしろなる山は、灰色にぼけて、天色と相分つこと能はず。長等山上にかた寄れる黑雲の間より、ぱらぱらと吹かれ來る吹雪は、かたわらの柳の枝にあたりて、寒氣五體に染み渡るを覺へぬ。嗚呼、先きの小兒は如何にせしか。別れてより既に五年間。

天地の父や戀しき寒やなぎ。

雪の三井寺

一月二十六日、雪景色見んとて、三井寺に登る。夕暮時なり。昨夜よりの雪、五六寸、數十丈の階段に積み重なりて、本堂の正面に迫り、その庭前は、白色の布團を敷きつめたるが如く、堂の背後にあらはるる大樹には、時ならぬ綿花の咲き亂れたるあり。坂上の石燈籠は、恰も雪女郎の出で來るを待てるかの如く、物さびしげに二ツ相並べり。十年戰役の記念碑は直立し、高きが上にいや高く、列なれる堂宇の棟簷は、こよひ、こと更らに、その曲線を繪くこと明なり。月見堂の家根、その四端は自然にはね上りて、重き風鈴のかかること、いよいよ美なり。

斷崖の一隅に立て、わが眸子を放てば、湖上朦朧として水天を分たず。大津全市は、無聲の銀波輕くその上を蔽へる中に隱れて、戸々に點ずる瓦斯燈の光の見え透けるを臨めば、恰も南方龍宮の巷、釋迦如來の來向を仰ぎ奉るかと疑はる。清淨の氣、暮色に滿ちて、撞き出だす鐘の聲に、浮世の塵埃を拂ふに似たり。

一種幽妙なる想像に乘りて、寺を下れば、長等神社に參詣の一婦人、樹木の枝より落ち來る雪片をあびつつ、歩一歩に、足駄を踏みしむる音さくさく、神前に進み行くうしろ姿を見たり。如何なる禱

願のありてにや。鳥居を出でてふり返れば、既に見えず。日は暮れたるなり。歸途、一句を案じ得たり。

大雪や新のをんな兒を負はず。

思の種

（妻の作なり）

わが身の都に住める頃、琵琶湖の如何に廣大なるかを聞き、八景の如何に美なるかを、思ひつゞけしこと多年。幸にも緣ありて、大津の濱邊に來り住むこと、既に三とせ。春は湖邊の露につゝまれ、夏は長等の山風に吹かれ、秋は明鏡の小舟と共に浮べるを見、冬は時ならぬ花の、湖上に散るを眺めぬ。されど此間、碌々として過せしことの、浮世とは云へ、われながらうたてきかな。今やこゝを去るにのぞみ、他日の語り草にもなれと、思ひの種を播き置かん。見る人、笑ひ給ふこと勿れ。

琵琶湖を見て。

琵琶のうみ、幾世かはらで、世の人の
心になみを吹き立つるらん。

春の頃を詠める。

いつのまに春は來にけん、きのふけふ、
　霞にこもる近江富士が根。

夏の頃を詠める。

月かげの涼しく見ゆる水の上に、
　螢の飛ぶぞうれしかりける。

秋の頃を詠める。

名にしおふ粟津が原の秋來れば、
　身にしむ風の袖返へすなり。

冬の頃を詠める。

をちこちの山の松原見えぬまで、
　ふり來る雪の寒くもあるかな。

石山の秋景色を見て。

さびしくも、紅葉ふみ分け來て見れば、
　石山寺にひびく鐘の音。

袖の上に散り來る紅葉見るにつけ、

人のうへこそかなしかりけれ。

源氏の間を見て。

　　敷島の道ふみ分けて、石山に

　　　こもりし、人のむかし忍ばん。

わが身を思ひて。

　再びは來ぬ年月を、いたづらに、

　　過ぎしわが身の上ぞ悲しき。

二　出　版

われ、湖畔に住める間に、二出版を爲せり。一は『英和警察會話篇』なり。のち、その內部を取捨增減し、『公用會話』として、某書店より出でしもの。これ至て通俗なるものなれど、之を以て後の出版費用を得んと欲せしなり。某警部長の紹介に依り、豫約を全國各府縣に募り、いよいよ印刷に附せんとするや、京都の某書店より、金二百枚を以て之を讓り受けんと、掛け合ひ來りしが、それ以上の收入あるを見込みたれば、神戶に於て印刷し、わが名を以て豫約者に分配せり。さて、その集金上、各署の證明あれば、不都合の廉はなかりしも、時日大に遷延し、少しづつ入り來るものは、或は生活

の資に加へ、或は旅行の用に供し、最後の計算となり、意外の小額を殘すに至れり。

次に出でしは、即ちわが新體詩集『露じも』なり。その出版に關しては、是までに、如何に苦心せしか、わが語り能はざるところ。或は人を賴み、或は身づから至り、諸處の書店に掛合ひしこともありたれど、その功なく、空しく藏すること數年。漸く自費出版の運びに至り、之を批評家並に知友に配布するを得しなり。時、夏の頃なれば、眞面目に讀み吳れしもの、少なからん。且、二三の書店に送りし分もあれど、その後、何の音沙汰もなし。之を京都の月郊子に語れば、子も亦おなじ運命に會ひ居る由、答へられたり。

われ、詩に由りて、衣食せんとする者にあらず。而も尙、この苦悶あり。世の文を弄するもの、心に信ずるところあつて、而して後、立たずんば、必らず失望落膽の境に落入ることあるべし。愼めや、青年文士。

僧に贈る

世は　悲み　の　海　なれど、
君、かへり見る　ことなき　や。
人は　憂ひ　に　沈めども。

君は　高きに　います　なり。
ああ、いや高き　御山　には、
常磐の木々　の　森　深く、
湧き來る　水　の　清らかに、
君が　御こころ　洗ひ得て、
君が　御こころ　洗ひ得て、
悟り　の　道　に　すみ染　の、
ああ、すみ染　の　ゆかしさ　よ。
悲しき　上の　悲み　を、
つらき　が　中の　つらさ　をば、
つつむ　一乘・無差別　の
數理　に　堪ゆる　御力　や、
げに　大いなる　まこと　こそ、
隱れて、そこに　活くる　なれ。
あした　の　鉦　の　ひびき　には、

短き 人の世 を 觀じ、
ゆふべ の 經の つとめ には、
長き 涅槃 の さま を 見つ。
春 啼く鳥 の 聲 聽きて、
涙の雨 の 寂しくば、
秋 吹く風 の 袖 に さへ
助け を 叫ぶ、聽聞 の
多き 世界 を 思へかし。
ああ、われ、今や、隔たりて、
雲路 も 遙か、君と また
相會ふ 時 を 期し難し。
ああ、山 と 川、消え失せよ。
ああ、遠近 よ、相結べ。
幽明 二なく、萬象 の
歸する ところ に 從ひて、

こころ に 心、飽くまでも、
君 と われとを 泣かん かな。

附錄

兒を失へる記

一月十三日。雨。小兒病氣の氣味ありとて、昨夕醫師のもとへ見せに行かしめしに、まさか實布垤里亞には非ざるべし。之を飲ませて、明日、午前九時頃、再び來れと、水藥一瓶をくれたり。その夜は、常よりも早く床に就きしが、小兒一睡の後、何となく氣息切迫して、腹の底より無理に呼吸するものの如し。あはれと思ひて、顏を近寄すれば、却て拂ひのけ、寢返りしては、枕元なる小ランプをつかまんとす。時には、身づから飛び起ること屢々なり。母之を休ませんとて、或は背に負ひ、或は寢かしつくるに、又起上りて便を呼ぶ。而して別に出づるにはあらざるなり。苦しかりし爲めならん。時にはまた湯といふ。湯あらざれば、水を與ふるに『おべたいね』と云ひながら、舌うちして、之を飲むこと二三杯に至る。喉には始終たんの溜れる樣子なり。時々嘔氣を催し、吐きさうになれど、身づから之を飲み下して、出さず。一度は大に吐きしかど、藥のききめとのみ思ひ居たり（醫者

吐くことあらんと云ひければなり)。ただ早く夜の明くるを待つばかりなりき。

六時頃に至り、人の起き出でしを見て、おのれも起る氣になりてか、衣物を呼ぶ。その聲、喉にせかれて、しかと聽えず。衣物を着かへさせしに、そのまゝ布團の上にうつ伏して、眠れる樣子なりしかば、その上にまた小さき布團をかぶせ置きつ。われらの食事を終る時、母を呼ぶさまなれば、つれ來たりて、いつもの牛乳を與へんとしけるに、さじ一杯を飲みて、再び口をつけず。喉の痛めること、なほその時も氣づかざりしが、兎に角、からだの弱りて、かほ色少しく變じ居れるを見たり。母之を負ひて、この度は專門の小兒科に行きしかば、われはその歸りを待ち居りしに、六時間餘を經れども歸り來らず。十二時を過ぐる頃、妹來たりて、喜代子の病院に入れるを報ず。さして行きし先にはことわられて、北里の研究所に行きしなり。直に入院して、之が診斷を乞ひしに、既に八分通り見込なしと云へりと。三ケ處に注射を行ひしも、その効驗見えず。入院後、半時程經て、終に果なくなりぬ。われ至りし時は、體温去りて、その色既に變じ居たり。今はの際には、別に苦しみし樣子見えず。昨夜よりの苦みに、勞れ切りしものなるべし。急性實布垤里亞にして、心臟痲痺の爲めにいき絕えしなり。われより先、祖父の至りし時、既に之を覺えず、何をいふとも、聽ゆる樣子なかりしが、「とッちやん」といひ聽かせし時、三角の口つきして、笑ひしといふ。こは笑へるにはあらで、最後の苦みの形にあらはれしものならんか。享年二年二ケ月。

傳染病なれば、死體をつれ歸ること能はず。そのまゝ死亡屆、棺桶の取り寄せ、二十四時以內火葬の許可、等の手續きを了し、午後八時頃、二人の人夫に擔がせて、病院を出づ。祖父と母とは途にて別れ、われ一人つき添ひて、目黑附近の桐ケ谷の火葬場に向ふ。九時過ここに着し、火葬室の錠と鍵とを得て、人夫の棺につき添ひて、堂內に入る。折しも大雨降り來りて、ぶりきの家根を打つこと霰の如し。われは死神の下り來りて、恰もわが兒の靈を受け給ふかと思ひつ。

當夜は乞ひて、同處の茶屋に一泊し、明朝早く遺骨を受取りて、歸ることとす。茶屋は客の來たるに備ふとて、十時まで戶を閉ぢず。かたはらなる人夫の休息所に、燃え殘りの火も既に全く消え果てしやうなり。山中の一軒家、寂として、豪も世間の聲を聽かず。夜風、林樹に吹き渡りて、人の心を空しうす。これ悲嘆の湧出すべき時にして、而して殆ど之を感ぜざりしは、蓋し身體疲勞の爲めなるか、將又、その實際に於て、未だ兒の死せしを想する暇なきか。寢床に入りても、夢ともつかず、幻とも見えず。ただうとうととして、いつの間にか眠りけん。第一夢を結ぶ。小兒の苦しめるを抱きあげんとする時、そり返りたるに驚き覺めたり。これ既に明け方なりしと見え、起きて戶を開き見しに、うす明かりき。既にして又第二夢を結ぶ、この度は病院にありて、小兒は母と共にわれを見送り、われ出口のしきゐをまたがんとする時、『あばよ』といふ聲、うしろに聞えしかば、兒はいまだ健全なりやと思ひて、覺めたり。既にして又第三夢を結ぶ。こは現在、泊する茶屋の室にして、われ寢

ねし時には、この家の人、この室は常に明け置くところなれば、戸の外には、障子などの必要なしと話せしものを。今や立派なるがはまりありて、茶屋の男、之をあけ居るに驚きて、目を覺ませり。この音は、卽ちこの家の老人の、隣室に起き出でて、炭火をおこさんとて、戸棚を開くなりけり。時に午前六時三十分。

十四日。晴。六時半に起きいでて、庭先なる手桶の氷を破りて、顏を洗ひ、直に拂ふべきを渡し、昨夜の鍵を携へて火葬堂に入り、兒の室をおんぼうに開かしむれば、人體全く燒け通りて、灰となり、頭蓋骨の如きは半ばその形のままに黑くなり居たり。長き竹箸を以て、われ、そのぼろぼろと崩るる骨の一二を備への壺に入るれば、あとはおんぼう之を棒の先にて碎きつつ、入れぬ。われ、この壺をハンケチにつつみ、外套の裡に抱きて、ここを去り、霜いまだ深くして、人の衣をうるほす、田舍道を通りて、目黑に出で、汽車に乘じて澁谷に下り、某氏及び某氏を訪ふて、葬式の順序を定め、歸途、青山墓地の茶屋に立ち寄り、墓場の穴掘りを依賴して、家に歸る。その時の感、恰も兒は外に出で行きて、いまだ歸り來らざるものの如し。

十五日。晴。亡兒の葬式を自宅に行ふ。墓地はわが母の傍なり。遺骨と共に、兒の好み居りし羽根と、水くみと、坐せる形の裸人形とを埋めたり。花筒には、葬式の場に用し、梅と椿と水仙とをそのままに挿し置きつ。家に歸りて、始めて寂寞の情、胸に迫り來るを覺えぬ。

嗚呼、地下の一少女、靈となりて、今や何處の追羽根を習はんとする。

本篇は序言にもある如く、著者が琵琶湖畔にありし十二ヶ月中の日記の節々を書き集めて、一卷となし、未發表のまま篋底にありしものを、其後、遺稿として——三一六頁より三六五頁まで——新小說に揭載し始めたるが（誤字脫漏夥しく、原稿亡失したれば校訂困難なり）そのまま中絶せしを、今回全部輯錄せるものなり。（編者識）

紀行と印象

旅中日記

○（明治三十九年）三月三十日。雨。輕裝して、から傘と高下駄で宅を出た。この度の旅行は長くして居られないので、荷物は風呂敷包みと毛布とだ。途中に車があつたので、それに飛び乘つて、新橋停車場へ達したのは、午前七時。直ぐ汽車に乘れた。

列車が動き出してから氣が付いたのだが、おなじ車中の端の方に見た樣な婦人が居る、向ふから默禮したので、近づいて見ると、果して音樂學校出の某夫人であつた。ミネソタ號で出發する人を見送りに行くさうで――先づ、横濱までは途連れが出來たのだ。いろんな話からして、現今の音樂者連中には、兎角、酒色におぼれて不身持のものがあり勝ちだといふことが出た。然し、若し是等にして、藝術家たる實効を擧げて行くものとすれば、何もそんな些細な事をかれこれ云ふまでもなからうと、僕は云つたが、所天を持つて居る人は之を是認しさうもないし、また、僕の言も實際の事情に一致して

居るか、どうだか、自分も斷言は出來ないのである。
『何の本です』とゆび指されて、僕が出したのは、著者から送つて來た新刊の『破戒』だ。僕は著者が二年間の苦心などを說明した。『あの人も學校に居られたことが――』と、夫人が云つたので、僕が『あれは一時の迷ひでしたらう』と答へたのは、或は藤村君に取りては、あまり穿ち過ぎではないかと思はれるかも知れない。

近頃、僕の手に落ちて來たものに、獨步君の『運命』とこの『破戒』とがある。前者は出發前に讀んだので、後者を車中で讀まうと思つて持つて來たのだ。横濱で、夫人とそのお伴とを見送つてから、『破戒』をひもとき始めたのである。それで、國府津へ來た頃は、第四章、千曲河畔收獲の季節に、大飲酒家の細君とその兒等との勞苦をあしらつたところを讀んで居たが、それが別に深大な感じを起すでもないが、自然と人間とがなだらかに調和して居るのは、著者の得意、寧ろ特色たらうと思はれた。

ああ、海！僕の好きな海は、僕が國府津に下車すると、雨のうちに、洋々として僕を迎へる樣であつた。僕は、この二三年、相模灘に向ふと、何だか生き返る心地がするのである。早く汽船に乘らうと思つて海岸に出ると、あまり波も激しさうではないのに、生憎、けふはその發船所なる伊東から來ないことが知れた。止むを得ず、小田原へ來て宿を取つた。まだ午前であつた。實は、汽船の乘り場に

近いところで電車を下りて、一度飛び込んだ家は、けふの天氣が惡いので、風呂を立てないといふから、厭になつて、中食ばかりして、直ぐ宿を取りかへたのだ。もつとも、汽車に乘つて居る時から風を引いた氣味で、熱が出て、氣分が非常に惡くなつて居たのだから、もう、直ぐ、東京へ歸らうかとも思つた位である。

氣を持ち直して、例のを讀みつづけて居たから、夕方には、第七章のところに進んで居た。湯に這入つてから、夕飯が出たが食べたくないので、靜かに寢ころんで、著者が信州北部の山河を綿密に描寫するあたりに氣を取られて居ると、不意に氣分が變つた。——それは、浪の遠音が聽こえたからである。僕は、暫く浪の音を聽かないと、何だか、自分の生命が枯れて行く樣に思ふ性分である。

それで、また、僕は旅行に出ると、直ぐ自分が最も明確に踊り出るのであるが、氣分の惡いせいか、まだその時が來ない。ひよつとすると、手近かに人の書物を讀んで居るからかも知れない。こんな長たらしい日記を書くのも、心が中點に集らないからでもあらう。兎に角、不愉快なので、宿を出て、近處の料理屋に飛び込み、歌妓を呼んで暫く騷いで見たが、あたまが重くなるばかりだから、間もなく歸つて褥に就いた。

○三十一日。晴。昨夜は、熱の爲めになやまされて、眠られなかつた。平常、夜中に目が覺めた時見える、空想の親しい影も浮んで來なかつた。午前十時、褥を出た。朝飯は矢張り喰へなかつた。支度

をして。濱へ出た——汽船は今日も來ない、來ないから、その國府津からの歸りに乘つて、目的地へ行くことは出來ない。また止むを得ず、熱海へ行くことに定めて、人車鐵道の乘り場へ行くと、うしろから僕の背中を打つたものがある、ふり返へると、以前に宿つたことのある宿屋の女中だ。『旦那のお顏は大變赤い』と云つた。成程、熱が非常にあつたのだ。手を握つて、別れた。女は、どんなお多福でも、どこかに愛すべき點があるとは、僕が不斷云つて居ることだ。

例のを讀んでしまつた時、人車は高い山腹を駈つて居て、海の方を見ると、果はむしられて葉ばかり青々して居る蜜柑山を越えて、遠く白帆が二つ三つ浮んで居た。多少、夢見る心地になつて來た。あの初島の左から烟が見えるなら、それが東京から來る汽船で、けふそれに乘つて行けるのだと、おなじ方をさして行く乘合ひ客は云つたが、僕はその汽船が來るのは朝だと知つて居たから、その言を信じなかつた。

熱海へ着いたのが、午後三時過ぎ。さいはひ、知つて居る宿屋の番頭が來て居たので、それに附いて宿へ行つた。からだの筋々がゆるんだ樣な工合であるから、溫泉に這入つて褥に就くことに定めた。去年の暮れもここに入湯したが、その時の病氣の爲めに、また今度も出て來たのである。然し風を引かうとは思はなかつた。

讀んでしまつた『破戒』全篇に、褥に這入つてから考へて見るに、單行小說として近來稀れな長篇

を、如何にも落ち付いて、ゆつたりとして居る書き振り、少しもあせつたところがないのは度量である。著者とその文章とはしつくり合つて居る樣に思はれる。それに、「藝苑」に出た風葉論の記者に云はすと、この著も――外國文學のお手本はあつたにしろ――その影響が見えて居ない方に數へられるかも知れないが、僕はこの方が贊成である。詩に於ても、僕はこの考へだが、外國の思想と影響とは、そのままで現時の日本だけには斬新にも見えやうが、それが良いものならば、之を日本的に同化してあらはすことが出來なければ、飜譯と同じで、――日本文學としては、世界の舞臺にいつまでも殘される性質のものでなからう。著者はどこまでも純粹の日本的、ちひさく云へば、純粹の信州的の行き方をつづけて居るところが、僕には心地よく讀めた――もつとも、かう云ふ書き振りだけが純粹の日本的だと云ふ意味ではないが。自然主義の行き方が面白い。氏の詩はもう時代後れになつたが、然しこの主義で新たに作るなら、作詩も氏に取りて惡くはなからうと思ふ。

　この著の部分的缺點とも云ふべきものを思ひ付いたままに擧げて見ると、犧牲蓮太郎の死が仕組上あまり前から見え透いて居たこと、主人公丑松が自覺奮起した際に當つて、生徒並に同僚の前に平つくばるのは、著者が苦心して描いて來た主人公の人格を、普通一般の穢多根性と何の變はつたこともない樣にしてしまつたこと、などであらう。僕も穢多の材料を持つて居るが、こんな工合には描きたくない。また、事件を引き起すに、同一の形式が二三度重なつたと思ふ。また、澤山の人物をそれ〳〵

始末してしまつた手ぎはは感心だが、その連絡にまだ〳〵こと更らめいたところが多いのは殘念だ。要するに、この著には、大きいとか深いとか云ふ方面は望まれないのである。獨歩君の『運命』には、外國の運命悲劇にあり振れた形式や、また、何でもない樣な筋などがある代りに、『酒中日記』の樣な、何となく僕等の心に深く喰ひ入る作がある。これは、兩者の感想が違つて居るからでもあらう。獨歩君をその『空知川の岸邊』に描いてある森林に譬へると、藤村君はこの作中に寫してある、北信の田園であらう。『破戒』には、自然と人間とが、最も平且な――平凡の意ではない――ところで活躍して居る。

○四月一日。晴。昨夜も熱は出たが、對して寢苦しくはなかつた。午前四時半、汽笛の聲に目を覺まして、支度をした。飯は喰ひたくないので、玉子を三つ四つゆでて貰つて置いたのである。漸くのことで海に出ることが出來たが、けふに限り小さな船が代つて來たので、狹い甲板へは出ないで、船室に籠つて居た。

網代を過ぎて、伊東町へ近づく頃から、甲板に出ると、向ふの山の中腹に寺らしい建物が見えて、薄赤い花が澤山咲いて居る。『あれは何でしよう』と僕が問ふと、軍人が一人『桃でしよう』と答へた。あとでこれは日岸樓と知れたが、それと同時に、この寺に關して一つの腹案を得たのである。

午前九時頃、町へ近づくと、濱邊は、あちらこちらにほうづき提燈を引き連ね、砂上の船はすべて

旗を以つて滿艦飾を施してある。忽ち花火が上つた。はしけに乘つた客のうちから、學生がひとり笑つて、『僕等の歡迎だらう』と云ふと、船頭は眞面目に『なアに、兵士の大歡迎會です』と答へた。

僕は先づさして來た某亭に行くと、そこの歌妓どもは髮を太いちよん髷に結つて、異樣な服裝をして居る。どうしたのだと尋ねると、これから濱へ行つて、『精當』をやるといふ。間もなく、其邊の妓等一同は、船形の花車を引いて、出て行つた。町中はすべて家業を休んで、最後の歡迎會を催すのである。

僕はそこの娘二人と共に、宿は別に定めて貰つてから、同じ樣に濱へ出た。こんな時は、自己の悲愁も痛苦も、一時はどこかへ行つてしまうもの――滑稽だけ辛抱することが出來れば良いのだ。それも、人間の到底出來ない化脫などを虛說して、身づから澄まして居られる人々の滑稽と孰れがまことであらう。然し、これは只今印刷中の拙稿『神秘的半獸主義』の論究するところである。

海では、二隻の獵船がかつを釣りの眞似をして見せて居る。町會議員、小學校長などは、委員のしるしを胸にして、得々と奔走して居る。獵師は、また、背中や襟に赤い辨天樣などを染め出した、開祝ひの衣服を着けて、喜色は滿面にあふれて居る。宿屋、料理店などから一人づつ出した女の子は、いづれも揃ひの赤前垂れをして、ここかしこの假飮食店を世話して居る。すし屋もある、酒屋もある、ビール屋、甘酒屋、しるこ屋、菓子屋、麥湯屋などもある。

僕等は一わたり步いて、藝者の手踊りを見たが、感心にも『北州』を澄まして踊るものがあつた。それから、僕等は、酒の食券などを持つて居たから、その店へ這入つて休んだ。見て居ると、いろんな風俗をして居るものがある。男子が女子に扮したり、女子が男子に裝ほつたり、廣告に云へは、科料金を拂ふべきものがある。また、わけの分らない帽子を被り、薄い紙子の背にクロパトと書いたのを着て通るのもある。砂糖をつつんであつたむしろを裃の代りにして、棕梠の皮の笏を以つて、澄して行くのもある。また、人々からかけ離れ、浪もとを、年の若い藝者が青年と手をつられて行くのは、海を背景とした最も良い畫である。また、どこかの隱居らしい老人が、唐人あめを賣る人の樣に、長い帽子をつけて、眞面目に瓢箪を提げて居るのもある。小學教師がつけ髯した軍人の眞似を見ると僕が國に居た頃、不斷こわい顏の教師連が、天長節の儀式が濟むと、つれ立つて飲みに行き、それから鼓を打つて町中をねツて行つたことがあるのを思ひ出す。

『あひの子が來た、あひの子が』といふ注意を受けて見返ると、二三歲の兒の手を左右から引いて、西洋婦人と丈の低い日本人とが、洋服すがたで、浪もとをやつて來た。これは當地に住む傳道者夫婦である。年は二十程女が上である。靜岡市で結婚をした當時、新聞などでは冷笑的記事を掲げたのを見たが、男女の情事をさう冷笑すべきものではなからうと、之を讀んだ時、僕は思つたことがある。その家族を今目の前に見ると、なほ更らその情を汲んでやりたくなつた。情は弱いものの樣だが、燃

え立つ時は、知力をも意力をも燒き盡すことがある。僕の聽いて居たことを思ひ出すと、熱海の海岸から、或時、小舟に乘つて大島へ遊びに來た中學生が一人あつた。島には、耶蘇教の傳道をして居る獨身の外國人がふたり居た。一人は意志の堅固と云ふよりも、寧ろ頑愚な男子、また一人は自己の寂しさを優しさに包んだ老婦人。この婦人がこの中學生に頻りに神の愛を說き聽かしたところが、感服して、その翌月も亦やつて來た。そのまた翌月もやつて來た。それが二十日毎になり、十日毎になり、一週間毎になり、その接近の度が重なるに從つて、一方の聖人は之を見て顏をしかめる樣になつた。老婦人は遂に島を立ち去ることになつた。かの聖人は之を墮落と吹聽して、今でも島に行く人に向つて、神の爲めに憤慨の意を漏らすさうだが、その老婦人と中學生とが、乃ち、この『あひの子』の兩親であるのだ。

僕等は、それから、福引の場所へ行つた。或者は杉マサの天井板、或者は太い床ばしら、また或者は時計や反物や俵炭を持つて行つた。をかしな物など當つて、女どもの困る有樣は、いづこもおなじである。僕等は手拭と下駄と箒木とが當つたが、箒木だけは厭だと云つて捨ててしまひ、下駄と手拭とをひとりが袂に入れた。それから、僕等は歸つて來た。

田舍でこんな賑ひは稀れである。浮き島で名高い吉田の池のほとりや、大島などからも、わざ〳〵出て來たものがあつた。食券だけでも、二千人分を出したさうだ。一時は、濱邊は、蟻のむらがつて

居る樣に、人を以つておほはれて居たのである。
宿へ歸つてからも、花火はなほポン〳〵上つて居る。ああ、お祭りの濟むのは早い。町人よ、思ふ存分に遊んで、またあすからしつかり働けば良い。汝等とても、眞面目の時は、苦と悲みとは脫し得られないのではないか。智と無智とは、對して違ひのあらう筈はない。
これを書き終つてからも、まだあたまが作詩に向ないので、小山內君から借りて來た、ヒウンケルの『アイコノクラスツ』を讀み始めた。

旅中雜記

一

年末におし迫つてからの旅行であるから、至るところ、のんきなのは自分ばかり。新橋で二度乘り後れ、某辯護士に別盃を酌んで送られ、いい氣持ちに醉つて乘つた夜汽車が、富士山麓を通る頃は、靈山が寒い月夜に薄い輪廓を畫いて、幽靈の樣に現はれて居た。夜が明けて琵琶湖畔にかかり、午前八時過ぎ馬場驛で下車した、僕の古戰場を七八年振りに見舞ひたいのだ。
大津には、いろんな友人が居る。縣廳に於ける僕の後任は、相變はらず警察部の英語教師をつづけて居るし、僕の教へた中學には、その時代の同僚がまだ五六名留任して居て、眞面目くさつて教鞭を

執つて居る。市民中には、大きな酒屋の主人で、片足はきかないが、なほ春秋に富み、一方の有力者に數へられて居るのがあるし、また、身づからは身を晦まして居るが、器用なところから、畫を書き圖を引くを業とし、一たび人の一身にかかる事を頼まれると一歩も跡へは引かない、男達肌の友も居る。また第九聯隊の大尉で、戰爭以來まだ相會ふ機がなかつたのは、兩脚に負傷し、一脚はちんばになつて居るが、頭腦がいいので、今は重要な地位を占めて居る。またお仙といふ老妓があつて、これは、もと、兒玉大將が大津の聯隊長をして居た時、最も多くその愛を受け、その夫人になるつもりで居たのがしくじツたので、そのまま年を取つてしまつた者だが、同地藝者の總取締とも云ふべき程勢力があつたので僕、もたびたび呼んだことがあつた、一度など、渠の覺えて居る踊り——その時代に、もう、人に教へこそすれ、自分では踊る年でなかつたの——を踊り「けふの樣に興が湧いて來る晩はない』と感泣したこともある。それが、今度來て見ると、まだつつがはないが、廢業して、獨力でお茶屋の女將になつて居る。聽いて見ると、五六千の負債をしよつて立つて居るのだ。

僕は同地で一つ忘れられない話を聽いたそれは戰爭談である。日露戰爭の當時、第九聯隊の豫備兵から成り立つた高木聯隊が、旅順の難局某地進擊の命を受け、全滅とは知りつつも、河底に整列して、敵に悟られない樣に、口から口への點檢をすまし、個人個人の行動を取る覺悟で、一度に土堤へ飛び上ると、忽ちに速射砲を向けられ、つづけ打ちの散彈に味かたがどうなつて居るのか、分らなく

なつた。そのうち、某といふ卒が木の株を楯に弾丸を避け、あたりを見まはすと、いづれも敵の方にあたまを向けて倒れて居る。死んだものばかりらしい。そこへ『沈着にやれ、沈着にやれ』と云ひながら、近づいて來た人を見ると、自分の見知つて居る軍曹であるから、その命令に從つて進行したが、いつまでも同じ『沈着にやれ』をつづけて居るのを不思議に思つて、その様子をうかがふと、その行動は平生の練兵の時と變はらないが、全く狂つてるのだ。幾多の部下がその命令に從つて居るものと思つてゐるらしい。

やがて、また大きな音がして、探海燈の様なのろしがあがる。某卒は、その光を避けて、地上に平伏する。ばらばらツと弾丸が飛んで來る。脇腹を打たれたので、一目散に脱げ出したが、苦痛に堪へ切れないで、倒れてしまう。「しツかりせい、しツかりせい」と云ふので氣が付くと、例の軍曹が自分をかかへて後方に走つて居る。その後のことは夢中であつたが、卒自身が兎に角、再び正氣に返つた時に、野戰病院内に助けられて居る。然し、軍曹のことは誰れも知る人がない。跡になつて分つたのは、某卒が手傷を負つたところよりも遙かにさきの大きな岩の上に、劍さきを以つて敵陣をゆび指したまま、聯隊長が倒れて居たといふ、その岩よりもずつとさきに進んだところに、かの軍曹と同じ名の軍曹が戰死して居たさうだ。多分、負傷兵を誰れかに渡してから、自分は再びもどつて行つて、例の「沈着にやれ、沈着にやれ」をつづけて居たのだらう。

前項に紹介した男達肌の友人は、目をしばたたきながらこの話を聽かした。僕も一滴の涙が頬に傳ふを覺えた。同時に、また、之を詩に歌つて見ようといふ考へを得た。外人（または皮相的觀察者）はわが國の軍律が正しいといふが、これは命令的軍律の行はれると解釋するよりも、國人の個人的行動が戰爭に於て同一方向を取るのだと說明すべきものだ。僕が、加藤博士を評する論文に於て、わが國の特色に國家主義と個人主義との合一を數へたのは、この挿話を讀んでも分るだらうではないか？

二

京都へ行つたのは、一度大阪へ下つて軍用金を用意してからだが、停車場へ着いた足で、先づ訪ねたのは新烏丸の高安月郊氏宅だ。氏は幸ひに在宅して居た。氏の書齋は比叡山の景を專らにして居て、その山々、朝の綠、夕べの紫を主人は餘程自慢であるらしいが、その癖、自分が特有して居るのでも、何でもないのだ。然し、鰻屋の前を通らし、香ばしいにほひを嗅がして、それで客を歡待すると思つたのではないのは、僕の保證するところだ。僕が同氏と泣菫氏とに土産として持つて行つた出來たての自著を、これには氏等の攻擊もあるから見て吳れ給へと云つて渡して置き、腕車を連ねて島華水氏を銀閣寺の南隣に音づれた。

僕が曾て京都附近に引ツ込んで居た頃、銀峯會の公開演說が丸山の某樓にあつた。僕もそれに出て演劇に關する演說をやつたことがある、その節初めて華水氏と月郊氏とに會つたのだが、故與齋氏の

葬儀以來、僕は華水氏と相會ふ機會がなかつたし、月郊氏も亦同氏と殆ど二年ばかり會はないのであつた。僕等の音づれた時、氏は丁度山腹に枯れ葉を燒いて、夕日を送るところであつた。立ちながら燃える火を圍んで、京都の住人は共に頻りに雲形、山色の美を賞して居たが、僕には餘り興が乘らなかつた。夕ぐれの銀閣寺も珍らしからうと、裏門から這入ると、暗い竹籔の根もとが透いて、殘照の光にふさがつて居るのを見て、如何にもレンブラント式の畫になりさうではないかと語り合つた。

三人は、樹かげに落ちる細い瀧の音を聽きつつ、寒い椽がはに腰かけて、花袋、天溪、有明、薰等の諸氏に宛てた畫はがきに署名したが、薄田氏にも署名ささうではないかといふ說が出て、華水氏と別れて、直ちに室町へと車を驅けらした。泣菫氏も丁度居たから、あかん坊の泣いてる家を連れ出し、近所の料理屋で一杯を酌みかはし、翌日の再會を期して、その夜は相別れ、僕は僕の欲するところに行つた。

三十六峯を見て暮す女は、活氣がないと云はば云へ、その顏立ちと肌合ひとに於ては、到底、東京女の及ぶところではない。且、その客を持て爲す點に於ても、全く愛憎の念を絕し、純客觀的おもちやたるを敢てする勇氣または素養があるのは、嫖客に取つて最も賞すべきところである。僕はかういふ考へを久し振りで初めて呼び起した日の晝過ぎ、泣菫氏を誘つて月郊氏の宅に集つた。さて、どこへ行かうとの相談に、僕はまだ豐太閤の墓所、阿彌陀ヶ峰に登らないから、且、兩氏もまだだから

それへ登ることになり、絕頂に達した頃、豫期した通りに、再び落日の光景に接することが出來た。ところ柄とて、金屏風に圍まれて、豊公の威儀堂々たる死に樣もかくやと思はれ、且、デカダン派の終極も追めてこの景況まで達すればと感じられたが、あとの兩氏は多分別なことを考へて居ただらう。それはさて措き、五百五十段の石段を攀づるに、兩氏の足の弱いのは意外であつた。

そこでも、畫はがきに署名したが、宛名は誰れであつたか忘れてしまつた。社務所の印を押して貰つた時、そこの禰宜の娘であらう、年の若い女が寂しさうな顏をして出て來た。そんなところに住む女の心はどんなであらうといふ話が糸口になつて、泣菫氏は一つのあはれな物語を思ひ出した。氏の友人で、鞍馬山に登つたものが、一銅半錢もなくなつて、絕頂の神主の家に、ただで一夜の宿をして貰つたが、そこに一人の娘が居て、之を氣の毒に思つたのであらう、翌朝握つて與へた結飯の中に二十錢銀貨が入違つて居たさうだ。かういふ話をしながら、四條へ來て、河邊に浮べた（となぞらへた）船の中で、晩餐を共にし牡蠣飯を喰つて別れた。

そのまた翌日は返報として僕がおごることに定め、晝過ぎから集まつた。もう、別に珍らしい名所古跡もないから先づ市中の古本屋をひやかさうと發議し、諸方をぶらつくうち、或店さきに『光琳百圖』があるので、何となく開いて見ると、希臘神話人面馬體のケンタウロスではなく、人面牛體の不思議の畫があつた。思ふに、支那神話に於ては、伏羲氏は蛇身人首、神農氏は人身牛首、西王母は、そ

の狀人の如く、豹尾虎齒』また人羊といふ獸があつて『驢の如くして馬尾』その他種々あるが、いづれも不釣り合ひにあらざれば、甚だ柔弱で、もつともな自然の趣きを缺いて居る。僕の半人半獸の極致を現はすに於て、かのケンタウロスの如く均整と剛健と活力とを比較的完全に表するものは、最も不思議な神話的地理書とも云ふべき『山海經』を調べても見當らない。それに、僕は多少之に近い表現を光琳の畫で見たのだ。馬を牛で行つてるのは、剛健の感じを薄くする缺點だが、渠はどこからこの想を得て來たのか、誰れか之を研究するものはなからうか？まさか希臘神話の直接變形ではなからう。兩氏に話しても答へはなかつた。

夕かたになつて、僕の好きな豆腐料理、棒鱈に長蕗を出して來るいもぼうに行かうと云ふのを、それは餘り通でもないから、たぬきへ行かうといふことになつた。名からして鳥渡何が出るやら分りさうもない。平木白星氏が曾て來遊して、兩氏に案內され、スツポン料理へ行つた時、毒にはなるまいかと心配したさうだが、その格で行くと、化されはすまいかと云ふのが本統であつたらう。薄暗い內路地を通つて、奧坐敷へあがると、狹い庭の隅に狸の社がある。床の間には、誰れのいたづらか、蛸の化けたところを書いたかけ圖がかかつて居る。左右の額には、化け物の句が澤山記されてある。先づ出て來たからすみで傾けて居ると、やがて狸の持つ貧乏德利が別々の膳に乘つて出て來た。何のことはない、これが奧の手で、三段にはづせると、上段は酒、中段は肴、下段は吸ひ物で、甘いことは

甘かつた。今一度有明氏に畫はがきの代りを送らうと云ふので、店の印形を持つて來さすと、どれもどれも狸の形をして居ないのはなかつた。悉くそれを押して、泣菫氏が『狸汁』と書くと、月郊氏が『三人醉ふて』、僕が『年のくれ』と附けた。何の意味もない句だが、年末にこんな呑氣なことをするものは餘り多くはなかつたらう。

久し振りの會合――三人、三度會して、三方に別れた。兩氏はいづれも神に近い人々だ。僕が神と云へば、必らず架空的虛僞的といふ形容詞が附く奴だが、それにしても、短所ばかりを見ず、長所をも斟酌して云ふと、この形容詞を附けたままで、月郊氏は神の質あり、泣菫氏は神の智ありだ。共に京都的思想を脫することが出來ず、直接に現實の苦痛に當らうといふ樣な勇氣はなく、かの外國宣教師が西洋館のがらす窓から傳道して居る樣に、人生に對して間接な觀察、描寫、解釋等をするのが却つて上品だと思つて居るらしい。上品は古典派の特色ではあらうが、僕等東京人はそんなものを唯一の生命とすることが出來ない。もつと深刻な心熱的生活を經驗する爲め、追めて一年半歲なりとも、手ぶらで東京へ來て住んで見給へと、僕は兩氏にすすめて置いた。兩氏とも隨分新傾向の創作書を讀んで居る樣だが、その解釋消化の仕方が僕等とは丸で違つて居るのである。

それから、僕は獨りして、歲暮の飾り附けが立派な街を通り拔けて、四條に出で、京都女にまで名殘り惜しいところがあつたので、ぽんと町に這入り、曾ては二三度あがつたことのあるお茶屋をた

ねたが、店のものは見忘れてあげて呉れなかつたので、橋の上に來て、醉ひの出て來たいい氣持ちをぶらついて居ると、獨りの女があつて、別な女のいやといふ手を無理に引ツ張つて、『まア、行きましよ、獨りでは寂しうおすさかへ』とすすめて居たが、一方はとう〳〵脫げて行つた。身なりから並みの婦人ではないと見たので、僕は殘る一人に話しかけ、わけを云つて賴むと、渠も飲みに行くのだから、一所に行かうといふことになつた。渠は祇園の或お茶屋の女將であつた。意外の案内を得て、意外の醉ひを重ね、京都最終の宿りは大阪への話みやげとなつたのだ。

三

神戸へ行つて、國木田收二氏に面會した。十數年前、氏は初めて僕の貧居を訪ねて呉れたが、生憎僕は留守であつて、爾來そのままになつて居たので、今回の訪問はその返禮を兼ての初對面であつた。令兄獨歩氏の病狀を餘程心配して居る樣であつたので、それは僕よりも花袋氏に聽く方が本統のことが分るだらうと助言して置いた。氏の兄弟思ひは、僕等の間に有名な美談になつて居るのだ。

關西地方は、大阪の新聞に占領されて居るので、地方新聞の經營はどこでもなか〳〵六ケしいが、收二氏の主筆をして居る『神戸新聞』も、漸く兵庫縣下に多少の需要があるので、持つて行けるらしい。神戸市では、外來の諸新聞に壓倒されて餘り勢力がないのみか、それよりも古い『又新日報』は、地方新聞としては、依然として可なりの勢力をつづけ、東京の小新聞社には劣らない程の立派な建物

を棒へて、二三萬も出て居る。僕の生國播磨から出た新聞記者は、東京にも隨分居る様だが、もとは大抵この社を經ないものはなかつたのだ。これは原田秀謙氏の勢力によつてであつた。

もとの兵庫市の人民は、相接して居ながら、神戸人とは一風變つて、その實屋の建て込んで居る様に陰鬱で、また因循であつたが、神戸市と合併し、湊川の河底も平らげられてしまつてから、餘程活氣を帶びて來たさうだ。神戸市もずん／＼發達して來て、今では人口殆ど三十萬、數年のうちには、沈滯して居る京都の五十萬を越す様になるだらう。神戸と兵庫とを一緒に聯想するので思ひ出されるのは、その境になつて居たもとの湊川の土堤で、借馬の馬方をして居た男だ。僕は、まだ小供の時、渠に二十五錢の借馬料を拂はずじまひになつたことがあるのだ。この度聽いて見ると、渠は馬方として澤山の金を儲け、立派な紳士になつて居たが、一二年前、鳴尾の競馬に乘り手として出て、馬から落ちて死んでしまつたさうだ。あはれや、僕の目には、紳士としての渠は浮ばないが、櫻の植わつた高い土堤を、馬に乘つて片手にまた別な馬を引いて行く渠の姿が見える様だ。然し、今は實際にその人もなく、その土堤もない。

長狹通りに僕の從兄弟の家がある。煙草と印紙とを賣つて、可なり富有にして居る。伯母は一昨年、伯父は昨年なくなつて、夫婦と小供三人の暮しである。總領娘は七歳で、もう學校へも行つてるが、片足が不具の爲め、思ふ様に通學が出來ない。然し、勝ち氣で、利發で、活潑で、而も顏立ちが

いゝから、一しほ可愛さうだ。無邪氣に遊んで居られる時は、他の小供と同樣何の苦も知らないで居ようが、年頃になつてからのつらさが今から思ひやられる。千代子といふが、僕は大阪へ來てから、年賀狀に小供の手鞠をつく畫葉書を買ひ求め、「髯のおぢさんから」として、その子に送つた。

神戸の東山病院には、尋ねたい看護婦が居るのだが。流行病者の收容所だし、また當時は天然痘で最も繁盛して居ると聽いたから、氣味が惡くなつて、行かずにしまつた。

四

大阪で文事に關係あるもので、僕が知つて居るのは、先づ正岡藝陽氏と北里龍堂氏とである。藝陽氏は、僕、さきに當地へ着した日にも訪問したが、旅行中、新年になつてからも行つて見たが留守で、とう〳〵會はずじまひであつた。二度とも大阪日報社へ行つたものだが遠い住宅まで尋ねて行く氣は出なかつた。人の話に據ると、相變らず例のお茶屋に入びたりになつて居るのだらうとのことであつたが、事情を知つてる或藝者に聽いて見ると、そこの女將の方からは非常な熱心だが、肝心の御本人は年上なのを嫌つて脫げ出したいのださうだ。かの靑入道の由來はそれに附會されたものでかなあらう。

龍堂氏とは、行つては居ず、來て會つた。氏はさきに文人は全く文筆を以て、生活するのが本統だらうといふ考へを起し、獨逸遊學の時代に脚本を書いてあちらの人士に歡迎された時の熱がまだ殘つ

て居たので、この考へを實行する爲めわざ〳〵學習院の教官を辭したことである点、わが國現時の狀態ではまだ思ふ樣に行かないところから、再び獨逸語の教師となつて、大阪高等醫學校――ここには、僕の知つてる少壯有爲の醫學者も居る――に奉職し、もはや滿二年を經過した。話し相手のないので、殆ど閉口して居るらしい。一緒に人形芝居を見に、堀江座に行つた。（文樂座へは、その翌日、他の人と行く約束があつたのだ。）

今一人尋ねて見たかつたのは、まだ會つたことはないが、僕が一昨年から公けに屢々論戰した角田浩々氏だ。幸ひ、僕の宿つて居た大川町に、同氏の出る大阪毎日新聞社があるので、一日行つて名刺を通じた。或人の說に據ると、論敵と會見すれば、知らず識らずその論旨が妥協して、旗幟が不分明になる恐れがあるといふが、それはもう一歩極むればナポレオンの所謂「屢々敵と戰ふべからず」と同樣・ただ單にその場の勝敗を決する必要がある時の態度であらう。自信を以つて自己の發展を期するのが生命であるものが、敵と會つたからと云つて直ちに意見が移り行かう筈もなし、且、また愉快なところもあるのだ。浩々氏も愉快だから一緒に飲まうと云ひ出し、堂島の魚岩といふ料理屋に行つた。龍堂氏が僕のところへ尋ねて來るかも知れなかつたから、來たら直ぐ來る樣にと電話をかけて置いたが、その日は見えなかつた。

現今、新體詩を云々するものは、詩作家そのものでも、ただまた聞きのそのまた又聞きを敷衍して居

る。ただ二三の偏見を人手に通して議論して居る。つまり、評者に自己の獨得がないのである。これからは、先づ僕の新著『新體詩の作法』から始むべきものばかりだ。浩々氏の詩論も、泣菫氏並に鐵幹氏の云ひさうなことが多いので、僕は平生同じ疑ひがなきにしもあらずであつたから、僕はわざと氏の説が明星から出るのか、明星のが氏から來るのかと尋ねたら、『いや、わツちのは支那の詩話からです』と答へた。その古い平凡な點に於ては、支那から出ようが、明星から來ようが、現代の新傾向に對しては對した相違がないのだ。昨年までの論戰に對しては、氏は他に多忙のことがあつた爲め無精をして、僕に云ひ負けてしまつたのだと辯解した。互ひに育つて來た樣子を語り合ふと、氏と僕とは正反對で、それがお互ひの言論に現はれて居るのだらう。僕は初めから激されて來たから、今でもまどろツこしい折衷説を立てる氣にならないが、氏は多少自己を曲げても、無難な道に安じようとするのだ。島村抱月氏も、その云ふところを見ると、この肌合に屬する人だ。かういふ傾きがあるから、浩々氏は會つて見ると温厚な君子だが、君子と云はれるもの程、人に知らさないで、手段に腐心して居るのが常だから、その手段の方に心が取られて、つひに要領を得ない動物になるのだ。新自然主義は決してさういふ人を待つ必要がない、然し、僕は大阪に一人の友人を増したのを感謝する。

五

僕が故郷を出て、初めて大阪に遊學した時出來た友人が三名ある。青年時代は、この四名とも、別

であつた。仲居といふものは、大阪では、「ねいさん、ねいさん」と呼ばれて、たか〳〵いかさん」て、藝者等はそれに頤使されて居る。藝者等と共に坐して、お座敷以外で、無邪氣なお正月ばなしを聞いて居るのも面白いものだ。

六

大阪はペストの流行地だから、長く留るはよくないと、途中で忠告されたが、來て見ると、東京に於ける虎列剌騷ぎと同樣。どこに花道からせり出す鼠が居るのやら。殆ど心配はない。然し、たまに、その界隈をトタン板で圍んであるのに出會ふと、餘り氣味のいいものではない。知り合ひの醫者の言に據ると、市民の衛生的あたまが發達して居ないので、患者を隱蔽する風がある。一方からいふと、誰れしもへぼ醫者の爲めに、さうでないものをさうだと見誤られたくない心もあらうが、兎に角、全滅してしまはないのは歎ずべしだ。今回は、まだ、醫者にやられたものはないが、検疫官が二名も倒された。

大晦日の晩に、市中をぶらついて見たが、東京と違つて、街幅が狭いのと、店屋の飾り附けと云ひ、人出の工合と云ひ、随分盛んなものだと思つた。その間を自轉車に乘つて通らうとした紳士が、僕の直ぐ前を行く人にぶつかつて、飛び降りたが、僕も鳥渡癪にさわつたので、『やつつけてやれ』とけしかけたら、何だかふたりで云ひ合ひが始まつたらしかつた。雜誌屋の店さきには、「少

年、『少女界、』『女學世界、』『實業の日本』等が最も多く出て居る。大阪で出る『滑稽新聞』(月二回)の如きは、百八十號もつづいて、毎號三萬も刷るさうだが、東京の『パック』と同樣、また滑稽も諷刺もごツちやになつて居て、その意味と云つたら、どれもこれも、ただ直接に人身攻撃にあるかの樣に見えるのは、僕等の取らないところだ。もつと有情的に、または鋭利に、而も有効であつて貰ひたい。

大阪人の洒落は東京人のよりも下品で、また、ねつねつして居るので、嫌氣がさして、その本義を失ふことが僕等と話をして居る間にもある。或時、玉突き屋へ行つて、初めて逢つた人と玉を突いて居ると、『負けたら十錢損やさかい』は洒落のつもりだらうが、實際に負けかかつて來て、その一生懸命にしやべり出す樣子と云つたら、前言の心持ちを眞面目に實現して居るとしか見えない。金錢本位の都會には、趣味的餘裕は發達し難いだらうか？

新年三日間といふものは、店を閉ぢて、商賣をしないので、煙草一つ買ふのにも困つた。夜などは、しんとしたものであつた。初荷といふ見えもしない。すべて物事がじみで、實利的で、東京の樣な花景氣をつけない。すべてが、もう、商人的に出來て居るのだ。且、一事件が起ると、直ぐ同業者に分り、また僅かの事も同町内に知れる樣な組織になつて居る。それに、近來、新空氣を呼吸する人士が増して來たので、商人でも人間としての價値をも考へる樣になり、新らしい發展を預表して居な

いでもない。新聞で云つても、保守的な『大阪朝日』よりも、進取的な『大阪每日』が市中に於ては讀まれる樣になり、また『大阪時事』は品のいい新聞と云はれて根據が据わりかかつて居るし以上に『大阪新報』と昔の『萬朝』式で行く『大阪日報』とが加つて、競爭の姿だが、東京の樣に新聞社の數が多くないから、それぞれ發達の見込みがあるらしい。趣味といふ樣な問題も考へられるので、それ名とする東京雜誌もあちこちの應接室で見ることが出來る。『新思潮はまだ出ませんか』と、僕等屋へ這入つて來た青年を見受けた時は、これが編輯者に對してその異數なのを祝した。

淸交會といふ每月一回の會合があつて、同地には珍らしい談話交換會である。僕等が東京でやつて居る龍土會の樣には、まだ歷史もなく、また邊幅を飾らない工合には行かないが、菊地侃二氏を初め、兎に角、多少の新智識にあこがれて居る有力家、辯護士、醫師、敎育家、新聞社員、實業家等、三十名ほどが加入して居る。大阪の醫師社會には、割合に政治家的人物が多いので、議員または有志家として市の事業に容喙するらしい。新帝國大學の初めて關西に設けられることになつた際、之を大阪から退けて、京都へ持つて行かしたなども、同市に醫科大學の病院が出來ては、多くの開業醫がその影響を被るのを預知して、醫者中の有力家が反對運動をした結果だ。つまり、京都の同業者等はそれだけの意氣地がなかつたのだ。然し、角田浩々氏が朝日から每日に轉社したことに對し、上級の社會から、まだ正當な理由を見留められて居ないのは氣の毒だが、かの菊地幽芳氏の如き者が小說家と

して大先生と呼ばれ、自家も亦それが爲めに自重して、大抵の會合には出席を斷つて居るのは、最も滑稽なことで、さすがは、まだ大阪だわいとうなづかれる。先般澁谷小波氏一派の來た時、その歡迎會にのぞんだのは珍らしかつたと云はれて居る。

七

芝居に就て云へば、大阪はもと、俳優の藝を磨く點に於ては、東京よりも寧ろ本場と見られて居た程で、現今でも、既に角、物故した團菊左と時を同じくして居た右團次、團藏、仁左衞門、雁次郎等が踏ん張つて居るのだから、渠等から見ると、一時代若輩たるものばかりが居る東京とは、その威力に於て到底比べものにはならない。然し、渠等は舊劇の型ばかりにこびりついて居るのだから、新時代に適する新らしい藝道――新開物を舊劇の標準で見せるのを指すのではない――を望むことは出來ない。この點に於ては、芝翫、八百藏、猿之助は似たり寄つたりとしても、東京の若手連、たとへば高麗藏、羽左衞門、左團次等の方がまだしも――五十步百步の差に過ぎなからうが――他日の望みがある。

右團次は老いぼれて、その得意の踊りももう冴えないにしても、仁左衞門の澁み、雁次郎の輕妙、團藏の塗りこくつた藝風には、或程度まで甘みが附いて居る。然し、團藏がもと東京役者であつたといふ事情を除いては、いづれも東京には向かないのみか、渠等の土地に於ても、同じ樣な型を見せられるに倦じて來て、高田一派の新劇に觀客を分たなければならなくなつたのだ。現に、道頓堀の

五座のうち、一は新派劇に、一は活動寫眞に占領せられ、餘すところの二座が漸く彼等の舞臺である。僕の行つた時は、いづれも滿員になつたが、三ケ日のことであつたから、當然であつたのだらう。四月頃に團藏が上京するさうだが、十年前とは違ふから、その有名な光秀や仁木彈正も大した歡迎は出來ないだらう。

人形芝居は文樂座と堀江座とに分れて居るが、前座に攝津、津太夫、越路あり、長門、吉兵衛、實ぁあり、後座に、大隅、伊達あり、團平、小團次あり、桐竹紋十郎または吉田兵吉の人形つかひ振りも實に甘いものだ。東京人は一般に淨瑠璃を人形に添はすのを嫌ふが、それは聽き馴れない、または目馴れないせいでもあらう。馴れれば、なかなか賞翫すべきものだ。吉田屋に於ける夕霧伊左衛門、信長記の天下茶屋などに至つて、上手な淨瑠璃と三味線とつかひ振りとがぴツたり一致すると、場が引き締つて、聲は人形から聽えて來る樣になるのだ。かうなると、現今の樣に不熱心な俳優の似而非藝を見るよりも、遙かに人形の方が活きて居て、ずツと藝術の本領を得て居る。

人形芝居は僕の生國淡路が本元である。志賀剣川氏がその紀行文の一節に「淡路の誇るべきもの、兆殿司、嵐雪、高田屋嘉兵衛のみにあらず」と云つたのは「淡路常磐草」の著者にして、享保年間、國禁を犯して韓半島を跋渉し、後日、日露戰役の時役に立つた地圖を製した奇傑、仲野安雄翁を加へようとしたのだが、現代の如く藝術なるものが認められる時代には、傀儡師の元祖、道薫坊（日々に

云ふ、木偶をでくのぼうと云ふのは、この人の名を訛つたのだ）の遺業も、一種の誇りとするに足るだらう。人形操座（一名、淡路座）といふのがあつて、その座本が二十軒餘もあり、一村擧つて同業者で、淨瑠璃語り、三味線ひき、でく使ひ、道具方を分業し、その魁たるものを市村六之丞、上村源之丞と云ひ、年中諸國を巡歴興行してあるいたものだ。日本一の大人形を使つて、なか／＼文樂どころではなかつた。

淡路の源之丞と云つたら、代々その名を繼ぎ、明治年代になつてからも、有名であつた。僕が之を最後に見たのは、十數年前、京橋木挽町の厚生館であつた。今では、その別派の藝術が大阪に開け、文樂座となり、堀江座となつて居るが、淡路へ行くと、若い衆と云はれて、煙草入れを腰に提げ出すと、必らず淨瑠璃を稽古するので、何屋の主人、どこそこの隱居と云へば、素人でも、之を披露するのに、操りに掛けなければ滿足しないのだ。中には、上手から本氣になつて、大阪の本場へ乗り出し、金がふり撒ける間は、「大夫、太夫」と歡迎され、いい加減使ひ果した時、さんざとほうり出されてしまうものがある。僕のまだ國に居た時、淨瑠璃が大相甘い娘の子があつて、その道の爲めに五百金で買はれて行つたのを覺えて居るが、若しその子がまだ生きて居て、尙その道に忠實であつたら、どこかの一座で名を擧げて居るだらう。

八

大阪築港があらまし出來たと云ふ當座は、なかなかな人氣であつたが、まだ今でも行つて見ると、隨分宏大な事業であるのは事實だが、陸上の設備がまだそのまゝにうツちやらかしだから、目的通りの繁榮を見ることが出來ない。且、その計畫を立てた當時の人々には、七千噸——これが最大標準——より以上の船舶は、殆どその念頭にのぼらなかつた程だが、現今では、一萬噸以上のものがわが國に於ても出來る樣になつた。これは、大阪築港の樣な大計畫でも、半ば無益の遺物たるを免かれ得なかつた所以の一つである。然し、兎に角、あれだけの事業を進めて置きながら、大阪市民はぐづぐづして、いつまで之を、回航船で出かける呑氣人の、魚釣り場にして置く氣だらう？

電車も、築港から花園橋までは通じて居るが、他の計畫は漸く梅田停車場から天王寺へつツ切る一線を着手して居る。もつとも、目抜きの場所をうち抜いて、新たに道をつけるのであるから、その困難と費用とは、東京の比較を以つて考へては間違つて居る。大阪は、東京、京都、名古屋と違つて、電車の便はない代り、人力車の安いところだ。京都でも、或朝、北野から塔の段まで、一里半もあるところを、二十錢呉れいと云ふので、試みに十五錢に値切ると、まア、乘つて見た上で、値打ちがなければ負けますと出られたことがあるが、大阪の車夫も同じ行き方で、かけ値がないから、安心して乘れる。

抱への車夫などは、わざと威勢よくかぢ棒をおろすと、乘り手は直ぐ膝かけを車夫の背中に投げ

て車を下りる。車夫は、また、手早く、背中のを取つて、脇へ抱へる。これが、東京でも同じだが、意氣な風だと思はれて居る。それに、車の速さは日本一と大阪人は自慢するが、路幅の狹いせいか、四角や人込みで、自他の車夫がよけ合ふ工合などは、まどろツこしくて、僕等は見て居られない。もつとも、數年前、麻裏を穿いた若車夫の車に、天王寺から道修町まで乘つたことがあるのを、僕は思ひ出したが、そんな頓馬なにやけ車夫は、當今絶えてしまつたらしい。ただ見ツともないのは、相乘り車の澤山あることだ。二人分が一人半で濟むから、大阪人の始末た氣質に引かれて殘つてるのだらうが、夫婦相乘りなどは、馬車と違つて、餘り見よいものでもない。然し、一寸面白いのは、酒にでも醉つてる時で――或夜、お茶屋を引き上げる時、呼んだ藝者どもが『姉はん、相乘りなよろしい』と云つてるのを聽き、ずう體の大きい友人と僕とが一緒に乘せられるのかと思つて居ると、藝者どもの中から、二人が別々に分れて、僕等と同乘で、宿まで送つて來た。

風呂場の流しは、どの風呂屋でも、すべて石を敷いてあるのは、東京の板敷よりも氣持ちがいい。殊に朝湯などには持つて來いである。然し、水槽のふち石の上に桶を置いて口をすすいだり、同じ桶でふんどしを洗つたりするものがあるのは、面白くないことだ。且、細長い亂れ箱に足袋や股引や着物を入れ、自分の紋羽の腹卷でその上をつつんで居る男を見受けた時は、さすが、贅六根性の一發現だわいと思はれた。床屋も一體に奇麗でまた丁寧だが、何だか手のろい樣な氣がした。或時、天王教

の宣教師らしい外國人が這入つて來て、日本語で「いつもの樣に」と命じて、暫く刈つて貰つて居る時に
が、神の與へる時間を空費しないといふ手本を示すかの樣に、刈つて貰ふ最中にも、左右いづれかの
手を膝までさし延ばして聖書を廣げ、刈り子の體をあちらこちらへ避けるに急がしい樣子と云つた
ら、最も好良なポンチ畫にもなりさうであつた。大事なレフレッシュメント、乃ち、休養を自ら捨てて
して遠ざけ、而も活人生に近い書を讀み耽けるから、尚更らに活人生に近いミイラ教師が出來るので
ある。

車屋にしろ、風呂屋にしろ、床屋にしろ、年末年始の御祝儀を貰つた時で、その袋を飾りつけて、
もつと貰ひたいと云ふ樣子が見えるのは、どこの人情も變はりはないが、さういふ時節に限らず、寄
席へ女義太夫を聽きに行くと、何町のなにがし樣よりだれそれへ何圓御祝儀と披露し、その紙幣が竹
に挾んで、語り手の見臺のそばに立てるなどは、大阪でなければないことだらう。

今一つ競馬だが、花を引いたり、賭博をやつたりするのと違つて、勝負を公然とその瞬間に決する
のであるから、男らしいかけ事だと云つて、大いに奮發して行くものが、大阪にも多い。人間を數倍し
た大動物が、一生懸命に疾驅して、一蹄一歩の決勝點を爭ふ勢を見ては、如何なる卑怯者と雖も、快
哉を呼ばないことはあるまい。浪花節の讀み物が日露戰爭勝利の一大動機となつたと同前、競馬の如
きは國民と社會とを活躍さすに於いて盛んに獎勵すべきことである。殊に、貴賤老若を問はず、不斷

は内氣な婦人も多く行くのは賴母しい。大阪でも、之は同じことだ。僕が貴料理屋へ行つてる時、その女將と女中とが鳴尾の競馬から歸つて來て、挨拶に出たが、その話をするにも胸が躍つて居たのは、社會の生活問題を頭腦に置いて考へて見給へ、金錢上の損得以上の或物が動いて居たのではないか？必らずしも馬に關するから景氣で終るばかりではない。前項に擧げた床屋に於ける宣敎師とこの女將とは、興味に對する消極積極兩端の好一對ではないか？その日の勝負のうち、一方は馬がさきに、一方は乘り手の首がさきへ出たといふので爭論が始まつたが、後者をかけたものがかけ金だけを戻して貰ふことになつて、定りが附いた。

九

もとの同窓で、今はその學校の長をして居る友人と、住吉へ遊びに行つた。住吉は大阪人に對する最もいい公園である。今年の惠方に當つて居るので、六詣人が殊に多かつた。あんなに長い松林の間を逍遙したのは天の橋立に遊んでからこの方初めてのことだ。もつとも、橋立の風景はその奇、詩に入り、住吉の平凡で俗氣ある如きではない。そこを通り拔けて、わざ〳〵海岸まで出て見たが、大阪灣――茅渟の海の――潮氣を吸つて、對岸、淡路島の浮ぶを雲霧の間にのぞんだ時、僕は先づ亡くなつた慈母の顏が見えた樣な氣がし、次ぎに九歲の時の初戀が思ひ出され、次ぎに又、美姬三千を從へて歸ると云つて鄕國を出たことが追懷された。更らに又、住吉のよりも長い松原――その松の葉色

は、今幽かに見える藁屋に掴つて居るのだ――に、小學の國定教科書をつれ行き、『十八史略』で讀んだ藺相如が、趙の國から、秦の昭王の強請に從ひ、『十五城を以つて之に易へん』と云はれた和氏の璧を持つて行き、昭王に欺き取られかけたので大いに怒り、璧を取り返し、柱下に直立して『臣が頭は璧と共に碎けん』と云ふくだりを仕組み、之を生徒等に演じさせたところ、相如に扮した小供が璧を取り落すまではよかつたが、その次ぎの大事なせりふを忘れ、却つて『怒髮冠を指す』とある處の文句を云ひ、つてしまつたので、皆のものが笑ひ崩れたあり樣が、僕の心に浮んで來た。この劇作者は床屋の息子であつたが、あはれや、犧牲の爲めに、下駄を以つて眉間を割られ、齒の跡なりに腫れた傷が死因となつた。

かういふことを思ふ時の外は、僕は故郷が戀しくない。僕には、日本國その物を離れない間は、人の戀しがる樣な故郷がないのだ。父が維新園引けの際、淡路へ移され、僕はそこで生れは生れ、育ちは育つたが、江戸言葉を使つて居た爲めに竹馬の友は少かつたのみか、小供ごころに印して消えない迫害を受けたことが多かつた。故郷は寧ろ、僕の爲に、孤獨性と傲慢の念とを養ふところであつた。それに、僕の家の墓所も、祖父母一對のを除いては、すべて代々、故郷とするには騷々し過ぎる東京にあるのだ。然し、それも馴れツこになつてしまへば、不安と騷擾との間におのづから休養も得られるので、かの古典派の喜ぶわざとらしい懷舊的隱れ家などは必要がない。僕の生涯は餘りに夢の如く

現はれ、夢の如く消えて行つたので、今では僕の外に僕の頼むところはない。僕の故郷は、乃ち。僕自身である。宇宙の應援も不安も悲痛もただ、僕の双肩にかかつて居るのだ。

水銀を流し込んだ様に重く、平らかな海の表面は、平穏と云はんよりも、寧ろ數々の悲痛が込合つて、動きの附かないのであるかの様に見えると、くるくるまわつて沈んで行く眞ツ赤な夕日は、不言不語の間に、心熱的努力の最後の色を呈して居る様である。この勢ひを見ても、なほ、世人は之を不健全といふだらうか？僕はこれで以つて一生の活動をつづけたいのである。僕の落日觀は、この度の旅行に於て三轉した。はじめは、銀閣寺の山腹に於て、古典派と讃美を共にし、次ぎに阿彌陀ヶ峯の絶頂に、獨り、わが國最大のデカダン家豊太閤の沒落を聯想し、住吉の濱岸に至つて、終ひに自己の生涯に對する一奬勵を得たのである。デカダンたれ、デカダンたれ、デカダンは決して手段や方法ではない、實に一大努力の必須避くべからざる結果である。

住吉の社前、舞樂の庭で、敷いてある莚の上に坐はり、六名の巫女に舞ひを舞つて貰つて居る商人體の一族が居たので、立ちどまつて見ると、巫女は揃ひの扇を以つて、東遊じみた一曲を倚に合はせて舞つたばかり、極お粗末なもので、飾つてある鈴さへ手にしなかつた。何の祈願があつたのか知らないが、一族が奉納した物が少かつたのだらう。また大樹の根もとに小石が澤山あるのを、その石垣の間から杖などでかき寄せては拾つて居る多くの老若男女があつた。その小石が子供の出來るまじな

ひだようだ。遊覧はいづこも同じことだから、さう手易く人目を驚かせられるものでなく、自付に大戰爭のあつた時とは云へ、日本國民もうやう〳〵出來て、例の移民問題が一層盛んになるだらうから、腰の弱い現今の外務省の官吏を泣かせてやつて居るのだといふ、一種のなさけない感じが僕の胸に浮んだ。移民團員の一人からこの感じを全く取り去るのは、當局者の一條件とすべきところではなからうか。

松原の間に小さな茶屋が所々立つて居るのは、この公園の最も俗な點だ。夫人はどこかで晝飯をとらうと云つたが、さういふところでやりたくなかつたから、大阪へ歸つてから牡蠣料理へ這入つた。牡蠣は、大阪でも、廣島から來ると稱して居て、これ專門の料理は、殆ど至るところの橋々につないだ船で、客を待つて居る。滋養もある上、なか〳〵甘いものだ。東京でも、これを眞似るに、また京都大阪の樣に備付に、やつて貰ひたいと僕は思ふのである。

一〇

奈良は二三度見たことがあるので、この度は行きたくなかつたが、歸途、關西線に乘つて、法隆寺驛に下車し、同寺の御藏寶物を一見した。非常に寒い日で、僕の外に參觀者はなかつた。規模を古に溯り、匠を百濟に徴したといふ佛閣伽藍の結構、木造にしてその美觀を一千三百餘年の久しきに保つものは、恐らく、世界に稀有の誇りであらう。寶物は隨分丁寧に見たつもりだが、金堂にしろ、寶

藏にしろ、四方の扉を明けさしても、何分光線の這入り方が不自由なので、がらす越しに見せてある物などは一しほはツきりとは分らない。直接に研究の必要あるものが行くなら、一々之を光線中に取り出すか、またはランプか蠟燭を持つて這入るか、どちらかの便利を與へて貰はなければ駄目だ。

ふツくらした曲線によつて出來た地藏菩薩立像（國寶、百濟の國渡來）や丈のひよろ高い、ヤンキー然たる虛空藏菩薩立像（小野妹子將來）の如きは、然し、特色があるから、直ぐ目にとまる。金銅の鑄佛などはいづれも奥深く飾られて居るので、却つてはツきり見えず、ただその輪廓と光背とが分るばかりだ。推古天皇の御物、玉蟲の厨子といふのは、玉蟲の羽根を以つて青貝の光に代へた物で、その扉に出て居る模樣は、丸善から發行する「學燈」の裏表紙に載つたことがあるさうだが、手にしながら、僕は氣が附かなかつた。その寶物は單純な模樣であつて、まだ繪畫とまでは進んでゐない。

わが國に於ける壁畫で殘つてるのは、奥州の一寺とこの法隆寺とであらう。金堂の四壁は、各々その中央について居る重い扉で開らかれると、その左右に各々一間面の彩色佛畫が二面づつ（都合十六面）並んで居る。四隅に接して居る八面は光線不充分の爲めに餘り見えないが、入り口に寄つてる八面は、四方の口から這入る光に照らされて、多少全面を判ずることが出來る。古色蒼然たるものだが、變色やら、脫土やら、劈痕やらで、完全のままなのは殆どない。然し、赤珊瑚を碎いて色づけてあるところなどは、ぼろ〳〵しながらも、まだよく殘つて居る。原畫は止利佛師の作だが、一度燒け

たので、凡そ百年後、再建の時、和銅年間の名匠が元のまゝに再現したのだ。止利時代の藏佛は、支那六朝の遺物と同じく、形體凹凸の變化に乏しく、曲線と雖も一行してゐるので、間が拔けて朝鮮人の面である。壁畫の如き規模に於ても、まだ兆殿司の筆に於けるが如き卓拳の大規模には見えてゐない。而し仕樣[illegible]聖德太子を畫いたのだといふ掛け圖を見ると、また、丸で日本人にはなつて居ない。

もつとも、太子その人は輕浮淺薄なハイカラ黨の面影があつて、一面は僕の甚も嫌ふものの一つだが、この法隆寺建立者當事の新事物は、すべて朝鮮臭かつたのだらう。舶來の佛像が朝鮮づらをして居るばかりでなく、日本で出來たもの、畫いたものでも、すべて朝鮮づらをして居る。一も二もなく佛法を盲信した太子に取つては、或は、朝鮮人の樣な間拔けな面に畫かれて、却つて得々として居たかも知れない。法隆寺に來たつて、この點を思ひ起さすものが多いのは、餘り氣持のいい方ではないが、さればとて、日本美術の源淵も亦ここにありと思へば、また有難い氣もする。ただ殘念なのは、光線の不充分なことで、あんなことなら、いつそのこと、大枚一圓の觀覽料を拂ふ代りに、それだけの畫はがきを五六組買つた方が、實物の形が跡まではつきり殘つていいと思はれた位だ。

大佛は今修繕中で見られなかつたとは、奈良見物濟みの旅客が汽車中での話だ。あの間拔けた大佛と大阪城の石垣の大石（下から上まで一石のところがいくつもある）とは、わが國史に於ける大權力者の發現を追想さす好材料である。ああいふ樣な千人萬人の力を要する馬鹿げた工事は、絶大の威嚴

と壓制とが行はれる時代でなければ、決して出來ないことだ。かういふ考へをめぐらして居る間に、汽車は名古屋驛に着したので、鳥渡下車して、一老友の傳馬町に居るのを訪問し、歸途を急ぐので、ただ二三時間の懷舊談に名殘りを惜みて、再び同驛へ戻つた時は、もう夜が更けて居た。

二

いてふ返しの意氣な年增が、隅の方で、その袂や帶の間を頻りに探して居たが、つひに席を立つて、待合室を出て行つたのは、何か落し物でもしたのであつたらう。再たびもとの席へ戻つてからも、矢張り何かを氣にして居る素振りを見ると、落した物が見當らないのであつたらしい。やがてその態度が變はると、今度はハンケチを出して涙をぬぐつて居た。附近の休息所の女中にしては餘り品があり過ぎるので、誰れかの別れを惜みに來たのでもあらうが、そばに居る人も見えなければ、之に話しかけるものもなかつた。その寂しさうな樣子に、僕の好奇心が釣り出され、一方の隅から注意を怠らないで居ると、下り列車が着いた時、中央のテーブルに向つて腰をかけて居る會社員風の一老紳士が立ちあがつた。すると、その手から、女は白い毛布をひツたくる樣にして取り、無言で、紳士の跡について出て行つた。

他の旅客もおほかた居なくなつたので、跡の寒さを僕獨りで占領するかの樣にちぢとまり、ストーブの消えかかるのを見つめて居ると、いろんな妄想が形を現はして迫めかけて來た。やがてそれが油

のしたたる樣にをさまると、眼界の境が開けて行く時の樣な氣持ちになつた。そこへ、[illegible]、[illegible]が石炭をくべに來たのに氣がつくと、ふと忘れて居たことを思ひ出した。外でもない、雜誌『少年』に送る原稿のことだ。同誌の發刊以來、ここに四五年間と云ふものは、僕は毎號少年詩二篇を出すことに定つて居て、そのうちの一篇には必らず北村季晴氏の作曲がつくのだ。對して骨折りを要する物でもないので、僕は毎月末の一二時間を之に當てがつてあるのだが、今回は旅行の爲めに七八日も後れてしまつたのだ。

鉛筆を持つと、おのづから出て來る習慣になつてるから、寒さにふるへながらも直ぐ出來た少年詩は『雪の汽車』といふのである、からだ。

窓から　見れば、
いづくも　白い。
雪の　あした　の
汽車　こそ　面白けれ。
ぽツ、ぽツ、ぽツ、
がツたん、がツたん、がツたん。

すくめよ、すくめ、
枯れ木　も　綿に。
雪の　綿野　を
汽車　こそ　横切る　なれ。
　ぽツ、ぽツ、ぽツ、
　がツたん、がツたん、がツたん。

野やま　も　すされ、
枯れ木　も　去れよ。
早い　朝汽車
朝日に　勇みて　飛ぶ。
　ぽツ、ぽツ、ぽツ、
　がツたん、がツたん、がツたん、

右に作曲の出來易い樣に注意して作る方だが、今一つはいつも小兒に自然な調子を摑んで、おのづから口にのぼる樣にしてやるのだ。左に出來たのはねんねこ唄の口調によつて居る、「鳶の子」と題す

る物だ。これが出來た頃、漸く上り列車に乘れた。

ひゆうどろ、ひゆどろの　鳶の子　は、
都の　お母さん　を　戀しがり、
寒中、田舍　の　さむ空　を
山　より　高くも　あがつたが、
都は　遠くて　見えも　せず。
何日　寢たたら　歸るやら、
吹く風　ばかり　が　邪魔を　する。
いそいで　その巣　に　舞ひ戻り、
なアぜに　見えぬと　たづねたら、
お父さん　は　その子　を　だき寄せて、
お前の　お母さん　は　人でなし、
お前を　すウてて　家出した。

一二

行きには、月夜に何かの出現であるかの樣な富士をのぞみ、歸りには、また、ヽ、もとまで眞白た雪

を被つて、刻めば音がしさうなその姿を目前に見た。さきには遠く高く、のちには低く小さく、富士は之を見る時と場所と氣持ちとに從つて種々な樣子に見えるのだ。時に威嚴を以つて臨み、時に愛情を以つてほほゑみ、時に力ある命令者の如く、時に寛裕なる亡靈の如く、時に實物の如く、時に空想の如く、夢の如く見える時もあれば、うつつに似たる時もあり。大なる時もあれば、箱庭的の時もあり。何だか要領を得ない山だが、汽車旅行の際、窓に倚つて之を遠ざかり行くに從つて、ますますなつかしさの湧いて來るのは、僕に限らず、すべての人がこの山に對して實驗するところだらう。（明治四十一年一月）

日高十勝の記憶

オホナイの瀧

日高の海岸、様似（しやまに）を進んで冬島を過ぎ、字山中のオホナイといふあたりに來ると、高い露骨な岩山が切迫してゐて、僅かに殘つた海岸よりほかに道がない。おほ岩を穿つたトンネルが多く、荷車、荷馬車などはとても通れない。人は僅かに岩と浪との間を行くのであつて、まごついてゐると、寄せ來る浪の爲めに乘馬の腹までも潮に濡れてしまうのだ。

或高い岩鼻をまはる時など、仰ぎ見ると、西日に當つて七色を映ずる虹の錦の樣なおほ瀧だ。その

梯を、瀧に打たれながら、驅け登らなければならなかつた。その突きのお汗瀧は高さ五十尺、幅七八尺、俗に白瀧といふ。そのもとに、ぽつねんと立つてゐる南部人の一軒家がある。夫婦子供四人の家族だ。板や雜草で組み立てた、して家根には石ころをつみ重ねた家だ。

近年殆ど漁がなく、毎年、昆布百四五十圓から二百圓、フノリ並にギンナン草二三十圓、ナマコ二四十圓ぐらゐの收入を以つて、僅かにその生活を維持してゐる。十月初旬から雪がやつて來るが、それにとぢ籠められては、山へのぼつて、焚き木でも切るより仕かたがなくなるさうだ。

さう聽いて、頭上を仰ぐと、その山は直立した崖で、殆ど道もついてゐない。山に迫られ、冬と雪とに迫られるこの家族の寂しみを思ひやつても、ぞつとする。

そのあたりの潮が吹きかかる岩の間から、澤山のみそばへ並に岩れんげが生えてゐるのを二三株摘み取り、僕はそれを瀧と一軒家と自分の馬に瀧の水を飲ましたとのなつかしい記念にした。

猿留の難道

太平洋に突出する北海道の東南端、襟裳岬のもとを南海岸から東海岸に出るには、本道三難道の一なる猿留山道を踏まなければならない。

追ひ分道を歡別から庶野に越え、段々高くのぼつて行くのだが、この邊はよくおやぢ（乃ち、熊）

の出沒するところだ。然し生き物のにほひがするのは僕等と馬子の愛奴のセカチ（男兒）と、それらが乘る馬と、ついて來た小馬としかなかつた。

　如何にも寂しいからでもあらう、氣がせかれ、自然に馬をぼつ立てるので、馬子のセカチは僕等に注意して、さう馬の尻を打つなと云ふ。早くつかれさしては、いよ〳〵難道にさしかかれば、倒れてしまう恐れがあるからであつた。

　難道は降りだ。俗に七曲りと云ふのは、その實、十三曲りも十四曲りもあつて、それがおの〳〵十間または二十間づつに曲り、何百丈の谷底に落ちて行くのだ。馬上から見あげ、見おろすと、ぞつとして、目も暗んでしまう。親の乳を追うて僕等の馬について來た小馬（三ケ月の）は、或曲り角で石ころに乘つて倒れ、すんでのことで谷底へころげ込むところであつた。

　そんなにしてまでも、ポニイと云ふものは、てく〳〵と、どこまでも、親馬について來るのだ。日高を旅行すると、大抵の乘馬には、女馬なら、小馬が必らずついて來る。當歳から三歳まではさうだ。それがなか〳〵面白いもので、どこを來てゐるか知らんと思つて、時々乘り手がふり返つて見る。すると、相變らずてく〳〵やつて來るのだ。

山上の萩の露

僕等が猿留村に着したのは午後二時頃であつたが、驛遞ではつぎ馬がない、且、あすも十一時頃でなければ用意が出來ないと云ふのだ。で、そこにとまるのも胸くそ惡くなり、勇氣を出して、もう一驛さきまで徒歩することにした。然し二里半だと聽いたのが、實際、四里あつたには閉口した。

一里ばかり海岸を行き、それから山道に這入ると、日高の國境を越えて、十勝になる。僕等は甚だ勞れて來るし、日暮れには近くなるし。薄暗い低林の間の、アイノが毒矢にぬるブシ（とりかぶと）が立ち並んだ道路を進み、屢々小川を渡る度毎に、おやぢが出はしまいかと心配した。

僕は樺太の山奥に入る時、熊よけに、汽船から借りて來た汽笛代用の喇叭を吹いたが、さういふ用意がないので、僕は下手な調子で銅鑼聲を張りあげ、清元やら、長唄やら、常磐津やら、新内やら、都々逸やらのお浚ひをして歩いた。その功德によつてか、幸ひ、おやぢの黑い影も白い影も現はれなかつた。

然し猿留山道の七曲りに似た九折道を登る時などは、唄も盡き、聲もよわり、足も亦疲れ切つた。これを越えれば、もう直ぐだらうといふを力にして、やつとのことで山の背まで達し、それから勾配のゆるい下り坂になつたが、今度はまた非常に喉が渇き、からだ中びしよ濡れの汗が氣になる樣になつた。

然し道に澤山生えてゐる小萩が、葉毎〳〵に露を帶びてゐるのは、それを見るだけでも直に氣持ち

がよかつた。僕等は國境を越える時鳥渡雨に會つたが、それがこちらでは非常な降りであつたらしい。その名殘りで、道もじぶ〱してゐるし、萩の葉毎には溢れてこぼれる白露が置いてゐたのだ。

その露を踏み分けて進むと、そのこぼれが靴を通して熱した足にひイやりと浸み込む。それだけ僕等にはコップで冷水をがぶつくよりもうまい味であつた。

中下方の農村

日高の中下方(なかげはつ)には、僕が子供の時に聽かされた記憶を呼び起す淡路團體の農村がある。

王政維新の頃、淡路に於て稻田騷動なるものがあつた。阿波藩の淡路城代稻田氏が藩から獨立しようとする逆心があると誤解し、阿波直參の士族どもが城代並にその家來を洲本の城に包圍した。

そんなことがあつたのが動機になつて、稻田氏並にその家來の一部は、明治四年と十八年と、兩度に、北海道に移住してしまつた。渠等には、淡路をなつかしい故郷と思ふ樣な氣は無くなつた。といふのはかの騷動の時、渠等のうちには、その妻女は直參派の爲めに强姦されたり、姙婦にその局部を竹槍で刺し通されたといふ樣な目に會つてゐるものがあるからである。

この憤慨並に主君と同住するといふことが、渠等の北海道開拓に對する熱心の一大原因であつたらうと思ふ。第一回の移住者等が國を船出する時は三百戸ばかりであつたが、紀州の熊野沖で難破し、

百五十戶分の溺死者を生じた爲め、半數だけ（それが現今では僅かに三十戶）は北海道開拓の最初である。中下方にあるのはそれだが、第二回の五十戶は、今、同じ染退川添ひの[illegible]村にある。兩村とも實に北海道の模範部落村になつてゐる。

一見して、耕耘に熱心たことや永久的設備をしてかかつたことだけは分る。石狩原野の如きは、札幌でも、岩見澤でも、矢鱈に無考へで樹木を切り倒したり、燒き棄てたりして、市街地や田園などに風致がなくなつたばかりでなく、風防林までも切り無くして、平原の風を吹くがままにしたところがある。然し淡路人の村には、大樹をところどころ切り殘して風致を保つてある上に、家屋も他の方面で見る樣な假小屋的でなく、永久的な建築をしてある。

然し染退川が年々五十町歩も百町歩も、溪谷の集積土質の良田を缺壞して行く爲め、その度毎に村人の戶數が減じて行くのは殘念なことだ。

新冠の御料牧場

僕が新冠の御料牧場に行つて調べた時、馬の全數千七百餘頭——そのおもな種類はトロター、ハクニー、サラブレド、クリブランドベー、トラケーネンなどだが、競馬用にはサラブレドが最も多く、この種の第二スプーネー號と云ふのが園田實德氏の一萬五千圓で買つた馬の父であつた。それらを

馬舍から引き出して歩かして見せて呉れたが、それ〴〵特色があつた。背の高いのや、毛並のいいのや、姿勢の正しいのや、足の運びの面白いのや――して、アラビヤ種のすべて目が鋭く、涼しいのが、其も深い印象を僕に殘した。

周圍二十里、面積三萬三千二百十町歩、放牧區域七十二區、各區をめぐる牧柵の延長七十里に達する大牧場――高臺の放牧地は、天然のままだが、造つた樣に出來てゐて、恰も開伐したかの如く、樹木がいい加減に合ひを置いて生えてゐる地上には、牧草が青々育つて、實に氣持ちのいい景色だ。

僕等は、行きには、その間を驛遞の瘦せ馬に乘つて得意げに走つたが、立派な馬を澤山見た歸りには、一種の恥辱を感じて、逃げる樣にして驅け出した。

火山灰地の狀態

日高の門別村を東へ拔ける時、後ろを顧り見ると、遙か西方に膽振の樽前山の噴火が見えた。眞ツ直ぐに白い烟が立つてゐるかと思へば、直ぐまたその柱が倒れ崩れて、雲と見分けが付かなくなつた。

あれほど活氣ある火力を根としながらも、空天につツ立つた烟柱は周圍の壓迫に負けて倒れるのであるが、僕はその時地腹に隱れた火力を想像して見た。

がらツと一變、物凄い幕が僕のあたまの中でしたかと思ふと、その火山の大爆發當時のありさまが瞑目のうちに浮んだ。その時、西風が吹いてゐたのであらう、日高の方面へ向つて噴出した灰と石の灰が雲と發散して、御空も暗くなるほどに廣がつた。

その結果が今僕の目を開いて見る火山灰地である。數百年もしくは數千年以前に出來た地層が今まざまざと殘つてゐて、膽振から日高の一半に渡つて、地下六七寸乃至一尺のところに、五寸乃至一尺の火山灰層となつて、その白い線が土地の高低を切り開いた鐵路の左右に、郵便列車の白腹の赤筋の如く、くツきりと通つてゐる。

旅中印象雜記

其一

▽明治四十二年九月二十八日。岩見澤、雨あり。

札幌にばかりゐて、餘り退屈になつたから、鳥渡急速な、飛脚的な旅行を試みるつもりで、午後汽車に乘つた。して上ツつらばかりではあらうが、僕の心に受ける印象を書いて見たいのである。何が書けるかは、僕の旅中に出會はす物の何であるか分らない以上は、同じ樣に分らないのである。

車中で、ふと氣がつくと、あたまを繃帶した子供をつれた女客が三組乘り合はしてゐた。これが、

子のあたまを椽として、話し合ふのを聽いてゐると、いづれも札幌の病院へ行つた歸りである。「あなたもですか」、『わたしの子供も』と云ふ樣な挨拶だ。どうせ、その御亭主の舊惡露顯の一端であるのを知るや、知らずや。その手合ひは、停車毎に一組、一組とゐなくなつてしまつた。

岩見澤で下りると、直ぐ北海タイムス支社の名島氏を訪ねて行つたが、烏渡留守であつたので、獨りで市街を散步して見た。鐵道四通の中心でありながら、市中は餘り活動してゐる樣にも思はれない。家々の建築工合を見ても、假建築が永久的な住まひになつた樣なのが多く、發展最中に不景氣の爲めにあたまを壓さへられてしまつたといふあり樣が見える。多分都會の發達に必要な『近在』たるものが少く、且汽車の客は通り過ぎてしまうのが多い爲めだらう。假建築のままに燻ぶつてゐる店などが少くない。宿へ歸つておかみに聽いて見ると、當地の宿屋のお客と云つては、多くは荒物の賣り込み屋、吳服屋、越中富山の藥屋、さなくば、色女をつれ込みの男ぐらゐださうだ。かう云ふのでもなければ、岩見澤大小二十軒ばかりの旅館が喰つて行けないと語つた。

散步の眞ツ初めに、四ツ角で、誰れかの葬式の行列に出會つた。餘り緣喜でもないと思つたが、横切るわけにも行かず、停立しつつ脫帽してその行列を通した。何々宗說教所といふのが多いのに驚いたが、その一つを鼻垂らし小僧がわが家として出入りするのを見た時は、餘り感服も出來なかつた。

ところどころに、唐きびの實を軒に釣した家がある。樺太で云へば、漁師の戸外におほ鱈を縄で結

はへて釣すところだが、それを北海道的百姓で行つた型であらう。畑などは、茄子にせよ、大根にせよ、なか〳〵よく出來てゐる。

同宿の客に、京都から來たお婆アさんがある。話して見ると、當地に陶器の原料にいい土があるのを發見したので、職人を呼び寄せて、陶器製造所を初める、その場所を定める爲めださうだ。その話に據ると、室蘭線の某停車場地で料理店を開業してゐるおかみだが、その家業では儲けが少いので、人のやらない事業をと思つて、そこに考へが行つたのだ。それもなか〳〵いい考へだらう。京都あたりで十五錢、二十錢する陶器が、運賃と割れとを見込んでだらうが、北海道では實際五十錢から六十錢するのだ。それを運賃入らず、割れも少く製造出來るものとすれば、五十錢が四十錢、三十錢に賣れても、利益は充分に望まれよう。小樽附近にも陶器の原料にいい土があるさうだ。

其二

▽九月二十九日。岩見澤、晴。

朝、名島氏に伴はれて、先づ廳立空知農學校を觀に行つた。教師は十二三名、そのうち學士が四名。本年で三學年とも完成し、生徒總數百六十餘名。甲種農學校は、本道に於て、これが一つゐるだけださうだから、札幌の理論的な農科大學と違つて、實際の農業に從事する人物を出す樣になればよ

からうに、若林校長の談に據ると、道廳、その他の月給取り志望者が殆どその全數を占めてゐるらしいのは、本道の農業界がまだ〳〵充分の發達をしてゐない證據であらう。

それから、空知教育會の圖書館を觀た。備へ附けの書籍が少く、市街のはづれに建つてゐ、且、讀書家の少いところであるから、入館者の數が寂しいのは尤もなことだが、教育が割合に發達してゐる空知管内であるから、今少しそんなことにも注意して、堅苦しい書物ばかりでなく、小說・お伽話・雜誌等、廣く讀まれさうなのをも備へて、一般人が餘暇をそこに過す便利を與へたらよからう。然し活動圖書館の設けがあつて、その書籍を管内の各村に巡回さしてゐるのは、わが國では、まだ珍らしいのである。

岩見澤牧畜生產販賣組合の北海道バタ製造所も亦ら珍しい。牛を飼ふ以上は、種を目的としなければ、バタや乾酪、鑵詰などを製するまで行かなければならうそだ。牧畜が盛んらしい本道でも、そこまで行つてるのはまだ少い。それを觀てから、所々の田園や、果樹園や、牧場などをまわり、玉泉館といふ溫泉で午後半日を暮らした。

至るところ、かの腐爛病に罹つた林檎畑荒癈の跡を見ては、ぞツとするほど農產物盛衰の速かなのが思ひやられた。

名島氏の言に據ると、空知管內では、農家が餘り家畜を入れない習慣があるさうだ。然し北海道の

様なところでは、農夫は鋤鍬を取るかたわら、また牛馬を成るべく多く飼育する必要がある。その糞尿がどれだけ自然の肥料になるか分らないのだ。石狩原野が如何に肥えてゐるとしても、將來の爲めに肥料を使はないでもよかつたのをいいことにして、今でもそれを習慣にしてゐるのは無考へなことだ。そこになると。樺太の露西亞人はえらいところがあつた。その本國がさうなのからだらうが、農牧兼業をして、あんな痩せこけた島に於ても充分な農産物を擧げてゐた形跡がある。

其三

廿九日のつづき。

前便に於て、僕、岩見澤は發展の中途に於てあたまを壓さへられてしまつた、狀態があると云つた。今のところ、同町は外部から刺擊を受けることがなからう。餘り便利がよ過ぎて、汽車の通り越し客が多いからだ。然し內部もしくは近在からの發達は隨分見込みがある。廣い沃野を控へてゐるだけに、農牧事業が、どうせ、もツと盛んになつて來るには相違なからうし、その上、近い幌向川の上流に萬字炭山といふ立派な財源を持つてゐる。

同炭山は水準點以上に炭量三百七十萬噸、水準下のを合すれば一千萬噸以上に達すといふではないか？その炭質は本道最優等の夕張炭に匹敵し、一ケ年約十五萬噸の採掘量を豫定することが出來るさ

うだから、それを炭礦汽船會社が今やつてゐる樣な、架空鐵索によつて三里の道を夕張に運ぶなどゝせず、速かに萬字から岩見澤まで幌向川を添ふた鐵道を布設するに如くはなからう。幌向川沿岸も亦一體に炭層が連つてゐて、露頭は累々として至るところにあると云ふではないか？して、その沿岸はまた殖民地になつてゐて、大きい農場や鹽泉もあるさうではないか？さういふことを考へて見ると、岩見澤は今景氣があがつてゐない樣な町でも、なか〳〵望みの多いところだ。

僕は札幌からの急報に接して、今夜、最終列車で札幌に向つた。車窓からながめると、十五夜の月は廣漠たる原野を照らして、秋の夜氣が僕の寂しい周圍に迫つて來た。六月から家を出で、樺太に一夏を送り、引きつゞいて今また北海道を放浪する僕は、早く東京に歸りたい樣な氣持ちになつたが、汽車が幌向原野の一端を走つてゐる時、この不毛な泥炭地にもところどころ人家の燈火が見えるのを不思議に思つたと同時に、その燈火は丁度僕の樣な一文なしの寂しみを表してゐるのだと考へた。如何に北海道へ來ても、金がなければ何等の計畫も成立しないと等しく、かの火をともす家人が一個人として如何にこの大泥炭地の一小地積を開墾し得たとても、原野全體を乾燥さす爲めに大排水をしない以上は、その小開墾は殆ど無効力に終るだらう。

幌向原野に限らず、その他に美唄原野、雨龍原野など、國家事業の一つとして、先づその全體の大排水工事を起し、それから耕作、もしくは牧草培養などに使用さすやうにすれば、不毛の泥炭地と

て、決して馬鹿にして置くべきものではなからう。

其四

▽十月三日。膽振國鵡川、晴。

道會議員田口源太郎氏が土木勸業調査員として膽振、日高を巡視するに付け、僕も氏と共に行くことになつた。今一人、道廳の古賀技手もこの一行に加はつた。汽車で沼の端まで來たが、それからがたくり馬車に乘つて、鵡川へ着した。

勇拂まで來る間に、石垣某の大牧場や、殆ど全く大きな樹木のない泥炭地がある。三間幅の道は附いてゐるが、原野の表面と同じ高さである上、左右に排水溝を用意してないから、雨の日に車のわだちの喰ひ込んだ跡がでこぼこしてゐて、僕等の車が非常にがたくりして困つた。至るところ、火山灰のあるところだから、それを利用して何とか甘く道路を堅めるやうにすればいいのに。

勇拂は十五六戸の漁付で、小鰊とイリコとによつて立つて行くらしい。そこから一里半ばかりは丸で沙地で、車の輪がさく〳〵もぐり込んで道を毀して行くので、道路のつけ方が殆どないくらゐだ。そこには、イガボタンが赤い實を結んで澤山生えてゐるのを見た。イリシカペツ原野は三百戸の殖民豫定區劃が出來てゐる火山灰地だが、地盤が低い爲め、毎年五月頃になれば、水につかるし、開墾

しても、二年目には肥料を施す必要があるさうだ。

鵡川、外七ケ村の役場は千六十戸ばかりを支配してゐる。僕等はその戸長高松氏に會ひ、種々の事情を聽き取つた。三十里を流れる鵡川の沿岸は、三井並に王子會社の木材を供給するところで、本年、兩社の流送した石數は十萬だが、來年からは王子會社だけで二十萬石の豫定ださうだ。ところが、それが爲めに河水を汎濫せしめたり、堤防地を缺壞せしめたりすることが多いので、その沿岸の農民は會社に向つて、損害賠償的抗議を申し込むし、會社はまた、この川が河川法によつて規定されてゐないのを楯に取り、傍若無人の態度をつづけてゐる。この問題は、互ひに讓り合つて、早く無事にかたづけるがよからうと思はれる。聽けば、隨分あはれな川で、その兩岸は沖積土であるから、浸水毎に濕める灰の如くずぶ〳〵解け崩れて行くので、流れの道筋が度々變動し、堤防地と農地との區別がなくなつてゐるところが多くあるさうだ。

この村から三四里奥に廣別の土人部落があるが、そこは土人の方が却つて勢力があり、小學校でも、日本人の子供が土人の子供によくいぢめられるばかりでなく、日本人が土人の爲めに小作をしてゐるのもあるさうだ。大河内コビサントクといふアイヌの如きは、一ケ年に百圓の村費を負擔し、大きな土地の所有者であると同時に、殘忍な手段を弄する金貸で、金と女とよりほかに樂しみはないと云つてゐるさうだ。

僕等は五時間も汽車と六里の馬車とに乘りくたぶれたが、內地では見られない大原野を横ぎるのは雄大な氣がして實に愉快なものであつた。殊に、襟裳の原野のどこまでも一直線に延びてゐる道路は、がた馬車を驅りながらも、最も强い印象を與へた。

其五

▽十月四日。日高國下下方（しもげはう）、晴。朝、鵡川に初霜あり、下下方になし。

七時半出發して、平取に近づく頃から、土人に出會ふことが多くなつた。アイノのセカチ（男兒）が一人僕等の馬車と共に二丁ばかり走つたが、なかなか足が速い。沙流川の上流、平取にはアイノが四五百戸、全戸數の九分まであるさうだが、僕等は行く暇がなかつた。佐瑠太村は五日目毎に函館から定期船が來る便利を持つてゐる。沙流の大橋は鐵木混合だが、長さが九十五間、して馬國にあるだけに、橋の欄間には驅け馬を切り拔いてある。親馬が行くと、殆どどれにでも、必ず小馬がついてゐるのも亦僕には目新しい。

門別村を通り拔ける時、後ろを見ると、遠く樽前山の噴火が見えた。眞ツ直ぐに白い煙が立つてゐるかと思へば、直ぐまたその柱が倒れて、雲と見分けが附かなくなつた。それから多少高低があつて、切つた道路の左右には、東海岸一帶の地層の特色を現はしてゐる。上ツつら六七寸乃至一尺は土

質が惡くもないが、その下が直ぐ五寸乃至一尺餘の火山灰層で、その白い線は、第一層と第三層（これはいい土だ）の間を、郵便列車の中腹の赤筋の如く通つてゐる、而もそれが隣接の一半から日高一半に續いてゐると云ふのだから堪らない。牧場には差支へなからうが、して、牧場は僕等の道の南がはに、柵をめぐらして澤山あつたが、農地には不適當だ。樹の木が多く生えてゐるが、一樣にひねこびて、低く曲りくねつてゐるのばかりで、眞直ぐに高く延びたのはない。して、そのところどころに、日本人の家族で、アイノ人と同樣なみじめな小屋に住んでゐるのがある。

鶺鴒の多いのも注意を引いた。賀張村からこちらへ濱なすが多くなつた。前便でイガボタンと云つたのがそれだ。樺太では、六月の末にその花の時期が過ぎ、七月の中頃にはもう實がなつてゐたが、日高では、今頃赤い花が見られると同時に、また赤い實が附いてゐるところもある。

門別から荷馬車であつたが、厚別から、僕等は僕の長らく廢してゐた乘馬になつた。僕も、惰々ながら乘つて見ると、腰はふらつくが、然し、左程心配するには及ばなかつた。右に山（海岸まで低い山が出張つて來た）左に洋々たる太平洋を見をろし、落ちても怪我はない砂濱を驅けらすと、尻の痛いのも忘れて、僕の心は延び〳〵した。春になればトドが集つて來るといふトド岩を後ろにして、少し山路にも這入つたが、下下方まで五里の道を午後二時から四時までの二時間で乘ることが出來た。

下下方、外十四ケ村の靜内村役場に行き、長谷川村長から土地の狀況を聽いた。和人の戶數九百

零五、人口二千六百三十五に對し、土人の戸數三百七十、人口一千六百八十四だ。耕地二千五百五十七町歩に對し、牧場地九千七百九十四町歩だ。して牛二百八十六頭に對し、馬が一千七百九十三頭だ。耕地よりも牧場、牛よりも馬だ。海岸から三四里奥へ這入らなければ、熊征がたいさうだ。村長の馬は殆ど全く官用向きに育てる方針だ。と云ふのは、昨年來競馬熱が冷却したので、軍馬もしくは普通の乘馬としてより外に賣り口がなくなつたのだ。値段も昨年よりは半額もさがつたが、馬市で平均百二十圓であつたさうだ。

同村でも、二三里上へ行けば、濶葉樹が繁茂してゐて、枕木の原料になるさうだ。然し、ここにも染退川と云ふ難問題がある。山までは五里ばかりあるが、その間を、他の川と同樣、北海道流に曲りくねつてゐるので、雨が一日降り續くと、たとへ溢水しないでも、その水勢が兩岸の隅々をつつき毀し、集積土を以つて成る田地を三十町歩も五十町歩も流してしまひ、河底は荒れ果てて、ヤチや河原となつてゐるところが多い。村費を以つてそれが回復の出來ないのは勿論、地方費でやることにしても、充分の調査をしてから莫大な費用を要するのだ。然し工事をせずには置いとけまい。

この染退川の奥には、大理石があるさうだし、滋石がとまつたことがあるのを見ると、鐵鑛もあるらしい。また、松前侯が掘りかけた金鑛もある。厚別の國道には、石油が湧いてゐる。この日の行程十三里。

廿六

▽十月五日。下下方、雨、時々降る。

新冠の御料牧場を見に行くすがら、染退川の荒廢を調べた後、中下方の淡路團體の農村を通つた。ここの農民は、明治四年、阿波藩の淡路城代稲田氏に從つて移住して來た從臣だ。三百戸ばかり一緒に出たのだが、そのうち百五十戸は紀州熊の浦沖で難船してしまつた。その殘部（現今では僅かに三十戸）が北海道開拓の祖である。僕も淡路生れであるから、この話は子供の時から聽かされてゐたので、その實際を見て、多大の感慨を催さざるを得ないので、そのうちの一軒を訪問して見た。

淡路人のまた別な團體が同じ川の上流、碧蘂村に五十戸ある。これは、明治十八年、移住した仲間で、赤心社經營の荻江村と共に、本道の模範村となつてゐる。中下方附近は土質もよく、餘程深く掘らなければ火山灰などは出ない。米は一反歩に付き五斗入り四俵半をあげるさうだ。全體、淡路人の開拓成績がいいことは、一般の認めてゐるところ――その一二例を云ふと、耕耘に熱心なこと、永久的設備をしてゐること等だ。石狩原野の如き、風防林は勿論、家屋の附近にも樹木が殆ど全く影がなくなつてゐるに反し、淡路人村では、ところどころ大樹を切り殘して、風致を害しない樣にし、家屋も亦假小屋的でなく、永久的な建築をやつてある。思ふに、これは、城主に從つて來たのが尻を落ち

付けた一原因でもあらうが、今一つ忘れてはならないことがある。乃ち、稲田の從臣等は、維新の少し前、淡路に於て、阿波藩主蜂須賀氏の直家來から、藩主のあづからない事情の爲め攻め擊たれ、實女は強姦され、姙婦はその局部を竹槍で刺し通されるほどの目に會つたのだ。その讐念が乃ち本道開拓熱心の一大原因であつたらう。

御料牧場に行き、山下場長から多くの種馬や牝馬を見せて貰つた。少しでも馬に乘つて見ると、馬の說明などにも耳を傾ける樣になるものだ。今、全數千七百餘頭ゐて、おもな種類はトロター、ハクニー、サラブレド、クリブランドベー、トラケーネン等だが、競馬用にはサラブレド種が最もよく、この種の第二スプーネー號が園田實德氏の一萬五千圓で買つた馬の父だ。競馬熱が冷めてからの產馬方針は、乘り馬、引き馬として丈夫なのを出すにあるさうだ。前月の馬市で、同牧場の雜種馬は平均二百二三十圓に賣れた。蕃殖の割合は雜種で七分强、洋種なら八九分に行くさうだ。

四十二年度の收支豫算を見ると、收入十一萬八千百十三圓、支出十一萬〇百四十四圓。差引利益七千九百六十九圓。利益の少いのは設備擴張の爲めで、前年度は三萬餘圓の總益があつた。牧場の周圍二十里、面積三萬三千二百十町步。放牧區域七十二に分れ、各區をめぐる牧柵の延長七十里に達す。高臺の放牧場は自然のままだが、造つた樣に出來てゐて、恰も間伐したかの如く、樹木がいい加減に生えてゐる地上には、牧草が青々育つてゐて、實にいい景色だ。その間を通る時には、驛遞の痩せ馬に

乘つてゐても氣持ちがよかつたが、立派な良馬を澤山見た歸りには、僕等は一種の恥辱を帶びた心持ちで逃げる樣に驅けて來た。

牧場で、空知農學校生徒の修學旅行組に出會つたが、その多くは腰を曲げ、顏を青白くして歩いてゐるので、田口氏はそれを見て云つた、渠等は蝦の樣だ、如何にも元氣のないのは、運動の不足を證するのかも知れないが、あんな生徒が社會に出て有爲な人物になれるかどうか、疑問だと。

アイノの家が市父並に遠彿のヌツカに十餘戸ある。僕等はその一軒に立ち寄つて見たが、耕地があつて、不完全（雜草を充分に拔き取つてない）ながら農業をやつてゐる家だけに、生活狀態が多少進歩してゐる。家には立派な床板を張り、子供は小學校で習つた字を障子に奇麗に書いてあつた。

歸りにも、川の破壞場所を見たが、實にひどいものだ。淡路團の所有農田などは五十町も百町も流されてなくなつてゐる。鵡川は木材流送の爲め缺壞するに反して、染退川は洪水の出る毎に田地に喰ひ込んで來て、ほうツて置くと、つひには人民の所有地を平らげ、その餘波は御料地にまでも及ぶに相違ない。今、急に之を豫防するの必要がある。これは沿岸人民を安堵せしむる所以であると同時に、開拓の祖たる功勞ある淡路團體を遇する一端にもならう。且、この川の沿岸には開鑿道路がない。現今通つてゐるのは、人の田地內に出來た自然の小徑に過ぎない。これを直す必要もある。

この日の行程八里。僕等は前夜のと同じ宿に一泊。前夜も今夜も村長、村會議員、並に有志諸氏が

來て、陳情するところは水と道路問題であつた。

其七

▽十月六日。日高國浦河、小雨あり、夜、强雨。

昨夜は大風雨あり、僕等は下下方の旅館が津浪に襲はれはしないかと思つた位だ。今朝、樺太の僕の工場からの電報が來て、直ぐ來いとあつたが、何のことか聽きにやつた。

午前八時出發。昨日、浦河から迎へに來て吳れた岡崎技手と都合四名、荷馬車に同乘だ。このあたりから山が海岸に迫つてゐる。その間に國縣道を走るのだが、火山灰があつても少いので、草木の繁殖工合が違つて來て、牧場並に耕地が多くなつた。

海岸にあがつてゐる船で、形は磯舟に似てゐるが、左右が前後に迫つて、ぴんとした舳艫の反り方が如何にもいい氣持ちなのは、僕が露領樺太のギリヤーク人部落で見たのと同じで、ただ舳さきの左右にそれと等しい定紋が附いてないのを多く數へることが出來た。アイノの所有に相違ないと思つて注意すると、シヤモとアイノの見すぼらしい雜居部落がそこ、ここにある。荏立村の如きは、比較的に大きい。して、いづれの人種に拘らず、板どりやその他の草を逆樣に編み並べて、家の壁板に換へてあるのがあつた。

三石村六ケ村は戸數八百八十、人口五千百零四のうち、土人九十戸、四百二十九名だ。役場で鈴木村長と話してゐると、アイノのメノコが數名收入支出ロへ出頭して來たのが見えた。同村の海岸三里の間に於て、秋鰺（鮭）鱈、鰯なども取れるが、ここの昆布は有名な物だ。然し、年三千石内外を標準としてゐるのが、年々減少しく行くのは、濫獲にも依るだらうが、ここにまた菅藻（俗に靑藻）と稱する害草があつて、昆布の繁殖を妨げることが非常たさうだ。或人がこの害ある海草を十坪ばかり拔き取つて置いて見たら、海底はそこだけよく昆布が育ち、船三杯に積み切れないほどであつたと云ふ。この村内にも、三石川並に鳧舞川の治水問題があつて、調べて見ると、なか〳〵うツちやつては置けない事情が分つた。

鳧舞原野や、赤心社農場のある荻伏村を通る際、ブシの花が咲いてゐるのに氣が付いた。三笠橋を渡つた時、山手の方にぴかぴかする物があつたので、御者に聽くと、鳥を追ふ爲め鏡を樹上に懸けてあるのだと分つた。豚芋といふ草で、一丈ばかり延びて、黃色の花の咲いてるのがあつた。

浦河へ三時四十分に着いた。支廳と共に、浦河町、外三ケ村の組合がある。この組合管内の戸數千五百九十四、人口六千五百九十三、そのうち土人の戸數六十六、人口三百二十一。他の國と違つて、土人の年々增加するのは、保護の行き屆いてゐる結果かも知れないが、また純粹種でなく、雜種あひの子の殖えるのかも分らない。先月の馬市から、札幌や岩見澤の博勞が五十名ほど、例年の通り、平

取からこちらへ這入つてるさうだが、運等は馬の價格を踏み付して、今年甚しきは一頭四圓五十錢、七頭五十圓ぐらゐに買つたのがあるとのことだ。

これまで見て來たのに據ると、縣道は沼の端から鵡川までは三間幅だが、それから二間半幅になり、日高に入つてからは二間幅になつてゐる。もつと廣くする必要がある。而も排水用意が足りないので、いつもじぶ〳〵して乾かない。その狹い道を車馬が通るのであるから、道路の保存上面白くない上、往來が不便だ。三石村長の如きは、崖崩れの爲めその乘り馬車がころげ落ち、馬の前足が崖端にとまつたばかりで、足の強い馬であつたからでもあらう、僅かに引きあげられて、生命に異狀がなかつた經驗を持つてゐる。そんなことはまだ珍らしくないので浦河の前支廳長西氏の如きは、皇太子來遊の際衝突して、馬車が顚覆し、大怪我をして、今だに療養中だ。これは、その道の技術家等が學理と體裁とに拘泥して、實用を輕んずるのにも由るだらう。

日高はまた海運の便に乏しい。函館からの補助航路は浦河に一ケ所寄ることに定まつてゐるが、復航の時は素通りすることが度々だ。それが爲め一昨年末から今年の初めにかけ、米噌が缺乏し、大小豆や蕎麥粉を喰つて僅かに饑餓を免れた樣なことがある。

田口氏の云ふには、國道が海濱を通じてゐる間はまだ駄目だが、二三里も內部に出來る樣になつてこそ、初めて日高の繁榮が期せられる時にならう。何故この國人がやかましく云はなかつたのであら

う、海陸の交通聯絡が不足で、やがて敷設されるだらうが、今では鐵道もない。早く航路と鐵道とを完成して、貨物の集散をもつと自由にしなければならないと。實際に、この國の主産物たる馬は他日各府縣に出して販路の競爭をやらなければならないのに、今では、運賃その他の諸費の爲めにいくらも利益にならない。木材でも、隨分豐富なのに、不便の爲め手を着けるものが少い。その他、日高がすべての鑛物國であるのは知れてゐる上、浦河街道筋には粘土で洗ひ粉になる物があるし、幌別川の上流には、硫黃もあるさうだ。然しかういふ物は、交通がもツと便利になつてからでなければ、その利益を得られないのだ。

この地の經濟狀態を見るに、交通不便の爲め土地に金持ちがないので、函館などから融通をして貰ひ、甘い汁は他國人に吸ひ取られてしまう。たとへば、二分三分の高い金利の金を借りて、馬を飼ふのだから、到底引き合ふものではない。殊に、昨年からの不景氣では、多少氣の利いた下駄同樣に馬を賣つてしまうのは、實に端から見ても殘念だね。國人が眠つてゐるのが其一大原因ではなからうか？

天理敎なるものの發展には驚く。鵡川に一つその敎會があつたが、ここにもその仙臺分敎會浦河出張所がある。

支廳長村木、組合長瀨島甫氏、その他有志の發起により、僕等の爲めに歡迎會が催された。その席

で田口氏は一場の演說をした。隨分盛大であつた。

日高の國では、各町村に向つて共同放牧場が付與されてゐる。これは北海道に於て多くないことで、馬産國の特典であらう。

この日の行程十一里餘。

其八

▽十月七日。日高國幌泉、晴。

午前八時、浦河出發。組合長瀬島氏、西舍村の鎌田氏、その他有志諸氏の案内で、西舍の國有種馬牧場を見に行つた。その總面積一萬五千町步、種馬十二頭、牝馬八十頭、すべての設備に於て、御料牧場には及ばない。世間からの刺戟がないままに眠つてゐては、馬も人も退步してしまうだらう。然しアラビヤ種の馬は、どこで見ても、眼が鋭敏でいい。また、アングロノルマン種で、その脊が五尺五寸のがあつた。

田口氏は、臨時議會の爲め一旦歸札する必要が出來たので、ここから僕と暫く別れることになつた。從つて、僕等の爲めにいい說明を與へて吳れた古賀技手とも別れ、僕は浦河支廳の岡崎技手と二人で、幌別川を渡つて進行することになつた。この川は今日までに二百町步の耕地を流してしまつ

た。して、橋がないので、僕等は馬を泳がせた。それから少し行くと、山腹の道路が四五十間ほど水の爲めにぐちや〱してゐるところがある。これは、西舍の牧場へ行く途中の山道が谷底まで崩れてゐるのと同様、山ぎはの方へ充分な排水溝がついてゐないからである。

様似村八ケ村の役場へ立ち寄つたが、村長は留守であつた。管内の戸數六百四十七戸、人口三千二百七十七、そのうち土人が七十四戸、三百三十六名、放牧の馬一千五十頭。海産物は昆布がおもな物だ。この奥には石灰石が澤山あり、ウンベには小樽人が私營する金山があるさうだ。ソビラの岩といふのは、山からかけ離れて、海中に二つも三つも高くそびえてゐる。天台宗の等樹院は百五六年以前の建物だ。

それから、崖上の道になるが、その十數丈下の海濱では、和人が土人と共に昆布の拔けて來たのを、長い紐のさきに石を結び付けたのを以つて、拾ひ取つてゐるのを見た。冬島の小學校で、様似村長の菊池氏に會つた。氏の話に據れば、同小學校にはアイノ生はないが、他にゐる土人は、どこでも、すべて算術などは成績が惡いが、從順で、眞面目で、習字並に作法はいいさうだ。然しその家族が無教育であるから、家庭に於て丸でぶち毀されてしまうのだ。かういふことは、これまでの道すがらにも聽いたことで、土人はまた力が強く、お祭相撲ではいつも和人に勝つさうだ。

冬島村字山中、オホナイといふ所に、大きな瀧が二つ三つある。高さ五十尺または三十尺、幅七八

尺のもある。そこらは海岸で、浪うち際を浪の退く間を見て通るところもあるが、僕等が高い岩頭をまはると、しぶきが當るので、急に雨が降つて來たのかと思へば、頭上に瀧が落ちてゐるのであつた。それに西日が當つて、虹を現してゐるのは奇麗であつた。白瀧のもとに夫婦子供四人の家族（南部人）が板や雜草で組み立てた、して家根には石ころをつみ重ねた家に住んでゐる。近年殆ど漁がなく、毎年、昆布百四五十圓から二百圓、フノリ並にギンナン草二三十圓、ナマコ三四十圓ぐらゐの收入を以つて僅かにその生活をささえて行けるだけださうだ。このあたり、おほ岩を穿つたトンネルが多く、荷馬車などの通ふ道はなく、漸くにして岩と浪との間を行くのだ。岩には、奇妙な草花が二種あつたが、二種とも僕等の見たことのない物だ。

幌萬川の橋ぎはに、函館人某の小製材會社があつて、昨年は三萬石、本年は一萬石ばかりを流送したさうだ。同所の驛遞は馬があるのにないと云つて僕等を止めようとしたので、様似から乘つて來た馬をつづけることにした。おかげで、馬の進みが遲く、日暮れ頃、五時半に幌泉へ着した。

幌泉九ケ村は戸數六百五十、人口三千六百四十五、馬二千五百九十二頭、水産物はおもに昆布　鰮、鰹、鰈、鱒等だが、本年初めて靜岡縣から巻き網を取り寄せ、マグロを取つて見たら、八月末から九月一杯で三千尾ばかりあがつた。然し漁港がないので、勢力を様似に取られてゐる。もとは浦河を初め、十勝の廣尾、大津の漁夫は一旦ここへ引きあげて來たので、宿屋も十二三軒、女郎屋も九軒あつ

たさうだが、今は前者は木貨を入れて六軒、後者が三軒だ。八十噸ばかりの汽船をこの村で所有してゐる。

この春、軍馬購買があつた節、浦河では三百頭のうち十九頭採用されたが、この幌泉では、四十四頭のうち二十七頭當つたさうだ。村人の産馬改良組合がある。不思議なのは、牧場に牧柵なく、農地に却つて柵をめぐらす必要があることだ。雪が年中降らないので、最も自由な放牧の仕方で、いつ子が生れたのか分らないほどだ。ただ種馬が少いので巡回交尾の必要を訴へるものが多い。

ここにはアイノがないと云ふ。その理由は雜種ばかりだからだ。日高は火山灰が少くなり、土地がよくなる方に來るに從つて、土人が消えて行くのが一つの不思議だ。アイノはいつもいい土地を發見する先導者であるが、それをよく開墾しないので、追つ拂はれて、和人がそれを占領してしまうのだ。

この日の行程十三里餘。

其九

▽十月八日。十勝國[illegible]洋、途中雨あり。

太平洋に突出する、北海道の東南端、襟裳岬は、幌泉の宿から僅かに三里だ。この宿から初めて山

道といふ山道を踏むのだが、而も本道に難道の一なる猿留山道がある。それを避けて海岸を行けば、近いさうだが、おほきな岩を攀ぢて渡つたり、浪の退く間を四五十町も走つて通らなければならないところがあつて、馬などではとても駄目だ。その上、風が強く、そのあたりの小越村の如きは、全部九十戸が九十戸とも、九尺も十尺も吹き集る砂の爲めに埋められ、別なところに移轉するの止むを得ざるあり樣になつた。して、また、山道の方もこの頃熊が出ると云ふのだ。

僕等は八時出發、襟裳岬の根もと、追分坂を歌別から庶野に越え、在田牧場の前を通つた。谷々の樹木は半ば紅葉してなかなか風景がよかつた。角岩の坊主山が最も高い。その山を左に見ながら、廣い、深い谷を一つ隔てた山腹または山顚を進むと、東海の青浪が見えつ隱れつする。して、三四里行くと、猿留山道のこなたを登ることになるが、そこまでには牛馬の放牧されてゐるのがあるから、何となく人間のかをりもする樣な氣も出る。然し、實際は、幌泉へ歸つて行く役人に獨り合つた切りで、あとは僕と岡崎氏と馬子と、してついて來た土人のセカチと、三人だけだ。寂しいからでもあらう、氣が急いて、自然に馬をぽつ立てると、馬子は屢々僕等に注意して、さう、馬の尻を打つなと云ふ。

いよ〳〵猿留の難道を降つて見たが、俗に七曲りと云ふのは、その實、十三曲りも十四曲りもあつて、各々十間または二十間づつに曲つて、何百丈の谷底に落ちて行くのだ。馬上から見上げ、見下す

と、ぞつとして、目も暗んでしまう。親の乳を追ふて僕等について來た小馬（三ケ月）は、或曲り角で石ころに乘つて倒れ、すんでのことで谷底へころげ込むところであつた。そんなにまでしても、ポニイと云ふものは、てく／＼と、どこまでも、母馬について來るのだ。僕は、これによつて、かの米國文豪アーヸングが、リプヷンヰンクルの子が、ぎやア／＼泣きながら、リプの驢アを追ひまわす形容に、小馬を持ち出したのを思ひ出すのだ。

兎に角、この山道が通路である限り、日高十勝の聯絡は東南方ではよく取れない。浦河から直ちに十勝線に達する道路が開けるまでは、たとへこの道が改修せられないまでも、指定工事費を以て、年年修繕を加へる樣にでもしなければなるまい。これを下りてしまつたところに助け小屋が一軒ある。そこに、巡回の馬政官を送つて歸りの幌泉村長と在田牧場の主人とが酒を飲んでゐた。大分醉つてゐたので、僕等は眞面目な話はし出さなかつたが、渠等の勸めにより、そこで中食をした。アイノの馬子にも持つて來た辨當を喰つたらどうだと云つたが、馬が勞れるほどぽつ立てて來て、ここで暇をつぶせば、何の甲斐もないではないかと、泣き出しさうになつた。然し、在田氏が勞れる樣な馬をなぜ貸したと怒つた眞似をしたら、セカチはまた泣き出した。慣した馬の可愛いのは尤もなことだと僕等は思つた。

午後二時十分、猿留村に着したが、驛遞にはまた馬がない、且、あすも十一時頃でなければ用意出

來ないと云ふので、そこにとまるのは胸くそ惡くたり、僕等は勇を鼓して、もう一驛さきへ直行することにした。然し二里半だと聽いたのが、四里あつたには閉口した。一里ばかり海岸を行き、山道へ這入ると、日高十勝の國境になる。二人とも足は勞れて來るし、日暮れには近くなるし、度々小川を渡る毎に熊が出はしまいかと心配になつた。僕は樺太の山奥へ這入つた時、熊よけに汽船から借りて來た喇叭を吹いたが、その用意がないので、下手な調子で銅羅ごゑを張りあげ、清元やら、長唄やら、常磐津やら、新内やらのお浚ひをして歩いた。その銅羅聲に恐れてか、幸ひにおやぢの黑い影も白い影も現はれなかつた。

然し猿留の七曲りに似た九折道を登る時などは、聲も勞れ切り、足も勞れ切つたので、これを越えれば、もう、直ぐだらうといふのを力にして、漸く山の背まで達し、それから下り坂になつたが、非常に喉が渴き、からだは汗でびツしよりだ。然し道に澤山生えてゐる小萩が、葉毎に露を帶びてゐるのは、見るも持氣ちよかつた。それで思ひ出したのだが、僕等が國境を越える時烏淮雨に會つたのが、こちらでは非常に降つたのだ。その名殘りに道もじぶ／＼してゐるし、萩には露が置いてるのだが、その露を踏み分けて進むと、それが靴を越えて熱した足にひイやり浸み込むのが、コップで冷水をがぶつくよりも甘い味がした。

直ぐだらうと思つた音調津がなか／＼來ない。薄暗くなつては來るし、道路はまた水だらけだ。何

でもかまはず、びしやり〳〵歩くと、畑などはあるが、人家は見えない。もう野宿なり、ぶッ倒れなりしようとまで疲勞した。あかりが一つ見えたが、直ぐ隱れてしまつた。僕等はまたその次ぎの驛へ進んでるのではないかと考へ出したが、そのうち漸く驛遞についた。そこであすの馬をあつらへ、四五丁さきの宿屋へ案内されるまでがまた一里も歩く樣に氣が急かれたが、宿についたのが五時四十分であつた。

　この日の行程十三里餘。音調津は三十戸ばかりの村だ。黑鉛鑛山事務所があるのを認めたが、廣尾の人が小く經營してゐるのださうだ。

其十

▽十月九日。十勝國大樹、晴。

　八時、音調津出發。一山越すと、難道はないが、道路がまだよく出來あがつてゐない。一昨日の雨から水が出て、人の歩くところが全く川の樣になつてゐる場所もあつた。

　きのふは馬子のセカチに歌を歌はせたが、けふは、僕等は馬子を隨分冷かした。渠は、北海道がいいところだと聽いて、四五ケ月前親類の驛遞をたよつて來たのだが、故鄕の二本松よりも面白くないと云ふので、僕等はまたからかひ半分に、どうせ逃げて來たのだらうから、驛遞の馬を二三頭盜んで

また逃げる方がいいではないかと云つてやつた。ぼんやりした青年で、まだ土地の事情が分らない。

寄居に着くと、驛遞は留守だ。よそから來てゐる番人に聞くと、民政官の一行に必要な馬を出[illegible]取りに行つてるので、十一時頃でなければ歸るまいとのことだ。近處で樣子を尋ねると、おかみさんには出られ、娘は病氣の爲め札幌で入院、おやぢ獨り家の世話から馬追ひまでするのださうだ。とても話せないから、アイノの家に賴んで馬車馬を借りた。附き人になるものがゐないと云ふので、僕一人ではツて行くことにした。して、種々世話をして吳れた岡崎氏と別れた。この村もアイノの雜種が多いさうだ。

これからは、海岸に近い原野だが、平坦な道路の左右に槲の木が植ゑつけたかの樣に生えてゐて、ところどころ、雜草を切り開いて、燕麥を刈り取つた跡があるのを過ぎながら、出會つた土人のメノコにここはどこだと聽くと、野塚原野と答へた。丸で大きな造り庭と云つてもいい。この繁茂した濶葉樹の間を驅ける時、ふと目を眠つて、その葉に當る風の音を聽くと、急雨がやつて來たのかと驚かれた。まして、目を開くと、遠くの山々には雨雲が迫つてゐて、今にも降つて來さうな暗影を僕の頭上に投げるのだ。僕は一種のおごそかな寂しみと戰慄とをおぼえた。

公立野塚尋常小學校には百十四名も生徒があつて、一里も二里もさきから通つて來るさうだ。この

學校附近は耕地殆どたく、澁を目的に槲の皮を剝ぐのを仕事にしてゐる。雪は五尺ほど積むさうだ。

豐似川を渡ると、一物品販賣所の主人が店さきで木を挽いてゐた。そこに立ち寄つて話を聽くと、このあたり雪は三尺が關の山だが、槲の密接林であるから、地味はよくない。蕎麥、燕麥、大豆などは播けば出來ようが、上土が三寸ほど黒い岩土で、直ぐ火山灰が三四寸あり、そのまた下が黒土で、乾燥すれば、風にぱツぱと飛んでしまう。山ぎはに行くと多少地味はいいから、這入り込んでゐる農夫もあるさうだ。

そこで馬政官の一行に追ひつかれたので、馬に慣れない僕はその跡から行かうと思つたが、一行の進みが如何にも速い。僕の馬はけふはまだぼツ立てないから弱つてゐたい上、時間が早ければ以平まで行かうとしてゐるのに、大樹でとまる人々の跡をつけてゐたらやり切れまいから、僕は無言で一行を追ひ越すと、やがて「驅け足」と云ふ聲が聽えて、一行は僕を拔いて出た。僕も負けぬ氣で拾僕丁も一緒に驅けつた。すると、また一行の歩みが遲いので、今度は、僕、以平までけふ中に行きたいから、失敬すると挨拶して、一行を拔けてしまひ、僕等のおかげで初めておぼえた驅け足を二度も三度もして、三時半に大樹に着した。

然し換へ馬の都合がうまく行かないので、大樹にとまることにした。この邊も水の都合が悪いので、田地がない。ヒカタ川の上流には、砂金取りが大分這入つてゐるさうだ。ここまでは、商業上、

廣尾商人の勢力範圍になつてゐる。ゆふべからビールを飲みたかつたのが、漸く今夜の宿にあつた。一瓶三十錢だ。實は昨夜は勞疲の爲め、一昨夜は醉ひつぶれて、この雜記を書くのを怠つてゐたが、今夜は時間も早いし、ビールの氣嫌で三日分を書いたのだ。

この日の行程九里餘。

其十一

▽十月十日。十勝國帶廣、晴。

大樹附近では、けさ、初霜があつた。八時に出發したが、途中にはまだそれが消えないで、濃く殘つてゐた。凍死馬追悼標といふのが立つてゐる。四里半ばかりの間は人家が一軒もない。よく凍死者を出し、またおやぢがよく出沒するところださうだ。牧柵の朽ちかかつたのがつづいてるところが三四ケ所もあるが、すべて不成功に終つたものらしかつた。茅の中では、きりぎりすがうら寂しく鳴いてゐたし、カケスが澤山飛びまわつてゐた。山葡萄が隨分ある。原野は全體に槲の密接林だ。その間を幅の廣い道路が開けてゐるが、日に二人か三人しか通らないのであるから、雜草がそこまで跋扈してゐて、僅かに細い一筋か二筋の路がついてるだけだ。或橋を渡る手前で馬が急に戰慄してあとずさりをするので、僕もぞつとしておやぢが出て來たのではないかと思つた。然しそれは異樣な木の切り株

に恐れたので、ぼツ立てると、馬はそれを避けて一丁ばかり驅け出した。

以平に人家が一軒ある、それが驛遞だ。それから、三里半、また家が全くない樹と薄との高原だ。薄野を出でて槲林に入り、槲林を出でて薄野に入る、その單調子と云つたら馬上で僕は半ば眠つてゐたのでも分らう。たゞ道路が一直線に渡つてゐるので、獨り手に前進してゐるばかりだ。思ひはうつら／＼と都の友人のことや、長くまた近く會はない愛婦の上に馳せてゐると、馬がつまづいたので、手綱を引き締めた。ふと見渡せば、僕は青、黄、または紅色で彩取つた大風景の中を進んでゐるのだ。種々な色の競進會中を通つてゐる。

晴れ渡つた天空の藍のもとに、馬上の人は黑く地に投影し、すすきのぼツとした穗が近く遠くかさなり合つて、うす綿を敷きつらねた樣な野に、木々の枝葉は青に、淺黄に、黄に、赤に、また紅。山は遠く薄墨の遠近と高低とを以つてうねり行き、その後ろから幸震岳がかしらを現はし、眞ツ白に雪が積んでゐるのが見える。して、海上らしい方面には地平線と相つらなつて、灰色の雲が平かに日光に輝いてゐる。僕は暫く馬をとどめて名殘を惜んだが、馬（荒馬であつた）のいななきが如何にも山野の魔氣を呼び寄せる樣な氣がして、孤獨の停止に堪へなかつた。

行く手の槲林をのぞんで急ぐと、いつまで行つても、すすき野だ。して、日の前には遠く林が見える。いつそれに這入つて、いつそれを拔けるのか分らないほど、近よれば、まばらな樹立だ。幸震の

驛遞も一軒屋だ。寒暖計があつたので、それを見ると、華氏六十五度であつた。以平でも、小屋でも、朝は、もう、ストーブを燃いてゐる。そこから一里半ばかり來ると、郵便局などもあつて、人家や耕地を見ることが出來る。官吏らしい人で、紋附きの羽織を引つかけたのが、羽根をむしり取つた雉鳥を提げて行くのに出會つたが、僕は之を見てこんなところに出張する官吏などは、半ばごろ付きではないかと云ふ感じが起つた。あたりに樹木を切り開いて、その切り株や燒け株の殘つてる間を、農夫は實際の勞苦を盡して僅かに生産物をあげるのだが、官吏などはそこへふところ手で飛び込んで來て、事務のひまなままに、百姓の勞苦を喰ひつぶすのだ。

十勝は大小豆を以つて生命とするだけに、耕地には、さういふ物が澤山つくられてゐる。然しこの邊は、よく知られてゐるので、詳しく見る必要もないと思つたから、僕は馬を飛ばして、五里十餘丁の道を一時間半で來た。帶廣の河西館についたのは、午後二時半だ。この日の行程十三里半。

其十二

▽十月十一日。十勝國帶廣、雨。

昨夜、北海タイムス支社の鶴卷氏が尋ねて來た。或料理屋へ行つたら、藝者が僕を山本さんか、伊藤さんであらうと云つた。この二名は舊北鳴新報社の人々のことだらうが、兩氏の名がさうよく知ら

れてゐるのを僕は私かに友人として祝したわけだ。

大原野を獨り旅の氣が張つてゐたのが、ここに着いてから急にゆるんだのか、からだ全體が強い樣で、痛いほどで、精神がぼうつとして、丸で氣力がなくなつた。燒酒を飮んで宿へ歸つたら、そのまままぐツすり眠つてしまつたが、けふになつても、あたまがはツきりしない上、股に鞍ずれが出來て、座わるのに不自由だ。その箇所へおしろいをつけようと云つたが、女中は笑つてそれを持つて來なかつた。

帶廣町、外四ケ村の組合は、戶數二千三百六十一、口人一萬零二十三。河浦町外三ケ村よりは少し大きい。帶廣も、岩見澤と同樣、假小屋的な建築が多い。その發展は、礦山もなく、海もないから、單へに農作物に由るのだが、本年は稀れな雨天つづきで大小豆も出來がよくない。然し組合管內からあがる雜穀の豫定總額は十二萬五千俵、その價格約三十萬圓だ。もツと組織がつく樣なれば、亞麻・小麥粉、醬油、味噌等の製造によつて、景氣を添へる時が來るだらう。且、この町は隣村として、北見の國境に、音更(おとふけ)といふ一郡一村の大村を控へてゐる。割合に新らしい開墾地だが、戶數千零五十八、人口五千百十一あつて、本年も雜穀十七八萬俵を出すのだ。して、また、帶廣は小い町の割合に各新聞の競爭が激しいだけ、人間には活氣があるらしい。然しその市街には、切り殘した樹木が殆ど一本もないので、札幌區の或部分の樣な樹影の美觀がない。無考へに大切な木を切つてしまうのは、

新開地の弊害であるから、これからは、官民ともに多少の美術趣味を養つて、特に注意するがよからう。

北海道新聞支社の岡本氏並に釧路新聞支社の小田島氏も來て、戸巻氏と僕と四人そろつて、午後雨を冒して、伏古の土人部落に行つた。同部落は戸數五十五、人口三百餘。二百數十町歩の給與地を作つてゐるが、土人は不精で山獵、川漁ばかりを爲し、農業に努めないので、僅かに自營的にそれを行はしてゐる。然し吉川長五郎といふアイノの如きは特別で、自分の受け持ち地を耕作する外に、なほ和人の未開地をも開いてゐる。安田農長といふ人（岡本日南氏の令弟）が、アイノ研究から、獻身的な世話役だ。僕等は先づ同氏を音づれて案内者になつて貰つた。

ここの官立土人學校は、十勝に三つあるうちで最も古い一つで、それでも明治三十七年の設立だ。生徒は四十名あり、明年第一回の卒業生を出すのだ。他所の土人生徒と同様、習字または圖畫の様なものは成績がいいが、數學のあたまがないと同時に、綴りの中の濁音を正當に發音することが出來ない。作文などは可なり出來てゐる。校長の三野氏が注意深いので、生徒に學問と共に日語と貯蓄心とを起さす様にしてゐる。して、先月の如きも、札幌まで修學旅行に出した。その費用はすべて生徒が前以つて用意した草刈り賃の積み立てで出來たのだ。

學校教育の結果か、または土人の特性か、どちらか分らないが、生徒の一人が非常に個人的な性格

を顯はした例がある。渠はトクサを刈つて儲けた金でまんぢうを買つて歸ると、その母が少し呉れいとねだつた。すると、子供は、これは自分の儲けたもので買つて來たのだからやらないと云つて、皆自分で喰つてしまつた。親の無努力と無教育とに比べて、これは決して惡いことではない。然し、學校を中途で退いたものや、なまなかシャモ殿になつてるものの狀態は、東京に於ける外國歸りの半可通と同樣、甚だ面白くないのだ。アイノはどうせ滅亡してしまうのだから、教育などはよしあしであらう。

さきに樺太ギリヤーク人種の使ふ船の紋があると云つたが、アイノのマキリやその他の物に附いてゐるのにも、同じ樣なのがあるのを發見した。して後者のは寶物入れ、乃ち、シントクについて日本から這入つて來たので、巴と笹輪藤とは殊に古くからあつた。然しそんなのはただ模樣としてのみ用ゐられてゐるので、アイノには別に渠等特有の單純な紋がある。それはイトッパと云つて、神に祭るヌサまたはイナウの棒に就くのだ。たとへば、十こんな十文字樣なイトッパの下に、〓かう云ふ數字の二をふたつ棒で連ねた樣なのが加はつたり、また人こんな曲り一文字の樣なのが添つたりしてゐる。その紋の劃がまた亭主と女房と違つてゐる。その畫の工合によつて何代目かの親類だといふことが分るので、それを見せ合はして、至るところに賴りを求めて行く。渠等はよその家でとまることを少しも苦にしない。生徒でさへ、通學しながら、十日も十五日も家に歸らないことがある。教師が如

何に外泊を禁じても、親からしてさうだから、なかなかその習慣は直らない。なかには、若者の當に、野宿同様にして數日も行衞の知れないことがある。男女間のことに至つては、昔は嚴格であつたが、今ではただ保護者に對する依頼心ばかりあつて、同人種間の制裁がない爲め、實にその風俗は壞亂してゐる。して、馬と女房を取り換へた事實もある。

曾て、僕の知人が、アイノに向つて、古い鐵砲をやるから熊の皮をよこせと云つたら、皮を持つて行けば銀の鐵砲が買へるだらうと答へた。これは昔のことだが、近頃でも、或人が土人の一人に寳丹を飲ますと、すつとしたのを不思議に思ひ、ニシパよ、これは奇體なくすりだ、鼻からも、口からも、風が這入つて來ると云つたさうだ。

其十三

▽十月十二日。帶廣、晴。

昨夜は岡本、小田原、鶴谷三氏が僕の爲めに歡迎會を開いて吳れた。して、寺井、その他二三氏にも會つた。その席で追分を聽かされたが、僕は仙臺のさんさ時雨を聽くと、非常に心が愉快になるが、上手な追分を聽いてゐると、また、それと反對に、好きな女さへあれば、心中でもしたい氣になるのが常だ。どちらかと云へば、寧ろ後者の方をいつも聽いてゐたい。

まだ土人の話のつゞきだが、或時、その一人が官林を切つて盗伐罪に問はれた。然し渠は平氣なもので、その云ひ草が面白い。今のお上の木を切つたのではない、今のお上の木ならいくら大きくても、さし渡し一尺ぐらゐにしかなつてゐない。自分の切つたのはもつと太いのだから、エンドカモイ（江戸の神）乃ち、德川樣の木だと。和人に接することが稀れな土人部落に行けば、今でもエンドカモイから命じられて來たと云へば、今のお上の官吏よりも丁寧に歡迎されるさうだ。

二六新聞に樺太通信を書いた時、僕はオロチョン人の奇妙な裁判の一例をあげて置いたが、アイノ人にも隨分面白いのがある。その一例を云つて見ると、熊といふ奴はその隱れ穴が定つてゐるのだが、甲村の土人が乙村の熊を追ふて、その穴に於いて打ちとめたのだ。すると、それが土人間で裁判にのぼつた。乃ち判事の酋長が熊の捕獲者に向ひ、先づ貴樣はシャモか、アイノかといふことを尋問した。シャモなら、この裁判は捕獲者の勝ちだが、その代り、以後はアイノとしてのつき合をしないと云ふのだ。

捕獲者はシャモでない、矢ツ張りアイノだと云ふことを誓言すると、つまり、土人の裁判法に從ふのであるから、酋長は喜んで下の如き宣告を與へた。熊はもと乙村の物であるが、甲村の人が捕獲したのだから、皮は乙村に返せ、然し肉は捕獲者が取れ。その代り、乙村は高價な皮を得たのであるから、祝ひとして酒一斗を甲村の人にふるまへと。實にこれはアイノの大岡裁判である。

伏古にはチョマトーといふ沼がある。この原語は忌むべき沼の意だ。古戰場で、十勝アイノと日高アイノとが大戰爭を爲し、敵を三百名この沼に投げ込んだ跡だ。それで祟りがあると云つて忌まれてゐるさうだが、或口、學校の教師がその水を泳いで見せて、決してそんな迷信のあるべからざることを示めした。然しアイノ地名を研究すると、種々な傳說や歷史が分るものだ。安田氏の如きも、それにはよく注意してゐるらしい。して、近頃の研究により、古事記の地名によく何々別とある、そのワケは土人語のイワキで、古い都もしくは巣のところの意だといふことを發見したと語つてゐた。國名磐城もその一だ。

石狩岳と阿寒岳の傳說も面白い。この兩山はもと夫婦であつて、石狩岳が男で、マツネシリ、乃ち、阿寒岳が女だ。ところが、夫婦喧嘩をして、女山が釧路に逃げた。その時、男山は嫉妬し、おほきな矛を投げて、女の耳を貫ぬいた。女山は耳を貫ぬかれたが、その矛を受けて投げ返すと、非常な速力で飛んで行つたので、當りさへすれば男山の生命を危くしたのに相違なかつたのだが、その急を救ふ爲め、ヌプカウシヌプリが拔けて出で、大速力の矛を受けとめた。このヌプリ、乃ち、神山の拔けて出た跡が今のシカリベツ（獨りで出來た沼）であるのだ。

其十四

▽十月十二日のつづき。

僕が安田氏を音づれて行つたのは、一つにはアイノの史詩もしくは戰詩なるシヤコロベやユーカリの歌ひ方を、氏の紹介によつて、アイノから聽かして貰ひたかつたのだが、歌へるものがなかつたのは殘念だ。伏古の土人は、割合に古くない。北見もしくは日高から移住して來てから、僅かに六代か七代にしかなつてないらしい。それから見ると、音更の方も同樣だが、まだしもユーカリやシヤコロベを歌へるものが二名あつた。然しその一名は老死し、また一名は行くへが知れなくなつてしまつた。網走線のポンベツに行けば、或は聽けるかも知れないとのことだ。僕は眞似だけでもいいからと云つて、近所のメノコを呼んで來て貰つたが、その女は歌の話は出來るけれど歌ふことは出來ないと答へた。

全體わが國人はアイノに關して間違つた考へを有してゐる。殊に直接關係がある北海道廳の方針が間違つてゐる。アイノも生き物であるから、土地を給し、生活の道を立てる樣にしてやるのは當り前だが、どうせ滅亡の運命を有する、而も殆んど滅亡に瀕する、劣等人種ではないか?それを教育したとて、何程の爲めになるのだ?たとへ一人前になる男女が少しばかりあつたにしろ、それの混血兒がシヤモの間に出來るのは餘り有難いことではない。僕の考へでは、生き物としては飼ひ殺しにするだけの保護を與へてやればいい。

その代りだ、その代り、昔は一度盛んであつたアイノ人種の殘すべきものを、なくならないうちに、保存してやることだ。殘すべきものとは、決して腐つた熊の皮や器物を云ふのではない。同人種が持つてゐる言語と文藝とである。希臘羅馬は亡んでも、その文藝は永久に殘つてゐる。アイノは、アイノとしてしだけの永久に殘る文藝がある。それを研究もしくは保存する爲め、中央政府もしくは道廳は今日まで恐らく何等の費用も出したことがなからう。嘗て札幌師範學校の教師をしてユーカリやシヤコロベを取り調べさしたと云ふが、文學や音樂の素養がないものが行つて、文學や音樂の素養がないものに飜譯さして調べたとて、何程の價値があらう?ただうはツ面と概略とに過ぎない。

　徒らに土人學校などを設けて、道廳が國費を空費するよりも、その金を以つて語學の才あり且文藝的思想のあるもの數名を撰んで、アイノ語を研究さし、アイノ文學を出來るだけ正確に原語のまゝ羅馬字または假名に書き現はすが急務だ。書き現はすにも、これまでに時々出た樣な現はし方、乃ち單語單語に句點を打ち、わが國の物語の樣な書き流しをするのでなく、外國詩の書き方の如く單語每に一字あきにし、意味の切れるところに相當の句點を打ち、句調上の一行每に行を改めるといふ樣な、はツきりした頭腦を以つてやつて貰ひたい。それさへあれば、その飜譯などはいつでも出來る。またその歌ひ方の如きは田中博士や北村氏の如き音樂通を頼んでくれば、一度で樂譜に移してしまうことが出來る。これがアイノ人の滅亡に對する最も同情ある仕事だ。

東京大學や北海道廳には、コロボツクル論や非コロボツクル論の言ひ爭ひが出來る學者はあらう、然し眞にアイノ語を研究して、アイノ文學を傳へようとする特志家は、日本人にはまだ殆どない樣だ。空しく之を外國宣敎師のバチエラー一人に委して置くのは、最も無同情の極であるのみならず、アイノ人の眞相をあやまる恐れがある。現にバチエラーの研究には誤まりが少くない。耶蘇敎的偏見のあるのは、勿論渠は日本語の智識が多くないので、日本語のアイノ語に混入してゐるのを、純粹のアイノ語として取り扱つてゐることが多い。且渠の智識不充分な一例は僕が樺太アイノを視察して發見した。乃ち渠の說に據れば、梅毒と肺結核とはアイノ固有の遺傳病だと云ふのだが、實際は日本人中の劣等種族なる漁師、土方、鑛夫、軍人などから移されたのだ。その證據は、樺太通信で云つた通り、和人に接觸したことの少ない樺太土人には、そんな病氣が少いのだ。

宣敎師などの偏見的研究を賴りとせず、わが國人の誠實にまた熱心にアイノ語を學んで、文學、音樂、人種學の諸方面から確實、研究に從事するものの出るのを、僕は眞心から希望するのである。

其十五

▽十月十三日。帶廣、晴。

音更村のアイノ部落を見に行つた。十勝川を渡ると直ぐ同村になる。同村全體はもと音更川の川底

であつたらしい。それは、見渡しの廣い十勝野の雨がはを、築きあげた樣な高臺がどこまでもさし挿んでゐるので分る。ところが、今春、大洪水があつて、そこらあたりの土地が十五六町も流れたが、土人間にも天文學者見た樣な者があり、其の工合によつてそれを豫言した。して、その言を信じて家具や畜類を高臺に運んだものはすべて難を免れたさうだ。

雨がはの高臺は樹木の紅葉を以てなか〳〵立派であつたから、僕はその景色に見とれてゐるうち、乘馬がそれて、横道に渡る小橋の眞ツぱなへ前足をかけたので、手綱を引くひまもなく、前へのめつたから堪らない、僕は馬の首を越えてずでんどう――幸ひ、見てゐる人もなく、また泥水もなかつたので、無事であつた。一里半ほど來ると、土人學校があるので、その高木教師に面會した。生徒は二十六七名で、成績は他と違ひがない。校内に湯殿があつて、毎週一回づつ生徒を入れるさうだ。また、教師は生徒の臭いにほひを去る爲めアイノ葱などを喰ふなと敎へてゐるが家庭に於て親がそれを承知しないさうだ。

その向ふがはに土人開墾事務所があつて、中村要吉といふ土人があづかつてゐる。僕はその男を當てにして來たのだが、ゐなかつたのでまた半道ばかりさきにある、仁禮子爵の音幌農場を訪び、仁禮氏並にそこの主任高田氏にも會つた。そこに要吉もゐたので、晝飯の後、相作つて、同人の事務所へ歸つて來た。同人は、帶廣町では何となくハイカラ土人視されて評判が惡いが、高田氏の證明によれ

ば、從順で、忠實で、同族の爲めには、一身を賭して盡力してゐるさうだ。年齢はまだ三十前後だ。家では、妻子に日本語を以つて話し、馬も五六頭を有し、簞笥、茶簞笥、机、茶道具、ショールなどを持つてゐる。日本流の床の間には、肩から幅廣の綬の樣なものでかける刀を二振りと、シリカツプやスイコロポブといふ魚骨を寶物として飾つてゐる。

同家のそばに、簡單な倉庫樣の物が一つ出來かかつてゐるのは、土人等がその生產物を飮みつぶしてしまはないやうに、來年の耕作時期の喰ひ物として、その生產したきび、稻きび、粟、唐もろこし等を預り貯へて置く爲めだ、また、渠の勸めに從ひ、土人等はもと犬を飼つてゐたのを(して、土人の仕込んだ犬は熊を恐れず、その後ろから行つて、熊が人に飛びかかるのをとめるが)、豚に換へて見たが餘り儲けがないので、近頃は庭鳥にしてゐる。僕があがつてゐるうちにも、雄のひよこを土人等から集めて、一匁目八文半の割で、帶廣町から來た鳥屋に賣つた。

音更土人は五十八戶、百二十名ばかりある。すべて相當の耕地を持つて割合によく農業に努めてゐる。僕が部落をゆふ方巡回した時も、まだ家々にはメノコの老人ばかりで男子並に若いメノコは畑で働いてゐた。ここでは每年人口が增加するさうだが、而も雜種は一軒しかない。病氣の多い部落とは緣組みをしない樣にしてゐるから、死亡者並に病人が少い。親族結婚は止むを得ないとしても隣村の芽室土人の如く早婚はないさうだ。芽室で死人の多いのは、早婚の結果だが、また、一つには、イチ

ヤシカラといふ詛ひの上手なものが少くないからだと、要吉氏は云つてゐた。イチヤシカラによつてのろはれた者の妻子兄弟は、またその詛つたものをのろふと云ふ樣に、次ぎから次ぎへ敵意が傳つて行く習慣があるさうだ。

要吉氏は農業に從事せず、他の商賈をして、帶廣町にも必要上座敷を一間借りてゐるが、音更部落の酋長の樣なものだ。多くの酋長じみたすれからしアイノは、一般土人の愚に乘じて、隨分不埒なことを働いた例があるので、信用なるものが薄らぎ、昔の樣な酋長らしい位を持つことが出來るものは殆どない。從つて、渠もただ好意を以つて同族の爲めに盡すだけで、實際の制裁を加へる力はない。土人等は依賴心と怠慢とばかりが增長して、風俗は壞亂するばかりだ。たとへば、一つの訴訟的問題が起つても、もとは腕力に訴へる樣なことはなく、ツアランケといふ立會裁判に出る。して、そこで訴者にも被訴者にも云ひたいだけ云はし、考へをめぐらさす間は、烟管を指さきでまわしなどしながら、神を呼び起す言葉を節附きで歌つてゐる。かうして、結着のつくまでは、一週間でも二週間でもつづけるのだ。そんなことは、今ではない。

渠も亦バチエラー氏のアイノ研究結果には不滿を懷いてるらしい。同氏がシヤモの言語とアイノ語とを混同してゐるなどは、土人を非常に侮辱したかの樣に憤慨してゐた。シヤモと云ふ語も、實は、シシヤムと云ふのが本統ださうだ。

僕は貰出馬を返してしまつたので、夜になつて、要吉氏の競馬用の馬に渠と僕とが二人乘りで送られて來た。實は、僕、暗夜の泥道でもあるし、馬はまた扱ひ難いので、獨りで歸ることが出來なかつたのだ。

其十六

▽十月十三日のつゞき。

晋更部落には、シツンプ(日本名、淺山彌太郎)と云ふ百餘歲の老人がゐる。それがシヤコロペやユーカリを歌へると聽いたので、僕はわざ〳〵同部落へ行つたのであつたが、もう目は見えず、耳は聽えず、齒は、悉く落ちこぼれ、腰は立たない。それでも、先年巖谷江見諸氏の來た時はまだしも歌ふこと(して要吉氏がそれを通譯すること)が出來たさうだが、今回はもう酒も飲めないほど老衰して、とても起きて歌ふことを得なかつたのは殘念だ。

然し今夜お祝ひの家があると云ふので、その唄や踊りを見聞したい爲めに、夜までとどまつてゐたのだ。二三日前もお祝ひがあつて賑かであつたさうだが、それは十三年目に、この部落へ歸つて來て女房をもらつた祝ひだ。今夜のは、百日以上山へ出かせぎに行つてまたこの秋貂取りに出るまで、烏渡歸つて來る人の爲めだが、それも本人がゆふ方までに歸つて來なかつたのでおじやんになつてしま

つた。殘念に殘念がかさなつたのは如何にも殘念だ。

アイノの詩謠中、シャコロベはその歌ひ方が最も位がある祖先史詩だが、ユーカリはそれを眞似た英雄詩だ。(兩者の梗概は、要吉氏の口譯したのを筆記したのが昨年の「殖民公報」に載つてある。)その他、ウチャシクマ（古い物語）と云ふ歌の附かない歴史談や、ツイダク（短話）と云ふ作爲的童話や、オイナ（擬音）と云ふ鳥獸の聲に擬して歌ふ遺懷がある。日高の沙流や平取では、からいふのをよく習ふ土人があるが、專ら人々に分り易くしようとする爲め、歌ひ方でも、すべて古風な眞相を失つて行くさうだ。その他わが邦人の端唄や都々一の樣な、酒席で歌ふ短い歌が澤山ある、タプカラは劍舞の樣なもので、之を歌ふのは男の老人に限る。男が座わつてやるのにシノツチヤケがあり、女の立つて踊るのにウポポがあり、男女すべてが立つて踊るのにリミセがある。

ここに、安田巖城氏から得たのを、僕が土人中村要吉氏に訂正さした歌謠が二三ある。それを僕の云ふ書き現はし方に從つて、筆記且翻譯して見よう。アイノの古謠、虫のくどき話に左の樣なのがある。

アルクラン　モコラン　アクス、(一晩　寢たさうしたら、)
パイカラ　アン。(春が　來た。)

また、左の如きがある。

イテッキ（決して）

ウブウイナヤーン。（熊の白子を取るな。）

ウバイコロ　ホン　アラカベ。（それを喰べたら　腹　痛くなる。）

子守唄に、左の如きがある。

ホッコーコーク、（鳥「鷸」が舞ひあがる、

ネイタロツクン　チカプ、（おりたらどこにとまるやら、鳥）

ホッコーコーク、（鳥が舞ひあがる）

カリコロカヤ。（あすこにくるくる舞ふ。）

また、わが国の祝詞式な物で、存する、神に申しあげる言葉に、最も荘厳なのがある

クロコ　アベウチ、（わが家の　火神さま、）

ソイワアン　カモイ、（そとにゐます　神達、）

ツラノーウコサン　ニヨーワ、（共に　相謀りまして、）

クロコ　イノンイタツキ（わが　祈りに）

メプヅスクリー、（深き幸ひ　）

サンレツカバクノー（わが子孫の子孫まで）

シプリークニ、(傳はる樣に、)

カラワエンゴレー。(作り給はんことを。)

さきに僕は立會裁判ツアランケで歌ひつづけることがあると云つたが、その歌のうちに入れることが出來るのを一つあげて見よう。一說には、これは廣尾の驛遞を土人が昔つとめてゐた、その際[illegible]を歌つたもので、十勝アイノ特有のヤイシヤマネーナ、流行歌だとも云ふ。

トノ　オルシペクス、(殿の　命に由つて、)

クロマトータ (暗い夜を)

パエカエアンナ、(われ獨り行くのだ、)

スツパ　テレケ。(急いで　行け。)

これは馬に物を云つてるわけだが、若しそれに

キムン　カモイ　オカイナー、

サラタンネ、エーホイ　キシキシ

と加へれば、「熊の神が出るから、サラタンネ(馬の名)よ、ハイ〳〵ハイ〳〵」となるのだ。

アイノは日高、十勝、北見といふ樣に國を異にするに從つて、その歷史、言語、歌謠をも多少異にしてゐるが、その傳說に於ても、目立つて違ふのがある、日高でオキクルミと云ひ、十勝でオキキリ

マと云ふ英傑をわが義經だといふが如きはわが、國人がアイノ人を强制壓迫する爲め、兩部神道的に說明した手段に過ぎないので、多少の智識を有する土人は之を信ずることをしないが、日高アイノが之を同種族の歷史的最大人物とするに反して、十勝アイノはシヤマイクルと云ふ最大人傑の使用人に過ぎない樣に唱へてゐる。このシヤマイクル・オキギリマ、その他の英雄物語も、忘れられないうちに、アイノから直接に聽いて置く必要があらう。

其十七

▽十月十四日。石狩國旭川。曇。

中村要吉氏を伴ひ、釧路に行き、その國の土人部落をも詳しく視察するつもりであつたが、『歸れ』といふ電報が來たので、正午の汽車で帶廣を出發した。乘車するまでは大雷雨であつた。車中で、變な物が洋服のうは着の腕を這つてゐたから、樺太の山林中で度々取つ付かれた樣なダニではないかと思つて、たま〳〵乘り合はせた實業之北海社々員に見せると、それがしらみだと云ふことに歸着した。多分、アイノ部落の薄中かアイノ小屋で貰つて來たのだらう。

途中の地層を見るに、音更村の一部と同樣、地下五六寸で火山灰が一寸ばかり通つてゐるところがある。ヘケレペツ（土人語、淸い水）といふ驛を通つて、新得からのぼりになり、汽關車が前後につ

いた。このあたり、ナラ、カシハが多く、その葉が赤くまた黄ばんでゐる間をたまに、樺の木の森の黒青のいがまじつてゐる。見渡せば、右も左も黄葉紅葉の賑ひで、その中に、蝦夷松または椴松の霜氣にめげない青葉の姿が、枝をかさねて、ここかしこ、段々にとがり立つてゐる。

この好景の大谿谷を僕等の汽車は、大小六曲りも七曲りもして、雪よけトンネルをくぐりながらのぼつて行くのだ。この時、雨は晴れてゐた。窓から首を出すと、僕等の列車がうはばみの如くうねつてのぼる。そのうねりの跡が幾重にも折れて見え、ただそれが渦道になつてゐないだけは違ふが、丁度ロツキイ山中の谿谷鐵道の寫眞の樣だ。わが國第一の大工事と云ふのは、まことに嘘ではない。北海鐵道開通式の時、某機關手が自己の腕を見せる爲め、その急坂で列車をとめたが、東京の新聞記者等もそれに氣がつかず、ずツとあとになつて説明を受け、初めて感嘆したさうだ。

七曲りも曲つて、第一の實際トンネルを拔けると、十勝原野の秋色は、遠く僕の視線と直角なる薄墨の低山の一直線に限られ、近い野山はゆふ空と共にほの赤くかすんで見える。丸で大パノラマの樣な幻影で實に雄大の景色だ。この時またおほ吹き降りがあつたが第二のトンネルを通り拔けると、もう、石狩の國内で、汽車は細いナラ、カシハ、ハンの木、松や清い小流の間をそろ〳〵くだり出すのである。

夜になつてからは、また雨が降つた。昨夜は午前三時まで原稿を書き、けさは七時頃に起きた上、

車にゆられて來たので、旭川に着した時は、からだが隨分つかれてゐた。帶廣から北海旭の野口雨情氏に電報を打つて置いたので、停車場まで迎へに來て與れてゐたが、實は、まだ顏と顏とを合はしたことがないので、お互ひに分らなかつた。して、宿屋へ行つてから初めて初對面の挨拶をした。氏は明日出發、東京に向ふ豫定だ。氏はこの六月頃無實の罪に落されかけて、豫審獄にまでぶち込まれたのは酒を飲んだ爲めだといふのに感じ、全くこの頃は禁酒してゐる。

旭川は北海道でも寒いところだと聽いてゐたが、實際、この旅行中初めておぼえる夜氣だ。今夜ばかりかは知らないが、風も强い。原稿を書きながら、そとを通るゆで出しろどんの聲を聽くと、東京の十一月を半ば過ぎた樣だ。からころ云ふ足駄の齒音に、もう、冬の氷がくツついてゐはしないかとまで思はれた。

其十八

▽十月十五日。石狩國神居(かむゐ)古潭(こたん)、雨。

きのふからの寒さは、旭川でも急に來たのださうだ。旭川町は戸數七千、人口三萬五六千。師團を入れると、それに三千戸もふえるだらう。市街の體裁を見ても、可なり整つて來てゐる。然し帶廣町とは違つて、殊に淫風が盛んなところだ。軍人が多いせいであらう。横濱の女を見るとすべてラシヤ

メンじみてゐるが、旭川ではそれがすべて淫賣臭い。

旭川町の周圍には、高臺があつて、師範裏のは新高臺と稱せられ、神谷釀造場そばのは□宮撿定地だ。いづれも今は紅葉の盛りである。僕は馬車鐵道によつて近文に行き、そこの舊土人地を見た。こゝは、東京の某富豪が本道の前長官と相謀り、土人等をたばかつて立ちのかしめ、師團に高く賣りつけようとして失敗したところだ。地味も、他の土人部落と違ひ、よく農業に適してゐる。その戶數四十五、人口は大抵四人平均だ。指定の開墾殘餘地を和人に貸與し、それからあがる借地料を以つて、道廳は日本流の家をすべてに建ててやつたが、住み難い爲めだらう、渠等は冬になると、その結構な家を物置き同樣につかつて、却つて、別なところに半ば穴小屋の樣なものを造つて住むのだ。まだ、元の穴居の跡らしいのが澤山殘つてゐる。

その近處に上川第三尋常小學校があつて、生徒六百五十名のうち、二十五名はアイノの子供だ。渠等が目で見て眞似られる科目はよく、說明の必要が多い讀書、算術などに不成績なのは、必らずしも持ち前ではなく、一つには、日本語の力が足りないから無理もないのだらう。その小學校の校長なる人に門前で會つたが。風を引いて欠勤してゐながら、學校へ遊びに來てゐたのだ。

旭新聞記者森屋王爵氏の紹介に由り、神谷酒造合資會社旭川釀造場に行くと、その計算係主任脇田氏が場內をすべて案內して吳れた。獨逸製酒精機を備へて、四時間に三石のアルコールが取れるさう

だ。アルコール釀造所は、砲兵工廠で火藥用に製造してゐるのを除いては、本道のみならず、わが國に於て、他にまだ出來てゐない。明治三十三年、十萬圓の資本を以つてやり出したのが、經營並に釀造法不熟の爲め、一たび解散の非運に會つた。それを神谷氏が三十六年から引き受け、釀造法をも研究して、從前よりも倍額の分量を一定の原料から取ることが出來る樣になつた上、日露戰爭並に海關稅法一リットル七十五錢の海關稅施行の爲めに、會社の發達が好都合に行つたらしい。

同社は、今、實際の資本金三十萬圓、一ケ年の釀造高六千石、賣上高八十萬圓ほどださうだ。一石に付き九十四圓の稅がかかり、百三十五圓に賣つてゐる。原料は殆ど全く唐きびだが、馬鈴薯の時期一ケ月だけはそれを以つてする。唐きびのはヰスキイに最もよくなるが、馬鈴薯のは飮料には餘りよくないらしい。いづれにせよ、用途は火藥、セルロイド、摸造皮などの工業に求める方が廣いのである。また、釀造糟を以つて牧畜部を補助し、豚八百頭ばかりを飼つてゐる。高峯氏のヂヤスターゼは糠から取るが、ここでは燕麥や小麥からだ。この釀造所は第一で、その第二は、本社と共に東京にあり、おもにみりん、燒酎、シヤンパンなどを造つてゐるさうだ。僕はフーゼリンを全く拔き取つたヰスキイを飮ませられて歸つた。

雨が降つてゐたが、五時前に神居古潭に着し、停車場から釣り橋を渡つて十丁ほどある溫泉宿に足をとどめた。この夜、遲くまで筆を執つてゐたが、炭火が消えたので、二階から手をたたいた。然し

一向返事がないので、下へ降りて、たつた一ケ所あかりのついた、家族の居間らしい室へ行き、「火を持つて來て下さい」と命じて、何の氣なく爲渡障子の破れからのぞくと、男と女とが一緒に寢てゐたが、その男の方が『へい、かしこまりました』と答へた。然し、つひに持つた來て呉れなかつたので、翌朝になつて女中に糺して見ると、『あれは家族のものでは御座いません、御客さんです』といふことであつた。(神居古潭の風景は次回に說明する。)

其十九

▽十月十六日。札幌、雨。

伊納停車場からこちらへ、山と川とが迫つて來て、石狩川がその間を流れてゐる。その一方の岸に添ふて汽車が走るのであるが、この邊槲はなく、ナラ林が四方に紅葉してゐるのだ。川は狹く深く流れて、その重くるしさうな水にくれなゐを浸すところもあるかと思へば、多少の傾斜を見せて、幾筋も長い龍紋をゑがくところもある。道を塞ぐ岩石の上にあふれて、白糸の瀧を流す樣なところもあれば、また、そびゆる巖をめぐつて、飛ぶが如く行くところもある。また、川幅が廣がつて水中に砂利の洲を現ずるところもあれば、その洲がデルタ型に高まつて、そこにも紅葉樹が生えてゐるところもある。して、川が大きくまわつて、萬面紅葉の丸山をいだくところなど赤い間に、ところどころ、黑

ずんだ椴松二三本の異を點じ、流れはふつ〳〵と白く泡立つてゐる。雄大な景ではないが、實にいいながめだ。

溫泉宿を向ふ岸に見て十丁ほど來ると、神居古潭の停車場だが、それからは高い絕壁の上に鐵道が通つてゐる。絕壁の下をのぞくと、石狩川の水勢と精神とが淸い油となつてうどみかけるかの如く、大きな潭を成して幾重にも渦を卷いてゐる。このところ深さを量り得たものがないと云ふ。つまり、おもりで糸を垂れて見ても、底には岩石がでこぼこつッ立つてゐるので、六尺でとまるところもあれば、また百尺もさがるところがあるのだ。その上を通つて、汽車が短いトンネルを拔けると眼は潭を渡つて、ずつと上流を見通すことが出來る。伊納から古潭の下に流れ至る七八哩の間が、兎に角絕景だ。

この潭の脇に、足場高く有名な釣り橋がかかつてゐる。兩岸の岩に結んだ針がねに釣られてゐるのだ。然し針がねと云つても、電線の八番線が橋の上部に十六本、下方に十二本、都合二十八本通つてゐるのだから『五名以上同時に渡るべからず』と書いてはあるが、枕木を何本も脊負つた人夫が四五名一緒に渡つても大丈夫ださうだ。然しまた、僕が獨りでも、空中にぐらつくのだから氣持ちのいいものではない。ところが、それを渡つて後ろを振り向くと、景色が一變した樣で――汽車道の山腹・絕壁のナラ林。谷底に渦卷く深淵を隔てて、前方もくれなゐ、後方もくれなゐ。孤立の僕は、雨中に

してやることだ。殘すべきものとは、決して腐つた熊の皮や器物を云ふのではない。同人種に持つてゐる言語と文藝とである。希臘羅馬は亡んでも、その文藝に永久に殘つてゐる。アイノは、アイノとしてだけの永久に殘る文藝がある。それを研究もしくは保存する爲め、中央政府並に道廳は、今日まで恐らく何等の費用も出したことがなからう。曾て地方學校の教師をして、道廳に、アイノの古史詩とも云ふべきユーカリやシヤコロベを取り調べさしたと云ふが、文學や音樂の素養がないものが行つて、文學や音樂の素養がないものに翻譯さして調べたとて、何程の價値があらう？ただ上ツつらと概略とを得るに過ぎない。

徒らに土人學校などを設けて、道廳が國費を空費するよりも、その金を以つて語學の才あり且文藝的思想のあるもの數名を撰んで、アイノ語を研究さし、アイノ文學を出來るだけ正確に、原語のまま、羅馬字もしくは假名に書き現はすが急務だ。書き現はすにも、これまでに時々出た樣な現はし方、乃ち、單語々々に句點を打ち、わが國の物語の樣な書き流しをするのでなく、外國詩の書き方の如く單語每に一字明きにし、意味の切れるところに相當の句點を打ち、句調上の一行每に行を改めるといふ樣な、はツきりした頭腦を以つてやつて貰ひたい。それさへあれば、その翻譯の如きはいつでも出來る。またその歌ひ方の如きは、田中博士や北村氏の如き音樂通を賴んでくれば、一度で樂譜に移してしまうことが出來る。これがアイノ人の滅亡に對する最も同情ある仕事である。

東北大學や北海道廳には、コロボックル論や非コロボックル論の言ひ爭ひが出來る學者はあらう、然し竪穴がどうの、シャシがどうのといふ様な、單純な研究は、如何に人類學には貢献するところがあるとしても、アイノ全體の上には何程も價値がない。眞にアイノ語を研究して、アイノ文學を傳へようとする特志家は、日本人にはまだ殆どない様だ。空しく之を外國宣教師のバチェラー一人に委して置くのは、最も無同情の極であるのみならず、アイノ人種の眞相を傳へあやまる恐れがある。現にバチェラーの研究には、誤りが少くない。耶蘇教的偏見のあるのは勿論、渠は日本語の智識に乏しい爲め、日本語のアイノ語に混入してゐるのを、純粹のアイノ語として取り扱つてゐることが多いので、多少考へあるアイノ人等のうちには、バチェラーの研究を以つて、同人種を侮辱するとまで憤慨するものがある。渠の智識が不充分な一例は、僕が樺太アイノを視察して發見した。乃ち、渠の說に據れば、梅毒と肺結核とはアイノ固有の遺傳病だと速斷したが、實際は日本人中の劣等種族、たとへば、漁師、土方、鑛夫、軍人などから移されたのだ。その證據は、二六新聞に出した僕の「樺太通信」で云つた通り、和人に接觸したことの少い樺太アイノには、そんな病氣が殆どない。宣教師などの偏見的研究を頼りとせず、わが國人の誠實にまた熱心にアイノ語を學んで、文學、音樂、人種學の諸方面から、確實なる研究に從事するものの出るのを、僕は眞心から希望するのである。

これから、僕は放浪中に得た智識を雜感的に述べて見よう。或土人學校に於て、教育の結果か、ま

たは土人の特性からか、どちらか分らないが、生徒の一人が非常に個人的な性格を顯はした例がある。渠は身づからトクサを刈つて儲けた金でまんぢう買つて歸ると、その母が少し呉れろとねだつた。すると、子は、これは自分の儲けたもので買つて來たのだからやらないと云つて、皆自分で喰つてしまつた。親の無努力と無教育とに比べて、これは決して惡いことではない。然し學校を中途で退いたものや、なまなかシャモカラになつてゐるものの狀態は餘り面白くないのだ。

露領樺太のギリヤーク人部落を視察した時、僕はその使用する船に注意した。形は磯舟に似てゐるが、左右が前後に迫つて、而もへさきが殊にぴんと反つてゐるのが如何にも氣持ちよかつた。して、そのへさきの左右に、必らず定紋として、線の細い巴形が付いてゐたり、または寶珠の玉でその尾尻が上下左右に出た樣なのが付いてゐたりするのを不思議に思つた。ところが、アイノ人の——同じ型の船には付かないが——マキリやその他の物にも、同じ樣なのが付いてゐるのを發見した。然しアイノのはシントク、乃ち、寶物入れについて日本から這入つて來たことが確かに分つてゐる。巴と徐輪藤とは殊に古くからあつたのだ。然しそんなのはただ模樣としてのみ用ゐられてゐるのであつて、アイノ人には、別に渠等特有の單純な家紋がある。

それはイトツパと云つて、神に祭るヌサまたはイナウの棒に就くのだ。たとへば、十こんな十文字樣なイトツパの下に、〓からいふ、數字の二ふたつを棒で連ねた樣なのが加はつたり、また∧に

んな曲り一文字の様なのが添つたりしてゐる。その紋の劃がまた亭主と女房と違つてゐる。その劃の違ひによつて、何代目かの親類だといふことが分るので、それを見せ合はして、至るところに賴りを求めて行く。藥等はよその家でとまるのを少しも苦にしない。生徒でさへ、通學しながら、十日も十五日も自分の家に歸らないことがある。敎師が如何に外泊を禁じても、親からしてさうだから、なかなかその習慣は直らない。なかには、情事の爲めに、野宿同樣にして數日も行くゑ不明なことがある。男女間のことに至つては、昔は嚴格であつたが、今ではただ保護者（乃ち、政府）に對する依賴心ばかりあつて、同人種間の制裁がない爲め、その風俗は實に壞亂してゐる。して、馬と女房とを取り換へた事實もある。

昔は、アイノの酋長なるものは非常に威力と信用のあつたものだが、今では、それに類する位にあるものが、すれからしになり、一般土人の愚に乘じて、隨分不埒なことを働いた例が少くないので、信用なるものが薄らぎ、たとへ酋長としての資格はあつても、昔の樣な威嚴を保つことは出來ないから、實際の制裁を加へる力がない。土人等は依賴心と怠慢とばかり增長して、同族間の風儀は亂れるばかりだ。たとへば、一つの訴訟的問題が起るとして、もとは腕力に訴へる樣なことはなく、ツアランケといふ立會裁判に出る。そこでは、訴者にも被訴者にも云ひたいだけ云はし、言葉が盡きてなほ考へをぐめらさす間は、烟管を指さきでまわしなどしながら、神を呼び起す言葉を節付きで歌はす。

歌つては語り、語つてはまた歌ひ、かうして、結着のつくまでは、一週間でも二週間でもつゞける。して、酋長やその他の立ち會ひ人も亦同じ樣にその場に臨んでゐるのだ。今では、そんなしほらしいことがない。

曾て僕の知人がアイノに向つて、古い鐵砲をやるから熊の皮をよこせと云つたら、皮を持つて行けば銀の鐵砲が貰へるだらうと答へた。それは昔のことだが、近頃でも、或人が土人の一人に寶丹を飮ますと、すつとしたのを不思議に思ひ、ニシパよ、これは奇體な藥だ、鼻からも、口からも、風が這入つて來ると云つたさうだ。そんな單純な土人のことだから、官林を切つて盜伐罪に問はれた時、平氣なもので、その云ひ草が面白い。今のお上の木を切つたのではない。今のお上の木なら、いくら大きくても、さし渡し一尺ぐらゐにしかなつてゐない。自分の切つたのはもツと太いのだから、エンドカモイ（江戸の神）、乃ち、德川樣の木だと。

『樺太通信』には、オロチョン人の奇妙な裁判の一例をあげて置いたが、アイノ人にも隨分面白いのがある。その一例を云つて見ると」、熊といふ奴はその隱れ穴が定つてゐるのだが、甲村の土人が乙村の熊を追ふて、その穴に於て打ちとめたのだ。それが土人間で裁判にのぼつた。乃ち、判事の酋長が熊の捕獲者に向ひ、先づ貴樣はシャモか、アイノかといふことを尋問した。シャモなら、この裁判は捕獲者の勝ちだが、その代り、以後はアイノとしてのつき合ひをしないと云ふのだ。捕獲者はシャモ

でない、矢張りアイノだと誓言すると、つまり、土人の裁判法に從ふのであるから、酋長は喜んで下の如き宣告を與へた。熊はもと乙村の物であるが、甲村の人が捕獲したのだから、皮は乙村に返せ、然し肉は捕獲者が取れ。その代り、乙村、は高價な皮を得たのだから、祝ひとして酒一斗を甲村の人にふるまへと。實に、これはアイノの大岡裁判である。

伏古部落では、福本日南氏の令弟安田巖城といふ人が酋長然たる資格を以つて、土人の世話を燒いてゐるし、音更部落では、中村要吉といふ可なり開けた土人がすべての世話をしてゐる。後者の部落は、病氣の多い部落に緣組みをしない樣にしてゐるから、死亡者並に病人がすくない。親族結婚は、少數人種として止むを得ないとしても、隣村の芽室土人の如く早婚はないさうだ。芽室では、死人が多い。それは早婚の結果でもあらうが、また一つには、イチヤシカラといふ詛ひの上手なものがすくなくないからであると云はれる。イチヤシカラによつて詛はれたものの妻子兄弟は、またその詛つたものに詛ふと云ふ樣に、次ぎから次ぎへ敵意が傳つて行く習慣があるさうだ。

伏古には、チヨマトーといふ沼がある。この語は忌むべき沼の意だ。古戰場で、十勝アイノと日高アイノとが大戰爭を爲し、敵を三百名この沼に投げ込んだ跡だ。それが爲め祟りがあると云つて忌まれてゐるのだが、或日、學校の教師がその水を泳いで見せて、決してそんな迷信のあるべからざることを示めした。然しアイノ地名を研究すると、種々な傳說や歷史が分るものだ。安田氏の如きも、そ

れにはよく注意してゐるらしい。して近頃の研究により、古事記の地名によく何々別とある、そのわけといふことは土人語のイワキ、乃ち、古い都もしくは巣のところの意だといふことを發見したと語つてゐた。國名磐城もその一だ。

樺太には、アイノの戸數約二百、人口一千二三百。北海道には、その人口一萬七八千。そのうち、日高の六千ばかりが、國別としては、最も多いのである。一たびはわが本洲の殆ど三分の二までも占領して、大猛威を振つた人種が、今ではこのみじめな狀態にあるのを見ては、全く隔世の感なきを得ないのだ。渠等は、男女に拘らず、いづれも骨格がいい。然し骨格はいいままに、精神的にも、肉體的にも、墮落して行く。優等人種に對し非常なねたみを持ち來ると同時に、また非常に弱い依賴心を生ずるのは、劣等人種の常であるらしい。これがアイノを精神的に滅亡さす心理狀態である。して、また一方にはその生活上に於て、血族結婚、室內並に周圍の不潔、營養不充分、過度の飮酒などが源因となつて、渠等の本來强健な身體を虛弱に落して行くのだ。

僕が樺太に於て、船山醫學士と共に、タランドマリやクメコマイなどの土人部落に就き、アイノ人の健康試驗をして見た時、トラホームに罹つてゐないものはないくらゐであつた。それは光線の不足と爐邊の焚き火との爲めに止むを得ないのだらう。次ぎに、ヒゼンが多かつた。そのまた次ぎに、佝僂病が目に立つた。この佝僂病に限つて、ただ普通のセムシになつてゐるばかりでなく、横ツ腹もし

くは腰の當りに穴が出來て、そこから膿が出てゐるのだ。肺結核や梅毒は極少かつた。然し、アイノ婦人は優等人種なるシャモに愛せられるのを非常に名譽とする。して、その所謂名譽に接する機會は、樺太アイノよりも北海道アイノに多い。して、梅毒並に肺結核の有無と多少とは、之と正比例になつてゐるのだ。

海馬の胃ぶくろと、ふのを樺太で見たが、一斗以上の流動物を盛ることが出來るほど大きいものだ。同島では、大抵のアイノ小屋には、それが一つ又は二つうつばりから釣りさげられてゐる。して、その中には海馬の油を入れてある。アイノ人はどんな食物にもこの油をかけて喰ふのだが、それが衞生上に餘りよくないさうだ。菜等の食物には、さく（アイノ語、はら）と云つて、野原に澤山あぢさゐの様な花を開く植物や、にを（學名、えぞにふ）の一種あまにをなどがあり。また百合の根を搗いて喰ふので、絲に通して澤山爐の上に乾してある。海岸並に河邊の小屋なら、また、鮭もしくは鱒を切り開き、その赤い身を爐の上または晴天の野外に乾してある。

醫者の與へる藥を病人に飲まさないで、大抵はうはうるし、黄蓮、きとびる（俗名、アイノねぎ）などの葉や根を煎じて飲ます。して、出來物には、鼠の皮を剝いで張りつけるのだ。アイノの習慣として肩が凝ると、胸に水をつけ、指さきでそこをやたらにつねるのだ。すると、そこに血が寄つて來るので、肩の痛みを散らしてしまうことになる。男女の胸に血のにじんだその跡があるのが多い。ま

た、胸の代りに、肩をマキリで薄く切りさいなむこともあるので、その跡が縱横に入れ墨の如く見えるものがある。

また、アイノには數の念が殆どない。從つて、年代の數へ方も單純なもので、親の時、そのまた親の時、親の親のそのまた親の時といふ樣に同種族の口碑をつたへて行くのだ。同時代のものでも、自分よりさきに生れたとか、自分よりも後で生れたとか云つて、大體の年齡を示めし得るだけで、渠等の間には、青年男女を除いては、自分の年を確かに知つてるものがない。一老人の如きは、年を問はれて、自分は知らないが、お役所の帳面についてるだらうと云つてゐた。雪が降つて、その雪が消えて、また降つて、また消えてといふのが、渠等の過去の追想に對する態度である。

さきに鳥渡出した中村要吉といふアイノは、音更村に於て、土人開墾事務所をあづかつてゐる。音更村全體は、もと音更川の川底であつたらしい、幅の廣い長原野であつて、その兩がはを、築きあげた樣な高臺がどこまでもさし挿んでゐて、その高臺は、秋になると、立派な紅葉を以て飾られる。四十二年の春、そこに大洪水があつて、そこらあたりの土地が十五六町歩も流れたが、土人間にも昔の天文學者見た樣なものがあつて、雲の工合によつてその洪水を豫言した。して、その言を信じて、家具や畜類を高臺に運びあげたものは、すべて難を免れた。

要吉は農業には從事せず、馬を飼ひ、小料理店を開かせたり、その他の商賣をしてゐるので、帶廣町にも必要上驛遞宿の一間を借りてゐる。町ではハイカラ土人、生意氣なアイノとして厭がられてゐるが、仁禮子爵の農場（音更村の北端にある）などでは、評判がよく、從順で、忠實で、同族の爲めには一身を賭して盡力してゐると云はれてゐる。年齢もまだ三十前後だ。家では、妻子にも日本語を以て話し、馬も五六頭を有し、箪笥、茶箪笥、机、テーブル、茶道具、ショールなどを持つてゐる。日本流の床の間には、肩から幅廣の綬の樣なものでかける刀を二振りと、シリカツプやスイコロゼブといふ魚骨を寶物として飾つてある。

同家のそばに、簡單な倉庫樣の物が一つ出來かかつてゐるのを見たが、土人等がその生産物を飲みつぶしてしまはない樣に、翌年の耕作期の豫備食糧として、その年生産したきび、稻きび、粟、唐もろこし等を預り貯へて置く倉であつた。また、稟は土人等に勸めて、もと犬を飼つてゐたのを（して、土人の仕込んだ犬は熊を恐れず、熊が人に害をしようとするのを、その後から飛びかかつて、とめるが、）豚に更へて見たが、餘り儲けがないので、近頃は庭鳥にしてゐる。僕が要吉の家にあがつてゐるうちにも稟は雄のひよこを土人間から集めて來て、一匁日八文半の割で、帶廣町から來た鳥屋に賣つてゐた。

音更並に伏古は、十勝で、汽車に便利な爲め、土人村として隨分よく知られてゐるが、その實、前

者の土人は五十八戸、百二十名ばかり、後者はただ五十五戸、二百餘名に過ぎない。それから見ると、日高や沙流や平取などは、土人の戸數が四五百もあらう。和人が義經創業の爲めに建てた義經神社があるのも平取だ。日高の旅行中、二三名が馬に乘ると、その一匹は必らず牝馬で、その跡から約束の樣にポニイ（小馬）がてく〳〵ついて來るが、若しがた馬車にでも乘り合はすと、またきツとアイノのセカチ（男の子）が一丁も二丁もばた〳〵とついて來るに定つてゐる。然しアイノを見て、僕等が最も同情的哀感に打たれるのは、日高の海岸で、怒濤の押し寄せて來る間を、そのメノコが見すぼらしい衣物で、長い絲のさきに石を結へつけて、それを投げやり、ただよふ昆布を拾ひあげるのを見た時だ。または、十勝の大原野で、道に迷ひ、薄の間の榭の木に馬をつないで、一服してゐると、あちらから來るのは日本人でなく、馬にまたがつた鬚武者の老アイノであつた時だ。

北海道アイノは一體に猛惡な相があるが、樺太アイノはさう猛惡な樣子がなく、性質も亦至極おとなしい。然し、僕等が樺太のウショロ灣に着した時、黒足袋の上に草鞋をはき、黒びらうどの筒袖ごろも、胸をぼたんでとめて、膝まで達するの（露領アレキサンドルから來たる）を着て、細いわら紐を腰の上で締め、額をずツと刈り込んで、あたまの眞ツ黒な髮をふさ〳〵と肩まで垂らし、うは髯も多く、頰ひげ、顎ひげの長い、銀色の大きな耳輪をつけたのが十六七名、すべて滿洲風で、ずらりと海岸に並んで僕等を迎へた時は、何とも云へない寂びと凄みとをおぼえた。また、樺太トウブツの小

學校に、アイノ人の子が二名這入つてゐたが、そこを巡回してから船に乘る時、その二名も他の生徒と共に海岸まで見送つて來たはよかつたが、他の生徒のかげに隱れて、僕等の船出を見てゐたのは、如何にも可愛さうな氣がした。

アイノ人で兎に角知られてゐるものは、音更の中村要吉の外に、伏古の古川辰五郎――これは、自分の受け持つ地を耕作する餘暇に、和人の未開墾地をまでも開いてやつてゐるほど忠實なアイノだが、同村に安田巖城氏ががん張つてゐるので、その名は餘り引き立たない。膽振の蘭別村には、大河内コビサントクといふのがゐる。蘭別は土人の方が却つて勢力ある村で、和人の子供が土人の子供にいじめられるばかりでなく、和人が土人の爲めに小作人になつてゐるのもある。コビサントクは獨りで一ケ年百圓以上の村費を負擔し、大きな土地の所有者であると同時に、殘忍な手段を和人にも辭する金貸しで、女を數名持つてゐて、金と女とよりほかに樂しみはないと云つてゐる。

樺太には、東西兩岸におの／＼一人づつのアイノ酋長がゐる。東海岸の土人總代はバフンケイ（和名、木村愛吉）と云ひ、純粹のアイノだが、開化した立派な人物で、立派な屋敷を構へて、土人の世話をしてゐる。西海岸の總代は川村利藏と云ひ、これは和人とのあひの子で、四十恰好の男である。樺太アイノにも日本人の血は早くから混じてゐて、四十、五十代のあひの子がすくなくない。初島には、副總代とも云ふべき愛知縣人、武内公平といふ人がついてゐる。この人は、明治三十七年樺太に

渡り、土人間に澤山の品物を貸しつけたが、貸したら、もう取れないのがアイノの默認であるから、そのまま、踏みとまり、幸ひに土人間に信用があるので、一身を忘れて、今ではアイノ人の爲めに盡してゐる。

四十歳以上のアイノが自分の年齢を知らないのは事實だが、また名をも知らないと云ふのは、和名のことである。北海道でも樺太でも同じだが、たとへば中村要吉とか、川村和藏とか日本人化して、役場の戸籍帳に入れたのだ。樺太では、アイノの子が生れると、出張の巡査や番屋の人々に命名して貰ふ樣だが、北海道で初めて和名を與へる時、一度期であつたから、役場員が別な名に窮してしまひ、加藤清正だの、楠正成など云ふのを持つて來た。それもいいが、中には、和人が自分の名を改正する爲め、それを土人につけ與へ、土人と同名になるからと云ふ口實のもとに、自分の改名をしたこともある。土人には、そんなにして貰つた姓名はおぼえてゐるほど必要なものでなかつたのだ。だから、姓は和流で、名は土人流な、たとへば、大河内コビサントクとか、山川シロクランケとか云ふものもある。シロクランケは樺太チラホナイ部落の老アイノで、その家も廣い。その床の間の端に「警官席」と書いた半紙が張つてあるので、そのわけを聽いて見ると、部落の人を集めて浪花節を聽かせた時の名殘であつた。女の名に、チヤコ、ユリコ、レキキシマ、シバラレマなど云ふのがある。また、女で、木村オチンコといふのが樺太のタランドマリにあつた。

樺太には、天野天海といふ新聞記者があつて、アイノに關し、雜駁だが、廣い知識を持つてゐる。から云ふ人々が――伏古の安田氏もさうだが――アイノ語を知らないで研究するには、先づ土人が與へた地名の意味を根問ひして這入る。樺太エストル河口のライチシカ湖は死んで泣く水海といふので、ここは實に風景のいいところだが、水流と風との加減で、今でも、船が危險だ。アイノはここへ入れば、三十日出られぬと云つてゐる。ナヤシとはよもぎの生えてゐるところとか、ノトロとはつき出たみさきとか、チヨマトーとは忌むべき沼とか、かういふ風に調べて行つて、アイノの持つてゐた歷史や傳說のヒントを得るのだ。然し同じ語が一ケ所ならず、二三ケ所にも與へられてゐるのがある、ノトロ、エサシ、モンベツ、ホロナイの如きはそれだ。且、北海道アイノの傳說中には、北海道の地理もしくは歷史でなく、駿河や信州のそれを說明してゐるのがある。アイノ語で、富士は火の神、利根は長い川などは誰れも知つてゐるとしても、信州の松本や上田などいふ地名をアイノ語で解釋して見ると、意外にも、北海土人の傳說と符合するのを發見したアイノ學者もあるさうだ。

アイノの傳說のうちでも、最も面白いと思ふのは石狩岳と阿寒岳の傳說である。この兩山はもと夫婦であつて、石狩岳が男で、マツネシリ、乃ち、阿寒岳が女だ。ところが、夫婦喧嘩をして、女山が釧路に逃げた。その時、男山は赫怒し、おほきな矛を投げて、女の耳を貫いた。女山は耳を貫ぬかれたが、その矛を受けて投げ返すと、非常な速力で飛んで行つたので、當りさへすれば、男山の生命を

危うくしたのに相違なかつたのだが、その急を救ふ爲め、ヌプカウシヌプリが拔けて出て、大[illegible]の矛を受けとめた。このヌプリ、乃ち、神山の拔けて出た跡が今のシカリベツ（[illegible]りで出來た沼）であると云ふのだ。然し、この傳說もよく研究すれば、北海道產ではなく、アイノが本州にゐた時出來たものかも知れないのだ。

僕が伏古に安田氏を訪づれたのは、おもにアイノの史詩もしくは戰詩たるツヤコロペやユーカリの歌ひ方を、氏の紹介によつて、直接にアイノから聽きたかつた爲めだ。然し、殘念にも、そんな土人はゐなかつた。伏古の土人は割合に古くない。北見もしくは日高から移住して來てから、僅かに六代か七代にしかなつてゐない。網走線のポンペツに行けば、或は聽けるかも知れないと云ふことであつたが、僕は眞似だけでもいいからと云つて、近所のメノコを呼んで來て貰つたが、その女は歌の話は出來るけれど、歌ふことは出來ないと答へた。「男ばかり引つかけまわつて、役に立たない女だ」と、安田氏はかの女を冷かした。

音更村には、シャコロベ並にユーカリを歌へるものが二名あつたが、一名は老死し、一名はその行くゑが知れなくなつた。然しシツンプ（和名、淺山彌太郎）といふ百餘歲の老人がゐた。これが最も賴母しい歌ひ手だが、もう、目は見えず、耳は聽えず、齒は悉く落ちこぼれ、腰は立たない。それでも、先年巖谷、江見諸氏の行つた時は、まだしも、それに歌はして、中村要吉がそのかたはらから翻

譯することが出來たさうだが、もう、酒も飲めないほど――して、一二升も飲またければ歌はないのだ――衰弱してゐて、要吉が非常に斡旋したが駄目であつた。僕は虎口に入つて虎子を得ずといふ感じがして、實に殘念であつた。その他に誰れも歌ひ得るものはなかつたのだ。

然しその夜お祝ひの家であると云ふので、その歌や踊りを見聞したい爲め、夜まで要吉の家にとどまつてゐた。二三日前にもお祝ひがあつて、隨分賑かであつたが、それは十三年目にこの部落へ歸つて來て、女房を貰つたそのしるしであつた。これはまた百日以上山へ出かせぎに行つてゐて、今度また秋の貂取りに出るまで、島渡歸つて來る人の爲めだが、それも本人がゆふかたまでに歸つて來なかつたのでおじやんになつてしまつた。

アイノの犯謠

アイノの歌謠中、シヤコロペ並にユーカリの種類は最も長いもので、それを歌はすには嚴格な儀式があつて、歌ひ手並に聽き手に澤山の酒を振舞ひ、渠等が醉つて來ると共に夜がしん／＼と更けて、初めて興が乘つて來るものだ。この種のもので、樺太アイノには、ハウキと云ふのがある。シヤコロペはその歌ひ方に最も位がある祖先史詩だが、ユーカリはそれを眞似た英雄詩譚である。この兩者の說明または內容は、一昨年の殖民公報に中村要吉をして口譯さしたのが載つてゐるし、また一昨年の中

央公論に金田一花明氏のがあるから、ここには紹介を省く。その他に、ウチャシクマ（古い物語）と云ふ歌の附かない歴史談や、ツイダク（短話）と云ふ作爲的談話や、オイナ（長言）と云ふ島族の事に擬して歌ふ遺懐がある。また、ポニタキとか、ウエベケリとか云つて、お伽噺、昔噺の様なものがある。

日高の沙流や平取の土人間では、から云ふのを頻りに習ふものがゐるが、専ら人々に分り易くしようとして、その歌ひ方もしくは暗誦し方がすべて古風な眞相に遠ざかつて行くさうだ。その他、わが邦人の端唄や都々一の様な、酒席で歌ふ短い歌が澤山ある。タプカラとは劍舞歌の様なもので、之を歌ふのは男の老人に限る。また、男が坐わつてやるのに、シノツチヤケといふのがある。女の立つて歌ふのに、ウポポと云ふのがある。男女すべてが立つて踊るのに、リミセといふのがある。それに、また、ヤイシヤマネと云ふもとの哀歌がある。もとは、果敢ない戀の別れや死を歌つた挽歌だが、ヤイシヤマネーナ（かなしや、な）といふ句をその歌の中で度々繰り返すところから、一種の歌の總名となつた。且、何の悲しいこともない酒宴歌にも、ヤイシヤマネーナを繰り返すことになり、ただ流行歌の代名詞になつてしまつた。

哀歌の一つ、

ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、

ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！

クコロ　ポン　カンピ（わしが若い帳場さんは）、

ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、

ナツタ　アララ（どこへ行つた）？

ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、

ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！

番屋の帳場は、アイノの若い女に取りては、理想の戀人である。それと關係してゐたあげく、年期が滿ちて、渠は内地に向つて船出したが、その船は途中で沈沒したと云ふ悲しみを歌つたものだ。

アイノの古謠、蟲のくどき話に左の様なのがある。

アルクラン　モコラン、アクス（一晩寐た、さうしたら）、

パイカラ　アン（春が來た）。

また、左の如きがある。

イデツキ（決して）

ウプツイナヤーン（鮭の白子を取るな）。

ウパエコロ　ホン　アラカペ（それを喰べたら、腹が痛くなる）。

子守唄で、左の如きがある。

ホツコーコーク（鳶が舞ひあがる）、
ネイタロツクン　チカプ（降りたらどこへとまるやら、鳥）、
ホツコーコーク（鳶が舞ひあがる）、
カリコロカヤ（あすこにくる〳〵舞ふ）。

また、わが國の祝詞式な物で、酋長が神に申しあげる言葉に、最も莊嚴なのがある。

クコロ　アペウチ（わが家の火神さま）、
ソイワアン　カムイ（そとにゐます神達）、
ツラノーウコサン　ニヨーワ（共に相談りて）、
クコロ　イノンイタツキ（わが祈りに）
ヌプヅスクリー（深き幸ひを）
サンレツカバクノー（子孫の子孫まで）
シツリークニ（傳はる樣に）、
カラワエンゴレー（作り給はんことを）。

さきに僕は立會裁判ツアランケで歌ひつづけることがあると云つたが、その歌のうちに入れること

が出來るのを一つあげて見よう。一說には、これは廣尾の驛遞を土人が昔つとめてゐた、その職務を歌つたもので、十勝アイノ特有のヤイシヤマネー、乃ち、流行歌だとも云ふ。例のヤイシヤマネーナ、ヤイシヤマネーナの囃言葉を以つて初まるのだが、

トノオルシペクス（殿の命によりて）、
クロマトータ（暗い夜を）
パエカエアンナ（われ獨り行くのだ）。
スツパ　テレケ（急いで行け）。

これは馬に物を云つてゐるわけだが、若しそれに

キムン　カムイ　オカイナー、
サラタンネ、エーホイ　キシキシ

と加へれば、『熊の神が出るから、サラタンネ（馬の名）よ、ハイ〱ハイ〱』となるのだ。
その他二三種の原歌だけを載せて、アイノ語研究者の參考にしよう。女の歌の一――

コレエペリ　ホプニナア、
ホクトンケヘー、ヘチウヤン。

その二――

ウヮシ　ハオー、ウヮシ　ハエ、

ウヮシ　ハエラー、ウヮシ　ハオー、

ハオイヤ　ハオイヤー、

ハオオイヤ　ハオプオー。

その三――

ヘエサハオー、ヘエサアハエロー。

ヘエサハオ、ヘエサア　ハエロー。

また、近頃の青年の作つた歌だと云ふに、

タンパアシンノオー、

ザヤグウサー　アムキリ、

クアフンー、アクウース、

フクサクウウサイトイワレタア。

義經の傳說の如きは、眞赤なうそで、これはわが邦人がアイノを强制威壓する爲め、南部神道的手段を弄して、アイノ傳說に於ける英雄を義經だと說明して聽かせたのだ。邦人が日高の平取に最初の蝦夷經營に着手し、近藤重藏が十勝の廣尾街道を切り開いた頃から、廣められた手段的傳說であらう。

無責任な土人等はそんなことはどちらでもいいのだから、成る程さうで御座るかと聽き流したと同時に、後世の邦人が行つて、お前達の先祖は義經かと聽くと、シャモがさう云ふからさうなんだらうと答へるだけだ。殆ど一人も信じてゐるものはない。北海アイノの全體に渡つては勿論、樺太アイノにもその傳說があると云つて、邦人が物知りがほに說くのは、義經その人ではなく、すべてオキクルミその者か、その變態的人物のことだ。

アイノは日高、十勝、北見といふ樣に、國を異にするに從つて、その歷史、言語、歌謠も多少異なるが、その傳說に於ても、目立つて違ふのがある。俗に義經と云はれてゐる人物を、日高ではオキクルミと云ひ、十勝ではオキギリマと云ふ。日高アイノは之を同種族の歷史的最大人物と尊崇するに反して、十勝アイノは之をシャマイクルと稱する最大英雄の使用人に過ぎない樣に思つてゐる。このシャマイクルやオキギリマ、その他の英雄傳も、忘れられないうちに、アイノから直接に聽いて置く必要があらう。

ブシ、乃ち、とりかぶとの根からは、アイノが例のブシ箭の毒を取るのだが、花は紫色の蝶々の樣で、なか〱奇麗で、和人の子供は知らずしてそれを家に取つて歸ることなどある。このブシと、食料になる百合の根、サク、あまニヲなどは、アイノと離れ難い植物である。動物では、熊と貂とである。樺太アイノには、矛漁といふことがあつて、エストル川などで、夜、たい松をたいて、獨木舟を

水面に浮べ、アイノ二名が舟の舳と艫とに立ち、鈎つきの矛を以つて水中を泳ぐ紅魚をつきさすのだ。僕が「樺太雜感」(太陽一月號)の一つで歌つた通り、その秘術にトンチから敎へられたと云つてゐる。コロボクル論者等はそれが自分らの所謂蕗の下人だと云ふが、あちらの蕗はわが邦人中の最も背高い人も隱れてしまうほど大きいものであるし、また實際コロボクル人たるものが存在してゐたといふ論據は殆ど全く發見されない様だ。コロボクルにせよ、トンチにせよ、どうせ、アイノの神話かお伽噺的傳說であるに違ひない。

樺太通信

其一

明治四十二年六月二十三日の夜に小樽へ着いた。

船が二十六日出帆なので、それを待たなければならない。小樽までは東京に於ける服裝のままで來たが、夜分を除いては、左程冷氣を感じなかつた。船に乘り込む時は、袷に袷羽織にどてらを用意する。シャツも二三枚用意して行くつもり。

鐵道は、北海道に這入つてから、急に動搖が烈しいので困つた。客の取り扱ひも青森までとは違つて、丸で冷淡である。青森函館間の聯絡船比羅夫丸は乘り心地のいい船だ。京都から來た番頭らしい

のが乘り込んでゐたが。僅か四時間の聯絡航路を苦にし、二日二晩絕食してゐたから、いよ〳〵船に乘り込むと、まだ出ないうちから、空服と神經作用との爲めにもがいてゐた。それが函館の山が見えると、急に元氣づきふら〳〵しながらも、甲板上をうろつく樣になつたのは滑稽であつた。

其二

餘り汽車にゆられて來たので、食慾は殆ど出なかつたが、昨夜はゆツくり眠られたから、今朝からは飯が甘く喰へ、勢ひも出て來た。

小樽港には、伊集院中將の率ゆる第一艦隊六隻が碇泊中だ。この艦隊も僕と同日に樺太に向ふさうだ。

中央小樽停車場附近にロシヤ人とトルコ人、ふたりとも老人が協同してロスケ・パンを製造販賣してゐる。一人には日本人の妻があるが、今一人の方が先日妻か妾かを定めるつもりで、日本の女をつれて來て、その近處の宿屋に置いたが、女はまた女郎あがりか何かなので、隣室へ自分の色男をとまらして置いた。して一晚で外人から金十圓と別に二三圓の小使とを取つて、色男と共にどこかへ逃げて行つた。それが訴へられてゐるが、どこへ行つたか分らない。外人とは云へ、旣に歸化人だのに、それに向つて隨分可愛さうないぢめ方をする日本人があればあるものだ、ね。

今日鳥渡札幌へ行つて來るつもり。

其三

六月二十五日發。昨日札幌へ來て見た。街幅が廣い上に、家根が低く、異様な高木が澤山なので、至極のんきな町に見える。たまに人の通るのに逢はずば、丸で外國へ來た樣だらう。

夜、月がよかつたので農科大學の附屬博物館の構内を散歩した。牧草の間を歩いて行くと、ドロ、イタヤ、アカグモ、白楊樹などの月のあかりに高く繁つてゐる姿が如何にも氣持よかつた。

今日、山本露滴氏と中島遊園に遊んだ。同氏は短歌を作る人だが、今回、實業の北海といふ大雜誌を經營することになり、東京の實業雜誌を北海道から驅逐するつもりださうだ。九月に初號が出るのだ。

河島北海道長官を訪ねたが、僕を忘れてゐたので、餘り話をせずに別れた。

曾て東京にゐた俗謠詩人野口雨情氏は、室蘭の某新聞にゐたが、近頃詐喝取財の名で札幌監獄に這入つてゐる。然し本人はただその樣な性質の御馳走を受けただけで、何も知らなかつたのだと云ふ。氣の毒な話だ。

僕は明日午後二時愈々出帆する。

廿四

六月二十六日。小樽から。

昨日、露滴氏の外に、元の高嶺記者であつた安倍雨のや氏並に僕の一舊友と共に札幌座を見た。つい、こなひだ銃殺された樺戸の看守殺しの囚徒を仕組んでやる初日であつた。僕は考へたが、道具の使ひ方と多少藝の垢ぬけしたこととは東京のに及ばないとして、その他に於ては東京と地方と對して相違はない。下手と自覺して熱心にやるだけが、却つて地方のに恕すべき點がある。こんなことを云はれるのは、恐らく高田や伊井の名譽ではあるまい。

朝、寢すごして顏も洗はないで飛び出し、札幌ステーションへ來ると、露滴氏も跡から驅けて來て、見送つてくれた。汽車の上でたま〳〵元から知り會ひの警察官に會つた。某縣で保安課長をしてゐる時、はたからいぢめられて、また別な縣へ左遷されたのであるが、今は本道の某署に警視をしてゐるので、先づ滿足だと云つてゐた。

小樽へ來て見ると、期待の船が入港してゐないので、高砂丸と云ふ五六百噸の小船で行く。乘り込みは今晩の十二時だ。

其五

六月二十七日早朝、昨夜から船に乘り込んで、今朝四時に出帆した。顏を洗つてゐる時、日の出が見えた。その眞赤な平穩な海の青みとで心も一洗された。船客は各等を通じて、五名しかない。今は丁度客の少い時節ださうだ。

腹がヘツてゐるが、辨當はまだ出ない。小樽で喰つた帆立貝の柱が珍らしく又甘かつたことを思ひ出した。ガゼのかまぼこも亦珍物だ。北海道では、海栗のことをガゼと謂る。その卵をかまぼこにしたものだ。

小樽には、前便の脊視の外に一人の知人がある。僕はこの人に種々世話をかけた。渠はその父のやつてゐた女郎屋を人道にもとると云つて早く廢業してから、同地の口ききとなり、一昨年まで代書や印紙販賣やを業としてゐた。東京で學ばした娘が二人あつて、いづれも美人だが、自由結婚論者であるだけに、渠はその二人を放任主義で育てた。標輕なおやぢで、自分は素人役者が自慢で、讀賣新聞社の讀者大會があつた時、わざ／＼東京に出て、餘興喜劇の一役を引き受け、喝采を博したこともあつたので、一昨年一家を擧げて上京し、自づから新派の俳優となつて、娘をも二人女優にしやうとしたが、老いた渠だけを以つては相談に應じてくれるものがなく、また娘等も俳優等に通の素質一樣を依

頼したので、物にはならなかつた。再び歸つて來てから、薬は別な仕事を初めて居る。娘の一人は以前から理想であつた戀を全うし得、その姉にまだ獨身主義を捨てて近頃父の命に從つた。僕は斷言するが、餘りやきもき云はない親のもとには、却つてその子等に失敗が少くつていいと。

其六

同日午前八時。朝食後。

同乘の客に樺太西海岸マオカで商業をやつてゐる人がある。頻りに樺太の秕政を憤慨してゐた。その人の言葉に『政府も人民も目前のかねさへ取れば、人のことはどうでもいいと云ふ樣なやり方だから』とあつたが、その憤慨の理由を聞けば、この青年自身でも商事を遣してゐるらしい。

甲板上にのぼつて、北海道の陸をかへり見ると、増毛の鼻が右舷に近づいてゐる。みよしは沖に向つて、殆ど碧天にのぼる氣持ちだ。

海！海！僕は去年の春以來、餘り都會的生活に忙しくつて、好きな海を見なかつた。海に浮ぶことはなほ更らなかつた。僕に生活と情事とにゐるみある時、海許りがいのちであつたこともある。今またその感じが出て來た。寂しく、若々しく、而も力に滿ち〳〵た樣な感じだ。

然し、北海に浮ぶと、まだ一つ別な感じが加はつて來る。僕等はロシヤに向つてゐることだ。『ロシ

ヤはわが黄金國」といふことだ。この間で少年詩一篇を作り、「樺太なる八月頃に對する自分の感情を發した。「海にのぞめばわが國浮ぶ、北の海にのぞめばロシヤを思ふ」と云ふのが結句の二行であつた。

其七

同日。晝食後。

燒尻、天賣の島影を右舷に見ながら進行する。みよしの方に遠く利尻、禮文の山が白い雪を被つて、氷の山の樣に見える。

ボーイにビールを持つて來させ、それを飲みながら客といろんな世間ばなしをする。客の一人は難船して助かつた經驗談をした。どうして助かつたかと云ふに、便所のまたぎを拔き取り、その穴へ身體を入れ、恰も浮き袋で浮いてゐるかの樣にして、五晝夜波上をただよひ、兩手を以つて櫓のつとめをさせながら、藻や板切れを拾つて食ひ、五晝夜目に漸く漁船に助けあげられたが、もう安心と思つた時、氣が遠くなり、暫く人事不省であつたさうだ。

この人は內地で仕事を失つた爲め、何かいいことを見付けに渡るのだが、一人の婆アさんはマオカの呉服屋で、古着を仕込んで歸るところだ。今一組の夫婦は同所の荒物屋で、子息に店を託して、札幌へ遊びに行つた歸りだ。いづれも今日に限り醉はないと語り合ひ、甲板の上を出たり、這入つたり

してゐる、一時五十分再び甲板上に出ると船は最早天塩の山を離れて、宗谷海峡の方から汽船が一隻やつて來るのが見える、利尻島が明らかに進行の前路にあらはれて來た。

其八

二十七日、午後四時。

天塩、北見の山々は低く、遠く、かすかになつて、利尻島に近づいた。同島は北見富士を以つて稱はれてゐるところだ。山の恰好は駿河富士よりもいい。古風な神社の軒の樣に、左右の輪廓がうはぞり加減に引かれてゐて、其の裾野は乃ち海岸である。山巓は白雲に隱れてゐるが、却つてそれが奥ゆかしい。

この島は北海道一の漁業場で、小い島としては、比較的に同道産物の大部分を鰊で占めてゐるのだ。その一端、鬼脇の如きは、鰹の罐詰を以つてまた知られてゐる。歸途そこへも立寄るつもりだが、船客の話によると、野生の猫が多く居るさうだ。その他の毛だ物は狐で、島民はこれを殺さないことにしてあるさうだ。

五時頃には、ヤソとその近くを右舷に見て進行したので、且、雲が山を離れたので山巓もよく見えた。惜しいことには餘りいい格恰と云へない。然し、谷々には雪が殘つてゐて、それが多くの白い線

となつて殆ど檣まで及んでゐる。

やがてその島をも離れよう。禮文島を左舷に、稚内を右舷に、いづれも遠く見て宗谷海峡の門を通り過ぎると、今度はいよ〳〵北緯四十四度（樺太の南端）に入るのだ。

廿九

二十八日。午前三時半。目を醒まして甲板上へ出ると、すでに樺太の南端は見えないほど北に進んでゐて、海馬島の影も遙か後方になつてゐる。まだ日は出ないが、遠山のうしろから眞赤な雲が延び出してゐる。船から見ると樺太遠山は單調子で殆ど一直線に南北に走つてゐる。船も亦十マイルの速力を以つて樺太西岸三マイルほどを隔てて北方へ駛走するのだ。マオカはもう二十五六マイルしかないと云ふ。昨夜宗谷海峡で多少波が立つたので、同乗の婆アさんが一人醉つてしまつたが、それも今は平穏に寢てゐる。荒物屋の主人は、退屈まぎれに、手風琴を出し譜を見ながら、下手な演奏を初めた。

左舷に露領が廣がつてゐるのだが、それは遠くて見えない、ただ茫漠たる浪の原野だ。

午前四時半。眞赤な雲は日の出であつたのだらう、今や日は大分高くなつて白い輝きを呈してゐる。風は隨分つべたい。

其十

廿八日、午前七時半、マオカ着。

船中より見れば、附近の山はすべて低く、且大木がない。殆ど山火事のあつた跡一面に青草が生えて、その間をところ〴〵かい樹木が立つてゐるかの樣だ。

僕、實は大泊や豊原の方を先へ見て、それから來るつもりであつたのだが、弟の病氣が氣がかりであつたから今々定期船には乘らず、社外船で小樽から直行した。すると、弟は當地の病院に入院してゐるのを知つた。不慣の寒氣に當つて、不慣れの仕事で過勞したからでもあらう、本月五日から熱が出て殆ど絶食のありさまであつたが、昨日、七八里在のオタトモから和船に乘せられてマオカへつれて來させられたのだ。當地の人々は樺太風土病のがツちやけだから、醫者にかかるよりも習慣で分つてゐる手療治の方がいいと云ふ。醫者の方では誰れでもそんな特別な病氣の存在を否定する。熱が出た翌日から腰が立たないが、肛門の周圍が痔の如く腫れてゐる。

院長は昨日診察して脊髓病だと云つたさうだが、[illegible]結核になつてゐる恐れがあると云つた。兎に角、一二日の經過を見て貰はなければ分らない[illegible]だ。

病院は二三ケ所あるが、弟の入院してゐるのは某軍醫が樺太廳から月八十圓の手當を貰つて開いて

ゐるのだ。一日二圓五十錢だが、稼業と云つても、當地普通の本業で、固定しないらしい。一家には、女房と二三歳の子供とが付き添ひで頑丈な男が這入つてゐる。當地の間口で働いてゐた若い消防夫が、仕事の最中における争から出刃を以つて胸腹を突きさされたのだ。樺太は無法者と泥棒とが行くところだといふ話をよく人がするが、來る早々そのことを思ひ出した。

夜あけは午前二時半ださうだが。午後八時半漸く暗くなりかかる有様だ。今日の日の入りは僞には見物であつた。海と空とが一樣に赤くなつて、ちぎれた小雲が黄金の光が取卷いてゐるのは丸で飾つた海馬島の樣であつた。寒暖計は、午後八時に五十八度だ。

其十一

六月廿九日。マオカの町をはづれまで歩いて見た。本通りと裏通りとのふた筋があつて、兩端までは一里以上もあらう。北のはづれには、樺太中で殆んど一番おほきい鑵詰製造所がある。樺太で取れる蟹は兩足を延ばすと、四尺五寸もある。その胴や足の殼を濱邊に棄ててあるのが、いやなにほひがして、小蠅が一面にたかつてゐた。

アイノの女の子がアツシを着て、部落から買ひ物に出て來たのに逢つた。ロシヤ人の住んでゐる丸木づくりの家もあつた。後家（淫賣）が三々伍々どこかへつれ立つて行くのもあつた。また、同類ら

しいのが水ぎはで足だけつかつてゐるのもあつた。鏡の様にないでゐる海上には、命令定期船上川丸が碇泊してゐる。

當地の家はすべて粗造だ。料理屋の様なものでも、殆ど板でかこツてあるばかりだと云つてもいい。普通は五間間口で、八十一坪と定つてゐて、それが八百戸ばかりあるのだが、人の住んでゐるのは四百五六十戸しかないさうだ。到るところに貸家札が張りつけてある。明治四十一年後、こんなみじめなありさまになつたのださうだ。不景氣の結果には相違ない。船中での話を思ひ出しても、マオカにゐるのは、五間間口の家に少くとも小千圓をかけてあるのが未練だからで、それを賣り拂つてしまうとしても、五六十圓にしか買ひ手がない。商人などは、喰つて行けさへすれば先づいいのだが、それさへ今日では見込みがないと云つてゐる。肝心の漁業が思ふ様に行つてゐないからだ。參考の爲め、エハガキを十數枚送るから、都合次第で複寫して貰ひたい。

其十二

六月卅日。昨夜は月が良かつた。して、日の暮れてしまうのがどうしても九時過ぎだから、東京から來た者に取りては、いい月夜には、まだ暮れてゐない様な感じがする。晝間の空氣と夜の空氣とを、明るい寒みから、區別するだけの神經作用がまだ働いて來ないからであらう。

夕やけのいいことは既に語つて置いたが、日はマオカの町と直角になつて海に入るのだ。その海と空と一樣に黃金色を呈すると、その間に大小の碇泊汽船四五隻が後光をめぐらして浮んでゐる。濱邊に立つた僕の身には、北の海の景氣がしんみりと浸み込んで來ると同時に、また北の冷氣を充分にあびることが出來る。

弟の看護に來てゐる雇ひ人の女房は鑵詰製造の方に必要だから、今日、オタトモへ七里の路を歸し、別なのと入れ代はらすことにした。その間を僕がたツた獨りの看護人だ。昨日、看護の暇に玉突屋へ行つて見た。僕は東京で八十五點ぐらゐだが、それに對して百點もしくは百點以上のものが隨分あるさうだ。

其十三

玉突は丸萬といふ料理屋兼藝者屋に二臺、僕の宿ることにした香深館といふのに一臺ある。繪ハガキを買ひに行つたが、その店では雜誌なども取りついでゐる。調べて見ると、マオカだけで、實業の日本が三十五部、太陽が三十部、婦人世界が二十五部、太平洋が二十部、少年世界、少女世界が兩方で三十部、女學世界が十五部、文藝俱樂部(昨年までは二十五部だが)パック、演藝畫報、中學世界、實業少年等が各十一二部ださうだ。新小說、趣味、現代、中央公論などは註文がない。

日曜會といふのがあつて、これは初め民政廳の發案したものださうだが、そこではいろんな雜誌も一部づつ備へて、閲覽さすさうだ。

時間は北海道だけで云つても、小樽と稚内とで二十分違ふ。して、稚内とマオカとでは三十分違ふ。だから、東京と當地とでは一時間以上の相違があるのだ。

其十四

七月一日。昨夜はオタモトから關係の漁師が來たので一晩酒の相手をした。分らず屋の正直物で、同じことをいつまでも繰り返して埒が明かない。僕等の事業の爲めに他と喧嘩をしてまでも盡して吳れてるのは、その繰り言で分つた。刺網不公許の事に及ぶと、これも相變らず憤慨してゐた。もう、雜漁者の引きあげ時が三四日に迫つてゐるのだ。本年、渠は千五百圓ぐらゐの收獲はあつたが、それを配下十餘名に分つと、渠の手には正味百五十圓ほどしか殘らないさうだ。そのうちから、おまけに稅が出る。總領息子は函館中學校へ入れてある。歸するところ、勞して功なしである。はい繩(釣)並に手ぐり網だけを許されてゐる雜漁者の立ち行かないのは、この一例を見ても分るだらう。雜漁者の實入りがないから、從つてマオカの商業も繁盛しない。晝間から蓐を延べてごろ寢をしてゐる商人もあるのを僕は見受けた。

昨日來た漁師は格腹自慢で、僕の來るのを待つてゐたのは、一つには、僕に自分の漁場を買いと貰ひたいのであつた。僕は當家でないから無論、ことわつた。多分、僕が鑵を積るんだと誰れかに聞いたのを、眞いきと思ひ込んでゐたのだらう。

夜に入つてから、雨が降つて來た。僕には、初めての雨だが、全體、樺太は風が強いが、雨は少いさうだ。

寒暖計は、この頃、華氏四十五六度から六十五度の間を毎日昇降してゐる。

其十五

七月二日。晴。

昨夜も、入れ代はりに來る筈の看護人が來なかつたので、病院にとまつた。

當地に於て、違つた事情を段々發見するうちに、病院に來るものと云つても、暴風の日に磯舟が飛んで來た爲めそれに當つてあばら骨を折られ、二三日にして死んだのなどがある。裁判事件でも、土地は自分の物でありながら、家主から立退きを請求されたりしてゐるのがある。その實、土地は自分の名義になつてるとは云へ、政府から貸下げられてゐるのだからだ。

樺太の沿岸には大木がない、大木は一里も二里も奥へ入らなければ、見ることが出來ない。山火事

の多かつた結果かも知れない。こないだも三四日つゞいたのが豐原附近にあつた。古いことを云へば、或は二ヶ月も燒けつゞき、或は十數里を燒き拂ひ、或は帆檣の上が一晩のうちに二三寸の灰を積み重ねたこともあるさうだ。燒け跡には、先づ白樺が出來る。それが育つとそのかげに椴松や蝦夷松が生える。して草木の生存競爭上これらの松の生えるところには樺はその繁殖を停止してしまう。それがまた二三度燒けると、ばらやいちごや羊齒類の坊主山になるが、そこに少しでも熊笹の根があると、すべてがこの笹の爲めに征服されてしまうので、笹は森林保護には大害物だ。現今では、林業は全く許されてゐない。人民がただ自己の燒薪料に供するのを切り出すだけだ。落葉松は大泊、豐原、クスンナイなどにはあるさうだが、マオカ附近には殆んど蝦夷松、椴松ばかりだ。たまに、アカダモ、ヤチダモなどもないことはない。その筋の調査によれば、南樺太の森林總面積三百十五萬三千町步、との石數十八億八千餘尺メ。

其十六

マオカなどの氣候は、北海道で云へば、大體、旭川などと同じくらゐだ。然し北海道では、札幌附近にしか育たないといふ茄子が、樺太西海岸では、どこにでも育つ。茄子の出來る土地なら、農產物は何でも出來るものだから、農業の見込みが決してないとは云へない。唯政府の方針と指導とが、い

たづらに學理的に、いたづらに大袈裟にならず、そのよろしきを得て行きさへすればいいのだ、一木次官も、其政廳に吹き込まれたのか、國人の慣れもしない露國式の農牧業が直ちにいいかの如く說き出したが、殖民はすべてわが國人だから、渠等の習慣に從つてもツと實際的な指導をして行く方がよからう。

林業は全然禁止だし、農業はまだ殆ど手を着けてゐない。ただ漁業と漁夫を相手の商業の爲めに、明治三十九年四十年は大繁盛であつた。マオカでも金錢上の單位は十圓で、その以下は勘定しないあり樣で、百圓札が人の手から手へ飛んでゐたのだ。內地のは勿論、北海道の資本家等が、一攫千金の見込みで、各數萬數十萬金を投じて漁業をやらしたのだが、多くは失敗に終つてしまつた。渠等が山師であつたと同時に、樺太の漁師も亦山師であつたからだ。その後は、大資本家等はすべて自分または自分の代表者等を以つて直接に建網を張つたが、その上り高はすべて海上から直ぐ吸收してしまうから、樺太に落ちる金は寧ろ小資本家の雜漁者等の手から落ちるのだ。して、その雜漁者等が前便に報じた樣な窮態を演じてゐるのだ。

其十七

樺太の鰊漁は、一時間にして數萬金を擧げる建網を以つてする。每年三月十五日から許され、六月

十五日を期限としてゐる。是が特許漁業者の懸命になる期間で、昨年は建網を濡れた鰊の密漁が出來た爲め、雜漁者等も大分意外な利益に浴したが、本年はそれをたまですくツても、警察から嚴制された。そこにも魚族保護の名（實は種々の情實がある）を楯に取り、官憲は拾ひ鰊をも禁止し、亂暴にも雜漁業者所有の漁具　漁船を封印し、海岸の假小家を以つて密漁者の隱れ場と見爲して、之を破壞し、また密漁嫌疑の名を以つて漁網を官沒しなどやつたので、不平忿怒の餘り去月の騷動の樣なことが勃發したのだ。鰊の期間は、雜漁者等は、見す見すこの大獵がそのまま樺太以外に運ばれるのを知りながら、僅かにはい繩もしくは手ぐり網を以つて鰈、鱒、鱈その他の雜魚をのみ捕つてゐなければならない。六月から、手ぐりが許されるのだが、それは大切な時期が濟んでからのことだ。

樺太の都會々々は料理屋と遊廓とを除いては、何程の收得もなくなつたのは尤もなことではないかッして遊廓さへそこでの遊蕩料金を今では半減しなければならなくなつて來た。向島定住の漁夫、商人等は共喰ひの悲境にあつて、喰へさへすればいいのだと云つてゐるのだ。一昨年、乃ち、明治四十年末からの越年に多くの餓倒者を出したので、民政廳は非常にその救助に窮したさうだが、昨年末の如きは、越年時期が近づくと。巡査が各戸を訪問し、一夫婦に對し、少くとも米三俵、味噌一樽の貯へをしたか、どうかを確めにまはつた。ところが、本年は鰊も亦不漁と來たのだから、この越年は一層困難だらうと、マオカでは豫想されてゐる。

其十八

本年は鰊も不漁であつた。概算總計十二萬石、この價格百四十四萬圓。それに對して政廳に納める特許料金は八十五萬圓。差引五十九萬圓の收益の樣だが、實は、全體で四百萬圓なければ利益を見ることは出來ないさうだ。本年は、つまり、二百四五十萬圓の損失であつた。一漁場で一萬圓の料金を納めながら、五六百石しか取れなかつたのがあるし、漁業組合の漁場で一尾も這入らなかつたのもある。かういふ狀態だから、政廳に保護されてゐる建網業者間にも、料金が高過ぎて困ると云ふ不平があるのだ。一方には、漁夫等の不平あり、また一方には雜漁業者の鬱憤があり、その間にあつて樺太政廳は板ばさみになつてゐるのだ。

刺網公許、不公許の問題は、その實政廳が建網業者等に對する私情的義理づくに過ぎない樣だ。楠瀨長官時代の情實が今の平岡時代の法例となつて居るのだ。刺網を許せば鰊族を絕やすといふのは單に口述らしい。網の目を見ても、建網よりは刺網の方が一定してあらい。一定年齡に達して居ないものだけは逸脫して行くことが出來るし、且、刺網はその上下から自由に鰊が通過するだけの餘地を存してあるが、建網となると、網さへ大且健ならば、群來の鰊を大小悉く一網に捕獲してしまう。

今一つ考へ置く必要があるのは、魚が海藻を目がけて群來すると、牝鰊は海藻に放卵し、牡鰊はま

たその上に白子をかける。すると、そこらあたりの海水は一面に黄白色に變ずる。之を放卵濟みと云ふ。ところが、魚は群來の途中に張つてある建網の手網（ミゴ繩製）の光澤を見て、之に恐れ、まだ放卵しないうちに方向を轉じて散逸しようとする。して、それが、悉く常設の建網に這入つてしまうのだ。然し、刺網は、放卵濟みとなつて、海水の黄白混濁の爲め、魚が眼光を鈍らし、周圍を狂奔する時、投入される網である。魚族の繁殖を保護する上には、建網の方遙かに刺網よりも大害がある。且、刺網を許せば、樺太住民の大多數が生氣を吹き返すのではないか？政廳はこれ位の道理を知らないことはあるまい。知つて知らない眞似をするのは、死法を楯に情實を隱蔽する所以である。

政廳收入の上から云つて、雜漁者の税金十圓に對し、鰊業者のうちには一萬圓以上を納めるものがあるのは、丸で比較にならない樣だが、後者の税を低減してやつても、前者の刺網を公許し、別に不足を補ふ財源を發見するに努むべきものだ。新領地の發展には、それ位の努力は治者の方で公平にしてやつてよからう。越年時期に至つて、昨年の如く、慈善會を開き、その上り高で窮民を救はうとするが如きは、短見姑息も亦甚しい。

其十九

七月二日。晴。寒暖計華氏最高五十八度、最低四十三度。

玉突をやつてゐると、土地の人々がわれも〳〵と僕に相手になつて來る。當地で二百五十點のボーイも、百點または百二三十點の客も、同じ樣な程度で、東京の八十點もしくは八十五點の僕に負ける人ちだから、樺太の相場が餘り安過ぎると思はれるのが殘念だと云ふのだ。然し隨分うまい玉を取る人がゐる。漁場の關係者が多い爲めか、突き方は隨分あらい方だ。して、僕もあらいのだが、不慣れの土地に來てゐるだけ、態度をくづさないので當るのか知れない。とう〳〵九十點に値上げされた。ところが、電報が來たとか、急用だとか云つて、呼びに來られるものが多かつたので、急に玉場が寂しくなつた。小鰊が取れたのだ。漁場を持つてゐるものは大抵和船でそこへ行かなければならなかつたのだ。

許可期外でも、網に乘るものは公然の秘密として捕獲していいのだ。もつとも、でくの坊同樣に法律を固守する出張巡査は既に六月に何號つきの諸漁場を切上て、ゐなくなつてるからだ。かういふ望外の獲物は、多少の景氣づけになるのだ。玉場での笑ひ話に、こんな時にうか〳〵捕獲された小鰊だから、馬鹿鰊だといふ樣なことがあつた。

弟の病氣は段々よくなる樣子だが、毎朝少し熱が出るし、まだ腰が立たない。

其二十

七月三日。晴。

今日は當地の有志家が數名訪問して來れた。渠等の話を短く云つて見ると以下の如しだ。建網に關する法例は平岡長官以前に出來てしまつたので、一昨年議會に出した刺網公許の請願も握りつぶされてゐる。して、現長官は刺網公許のことはいいとしても、前事務官熊谷氏の面目に對し、如何ともし難いとして、放棄してゐるらしい。熊谷なる人は、その卑劣な、私利的な不親切な行動の爲め、馬鹿として、また惡人として、樺太住民に怨まれてゐる。

一人で建網業者の如く大資本を出し得ないものの爲め、組合組織を以て三十九ケ所に建網を張ることを許された時は、一時雜漁者が息をついたが、それもたつた一年切りの試驗で、資金の不足、一般財界の業績等の爲め駄目といふことが分つた。樺太政廳は人間よりも鰊の方を可愛がつてゐるといふ童話同不平のあるのは尤もなことだ。その癖、漁民、その他が同島に土着するのを望んでゐるので——さうしなければ、本統の繁盛は望めないのは勿論だが——百姓でもない漁民に海岸で土を掘れなど命じて見て、掘らなければ二三年も住んでゐる雜漁者の小屋までも、鰊漁に邪魔だからと稱して、壓制的に打毀してしまふなど、官憲の遣方が丸で矛盾してゐるのだ。

建網業者等は殆どすべて北海道や內地に家を持つてるのだが、雜漁者等も多くは漁期限りで他へ引きあげてしまふのだ。土着して居るのは商業家に多い。だから、刺網公許運動もその主動者等は殆んど

皆商人側の人である。すると、政廳は「吾々役等は商人ではないか？漁業者に權を守る主義でない」と云ふ樣な事を公言するのだ。然し、樺太政治の本當の目的は早く土着の民を殖やして、國や財政をうまく整理する樣になればいいのではないか？商人が如何に利權獲得に熱心なのは土着民の發展を計るからである。漁業家等には、其の實大資本を投じた人も、小資本を運轉する人も、儲かれば儲るし、儲からなければ去るだけのことだから、今では、建網業者等も先きに二十萬圓の賄賂を國會にしたなどの事實はないし、鰊漁業者等も亦永久の策を考へるだけの智慧と熱心とがなかつた。その上商人側の運動者等の運動とその出資とに勞れて、再び議會まで持ち出す準備が出來ないみじめな狀態にあるのだ。つまり、根氣負けがしてゐるのだ。して、この間にあつて政廳は得意げに惡法死刑を遂行してゐるのである。

この狀態を思へば、帝國議會の議員または堂々たる政黨員諸氏等が、私情的分子を包む高商問題などに騷ぐよりも、この樺太の人道的問題を當年の議會に持ち出す方が一層明案であらう。

其二十

七月四日。晴。華氏寒暖計、最高五十八度。

話は前日のつづきだが、之を要するに、土着者にのみ建網の特許を與へるのも一種の、然し姑息

な、申しわけにはならう。また、土着者にのみ刺網を公許するのも亦いいと思ふ。然し、そこまで行くなら、今一歩進んで、總てに刺網を許す樣にするがいいのだ。これが島氏の公平な希望である。さうすれば、自然に土着者が多くなるわけだ。土着さへすれば必要上、また自然に土地を耕やす樣にもならう。マオカ附近は樺太中での氣候がいいところだから、左程人工を加へずして燕麥や野菜は出來るし、馬鈴薯の如きは北海道では一反に二三十俵ぐらゐだのに、當地では四十俵もあがるのだ。漸々人工を加へて行けば、如何に樺太は土地がよくないと云つても相當な農産物が出來る樣にもならう。

平岡長官は漁・農、林炭業に關する四大政策を携へて昨年來の議會に望み、無能の爲めに殆ど全く貫徹し得たものがなかつた。その結果でもあらう、漁、農、林業には殆ど冷淡で、ただ十二萬圓ばかりの補助金を引き出した石炭發掘の事業に許り熱心だ。それも尤もな點がないではない。曾て南端ノトロ岬附近で石炭が獨りでに燃え出して山火事を起したことがあるほど、この島の山麓には石炭が多いのだらうが、石炭は決して同島の不景氣と貧困とを救ふ早急の食物にはならない。その上、港灣から拵らへてかかつて先づ運輸の便を樂にしてやらなければならない。現今、それが出來てもない。いたづらに官權を利用して、樺太は財政と制度とがどうなつてもいいと云ふのなら、島民はその無謀壓制の治者を戴いたのを不幸とあきらめて、餓死するか、然らざれば、同島を去るより外はないのだ。

然し政廳は他を顧みないで、石炭發掘に着手し、ブスタキでは政廳に於ける本冬の入用だけを試掘

したが、西海岸のトマリオロには、今回、運炭用の輕便鐵道工事費を入札に附し、三萬一千八百七十圓で落札したくらゐだ。それが爲めに、許多の工夫などが入り込み、トマリオロは大分賑ひを添へてゐる。

其廿二

七月五日。晴。午前八時、寒暖計六十一度。

昨夜、オタトモから僕等の鑵詰製造主任が來たので、それをしほに取引上の關係者五六名を料理屋に招待して、宴會を開いた。

マオカには、藝者と酌婦とが總計百五六十名ゐるさうだが、そのうち日に一度のお客がつくものは半數に達しないさうだ。その他は遊んでゐなければならない。つまり、二三年前の好景氣の遺物としか考へられない。して、渠等はすべて娼妓と一緒に毎週一回の検査を受けてゐる。

蟹は本年豐漁であつた。從つて鑵詰業者等も儲かるわけだが、東京の問屋からの金廻りが好くない爲め、當地の仲買人等は隨分閉口してゐる。蟹は樺太中でもマオカを中心として二十個里の海岸が一番よく捕れるのだが、その間に大小二十五六箇所の鑵詰製造所がある。なかには、製造法を碌に知らないでやつてゐるから、直ぐ腐敗してしまふのがある。然し、それは、この頃では、充分制裁を加へ

られる様になつた。

昨夜またオタモトから二番目の使が來た。雜漁者のうちに、急に引上げるものが多く出來たので、蟹の買方を相談しに來たのだ。雜漁者などは今日まで落ちついて漁をしてゐるかと思へば、明日は直ぐ家具をその船に乘せて去つてしまうのだ。して、來年は其處へ來るか來ないか分らない。

其卅三

七月六日。晴。寒暖計華氏五十八度。(晝間)

昨日、午前四時頃、當地の公園に登つた。市街の後ろの山にあるのだ。掛け茶屋一軒と新築中の眞岡神社との外には、人工を加へた物はない。ただ自然のままだ。海面を見晴す景色が如何にもいい。茶屋で休んでゐると、鑵詰に關係あるものが三四名集つて來た。ビールを飲み合つてゐるうちに、いつのまにか、後方の山々が近くまでガスを以て蔽はれてしまつた。海上も見えなくなつた。海上または海邊でガスに襲はれる物凄さは、殊に孤獨でゐる時に襲はれる物凄さは、僕、初めて茅ケ崎の海邊で經驗したことがあるが、北海は特にそれが多いのだ。ただマオカは、樺太唯一の不凍港であるだけ、天候も險惡でなく、晴天が多く、從つてガスの襲來も少いのだ。この日に限つて、四五間先きは見えない程になつたので、丁度出帆時刻になつた定期船が汽笛を鳴らしてゐるばかりで、日の暮れる

までは出たかつた。漁船の歸つて來る時刻に出れば、必らずその一杯や二杯に有り付かれる當てがあるからだ。

僕等は、一杯機嫌にうち揃つて、ガスを突いて山を下り、當市街の南端にある遊廓のはづれまで徒歩した時、多少ガスが晴れて來たので、歸りがけによく見ると、遊廓は道の兩側に十五六軒の粗末な家屋で成り立つてゐるが、それが明き家でなければ、建てかけたまゝうツちやらかされてある物で、實際その稼業をやつてゐるのは二軒しかない。遊女も總計僅かに十數名ださうだ。實に見じめな有り樣になつてゐる。僕等はそこから歸つて來て、明ぼのといふ料理屋で晩餐をした。

本日、山野天海といふ、樺太日々新聞社の眞岡支社主任が訪ねて來て、日日新聞の主筆を一人周旋して呉れいといふ依頼であつた。僕はそのことを認めて、讀賣新聞社の正宗白鳥氏のもとへ、誰れか適當なのはないかと云つてやつた。天海氏は長く樺太にゐて、身づから樺太通を以て任ずる人である。

今日から、職人の女房が看護人の代はりとしてオタトモから來たので、僕は病院で寢とまりすることをしないでいい樣になつた。弟の病氣も亦段々よくなつた。

其廿四

七月七日。晴。寒暖計、華氏六十度（晝間）

樺太政廳の中川一部長が視察の爲めに來たので、當地の官民が今晩歡迎會を催した。僕もその宴會に加つて見た。その席上で二三有志の演說があつて、すべて夫が刺網公許問題に關してゐた。演說者の一人が、政府がはの學者または技師の言が必らずしも正しいとは云へない證據として、マオカ港にこの春から殆ど一度も拔錨したことがなかつた小蒸汽を擧げたのは面白い皮肉であつた。

實際、二間足らずの小蒸汽二隻が當港にいつも碇泊してゐる。誰れが見ても、何の爲めにか殆ど分らない。よく聽いて見ると、沿岸漁業巡檢をさす爲に、政廳がわざ〳〵數千金を費して回航さして來たのださうだ。ところが、樺太沿岸の風波は漁業期に於てこれら小船が巡檢を爲し得るほどの平穩な海岸を與へない。擧邏船としてこの一隻は今では殆ど無用に歸してゐるので、船員は每日その甲板から釣りを垂れて、その日その日を送つてゐるといふわけなのだ。多少誇張的な言だが、樺太政治を穿つたところがある。

今晩の宴會で、雜誌黑白に關係ある岡上氏が、煙草專賣商人として、一部長に隨行して來たのに出會つた。

其廿五

七月八日、九日、十日の三日間は松前村長、一ノ矢一行の興行を見に行つた。毎日三百名以上の入りがあつたらしい。そのうちに三四名毎日四五名の藝者をつれて行き、且、醉ひにまかせて相撲に五圓札、十圓札をやつてゐたのが、この不景氣な當地での先づ豪遊家等であらう。僕は其等と共に、とうとう三日間を飲みつぶしてしまつた。

其廿六

七月十一日。晴。

愛する者からの便りがあつたが、それがない間よりもあつた時の方が一しほ寂しく、心細い樣な氣になつて、樺太といふところがいよ／＼深く僕の心に沁み込んで來る。東京との文通に早くても八日かかるし、電報を打てば外國なみに倍額を取られるし、日は長くツて而も暖いのは僅かの間だし、事業に關係ある雜漁業者等は段々引き上げて行く時節が來たし、夕陽は遠くガスの濤中に眞ツ赤な玉となつて沈んで行くし、南へ歸るものが多くして來るものが少い。考へてゐると、毎日よく當る玉突きも丸でミスだらけの時がある。樺太は實に酒と女と冒險事業との爲めにのみ活きてゐる島だ。

今日、或商家の店さきに腰かけて話してゐると、大道を通るものは鑵詰業者でなければ娼妓もしくは後家（酌婦）だ。ところが、突然、異樣な洋服にわらぢがけの男が外國へ出す封筒をと云つて、四

角なのを買ひに來た。顏は日に燒けて飽くまで黑く、服は長く風雨にさらされて厭な臭氣を放つてゐた。冒險小說中の主人公たる資格は確かにある人物だ。話して見ると、アラスカ、サイベリヤ、北米、南米等の山野を跋涉した我國の砂金掘りで、今回樺太に目を附けて來たので、大泊からマオカまで約六十里間の山を三十日かかつて調査したのだ、隨分見込みがあると云つて居た。この人、なか〳〵多くの抱負を語つて居たが、北見の枝幸砂金の如きは我國人がうか〳〵して居るうちに外國人に手を着けられ、その現物はすべて外國へ持ち運ばれてしまつたから、樺太では、成るべく早く自分等が着手して、自國の利益を失はない樣にすると意氣込んでゐた。鳥渡したテントを携へてゐるので、銃さへあれば兎や何かを打つて、一週間ぐらゐ里へ出なくとも濟むさうだ。ここ三年間はまた跋涉に費し、それから最もいいと思ふところに先づ手を下すつもりらしかつた。

そばで之を聽いてゐた一老人が云ふには、その友人が露領の沿海州へ渡つた時燒酎一瓶を以て太い金の棒と交換してやつたことがあるので、自分も亦浦鹽行のついでに、帆船をそこへよせたが、今度は金の棒を持て來なかつたと。兎に角、沿海州にも砂金は多いさうだが、北海道でも、天鹽、北見の海岸では、砂をこして一人が一日に三分は採收することが出來るさうだ。樺太はなか〳〵望みがあるとすれば、かの砂金業の勢力が空しく終ることはなからう。

其廿七

七月十二日。晴。

中川第一部長の西海岸巡察に伴いて行かないかと勸められたので、鳥渡ラクマカまでと思つて、政廳附屬の警邏船吹雪丸に同乘し、マオカから二里半さきの目的地に行き、樺太廳水產試驗場を見た。實は罐詰に關する試驗もしくは研究があるならと思つたのだが、同場はおもに土壤の檢査、肥料、しめ粕などをやつてゐた。その機械などは個人では持つことが出來さうにもないほどの大規模のである。然し技師のやり方がまづいので、無用の長物を持たしてあるも同樣だ。ラクマカもマオカと同じく、けふが占領記念祭である。

そこで分れるつもりであつたが、もツと北行したらどうかと云はれたので、隨行員の仲間に加はつた。一行は部長を初めとして、マオカ支廳長、官吏二名、ほかに黒白社の岡上和木氏と僕とである。中川部長は帝國大學にゐた時代に、雜誌『いらつめ』を發刊し、山田美妙齋氏をして初めて言文一致體の文を作らしめた人で、官吏としては鳥渡毛色が違つてゐる。而も經濟思想に富んでゐるので、調査の仕かたが一般の官吏とは違ひ、マオカでも人民からよく受けられたのだ。

オランドマリで各漁場、小學校、巡査派出所などを巡察し、宗谷ナイボで伐木林の樣子を見に二十

丁ばかり奥へ踏み入つた。途中には、種々の草花が咲いてゐた。マオカでは、山に入らなかつたから、馬ごやしの花と、薔薇に似てゐる濱なすと、花はあぢさゐの如く、葉は芍薬の如きにをの花（アイノ語しよツきな）とを見ただけだが、ここへ來ると、しよツきなは勿論、アイノの食料になるさく、アツシを織る纖維を供するかゆい草（いら草）、誰が袖、蝦夷菊の一種、金ぽうげ、裏白金ばい、百合、あざみ、さびたなどが花をひらいてゐた。その他、うど葉、七葉、うさぎ草、ここみぜんまい、とくさ、アイノねぎ（きとびる）などがあつた。さらに進んでヤチ（濕地）に入ると、木はタモ、イタヤ、泥柳、ハンの木、草は誰が袖、いら草、いたどり、ふき、ヤチ芭蕉（水芭蕉）などのたけに餘るのが生えてゐた。

支廳長は人並みはづれの背高童子だが、それが隱れてしまうほど延びてゐる蕗やいら草の間をかき分けて行く時、僕等は歷史前の人種が欸冬の廣葉のもとに生活した狀態を想像せずにはゐられなかつた。兎に角、その大きな蕗や水芭蕉の間には、一面に木賊が成長してゐた。道もついてゐないところを通つて、漸く伐木林に達すると、谷の兩側は遠慮會釋もなく、椴松、蝦夷松を伐り倒してあつた。これでは濫伐を防ぐ嚴格な政策も止むを得ない必要だと思はれた。

船に歸つてから、一行は皆上着、下着をすべてよく改めて見た。山ダニがついてゐるかどうかを調べたのだ、或人はホワイトシャツに、他はまたもも引きに、これを發見した。やがて僕の頸すぢがむ

づむづするので押さへて見ると、それも亦ダニであつた。ダニは必らず頸すぢへのぼつて來るさうで、一部長も、支廳長も、その他の人々も、相語つてゐるうちに、すべてそこで刺されたを捕へたが、マチの火を近づけると、直ぐ死んでしまうのだ。鹽を嘗めて行くと取りつかないといふまじなひもあるが、取りつけば必らず毛穴に喰ひ込んで痛がゆいさうだ。

今晩はノダサンに遲く着して、一泊。一日の航程約二十六海里。

其廿八

七月十三日。晴。

ノダサンの宿屋へは後家(酌婦)が勝手に入り込んで來て客の爲めに給仕をして呉れる。昨夜もそれをこツそり引き込んで行つた客もあつた。けふ、朝飯を濟ましてから、先づノダサン市街地並に殖民地の指定區域を見に行つた。意外に思つたのは、海には近いが、山間の平原を例のおほぶき、いら草、水芭蕉の間に既に市街の區劃が出來て、まだ道も附かないのに、本通何丁目とか、榮町何番地とか記す木標を打つてあることだ。而も實際の商業地、漁師の家などは、現今では別な處にある。樺太廳の政治はこの一事を見ても、官權を濫用する爲めだらう、僕等の卑しむ理想即空想に失し過ぎてゐる。然し、そのヤチ、乃ち、濕地なる平原には、宗谷ナイボの濕地で見たと同樣な草木が多かつたが、松

が生えるだけの高地がない爲め、椴松や蝦夷松に最も多くついてゐるといふダニは少なかつた。して、あをぢ、小げら、ひたき、ひがら、ちぐひすなど、小鳥の聲が聞えた。まむしに一匹出會つたし、キウと鳴いて逃げたのはリスであつた。

晝飯後、徒歩南へ一里半もどり、トウブツの土人部落を見た。二十四戸、百二十五人、半數以上は日本語を解してゐる。家屋も半數は土人的莚小屋を脫してゐる。にをの莖をちひさく刻んで莚の上に乾してあつた。土人等は山海の漁獵を以つてその日〳〵を送つてゐたのだが、官憲からの保護と注意とがあるので、山腹に多少の畑を作つてあつた。五六名の土人が、上へあがつて鳥渡立派な木造の家根を組建ててゐたが、老人が一人鬚を撫ながら、下から、『皆さん、どうか宜しい處でお茶をあがつて下さい』と云てゐた。其大工の住ひだといふ純粹の土人小屋は莚でかこつてあつた。戶をあけると、地べたに板を敷き、その上に莚を延べてあつて、周圍には、蒲團、獵具、食器、寶物入れなどが並んでゐる。眞ん中に爐が切つてあつて、その上の方に開き鰊が二三尾つるしてあるが、それが爐火の煙でおのづから燻ぶる樣になつてゐる。爐のそばに一人の老めのこがあぐらをかいて留守居をしてゐたが、僕等を見ることもせず、おとなしく下を向いて、無言で、長い火箸を以つて灰をいじくつてゐた。同部落には、二歲の熊を檻に入れて飼てあるが、それは今年十一月の熊祭の犧牲だそうだ。部落は眺望のいい丘の上にあるのだが、直ぐそこをトウブツ川に下だると、一軒、北海道のアイノ小屋がある。

家族も多少日本化してゐる。そこのちひさい子供が二人（男と女）が川で泳いでゐた。一行を案内するトウプツアイノに、『北海道アイノの、めのこでも、いいのがあれば、お前等は女房にするか』とからかふと、『さうだねするものもあるし、しないものもあるし、いろ〳〵だ、ね』と答へた。樺太アイノの顔は北海道アイノの如く猛惡でなく、性質も亦おとなしいさうだ。トウプツの驛を去る時、小學校の生徒が三十五六名濱へ出て見送つて呉れたが、再びこんな寂しいところへ來なからうと思ふと、そぞろ涙がこぼれた。殊にそのうちにアイノの子供が二名ゐたのが僕には忘れられない。

そこから更らに二三里南へもどり、中ノトロ岬や漁場を海上から視察し、僕の鑵詰製造所のあるオタトモの附近からノダサンに引ツ返した。ノダサンの北端にある小高い山に名がないので、僕等は船中で寢獅子山と命名した。獅子がつツぷしてゐる形であるからだ。

今晩も亦ノダサンに一泊。

其廿九

七月十四日。夕方鳥渡雨。

朝、ノダサン出發、先づ船をアラコイに着け、そこの山奥なる山林濫伐の跡を見に行つた。露領時代に濫伐したのださうだが、椴松、蝦夷松などが縱橫に切り倒されたまま腐りかけてゐるのもあつ

た。もとは密林であつたから、風に堪へる用意を必要としないので、如何に大木でも、根が深く這入つてゐない。それが、濫伐の結果、あたりに相持ちの木がなくなつたので、一旦風に遇ふと直ぐ淺い根からおげてしまつたり、さうでなくも、幹の弱い部分から折れてしまつたのだ。その上、樺太の山林は地盤がぼく／＼してゐて、內地に於ける眞土の樣なものは丸で見られない。有史以前からの木の葉や枝や枯れ木などが積み重つて、それがまだ腐つてゐるだけの程度であつて、僕等の內地で見る山の土とまではなつてゐないのだから。一たび山火事となると、立ち木が燒けるばかりでなく、其土からして燃えて行くのである。それを思ふと、赤い色の木朽れ土を踏んでゐる僕の足が熱くなる樣な氣がした。然しまた、もツと深い密林に入つた時、オゾンの臭ひが强く僕の鼻をついて、實に氣持ちがよかつた。黃いろい花の山百合が諸所に咲いてゐた。黑百合や鈴蘭もあつた。また、赤はらといふ鳥がゐた。二三日前、熊が出たといふので、僕等はあらかじめ船の汽笛代用の喇叭を用意して行つたから、往きにも復りにもそれを吹いて通つたが、海岸へ來たら、それがまた本船から艀を呼ぶ用を辨じた。

　そこから引きあげる時、トマリオロまで行く一婦人が同船を賴んだ。大膽な女で、第一部長や支廳長を捕へて訴へるところを聽くと、ノダサンに早くから來てゐて、家まで建築したのに、豫定の市街地へ轉居を命ぜられたのだが、ただ一軒、まだ道路も開鑿されないところへ移つたとて、商賣が出來

ないから、別に一ケ所囲ひ出てあるところを公平に許して呉れろといふのであつた」おかみさんがもツと若かつたら、たんとふしてやるのだが」とからかふと、「これでも、天下に一人と思つてゐる人はお役に立つてゐます」と笑つてゐた。

船をチイカイナイボに着けると、そこの監獄の馬が牝馬を追ツかけるとたんに、崖からころげ落ちて、海岸に死んでゐるのを見た。樺太は一帶に海岸が狹く直ぐ低い崖になつて、その上が平地であるが、その平地は勿論、崖にも百合に似て黄色の花を開く萱草と紫陽花に似たしよツきなどの花が一面に咲いてゐる。そこから西海岸一の難道が山を通じてゐるのを踏査した。そこは急激な崖の爲めに、海岸を、波の荒い時は、通れないのだ。その山にはアイノがブシ倚に塗る毒を含むブシ（とりかぶと）の花が、毒々しい紫色を持つて澤山咲いてゐた。また、鶯の聲が方々に聽えた。

一里さきのカモイナイボから船に移り、トマリオロに來て、一泊。この日の航程二十二海里。

其卅

七月十五日。晴。

午前五時半、呼び起され徒歩發程、トマリオロ炭礦に向ふ。霧の多い朝で雨の樣にぽたり〳〵と衣物の上をしづくが傳つた。指定の運炭用輕便鐵道を通ずる爲め、ヤチ（濕地）または森林を五間幅ぐ

らゐに切り開いてある。その道に當つて、木橋または鐵橋をかけることになつてゐる。ところが、まだかかつてないので隨分危險であつた。殆ど道もない樣な絶壁を綱にたよつて登り下りするところもあつた。途中で見た物のうちに、熊が栗鼠を追ふてよぢ登つた爪の跡がついてゐる樅松の幹もあつた。また、鐵道に當る附近を流れるトマリオロ川で、どぶ貝（ひより貝）が澤山取れるのを見たが、古來誰れも取る人がなかつた爲めか、かさなり合つて、互ひに朽ちかかつてゐるのもある。身はまだ活きてゐるが、殼の方がさわると直ぐ崩れるのもある。その貝から小い眞珠が取れるので、あやふやな鐵道工事に使はれるよりもその方がいいと思ひ、貝拾ひに專念する樣になつた工夫も澤山あるさうだ。

二里ほど這入つたところに、炭礦事務所や官宅などを建築する多くの木材を用意してゐる。なかば組み立てられたのもあつた。深い山林の間で新らしく削られた材木の臭ひはなか／＼なつかしいものだ。そこから直に第一、第二の礦口があるのだが、いづれも六七十尺のところで絶えてゐる。尤も、うはツつらのところだけを掘つて見たので、下へはずツと炭層がつづいてゐるさうだが、掘りだしたのを見ると、まだ僅かに四五十噸だが、炭質は餘りいいとも思へない。おまけに着手前に行ふべきボーリングを着實にやつてない樣子だ。そんな狀態で鐵道工事や官宅建築などをやるのは、順序を轉倒してゐるのではないかと思はれた。その上、港灣の用意もなく、賣れ行きの見込もついてゐないのだ。政府の直營でこそやれるが、民間ではとてもやれない無謀の仕事だ。僕は全く失望したので、まだ

そこから一里半くらゐに近頃發見した十三尺層があるといふのを見學に歸つた。今回樺太の炭山は斷層の多いのが缺點だ。

ところが、十三尺層を見て來たものに聽くと、それはその實三尺層が三つ重なつてゐるので、その間に二尺宛のハサミがあるのださうだ。然しその方は炭質もよく、隨分見込がないではないとのことだ。兎に角、トマリオロの海岸には、つい、こないだまで八十個ばかりの漁小屋があつたのが、今日ではそれが木造に變はり、且つ、戸數も二百戸に増した。僕等の一行が三ケ所に分かれてとまつた宿屋も、すべて開業してからまだ數日を經過したばかりで、食物や宿料の標準がまだ定つてゐない様子であつた。今までは商賣もすべて漁業者を目的としてゐたばかりだが、今日急激な發展が出來かかつたのは、してトマリオロばかりが樺太中の不景氣を知らないと云はれるのは、いつ中止されるかも知れない炭礦をたよりに、一儲けしようとするものらが集つて來るからだ。然しその多くは、内地で失敗し、樺太へ渡つて三たび失敗した喰ひつぶし者等だ。トマリオロの祭日であるから、商家の人々も殆ど全く家業を休んで遊んでゐた。藝者の手踊りやら、若い衆の撃劍仕合ひなどがあつた。

今晩も亦トマリオロに一泊。

其卅一

七月十六日。夕方。雨。

晝飯後。トマリオロ出港。岡上氏が僕等に別れ、樺太日々の山野天海氏が一行に加はつた。先づ、チラホナイ（詳く云へば、チラオフナイポ）の土人部落に船を寄せた。迎へに來た艀は十人漕ぎであつた。樺太の艀は一般に艪を用ひないで、みよしの左右の輪繩に櫂をさし、ボートを漕ぐ樣に後ろ向きで漕ぐのだが、それが左右に五人づつ、して艫にも一人櫂を以つて舵取り代りをやつてゐた。そのうち、一人が音頭を取り、エヤホー、ホラホー、ホラヘー、ヘヤホー、ヘヤヘーと五樣・六樣に操り返すと、その度毎に他はエンヤラヘーと應ずる。エヤホー、エンヤラヘー、ホラホー、エンヤラヘー、ホラヘー、エンヤラヘー、ヘヤホー、エンヤラヘー、ヘヤヘー、エンヤラヘー。これが調子よくすべての櫂の手を整へて行くのが、僕等には如何にも愉快に感じられた。而もそれが寂しい樺太の海に響くのである。

チラホナイには、さきにわが政治を慕ふてそこから石狩に移住したアイノが歸つて來て、部落を成してゐる。北海道にゐた丈一般の樺太アイノよりは智識の程度が高い。字もよく讀める代りには、取り締りの番屋（建網業者）を經ずして直接に官憲に理窟を云ひに來るものもあるさうだ。めのこも大抵に日本風の髮を結つてゐる。家はトウブツ部落に見た樣な新築もなかつたが、それは石狩へ行つてまた歸つて來たりしたから、止むを得ないのださうだ。山田シロクランケと云ふアイノの家を音づれ

ただ、家はヨシヤ萱に太い丸太を横に組んで壁にしてあり、中は眞中が土間で、その兩がはに、二つ宛爐を切つた板の間の廣いのがあり、その奥は兩がはとも一段高くなつて床の間の樣しである。そこに家族がずらりと枕を並らべて寢るのだ。主人の床らしいのが左の間の中央にあつて、熊の皮を敷いてあつた。ここは特別に廣い家らしい。床の端に『警官席』と書いた木札が張つてあるので、そのわけを聽くと、こないだ、ここで部落の人を集めて、浪花節を聞かしたのださうだ。

十一二歳の女のこが黄色の花と紫の花とを携へて行くのに會ひ、それをどうするのかと尋ねると、『百合とあやめ――佛さまにあげるのであります』と答へた。この部落でにをのことをフレキナ(?)と云ふのを知つた。四十六戸、百六十四人ゐる。漁獵のほかに、ジャガ芋、大根などを作る樣に敎へられてゐるが、アイノは一體に永住と貯蓄の念に乏しい。ここのも同じことで、かねがあると、直ぐ子供の衣物や女房の腰卷きを買つたりして、そのあとは皆飮み料に費つてしまう。醫者が行つて藥を與へても、大抵はそれを病人に飮ませず、うはうゐし、黄蓮、きとびるなどの葉や根を煎じるのだ。して、出來物には鼠の皮を剝いで貼りつける。樺太廳はアイノ一般の爲めに四五ケ所の漁場を與へ、番屋をしてそれを經營せしめ、その收益を廳に於て預り置き、土人の敎育、衞生等の費に供してゐる。僕等がチラホナイの番屋に休んだ時、アルメニャ人が一人クスンナイから馬に乘つてやつて來た。何か物を借りに來たのだが、貸したらそれを返すことがないさうだ。

それから、クスンナイに來て、一泊。この日の航程十三海里。

其卅二

七月十七日。雨。華氏寒暖計五十度（室内、午後三時頃）

クスンナイは露領時代にも東西兩海岸の聯絡地で、なか〳〵重要なところであつた。樺太全島南北に二百四十里その間に於て、ここだけが僅かに七里の地峽を成してゐる。とどろき峠といふのが少し難所であるだけで、その東西は殆ど平地だ。して、クスンナイ川を境として日露兩國民がその勢力範圍を爭つた時代もある。國境標石があつたが、それはどこにも見當らない。或人の話によると、露領へ去つたナイノが持つて行つたさうだ。地勢と氣候もここから多少變つて來た。川をさし挿んで、廣い平原があり、紫あやめが一面に咲き亂れてゐた。また、萱草、百合、濱なす、しよツきた、野えん豆などがぽつ〳〵咲いてゐた。それに露政時代に露人から横取した牛馬を飼育してゐるものがあつた。牧場としては樺太一であるさうだ。その間を通つて、僕等は露人が經營した舊市街を見に行つた。新市街からは一里半ばかり奥である。露國人は全く海の觀念がない。漁業などは邦人等の名義で許されてゐても、日本人の手で經營さし、彼等はすべて奥へ這入つて、農牧の業をしてゐたのだ。樺太送りの囚人が三十幾人まで殘つてゐる。今でも露人が二戸、七名ゐるが、いづれも本國で殺人罪を犯

し、歸國することが出來ない囚徒だが、その割合におとなしいさうだ。チクホナイで見たスメメキ人もその一人である。別に韓國人が三名、木挽に從事してゐる。先住者の耕作した畑の捨てられたのを見たが、馬鈴薯の芽などがひとり手に生えたままになつてゐる。眞岡支廳クスンナイ出張所は、今、ここの大きなロスケ小屋に置かれてあるが、やがて、新市街の方へ移されことになつてゐる。僕等は出張所で中食を濟ませ、それから露人の棄て去つた漁場を河口に弔つて、宿へ歸つた。

クスンナイ新市街も寂れたものだ。三十九年、四十年の景氣につれて建ちかかつた家も、建築中に見込みがつかなくなつたので、荒壁のまま住まれてゐるのがある。本通りの眞ン中には、草がぼうぼう生えてゐる。本年五月末の調査で百二十六戸、六百二十九人であつたのが、一ヶ月半後の今日では、六十戸、三百二三十人に減じてゐる。新開地が一ヶ月や二ヶ月で變遷する狀態を目擊しては、そぞろの感を催さざるを得ない。有志家が一部長に來て申請するところを聽いても、何等の進取的氣風を見せない、ただ內輪喧嘩を暴露するばかりだ。それから見ると、かのノダサンの女が船中で大膽に不平を漏らしたのは、却て筋道が立つてゐた。

小學校を見に行つたが、眞宗坊主の細君がなか〳〵上手な上方辯を以つて教へてゐた。トウブツでも、クスンナイでも、すべて單級教授でやつてゐるのだ。

けふは風雨が烈しいので船を出せない、吹雪丸は僅かに百五十七噸の小蒸氣だ。

其卅三

七月十八日、雨。華氏寒暖計四十八度（晝間、室内）

低氣壓、宗谷海峽に起り、北に向つて進む爲め、海上危險との報、大泊測候所から來る。爲めに、クスンナイに第三夜を送ることになつた。段々寒い方へ向ふので、シャツと股引とを買つた。何の用意もなく、マオカを出て來たのだ。

七月十九日、晴。華氏寒暖計五十九度（午前九時、海上）

朝、六時、クスンナイ出發、途中でライチシカ湖（死んで泣く湖）を見るつもりであつたのだが、さきを急ぐ爲め海上から望んだだけだ。同湖の口を入れば、必らず活きて歸ることが出來ないといふ土人の傳說がある。この邊から、もう、特許漁業家の番屋があるだけで、海岸にそれ以外の住民はゐないのだ。小魚を追ツて來たのか、海豚の群が何百尾となく舟の前後について來て、面白さうに海上を飛んだり、跳ねたりして、二十分間ほど僕等を離れなかつた。また、鷲が一羽飛んでゐるのを見た。イチヤラ山は富士によく似てゐる。

午後三時半、ウショロ灣に着す。寒暖計華氏六十三度。灣内の土人部落を巡視したが、土着アイノ二十六戶、百五名、北海道十勝アイノ七戶、三十一名ゐる。別に滿州土着の山丹人三四名。アイノは

何處でも山獵は得意だが、昨年の秋（雪の降り出す前）に、鮭を一人平均五匹づつしか取れなかつたさうだ。して、熊は部落中でたツた一匹であつたさうだ。その他に取れるのは、兎、河獺などだ。明年からは漁業の手傳ひもするし、畑も耕すと云つてゐた。ここにも二歳の熊を飼つてあつた。あのこがそろ〳〵出て來たので、よくその狀態が見えた。口のはたの入れ墨は必らずしも所天の有無を示めすのではない、して腕にも手くびまでは墨が這入つてゐる。女でもマキリ（小刀なた）を腰にさげてゐるが、所天のないのは鞘ばかりで、身を入れてない。さく〳〵葉百合の根を澤山乾してあつた。越年食糧の用意で、百合の根は碎いて米にまぜるのだ。渠等は山獵に十里も二十里も奥に這入るのだが、腹の工合が違ふのか、秋あぢ（鮭）一尾で一週間も出て來ないでゐるさうだ。一般に跣足であるが、渠等の出迎へには、黒足袋の上に草鞋をはいてゐた。出迎への土人はすべて黒びらうどの、筒袖で、胸をぼたんでとめた、膝までの衣物（露領アレキサンドルから來たる）を着て、細い縫をしめてゐた。して、額をズツと刈り込んだ頭の眞ツ黒な髪をふさ〳〵と肩まで垂らし、上ひげも多く、頬ひげ、顋ひげの長いのがずらりと海岸に並んでゐるのを見た時は、今までに見た部落ではおぼえなかつた哀びと凄みとがあつた。渠等は銀色の大きな耳輪をつけたのを誇りとしてゐる。土人の總代なる、可なり日本語を話すのに、宗旨は何かと尋ねると、「神道の樣なもので、」「萬物みな神」と答へた。

ウシヨロの番屋にはマスコといふ小鳥が捕へてあつたし、その近處に露國人の殘した菜畑があつ

て、白い花を咲かせてゐた。ウショロには、葭の様な草が一面に生えてゐて、その間によもぎが群生し、ぽつ〳〵百合の花、さくの花が咲いてゐたが、クスンナイで澤山見たあやめは少しもなかつた。腹工合が惡くなつたので、船に移ると、直ぐブランデーを飲んで横になつた。午後十時半、北ナヤシに着す。船中から夜の空を仰げば、北斗は僕等の頭上に輝いてゐた。

この日の航程九十四海里。

其卅四

七月十日。晴。華氏七十六度（午前十時）夜に入りて、雨。

昨日、午後九時半に日が暮れたさうだが、けふは午前二時に全く夜が明け離れた。

ナヤシとは、アイノ語で大きなよもぎのあるところと云ふ意だ相、ここが西海岸最後の都會（？）だ。戸數四十、人口百八十。そのうち、殘留露國人九戸、六十八名ゐる。昨年十二月から名好支廳が設けられ、ロスケの元教會堂に置かれることになつた。朝、一行は二手に分れ、一方はナヤシ川を見船でさか登り、沿岸の林相を見に行つた。僕等はまた支廳の露語通譯をつれて、ロスケ部落を巡視し、レーフといふポーランド人の家族を訪問した。牛と豚を飼つてあつて、農牧を兼業し、冬になれば、獵や貂を取るのだ。老人夫婦の外に、子息二人とその若い女房等とこの三夫婦の子供と、十二三

人の家族だ。老爺は十五年前、アレキサンドルの獄から出て來たもので、今では家族が多いので、どこへ行つても同じことだから、いツそのこと慣れたこの地で暮すと云つてゐる。無教育なもの等で何か讀む書物があれば見せろと云はれ聖書の古びたのと宗教上のパンフレトらしいのとを出して來たが、子供が少し見ただけで、その他は誰れも分らないと答へた。露領時代には島流した寺小屋見た樣なところがあつたさうだが、日領になつてから、歸國したものが多かつたので、教育費などの出ところがないのらしい。それでもマリヤ並にキリストの肖像畫を居間の兩隅にかざつてある。居間はたゞた一室で、そこにペチカといふ釜土兼用の暖爐があり、食堂、寢室、應接間を兼ねてゐる。親は寢臺で上り、子供はすべて板の間に蒲團を敷いて寢るのだ。僕等はその板の間へ靴または下駄のまゝのぼつたが、そこの子供もどろ足のまゝあがるし、犬や鷄も平氣で這入つて來る。室の中央に搖籃がつるしてあつて、二歲になる子を入れて、「バイバイ」とゆすつてゐた。それが泣き出すと、そこから抱き取つて母は板の間に足なげ出して愛しらつた。その若い母はこゝで有名な美人で、耳輪をはめてゐた。婦人はすべて帽子の代りにハンケチまたは布呂敷見た樣なものをかぶつてゐる。子供はすべて跣足だ、勞働日であつたから、何れもきたない體裁をしてゐた。多少の慰安になるのだらう、手風琴を備へてある。また家族がいつか取つた寫眞や、マチの箱から剝ぎ取つた商標繪などを壁に張りつけてある。淺草公園の安ツぽい繪ハガキもあつた。漢詩を二行に書き下だした掛け軸を額の如く横に張りつ

けてゐたさうだが、取り去つたのか、今では見えなかつた。無學な主人ではあるが、露西亞風の熱烈な應待ぶりは、話を解しない僕等にもその半ばを丁解せしめた。

其卅五

移住當時の獨力團欒から自慢話しを始め、自分の飼育した馬がアレキサンドルで五百圓に賣れたむかし話をやつてゐるかと思へば、直ぐ近頃に轉じて、日本人の醉漢が暴れて來たのを、鉞を持つて追ツぱらつた喧嘩ばなしになつてゐる。やがて自分の取つた熊の皮二枚を出して來て室一杯(八疊敷位)に廣げ、その上に寢ころんで見せ、二枚で五十圓なら賣らうと云つた。僕等の一人が四十圓に價をつけたが、話がまとまらなかつた。日露戰爭時代の石版繪が二三枚あつた。露探で淸國から秘密をもたらし得た十三歳の少年の行爲を書いてあるのと、一青年士官が日本の砲臺攻擊を受けて指揮する繪とを、分けて呉れろと頼んだものがあるが、子供に見せて說明してゐるから、やられないと答へた。僕等は黑パンと紅茶とを御馳走になつて歸つて來た。その禮として一圓札一枚を與へた。彼等はすべてわが國の煙草を、木ツ葉をいぶす樣だと云つて喫しない。酒もさうだ、して強酒ヲツカと露西亞煙草とをアレキサンドルからの輸入によつて供給されてゐたが、今度、稅關が設けられたので、彼等は非常に困つてゐる。露人の畑には、青い草の間に、白服、赤服の男女が、夫婦幾組にも分れて、睦じさうに

牧草の刈られたのを返してゐた。また、ジャガ芋と大根とがよく出來てゐた。一ケ所で、麥を搗く風車があつた。僕等は日本人雜貨店で、煙草と板茶と露西亞更紗とをみやげに買つた。

曾て樺太の露人が本國へ出した手紙を飜譯した人がある。その文中に、樺太はいいところで、監禁に暮せる。丸で樂園の如くだから、早く殺人罪でも犯してやつて來いとあつたさうだ。それくらゐ無學で、無道德で、國家的觀念のなかつたもの等だから不思議はないと云へば云へよう。郵便局員から聽くと、一昨年の九月から、今日に至るまで六十餘名もあるロスケ部落から、一回も手紙といふものを出したことがないさうだ。ただ〳〵每週六日間を山野に勞働し、日曜日と祭日とには多少晴着を飾つて遊ぶ。男は酒一つが何よりの好物らしく、昨年までは晝間でも道ばたに醉ひつぶれてゐることが多くあつたとの話だ。そんな狀態だから、僕等の訪問したレーフがその子息の女房を挑んだ爲め、親子の間に別居問題が持ちあがつてゐるといふうわさがあるのも、さう怪しむには足るまい。

この地で貂取り道具の說明を聽いたが、アイノもロスケも同樣に單純なもので、馬の尾を輪にしたわなを川に渡した丸木の中途にかけ、そこを通ると仕かけの弓が跳ね返つて、貂を馬の尾で締めると同時に川水におぼらすのだ。この動物は水には至極弱いさうだ。その皮は一枚十八圓から三十圓する。

昨夜、或酌婦が別な酌婦を毒殺しようとした事件があつた。

今晩もここに一泊。吹雪丸を僕等よりさきに巡回中の前田第三部長の用で南へ行かしたので、明朝

それが歸る筈。

其卅六

七月廿一日、雨。華氏七十度。（午後三時）

未明に歸つてゐるべき筈がまだ歸らないし、雨も降つてゐるので、出發が出來ない。退屈紛れに再びレーフの家へおとづれて見た。中川第一部長が熊の皮を買ふつもりであつたからだ。午前十時頃であつたが、戸外の働きが出來ないので、家族はすべて家にゐた。働いてゐるのに婦人達ばかりで、それがいづれも跣足であつた。主人の老爺は寢臺の上でぐう〱眠つてゐて、暫く起きなかつたが。僕等は昨日の通り腰かけに陣を取り、他の人々を相手に主人の起きるのを待つた。弟の方の細君（十五六歳）は子供等と共に老爺を指さし、『ロスキイ、ロスキイ』と笑つてゐた。露國人の如く背が高いからであらう。やがて主人が欠伸をして起きて來たが、今日の樣な天氣には眠くつて〱と呟きながら、暫くまた挨拶をしなかつた。やがて僕等と握手し、例の熱烈な態度を見せ出した。皮をも床板の間に廣げた。一人の子供は得意げにその上にころがつて、おれの兄が取つた物だと云はないばかりであつた。やがて黑パンと紅茶とが出て、今回は生バタが添へられた。老爺は細長いうすの樣な物を持つて來て、それでバタをつきまぜる眞似をして見せた。家族の者等は皆聲を上げて笑つた。して、熊

の皮は二枚四十五圓で賣られた。僕等はまたそれから一雜貨商店へ立ち寄ると、年寄りのロスケ婦人てゐたが、それが更紗を僕分に持つてゐると云ふので、分けて貰ふつもりで、持つて來させると、生地に妙な小形の附いたもので、滿圓・座滿圓のおもてや子供の衣物には面白いのであつた。僕等がそれを値切つてゐるうちに、ロスケの老紳士が這入つて來た。亭主がその賣り代を直ぐ飲んでしまうかと思つたからであらう。僕等の一人がまた、ロスケの持つてゐる煙草袋、ロシヤ更紗で出來たのを買はうと云ふと、ロスケは眞面目くさつてビール一本と交換しようと答へた。老紳士は異存もなかつたかしてから／＼と笑つた。熊の皮をその取り主が宿まで屆けた時、子供が四名跣足で雨の中を跟いて來たので、──これは監視がてら、老爺がつけてよこしたのだらう。──代價と共に菓子を與へて歸へした。

夕方雨が歇んでゐたので、僕は獨りでまたロスケ部落をぶらついて見ると奧庭で木挽をしてゐる者もあつたが、多くは家毎に門そとの板壁に蹲んで、男も女も、先づ今日の仕事が濟んだと云はないばかりに睦まじさうに語り合つてゐた。して、子供は手を引き合つたり、追つかけ合ひをしたりして遊んでゐた。その間に、わが國人の子供もひとりふたりまじつてゐた。

當地にも漁師相手の料理屋が二軒あつて、その一軒の女主人公はもと有名な地獄で、占領ごけの稱がある。この女の行かないところは開けないと云はれたくらゐだ。烏渡見ても、最も肉的な女だが、

背は高い、格腹は大きく大力と豪膽とを以つて樺太全島を股にかけた。函館から初めて渡つて來た時・大泊に根據を據ゑ、ビールと身體とを元手に多くの獨身男子を搾りあげたが、官吏なども初めは、官等順で關係したといふ滑稽もある。それが豐原で自然に新らしい遠征女軍に追ひ拂はれ、十九里の山道を、ビール四ダースを背負つてマオカに來たり、むしろ小屋を設けて、其處にまた獨りで多くの客を迎へ、二三千圓を儲けたが、守備隊中の一軍曹に打込んで總てを卷きあげられた。それから男を非常に恐れ出したが、いつの間にかこの地へ來て、今度は自分が主人で二三名のごけを養つてゐる。若い亭主があつたさうだが、その妻子がやつて來たので、綺麗に手を切ると同時に、三四百圓と妻子の衣物とを拵らへてやつて、本國へ歸へしたさうだ。して自分は直ぐまた別に男めかけを置いてある。今年四十二三歳だが、これまで北へ北へと向つて來たから、更らにまた國境を越えてピレオまでも行く氣ださうだ。

其卅七

七月廿二日。ナヤシ、午前雨。午後晴。華氏六十度（午前十時）

南へ行つた船がまだ歸らないので、一行は心配し出した。その上、退屈で仕方がないので、古顔ごけを呼んで身の上ばなしを聽いたり、支廳や郵便局や雜貨店へ行つて話し相手を見つけたりした。僕

は、たださへ腹工合が惡かつたのが、水の惡い爲めになほ更ら惡くなつて殆ど腸炎の有樣で、胃腸は堅頑出來たのだが、それがもと濕地中にあるので、雨の後は、四圍がずぶ〳〵して土でも步きに步けない。

僕は、けさ、午前五時そとへ出で、から傘をさし、草葉の露をふみ分けて漁村風景を見に行つた。ところが、そのそばに藁とから傘がたに建てまわして、それに住んでゐる者があるのを發見した。聞き糺すと、或漁場に使はれてゐたのだが、六ケ月間も使はれて一文も賃金を貰はなかつたので、歸るにも歸られず、歸國の旅費をつくる爲めに日々人仕事に出てゐるのだ。して、此處を貸した宿小家のあたりには、いろんな花が咲き亂れてゐた。樺太の花は毒々しい紫が割合に多い樣だ、ブきの上目め、あざみ、裏白金ばい、あやめ、野豌豆など、すべてそれだ。黑百合も亦、その紫黑の花を開くのだ。

ナヤシは露國人の部落がある上、秋になれば、貂取りの露人が澤山露領から這入つて來るので、露國貨幣が跋扈してゐる。露貨一ループルは實際一圓十錢の價があるが、當地では九十錢に受け取り、それを函館まで持つて行けば、少くとも一圓八錢になる。また、ビールは一本今では三十錢だが、越年時になれば、七八十錢に騰貴する。だから、若い商賣氣あるものが、越年前にビールを仕込んで來て、越年期にそれを高く賣り、それから露貨を買ひ込んで歸れば、兎に角、望外の儲けがある筈だ。越年期は十一月から翌年四月の中旬までで、その間は、船が結氷または流氷の爲め來ないから、酒で

も飲むほか樂みはない。ビールが、料理屋一軒で一晩に四ダースは出る。して、昨年の如きは、十二月に既にビールも酒もなくなり、正月を燒酎で送つたさうだ。米なども、豫算が狂ふと、小包で取り寄せるものがあるらしい。

餘り退屈なので、僕等は當地のおもな官吏を招いて御馳走をした。午後七時頃、硝子越しに窓外を見ると、日はまだ二三竿高いのに、ガスの爲めに光を消され、眞ッ赤な紅色を呈してゐた。これは樺太風景中の一特色で、今夜の三日月も亦白くなくして、薄紅色であつた。宴會の最中に、聽き慣れて來た汽笛の聲が聽えたので、一同は勇み立つた。明朝はいよ〳〵北方に向ふことが出來るのである。

其卅八

七月二十三日。華氏六十度。夜に入りて、雨。

朝七時頃乘船。北に向ふ。樺太は北に行くほど山が高く、火山的にさきが尖がつてる。三十七海里を航して國境安別の沖に來た時は、午後一時頃だ。昔の地圖にトルストイの鼻となつてゐる安別の岬の絕頂には、國境標の柵が見え、その鼻から續いて露領に延びた低い草山は、灣形にまた突出して、富士形に隆起してゐる。我國人は之をピレオ富士と稱するさうだ。僕等は安別に降りて、そこから、切り崖の樣な山腹に細い道を切り拓いた稻妻形をのぼり、寫眞師をつれて、國境標のあるところへ行

つた。柵を繞らした中に、花崗石の標があり、南面には菊の紋、北面には鷲を刻してある。一行のうち、それに獨りでもたれて撮影さしたものが數名ある。天海氏と僕とは南北に腰かけてうつした。それから、一行全體をうつした。うしろの山を望むと林空が一直線に東の方へ走つてゐる。これが乃ち國境で、五六間幅に山林を切り拓いて出來てゐるのだ。

よく晴れた日には、沿海州が見えるさうだ。ここから六十海里しかない。黑百合の咲いてゐる草間の細道を通つて、山上の國境を越えた。して、海岸に下りると低い草山が綺麗な砂濱と共に灣形を成して十餘丁走つてゐる。その鼻に富士山の樣な小山が立つてゐる。わが國人の所謂ピレオ富士だ。その麓にまた熊谷氏の露國政府免許の漁場がある。其處に近づいた時ヹールを被つて洋装の小娘がやつて來たのでロスケの子かと僕が案内者に尋ねると『いや、あれは私の娘です』と答へた。僕の爲めに通譯の勞を執つてくれるのであつた。ピレオ富士の裾を通り拔けると、また同じ樣な砂濱がつづいてゐる。燃木を盗みに來た蒸汽船が一隻乘り棄てられたのがあつた。濱に添うた低い草山の腹には、ところどころ石炭が露出してゐる。して、支那人が澤山ゐて、炭を手掘りにしてゐた。さういふところを一里ばかり行くと、ピレオだ。

ピレオには、露國政府の林務官がゐて、漁業取締を兼てゐるが、其人は何處かへ出張中で、留守であつた。また、製材會社があつて、輕便鐵道を以て山奥から木材を多く伐出してゐる。伐り出した木

材は、削りもかけないで其儘濠洲へ直輸送するさうだ。僕は其木の長さを杖で私に計つて見たら、細いのは一丈二尺、太いのは八尺あつた。僕はスミルノフカといふ人の家で休み、ビール、パン、玉子燒、牛乳等の御馳走を受けた。この人はもと醫者で、毒殺犯の爲めに流刑に處せられたらしく、其細君も亦罪人だが今は夫婦共おとなしくなつて、農牧、商業を兼ね、秋になれば、貂皮の仲買人として日本領へもやつて來るのだ。僕のつれて來た通譯者は一年半ばかり此處に世話になつてゐたので露語を覺えたのださうだが、今、僅に十四歲の小娘だ。夫婦は、子がない爲めか、畜類を可愛がることが非常だ。牛、豚、犬、鷄、鵞等を澤山飼つてあつた。室内はペチカの爲めに熱苦しいので、庭の涼み臺で、海を見ながら話をした。窓内にぼくしやと秋海棠とが咲いてゐるのを見た。

そこを辭してから、ギリヤーク人の部落を見に行つた。樺太には、アイノの外に、山丹オロチョン、トングース、ギリヤークなどいふ土人がゐる。ギリヤーク人は東海岸にに多いさうだ。西海岸には、ウショロの北、エストル川の近處に二戸あるが、其處へは行かなかつたから、ここに來て見るのが僕の一の目的であるのだ。同人種は滿州から渡つて來たものか、それとも、本來の土人だか、支那人化したものか、何れとも分つて居ないらしいが、兎に角、髮の結び方も、服裝も、共に支那風だ。して、女は皆おほきな耳輪を、二つもはめてゐる。家は今まで見たアイノ部落のよりも小く、また穢い。一戸必ず一隻の磯舟を備へてゐる樣だが、艫の左右には、きツと紋章が付いてゐる。其中、細い巴もあ

ゐし、また寶珠の玉で其尻尾が上下左右に出た樣なものもある。詳細說明して來たのか、[illegible]をしてゐる一組があつたが、其所有物に積である財産の中から、[illegible]提た匙と食器と(何れも木製)を讓つて呉れいと交渉すると、夫は承諾したが、妻が昔から使はつてゐるものだからと云つて、たう／＼承知せず、終に夫婦喧嘩を始めた。

この部落の側に、日本人の商店と淫賣屋とが一軒宛ある。淫賣屋には六名の日本淫賣がゐるが、何れも洋服でロシヤ人や清國人を迎へてゐる。僕の見に行つた時は、午後三時過ぎだつたが、露清人が十四五名ほど順番を待つてゐた。家の者等が先づ茶でも飲んで行けと云つたが、僕は中の廊下(左右の室には中から錠がおりてゐた)を通り抜けた儘、主人と立ち話をして別れた。若い淫賣も二名ばかり目立つてゐた。渠等の中には、浦鹽から舞ひもどつたのもあるし、マオカから行つたのもあるさうだ。

僕はもツとさきへ旅行する積りであつたが、下痢が如何にも苦しいので、引き返すことにした。して、四五丁來た濱邊の流木に腰かけ、見聞を手帳に控へてゐると、山の上から露兵が遠眼鏡で見てゐるのに氣が付いた。

ピレオ富士の裾で通譯者に別れ、案內者と僕とはまた濱邊を急ぎ、國境の鼻を磯づたひに安別に歸つた。

其三十九

七月三十日。曇。華氏最高七十四度、最低六十四度。

弟の病氣は全く平癒した代りに、僕が旅行から引き續き氣分がすぐれないで困つてゐる。玉突きは僕の留守中に百點に上進してゐたが、殆ど當らない。ただ運動の爲めに、負けても突くことは突く、他に身體を動す機會がないのだ。それに樺太へ來て以來、魚類（と云つても、多くは鱒だ）ばかりを喰はされ、自分に牛肉は勿論豚肉さへないので、食が進まない。昨日から、野菜ばかりを料理するやうに宿へ頼んだ。

郵便物の不着が時々あるので困る。郵便局員等の怠慢または不注意を指摘すべき當局者も亦怠慢または不注意なのであらう。愛する者からのたよりが十通中二三本なくなつたのなどは實に僕に取つて苦痛だ。義人などは、鱒が澤山取れたので、函館へ時の價段を問ひ合はす電報を打つたが返事が來ないので、續けざまに二三囘催促電報をかけた。さうすると、向ふから「ナニヨウジワカラヌ」といふ返電が來た。こちらからのは最後のだけが行つたのであつた。

袷に羽織を着てゐるもの、ネルを着てゐるもの、單物を着てゐるもの、まち〳〵であるのは、一日のうちに寒暖の變化が早いのを證する所以であらう。

其四十

七月三十一日。霧雨。午後曇。華氏最高七十三度、最低六十四度。

今月は蟹のあがらない月で、何處も殆ど全く仕事を休んだ。暇になると、職人などは兎角惡い方へを起して困る。使はれるもの同士の喧嘩口論やら、使ふものに對する不平やらが持ちあがり易い。昨夜、オタトモから一同を呼び寄せ、仲裁やら訓戒やら、今後の計畫などを云つて聞かした。オタトモは八月から波が荒く、船を出す望みがないので、例年の通りに雜漁者等は去つて了ふし、罐詰業者等も工場を他に移したのだ。僕等も小屋だけは來年のにそつくりして置いた。過日同所でも熊が人家のあるところまで出て來て、寢てゐる人畜を驚かした。馬などは、熊の足跡を見ても立ちどころに慄くんでしまうのだ。

蟹はマオカで十五六錢する時、オタトモでは八錢であつたが、雜漁者が引きあげ出してから、十四五錢にのぼつた。滿月の頃には、この動物は非常に痩せてしまう。その肉の一部が水になるのだ。また、朝取つたのと夕方取つたのとは中身の分量が違ふ。だから、漁師は、肉の減らない爲め、船にあげると直ぐ甲羅を剝がして置くのだ。蟹は豚と同樣、棄てるところが少しもない。甲羅でも一匹分が二厘ばかりで肥料に賣れるから、製造場の薪代だけにはなる。本年は二萬箱、二十萬圓以上の仕事になつてゐるだらう。然し、無經驗の資本家が無經驗の職人を使つて、原料を罐に詰めさへすれば可いと云ふ間違つた考へで、蟹の洗ひ方、ゆで方、詰め方などをおろそかにし、中身を包むに用ゆべき硫

酸紙の代はりにパラピン紙をつかつたり、甚しきに至つては、半紙二枚を以つて代用したりなどしたものがあつたので、不出來な品や、腐敗罐を多く出した。また、わけも分らないで、ただ腐敗さへ防げば可いと思つて、防腐劑を混入したのもある。そんなことの爲めに、外國の貿易界で不評判を受けたのは事實だ。一工場で五六千の損失を來した所もある。然し、兎に角、樺太で最も有望な事業と見做されて來たから、來月から來年にかけて、蟹並に鮭鱒の罐詰製造所は隨分殖える樣子だ。

其四十一

八月一日。晴。華氏最高七十二度、最低五十八度。

さきに鰊の概算收獲高を報告して置いたが、實際のところは、十五六萬石らしい。この價を假りに百八十萬圓と見て、官廳に納めた稅金七十四萬圓と各漁場で使ふ百名、二百名づつの漁夫賃金並に設備費などを差引けば、多大の損失とそあれ、利益はあつたとしても僅かな物だ。今回の旅行で各漁場をまはつて見たが、至るところ不漁不利の訴へが多いのに據つてもわかる。東海岸並に亞庭灣は鮭鱒が主で、鰊は兩方面を合せて西海岸で取れる十四分ノ一しかないが、西海岸でも、鰊不漁の爲め、その漁期後の鮭鱒で僅かに息を吹き返すことが出來た番屋もある。國境安別を根據とする熊谷漁場の如きは稅金が日領のよりも十分ノ一安い露領にも二三ケ所を有し、日露兩海の自由な融通を利用して、

巧みに鰊漁をも爲し得た者居だが、本年は僅かに三四萬圓の儲けがあればいいがと云つてゐるに過ぎない。樺太領有以來、漁場を開いて金を拵へたものは殆ど一人もないと云つてもいい位だ。

昨年は樺太全體で鰊が二十萬石（それでも不漁だが）取れた。本年も、よしんば、それだけ取れたとしても、北海道の一小島利尻に於ける收獲高と大差はない。それを、樺太を買ひかぶつた官民が百萬石も取れるものと思つたから、すべての間違つた政策、すべての間違つた事業が生れて來たのだ。政府も入札漁業家等も、それを目當ての商人等も、すべてさう思つたのだ。政府は漁場入札の相場を高くしたし、入札者等は競つてそれをせり上げた。して、昨今不漁の聲までが價打ちをあげて來た。然し樺太漁業の實際は昨今のが常態であるのだ。わが國人は兎角新物を大切がり過ぎる。左程でもない樺太を寶の山でも得た樣に持てはやすから、政府もその氣になつて、大事さうに魚族保護とか、山林保護とか、何だかだと六ケしい法令を設けてしまつたのだが、魚族は樺太に定住してゐるものでもなければ、また山林にも碌な材木は得られない。若し出來ることなら魚族を取り盡し、山野を坊主にし、日本住人を自然に追ツ拂つた上、アイノ人種の自由な生息地とし、意張りたがる軍人をして自由にから意張りさして置くがいい。現長官のやつた樣な、明確過ぎて窮窟な法律づめの政策は、實に愚の至りだ。

建網業者等の意氣込みを聽くと、若し刺網を公許せば、自分等と政府との間の約束並に入札の價面

上、それだけの賠償金を政府から出させせなければたらない。北海道では、網と網の間隔が八十間ぐらゐでも、その間に刺網を許してゐるが、樺太では、その間が二マイル、三マイルあつても、雜漁者の刺網を入れることが許されない樣になつてゐる。政府は今やおのれの作つた法例の爲めに身づから苦しんでゐるのだ。その苦しむわけも表面上ないではない。樺太廳の身代百九十萬圓のうち、七十四萬圓は建網業者等が納める稅金だ。その他に山林、土地の拂ひ下げ金、雜漁雜業の稅金などが六十萬圓あがる。あとは中央政府からの補助金五十萬圓だ。以上のかねで身上を持つて行く樺太廳が建網業者の肩を持て、かの全體でたつた二萬五千圓程（一人拾圓）しか納めない雜漁者を眼中に置かず、事業本位の政策を確立して、人間よりも、をえらいものに見做すのは、一面に尤もな點もあらう。維新の頃、養豚事業がわけも分らず流行して薩摩でえらい物は第一に『豚殿、神さま、大山縣令』だといふ俗言があつた。今の樺太は第一に『鰊、番屋の親方、樺太長官』で地方官吏も人民もあつたものではない。昔、豚のから景氣が急に頓挫した如く、樺太を買ひ被つた結果が、現今の不景氣呼ばはりになり、また根抵から間違つてゐる漁業制度などになつてゐるのだ。その結果海岸の村落にして生魚を宿屋の膳に供することが出來ないところもあつた。

其四十二

今では、昨年から確定した建網本位の漁制があるから、建網主義で刺網を公許しないが、替へた制度は何時にても變へることが出來る。變へて、刺網を許せば、政廳は何もわざ／＼建網業者等と鬪かする必要も、面倒も、またそれに對する申し譯の理窟をこねることも入らないのだ。制度を變へることが出來ないと云ふのは當局者の據どころない言であつて、變はりさへすれば、吾等は變はつた方を謳歌するに定つてゐる。刺網事件は、もう、政治上の問題であるから、樺太事情に通じた政客が之を帝國議會に持ち出して處分するより外はなからう。樺太の將來に大きな望を持たなくなつた僕等には、寧ろ早く解決が着く。乃ち、現在の漁制を（たとへ賠償金を建網業者に出しても）撤回し建網特許料金を遞減すると同時に、刺網をも公許し、魚族の保護（その實、現在でも、その効力はないこと）などいふ吝なことは云はず、山林濫伐の取締りをも（たとへ或程度までも）ゆるやかにし、なほ且中央政府からの補助金五十萬圓をも半減または全廢し、その代りに、樺太廳なる獨立商店の規模をずツと縮少するが可い。樺太放棄論者さへ出て來たくらゐだから、北海道廳の附屬にしても差つかへはなからう。漁期には隨分多數の人が入り込んで來るが、實際の定住者は正味二萬人ばかり、それも漸々減じて行く新領地だ。さきに、土着さすことを主として論じたが、實際は土着永住する價値のない島だ。

金のあがるだけ自由にあげさして、それを早く北海道なり、内地なりへ運ばしてしまうのが最も得策だらうが、それが出來難いとすれば、政廳の縮少と同時に、諸事業をもつと着實に、もつと小規模

にさすが可い。さうすれば最も組織が大きくて、實際の損得が分らない建網漁業は別として、鑵詰業は勿論、石炭採掘、砂金採集、並に牧畜製材も可なりやれるし、陸に大款冬、木賊、海に昆布の採集をしても、相當な利益はあらう。山野を行けば、木賊を踏まなければ歩けないが、船から海の底を見れば、うす暗く昆布が一面に生えてゐる。アイノのアツシの原料かゆい草（いら草）のき如も、その纖偉を織りて、種々新意匠の防寒、遮暑の切れ地に代へることが出來るのだ。然し樺太には大野心を持つて這入り込んだものがまだまだ多いので、縮少的事業に氣が付いたものは少ない。餘り望みもありさうでない劣等石炭をも大々的に吹聽してゐるくらゐだ。官民ともにまだ鰊（または鮭鱒）に目がくれてゐる。だから、建網漁場の親方なるものは、二百名、三百名の漁師を驅使して、得々大名風を吹かし、派出巡査や公認補助醫等を取り込んで、我物顏に使つてゐる。

以上は僕が今回の西海岸經歴で得た考へだ。

其四十三

八月二日。晴。華氏最高七十七度、最低六十五度。

樺太その物も面白くなければ、樺太の事物も亦面白くない。官民ともに內地の喰ひつぶし物でなければ、殆ど全くがりがり亡者だ。アイノや流刑露人等の生息地には適當だらうが、有望な日本人の永

住するところではない。石炭並に木材の質が惡いのは勿論、とくさも内地のよりはやはらか[illegible]で、昆布も沃度分析目的としてはその分量少なく、海栗も水氣が多いので、罐詰にはその製造法を考へなければならないし、おほぶきも木穴が大きくて硬い。氣候も惡いし、飲料水も惡いし、土地その物もよくない。椴松、蝦夷松などいふ軟弱な山林（樺太はそれが多い）などでは、土地は木炭質でぼく／＼してゐるから、山火事がそれに燃え込むと、一尺も二尺も深く燻りながら廣がつて行く。たとひその上に雪が降りつもつても、火は下をむぐツて翌春まで續くことがある。露領時代には、三ケ年もつゞいたことがある。火事の越年などはこの島でなければ見られないことだ。僕等の旅行中、ナヨロ川奥の森林が七月八日から十四日まで燃えつゞき、五千餘町歩を延燒した。原因は、同所に入り込んだ露國獵師の失火であつたといふ。

　樺太に於ける山火事の原因は、一般に入山獵師もしくは樵夫の過失でなければ、燒損木格安拂ひ下げの目的で、わざとその目的地に放火するのだとばかり思はれてゐたが、近頃發見された實見的學理に據ると、土壤に多量の燐を含んでゐるので、それが熱に觸れて獨り手に燃え出すこともあるのだ。現に、七月はいい天氣がつづいたので一日に三百ケ所も燃え出した日があつた。また、單に山火事ばかりでなく、市街村落に火事が多かつた跡が至るところに殘つてゐる。殊に官廳の燒け跡が目についた。眞岡支廳、名好郵便局等が燒けた跡を見た。思ふに寒國に慣れないものが、ストーブを無やみに

使ふから起ることだらう。ロスケ小屋の暖爐、ペチカの如きは、煉瓦を以てうまく出來た物で、朝一回、夕がた一回薪をはうり込めば一晝夜の間その熱は絶えない。日本人には、その構造が甘くやれないさうだ。露人はすべて、その組み立てを手製でやるので、少しもセメントを用ゐてないのは、三年に一回取りくづして掃除をする爲めだ。日本人には、どうしてもその工合が甘く行かない。それを下手に用ゐると、直ぐ火事が出る。だから、假りにロスケ小屋に置かれてあるクスンナイ出張所も名好郵便局も、ペチカはありながら、それを用ゐたことがないさうだ。

其四十四

八月三日。晴。華氏七十七度。

昨夜、樺太廳の前田第三部長の歡迎會が『あけぼの』にあつた。今回は民間側の發起でもあり、又漁場が暇になつたにも由り、第一部長の時よりも賑かであつた。然し宴會と云へば、必らず二次會・三次會をやるものであるかの樣になつてゐる。漁場に關係あるものが多いから、マオカ人民は一體に金づかひが荒い。

中川一部長が豐原から電報をよこし東海岸巡視を五日頃から始める樣通知して來たが、僕はここ二三日間事業上の用事があつてマオカ以外に出られないのは殘念だ。その代り、二三日したら、第三部

長と共にマオカ以南のアイノ部落などを見に行くつもりだ。

昨今は昆布取りのほかに、北歸を取る時期で、クスンナイの北、ロクスンナイへは大分入り込んだものがあるさうだ。北海道の利尻島附近の海中では今盛んに海扇を取つてゐる。もとから此の貝が有るといふ評判があつて、何のことか分らなかつたのは、それであつたのだ。海軍測量艦松江號が利尻の近海を走る時、何だか艦底に障るものがあつて、進行が自由にならないので、よく調べて見ると海扇の巣窟を發見した。この貝がかさなり合つて、幅三マイル、延長十マイル以上も連續してゐた。同艦は之を利尻島民に知らせてやつたが、實は、同島民はその以前から知つてゐたのだが、他の飛び入りものが是れを目あてに爭つて這入つて來ない樣に、秘密に捕獲してゐた。然し新聞紙によつて世上に云ひ傳へられたから、今では、その捕獲漁師が北海道本島から續々行つてゐる。それでもなか〳〵取り切れなからうと思ふ。

樺太漁業は、その初め北海道の利尻島が根據であつた。利尻から海馬島もしくは東海岸に手を出したので、日領になるまでは、漁業は東海岸が盛んで、西海岸は餘り開けてゐなかつた。それが、日領になつてから、急にあべこべになつてしまつた。現今では、東海岸には宿屋のあるところが二三ケ所ださうだが、西海岸にはマオカを初めとし、ノダサン、トマリオロ、クスンナイ等、おの〳〵二三軒から五六軒までの相當な旅館が維持されてゐる。船の便もこちらが割合に自由で、頻繁である。して、

その定住者または假住者等のうちには、日露戰爭時代に海賊的奪掠をやつたものが多くゐる。海馬島に一時、漁業家の獨立政府が出來たことは、二六新聞に出た海馬島史にも書いてあつた筈だが、マネカにも、その小政府の落ち武者等が經營した日本俱樂部といふ獨立政治的團體があつた。その頃、露人並にアイノ人が多くゐたのだが、露人は義勇兵の一隊を組織して置きながら、それに兵糧を供給しなかつたので、その兵隊の爲めに却つて北へ追ひまくられてしまつた。そのあとを日本俱樂部が占領した。日本兵が到着したよりも以前のことである。

漁業並にその頃の船頭と漁業家とは丸で海賊であつたのだ。東海岸で失敗すれば、西海岸にまはり、西海岸に遺利がないと見ればまた東海岸をねらひ、帆船ならまだしもだが、一葉のほつ船かはさき、磯舟などを漕いで、深く敵地に入り込んだ大膽には驚くのほかはない。郡司大尉がカムチヤツカで捕虜になつたのも、海賊に出かけた結果だ。カムチヤツカのシーキングとかいふ會社の倉庫に、ラツコ、その他の高價な毛皮を澤山藏してあることを日本人はよく知つてゐたから、そこに最も近い占守島の大尉が先づそれに氣がついたのだが、つひに捕虜になつてしまつたところが、函館の或財持ちが第二回の冒險を企てたが、途中で難船に會つて這々の體で歸つて來た。して、また、第三回の冒險家が行つて、漸くその倉庫を切り破ることが出來たのだ。然し、歸途、小樽港へ這入つて來たので、悉く官憲の爲めに沒收されてしまつた。露國の領海へ早く行つたものは隨分利益を得たさうだが。後

來た。それを運び返すと、また明方宿の亭主が這入つて來た。女は怖れてその翌日轉宿した。それは別として、樺太の馬は小いから五六十圓で買へるが、近所の牧草地に飼ひ放しにして置くと、いい加減の時間りでこつ〱歸つて來る。なか〱可愛いものだ。その代り、さきに話して置いた通り、かの驛遞の馬が牝馬を追つかける途端、崖から落ツこつて死んだ樣なことも出來する。驛家の牝馬（三歳）はよその牝馬と駈落をした。大抵その行方は想像されるから、その飼主が二三日のうちに三四里さきの牧場で發見し、飼ひ慣れたと同じ形のバケツをさし向けると、寄つては來たが、中に何も這入つてゐなかつたから、逃げて行つた。そこへ丁度その馬の親を引いて通りかかつたものがあるから、その親馬を連れ（馬はよく自分の親をおぼえてゐる）、バケツの中に燕麥を入れて近づき、それで漸く取り押へることが出來た。この牝馬はおとなしいので、僕等が乘つても左右することが出來る。驛遞の馬はどこのでも性が惡いので、客を落してずん〱わが家へ歸つてしまうが、一般の馬に乘り手が來ない間は、決してそのとどめられた場所を去らないものだ。

　マオカに水道工事が始まつた。その水源を見に、僕は今日山の奧へ這入つて見たが、道がないので中途から歸つて來た。途中で、芋を掘つてゐる女を見たので、それに馬鈴薯かと聞くと、いいや「五升芋です」と答へた。どちらでも同じではないか、いろんな草花を二十種以上も採集して來て、小學校、料理屋、玉突場などへ行つて、多くの人々に其名を尋ねて見たが、分つたのはさくの花、馬ぜ

り、七ッ葉、のみのふすま、樺太にんじん等、三四種で、きんぽうげらしいが、當地に照し合はすと違つてゐるといふ樣な、樺太獨得のが多いらしい。兎に角、高山植物が海岸近い山野にもあるのだ。

其四十六

八月五日。晴。華氏七十四度。

マオカの南端にある牧場地で牧畜をやつてゐる山下彦太郎といふ人を訪問した。氏は長らく漁業關係者であつたが、樺太政治の根本誤謬に愛想をつかしてから、隱者的に牧畜をやり出したのだ。牛が二十頭、豚が二十頭ばかりゐる。もつとも、これ限りではない。他の牧場をも持つてゐるのだ。この島の牧畜業も、餘り大規模にやり出すのは考へ物だ。といふのは、放牧時期は樂だが、毎年六ケ月間は飼ひ料を枯れ草にして貯へて置かなければならない。その上、獸舍を充分暖かにして凍死のおそれを防ぐ用意が必要だ。豚は本年から飼ひ初めたのだが、牛は肉（冬期を除いては、腐敗と需用不足との爲め、軍艦でも這入らないと殺さない）よりも乳を目的としてゐる。現在取れる乳で不儘の飼養費を出しながら、良い種を拵へて行く積りらしい。養鷄をも聽てやるさうだ。マオカで玉子は少いから八九錢する。クスンナイ以北では十錢から十二三錢だ。クスンナイで、そんなに儲かる玉子を。なぜ鷄を養つて儲けないのかと僕が尋ねたら、「犬めがめづらしいのでみんな取り食つてしまうから」と

答へたものがあつた。滿洲犬は橇を引かしたらおとなしいが、アイノやギリヤークと同樣、まだ馴けてゐないのだらう。歸りに、山下氏は作つた畑を見せて呉れたが、馬鈴薯は一反五十俵、燕麥は一反四石取れるさうだ。その他に、胡瓜や南瓜は今花が咲いてゐる。また、豌豆、キヤベツ、茄子、大角豆、葱、夏大根、胡蘿蔔、牛蒡、三葉、菜などを作つてあつた。山を開墾して馬鈴薯を作つてある處は、軈て落葉松の造林にするさうだ。同松は五年目に一丈二尺ほど延びるものだ。山に野生覆盆子が澤山生えてゐた。

其四十七

八月六日。晴。

華氏七十三度。第三部長公用の爲め豐原へ急行、西海岸南部まはりは見合せとなつた。

同七日。朝、鳥渡雨、華氏七十二度。

同八日。午後より細雨、華氏六十五度。

アイノ部落の衞生視察の爲め、豐原から、本廳の瑞山病院長が來た。僕は、氏と共に、小警邏船翁丸に搭乘し、マオカから六里南のタランドマリへ視察に行つた。土人戶數二十二、人口百七十。ここには、西海岸土人全體の總代をしてゐる川村初藏といふものがゐる。四十近いが、日本人とアイノの

合の子で殆ど日本人だ。樺太アイノにも隨分日本人の血は早くから混じたらしい。因に、五十嵐億介の子が少くない。この川村氏に對して、別に東海岸に、その方の土人全體の總代バフンケイ（又名愛吉）といふのがある。これは純粹のアイノだが、川村氏よりも一層因けず、また一層淡泊にしてゐるさうだ。川村氏には、副總代とも云ふべき日本人、武内今幸といふのが付いてゐる。これが萬端を扱く實際の世話役である。この人は愛知縣人で、明治三十七年に樺太へ渡り、土人に自由の漁業を保しつゞけたが、それが取れないので歸ることも出來ず、且、幸ひに土人間に信用があるので、一身を委ねてアイノの爲めに盡力してゐる。今回の視察には、この人が來てゐたので僕等は多くの便利を得た。

僕等は川村氏の宅に行き、そこへタランドマリのアイノ全體（そのうち、同村の漁業部長留任運動の爲め、請願に眞岡支廳に出たものを除く）を呼び寄せて健康診斷を行つた。一體に身體の虛弱らしいのは劣等人種なる所以であらう。太つたものは少く、痩せて骨が出てゐるのが多い。して、齲齒に云へば、トラホームに罹つてゐないものはない。特に目に立つのは、船山氏も西海岸で見たことが少いセムシがあつて、而もさういふものには横ツ腹もしくは腰のあたりに穴が出來て、そこから膿が出てゐることだ。次ぎに、ヒゼンが多い。この部落は一昨年頃殆ど全體にこの病が廣がつてゐたが、壓制的に大施療を行つた爲め、今では、それでも減じて來たさうだ。肺結核と黴毒とは少い。

北海道のアイノ學者バチエラー氏は北海道土人研究の結果、アイノ人種には固有の梅毒並に肺結核

が多いのを事實と肯定し、樺太アイノも必ずさうだらうからと、樺太廳に注意したさうだ。ところが、樺太で、東海岸土人取調べの上だけでは、白癬とトラホームとはあるが、梅毒も結核も殆どない。然かし一時北海道へ行つてゐた土人の部落（さきに僕が行つた）が西海岸のテラフナイボにあるが、トマリオロの公醫が出張の上取調べたのに據ると、診斷百十一名のうち、九十二名までが不健康狀態で、第一に結核性、第二に梅毒、第三にヒゼンが多い。全體アイノ婦人は優等人種たるシヤモ（日本人）に愛せられるを名譽とする。して、北海道アイノは樺太アイノよりも日本人に接する機會が多かつた。之を理由として、梅毒は北海道でもアイノ固有の病氣でなく、日本人中の劣等者、即ち土方、漁師、兵士などから傳染したのではないかと推斷する人々もある。アイノに限らず、現に、豊原に鮮露同人で評判娘を二人持つてゐたのが、婿を貰ふことが出來ないので困ると云つてゐたさうで、軍政の代のことであつたから、年頃の姉の方が或日本軍人に關係し、激烈な梅毒を受けてしまつた實例もある。して肺結核の如きは、梅毒から來ることもあるのだ。然しまだ充分の斷言は出來ない。梅毒の遺傳を證する徵候はまだ見たことはあつても少いさうだ。然し鯖山氏は明日から北方の各部落を巡るから、その取調べの結果はいづれとも判定されるだらう。現に今このタランドマリ部落では梅毒が少い。して一戸に梅毒と見えるのは、四五名、皆婦人だ。

其四十九

アイノ家屋は不潔な上に、空氣の流通が惡く、光線の取り方には全く不注意だ。窓はたゞたつた一つしかないのに。それを迷信の爲めに滅多にあけないで、その側に小い穴をうがつてあつた時代もある。それも、雪が降り出すと、塞つてしまう。例の入り口を締めると、晝でも薄暗い、光線不足と焚火の煙との爲めトラホームを引起すは無論の事だ。營養不充分、空氣の腐敗、周圍の不潔、梅毒性、血族結婚、飲酒等の爲め、身體は虛弱になつて、肺結核を起すのも亦自然の事だ。僕等の前に出て來たのは、病人でもまだ動けるから可かつたが、出て來られない者が四五名あるので、各々其家に就いて見てやると、足の骨が痛んで立てない者もあるし、老衰の爲めに小供の如く泣きわめいて居るのもある。然ういふのは總てメノコだ。女には、鳥渡美人もあるし露國人の血が入つてゐると見える娘も一人ある。然し、大體では、男子よりも女子の方が一層虛弱だ。劣等人種がます〳〵劣等になつて行く證據であらう。竹内氏の言に據ると、死ぬ時、瘦せ衰へて、咳をしながら、白い唾を吐き、偶々赤い血が混ることがあるさうだ。

タランドマリのアイノは住居並に風俗も日本化して居るのが多い。僕等が話すことを善く解して居るし、二三歳の小供でも、目を見て貰ふ時、怖れて泣くのに「痛い、痛い」と云つて居る。アイノは多く日本流の姓名を附與されて居るが、姓だけが日本で、名はアイノ流なのもある。殊に可笑しいのは、女で木村ォチンコといふのがある。二三回目に診察を受けた男の胸に血のにじんだ跡が澤山ある

ので、どうしたのかと聽いて見ると、アイノの習慣として、肩の凝る時、胸に水をつけて指さきを以てやたらにつめるのださうだ。跡がつくほどにつめるのであるから。肩の凝りをさうして他方に散らす神經作用らしい。

同部落で近頃太刀と鍔とを掘り出したが、太刀は丸で腐つてゐたさうだ。本年五月には、ナヨロ川のほとりで鎧太刀、なぎなた等を掘つた、この方はどうしても七十餘年以前だらうと定められたが、誰れのか分らない。土人中の古老の記憶に據ると、日本人（普通の漁夫）等が初めてその邊へ渡つたのは五十餘年前のことで、其時有名な武士が二三名あつた。鎧の所有者はそれよりも以前のことで、或大將があつて、其家屋が燒けた儘になつてゐたが其燒跡から出て來たのだ。タランドマリの鍔なども眞岡支廳に納めて取調べを受けて居るさうだ。

海馬の胃嚢といふのを茲で初めて見たが、一斗以上の流動物を盛ることが出來る。アイノはこれに海馬の油を入れて置き、何樣な食物にもそれをかけて喰ふのだ。

僕等は午後三時半にマオカへ歸つた。この行には、三津木春影氏の親戚に當るといふ人が隨行してゐた。

其四十九

八月九日。雨。華氏六十四度。

昨日の一行と共に、翁丸に乘じ、マオカから一里前のクメコマイ部落へ行つた。其處の土人の爲めに許可してある漁場は、東京の日向輝武氏の名を以つて引き受けてゐるものであるが、もとは其處は土人總代山本實兵衞といふのが番屋であつたのだ。實兵衞が一まかたひ取りに（漁）の中ノトロへ行つて留守なので、僕等は田澤モトヰといふ土人家にアイノを招集した。十七戸、九十五名のうち、留守があるので、老若男女四十五六しか集らなかつた。女の名にチヤコ、ユリコ、レキキシマ、シバサレマたどいふのがある。同部落には、健康體が多く、トラホームやヒゼンも少い。然し全體に虛弱質になつてゐるのは、劣等人種の免かれ得ないところだらう。婦人の胸廓・背の幅が廣いのは、とても日本人種の及びもつかない點だし、齒ぐきも日本人の樣の圓形でなく、角括弧形に開く、背も丈短くてかつきりしてゐるが、それが何れもその儘にしぼれて行くのは實にみじめだ。めのこでも毛深くつて、背中、胸、腕までが目に立つ程の毛を持つてゐるのがある。して、男女ともに眉毛が濃く、その間並にそれと目との間が接近してゐる眉の凝りを直す爲めマキリでかきむしつた跡に入れ墨の墨が殘つてゐる老人があれば、白癬の爲め頭の禿げた壯年者數名ある。烈しい肋膜炎の爲めに心臟の位置が片寄つてしまつたのや、肺結核または脊髓病で、脊骨が飛び出たり、手の骨が曲つたりしたのや、佝僂病で全く脊が延びないのやもある。して、重大な病氣はやツぱり女の方に多い。

立てない病人等をその家々に就いて見舞ふ時、案内をするアイノの一人に僕はにを（學名、えぞにふ）を指さし、何といふかと聽けば、しうきなと說明した。僕はさくとにをとを取つ違へてゐたので、土人の喰ふのはそれかと再び聽くと、いくらアイノでもそんな物は喰はないと憤慨した樣子だ。然しよく念を推すと、渠等のおもに食用とするのはさく（アイノ語、はら）の方でしうきな（しよツきなとも云ふのだらう）のにをもあまにをなら喰ふさうだ。實兵衞の留守宅を訪問した時、また百合の根を絲に通して澤山爐の上に乾してあるのを見た。

アイノが年代を數へる仕方は單純なもので、親の時、そのまた親の時、親の親のそのまた親の時といふ樣に同種族の口碑をつたへて行くのだ。同時代のものでも、自分よりさきに生れたとか、自分よりも後だとか云つて、大體の年齡を示めすだけで、渠等は、青年男女の外は、自分の年を確かに知つてるものがない。一老人の如きは、年を問はれて、自分は知らないが、お役所の帳面についてゐるだらうと云つてゐた。

其五十

八月十日。晴。華氏六十二度。

樺太の花植物を擧げて見ると、四月末から咲くのに福壽草、やちぶきなどがある。五月に這入つて、

えんごさく、きばなのあまな、ねこのめ草、ふき、水芭蕉、一りん草、二りん草、ひめいちげ。六月になつて、こけ桃、ごぜんたちばな、りんね草（この三種は樺太固有とも云つて可い）、わすれな草・すずらん（この種もわざ／＼ここから内地へ送られる）、山芍藥、石竹、金ぽうげ、えぞかんぞう、樺太にんじん、しようぶ、ひめすゐば、せんだい萩、たかねばら、黒ゆり、いそつつじ、麝香草、あつもり草。七月にはえぞにふ（さく）、野豌豆、ふし、鹿ぎく、濱なす、白よもぎ、おほいたどり、おほやまふすま、ばいけい草、車ゆり、山ゆり、野あやめ、北見はたざを、裏白きんばい、ふうらふ、からまつ草、おほばだいたん、ぼうな、おほばしもつけ草（俗に誰か袖）、白玉草、やなぎらん、こめがや、草ふじ、あざみ（えがのきつねあざみ）くろーばー、七ツ葉、金みづひき、くかい草（虎の尾）、等だ。以上は、今、マオカに來てゐる菅野技師の調べに、僕の見聞と採集とを參考して書き出したので。樺太で特に發見された草花が幾種類もあるさうだが、まだ命名されず、札幌農科大學で研究中だ。

其五十一

八月十一日。晴。

樺太の漁業家には髯を生やしてゐるものが割合に多い。聽いて見ると、髯の時代といふのがあつたのださうだ。髯がなければ、露國人には勿論、アイノ人にも馬鹿にされたからである。して、アイノ

や露人が退いてわが國人がそれに代はる時代には、隨分滑稽なことや悲慘なことがあつた。一ごけを買ふのに、數日前から申し込んだり、官等順で行つたりして、而も一回數分間に五兩や十兩を取られたのもその時代だ、數千金を懷中しながらも、衣食住の不自由に苦しみ、木の根を枕として夜を明し、鑵詰の明き殼に數十人が爭つて一條の湧き水を受けて飲んだのもその時代だ、もう金も命も入らないから、一晩でもゆツくり蓙小屋に寢て見たいと思ふ人々があつたのも、その時代だ。して、小屋と云つても、初めは土に穴を深く掘つて、その上に蓙をかぶせてゐたのだが、それが少し發達すると、半ば穴に、半ばかこひになり、また發達して、今度は全く穴を廢し、から傘を半ばすぼめた樣な蓙小屋になり、更らにまた發達して、家根を有する小屋となり、板小屋となつた。それを見てゐたものには、僅かの時日に、人類の原始時代から現代の生活に移り變はる狀態を見た樣な氣がしたさうだ。

以上はおもに大泊に於ける狀態であるが、マオカでも、さきに報じた日本倶樂部成立時代にはさうであつた。して、明治三十八年、熊谷事務長官の婿に當る若學士が眞岡民政支長として都丸に乘つて來たるや、その一味徒黨と共に、種々の野心、陰謀とを授けられて上陸した。妾をつれて來たのもあれば、御用商人をつれて來たのもあるし、料理屋、ごけ屋、女郎屋などを開始するものも亦一緒にやつて來た。して、そこには無學者流ばかりが多かつたから、官吏にさへ賴めば、何でも出來るものと信じ、來住の漁業家や商人が官憲に運ぶ賄賂や物品はおびただしいものであつた。一官署の小使でさへ

月五十圓、百圓の收入があつたさうだ。官民ともに、金は湧き出て來るものであるかの樣に、遊興に日もこれ足らずといふあり樣であつた。然し軍政時代の勢ひがまだ〳〵拔けずしてゐたから、土木課長が一夜二十兩の約束でごけ屋に飲んでゐるところへ、聯隊の憲兵曹が這入つて來て、『この生意氣な奴め、斬り殺せ』といふ騷ぎに、課長は取るものも取り敢へず、這ふ〳〵の體で、裏口から逃出した滑稽もある。

支廳長は腦病持ちで、何の役にも立たなかつたので、その次席者に官權があつた。して、その者は終日、終夜、丸萬といふ料理屋に入りびたり、官廳の事務をそこで執つてゐたのだ。この時代をマオカの暗黒時代と云ふのだ。ところが、蓆小屋が板圍ひとなり、板小屋がまた五間間口、八十一坪の人家となるに從つて、ずん〳〵秩序がついて來たのである。

其五十二

八月十二日。晴。

マオカの市中で石油が出るのを發見し、大評判になつたが、分析の結果はまだ分らないから、實際の見込みも亦分らない。然し、西海岸アラコイから南方トコンボに至る沿岸一帶は、岩石層が南北一直線に亘り、その岩石の間には、青色の石油層が現出してゐるさうだ。かういふ兆候は南方に多いさ

うだが、それが北方の名好地方までも同一系で及んでゐるだらうといふ説がある。

ついでに云ふ、石炭はトマリオロやブスタキの官礦以外にも、メナベツ川流域の面積九十四萬坪は千引石松、外二名に、同じく五十萬三千餘坪は小澤某に、ノボリポ附近二十六萬坪は山本某、外二名に、セルトナ流域六十八萬坪は大阪の高田實に、いづれも許可された。安別の熊谷漁場でも、その附近を願ひ出で、白案川並に白家の船舶用を掘るつもりださうだ。

其五十三

八月十三日。晴。

東岸海の幌内川流域には、ギリヤーク人七十五名、オロチョン人二百五十五名、サングース二名、トングース五名がゐる。計六十五戸、人口三百三十七名だ。狭い小舎は建ててゐるが、殆ど一定の住所はない。漁期には川口に出て鮭、鱒を取つてゐるが、秋になると、奥へ這入つて、貂取り、狐取りをするのだ。ギリヤーク人は、僕も露領で見たから知つてゐるが、男子は容貌陰險・短い辮髪でなければ、前額に四寸ぐらゐの長髪を貯へ、鬚髯は長く威風堂々と云つても可い。女子は面圓く扁平で、髪二寸許を垂らしてゐるか、然らざれば、後頭部に結髪で、大きな耳輪を箝めてゐる。して、オロチョン人は男子の髪が短く、髯なく、男女共に同面扁平ださうだ。男子には、五分刈りがあり、女子に

辮髮がある。彼等はすべて血族結婚をしなければならない狀態にあるから、畸形兒や病身者が多い。殘留露人のうちでも、女が足らないので、男子四名で一妻を共有してゐるのがある。

オロチョン人の女は馴鹿（トナカヒ）と交換されるので、馴鹿が多いだけ女の價打があるのだ。そのまた裁判が面白い。或男が他の男の妻を誤つて銃殺したが、それは酋長のさばきで、かう決着した。銃殺者は、銃殺された女が結婚の時受けた馴鹿の數を被害者の夫に與へ、それと同時に銃殺者の妻をも被害者の夫に與へたのだ。この頃また悲慘なことがあつた。オロチョンの酋長ミキポリといふのが、妻を出して、ナポリといふ少女を入れやうとし、酒の勢を以つて、妻に相談した。妻は肯かないので、酋長は妻を船に乘せて幌内川の眞ン中に浮べ、離縁を承知しないなら、かうするぞと、脅迫的に妻を水中に投げた。無論、殺す氣ではなかつたのだが、流れが激しかつたので、再び引きあげてやることが出來なかつた、酋長も俄かにそこで醉ひが醒め、身を投じて浮き沈む妻を助けに行つたが、力が盡きて、二人とも死んでしまつた。少女ナポリも亦それを聽いて殉死した。

其五十四

八月十四日。晴。

トマリオロに泊つてゐる時、宿の天井や壁から黑い小蟲がばたり〳〵と落ち來たり、それが何時の

間にか浦園の白い敷布のまはりに一面に集つてゐるので、僕は實に氣味が惡かつた。毛蟲だが、別に刺すこともなく、鳥渡でもさはると、くる〳〵ツと固まつて黄いろい汁を出す。ところが、それは非常な害蟲ださうで、葉の樣な植物のとがり葉を喰ひ盡す奴だ。早く退治てしまはないと、樺太農業に大切な燕麥、ライ麥等をなくなして了うだらうといふ問題が、近頃起つて來た。トマリオロでは漸々ゐなくなつたと云ふがそれは地下に喰ひ込んで行つたので、この蟲は地下三尺までも這入つて行くさうだ。して、マオカ南部に至ると、三里にも四里にも渡つて、その害跡が現はれてゐる處がある。北海道で之を地蠶または夜盜虫と云ひ、これが跋扈を防ぐには、溝を掘り、そこへ石油を流して置くのだ。するとそこに落ちて死んでしまう。

僕は今日急に内地へ向はなければならなくなつた。それも、事業が進むと共に、難局になつて來たからだが、或用件を控へて大禮丸に乘つた。然し、留守中、事業進行の用實だけはして來た。若し暫く歸れない樣なことがあつたら、一時、樺太通信は中止するが、越年時期には再び渡航するから、樺太越年日記を書くことにしたい。

大禮丸では、三名の漁業家が今年の引き揚げをして小樽もしくは函館へ歸るのに同船した。いづれも僕が旅行中に知り合ひになつた人々で、今年は儲けた者もあれば損であつた者もあるが、規模が大きい鰊業者だけに、いづれも損益が眼中にない樣な態度である。一等室で話しがはづんでゐるうち、

船長が東海岸海豹島の話をし出した。同島は、今、膃肭臍が住んでゐるが、昔露人が隨分濫獲し、近頃の報告によると、僅か周圍十二丁の同島に、千八百五十頭ゐる。監視の官吏が派遣されてゐて、その密獵を防ぎ、獸兒の發育を助けてゐる。隨分澤山になつて來たるので、もう入札か、何かで請負はし、捕獲しても可い頃ださうだ。本年、その島を去るものが、來年にたつて皆歸つて來るか、どうだか分らない。試驗の爲め、先年耳を切つて置いたが、監視所から遠目鏡で見ろくらゐでは、實際にその耳が切れたのが來てゐるか、どうかも分らないのだ。この獸類の習慣として、牡一匹で牝を四五頭もしくばそれ以上も保護する。して、その牡の勢力範圍に入り來つて、牝を犯さうとするものがあれば、牡はその敵が自分の子であつても、何でもかまはず、喰ひ殺して了ふほど神經が過敏になるのだ。この頃では、海に這入つて餌を求めることをさへしないで、その身が痩せこけて行くのも知らないでゐるさうだ。中には、牝二十頭以上を牡三四頭で共有保護してゐるのもあるが、そこへ獨身者のあばれ者が飛び込み、牝を喰へ行かうとすると、それと奪ひ合ひが始まり、激烈な爭ひになると、その間に齒がたを深く受ける牝が死んでしまうことがある。

膃肭臍の群居してゐる一間ほど近くまでも人が行けるが、うなられるので隨分恐ろしいさうだ。大禮丸船長の撮影した寫眞を二枚貰つたが、同獸群居の眞中に大分空地があつて、そこに大きな別な獸が寢ころんで居るのは海馬（とど）だ。海馬は同島に五十頭ばかりゐるさうだが、膃肭臍をいぢめ拔

くので、大害物と思はれてゐる。監視者は折さへあらば銃殺するのだ。陸上でもぼう〳〵とうなり猛つて萱張るので、膃肭臍等に恐れてその側へ寄り付かない。海馬も、膃肭臍も、寒くなればゐなくなつて了ふのだが、その時節にはまた海豹（アザラシ）の群がやつて來てこの島を占領するのだ。

樺太の話

日露の國境

わが國が陸つづきで他國と境してゐるのは、樺太島の北緯五十度に於てばかりである。樺太は北へ行くほど山が高くなり、その山が火山的にさきが尖つてゐる。安別といふのが日本領に於ける最北の地名だ。昔の地圖で、トルストイの鼻となつてゐる安別の岬が海岸を日露の兩領に分けてゐる。岬と云つても、鳥渡した山で、その絶頂には、國境標が建ててある。そこへ行くには、切り崖の様な山腹に細い道を切り開らいたのを登らなければならない。それがまた急な道で、右に折れ、左にまがり、丸で稻妻の通つた跡の樣だ。して、それを登ると、外國だと思へば、僕等は何となく物凄い感じがした。

國境標には柵をめぐらし、花崗石の低い標がある。して、南面には菊の紋、北面には鷲を刻してある。寫眞師をつれてゐたから、僕等はそれに腰かけて撮影した。そこから、うしろの山を望むと、林空と云つて、山の林を五六間幅に切り倒し、國境の線としたのが、一直線に東の方へ走つてゐる。そ

の直線は、山の高低と谷の有無とをかまはず走つてゐるのであるから、それを實見すると、實に氣持ちが好かつた。僕等はそこで雨に降られたが、それが日本の雨か露西亞の雨かといふ様な疑問が起つた。黒百合が澤山生えてゐるところだ。

その國境の鼻から臨むと露領の方へ十餘丁ばかり延びた低い草山が、綺麗な稜線をいだいて、海に突出して、富士形に隆起してゐる。それをわが國人はピレオ富士と稱する。國境から一里半行くと、ピレオといふ港があり、ギリヤークといふ劣等人種の一部落並に露國の有名な漁村會社がある。露國では、國境を踏査する時、そこが五十度に當ると思つてゐたのだが、わが國の馬鹿正直な學者等はそれに反對して、一里半も手前のところを選定したのだ。そこの露人と安別の漁場とは、殆ど公然の秘密を以つて、旅行券なしに相往來してゐる。大竹氏の關係ある漁場が日露兩域に渡つて三四ケ所あるから、密漁をやりながらも、わが國の巡邏船が來たから露領に逃げ、露國の警船が來たら日領に隱れた時代があつたといふわけだ。

火事の越年

樺太の山火事は一種特別だ。船から見ても、全島至るところ、一度ならず、二度ならずの火事があつた跡でない山はない。大木は一里も二里も奥へ入らなければ見られない。一度山火事があると、そ

存跡に先づ白樺が出來る。それが育つと、そのかげに椴松や蝦夷松の芽生えが出る。して、草木の生の競爭上、それらの松の大きくなるところには、樺はその繁殖を停止してしまう。それがまた燒けると、ばらやいちごや羊齒類の坊主山になるが、そこに少しでも熊笹の根があると、すべてがこの笹の繁殖の爲めに征服されてしまう。だから、熊笹は森林保護の上には大害物になつてゐる。たとへ、火事はなくても、また、樺太山林の地盤が固くないから、如何な大木でも、濫伐の結果、あたりに相持ちの木がなくなると、風の爲めに根からおげてしまつたり、さなくば、幹が弱い部分から折れてしまつたりするのだ。

同島に於ける山火事の原因は、一般に入山獵師もしくは樵夫の過失でなければ、燒損木格安拂ひ下げの目的で、わざ／＼その目的地に放火するのだとばかり思はれてゐたが、近頃發見された實見眞理に據ると、土壤に多量の燐が含まれてゐるので、それが太陽の熱に觸れて獨り手に燃え出すこともあるさうだ。四十二年の七月はいい天氣が續いたので。一日に三百箇所も燃え出したことがある。して一週間や二週間つづくことは珍らしくない。或は二ケ月も三ケ月も燒けつづき、或は數十方里を燒き拂ひ、その海岸を通る帆船の上に一晩にして二三寸の灰が積つたこともあるさうだ。ナヨロ川奥の森林が、四十二年七月八日から十四日まで燃えつづき、五千餘町歩に延燒した。大きい火事になると、もう、手のつけやうがないので雨や雪の爲め自然に消えるのを待つのだ。ちひさいのなら、山林を切

り倒して、そこにくひ止めることも出來る。

椴松や蝦夷松の樣な山林（それがまた多い）の地盤は、眞土の樣なものは先でない。木葉苔だのいつからかの木の葉や枝や枯れ木などが積み重つて、それがただ腐つてゐるだけの程度であつて、普通が内地で見る山の土とまではなつてゐない。赤い色の木朽れ土で、ぼく／＼してゐる。それが何尺も、何尺も重つてゐるのだ。だから、一旦、山火事となると、立ち木が焼けるばかりでなく、その土も共に燃えて行く。而もそれが一尺も二尺も地下に燃え込むのであるから、地下を火事はくすぶりながら廣がつて行き、たとへ雪がその上に降りつもつても、火は下をむぐつて翌春まで續くことがある。露領時代には、三ケ年もつづいたのがある。火事の盛年などは、この島でなければ、見られないことだ。

鰊の群來

樺太廳の生命は鰊にある。人間よりも鰊が大事にされてゐるのである。つまり、この群來魚がなければ、樺太の獨立經濟が成り立たないのだ。政廳每年の身代百九十萬圓のうち、八十五萬圓（殆ど全體の半分）は鰊の建網稅からあがる。然し實際の收獲を云へば、四十二年の豫期は二十萬石であつたが、十二萬石内外しか取れなかつた。不漁の聲が高いのももつともであつた。今日にしてたつた百四五十萬圓しかなかつた。それをおもに三四十ケ所の漁場持ちが分けるのだが、鰊はおもに西海岸で取

れるのであつて、東海岸は鮭鱒を主としてゐる。一漁場で二三萬圓の稅を毎年納めるところもあるが、その漁期と云つたら、たつた三ケ月間で三月十五から六月十五日を以つて限りとしてある。而もその短日月に二度も三度も鰊の群來があればいいが、さうさうまくは行かない。一漁場、乃ち、一哩なり二哩なり三哩たりの海岸を限つて、高い稅金のもとに許可された建網といふ一種の網を張つて待つてゐるところを、鰊が全く素通りしてしまふこともある。その代り一網に一回這入りさへすれば、その年の何十萬圓といふ仕事は終るのである。それも僅かに一時間か二時間のことに過ぎない。

漁場の主人、乃ち、どこの料理屋にも爭つて歡迎され、且、アイノ少女が戀の最大理想とする番屋の親方なるものは、毎年、その期間に、小は四五萬圓より大は三四十萬圓の資金を運轉し、汽船の二三隻も備へてゐるのがある。樺太日領の定住人口は二萬位りしかないが、漁期に至ると、いつも七八萬に增加し、不斷はアイノか驛遞かが、それも、通るか通らないくらゐの海岸にも、臨時の村落もしくは都會が出來るのだ。して番屋の親方は五六十から三四百名の漁夫を頤使し、自分は自家の旗じるしを立つた立派な建て物に住まひ、勝手氣儘な贅澤三昧をして、漢等に立てまつられてゐる。丸で大名の樣だ。都會で成功の見込みがなくなつたら、僕等も寧ろあんな僻地であんなに威張つて見るのも面白からうと思はれた。多くは小樽、函館、新潟などの資本家だが、金の威光にまかして、密獵監視の出張巡査や政廳指定の公醫などをも自分の手したの如く使ひまはしてゐる。

藻等は、然し、如何に人間には威張つても、鰊にはあたまがあがらない。その漁場まで荒らされたら、その高價な設備と多大の意氣込みとが無になつてしまうからである。鰊は決して鰊網に來たるものではない。必らず大群を爲してやつて來る。いつも沖合にゐるものがなぜその期に限り海岸近く群來するかといふに、淺瀨の海草に放卵する爲めだ。牝鰊が海藻に放卵すると、牡鰊がその傍へ行つて白子をかける。すると、如何に廣い海面でも、そこらあたりが一面に黄白色に變じてしまう。之を放卵濟みと云ふ。この時が魚の本能的に安心する時であるのに、海水の黄白混濁に由つて魚が陽光を遮らす爲め、驚いてその周圍を狂奔する。ここに建網、刺網の可否論が起るのである。政府は建網本位を取つて、刺網は魚族の保護によくないと主張してゐるのだが、刺網論者に云はすと、建網こそ卻つて魚族の繁殖を妨げるわけになる。と云ふのは、建網の手網がミゴ縄製であるから、海中にあつて光澤を放つ。魚はそれに怒れてまだ放卵しないうちに、方向を轉じて散逸しやうとして、それが多く常設の建網に這入つてしまう。然し、刺網は放卵後の狂奔に乘じて投入されるものであるから、その魚は獲つても、繁殖に必要な卵は取らないといふわけだ。この問題は、今では、實際の魚族保存を目的としての議論ではなく、建網業者と雜漁者との間の利害的、政治的問題になつてゐて、つまり、金力があつて、運動に巧みなものが勝つてゐるわけだ。

樺太に於けるわが國人の漁業は、その初め、北海道の利尻島が根據であつた。利尻は北海道の西北端、宗谷海峽のはづれにあり、野心ある漁夫等のさらに地を覘ふのにいい地勢を持つて居た。して初めてわが國人に占領された露領は樺太西海岸そばの海馬島だ。ちひさい島だが、そこに一時漁業家の一獨立政府が開かれた。今は小樽で落ちぶれてゐる志田某氏がその島王たる權威を振つてゐた。

然し樺太が日領になるまでは、西海岸に餘りひらけてゐなかつたので、露人はおもに東海岸に手を盡してゐたらしい。それが急にあべこべになつたのだ。現今では、東海岸には宿屋のあるところが二三ケ所よりないさうだが、西海岸にはマオカを初めとし、ノグサン、トマリオロ、クスンナイ等、おのおの二三軒から五六軒の相當な旅館が維持されてゐる。して、船の便も亦こちらの方が都合に自由で、頻繁だ。然しそれがさうでなかつた日露戰爭時代には、幾多の賊船が出されて、海馬島でなければ、東海岸へまはつたものだ。して遺利がなくなつた頃、漸く西海岸に目を付け出した。マオカにも、海馬島政府の落ち武者等が集つて、一小政府を建設した。それを日本倶樂部といふ。その頃、露人並にアイノ人がそこに多くゐたのだが、露人は、わが國人の侵入を防ぐ爲め、義勇兵の一隊を組織して置きながら、それに兵糧を供給することが出來なくなつたので、その兵隊の爲めに却つて北方へ追ひ拂られてしまつた。そのあとを日本倶樂部員が占領した。日本兵が到着するよりも以前のことである。

漁業並にその頃の漁頭と漁業家とは、つまり、海賊であつたのだ。東海岸で失敗すれば西海岸にま

はり、西海岸に遺利がないと見れば再び東海岸をうろつき、模様ならまた北し、一寸のほつ端、或はさき、磯舟などを漕いで、深く陸地に入り込んだ大膽には驚くほかはない。郡司大尉がカムチャツカで捕虜になつたのも、海賊に出かけた失敗の結果だ。カムチャツカに於けるシーキンダ會社の倉庫に、ラッコ、その他高價な毛皮を澤山藏してあることは、わが國人の皆でよく知つてゐたところであるから、そこに最も近い占守島の大尉が先づそれに氣付いたと思はれるのは自然のことでないか？然しそれは捕虜になつて失敗に終つた。ところが、函館の或船持ちが第二回の冒險を企てた。それは途中で暴風に遭遇し、難船をして、いのちから〴〵歸つて來た。してまた第三回の冒險家某が行つて、漸くその寶の倉庫を開らくことが出來たのだが、渠は得意の餘り、公公然として船を小樽の港につけたから、そのすべての勝利品は密獵品と見爲され、官憲の爲めに悉皆沒收されてしまつた。

露國の領海へ早く行つたものは、ひそかに大利を占めたさうだが、後れて行つたものには、大きな遺利は殆ど全くなかつたので、手當り次第に露人の家具など盗んだり、漁網を泥棒したりした。なかには、燒け半分に海岸に積んである昆布を分捕し、そのまゝでは嵩張るので、歸國の後沃度を分析さすつもりで、わざ〳〵灰にしてから運んで歸つた。然し樺太の昆布には沃度分が少いので、さッぱり馬鹿を見てしまつた。僕のとまつてゐた旅館の主人なども海賊船の船頭であつたさうで、當時、中ノトロ岬方面に行つて仕事をしたが、ガスの爲めに船の方向を失つてしまつて、困つた。まご〳〵してゐ

るうち、自分の船の直ぐさきに大きな軍艦が現はれた。敵艦に相違はないから、捕はれてはと驚きあわてたが、それが幸ひにもわが國の偵察艦であつた。その時のあわて方ツたらなかつたと、今でも主人がその同行者の一人にからかはれるのを、僕は目の前で聽いたことがある。

隨分滑稽もあつたらうが、わが國人の大膽なのに、僕も頼母しく思ふのだ。東海岸の海豹島には、露獨兩國人組合の捕獸會社があつた。して軍艦が來て、いつもそれを保護してゐた。然し、それにも拘らず、わが國人はその監視艦に見える範圍までも乘り込んで行つて、ラツコや膃肭臍の密獵をやつてゐた。見つかれば直ぐ敏活に逃るのだが、大砲を打たれて逃げそこなつたのもあるさうだ。

樺太の殘留露人

露西亞人の孤立的に日領に殘つてゐるのは、ところどころにあるらしい。女が少いので、四名の男子が一妻を共有してゐるのもある。然し、西海岸の北方ナシといふところには、殘留露人の十一家族・六七十名の一部落がある。渠等は露領へ引きあげても、生活に變りはなからうから、居慣れたところにとどまる方がいいと云つてゐるが、歸化を許されないので、わが官憲はその處分法に困つてゐる。渠等はすべて兇狀持ちの流刑者並にその子供で、無學文盲のどん百姓だ。すべて、ロスケ小屋と稱する横丸太建ての家に住み、ペチカといふ粘土築用の暖爐を用ゐ、大抵は食堂も、寢室も、應接間も同

じ室を使ふのだ。男子は靴を穿くが、婦人並に子供はいつも跣足で市中を往來する。冬季間でもさうだ。露領時代には、寺子屋ぐらゐの學校もあつたし、教會もあつたが、今はそれらがなくなり、且教會堂がナヤシ支廳になつてゐる。

この部落には、露人と云つても純粹露人の外にアルメニヤ人、ポーランド人なども居る。露人は太古の民と同様、分業の法を知らないのではないが、行ふことが出來ず、獨りで牧畜もやれば耕作もやり、バタも造ればパンも製する。男女共に酒に強いのを好み、占領當時の如きは、大道によッつぱれて、うん/\苦しむことなどは珍らしくなかつた。煙草もわが國のは木ッ葉をいぶす様で、うまくないと云つてゐる。以前は強酒ヲツカと露西亞煙草とをアレキサンドルから輸入してゐたが、今回、樺太に稅關が設けられたので、一旦、大泊りを經てからでなければ手に入らない不便があり、又代價が高くなつたので困つてゐる。露人は赤い色を好む爲め、耕作に從事してゐる男子の赤服が、耕作地でよく目につく。つまり、ホワイトシャツの代りに赤地の更紗を用ゐ、夏にそれにヅボンで百姓をするのだ。その日の仕事をやめた夕かたには、家族は家毎に門そとの板壁にもたれなどして、睦じさうに語り合ふ。日曜と教祭日とには、それでも、仕事をやすみ、相當な衣服を着飾つて歩いたり、酒を飲んだりするのだ。

僕等はレーフといふポーランド人の家族を訪問して見た。牛と豚とを飼つてあつて、農牧を兼業

し、冬になれば。熊や貂を取るのだ。たツた二室の中に、老人夫婦の外に、子息二人とその若い女房等と、この三夫婦の子供と、十二三人の家族が住んでゐる。老爺は十五年前、アレキサンドルの港から出て來たもので、丸で無教育だ。何か讀むものがあれば見せろと云つたら、聖書の古びたのと宗教上のパンフレトらしいものを出して來たが、學校のあつたときは子供が少し讀んだだけで、その他は誰れも分らないと答へた。それでも、マリヤ並に耶蘇の肖像畫が居間の兩隅にかざつてある。居間と云つても、親は寢臺に上るが、子供はすべて板の間に寢るのだ。その板の間を靴またはどろ足で歩くのだ。犬や庭鳥、ほうツて置くと豚までも、あがつて來る。

室の中央に搖籃がつるしてあつて、二歲になる子を入れて、その母——若い美人であつた——が『バイバイ』とゆすつてゐた。それが泣き出すと、そこから抱き取つて母は板の間に足なげ出して愛しらつた。婦人はすべて帽子の代りに風呂敷見た樣なものをかぶつてゐる。多少の慰安になるのだらう、手風琴を備へてある。また家族がいつか取つた寫眞や、マッチの箱から剝ぎ取つた商標繪などを壁に張りつけてある。淺草公園の安ツぽい繪ハガキもあつた。漢詩を二行に書き下だした掛け軸を額の如く横に張りつけてゐたさうだが、取り去つたのか、その時は見えなかつた。無學な主人ではあるが、露西亞風の熱烈な歡待ぶりは、語を解しないものにもその半ばを了解せしめた。渠は移住當時の獨力開墾から自慢話を始め、自分の飼育した馬がアレキサンドルで五百圓に賣れたむかし話をやつて

ゐるかと思へば、直ぐ近頃のことに轉じて、日本人の陸兵があばれて來たのを、銃を持つて追ツぱらつた喧嘩ばなしになつてゐた。やがて自分の子が取つて來た熊の皮を二枚出して來て、室一杯（八疊敷）にならべ廣げ、その上に寢ころんで見せ、一枚五十圓なら賣らうと云つた。老爺の孫がまたその上に寢ころんだのを、老爺は起きてたはむれに卷きくるんでしまうと、その老婆並に他の家族のものはすべて一齊に笑つてゐた。僕等の一行はその皮二枚を四十五圓で買つた。日露戰爭時代の露國石版刷が二三枚あつた露探で淸國から秘密をもたらし得た十三歳の少年の行爲を書いてあるのと、一靑年士官が日軍の包圍攻擊を受けて奮戰する繪とを、僕等は面白いので、分けてくれないかと云つたら、子供に見せて說明してゐるから、やれないと答へた。露軍がたがどれもこれも勝つてゐるのが面白かつたのだ。黑パンとバタと紅茶とが御馳走だ。老爺は細長いうすの樣な物を持つて來て、それでパクをつきまぜる眞似をして見せた。家族のものらは皆そばで大笑をしてゐた。美人なる若い母は僕等が初めて這入つて行つた時、僕等一行中の最も脊高いのを指さし、「ロスキイ、ロスキイ」と冷かした。ほんとに、ロスケの如き脊高童子であつたからだ。この部落中の露人は三四年間に一本の手紙も本國の方へ出したことがない。

また、本國から手紙の來たこともない。然し、或時その一人が一度本國へ出した手紙の意味を飜譯したのを見ると、意外に無邪氣と云はうか、實に僕等の想像にも及ばないことを書いてあつた。乃

ち、その文中に樺太はいいところで、氣樂に暮せる。丸で天の樂園の様だから、お前達も早く殺人罪でも犯して、ここへよこして貰ふやうにしろとあつた。

一ケ所、露人がライ麥を搗く風車があつた。

樺太の花植物

樺太の花植物を擧げて見ると、四月末から咲くのに福壽草、やちぶき、などがある。五月に這入つて、えんごさく、きばなのあまな、ねこのめ草、ふき、水芭蕉、一りん草、二りん草、ひめゐちげ。六月になつてこけ桃、ごぜんたちばな、りんね草、（この三種は樺太獨得とも云つていい）わすれな草、すずらん（この種もわざ〳〵そこから內地へ送られる）山しやくやく、石竹、金ぼうげ、えぞかんざう、樺太にんじん、しようぶ、ひめすゐば、せんだい萩、いかねばら、黑ゆり、いぞつつじ、熊谷草、あつもり草。七月には、えぞにふ（さく）、野ゑんどう、ぶし、鹿ぎく、濱たす、白よもぎ、おほいたどり、おほやまふすま、ばいけい草、車ゆり、山ゆり、野あやめ、北見はたざを、裏白きんばい、ぶうらふ、からまつ草、おほばだいこん、ぼうな、おほばしもつけ草、（俗に誰が袖か）、しらたま草、やなぎらん、こめがや、草ふぢ、あざみ（えぞのきつねあざみ）、くろーばー、七つ葉、金みづひき、くかい草（虎の尾）などだ。

樺太には、平地に高山植物が多く生えてゐるのだ。また稀に發見された草花が幾種類もあるさうだが、まだ命名されてゐない。それらは、今、札幌の農科大學で專門の教授が研究中だ。

氷上の舞踏會

樺太にゐたから、氷の話をして呉れろとのことだが、今、僕が樺太の話をしたとて別に讀者を涼しい感じを起すわけのものでもなからうと思ふ。

外國なら、アイスヲータ（氷を融かした冷い水であるから、わが國の氷水とは違ふ）を料理のあとで飲ましてくれる。そのアイスヲーターなり、わが國の氷水なりを飲んでゐる時節には、氷といふものが涼しい感じを與へるだらうが、寒いところにある冷い物は、夏期中に雪の降る芝居を見せる樣なもので、矢ツ張り、冬の感じが出ないに決つてゐる。

樺太にゐると、夏でも、袷せ羽織は必要だ。東京が百度近い暑さだといふ報知が來た時でも、日中、僅かに一二時間が八十度を少し越えたくらゐで、夜になると、寒暖計は直ぐ五十度から六十度の間に落ちてしまつた。

どこに行つても、人家のあるのは海岸ばかりだが、如何に暑いと思つた日中に海を見ても、海水浴をして見ようなどいふ考へは起らない。僕も、去年の夏はあちらで暑さ知らずに過したので、東京に

於ける今年はもう暑いのに閉口してゐる。

さうかと云つて、樺太は夏でも氷が張つてゐるのではない。九月に這入ると、やがて雪が降り出し、段々それが七尺にも、八尺にもつもる。その上から〳〵になるので、特別にいい坦道が出來、夏よりは却つて交通に自由で、その坦道をアイノの犬橇が走るのである。

さうなると、マオカの不凍港を除いては、どこの海岸も二哩、三哩の沖まで凍つてしまう。北海道に面するアニワ灣の如きは、大泊――もとのコルサコフ――を起點として、シレトコ、ノトロ兩岬の鼻まで、直徑殆ど八十哩の間が氷にとざされてしまう。つまり、それだけ、臨時に、氷の坦の立て地が出來るのである。その上を官人などは馬車に乘つて驅けまわることが出る。

わが官人の冬籠りの樂みはそれくらゐのものだが露西亞時代には、なか〳〵盛んなことをやつたものだ。全體、樺太の露西亞人等は、夏の間は精出して働いて置いて、越年時期は、どうせ仕事が出來ないのだから、遊ぶことにしてゐた。して、わが國人の樣に引ツ込み思案の計劃ばかりをしてゐないで、共同娯樂に日を送つた。

けふは甲家の催し、あすは乙の屋敷と、頻りに御馳走の卒を招き合つた。それが大きな園遊會ほどになると、白皚々たる氷雪の大平原に出て、そこにかがりを焚き、かがり火の間をすべりつつ幾多の男女が相携へて舞踏にその夜を明すのである。

氷上の雑踏會――こんなことは夏やることが出來ないと同様、たとへ冬でも、暖國自身である國の、けちな我が國人には、永久に望めないことであらうか。

樺太の女

樺太の美人の話をせよと頼まれたのだ。然し之を書く前に[illegible]取り消しを出して置きたい。この雑誌でいつか僕を色情狂だと称し、僕自身が何とかいふ醜行をなしたといふ記事があつたが、あれは新聞の三面的記事と同様、事實を冒瀆した筆法である。

これで取り消し文は濟んだ。さて、美人と云つても、必らずしも本筋の意ではなく、何でもない女のことを語つたらいいのだらうと思ふ。ところが、樺太は北海道と同様、生粹、固有の女は少い。皆内地――たとへば、函館、青森、南部、山形、新潟など――からの渡り者か、北海道から更に渡つて來たのが多い。素人もさうなら、苦勞人も亦さうだ。固有なのはアイノのメノコばかりである。別にギリヤーク人、オロチョン人の女なども數へれば數へられるが、あんまり穢いので、話に入れる必要はなからう。

メノコにはなか／＼いいのがゐる

ふさ〳〵した黑髪を肩のところで切り放し、鉢巻きの様なものをしてゐる。物を運んだり、兒をしよツたりするには、籠またはふくろの様な物に入れて、脊にまはし、それについた紐を兩方の肩から取つて額に當て、額に當るところは幅廣くなつてゐて、そこに重みを受けるのである。概して體格はいい。一つ惡感を催すのは、上口びるの入れ墨である。人はその入墨を女房になつたしるしだと云ふが、さうには定つてゐないのだ。それも、萬事が日本流になつて來た今日では入れないことになつてゐる。從來の習慣として、まだ男を持つてゐない女は、腰にさげるマキリ（小がたな）が鞘ばかりで身が入れてない。男を持つて、初めて身の這入つたマキリをさげるのである。樺太の開祖オケラと松前侯との間に最古の契約をしたことがある。それは日本官吏が同島へ行つて越年する時は、必らずアイノのメノコ二人を左右に寢かすといふことだ。これは強ち助平根性から命じたのではなく、さうして寒氣を防いだのだ。

　して、近頃の年若いメノコには、露西亞人の血が確かに這入つてゐると見えるのも稀れに見受けるが、日本人の混血兒らしいのが隨分ある樣だ。渠等は却つてそれを喜ぶのだ。少しでも日本人に近い關係を持つのを――特に若い女は――得意とするらしい。父が日本人であるならなほ更らのこと、自分の亭主がまたそれであるのを非常に望みとしてゐる。劣等人種の性情は、最も弱い婦人に最もよく顯はれるものだ。で、同人種間の結婚は成るべく避けたいといふのだから、機會さへあれば、一夜で

も彼等人種の生を續けて、それを一生の思ひ出にして置かうとする。だから、非常に濃厚なもの丈、
して、

渠等の戀の理想

を順序づけて見ると、第一に番屋の親方（乃ち、一漁場の主人）、次ぎに番屋の帳場、次ぎに船頭、次ぎに人さきに出て働く若い衆だ。して、その一生の思ひ出は、淋病や梅毒を受けて、自分等の人種の破滅を急がすことにもなるのだ。

僕が或部落へ足を入れた時、アイノの一少女が、佛さまにあげると云つて摘み取つた百合とあやめを手にして、家に歸つて行くのを見た。僕は、その時、つくぐ\、その少女はいつまでもあの無邪氣である方が幸福だらうにと思つた。色氣づくに從つて、自分と自分の子孫とを滅亡に急がすのである。

樺太占領以前の露西亞人

の狀態も面白かつた。露人は、わが國人とは違つて、外國流の共同娛樂を知つてゐた。夏の間は精精働いて、越年時期は遊ぶことにしていたから、海上氷結の白皓々たる大平原で盛んに夜會を開くこ

となどがあつた。けふは甲家の催し、はすは乙家の順番と――して、かがり火の間をすべりつつ、男女相携へて、舞踊の徹夜をしたのだ。本邦領になつてからは鰊の大漁で金を儲けたとしても、こせこせと故郷へ持ち歸るので、定住者間にそんな共同的豪遊の出來るものは一人もなくつた。また金を使ふことはあつても、自分ばかりの樂みで、共同的なことはしない。海に靈があるものなら、日本人のいくじなしを笑つてゐるだらう。その代り、わが邦人は男女間のことに割合に几帳面だが、露人は自分の女房が色男を持つなどを平氣でゐる。

僕が國境を越えて、露領ピレオに、そこのボルショーチャンカ（大官）なる林務官をおとづれた時、その人はわが國の官憲と交渉事件の相談にペテルスボルグに行つて留守であつたが、海岸でその人の細君と談話することが出來た。細君は亭主の下役なる技師と散歩をしてゐたのだ。それが色男であつたのを後で聽き知つた。亭主はただ普通の生活費を供し、色男は女の贅澤費を出すのが習慣になつてるさうだ。露領樺太の主府アレキサンドルに行くと、二三度酒を飲まして懇意になれば、大抵の細君は身を許すさうだ。或邦人がアレキサンドルで露國の或官吏の家にとまつた。すると、細君を客に侍べらして置いて、主人は小兒を抱いて外出し、おそくまで歸らなかつた。翌朝勘定をした時、まだ一つお前は忘れたものがないかと聽いた。それが細君に對する報酬と分つたので、その男は、眞面目で、關係しなかつたのだから、ないと云つたら、さうかと云つてすんださうだ。

日本領には、現今、露人の住民は、ナヤシといふところに六七十ゐるほか、ゐない。軍政時代に大泊、元のコルサコフに、年頃の娘二人と共に一人の露人が住んでゐたが、娘の[illegible]を養ふことが出來ないのをいつもかこつてゐた。そのうち、姉娘がわが國の軍人と關係し、権勢を受けて[illegible]六日に有つたことがある。殘留露人の女と子供とは、家にゐても、外に出ても、いつも徒跣である。ナヤシには、僕等が「ジエムの看板」と命名して置いた露國美人が一人ゐる。それを、その亭主の父が携へ去といふので、家庭におほ騷動が起つたことがある。何と云つても、僅か二室ぐらゐの露國小屋に三組の夫婦小供を入れて十五六名もゐるのだから、そんなことも起りがちなのだ。僕等は、時化の爲め、四日四晩もその地にとどまつてゐたから、露亞西更紗でシヤツを縫はすと云つて、その美人を呼び寄せ、はだかになつて、寸法を取らしたことがある。母もついて來たので、酒を飮ましてやらうとすると、醉つ拂つて返れば、おやぢにぶちのめされるといふことを、その手で頰ツぺたを打つ眞似して答へた。すべてどん百姓だから、男でも女でも、強い酒（日本のは燒酎だ）を一本でも二本でもあけることが出來る。して、大道に醉ひつぶれて、うん／＼うなつてゐることがある。

ナヤシは西海岸だが、それと同じ緯度の東海岸、幌內川の流域には、ギリヤーク人、オロチヨン人、サダンース、トングースなどがゐる。

ギリヤークの女

は面圓く、扁平で、髮一すぢを垂らしてゐるか、然らざれば、後頭部に結髮して、大きな耳輪を箝めてゐる。オロチョンの女は、男もさうだが圓面扁平だ。女に辮髮もある。人種が少數で、血族結婚が多いから、畸形兒や病身者が多い。殘留露人のうちでも、殆ど孤立的に住んでゐるものは、女が見つからないので、男子四名で一妻を共有してゐるのがある。オロチョン人の女はトナカヒ（馴鹿）と交換されるので、馴鹿が多いだけ女の價値があがるのだ。そのまた裁判が面白い。或男が他の男の妻を誤つて銃殺したが、それが酋長のさばきで、かう決着した。銃殺者は、銃殺された女が結婚の時受けた馴鹿の數を被害者の夫に與へ、それと同時に、銃殺の妻をも與へたのだ。

今年、また悲慘なことがあつた。オロチョンの酋長ミキポリといふのが、妻を出して、ナポリといふ少女を入れやうとし、酒の勢ひを以つて、それを妻に相談した。妻は聽かないので、酋長は妻を艀に乘せて幌内川の眞ン中に浮べ、離緣を承知しなければ、かうすると、脅迫的に妻を水中に投げた。無論、殺す氣ではなかつたのだが、流れが激しかつたので、再び引きあげることが出來なかつて、酋長も俄かにそこで醉ひが醒め、身を投じて浮き沈む妻を助けようとして、力が盡きて、二人とも死んでしまつた。すると、少女ナポリも亦それを聽いて殉死した。

本邦人の女

になると、苦勞人のことを話すより仕やうがない樣に思はれる。それも初めは實に珍らしかつたのだ。露國人が退いてわが國人がそれに代つた時代などは、實に滑稽なこともあつた。女が稀んまたいので、一ごけ（淫賣のこと）を買ふのに、一週間も前から申し込んだり、高等官や判任官は官等順で行つたりして、而も一回數分間に五兩や十兩も取られた。數千金を懷中しながら、衣食住の不自由に苦しみ、木の根を枕として夜を明したり、鑵詰の明き殼に數十人が爭つて一條の湧き水を受けて飮んだのはその時代だ。

これは大泊のことだが、西海岸のマヲカでも日本倶樂部といふちひさな獨立政府が建つてゐた時代はさうであつた。それから、明治三十八年、さきの熊谷事務長官の婿に當る若壯士（少し馬鹿であつたさうだ）が、眞岡民政支廳長として、都丸に乘つて來た時など、その一味徒黨と共に種々の野心と陰謀とを授けられて來た。妾を用意して來たのもあるし、御用商人をつれて來たのもあるし、料理屋、女郎屋、ごけ屋を開始するものを同道して來たのもある。この時をマヲカの暗黑時代と云ふ。その代り百圓札が人の手から手を飛んでゐたので料理屋と女との最も繁盛した時代だ。して、まだ軍政時代の餘勢があつたから、土木課長が一夜二十兩の約束で、或ごけ屋の女と飮んでゐると、戀敵の憲兵軍曹が這入つて來て、『この生意氣な奴め、斬り殺せ』といふ騷ぎに、課長は取るものも取り敢へず、這ふ〳〵の體で、裏口から逃げ出した。

その時代より少し前に、大泊に一人の有名な老ごけがゐた。なか〳〵勢力の強い年増で、自分獨りで三日三晩、碌に食事もせず、つづけざまに別な客を取つたり、二十日間も殆ど眠らないで、その業をつづけたりした。之を占領ごけといふ。邦人が占領して行くところへ從つて行き、段々北へ北へと進行したからである。また

四ダースごけ

といふ。獨りでビール四ダースの箱を脊負つて、豐原からマヲカに至る山道十九里を歩み來たり、マオカでまた人手に入らずの獨りごけ屋を初め、數百圓の收入があつたが、そこが女は矢ツ張り女だ、或軍曹に惚れ込み、それまでに得た利益を全くしぼり取られてしまつた。それで初めて男といふものが恐しいといふことを知つたさうだ。

かの女は、それから、また北の方へ進んで行つた。その賣淫所〳〵が開らけて行くに從つて、自分よりも若い、いい女が入り込んで來るから、自分の樣な年増を買ふものがなくなるからである。現今では、ナヤシに於て、自分がごけ屋の主婦となり、四五名の若い女をやとつてゐる。圓ツこく肥えてなか〳〵格腹のいい女だ。當年取つて四十六歲になつたらう。自分の畑を自分で耕してゐるばかりでなく、餘暇を以つて、殘留露西亞人の耕作の手つだひをもしてやつてゐる。またなか〳〵氣前もので、

昨年まで有婦の男と一緒になつてゐたが、その男の女房がやつて來たので、すツぽり手を切ると同時に、その夫婦に衣物やら歸國の旅費を拵へてやつた。してまた直ぐ跡の男に出來たらしい。僕等に一夕かの女を酒席に招き、身の上ばなしをさしたが、その實、人のいい、しほらしい女で、物語り眞に入ると、聲をあげて身づからむせび入ることもあつた。

　どけ屋と云へば、露領ピレオに一ケ所、邦人が開業いてゐる。そしてまた、五六名の本邦婦人がゐる。思つたよりも血色がよく、いづれも肥えて、ぴん／＼してゐる。相手はすべて、その山に働いてゐる露人並に淸人の鑛夫、木樵、木挽などだ。僕等が巡視に行つた時は午後三時頃であるが、露淸人が十數名、丸い白い玉（番號札の樣なものだらう）を持つて洋酒をあふりながら順番の來るのを待つてゐた。渠等は二年三年も山で貯へた金を以つて山を出て來ても、いつのまにか捲きあげられ、歸國の旅費もなくなり、靴まで脫いでしまつて、跣足でアレキサンドルまで二十五里の道を歸るのだ。殘酷の樣だが、國と國との間がらになれば、何もそんな弱い氣を起す必要はない。あるひは私に奬勵してもいいと思ふ。一回一圓五十錢、一時間三圓、一夜八圓を取るさうだ。女もゐんなに強健でゐられるなら、さう可愛さうでもない。

邦領樺太の藝者

には餘りいい女がゐない。女郎やごけに却つて美人がゐる。それは、商賣女はすべて一樣に檢黴をするからである。北海道でも元はさうであつたが、藝者は二枚で鑑札ある。ノダサンといふ所には、某子爵の娘が故あつてごけになつてゐるのがあつた。各種の女は、一昨年來の不景氣で、餘り繁盛してゐない。女郎のあげ代も半額になつたのださうだ。藥等は毎日宿屋へ遊びに來て、なじみの客やかはつた客を發見しようとしてゐる。マオカの旅館には、僕、最も長く滯在したが、隣室に京都の呉服屋がゐて、一名の藝者お何といふのに日夜入りびたられてゐた。その癖、それを占領してゐるわけには行かないのだ。時時悋氣喧嘩が初まる、その仲裁者は僕だ。餘りうるさいので、或時、お何のなじみの或漁場持ちが來た時、かの女がそれに自分の家でおほ散財をさせようと探してゐるのを、僕は藥の飲んでゐるところを知つて知らない振りをしてゐた。或夜、遲く、大道で、「岩野さん、岩野さん」と呼びかけるものがあつた。お何だ。して、今晩こそ藥のゐどころを教へてくれ、探しまはつてゐるのだからと云ふ。餘り可愛さうだから教へてやると、そこから引ツ張り出して自分の室へつれて行つたのだらう、午前二時頃になつて歸つて來て、僕の枕もとに正宗の瓶——お禮のつもりだらう——を置いて、隣室へ這入つて行つた。

北海道から樺太へかけて、淫賣のことをごけ、女郎のことをがの字といふ。ごけとは後室から來たのだらう。どこかで後室が困つて、その多くが淫賣になつた所があつたのだらう。がの字とは北海道

へかせぎに行く女郎がもと雁の歸去と同じ時期に歸去すことがあつたから出來た名ださうだ。

海島の婦人生活

樺太の東海岸で、北緯四十八度から四十九度の眞ン中あたりの海中に、一つのちひさい島がある。テルペニヤ岬の南端に近いところで、周圍は僅かに一里にも足りない。露人等はチユレニもしくはロツペンと名づけてゐたが、わが國人は海豹島と云ふ。

この島は、夏に向つては、膃肭臍が群居してゐる。して、禁獵になつてゐる。もし密獵船でも來ると、砲彈によつて退却されるのだ。獸兒の繁殖を計つてゐるからである。

去年などは、雌雄と大小とをかまはず數へて、千八百五十頭ゐた。して、もう、いい加減殖えたから、これを一段落として、入札か、何かで請け負はし、捕獲してしまつてもいいではないかといふ說が盛んであつた。

毎年一定の時期が過ぎれば、どこかへ行つてしまふ。して、また、翌年の同じ時期に集つて來る。然しその集つて來るものがすべて前年のと同じのであるか、どうか、よく分らない。それを試驗する爲め、渠等は獸の耳の一端を切り落して置いたこともある。然し遠口鏡で見るのでは、實際に、その耳の切れたのが來てゐるのか、どうだか、よく分らない。

旅行かた〴〵時々、そこへ行く人などは、わざ〳〵海獸のゐる一間まぎはまでも近つて見ることもある。五尺も六尺もある獸はうなるのだ。それは、人をこはがつてだが、人はいつ獸に飛びつかれるかも分らないので、ちよつとの間でも、油斷は出來ない。不斷は、決してそんなにそばへ人が行かない。

この海獸の習慣は多妻主義だ。また、共妻主義だ。然しその自分の關係ある牝獸は、他のものには少しでも手をつけさせない。ちやんと決つた勢力範圍がある。して其の範圍を擁護するには、牡はその一身を犧牲にして、一生懸命になるのだ。

牡一匹で牝を四五頭もしくはそれ以上も引き受けてゐる。また、牝二十頭以上を牡三四頭で共有してゐるのもある。して、牡の勢力範圍に入り來たつて、牝を犯さうとするものがあると、その當の自分等の子であつても、決して許さない。直ぐ喰ひ殺してしまうほどに神經が過敏になるのだ。

して、面白いことには、人間の社會と同じ樣に、なまけ者もあれば、獨身者もあり。また、どの家族からも相手にされないものもある。そんなものは、すべて他とはかけ隔つて、自然寂しい日を送らなければならない。考へて見ると可哀さうで人ごとではない樣な氣もする。ところが、その獨身者のうちには、なか〳〵いたづらな奴があつて、ただ寂しい日を送るだけでは滿足せず、出來心を起して、他の細君を横取りしようとする。かう云ふいたづら者に限つて、また、なか〳〵賢いもので、牡の强

さうなればわれ／＼の範圍へは近寄らないで、必らず、弱さうな、病身らしい、もしくは頓馬らしい牝の家族へ向ふのだ。

それでも、いたづら者がそれと目ざした牝のゐるところへ一たび飛び込むと、一大騷動が初まる。

『何しに來たのだ？』

『一匹おれによこせ。』

『いやおれの物だ。』

『なんだ！そんな朝鮮人見た樣な、意久地なしの風をして――』

『馬鹿にするな！』

『この野郎、力づくで來い！』

まアかう云つた風のつかみ合ひになる。目的は牝にあるのだから、力の強い方がそれを喰はへて走らうとする。

『さうはさせない。』と、また一方が喰へ返す。情けないことには、兩者とも、手の樣なものはあつても、手だけの働きはないから、口で奪ひ合ひをするのだ。

『よこせ。』『やらない。』で、激烈な引ツ張り合になると、その間に、段々齒のさきが牝に喰ひ入つてしまつて牝は死んでしまふ。勝ちはどちらにあつたにしろ、勝利品は血みどろの亡き骸に過ぎな

い。

女性を保護するのは、獣類でも、なか〳〵六借しいものと見える。不斷でも、さういふ心配をしてゐなければならない上に、八月頃、子をそだてる時になると、牝の心配と奔走とは非常だが、その牡の熱心と來たら、海に這入つて自分の餌をあさることもしないで、その身が見るかげもなく痩せて行くのも知らない。ただ一生懸命に自分の家族を保護する爲め敵に隙きを見せない樣に努めてゐるのだ。

さういふ家族が、僅か十二丁ばかりの海岸の砂上にいくつにも別れて陣取つてゐるのだが、この島を住所として、また海馬(とど)と云ふ別種類のいたづら者がゐる。膃肭臍よりは、ずう體も餘ほど大きい。去年は五十頭ばかりゐた。それがぼうッ〳〵とうなり猛つて膃肭臍をいぢめ拔くのだ。監視者は折さへあれば、この大害物を銃殺するのだが、うか〳〵發砲して、その音の爲めに膃肭臍の方を島から逃がしてしまつては困るので、かけ隔たつた海中にでも首を出してゐる時を見計つて、うち殺すのだ。

砂の上では、膃肭臍どもは海馬を敬して遠ざけてゐる。渠等は、海馬の周圍には、決して寄りつかない。それをいいしほにして海馬はまた一島の王族の如く意張り散らし、膃肭臍どもを十間以外にすさらして、自分等はその中央に横たはり、頻りにぼう〳〵うなるのだ。

海馬も、膃肭臍も、冬分になると、どこかへ行つてしまふ。して、その跡へ、海豹（アザラシ）の群がやつて來て、この島を一時占領する。海豹は寒いのを平氣だが、膃肭臍は冬は暖い方に向ふ。どこへ行くのか分らないので、その跡を汽船で追ひかけて見たこともあるさうだ。すると、すべて東南の方へ向つたが、途中で二手に別れ、一方は直ちに南太平洋に向ひ、一方は宗谷海峡を日本海の方面に入り、津輕海峡からまた太平洋に出で、消えてしまつたさうだ。

それがすべて、少くとも、それと同じ群れのが、毎年、春にたれば、再び海豹島に歸つて來て、再び家族的社會を形作るのだらうが、僕が海豹島の婦人生活と云ふのは、必らずしもそんなことを皮肉つたのではない。この島に於て、不斷、膃肭臍を監視してゐるひとりの婦人がある。その婦人が、たとへ所天があるにせよ、またないにもせよ、かういふ寂しい島に於て、かういふ賑やかな膃肭臍の家族的生活を見てゐる心持ちはどういふ心持ちであらう？これを讀者に想像して貰ひたいのだ。（明治四十三年七月十五日）

樺太の思出

一

山本露滴君。

君は僕に成るべく樺太に關する事を書いて呉れと依賴した。が、去月の中旬來、君も既に東京の諸新聞を見て承知してゐると僕は思ふかの事件の餘波で、來客やら辯駁原稿の執筆やらでまことに暇がなかつた。今回僕が僕の妻と別居して、他の婦人と同棲することになつたのが世間に意外の問題となつて、東京の大抵の新聞ではいろんな風に書き立てた。その中には僕の新婦人が、さきに有夫であつて、小い子が一名あるのを見て、無責任にも姦通だなどと書いた。そんな名譽毀損に對してはすべてそれぞれ僕の方に於て訴訟の手續きをするつもりだ。結局、僕の一私事——でなければ、僕の革命家としての社會的因襲打破の事業の一部——であるから、別に心配して呉ないでもいい。

兎に角、そんなことで君の依賴の原稿が後れた。さて筆を執つて見ると、——まア、斯うだ——君は現今では樺太日日の主幹などになつて、樺太では威張つてゐられる位地に進んでるが、同島の土地に上陸し、同島で事業を初め、(同島西海岸だけ)の巡遊や調査をした點に於ては、僕の方が君よりもさきであつた。

僕が眞岡から七里ばかり北に當るオタトモでの蟹の罐詰製造に失敗して、殆ど逃げるやうに北海道まで來た時は、君はまだ樺太の實情などは少しも知らなかつた。そして、君も札幌に於てかの大雜誌「實業の北海」の創刊に關して大苦心をしてゐた。ところが、僕の事業が失敗した如く、君の雜誌も二三號に於て全敗してしまつた。僕はその頃まで北海道にとどまつてゐたから、君が他に發展の道を思

樂してゐたことは知つてゐた。が、樺太に發展しようとは夢にも氣が付かなかつた。
と云ふのは、當時の日日社長から山野天海氏を經て、僕が同社員を一名東京から周旋することを頼まれたことがあつた。また、君を最後に周旋したのだと云はれる君の先輩たる社員伊藤氏からも、僕が札幌に放浪してゐる頃に、同じことを頼まれた。そして僕はこれを札幌から東京の心當てへ照會して見た。が、そのうち冬が近づいたので、僕も東京へ歸ることになつた。ところが、その必要な社員として、君が僕の札幌出發のあとで行くことになつたのであるとは！

二

山本君。
君は本年の春、僕と東京で久し振りに出會つた時、蟹の罐詰製造に成功したものは今日に至るまでも殆ど一名もないが、その失敗者等の第一人は僕だと云ふ評判だと僕に云つて聴かせた。して見ると僕ばかりが失敗を恥ぢるにも當るまい。その上、失敗者の連中での第一人者であるのは――あまりいい方でもないとしても――寧ろその先見、若しくは第一經驗たるに於て名譽とすべきであらう。
僕が明治四十一年の六月の何日かに眞岡に上陸して見ると、僕の代理として前から來てゐた弟が――慣れない寒さに三月の頃から當つてた爲めだらう――肺炎を起して病院に這入つてゐた。何でも二枚鑑札の藝者どもを取り扱つてた片岡と云ふ院長がよく世話をしてゐて呉れたので、――また、弟は

まだ年が若く、氣が弱かつただけに、僕の顔を見てからずん／＼よくなつて行つたので、――その方は心配がなかつた。

が、オタトモに於ける事業は、既に全く取り返しのつかぬやうた状態になつてゐた。僕が東京から弟と共によこして置いた製造技手と云ふのは僕の從兄弟で、無學ではあるが、この道にかけてはたかたか長年の熟練はあつて、僕の製造所の製品だけは一箱四ダス入り毎に他所の製品よりも五十錢高く買はれた。それはその筈で――無經驗な製造者のゐる他の製造所ではその當時、硫酸紙を必らず中の包み紙に用ゐねばならぬのを、價段が高いと云つて、パラピン紙を使つた爲めに鑵のさびが中身に移つたり、内で工合が程よく行つてゐなかつたので、品が東京まで行く間に腐つてしまつたりした。が、僕のところのは一鑵だツてそんなのは出さなかつた。おまけに、他のとは根本的に違つて、あまりよくない身のところなどは贅澤にも切り取つて棄ててゐた。

技術に於ては申しぶんのない技手ではあつたが、如何にも無學なのと僕の代理として全權を有した弟に從はないのと、經濟のあたまが無いのとが缺點であつた。渠は雇ひ人どもや近所の村人どもにただ親かた／＼と云はれたさに、製品の出來るに從つて、披露の爲めだとか云つて二十箱も三十箱も――自分の勝手に――つかひ物などにしてゐた。

三

山本君。

今では、蟹の出盛りにどの位の相場で行つてるか知らないが、その當時に、百個で一圓二十五錢をしてもオタトモでは七錢であつた。それを百圓なり、二百圓なり、日にこれだけ買ひ上げて自分して行けばよかつたのに、僕の目屆た技手は——たとへば——毎日四百圓を買ひ占めて、その半分たる二百圓は手が屆かないままに腐らせてゐた。そして弟が反對しても、それでははばが利かなくなると云つて從はなかつたのださうだ。

何とか云つて信用の——僕は今その名を忘れたが——そこのおやぢが海賊のあがりだと身づから威張つてるその旅館にとまり込み、帳面を調べて見ると、仕事を初めてから六月の何日かまでに、もう、三千圓のあがり高はあつた。が、製品はすべて人の手に渡つて。而も現金なり、取るべき金なりが殆ど無かつた。多少は技手の遊蕩費にもなつたらしい。と云つても、それは大したところまでは行つてなかつたが——。

僕が最初から漢等と一緒にゐなかつたのがそも〳〵の手落ちだと思つたが、あとの祭りであつた。どうせ取り返しはつかぬと斷念して、僕は弟の看護をしたり、玉突をに耽つたりした。東京での持ち點は八十點であつたのが、毎日何回もやつたので、當時百十點まで突けるやうになつた。

それは兎も角として、山本君、この頃の新聞を見ると、樺太に町村制が布けたり、刺網の許可が出

たりして、同島の住民や雜漁者どもの爲めに結構になつたと思ふ。僕はあの當時に、片手間に東京二六新聞の依賴を受けて、樺太の通信を書き送つてゐた。二六新聞はどうした關係であつたか知れぬが、その幹部がすべて刺網許可主張者であつたので、僕もその意を受けて、建網業者と雜漁者との間の關係や實際に注意した。

僕は全體鰊漁にさうけち臭い制限など――時期に就いても、取り方に於ても――置く必要はないと思ふ、山林の事とは違ひ、海の物を取り盡したツて洪水にはならぬ。鮭なら自分の生れた川へまた子を産みに來るが、鰊はさうきまつてもゐないらしい。鰊が無くなればまた他の事をしたらいいではないか？世界に於ける鰊の有名な産地だツて段々移動して行くのだ。鰊だけがいつまで樺太にとどまるものではない。まして、鰊にはかの膃肭臍の如き外國との間に、誤つた政策からの共同制限の約束などはないのではないか？そんなことにまで干渉するのは、わが國の舊式なけち臭い官僚癖に過ぎぬ。

四

山本君。

僕は自分の事業がいよ〳〵失敗だと見たので、事業を殆ど斷念した時、たま〳〵時の樺太廳第一部長であつた中川小十郎氏と共に同廳の警邏船吹雪丸に乘つて西海岸を國境まで行つたよ。途中の各アイヌ部落、漁場、山林、道路、炭礦、ロスケ村等は一つとして見落さなかつた。同行者は中川氏と僕と

の外に當時の眞岡支廳長乘宮氏と君の社の山野天海氏と中川氏の隨行者と、何でも五六名であつた。

ラクマカの同廳直轄水產試驗場なる物は今どうなつてゐるか知らないが、その時は徒らに大目的にして實際の用には大してなつてゐなかつたやうな――殆ど無用の長物のやうな――處であつた。[illegible]ナイボの伐木林のやうすを見に、海岸から二十丁餘りも奥へ踏み込んで歸つて來た時には、部長を始め皆々船中で衣服を脫して、からだ中の山だに退治をやつた。

ノダサンの北端にある小高い山に名が無いと云ふので、僕等は船中でいろ〳〵相談して、山の形から見て寢獅子山と命名し、これをその土地の人々に告げて置いた筈だが、今日ではどうなつてしまつただらうか？獅子がつツぷしてゐる形であるからであつた。

トマリオロの炭鑛を見た時、驚いたのは事業の順序を轉倒してゐることであつた。石炭を運搬すべき鐵道工事や立派な官宅建築などは、どし〳〵進んでゐたが、肝心の石炭發掘その物があやしいものであつた。第一、第二の礦口がいづれも六七十尺で絕えてゐた。そしてその炭質はあまりよくも無かつた。當時、十三尺層を發見したとておほさわぎをしてゐたのだが、それもその實は三尺層が三つ重なつて、その間に各二尺宛のハサミがあるのであつた。

全體、その時の技師なり監理者なりが如何にも不誠實か不注意であつたよ。着手するに必らずどこの炭礦でも――注意深くすれば――四方とその眞ン中とにボーリングをやつて見るものだのに、一ケ

所露出口があると直ぐ永久にでもつづく炭礦だと速斷したかのやうに吹聽してゐた。僕はその當時既に樺太の炭山は斷層が多いのが缺點だと二六新聞に書いた。

五

山本君。

チラホナイでは、アイノ部落に山田シロクランケと云ふ老人を特におとづれたことがある。家はロシヤ式に太い丸太を横に組んで壁にしてあり、中はアイノの家にして珍らしいほど廣いのだと皆が云つてゐた。主人の床らしい左の間の中央にあつて熊の皮を敷いてあつた。床の端に『警官席』と書いた半紙の半切れが張つてあるので、そのわけを聽くとその頃ここで部落の人々を集めて浪花節を聽かしたのだとのことであつた。

今でも目に見えるやうだが、その部落で僕が十一二歳のメノコに途中で會つたところ、黄色の花と紫の花とを携へて行くのだ。

『それをどうするの』と僕が聽き糺すと、

『百合とあやめ——佛さまにあげるのであります』と答へた。

ウシヨロ灣の主人どもが僕等を出迎へた時は、ちよツと異樣た偉觀であつた。すべて黒びらうどの筒袖で胸をぼたんでとめた、膝までの衣物を着て——これは露領アレキサンドリアから來た品だらう

であつたが、――細い紐をしめてゐた。そして額をずッと剃り込んだあたまの眞ッ黑な髮でふさ〳〵と肩まで垂らし、うわひげも多く、頬ひげ、あごひげ、長いのが、ずらりと海岸に並んでるのを見た時は、それまでに見た部落ではおぼえない寂しさと凄みとがあつた。

男等は銀色の大きな耳輪をつけてるのを誇つてゐた。土人の總代なる司たり日本語を話すのに、宗旨は何かと尋ねると、『神道のやうなもので、萬物みな神』と答へた。

天候險惡の爲め僕等はクシュンナイに三晩もとまつたが、ナヤシに於ては四晩もとまらねばならぬはめになつた。

山本君。

六

當時のナヤシは西海岸を北への最後の都會(?)として、戸數が四十、人口百八十あつた。そのうち、殘留露國人が九戸、六十八名ゐた。僕等は支廳の通譯を連れてロスケ部落を巡視し、レーフと云ふポーランド人の家族を訪問した。老人夫婦の外に息子二人とその若い女房どもと、この三夫婦の子供と。十二三人の家族だ。その癖、部屋と云つたらたツた一室で、そこにペチカが暖爐兼用の竈土であり食堂、寢室、應接間もこの室であつた。

親は寢臺に眠り、子供はすべて下の板の間に蒲團を敷いて寢るのであつた。僕等はその夜の間へ雜

若しくは下駄のまゝのぼつたが、そこの子供もどろ足のまゝのぼつてゐたし。犬や鷄も平氣で這入つてゐた。壁にはその家族がいつか取つた寫眞やマチの箱から剝ぎ取つた商標繪や、東京淺草公園の安ツぽい繪はがきやが張り付けてあつた。マリヤ並にキリストの肖像畫はその居間の兩隅に飾つてあつた。

レーフと云ふおやぢはもう死んだかも知れないが、その時の話で十五年前にアレキサンドルの獄から出て來た者で、どうせどこへ行つても暮しは同じだから、いツそのこと馴れたこの土地の方がいいと云つてゐた。何か讀む書物があれば見せろと僕等が語つた時、聖書の古びたのと宗教上のパンフレトらしいのを出して來たが、子供が少し見ただけでその他のものは誰も讀めないと答へた。

渠は全く無學な者らしかつたが、その熱烈な應待振りは露國語を解しない僕等にもその半ばを了解せしめた。渠は移住當時の獨力開墾のことから自慢話を初め、自分の飼育した馬がアレキサンドルで五百圓に賣れたむかし噺をやツてるかと思へば、直ぐ近頃のことに轉じて、日本人の醉ツ拂ひがあばれて來たのを鍬を以つて追ツ拂つた話になつてゐた。ところでこのおやぢ、自分の息子の女房を引ツ懸けやうとしたので、その息子とつひこの間おほ喧嘩をして死ぬか生きるかの騷ぎであつたことなどは殆ど忘れてゐたやうであつた。

七

山本君。

僕等はそのロスケおやぢから熊の皮を安く買はうとした。熊は自分の取つた熊を、自分で剝いだと云ふその皮を二枚、その室の板の間——八疊敷ばかりの——に廣げ、山で取つた時の手柄話をしながら、皮の上に寢ころんで見せた。一枚で五十圓なら賣らうと云つたのを、僕等の一人たる中川部長は四十圓に價切つたが、話がまとまらなかつた。そしておやぢの孫なる一人の子どもがまたその皮の上をころげまはつて、『これはおぢイさんが山から取つて來たのだ』と自慢さうに云ふやうであつた。

日露戰爭時代の石版繪が二三枚あつた。露探として淸國から秘密をもたらし得た十三歲の露國童少年の勇敢な行爲を書いてあるのと、一靑年士官が日軍の包圍攻擊を切り破つて奮戰するのとな——僕等の目には珍らしかつたので——賣り渡して吳れないかと賴んで見たところ、子供に見せて敎育の爲めに說明してゐるから困ると答へた。

その日は僕等がそこで黑パンと紅茶とを御馳走になつて歸つたが、翌日また同じ家をおとづれた。中川部長は二枚の熊の皮を四十五圓で買ふ爲めだが、他のものはそこの息子の一人の若い細君（十八才であつた）の顏を再び見に行く爲めであつた。ロスケ村中での美人であつたのだ。美人である爲めにその息子のおやぢも多分引ツかけて見ようとしたのらしかつた。

その美人をまた僕等は母と共に僕等の宿にこさせて、洋服を着る習慣のものは皆自分等のからだの

つた。

今のナヤシではどうか知らないがその時のロスケ畑には、青い草の間に白服の女、赤服の男が夫婦幾組にも分れて牧草を刈つたり、刈つた草を返したりしてゐた。一ケ所ライ麥を搗く大きな風車があつた。日本人の癖として、農業と牧畜とを別々にするが、ロスケの農牧兼業——は殊に、樺太のやうなところでは——最も適當なやり方だと僕には思はれた。

八

山本君。

ナヤシのロシヤ更紗で思ひ出すのは君の社の山野天海氏の甚だずるかつたことだよ。渠も僕も同じやうにその更紗を買つた。渠のは白地で僕のは赤地であつた。それから共に眞岡へ歸つてからのこと、渠は僕の更紗、模様が如何にも氣に入つたから取り換へて呉れと僕に頼んだ。僕は本氣で先づ僕のを渠に渡したところ、それツ切りわざと忘れたかのやうにその後會つても僕に渠のを渡さうと云ふ樣子が無かつた。一二度催促したが、何とか言を左右して逃げたので、僕もそれツ切りやつたつもりにした。その代り、僕も同氏から渠の所有だと云ふ小さなロスケ小屋を一つ買ひ取つて、その冬をそこに過して見ようとしたのだが、事業の失敗でおのづと破談してしまつた。

渠はよく勢ひのいいことを云つてたが。船には積よわく、またトマリオロの奥で或川の丸木橋を渡らうとした時などの樣子は。……あの大きな太いからだの爲めでもあらうが、……ぐらぐらと足が立たず、とう／＼橋を渡り切れないので、川の中をかち渡つたよ。

ナヤシのことでは、また僕が雨の中を獨りでぶらついた時、むしろをから傘の形に建てまわしてその中に住んでる夫婦者があるのを見た。よく聽いて見ると、或漁場に雇はれて來て六ケ月間も一文の給金も與へられず、おまけにその漁場は失敗して、親かたは逃走してしまつた爲め、歸へるにも歸られず、歸國の旅費をつくる考へで毎日人仕事に出てゐると云ふのであつた。若し秋までに旅費が出來ねば、冬の貂取りにでも使はれようと思ふと云つた。今でもさうだらう。山本君。ナヤシは貂の多いところで、その皮に一枚十八圓から三十圓に賣れてゐた。

それから、同所にはまた、眞岡では四ダース後家と呼ばれた、そして樺太全體では古顔後家の名があつた女が、北へ北へと流れて行つたとどのつまりの踏みどまり場として、自分で料理屋を開いてゐた。僕等はかの女を一夕宿に呼んで身の上ばなしを聽いた。中川部長などは涙を流して聽いた。

山本君。

九

樺太は北に行くほど山が高く、火山的に山のさきが尖つてる。昔の地圖にトルストイの鼻となつて

る安別の岬の絶頂には、國境標の柵が見え、その鼻から續いて露領に延びた低い草山は、灣形にまた北へ突出して行つて、ピレオ富士を現じてゐる。

僕等は安別の海岸から、切り崖のやうな山腹に細い道を切り拓いた稲妻形をのぼり、寫眞師をつれて國境標のあるところへ行つた。柵をめぐらした中に花崗石の標がある、南面には菊の紋、北面には鷲を刻してあつた。そこでいろんな寫眞を取つたうち、天海氏と僕とは南北に腰かけて寫したのがあつた。あの寫眞を山本君、僕は今持つてゐないが、――否、寫したツきりで僕はまだ見ないのだが、豊原で誰れかが持つてる筈だ。若しあつたら貰ひたいものだ。天海氏が持つてたら、さきの更紗の代りに送らせて呉れ給へ。

國境には林空が五六間の幅で東の方へ一直線に走つてゐた。

僕は海からまだ洋行したことはないが、陸上からはこの國境から――たツた一里半ばかりだが、――外國行きをやつた。乃ちピレオまでだ。

そこにギリヤーク人の一部落があり、また日本人の淫賣屋が一軒あつて、六名の日本娘がその奥の木村會社工場から出て來る露國人、支那人等を晝間でも相手にしてゐた。

僕等はそこを一巡してから、一露國商人と云つても、もとは共に殺人者なる夫婦――の家で馳走になつた。

思ひ出せばまだ〳〵いろんなことが云へるだらうが、こんなことを長く書いてゐてもいいかどうか分らないから、君、これで一先づ中止させて貰ふ。

泡鳴全集第十一卷終

大正十年九月十五日印刷
大正十年九月二十日發行

泡鳴全集十一卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衞

發行者　國民圖書株式會社代表者
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目三番地
井波修次郎

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一二一七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本所　佃製本所）